リリカルなのはZOIDSStrikerS

ムーンアロー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリカルなのはＺＯＩＤＳＳｔｒｉｋｅｒＳ

【Ｎコード】
Ｎ８８６２Ｇ

【作者名】
ムーンアロー

【あらすじ】
時はＪＳ事件が終結して数ヶ月後。かつて聖王が従えていたという三匹の虎。それにまつわる遺跡を発見したユーノはなのはやフェイトと共に異世界、「惑星Ｚｉ」に跳ばされてしまう。そこで出逢った「ゾイド」と呼ばれる金属生命体。魔法の力を手にしようとミッドチルダへ向けて侵攻するガイロス帝国。二つの世界の激闘が始まる。

プロローグ　帝国と三匹の虎（前書き）

注意！

この作品はなるべくバトルストーリーに登場したキャラクターや設定を使用していますが、ほぼオリジナルの設定になっています（主に年代など）。それを承知の上でご覧下さい。

プロローグ　帝国と三匹の虎

薄暗い部屋の中に二人の男が居た。
一人は玉座に座り、もう一人はその前にひれ伏して報告をする。

「陛下、斥候部隊の出撃準備が完了致しました。」
「うむ…いよいよ魔法の力を手に入れる時が来たのだな…」

玉座の男は長かったとばかりに言う。

「魔法とゾイド…この二つが合わされば、我らガイロス帝国は惑星Ｚｉのみならず全次元を我が手中に納められる…」

そう言うと男は不気味な笑みをこぼし、玉座から立ち上がった。

「よいかプロイツェン、なんとしてもこの作戦を成功させるのだ！！」
「はっ、我らが帝国のため、ルドルフ皇帝陛下のためこの命を賭してでも陛下の下に魔法の力をお持ちいたしましょう。」

ガイロス帝国軍摂政、ギュンター・プロイツェンは皇帝ルドルフに対して更に深く頭を下げる。

「うむ、期待しておるぞ…」

プロイツェンは部屋を出、廊下を歩きながらぼそりと呟く。

「ククク…魔法の力か…」

場所は変わって、ミッドチルダの首都クラナガンのはずれにある山中。
その奥地にある古代遺跡に無限書庫書司長、ユーノ・スクライアは居た。
彼はこの遺跡の発掘に来ており、発掘品の鑑定をしていた。

「す、凄い…何だこの遺跡は…」

ユーノは発掘された石盤とロストロギアを見て驚愕した。
取り敢えず、ロストロギアという事で古代遺失物管理部、通称「機動六課」に応援を依頼する。

「ねえフェイトちゃん、ユーノ君が見つけた凄いロストロギアって何だろうね。」

白いバリアジャケットを着た栗色の髪の魔導士、高町なのは一等空尉が、自分のすぐ隣を飛ぶ金髪ツインテールに黒いバリアジャケットの魔導士、フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官に言う。
この二人とユーノは１０年来の親友である。

「どんな物かは判らないけど、早く封印するに越したことはないと思う。急ごう、なのは。」
「うん！」

そう言うと、二人は更に飛ぶスピードを速くする。

数分後、なのはとフェイトはユーノの居る遺跡に到着、早速発掘

したロストロギアを渡した。

「それと、この石盤を見て欲しいんだ。」

ユーノは二人に古代文字で書かれた石盤を見せる。

それを見てなのはとフェイトは頭の上に?のマークを出す。

「なんて書いてあるの?ユーノ君。」

なのはがユーノに質問すると、ユーノは石盤を読み始める。

「今は昔、聖王の従えし三匹の巨大なる虎ありけり。
疾風の如く天を駆ける白き虎、鋼すらも咬みちぎる蒼き虎、全てを焼き払い灰塵と成す紅き虎。
ある時は王に敵対する賊を薙払う矛。またある時は王を守る盾。
その偉大なる存在を伝承するため、ここに記さん。」

なのはとフェイトは文章の中に出て来た聖王という単語に反応した。

「!?ユーノ君、これって…」

「うん、この文章が本当なら、これは歴史的大発見だよ。聖王が強大な守護獣か何かを従えていたんだろうね。」

只の守護獣ならそこまでは行かないだろうが、巨大な虎の守護獣、それも三匹。未だかつてない程の発見である。

「こうしちゃあいられない、直ぐに戻って研究を…」

そう言いかけた時、突如として地震が起こる。

「うわあっ!!」

「きゃっ！！」

フェイトは手が滑り、持っていたロストロギアを地面に落とした。
それがまずかった。封印処理をかけ忘れていた為に暴走を始めたのだ。

「し、しまっ…きゃーっ！！」
「うわあーっ！！」
「フェイトちゃん！！ユーノ君！！」

ようやく暴走が収まると、三人の姿は既に無かった。
そして二つの世界は繋がり、史上希にみる程の大激戦の幕が上がった…

プロローグ　帝国と三匹の虎（後書き）

初めまして。作者のムーンアローと申します。
この度は、リリカルなのはＺＯＩＤＳＳｔｒｉｋｅｒＳプロローグを読んでいただき、有り難うございます。
自分が初めて書いた作品なので、文章に甘い所が有るかもしれませんが、よろしくお願い致します。

第一話　強襲、クラナガン

「いったい何がどないなっとんのや！！」

機動六課部隊長、八神はやて二等陸佐は机に手を叩きつけて怒鳴る。

その様子を見たユニゾンデバイスのリィンフォース・ツヴァイがはやてをなだめようとする。

「は、はやてちゃん落ち着くです！」

「これが落ち着いていられるかっちゅうねん！！」

リィンの声もむなしく、はやては更に喚き散らす。

話は数時間前に遡る。

ジェイル・スカリエッティ事件、通称ＪＳ事件が終結。

事後処理も粗方片付いてようやく休めると思った矢先、ロストロギアの回収に向かったなのはとフェイトの魔力反応の消失。

この緊急事態によって六課隊舎は大混乱。

「諦めたらあかん」というはやての指示によってすぐさま捜索隊を編成。現場に向かった。

捜索隊の報告は、ロストロギアを残してユーノ・スクライア司書長、高町なのは一等空尉、フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官は蒸発という内容だった。

驚きと落胆の表情を隠せないはやて。

更に追い討ちをかけるが如く、非常事態の知らせる警報が鳴り響いた。

「はやて部隊長！」

「今度は何や、シャーリー！！」

六課のメカニック兼通信士、シャリオ・フィニーノ一等陸士（愛称シャーリー）が連絡を入れてきた。

「ミッドチルダ東部、スカリエッティのアジト跡の森林地帯に大型の転移反応を確認しました！」

「なんやて！？」

泣きっ面に蜂。正にこの言葉通りの状況である。

シャーリーは現場の映像をモニターに出す。

「！？な、何なんやコレは！！」

はやては映像を見て驚愕した。

転移してきたのは、背中に長距離砲を搭載した芋虫のような戦車が２０機。

蝙蝠のような形の飛行兵器が１０機。

最後に真っ赤な機体色に大きな角を生やした移動要塞のような兵器が１機。

計３１機の兵器が首都クラナガンに向けて進軍していた。

そして、今に至る。

「はやて部隊長！このままではクラナガンに…！」

はやては両手を握り締め、ある決意をした。

「各局員に告ぐ…！！捜索を一時中止、アンノウンの対処に移れ…！！」

はやては部隊長として、親友の安否よりも目の前の脅威への対処を優先した。

「う…うーん…」

なのはは目を覚まし、自分がどうなってしまったのかを思い出す。

（そうだ、ロストロギアの回収に行ったら地震が起きて…！？ユーノ君とフェイトちゃんは！？）

ユーノとフェイトはなのはの隣に倒れていた。

どうやらケガはしていないようだ。

「ユーノ君、フェイトちゃん！！しっかりして！！」

「うう…なのは？」

「あれ…？此処は？」

ユーノとフェイトは意識を取り戻し、三人は辺りを見渡す。

周りには木々が立ち並び、葉の間から僅かに太陽の光が漏れていた。

さっきまで居た遺跡は無く、別の世界に跳ばされた事を認識した。

「取り敢えず、慎重に進もう。なにが起こるか判らないしね。」

なのはの提案にユーノとフェイトは了解した。

森の中を歩く事１０分。フェイトが何かに気づいた。

「ん…？」

「どうしたの？フェイトちゃん。」

「今何か…足音が聞こえたような…」

すると、右方向からなのは達に接近してくる物体を見つけた。

「!?な、何あれ!?」
「なのは、ユーノ!隠れて!!」

とっさに草むらに身を潜め、気付かれないように観察する。
それは全長およそ１０メートルは有る巨大な四足歩行型の兵器であった。
その正体は、哨戒任務中の帝国軍ゾイド、
「ヘルキャット」であるが、今のなのは達には知る由もない。
息を殺して身を潜める三人。しかし、ここでミスをした。
なのはの鼻先で揺れた葉っぱがなのはにくしゃみをさせてしまった。

「ハ…ハックション!!」
「いっ!?」
「ちょ、なのは!?」

流石に気付いたのか、ヘルキャットが此方を向いた。
完全にバレたようだ。
「ゴメン、フェイトちゃん!!」
「謝るのは後!!逃げるよ!!」

一目散に逃げる三人。それを見て追撃するヘルキャット。
なのは達とゾイドの鬼ごっこが始まった…

その頃、森の外では共和国軍の輸送ゾイド、グスタフが三機のゾイドを搭載して基地に戻ろうとしていた。

「グレック中尉、森林地帯に帝国軍のものと思われる機影をキャッチしました。こちらに仕掛けてくる恐れがありますので警戒して下さい。」

背中に二門のビームキャノンを装備した黒いライオン型ゾイド、シールドライガーＤＣＳ－Ｊ（ダブルキャノンスペシャルジェット）に乗ったレイ・グレック中尉にオペレーターから連絡が入った。

「ああ、了解だ。」

ライガーは森を見て身構える。
すると森から三人の男女が飛び出し、その後にヘルキャットが飛び出して来た。

「ヘルキャット？一般市民を襲っているのか！？」

これはマズいと判断し、ヘルキャットにキャノンを向け、

「行くぞ、ライガー！！」

勢いよく放たれた。

第二話　獅子と恐竜と居候

「なのは！あれ！！」

フェイトが指差した方向に、光がはっきりと見えた。
ようやく出口にたどり着いたようだ。　三人が森を脱出すると、目の前に漆黒の獅子が現れた。

「そんな！！挟まれた！？」
「くそっ…万事休すか…」

なのはは獅子の登場に焦り、ユーノは諦めたかのような台詞を吐く。

「くっ…こうなったら私がバルディッシュで…」

フェイトは自爆覚悟で前門のライガーと後門のヘルキャットを倒そうとする。
しかし、その作戦が実行されることは無かった。
敵かと思われたライガーがビームキャノンをヘルキャットに向けて発射し、直撃させたからだ。

「え…！？」
「今の…あのライオンがやったの！？」

なのはとフェイトは突然の援護射撃に驚き、ヘルキャットの居た方向を見る。
攻撃を正面からまともに食らったヘルキャットは炎上。そのまま倒れて大破した。

「…と、取り敢えず…助かったみたいだね…」

ユーノが動揺をこれっぽっちも隠せてない声で言った。
そしてライガーの頭部にあるキャノピーが開き、

「おおい、アンタら生きてるか～？」

紺色のパイロットスーツを着た赤い目の男性が姿を現した。

「あ、あの、助けていただき、有り難う御座いました！」

なのは達は目の前の恩人、レイ・グレック中尉にお礼の言葉をかける。　するとレイは、

「良いって良いって。頭を上げなよ、お嬢さん方。
襲われてるのを見て助けない程共和国軍は鬼じゃないんだからさ。」

まるで当たり前の事のように言った。

「それにしても…三人とも随分と変わった服着てるけど…何処の出身なんだ？」

レイの隣りに立つ青年、バン・フライハイト少尉は一番疑問に思っている事を質問した。
さて、どう答えたものかとなのはとフェイトは顔を見合わせる。
どうやらこの世界には魔法が存在していない様なので、時空管理局の事は伏せておくことにした。

「えっと…」

「私達は…その…」

言葉に詰まる三人。

とっさの言い訳が思いつかず、暫く沈黙する。

「ああ、解った！」

突然大声を出すレイ。

なのは達は一瞬ビクッとした。

（（（ま、まさか…バレた！？））））

「アンタら家出してきたんじゃないか？」

ガクッ！！

盛大にズッコケる三人であった…

「そうだよな～家出中なら出身地を言いたがらないのも判るぜ。よっしゃ！アンタらは俺の親戚って事にしといてやる！だからウチの基地に来なよ。良いだろ、バン！」

「あ、良いッスね！」

レイのいきなりの提案に唖然とする三人。

見ず知らずの、しかも敵かどうかも判らないというのに、目の前の男はなんというお人好しなんだろうか。　…まあお人好しと言えば、なのは達も人のことは言えないが…

「でも、悪いですよ。」

遠慮するフェイト。

しかしそんなの関係ねぇ！とばかりに、

「なぁに、問題ないさ。
アンタらみたいなお嬢さん方を野宿させるわけにはいかないしな。」

そこでフェイトにユーノから念話が入った。

『フェイト、ここはお言葉に甘えさせて貰おう。』
『え？でも…』
『さっきみたいな奴にまた襲われないっていう保証は無いし、軍の基地ならよっぽど安全だよ。』

確かに今回はなんとかなったが、次も助けて貰えるかと言うと、その確率は限りなく0だ。
だったら安全な確率の高い選択肢を選んだ方が良い。

「わかりました。お世話になります。」
「よっしゃ、そうと決まれば善は急げだ！ムンベイ！基地に向けて全速前進！！」
輸送用昆虫型ゾイド、グスタフのパイロットであるムンベイ兵長に指示を出す。
ムンベイはそれに返事を返した。

「アイアイサー！
いくよ、グスの助！」

土煙を上げながら基地へ向け走り出すグスタフ。
かくして、なのは、フェイト、ユーノの三人は共和国軍にお世話になることとなった。
少し進んだ時、なのはがレイに質問する。

「ところで…えっと…」

「あ、悪い。まだ自己紹介してなかったな。俺はレイ。レイ・グレック中尉だ。」
「私は高町なのはです宜しくお願いします。」
「フェイト・T・ハラオウンです。」
「僕は、ユーノ・スクライアと云います。」
「ああ、宜しくな！」

自己紹介を済ませ、なのはは質問を続ける。

「それでレイさん、さっきの…ヘルキャットって言うんですか？このライオン型といい、なんなんです？」

それを聞いたレイは、まるで妙なモノを見るような目をした。

「何だ？なのは達はゾイドを見たこと無いのか？珍しいな～。」

どうやらゾイドと言うのはこの世界では一般常識らしい。
なのははしまったと言うような顔をする。

「ま、いいや。教えてやるよ。」
「この星に住む金属生命体、その中で
「ゾイドコア」を持つ生命体をゾイドと呼ぶんだ。
人々は昔からゾイドに乗って戦ってきた。
で、さっきのヘルキャットはガイロス帝国のゾイド、俺たちはヘリック共和国の軍人で、敵対関係にある。
で、コイツは俺の相棒、シールドライガーＤＣＳ－Ｊ。
その後ろの奴はバンのブレードライガー、一番後ろはゴジュラス・ジ・オーガだ。」

レイは一通り説明すると、自分達のゾイドを指差して紹介した。

「オオオオオン！！」
ライガー達は宜しくとばかりに雄叫びを上げる。
話を聞いたユーノは、またもや驚きの表情を隠せなかった。

（金属生命体…そんな生物が存在していたなんて…）
ミッドチルダや管理世界にはあらゆる生物が存在する。
巨大なミミズやムカデ、ドラゴンすらも存在する。
だが、ゾイドのような生き物は聞いたことが無かったのだ。

「おいお前ら、もうすぐ基地に着くぞ」
一番後ろに積んである恐竜型ゾイド、
「ゴジュラス・ジ・オーガ」のパイロット、アーバインがレイに通信を入れた。
ユーノが考えている間に、基地にたどり着いたようだ。

「レイ・グレック中尉、バン・フライハイト少尉、傭兵アーバイン。
以上三名、只今帰還しました。」

ロブ基地司令官、アーサー・ボーグマン大佐に報告するレイ達。
ボーグマン大佐に事情を説明し、なのは達の部屋を用意して貰うことができた。
因みにユーノはレイやバンと相部屋である。
なのはとフェイトが部屋に入ると、こちらも相部屋だったらしくなのは達と同じくらいの少女が居た。

第二話　獅子と恐竜と居候（後書き）

今日は、ムーンアローです。
さて、なのは達の部屋に居た少女。勘のいい人は誰だか判ると思います。
では、第三話も宜しくお願いします。

第三話　少尉とレッドホーン

なのはとフェイトが部屋に入る3分くらい前のこと…

『ーと言うわけで、その二人をお前と相部屋にしたいんだが、問題ないか？』

「はい、全然オッケーです！」

ボーグマン大佐からの通信に元気良く応答するタンクトップ姿の少女。

『一発ＯＫとは話が早いな。直ぐにそちらに行くと思うが、頼んだぞ。』

「了解です！」

プツン。

通信が切れ、急いで歓迎の準備を始める。

1分で部屋を片づけると、ドアの向こうから足音が聞こえ、ドアが開いた。

そして今に至る。

「あれ…？あなたは？」

先に部屋に居た少女に戸惑うなのはとフェイト。

二人は相部屋の事を聞いてなかったらしい。

「なのはちゃんとフェイトちゃんだよね？初めまして！ボクはマミ・ブリジット少尉！宜しくね！」

なのはの手を取り、思い切り握手をするマミ。
なのはとフェイトは、マミの元気の良さに自分たちの部下を彷彿とさせた。

さて、その部下スバルはと言うと…

「リボルバー…キャノン！！」

ミッドチルダに現れたゾイドの一つ、
「キャノリーモルガ」と交戦中であった。
スバルの技、リボルバーキャノンがキャノリーモルガの長距離砲ごとボディーを破壊、機能を停止させる。
これでスバルが倒したのは3体目である。
しかし、攻撃の隙を突こうと一体のモルガがスバルをロックオンした。

「クロスファイヤー…シューーート！！」

だが、スバルの相棒、ティアナ・ランスター二等陸士が横から魔力弾で奇襲、砲撃を阻止した。

「ナイス、ティア！」
「ちゃんと周り見なさい、バカスバル！！」

スバルとティアナ。この二人は訓練校からの腐れ縁でコンビを組んでいるが、そのチームワークは一級品である。

「キャロ、ブーストお願い！」
「うん、ケリュケイオン！」
＞Ｂｏｏｓｔ　ｕｐ．Ａｃｃｅｌｅｒａｔｉｏｎ．＜

キャロのデバイス、
「ケリュケイオン」がエリオの槍型デバイス、
「ストラーダ」に威力強化の魔法を使い、その力でエリオはモルガの群れへと突撃する。

「ストラーダ！！」
＞Ｓｐｅｅｒａｎｇｒｉｆｆ＜

ストラーダのブースターによって加速、モルガを二体貫通させて撃破する。
だがこのペースではまだ遅い。モタモタしていれば立ち直りかけの地上本部や町がまた壊されてしまう。

（ああもう！アタシじゃ火力が足りない！）

自分はサポートメインの射撃型。砲撃型とは違って火力が足りないのは当たり前。
でも、そんな理論はこの状況では言い訳にもならない。
なのはさんが居れば…と考えたが、無い物ねだりをしても仕方がない。この場は自分たちで何とかしなければ、機動六課フォワードの名が廃る。

「負けて…たまるかあああああ！！」

叫びによって自らを鼓舞し、眼前の脅威に立ち向かった。

「ぶっ潰せ！アイゼン！！」
＞Ｒａｋｅｔｅｎ　ｈａｍｍｅｒ＜

スバルたちの上空では、ヴィータが蝙蝠型ゾイド「ザバット」と交戦していた。

「どりゃあああああああああ！！」

「グラーフアイゼン」に搭載されたロケットで高速回転、ザバットの頭部を叩き潰した。

「レヴァンティン！」

＞Ｒｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ＜

シグナムの剣型デバイス「レヴァンティン」が鞘に収められたまま空薬莢を吐き出し、魔力を収束させる。

「飛竜…一閃！！」

シグナムはレヴァンティンを勢い良く抜刀、蛇腹剣の様な形状に変化し、炎を纏った斬撃でザバットの群れを薙ぎ払った。

だが、討ち洩らしたらしい3機のザバットが二人の横を高速で突破した。

「っ、しまった！」

「くっ、主はやて！」

二人の後方にははやてが居る。

だが、はやてにとってザバット3機位ならどうという事は無い。

リィンとユニゾンしているなら尚更だ。

「問題あらへん、行くでぇリィン！！」

『はいです！』

はやての正面に大きな魔方陣、その周囲に小さな魔方陣を展開し、魔力を収束させる。

「来(こ)よ、白銀(はくぎん)の風、天よりそそぐ矢羽となれ！
フレースヴェルグ！！」

その瞬間、極太の砲撃魔法が発動、向かってきたザバット全てを一撃で仕留め、一掃する。

「ふぅ、これで空の奴は粗方片付いたなぁ。
シグナム、ヴィータ、地上の援護に行くで！」
「了解！」／「応！！」

見れば、スバル達も頑張っている様で２０機居たモルガも８機程になっていた。

「ロングアーチ００よりフォワード陣へ。広域魔法を使うさかい、ちょい下がってや！」

”広域魔法”。その言葉を聴いた瞬間、フォワード陣の表情が僅かに青くなった。
はやてのそれはとんでもない威力を誇り、非殺傷でもかなりのダメージになる。

「「「「りょ、了解！！」」」」

物凄い勢いで後退するフォワード陣。
モルガたちも丁度ひとかたまりになってきた。

「遠き地にて、闇に沈め…」

モルガの集まっている所の中心辺りに、巨大な魔方陣が発生する。

「デアボリック・エミッション！！」

魔方陣から魔力の柱が発生、残りのモルガを全て撃破した。

『やったです、はやてちゃん！！』

はやての中でガッツポーズをするリィン。
そして全員が最後に残った一体を見据える。

「さーて、残っとんのはあの一本角やな。」

全員が現れてから「一度も」動きを見せないスティラコサウルス型ゾイド「レッドホーン」に攻撃をしようとする。
が、背中から何かを発射したと思ったら、突然辺りが光に包まれた。
閃光弾である。

「な、何や！？」
「うわっ！目が！目がーーーっ！！」
「くっ、これでは何も見えん！！」
「な、何コレぇ！！」
「きゃあっ！」
「うわあッ！！」
「きゃっ、フ、フリード、大丈夫！？」
「キュイーーッ！！」

いきなりの光に全員が面くらい、目を閉じた。
因みに2番目はヴィータである。

「くうっ…なんなんや一体…！？」
「な、何だこりゃ！？」

漸く目が開いたはやてとヴィータ。だが二人は目の前の光景を見て驚愕した。

「何処にも…おらんやと！？」

そう、目眩ましをされている間にレッドホーンが跡形も無く「消え去った」のだ。

「逃げられた…のか？」
「シャーリーさん、レーダーは！？」

ティアナはシャーリーに索敵を頼むが、答えは「反応無し、完全にロスト」だった。
幸い被害は微々たる物だったが、六課メンバー全員に疑問を抱かせる結果となった。

第四話　ミーティングと帝国の意図

謎のゾイド軍団の襲撃があった日の夜。
フォワード陣及びヴォルケンリッター、はやてにシャーリー、ヴァイスと六課の主要メンバーがミーティングルームに集合していた。
ミーティングの内容は前述した通り、ゾイド軍団についてである。

「みんな、揃ったな。これから、件の兵器についての分析結果を話すからしっかり聴いてや。
シャーリー！」
「はい、モニターに出します。」

モニターには、モルガとザバット、レッドホーンの写真とデータが表示された。

「今回交戦したアンノウン…芋虫を
「キャタピラー」、蝙蝠を
「バット」、角付きを
「レッドホーン」と呼称します。」

正式名称が分からないため、仮にコードネームを付ける。
因みにレッドホーンだけ正式名称なのは、見た目から偶々そう呼ばれただけである。

「これら三種の兵器に、魔力反応は全く感じられませんでした。」
「つまり、純粋な質量兵器…と言う訳か。」

シャーリーの説明を聞き、重い表情をしたシグナム。

「はい。でも、この兵器には妙な所があるんです。」
「？どういう事だよ？」

シャーリーの台詞に疑問の声を上げるヴィータ。

「キャタピラーの一つを回収、解析したんですが…生体反応が出たんです。」
「！？本当か、シャーリー！！」

シャーリーの台詞にその場に居た全員が驚いた。

「はい、中のパイロットとかじゃ無くて…兵器自体が生きていたんです。」

今までこの様な生きた兵器は聞いたことが無かった。
肉体を改造した戦闘機人なら居るが、それとはまた違っているらしい。

「しかし解せんな…あれほどの数を転移させることができるなら、魔法が存在するはずだ。
だが命を持つ以外は純粋な質量兵器、というのは腑に落ちん。」

シグナムが思った事を発言した。
確かに、いくら質量兵器が強力と言っても魔法の技術が有るなら多少は盛り込む筈である。

「せやな…何でやろ？」

首を傾げるはやて達。
そこにティアナが思いついたことを発言した。

「えっと…時空転移の技術だけを手に入れたっていう事は無いでしょうか？」

全員がティアナの方を見、ヴィータが問う。

「どういう事だよ？」

「いえ、次元航行艦とかがあっちの世界に流れ着いて、そのクルーや技術者から転移の方法を聞きだしたとか…」

「それや！！でかしたでぇティアナ！！」

はやてが声を上げ、ティアナに感謝した。

「シャーリー！ここ最近行方不明になった艦を洗い出すんや！！」

「はい！！」

手元のコンソールを叩き、次元航行艦の事件を検索するシャーリー。

手がかりが見つかったからか、その目は気合に満ちていた。

「ありました！！半年程前、ＸＶ級が１隻行方不明になってます！！」

「ＸＶ級か…まためんどくせーモンが…」

「となると、魔法の技術目当てで来たっちゅう訳やな。

また来るのは間違い無いやろ。」

と、ここで再びシグナムがあることを思い出す。

「主はやて、今日侵攻してきた兵器…他に何か妙な所がありました。」

「？妙なところ？」
「はい、向こうからの攻撃が殆ど無かったのです。全て後手に回った様な動きでした。」
それを聞き、はやてはあることに気が付く。
「しもた、１杯食わされた！！」
シャーリーがはやての言葉からそれに気が付く。
「もしかして…敵の目的は、此方のデータ収集…！？」
「たぶんな…そしたらレッドホーンがあっさり逃げたんも説明が付く。」
そう、後方に居たレッドホーンは「動けなかった」のではなく、「動かなかった」のだ。
味方部隊が壊滅したのを見て素早く撤退したのも、始めから予定していたこと。
全ては魔法が如何なる物かを調査するため、そして、相手の手の内をさらけ出させるため…
「ならば、再びやって来るでしょう。それも、今回以上の物が…」
「せやな…兎に角、警戒を怠らんようにせなあかんな。」
ミーティングは、「引き続き警戒」と「なるべく今回使ったもの以上の魔法はなるべく使わない」、という結論で纏まった。
ミーティング後、はやてはなのはが面倒を見ている少女、ヴィヴィオの元へ行った。
ヴィヴィオは守護獣ザフィーラにもたれかかって眠っていた。

「ザフィーラ、ヴィヴィオの様子はどないや？」
「今は眠っていますが…先程まではなのはとフェイトの事で大泣きしておりました…」

ヴィヴィオは行方不明になった二人を心配して泣いていたという。

（まったく…こんな小さな女の子まで心配させてなのはちゃんもフェイトちゃんも何しとんのや…）

（ヴィヴィオ…どうしてるのかな…）

なのはもまた、ヴィヴィオのことを心配していた。
保護責任者として、何よりヴィヴィオの母として。

「なのは、どうかした？」
「ふぇ！？な、何でもないよ。」

マミに言われて我に返るなのは。そこにフェイトが念話を送る。

『なのは…やっぱりヴィヴィオのことを…？』
『うん…みんなが居るとは言え、心配で…』
『早くミッドチルダに帰らなきゃね。』
『うん。』

と、二人が念話での相談を終えたとき、マミがあることを聞いてきた。

「あ、そうそう。ちょっと聞きたいことがあるんだけどさあ。」
「え？何かな。」
「二人とも、レイ先輩の親戚なんかじゃないでしょ？」

「「…え　ぇ！？」」

なのはとフェイトは目を点にし、固まってしまった。

「ねぇ、どうなの？」

詰め寄ってくるマミ。これは誤魔化しきれないと判断し、正直に話すことにした。

「う…うん…でも、なんで判ったの？」

「だって雰囲気ぜんぜん似てないもん。ホントは何処から来たの？」

まさか異世界と言う訳にもいくまい。だが自分たちにはこの世界の地名など全く知らない。

どうしたものか…と思っていると、マミは

「ううん、言いたくないなら良いんだ。一寸気になっただけだから。」

あっさり諦めてくれたらしい。

ついでに親戚じゃないことも黙っててくれるという。

その頃男性陣は…

「キングのフォーカード。」

「だああ！！また負けた！！」

「アーバイン強ええな…5連勝かよ。」

「せっかくフルハウスだったのに…（泣）」

ポーカーで白熱していた。

レイは連敗に嘆き、バンは関心し、ユーノは強力な役で負けたことを残念がっていた。

「斥候部隊は全滅か…まあデータが取れたからよしとするか。ときにプロイツェン、首尾はどうだ?」

「はっ、スパイの潜入は成功したようです。先程連絡が入りました。」

斥候部隊の侵攻には、データ収集の他にドサクサに紛れてスパイを忍ばせる意味もあった。

それにより、ＸＶ級のクルーでは足りなかった技術を手に入れ、より侵攻を有利にできる。

「次の作戦はどうする?」

「スパイの連絡を待ち、作戦を立てます故、暫くは「待ち」でございます。しばしの辛抱を。」

「ふむ…まあ良かろう。期待しておるぞ、プロイツェン。」

「はっ…」

こうして、帝国の野望は刻一刻と進んでいく…

第四話　ミーティングと帝国の意図（後書き）

今日は、ムーンアローです。
6月から試験なので、暫く執筆をお休み致します。ご了承ください。
ところで、新型インフルエンザ大変ですね。自分も風邪気味なので気をつけてます。
皆様もお気をつけて。
それでは。

第五話　スパイと模擬戦（前書き）

お待たせしました！！長かったテスト期間も遂に終了、やっと5話を投稿できました！！
その間に自分は３７，５℃の熱を出したり、喉がイカレたり、ラジバ〇ダリ…結構キツかったです。
それでは、リリカルなのはＺＯＩＤＳＳｔｒｉｋｅｒＳ、ご覧下さい。

第五話　スパイと模擬戦

草木も眠る丑三つ時、時空管理局本局のオフィスに人影が現れた。
人影はパソコンを起動、素早くキーボードを叩いて情報を引き出している。
そう、この人影こそが帝国のスパイである。はやて達が斥候部隊と戦っているドサクサに紛れて本局に潜入、全局員の帰宅を夜中まで待って行動を開始した。

（さてと、さっさと情報を頂くとしますか…）

ＸＶ級のクルーから奪ったＵＳＢメモリを使い、データベースから情報を引きだそうとする。
狙う情報は、昼間に局員が口にしていた
「ジェイル・スカリエッティ」、
「ナンバーズ」といった単語。

「あったあった、何々…」

ジェイル・スカリエッティ。
腕利きの魔導士であると同時に、次元犯罪者であるらしい。現在は軌道拘置所に収監されている。
続いてナンバーズ。
体の半分が機械という、１２人の戦闘機人。
その内の一人は死亡、４人は捜査に非協力的な為、スカリエッティ同様、軌道拘置所に別々に収監されているという。

（成る程、こいつらなら問題は無いな。）

彼が此処に潜入した理由。それは管理局と敵対関係にある魔導士をスカウトし、帝国と協力関係になることである。　そうすればハイレベルな魔法の技術と戦力が手に入り、あわよくば管理局も倒せるかもしれないからだ。

（場所は…ちっ、バラバラに収監してやがる。しかも衛星軌道上かよ…）

目標とする軌道拘置所は宇宙空間、しかも幾つかの世界に分けてあった。

（レドラーじゃ駄目か。宇宙用のホエールキングが要るな…仕方ねぇ、一旦戻るか。）

一度戻って作戦を立てることにし、ＵＳＢメモリを回収、本局を後にした。

その日の朝、使用したパソコンが点きっぱなしだったらしく、その席の局員が上司に怒鳴られたらしい…。

場所は変わってロブ基地。レイとバンによる模擬戦が繰り広げられていた。

「どりゃあああ！！」

バンのブレードライガーがレーザーブレードを展開し、レイのシールドライガーに突撃する。

ガキィン！

だが、Ｅシールドに阻まれてダメージにはならなかった。

「うわぁっ！？」

弾かれた際の衝撃でBライガー（ブレード）の体勢が崩れ、コックピットのバンが一瞬怯んだ。　その隙にレイのSライガー（シールド）は数メートル後退、ビームキャノンの発射準備に入った。

「ライガー！ぶちかませぇ！！」

黄緑色の光線が二門の砲塔から発射され、Sライガーに迫る。
すかさずBライガーの判断でEシールドを展開、砲撃を逸らすことで直撃を免れた。
それを見たレイがバンに声をかける。

「おいバン、いつも相棒に助けて貰ってんじゃなくて、自分で何とか出来るようにしろよ？」
「う、ウッス…」

ゾイドには命がある。当然自我も有り、自分の武装を自身の判断で使用することも出来る。
だがそんな物に頼っていたらゾイド乗りなど有って無いようなものだ。
ゾイドを的確に操縦し、ゾイドと心を通じ合わせ、その力を何倍にも引き上げる。それが真のゾイド乗りたる者の技術なのである。

「じゃあ次はアーバインと俺でやるぞ。二人とも早く撤収しろ。」
「了解。」
「ウッス！」

二体のライガーが訓練スペースから退き、アーサーのBライガーとアーバインのゴジュラスが配置に着いた。
管制塔からの通信が入り、開始のカウントダウンを始める。

「それでは…3、2、1…始め！」

開始の合図と同時にゴジュラスの左腕に付いた4連装ショックカノンでライガーの右側を攻撃し、ライガーから見て左側に追い込もうとする。

Bライガーは予想通り左に走ることで回避し、ゴジュラスを中心に90。程走ったところで直角に動き、接近戦を仕掛けようとゴジュラスに向かってジグザグに突進する。

その動きを制しようと背部に搭載された8連装ミサイルポッド（弾頭は訓練用のペイントミサイル）を発射するが、BライガーのEシールドに阻まれて意味を成さなかった。

「もらったぞ！！」

大佐は訓練用に出力制限されたレーザーブレードで擦れ違いざまにゴジュラスを斬りつけ、Uターンすると再び接近、攻撃を繰り返す。

「ぐっ、だったら！！オーガ！！」

「ゴガァ！！」

ゴジュラスは心得たとばかりに雄叫びと共に回転し、接近しようとしてくるBライガーに自慢の尻尾の一撃を浴びせて吹き飛ばした。

「うおっ！？」

大佐はいきなりのカウンターに少々面食らい、吹き飛んで横転したBライガーを起こそうとする。

だが、その隙をアーバインは見逃さず、背部に二門搭載された主

砲、「ロングレンジバスターキャノン」のチャージを開始する。

「っつ、しまった！」

「撃て、オーガ！！」

二筋のビームが起きたばかりのBライガーに襲い掛かる。

「避けれんな…ならば！！」

大佐はBライガーをビームに対して直角に向け、左のレーザーブレードの出力を実戦レベルに引き上げると、その刀身でビームを受け止め両断してしまった。

「！？なんて無茶苦茶な…！」

驚愕するアーバイン。そりゃあ自分の主砲を剣で受け止められたら誰だってそうなるだろう。

Bライガーの象徴とも言えるこのレーザーブレード。刀身にレーザーを送り込むことでそ威力を発揮する武装なのだが、実は出力を全開にすることでジェノザウラーの荷電粒子砲すらも両断できる代物なのだ。

Bライガーが体勢を立て直しゴジュラスに接近する。

ゴジュラスはバスターキャノンの反動で無防備になってしまって回避行動もろくに取れない。勿論シールドなんて便利なものも無い。

「うおおおお！ストライククロ…」

「ブーーーー！！」

大佐が止めを刺そうとしたとき、戦闘終了のサイレンが鳴り響いた。

「大佐ぁ、本気出しすぎです！！模擬戦って事忘れてませんか！？」

管制塔のオペレーター、ユミ・フォードがやりすぎの大佐を見て、戦闘を強制終了させたのだ。

「あー、スマン。大丈夫か？アーバイン。」

「ええ、なんとか。最後に食らってたらオーガの右腕が吹っ飛んでましたがね。」

大佐はハハハと苦笑いをする。

「二人とも、模擬戦はどうだった？」

レイが隣で観戦していたなのはとフェイトに感想を求めると、二人はまるでプロ野球の接戦の試合を見た後のような表情で答える。

「うん、すごい勝負だったよ！ね、フェイトちゃん！」

「そうだね、あんなに大きなものが走り回って戦って…正直驚いた。」

二人が楽しめた事が分かるとレイは、

「楽しめたみたいだな、良かった良かった。」

と、満足げな笑顔でそう言った。

大佐がBライガーから降りてきて、全員を整列させた。

「よし、今日の訓練はここまで！各自、しっかりと休息を…」

「ビーーー！ビーーー！」

とるように、と言おうとした瞬間、基地内に大音量の警報が鳴り響いた。

『緊急連絡、緊急連絡！当基地に向けて帝国軍のゾイド部隊が接近中。各員は持ち場に急行せよ！これは訓練ではない！繰り返す、これは訓練ではない！』

どうやら敵襲のようだ。途端に基地内は慌しくなり、廊下を一般兵が右へ左へと走り回っている。

「こうしてはおれん、我々も行くぞ！」

「「「了解！！」」」

大佐を筆頭にレイ、アーバイン、バンは自分の相棒（ゾイド）に乗り込み、簡単な整備をしに格納庫へ向かった。

マミは模擬戦に参加していなかったので、相棒である「ストームソーダー」の元へと向かって走り出した。

「さあ、お二人は基地の中へ！」

一般兵がなのはとフェイトを基地の中へと誘導する。

（レイさん達…無事に帰ってきて…）

なのはは心の中でレイたちの無事を祈っていた。

ロブ基地、メインカタパルト。飛行型ゾイドを高速射出して素早く戦場に向かわせるためのシステムである。

レイ達が整備をしている間の時間稼ぎとして、マミがストームソ

ーダーで先行することになり、そのための離陸準備を進めているのだ。

『武装、セット完了。システム、オールグリーン。ストームソーダー、発進どうぞ。』

「了解！マミ・ブリジット、ストームソーダー！テイク・オフ！！」

カタパルトが作動し、ストームソーダーは戦場へと高速で飛翔した。

第六話　ロブ基地防衛戦（前書き）

更新が遅れて申し訳ありませんでした。
ようやく6話です。
ではどうぞ。

第六話　ロブ基地防衛戦

ガイロス帝国、帝都ヴァルハラ。
プロイツェンはスパイが持ち帰った情報を元に作戦を立て、皇帝ルドルフに報告していた。

「…という情報から、以上の作戦を提案いたします。」
「ふむ…分かった。宇宙戦仕様のホエールキングを４機、すぐに準備させよう。」
「有難う御座います、陛下。」

プロイツェンの作戦は採用され、すぐに準備が行われた。

「時にプロイツェン。ミッドチルダにはどの部隊を送り込むのだ？」
「私のＰＫ師団（プロイツェン・ナイツ）が参ります。」

ＰＫ師団。プロイツェンが指揮する、帝国でもトップクラスの戦闘力を持つ部隊である。

「ほう…お前自らが出撃（で）るか…よい報告を待っておるぞ。」
「はっ…」

そうしてプロイツェンは部屋を出、作戦の準備に取り掛かるために自分の相棒の下へ向かった。

場面を現在（いま）に戻そう。先行して出撃したマミの所属するストームソーダー航空隊は、その持ち味である音速を超えたスピードでの飛行により、帝国の強行部隊の先頭へとたどり着いた所だ。

スピードを音速より低くし、レーダーで敵の数、種類を判別する。
翼竜型のレドラーが7機、虎型のセイバータイガーが5機、カブトムシ型のサイカーチスが１０機、そしてレッドホーンのカスタムタイプであるダークホーンが2機といった内容だ。

『私とソニック０2、０3はレドラー、残りはサイカーチスを狙え！』

『『『『了解！』』』』

隊長からの指示により7機のストームソーダーは散開、指定されたターゲットを狙う。因みにマミのコールサインはソニック０3なので、レドラーに向かって飛行していく。

任務はあくまでも

「敵部隊の足止め」なので、下手に突っ込まずに距離を取りながら、両翼に搭載されたパルスレーザーガンで攻撃する。

しかしレドラーもなかなか当たってくれず、逆にブレードで反撃してくる。

「接近して来た…だったら！」

マミはレーザーガンを引っ込め突撃して来るレドラーにブレードでの一撃をお見舞いした。

レドラーの右翼が吹き飛び、そのまま墜落した。

「よし！一機撃墜！」

戦果を挙げ、喜びの声を上げるマミ。周りでも隊長たちがレドラーを次々と墜としていき、残りは3機ばかりとなっていた。

サイカーチスの方は7割方終わっているようだ。

「この調子なら…ってうわぁ！？」

突然の下からの攻撃に面食らったマミ。見ればダークホーンが背中のビームガトリングを空に向けて乱射しているようだ。

素早く、広範囲に広がる弾幕に対して必死に回避運動を取り、ガトリングを破壊しようかと考えたが、下手に地上スレスレまで行けばセイバータイガーにやられかねない。

そんな時、基地から通信が入った。

『先程大佐たちがそちらに向かいました。後3分程粘って下さい！』

「りょ、了解！」

3分間ガトリングの嵐を避け続ける事に専念する。気づけば3機のSタイガー（セイバー）も対空放火を始めていた。

「ま、まずい！避けきれ…うわあーー！！」

1機のストームソーダーがマミの後方で被弾し、爆散した。

「！？そんな…うわ！！」

マミは自分のすぐ後ろで味方がやられた事に動揺し、左翼に2、3発ガトリングの弾を受け、高度が低下する。

このまま高度が下がればSタイガーの牙に、Dホーン（ダーク）の角に貫かれること必至だ。

そして、1機のSタイガーが牙を光らせながら接近してきた。

（うそ…ボクの人生こんなとこで終わっちゃうの…？）

死へのカウントダウンは非情にも刻一刻と迫り来る。

（嫌だ…そんなの嫌だよ…先輩…）

思い浮かぶのは、優しくて頼れる上官の名前。

（レイセンパーーーイ!!!）

その名を叫んだ瞬間、目の前のＳタイガーが吹き飛び、数１０ｍ向こうに横たわった。そして目の前に居たのは…

「よっ。生きてるか？マミ。」

上官にして憧れの先輩、レイ・グレック中尉だった。

「せ、先輩！遅いです！！」

「悪りぃ、整備に手間取っちまった！後は俺らに任せて、お前は下がってな！」

「下がってろ」マミはその言葉に一瞬シュンとしたが、その後の言葉を聞き、

「それと…よくやった！ありがとな！」

「はい！！」

すぐに元気になり、残りの力で後方に待機している輸送用巨大ゾイド「ネオ・タートルシップ」へと帰還した。

その後のレイたち、エースチームは大活躍だった。

レイはＤホーンのガトリング砲を潰して撃破、バンはＳタイガーを２枚卸しにし、アーバインは残りの飛行ゾイドをバスターキャノ

ンで一掃、大佐に至ってはDホーンを強固な頭から一刀両断に仕留めた。

まさに天下無敵の働きを見せ、基地を守りきったのだった。

第六話　ロブ基地防衛戦（後書き）

まだまだ至らぬ未熟者ですが、出来れば感想をお願いします！

第七話　ＰＫ師団ＶＳ時空管理局　前編

ミッドチルダの首都クラナガン。その湾岸地区に位置する機動六課隊舎。

帝国の襲撃から5日が過ぎ、なのはとフェイトが居ない事を除けばいつも通りの日常に戻りつつある。

だが二人の親が行方不明となったヴィヴィオの悲しみは未だ癒えず、食事はろくに喉を通らない。好きなテレビの時間になっても、笑顔を見せずしょんぼりし、仲の良い親子のシーンを見て泣きじゃくってしまった。

勿論、はやて達も心配しているばかりではない。幾度も捜索隊を出動させているし、他の管理世界にも協力を依頼して捜索してもらっている。

それでも見つからず、はやては疲れきった様子でロビーの机に突っ伏してテレビを見ていた。

どうやら動物モノの番組らしく、はやてはそれを見て少しでも癒されようと考えた。

しばらく見ていると、クラナガン動物園のゴリラの話題に移った。レポーターに向かってフ○を投げ、悲鳴を上げてそれを回避する様子が映し出されていた。

「なんやレポーターも大変やなぁ…」

少しずつ笑顔がこぼれ、はやては微量ながらも元気を取り戻していた。

しかし現実は更なる追い討ちをかける。シャーリーから通信が入ったのだ。

『部隊長！大変です、ゴリラが！！』

「ゴリラ？ああ、見とる見とる。「天才！〇村動物園」やろ？ええなぁ、ほのぼのしとって」
『違います！敵襲ですよ！！ゴリラ型の！！』
「あぁ敵襲…って、なんやて！？」

はやてが指令室に到着すると、副官であるグリフィスが状況を報告する。

「出現ポイントは前回とほぼ同じ、敵は小型のゴリラ型が３０、大型が５機です。動きは前回とは打って変わって、１００ｋｍ／ｈ前後のスピードで本局に向かっています。」

モニターに映されているのは大型と小型のゴリラ型ゾイド。
小型（と言っても５，６ｍは有るが）のゴリラ型は「ハンマーロック」、大型は「アイアンコング」という。
ハンマーロックにはミサイルポッド、アイアンコングの背中には大型のスラスターとミサイル、右肩にビームランチャーを搭載したＰＫ師団専用のカスタムタイプである。
そんな一個師団が１００ｋｍ／ｈを超えるスピードで接近していると言うのだ。ピンチなのは明らかである。

「こら急がんとあかんな…ウチとスターズ、ライトニングの両分隊と他の武装局員はヘリで緊急出動！後、出来たら本局や他の部隊から援軍要請してや！」
「「「了解！！」」」
「援軍については先程本局の方から大至急送ると連絡がありました！」

２つ目の指示にシャーリーが返答する。

「了解や！皆、気張っていくで！」

そう言って、機動六課のほぼ全ての魔導士が前線に出た。ザフィーラとシャマルは待機だ。

前線にはスバルの姉であるギンガやシスター・シャッハ、フェイトの義兄のクロノ・ハラオウン提督も参加するという連絡も入り、局員達の士気は一気に高まった。

だが、この采配は出動できるほぼ全ての局員を動員するというものであり、必然的に本局の守備力は低下する。

この作戦に踏み切った理由として、敵がほぼ同一地点からの次元転移をしたということは「好きなところに兵は送れない」のではないかという仮説が浮上し、出来る限りの戦力を前線に出した方が良いという意見に纏まったからだ。

１０数分後、ほぼ全ての戦力が防衛ラインに集結し、戦闘準備を開始する。

「なんか…嵐の前の静けさって感じね…。」

「うん…。みんなピリピリしてるのが分かるよ。」

「き、緊張する…。初陣の時以上だ…。」

「エリオ君…」

緊張するフォワード陣。それもそのはず、今までの様なガジェットの群れを相手にするのとは訳が違う。遥かに巨大な鋼の兵器の大群。それが高速で動き、絶大な破壊力で全てを蹂躙できるのだ。緊張しないほうがどうかしているというものだ。

そうこうしていると、向こうからクロノとシャッハが歩いて来た。

「やあ、みんな揃ってるな。１分後に作戦開始だ。用意は良いか？」

緊張していたフォワード陣は覚悟を決めたかのように、

「「「「はい！！」」」」

と、声を揃えて大声で返事をした。

そして、各自のデバイスがカウントダウンを開始し始める。

『Ｆｉｖｅ…ｆｏｕｒ…ｔｈｒｅｅ…ｔｗｏ…ｏｎｅ…』

その場の全員が身構える。

「作戦を開始する！！総員、奮闘せよ！！！」

指揮官の号令と共に、防衛戦が始まった。

第八話　ＰＫ師団ＶＳ時空管理局　中編（前書き）

投稿が遅れてしまい、申し訳ありません。
ちょっと長くなりましたがどうぞ。

第八話　ＰＫ師団ＶＳ時空管理局　中編

ここはミッドチルダ東部に位置する森林地帯。ＪＳ事件において主戦場となり、激戦が繰り広げられたエリアだ。

事件後は管理局が立ち入り禁止区域とし、今となっては月の光と動物達の鳴き声だけが響き渡る平和な空間…の筈だった。

突如として現れた闇夜に光る数多の眼。月の光に照らされて重く煌めく鋼の装甲。そして巨大なその身体。

それらは群を成して闇を進み、ミッドチルダの心臓部へと猛スピードで突き進む。　それを迎え討つべく、数千の管理局の魔導士が集結した。

戦闘経験の薄い新人から歴戦の強者まで、全ては故郷を、大切な人を守るために。

「くそっ…でっかいのに…何でこんなに速いの!?」

やや焦った様子で敵ー ハンマーロックに向かって文句を言うスバル。

なかなか決定打を与えられず、ただ疲れとイライラが溜まっているのだ。

ハンマーロックの特徴は、高い攻撃力に強固な装甲、高い機動力を持つ高性能な機体だ。いくらなのはの厳しい特訓を乗り越えてきたと言っても、苦戦するのは当たり前である。

「もう一度!ディバイィィィン・・・!?」

「ゴガアァァァ!!」

目の前の敵に攻撃しようとした瞬間、横から別の機体がその巨大な腕で殴りかかってきた。それに対しスバルはプロテクションを展開し、防ごうとする。

「ぐっ…うわあああ！！」

だが、巨大な拳の方が勝り、スバルは数ｍ後方に吹き飛ばされる。それを好機とばかりに元々狙っていたハンマーロックが肩のミサイルを発射し、スバルに襲い掛かる。

「あ…やばい…」

「クロスファイアー！…シュート！！」

ティアナが寸での所でミサイルを迎撃しつつ、ハンマーロックに攻撃を加える。

ハンマーロックは目の前の出来事に動揺し、動きを止める。

「今だ！リボルバーナックル！！」

『Ｄｉｖｉｎｅ　ｂｕｓｔｅｒ』

体勢を立て直したスバルがハンマーロックの左足にディバインバスターを叩き込み、破壊して横転させる。

「サンキュ、ティア！」

「まったく…いつも言ってんでしょ、ちゃんと周り見なさいって！」

「あはは…ゴメン」

二人がやり取りしていると、もう一機が反撃してきた。だが、その攻撃は空振りに終わった。右腕をある人物が左の拳で受け止めたのだ。

「ＩＳ発動…振動破砕！！」

女性がそう言うと、ハンマーロックの硬い拳にヒビが入り、ものの数秒で砕いてしまった。

腕を砕かれた事に驚き、動きが止まった。そこを別の赤い髪の少女が追撃する。

「アタシの一撃も食らうッスよ！！エリアルキャノン！！」

少女は足元の全翼型飛行ユニットから砲撃魔法を打ち込み、ハンマーロックを撃破した。

「スバル、ティアナ、怪我はない？」

「いや～、危なかったッスよ。」

スバルとティアナは援護に来た二人を見て、驚いた。

「ギ、ギン姉！？それにウェンディ！！」

「ギンガさんはともかく、何でアンタまで！？」

青い長髪の女性はギンガ・ナカジマ。スバルの姉だ。しかし問題は赤いショートカットの少女、ウェンディである。

彼女はスカリエッティの作り出した戦闘機人、ナンバーズの一人で、他の数名の姉妹達と更正プログラムを受けている最中の筈だった。

「非常事態って事で特例が設けられたの。だから援軍扱いで合法的に出て来れたのよ。」

「他のナンバーズも来てるッスよ！」

そう言ってウェンディは左前の森を指差す。そこには自身のＩＳ、「レイストーム」を使うオットーの姿があった。他にも砲撃魔法「ヘヴィバレル」を使いハンマーロックに狙撃を行うディエチ、触った金属を爆発させるＩＳ「ランブルデトネイター」で硬い装甲を破壊するチンクなど、更正プログラムを受けていたメンバーが前線に出ていた。

「ちょっと手続きに時間が掛かっちゃったけど…」
「ううん、おかげで助かったよ。ね、ティア。」
「え？ええ、まあ…」

かつて敵同士だった少女に助けられたのがやや気に入らなかったティアナだったが、スバルに急に振られて咄嗟に答えた。

「さあ、とっとと次行くッスよ！」
「「「応！！」」」

ウェンディの一言で、三人は更に現れた敵に向かって走っていった。

『行くぜシグナム！火竜…！』
「一閃！！」
「ギガントォ…ハンマー！！」
「ツインブレイズ！！」

アギトとユニゾンしたシグナムの剣技、ヴィータの一撃、ナンバーズの末っ子、ディードの双剣「ツインブレイズ」によってハンマーロックの群れを次々と撃破していく。

そのとき、隅に横たわっていたハンマーロックのコックピットハッチが開き、パイロットがマシンガンを持って飛び出してきた。

「くそっ、食らえ！魔導士ども！！」
「何！？」
「拙い、ヴィータ！！」

ズダダダダ！！
銃口から勢い良く数十発の弾丸がヴィータに向けて放たれた。不意打ちだったため、ヴィータは回避行動が取れない。

「ヴィータ！ぐあっ！！」
『うわぁっ！！』
「シグナム！！」

弾丸が当たる瞬間、シグナムがヴィータを突き飛ばして代わりに弾丸を受けた。

「てめぇ…よくも！！アイゼン！！！」
『Ｓｃｈｗａｌｂｅｆｌｉｅｇｅｎ』

ヴィータは鉄球を三個取り出し、魔力を纏わせて帝国兵に向けて発射した。

「ぎゃあああ！！」

攻撃は見事命中し、帝国兵は吹き飛んだ後に力無く倒れた。それを他の局員が拘束し、連行した。
すかさずシグナムの下へ向かうヴィータとディード。

「シグナム！アギト！大丈夫か！？」
「くっ、何発か掠っただけだ…」
「ああ…どーってこたぁ無ぇよ…」

とは言っているが、威力はそれなりにあったらしく、シグナムのわき腹からは血が流れていた。

「嘘つけ！こんなに血が出てんじゃねぇか！！無理すんじゃねえ！！」
「ああ。弾は貫通しているものの、治療しないと拙い。」
「ふっ…この程度で泣き言を言っていては…烈火の将の名が廃るのでな…」

後退するように必死に説得するヴィータとディードだが、二人はそれを良しとせずに立ち上がろうとする。
そうこうしていると、森が微かに蠢き、空気が変わった。

「？どうした？ディード。」
「来るぞ…ヴィータ。新手だ。」
「何！？」
「ゴガアアアア！！」

森から現れたのは今までのようなハンマーロックではなく、一回り大きな赤みを帯びたピンクの重装甲を持つゴリラ型ゾイド「アイアンコングＰＫ（プロイツェンナイツ）」だった。
アイアンコングは左腕に付いたビームガンをヴィータたちに向け、ディードは双剣を構える。

「中々骨のありそうな奴だな…行くぞ！！」

ディードは鋼鉄の筋肉を持つ猛者（もさ）に向かって駆け出した。

「ふむ…思ったより持たなさそうだな…」

次元航行をしているホエールキングの中で、プロイツェンはモニターで戦場の様子を見ていた。

「もう少しだけ粘らせねばな。ブリッジ。ディマンティスを三体編成で四組出撃させるように指示を出せ。」

『はっ、直ちに。』

一方、エリオとキャロはナンバーズのチンク、セイン、ノーヴェが援軍として駆けつけ、ハンマーロックの群れと戦っていた。

エリオとセインが囮役となり、攻撃が当たりそうになるとエリオのソニックムーブで回避、後ろに回りこんで反撃する。

ハンマーロックが面食らっている隙にチンクが接近して装甲を爆発させ、薄くなった箇所をノーヴェのジェットエッジとフリードのブラストフレアで倒す、といった連携攻撃で各個撃破していく。

「結構減ってきたな」とノーヴェ。

「順調なのは良いけど、囮は疲れるよ…」とやや疲れた感じのセイン。

「そう言うな。もう少しの辛抱だ。」とセインを励ますチンク。

「でも驚きました。三人が援軍に来るなんて…」とフリードに乗ったキャロ。エリオも同意見だ。

この間まで敵だったナンバーズが助けに来て、エリオとキャロはスバルたち同様驚いていた。

「ま、この調子で早く終わらせて…ん？」
「？チンク姉ぇ？ってうわっ！！」

チンクが何かを察知した直後、その何かがとてつもないスピードで五人の左右を通り過ぎ、急停止した。

「な、何だ！？」

両腕に付いた黄緑色の鎌、ハンマーロックよりはやや小さい六本足の昆虫のようなフォルム、闇の中で凶悪に光る赤い目。
プロイツェンが追加で送り込んだカマキリ型ゾイド「ディマンティス」である。それが三体、エリオたちに立ちはだかった。

「虫風情が…すぐに終わらせてやる！」

ノーヴェはジェットエッジのローラーで加速し、攻撃に移る。

「！？早まるな！ノーヴェ！」
「うおおお！ガンシューター！！」

チンクが止めようとするが、ノーヴェはそのまま突進した。
しかし攻撃は命中せず、ディマンティスは目の前から姿を消していた。

「！？消えた！？」
「ノーヴェ！上だ！！」

チンクの声に反応し、真上を見るノーヴェ。そこには鎌を振りかざしたディマンティスの姿があった。

「うおおっ！？」

ギリギリで鎌を回避し、一旦距離を取る。

（こいつ…なんというスピードだ…。３００ｋｍ／ｈは出てたぞ…）

ディマンティスの最高速度は実に３７０ｋｍ／ｈ。アイアンコングの倍近いスピードを持ち、両手の鎌「ハイパーファルクス」は大型ゾイドさえも両断できる代物である。ナンバーズといえども食らえば即死は免れられないだろう。

「ならば足を封じる。おいピンク娘。」

「何ですかピンク娘って！？」

チンクの発言にカチンとするキャロ。だがチンクの言いたいことを理解したキャロは魔法の準備をする。

「我が求めるは、戒める物、捕らえる物。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖。錬鉄召喚、アルケミックチェーン！」

ピンクの魔法陣から鋼鉄の鎖が召喚され、高速で飛び回るディマンティスの足を辛うじて捕らえた。

すかさずエリオがストラーダを構えて突進する。

「うおおおっ！紫電・一閃！！」

ズバァァァン！！

ストラーダに電撃を纏わせて振り上げ、捕縛したディマンティスを真ん中から叩き斬った。

「う、うわあああああっ！！」

背中に乗っていたパイロットは辛うじて両断を免れたが、機体から吹き飛び体を地面に打ち付けた。

残りのディマンティスはキャロを最優先撃破対象と判断し、ハイパーファルクスの前面に取り付けられたバルカン砲を発射する。

「きゃあああっ！」

「キュィィィッ！」

キャロはフリードが咄嗟に回避したおかげで被弾せずに済んだが、フリードの左翼に掠り傷ができてしまった。

「だ、大丈夫!?フリード!!」

「キュ、キュイィ！」

主人の前で何とか踏ん張ろうとするフリードだが、その声には苦痛の表情が現れていた。

「無理しないで、一度戻ってねフリード」

「キュイィィ…」

フリードは残念そうな声を上げながら元の小さい竜に戻り、キャロの簡単な回復魔法による治療を受ける。

しかしディマンティスは容赦なくバルカンと背中のガトリングを連射し、エリオたちを追い詰める。

ノーヴェたちも攻撃を試みるが、そのスピード故に命中させることが出来ない。

今のところはエリオが最近覚えたプロテクションで防いでいるが、

それもいつ破られるか分からない。

（ま、拙い…これ以上は…！！）

早くも限界が来たらしく、エリオの腕とシールドが悲鳴を上げ始めている。

するとディマンティスの一体が射撃を止め、ハイパーファルクスでプロテクションの破壊に移る。

「エリオ！！くっ…ガトリングの所為で援護できん！」

もう一体のディマンティスがガトリングで牽制を続けているため、チンクたちは援護が出来ない状況にあった。

「くそっ…もう駄目なのか…！？」

エリオは目の前の脅威に半ば絶望しかけた…そのときだった。

「悠久なる凍土、凍てつく棺のうちにて、永遠の眠りを与えよ…凍てつけ！エターナルコフィン！！」

呪文詠唱の声の後、目の前のディマンティスは一瞬にして凍結し、沈黙した。

「もう一撃！ブレイズキャノン！！」

突然の出来事に動揺したもう一体のディマンティスに砲撃魔法が叩き込まれ、その熱量で焼かれ爆発した。

「危なかったな。大丈夫か？」

「く、クロノ提督！？」

エリオたちの危機を救ったのは、右手にデュランダル、左手にＳ２Ｕを持ったクロノだった。

第九話　ＰＫ師団ＶＳ時空管理局　後編

「逆巻け、ヴィンデルシャフト！烈風…一迅！！」

ズガアァァン！！

シャッハの得意技、烈風一迅がハンマーロックの胸の装甲を十字に切り裂き、僅かだが内部にダメージを与えることに成功した。

「退いて、シャッハ。撃つから。」

「ええ！」

ディエチのヘヴィバレルにエネルギーが収束し、シャッハは巻き添えにならないように射線上から離れた。

「イノーメスカノン、発射！！」

砲身から太めの砲撃が放たれ、ヴィンデルシャフトが破った装甲の部分を直撃した。

「ゴガアアアア！」

砲撃はハンマーロックを貫通し、火花が散ったのち爆発した。

すると反撃するかのように、木の向こう側から無数のミサイルが飛んできた。

「唸れ、光渦の嵐。ＩＳ発動、レイストーム。」

短い茶髪の中性的な顔の少女オットーのレイストームが発動。緑色の光線が降り注ぎ、当たりそうなミサイルを迎撃する。

「助かったわ、有難うオットー、ディエチ。」
「いえ、勝つために最良の手段をとったまでです。」
礼を言われて内心嬉しいディエチだったが、あまり表面に出さない。これがツンデレってやつなんだろうか。
「敵影感知。次、来ます。」
オットーがそう言うと、三体のディマンティスと一体のアイアンコングが現れた。
『『『ゴガアアアア！！』』』
「拙いですね。先程連絡のあった新型を含め、戦力差が大きいです」
「いくら三対三でも、こればっかりは辛いわね…」
冷静に戦況分析をするオットー。それを聞いたシャッハは苦笑いを浮かべる。
アイアンコングが右腕を振り上げ、メインアタッカーのシャッハを狙って振り下ろした。
「ぐうっ…きゃあっ！！」
アイアンコングの「鉄拳」を受け、十数メートル離れた岩に激突。岩にヒビが入った。
「シスター・シャッハ！」
ディエチが声を上げた瞬間、ディマンティスのハイパーファルクスがすぐ後ろに迫っていた。

スピードで負け、回避も防御もカウンターも間に合わない。まさに万事休すだ。

（くっ…これまでか…！？）

ディエチが死を覚悟した、その時だった。ハイパーファルクスを妨げるかのように目の前に現れたのは、自分の姉のオットーだった。

「な…！？オットー！？」

「ディエチ…後は頼みます…」

ディエチはオットーに突き飛ばされたおかげで助かったが、オットーは腕をクロスさせて防御体勢を取ったもののかなりのダメージを受けてしまった。

その両腕はありえない方向に歪曲（わいきょく）し、出血も酷かった。千切れなかったのは、流石戦闘機人だというところか。

オットーは気絶してしまったらしく、ピクリとも動かない。

「そ…そんな…！オットー…」

虫の息のオットーを見て絶句するディエチ。両手にかなりの力が入り、砲塔に膨大な魔力が収束している。

「うわあああ！！オットーーー！！」

大粒の涙を流しながら、砲口を襲い掛かろうとする二体のディマンティスに向け、引き金を引く。

砲撃はディマンティスの体を覆いつくし、焼き払った。姉を傷つけた存在を、跡形も残らないように。

「キシャアァァ！！」

最後の一体のディマンティスがディエチを仕留めようとする。

「させません！！」

だが、そうは問屋が卸さない。復帰したシャッハが後ろから切り裂き、沈黙させた。

「ディエチ！大丈夫ですか！？」

「シスター…オットーが…オットーが！！」

「落ち着いて、ディエチ。…これは酷いわ…すぐに治療しないと！」

オットーの傷を見て、やや焦りの表情を見せるシャッハ。すぐに近くの局員を呼び、オットーを預けて救護班へ向かわせた。それにディエチも付いて行く。

（オットー…助かると良いけど…）

オットーの心配をしつつも、シャッハは他のエリアの援護に向かった。

防衛部隊の最終ライン。そこではリィンとユニゾンしたはやてが指揮を執って、接近しようとするアイアンコングたちを迎え撃っていた。

「来よ、白銀の風、天よりそそぐ矢羽となれ！フレースヴェルグ！！」

はやての砲撃魔法が数１００メートル先のアイアンコングに向けて放たれ、直撃する。
しかし装甲の表面を崩したものの、一撃では撃破出来なかった。

「んなアホな！なんちゅう装甲しとんねん！！」
『はやてちゃん、もう一発行くです！！』

はやては再度チャージを始めるが、アイアンコングとディマンティスはかなりのスピードで迫っているため、フレースヴェルグではなく広範囲用のデアボリック・エミッションに切り替えた。

（くっ…装甲だけでのうてスピードも化けモンやな…間に合うか…？）

アイアンコングの三倍近いスピードで迫るディマンティスのほうが、はやてにとっては脅威であった。
チャージ完了前に来られたらアイアンコングを仕留めるどころの話ではないのだ。
しかもはやては足を止めて砲撃しているため、接近戦にはめっぽう弱い。

（ア、アカン！間に合わへん…！）

はやてが諦めかけた、その時だった。

「白天王…お願い。」
「ゴガァァァ！！」

はやての後方から１０メートル超の白い召喚獣が飛来し、腹部の水晶体から数発の砲撃を放った。

砲撃は二機のディマンティスに命中、残りはディマンティスとアイアンコングが一機ずつ、ハンマーロックが五機だ。

「行って、ガリュー。」

残ったディマンティスをガリューと呼ばれた人間サイズの召喚獣が両手の爪で切り裂き、爆散した。

「な!?この召喚獣、もしかして…ルーテシア!?」

はやての援護に訪れたのは、スカリエッティに協力させられていた召喚魔導士のルーテシア・アルピーノと、召喚獣のガリューに白天王だった。

彼女らもナンバーズの面々と同様に、正式な手続きの下に援護の許可を貰い駆けつけたのだという。

『はやてちゃん、チャージ完了です!』

「急がないと、残りが来るわ。」

「おおきにな、ルーテシア!行くでぇ、リィン!!」

『はいです!!』

「デアボリック・エミッション!!」

はやての広範囲砲撃魔法により、ハンマーロックを含め、目の前の敵機は全て撃破した。

「あーもう!!こいつらさっきのゴリラより速いよ~!」

「さっきから全然攻撃が当たらねぇッス!!マジムカつくッス!!」

喚き散らしているのは、スバルとウェンディ。ディマンティスの超スピードに翻弄され、イライラが溜まりに溜まっているのだ。

「うっさいバカ二人！集中できないでしょーが！」

ティアナは誘導弾を命中させようとしているのだが、矢張りスピードの前にコントロールと弾速が追いつかない。

「いったいどうすれば…！？」

ギンガはあることに気が付いた。ディマンティスが距離を取り始めたのだ。そしてそのまま撤退してしまった。

「な、何だったの…？」

突然の撤退に何が何やらさっぱり分からないといった表情のティアナ。

すると防衛作戦に参加していた局員全員に緊急通信が入った。

『作戦本部より全局員へ通達。』

その内容に、スバルたちは絶句してしまった。

「軌道拘置所のスカリエッティ一味が脱獄だと！？」

負傷したシグナムを守りながら戦っていたヴィータとディードはシャーリーからの連絡を聞き、憤慨した。

つまり、自分達はほぼ全ての戦力を投入して囮と全力で戦い、守りが薄くなった隙にスカリエッティの脱獄を許してしまったのだ。

ヴィータの性格を考えれば当たり前だろう。

「いったいどうやって逃げたんだ!?」

「そ…それが…巨大な赤い鯨が拘置所の真正面に現れ、スカリエッティ一味のブロックだけ切り取って持って行かれ…」

「はぁ!?何だそりゃ!?」

ヴィータはすぐには信じられなかった。今まで芋虫や蝙蝠、ゴリラは見てきたがまさか鯨が現れ、スカリエッティを拉致しようとは夢にも思わなかった。

「と、とにかく本作戦は一応終了しました。一度戻ってきてください!」

「ああ、あとシグナムが負傷した。ベッドを用意しといてくれ。」

「副隊長が!?了解しました!!」

シグナムは止血こそしてあるが、あまり楽観視できる状態ではなかった。ヴィータはシグナムをおぶって帰還する。

(もう少し、もう少しの辛抱だ、シグナム!!)

ヴィータの頭には、既にシグナムの事しか頭に無かった。

第九話　ＰＫ師団ＶＳ時空管理局　後編（後書き）

次回、ジークを出します。
お待たせしてすいませんでした。

第十話　新天地（前書き）

最近なのはとフェイトの出番が少ないですが…第十話です。
どうぞ。

第十話　新天地

『ビーッ！ビーッ！』

ここは時空管理局グリューエン軌道拘置所。あらゆる凶悪犯が投獄され、厳重な警備が施されている。

そんな軌道拘置所に大音量の警報が鳴り響いていた。

「何だ、何事だ！？」

拘置所所長が警備の魔導士から連絡を受ける。

『て、敵襲です！マシンガンを持った集団が！！う、うわぁー！！』

受話器の向こうから聞こえる大量の銃声と断末魔。それを危機だと感じた所長は、通路の隔壁を下ろすように指示を出した。

普段なら、賊など魔導士が簡単に倒してしまうだろう。だが、今ばかりは状況が違った。ＰＫ師団の襲撃により、管理局の殆どの魔導士が応戦のため出払っていたのだ。

これもプロイツェンがスパイの得た情報を元に組んだ作戦の内だった。

「クソッタレ！どこのどいつだ、マシンガンなんか持ち出しやがって！」

所長はデバイスを取り出して応戦に向かおうとする。

だが所長が扉を開けようとしたとき、先に扉が勢い良く開いて帝国兵が現れた。

「な…このヤロ…ぐわぁっ！！」

所長が魔法を使おうとするが、一瞬早く帝国兵が発砲。弾は心臓を直撃、所長は息を引き取った。

「騒々しいな…いったい何の騒ぎだね、衛兵君？」

衛兵に問いかけるのは広域次元犯罪者にしてＪＳ事件の首謀者、ジェイル・スカリエッティだ。

「侵入者だ！この隙に逃げようなんて思うなよ！」

「はいはい、分かったよ。」

衛兵の言葉を軽くあしらうスカリエッティ。

スカリエッティの見張りをしていた衛兵も向かおうとするが、通路をふさいでいた隔壁が突如として上がった。

「な、何だ、なぜ隔壁が、ぎゃあ！」

衛兵はマシンガンの弾を受け、倒れた。帝国兵はスカリエッティの牢屋の前に集合する。

「Ｄｒ．ジェイル・スカリエッティ殿とお見受けします。我らと共にご同行願います。」

「ふむ…構わないが、君達は何者だね？」

「我々はガイロス帝国所属、第三歩兵小隊であります。」

「ガイロス帝国…聞いたことが無いが…」

聞きなれない国名に首を傾げるスカリエッティ。

「当然でしょう。我がガイロス帝国は、惑星Z-iに存在する国家なのですから。」
「成る程…。そういうことかね。しかし、どうやって逃げおおせる気だね？」
「これから分かります。」
そう言うと、帝国兵は無線をつなぐ。
「こちら第三歩兵小隊。スカリエッティ殿を確保。これより帰還の手助けを頼む。」
『了解。作戦をフェイズ2に移行する。』
左右の隔壁が降りた。すると拘置所が地震の如く揺れ始め、体が宙に浮いたような感覚になる。おそらく重力制御装置から切り離されたのだろう。
暫くすると揺れが収まり、隔壁がパンツァーファウストで破壊された。
そこは宇宙空間ではなく、どこか戦艦の内部のようだった。
「ここは…」
「巨大戦艦ゾイド、「ホエールキング」です。」
「ゾイド…。それも君達の世界の？」
「はい。詳しい説明は本国に着いてから説明いたします。」
ホエールキングで時空間を航行すること数時間。スカリエッティは帝国首都ヴァルハラに到着した。
すると他にもホエールキングが三隻停泊していた。そこでスカリエッティは久しぶりに「娘達」に再会した。

「ドクター、お久しぶりです。」
「ウーノ。君も来ていたのか。」
「私だけではありません。トーレ、クアットロ、セッテも来ています。」
どうやら、拘置所行きになったナンバーズは全員集められたようだ。
スカリエッティたちはすぐに謁見の間に案内された。皇帝が話をしたいらしい。
「そなた達がＪＳ事件を企てたと言うスカリエッティ一味か。」
玉座には十歳ちょっと位の少年が座っていた。
「あら～？随分と偉そうなボクちゃんですわねぇ？」
ナンバーズ４番、クアットロが率直な感想を述べる。
「貴様ッ！口を慎め！ルドルフ皇帝陛下の御前であるぞ！！」
近くの兵士がクアットロを怒鳴りつけた。
「皇帝…？あの少年がか？」
「どうやら、僕が子供で驚かせてしまったようだな。父上が早くに他界してな、故に僕が王座に着くことになった。」
「成る程…正に幼帝というわけですな、皇帝陛下。」
「そういうことだ。さて、そろそろ本題に入らせてもらおう。」
ルドルフは一呼吸置き、再び口を開いた。

「単刀直入に言おう。我がガイロス帝国に魔法の技術を齎(もたら)してほしいのだ。」
「魔法を…。何故に？」
スカリエッティはルドルフに理由を問う。
「うむ、我がガイロス帝国はヘリック共和国と敵対関係にあり、幾度も戦火を交えている。その戦いに終止符を打ち、この惑星Ｚｉをガイロスが治めるためだ。」
「つまりは世界征服のため、と言うわけですな？」
「そう解釈しても構わん。」
世界征服。世界が違うとはいえ、そんな酔狂な考えを持ったものが居た事はスカリエッティの好奇心を後押しする結果となった。
更にここは軍事国家だ。自分の腕を存分に振るえるのは間違いないだろう。
「承知しました。この話、御受け致しましょう。」
「そうか。君達はどうする？」
ルドルフはナンバーズの意見を聞く。
「ドクターがそうするのなら。」とウーノ。
「構わん。」とトーレ。
「そうですわね～。面白そうですし、お受けいたしますわ。」これはクアットロ。
「了解。」とアッサリ言うのはセッテだ。
「それは良かった。協力に感謝する。」

ルドルフは軽く頭を下げ、礼を述べた。
かくして、スカリエッティ軍団の帝国入りが確定した。
部屋の隅にいたプロイツェンはほくそ笑んだが、それに気づくものは誰もいなかった。

「ん…ここは…？」

地面に横たわっていた女性は目を覚まし、辺りを見渡す。
そこは木々が立ち並ぶ森のようだった。

「私…ヘリックシティで買い物をしてて…急に地震が…」

覚えている限りで自分の行動を思い返す。
女性―フィーネは用事でロブ基地からヘリックシティへ向かい、帰る途中でバンに頼まれていた物を買って帰ろうとしたとき地震が起き、意識が飛んだ。そして気が付いたら此処にいた。ということを思い出した。

「そうだ、ジーク？大丈夫？」
「キュ…キュイ？」

フィーネの近くで横たわっていた白い小型の恐竜型ゾイドのジークを起こした。
ジークも自分の今居る場所を確認し、困惑する。

「キュイ～…」
「心配しないで、通信機は持ってるから。」

フィーネは緊急用の携帯用の通信機を起動させる。だが、ノイズ

だらけで通信が繋がらない。

「だめ、通じない…。どうしよう…。」

フィーネが困っていると、木の向こうから誰かが近づいてきた。
もし此処が帝国領なら拙い。そう考えたフィーネはジークといっしょに繁みの中に身を潜めた。

「ふむ…誰か居た気がしたけど…念のため探しておこうか。頼むよ、猟犬たち。」

緑色の長髪の男性、ヴェロッサ・アコース査察官は自身のレアスキル、「無限の猟犬（ウンエントリヒ・ヤークト）」を発動させる。
濃い緑色の猟犬が数匹現れ、周囲の哨戒を始める。

（このままじゃ見つかっちゃう…ジーク、お願いできる？）
（キュイ。）

ジークは軽く頷いた。そして勢い良くヴェロッサの前に躍り出る。

「…！？こいつは！？」

突然現れたジークにやや驚いた様子のヴェロッサ。
ジークは素早く猟犬の一匹を尻尾で撃退しようとするが、意外にも防御力が高く一撃では倒せなかった。

「どうやらやる気みたいだね…今度はこちらから！」

ヴェロッサは猟犬に指示を出し、四方からジークを攻撃する。
ジークは何とか回避しようとするが、相手のスピードが速く攻撃

を受けてしまい、そこから総攻撃を受けてしまった。

「キュァァ！」

攻撃を受け続けてダメージが蓄積され、ボロボロになりつつあるジーク。ヴェロッサはなおも攻撃を続けさせる。

「もうそろそろか…止めを刺させてもらうよ！」

勝負を付けにかかるヴェロッサ。だが見るに見かねたフィーネが飛び出し、ヴェロッサの前に立ちはだかった。

「もうやめて！降参するから！」

「！？君は…？」

ヴェロッサはフィーネの乱入に驚いた。すぐに攻撃を中止させ、猟犬を引っ込める。

「ジーク！大丈夫！？」

「キュイ…」

フィーネはジークの下へ駆け寄り、無事を確かめる。

「その竜は君の…？」

「うん…帝国かと思って…。」

「すまない、驚かせてしまったようだね。僕は帝国とかじゃないから、安心してくれ。」

ヴェロッサはフィーネに頭を下げて謝る。

「ううん、こっちも急に攻撃なんかして…ごめんなさい…。」

フィーネも頭を下げた。

「気にしないでくれ。僕はヴェロッサ・アコース。君は?」
「私はフィーネ。この子はジーク。」
「キュイ。」

互いに自己紹介を済ませ、和解する。

「それで、ここはどこ?」
「ここはベルカ自治領にある森林地帯さ。」
「ベルカ…?ヘリックシティじゃないの?」

フィーネの言葉に首を傾げるヴェロッサ。

「ヘリックシティ?そんな町は聞いたことが無いけど…。」
「え!?そんな…」

ヴェロッサの言葉に驚愕するフィーネ。それを見たヴェロッサは、フィーネに手を伸ばす。

「ちょっと失礼…」

ヴェロッサのレアスキルの一つ、
「思考操作」を使用し、フィーネの記憶を読み取る。

「…!?これは…!?」

ヴェロッサはフィーネの記憶を見て、そこが異世界だとすぐに理

解した。
何故なら、先日自分達が交戦した兵器があったからだ。

「フィーネさん、落ち着いて聞いてください。貴女は次元漂流者だと思われます。」
「次元…漂流者？」
「はい。ここは貴女の世界とは別の世界なんです。」

ヴェロッサの口から告げられた事実。それを聞き、フィーネは多少困惑する。

「惑星Ｚｉには…元の世界には帰れないんですか？」
「貴女の世界が見つかれば帰れますが…探してみないことには…」
「そんな…」

フィーネは俯いて、瞳に涙を潤ませた。

「安心して下さい。必ず貴女の世界を探し出してみせます！」

フィーネを元気づけようとするヴェロッサ。

「じゃあ立ち話もなんだから、聖王教会の方へ…っと、そこのジーク君は治療しなくては…」
「大丈夫。私の力でなんとかなるわ。」
「え？」

フィーネは何とかなると言うが、ヴェロッサの目にはそれなりにダメージがあるように見えた。
フィーネはジークに手をかざす。
するとジークの傷がみるみるうちに癒えていき、傷跡は殆ど残ら

なかった。

「これは…回復魔法!?」

「魔法…とは違うかしら。ジークの生命力を促進させて、回復のスピードを早めただけだから。」

「なるほど…って生命力!?この機械の竜が!?」

「機械と言うより…ゾイドね。」

ヴェロッサはさっきから驚きっぱなしだった。フィーネを守ろうと飛び出した機械の竜、それを回復させたフィーネ、挙句の果てにジークには命が有りしかもゾイドという聞きなれない単語まで出てきた。

だが彼女の記憶を見る限り、間違いなくフィーネは今回の襲撃者について何か知っているだろう。

「それで、聖王教会は何処にあるの?」

「え?」

「連れて行ってくれるんでしょ?」

「あ、ああ。そうだった。ついて来て。」

こうして、フィーネとジークはヴェロッサの案内で聖王教会本部を訪れることとなった。

第十話　新天地（後書き）

感想お待ちしています。良ければ書いていってください。
あと、出してほしいキャラやゾイドがあったら言ってください。作者の記憶と手に入る情報の範囲で検討します。
では。

第十一話　フィーネは何処（いずこ）へ（前書き）

やや短めですが、どうぞ。

第十一話　フィーネは何処（いずこ）へ

ここは時空管理局地上本部。先の戦いで拘束した帝国のパイロット5名の内3名が尋問を受けていた。

「いーかげんに吐きやがれ!!ネタは上がってんだよ!!」

バンッと机を思い切り叩くヴィータ。その衝撃で机に乗ったカツ丼と電灯がほんの少し宙に浮く。

「フン、誰が貴様のような小娘に言うものか!」

「んだとテメェェェ!!誰が小娘だァァァ!!!」

兵士の言葉にマジ切れするヴィータ。他の局員が慌てて止めに入る。

「で?何のために管理局を攻撃したんだ?」

こっちの部屋ではクロノ自ら取調べをしていた。兵士は口を開かず、沈黙している。

「だんまりか…なら質問を変えよう。あの兵器は何なんだ?何故生命反応がある?」

その質問をしたとき、重い口がようやく開いた。

「…その程度なら話してやろう。…あれは金属生命体ゾイド。我々の世界にはああいったものが生息しているのだ。」

「金属…生命体！？」

シャーリーの言った通り、矢張り生命体だった。しかもあれが普通に生息しているということにクロノは驚いた。

「先生！シャマル先生！！」

取調室3。取調べをしていたグリフィスが大声で六課の医師シャマルを呼ぶ。兵士が取調べ中に舌を噛み切ったのだ。

シャマルが到着し、兵士の様子を見る。

「…駄目、もう亡くなってる…」

「そ、そんな…」

シャマルの言葉に膝を付くグリフィス。貴重な情報源を失ってしまった事と、目の前で人が死んだことがショックだったのだろう。

「成る程。おおきにな、クロノ君。」

「また何か分かったら連絡する。」

機動六課の部隊長室にはやては居た。クロノの送ってきたデータをリィンといっしょに整理している。

すると、聖王教会の騎士カリム・グラシアから通信が入った。手がかりが見つかったというのだ。

「なぁ！？そらホンマですか！？」

「ええ。先の襲撃者のことを知っていると思われる時空漂流者の女性を保護しました。」

カリムによると、その女性はグリフィスと共に地上本部に向かっているという。
それを聞いたはやてはすぐさま出発の準備を始める。
「こうしちゃおられへん、リィン！急ぐで！！」
「はいです！！」
はやては車を飛ばして地上本部へと向かった。

およそ一時間後、地上本部の応接室。そこにはクロノとはやて、フィーネとジークが居た。
クロノは最初、ジークを見てかなり驚いていた。
「はじめまして、フィーネさん。ウチは機動六課部隊長の八神はやて二等陸佐です。」
「僕はクロノ・ハラオウン提督です。」
「私はフィーネ。この子はジークです。」
「キュイ。」
ジークは軽くお辞儀をする。
「ほんなら、あの勢力について話してもらえますか？」
「はい。この世界を攻撃したのは、おそらくガイロス帝国だと思います。」
フィーネはゾイドについて、ガイロス帝国について、自分はヘリック共和国の人間で帝国とは敵対関係にあることも話した。

「なるほどなぁ…ほんならこのゾイドは分かりまへんか？」

はやてはこの間のアイアンコングやハンマーロック、ディマンティスの写真を出した。

「えっと…アイアンコングにハンマーロック…ＰＫ師団仕様ですね。このカマキリみたいなのは見たことがありません。」

「ふむふむ。ところで、ＰＫ師団っちゅうのは？」

「帝国の摂政、ギュンター・プロイツェンの私設部隊です。この程度の数だと…数１０００機は残ってるはずです。」

「こ、こんなものが少なくとも１０００機も居るんですか！？」

自分達でもかなりてこずる兵器があと１０００機以上。その圧倒的物量を相手にして勝てるのだろうか。はやてとクロノは顔を見合わせた。

「それと…私達はこれからどうなるんですか？」

「キュイ。」

「安心してください。貴女のいた世界は必ず見つけ出し、元の生活に戻してみせます。」

クロノが決意表明をする。

フィーネの世界が見つかれば帝国も必ず見つかる筈。フィーネを助けるということは、帝国を見つけ出す足がかりにもなるのである。

すぐさまクロノは艦隊を率いて次元の海に繰り出す準備を始めた。

（バン…私が居なくなって無茶しなきゃ良いけど…）

ロブ基地ゾイド格納庫。そこには何か叫んでいるバンと、何とか止めようとしているアーバインの姿があった。

「ちったぁ落ち着け、バン！」
「放せアーバイン！早くフィーネを探さなきゃ、きっと不安でたまらない筈だ！！」
「不安でたまらねぇのはオメェだろうが！」

…フィーネの予感がズバリ的中。バンは行方不明と報告されたフィーネを探すべく出撃しようとしているのだ。
そこにボーグマン大佐がやってきた。

「なんだなんだ、何の騒ぎだ？」
「ああ、大佐も何とか言ってください。コイツ、フィーネを探しに行くって五月蝿いんですよ。」
「なるほどな…」

大佐は少し考え、こう言った。

「分かった。言って来い。」
「な、大佐！？」

アーバインは大佐の判断に驚いた。大佐なら止めてくれると思っていたからだ。

「ありがとうございます！」
「ただし、１２時間だけだ。時間になったら戻って来い。あと、マミを同行させる。良いな？」
「了解ッス！！」

バンは嬉々としてBライガー（ブレード）に乗り込み、出撃準備をする。

『発信準備、完了しました！』

「了解！バン・フライハイト、Bライガー。出ます！」

バンのフィーネ捜索作戦が始まった。

第十二話　謎の声と翠屋の味（前書き）

先日、機獣新世紀・ＺＯＩＤＳの1，2巻を古本屋で買いました。
ちょうど自分が雑誌で読み始めたのが第一話だったので、かなり懐かしかったです。
では、どうぞ。

第十二話　謎の声と翠屋の味

広大な大地をバンが操るブレードライガーが疾走し、その上空をマミのストームソーダーが飛行する。
フィーネを探すべく出撃した2人だったが、一向に手掛かりが見つからない。

「あ～あ、ボクホントは非番だったのにな～…」
「ゴメンなマミ。今度ケーキ奢るからさ。」

愚痴るマミをなだめるバン。
本来なら今日マミは非番で、久し振りに町にでも行こうかと思っていた矢先に大佐が、
「バンが無茶しないように見といてくれ」という指令が入ってしまった。
つまり休日返上の原因はバンという事になる。

「で、探すあてはあるの？行方不明になったのってヘリックシティ辺りだよね？」
「え…マジで？」
「え？真逆（まさか）、知らなかったんじゃ…」

その通り。バンはフィーネとジークが行方不明になったのは聞いたが、何処で行方不明になったのかは知らなかったのだ。
ロブ基地はエウロペ大陸東部に位置し、ヘリックシティは隣の大陸、中央大陸に位置する。
いくらエウロペ大陸を探そうが見つかるわけがないのだ。

（あ、もしかして大佐、この事知ってて…）

バンは大佐が自分を出した理由を理解した。大佐はいくら基地周辺を探そうが意味がないことを気付かせるために、バンを行かせたのだ。

もしもの事があっても平気なようにマミも同行させて。

「しょーがないな。ボクがヘリックシティまで飛んでみるから、バンは先に戻ってて。」

「なぁマミ、その…ホントにゴメンな…」

物凄い勢いで落ち込むバン。

「気にしないで。フィーネが心配なのは、ボクも一緒なんだからさ。」

マミに励まされ、バンはBライガー（ブレード）の背中のブースターを噴かせ、基地へ戻っていった。

「んじゃ、行くよストームソーダー！」

ストームソーダーは一気に加速し、音速を超えてヘリックシティへと飛んでいった。

場所は変わって、ミッドチルダのとある遺跡。プロローグでユーノが石版を発見した場所だ。

ここではユーノ達が消えて以来、武装局員同伴の下に発掘が行われていた。

「…？これは…！？」

調査隊のメンバーが何やら妙な物を見つけたようだ。

「隊長代理！至急来てください！」

隊員に呼ばれた隊長代理は発掘品を見て、両目を見開いた。

「これは一体！？すぐに機動六課を呼んでくれ！」

「了解！」

およそ３０分後、フリードに乗ったキャロとエリオ、ヴィータが到着した。

「発掘されたロストロギアってのはこれか？」

「はい。何かの核かと思うのですが…。」

ヴィータは目の前の発掘品、真ん中に「Z」と書かれた丸い球体を見た。

「成る程な…かなりの魔力が感じられるぜ。早速封印を…」

ヴィータはロストロギアを封印しようとするが、何者かの声が聞こえた。

『…めて…封…ないで…』

「！？な、何だ今の！？」

突然聞こえた声にビクっと体を震わせるヴィータ。辺りを見渡すが、声を発したらしい人物は居ない。

「空耳か…？今度こそ…」
『…印しな…で…』

再び聞こえた謎の声。ヴィータは段々いらついてきた。

「だぁーーーっ！！誰なんだよさっきから！！！！」
「ど、どうしたんですか副隊長！？」

ぶち切れるヴィータを落ち着かせようとするエリオ。

「どうしたもこうしたもあるか！！さっきから誰かが妙な声を出しやがって、集中できねぇんだよ！！」
「え…？僕には何も聞こえませんでしたけど…」
「ハァ！？嘘吐け、アタシには聞こえてたぞ」

エリオの一言に驚いたヴィータ。それにつられてエリオも一瞬ビクついた。

「あの…ヴィータ副隊長、私にも聞こえませんでした。」
「キュイ。」

キャロとフリードも聞こえなかったという。他の局員や発掘隊のメンバーもそうだ。

「おいおい…マジかよ。聞こえたのはアタシだけって…」

自分がどうかしてしまったのか、それとも周りが変なのか。そんなことを考えるヴィータ。
だがキャロの声でヴィータは我に返った。

「とりあえず、コレ早く持って帰ったほうが…」
「あ?ああ、そうだな。封印しようとすると妙なことになっから、このまんま持って帰るぞ。」

ヴィータは困惑しつつも、ロストロギアを持って帰ることにした。
だが、このロストロギアがこの戦いの鍵になることを、今のヴィータ達は知る由もなかった。

そのころ、ロブ基地の食堂にはレイを含め多くの兵士が集まっていた。

「う、美味い!こんな美味いもん食ったことねぇ!」
「おかわりが欲しい人は言ってくださいね~。」

食堂のテーブルの上には大量の甘味。それに群がる兵士達。何故このような事態になってるかというと、暇を持て余していたなのはとフェイトが「何か手伝いたい」と食堂のおばちゃんに言ったところ、今日のデザートの用意を頼まれたのだ。
そして作ったデザートのパフェが大人気。何を隠そう、なのはの実家は「翠屋」というテレビにも取り上げられるような人気の喫茶店で、その末っ子のなのはは甘味には自信があったのだ。

そして1時間後、そこには空になったパフェの器が散乱し、激戦後の戦場といった感じになった食堂の姿があった…

「にゃはは…大ヒットだったね…」
「だってなのはのパフェが美味しすぎるんだから、当たり前だよ。」

そしてなのははふと気がついた。

「あ…バンさんとマミちゃんの分、忘れてた…」

そう言った瞬間、廊下を何かが物凄いスピードで走ってきて、食堂の前で急停止した。

Ｂライガーを飛ばして帰ってきたバンだ。

「なのは！俺にもパフェ一つ！」

「ゴメンね、もう売り切れなの…」

「うっそーーーーー！！」

バンは叫んだ後、ｏｒｚのポーズを取り、そのまま固まった。

第十二話　謎の声と翠屋の味（後書き）

感想等、お待ちしてます。

では。

第十三話　激闘、開始

「はい、バンさん。」
「おおっ！サンキュー、なのは！！」

前回、なのはのパフェを食べ損ねたバンは、翌日の昼に改めて作ってもらった特製パフェを食べようとしていた。

「それじゃ、いっただきま～…」
『緊急警報発令！グレック隊及び第２から第６大隊長は至急ブリーフィングルームへ集合せよ！繰り返す、至急集合せよ！』

なんとまあ、ジャストタイミング。食べ始めようとした途端に緊急警報が発令されてしまった。

「嘘だろ！？タイミング最悪じゃねぇか！！」
「おいバン！急げ！！」

廊下を走っていたアーバインがバンを呼んだ。

「ちょっ！タンマ、今パフェ冷蔵庫に仕舞うから！！」

バンは大慌てでパフェを冷蔵庫に仕舞い、脱兎の如く食堂を出て行った。

ここはロブ基地のブリーフィングルーム。ボーグマン大佐をはじめ、レイにバン、アーバインと第２から第６大隊の隊長が集まっていた。

「これより、作戦内容を説明する。心して聞けよ。」

中央のモニターに、ロブ基地を中心としたエウロペ大陸の地図が映し出された。

「ロブ基地の南西、約１００キロ地点に帝国のゾイド部隊が出現し、此方に向かっている。偵察機の情報によれば敵はＰＫ師団を筆頭に、総勢３万機との事だ。」

「さ、３万！？」

「マジかよ！？」

「なんてこった！」　他の兵士達がざわつき始める。敵の数が３万などという話を聞けば、並の兵士は頭を抱えてしまうのも無理はない。

だが、それはあくまでも並みの兵士の話だ。ロブ基地のエースチーム、グレック隊のメンバーは恐れをなした様子も無く、大佐の話を聞いていた。

「さて、レイ・グレック中尉、どう読む？」

大佐はレイに意見を聞いた。

「敵が３万という数を出してきたということは、ここで一気にケリを付ける気でしょう。恐らく、何らかの新兵器も用意してあると思われます。」

「そうだな。そこで、だ。」

大佐は画面上に別のウィンドウを開き、陣形の説明を始める。

「先ずは機動力のあるバンと俺、第４大隊が先行し、その援護にア

ーバインと第5、第6大隊を配置して前衛の敵機を掃討。レイ及び第2、第3大隊は、敵の新兵器が現れたら一気に奇襲をかける。ここまでで質問はあるか？」

「あ、ハイ。」

バンが質問する。

「もし新兵器が無かったら、どうするんスか？」

「その場合は伏兵の所までおびき寄せ、全力をもって撃破する。他には？」

特に質問のある者はいないらしい。

「無ければ以上だ。総員、気を引き締めていけ！！」

「「「了解（イエッサー）！！」」」

レイと大佐の言葉で士気は高まり、全兵に闘志が宿った。

ここは中央大陸西部に位置する大都市、ヘリックシティ。そこでフィーネを探していたマミはロブ基地からの連絡を聞いて飛び上がった。

「「ロブ基地ニ敵襲。至急帰還サレタシ」…！？大変、急がなきゃ！」

マミはストームソーダーの補給をさっさと済ませると、ロブ基地に向けて飛翔した。

帝国軍本隊から百数キロ後方の空を飛ぶホエールキング。

そのブリッジの艦長席にはプロイツェン、隣には帝国軍技術部に配属されたスカリエッティが居た。

「プロイツェン殿、今回は魔力強化タイプは何機配属したんだね？」

「ああ。今回はテストも兼ねているからな。千機程度だよ。」

スカリエッティがゾイドの改造に関わって5日程だ。その短期間で千機のカスタムを施してしまうのだから、スカリエッティの実力を改めて感じさせられる。

「千機…か。充分だろう。」

「フッ、君の魔法の力…見せてもらおう。」

プロイツェンは口元を僅かに歪めた。

「行くぞライガー！レーザーブレード！」

「ゴオォォォ！！」

バンのBライガーが雄叫びを上げながら突進、小型ヴェロキラプトル型ゾイド

「レブラプター」を三機纏めて両断した。

「何だ何だぁ！？バンのヤロー、随分と気合い入ってんじゃねぇか！」

アーバインがバンの戦いっぷりを見て言った。

「俺達もやるぞ、オーガ！！バスターキャノン、ファイア！」

ゴジュラス・ジ・オーガの背部のバスターキャノンが火を吹き、レブラプターを数十機纏めて撃破した。

「うおぉぉ！！」

続けてバンがハンマーロックを射撃で牽制しつつ、ブレードで叩き斬る。

この時バンの頭は、あることで一杯だった。

（早く、早く終わらせて……冷蔵庫のパフェを早く食いたい！！）

…なんて単純な男だ。バンは早くパフェが食べたいが故に気合いが入っているのだ。

恐るべし、なのはのパフェ…

「よし、こっちも暴れるぞ、ライガー！」

「ガオォォォン！！」

ボーグマン大佐のBライガーが吼え、敵陣へ斬りかかる。

それを迎え撃つのは8機のセイバータイガー。多勢に無勢な上に、四方から襲い掛かる。

だが大佐は恐れず立ち向かい、右からの爪による攻撃をシールドで受け流し、ブレードで斬った。

そのままの勢いで体を左に旋回させ、正面から来たSタイガーも斬り伏せた。

更にEシールドを展開しつつ背中のブースターを噴かせ、左から来るSタイガーに勢いの乗った頭突きを喰らわせ、吹き飛ばした。

そのままブースターで高速移動してSタイガーの群れから距離をとる。

この一連の動作で倒した敵は3機、時間にして11秒という驚異

の早さ。
残り5機のSタイガー達はその強さに恐怖すら抱き始める。
「た、隊長！どうします！？」
一機のSタイガーのパイロットが隊長からの指示を待つ。
「怯むな！相手はたったの一機だ！フォーメーションC、行くぞ！」
「「了解！！」」
そう言うと隊長を中心に前衛と後衛に二機ずつ配置され、前衛の二機が左右から弧を描くように突っ込んできた。
「甘いっ！！レーザーブレード！」
右のブレードでSタイガーを一機両断するが、もう一機のSタイガーがBライガーの左前足に食らいついた。
「ぬぅっ、やるな！だが甘い！！」
大佐はシールドを展開しつつブースターを最大まで点火し急加速。
勿論、Sタイガーは噛み付いたままだ。
「うおおおお！！」
そしてそのまま断崖にSタイガーを激突させて撃破した。
「フゥ…大丈夫か？ライガー。」
「グルゥ…」

ライガーに噛み付いたSタイガーは離れたが、足にはへし折れた鋭い牙が突き刺さり、火花を発している。

「駆動系統にダメージか…まずいな。」

足に牙が刺さったままブースターで全力疾走した上に断崖に叩きつけた結果、ライガーの足が傷ついてしまった。

これではブースターは勿論、ブレードもマトモに使えない。

「今だ！総員かかれ！！」

『了解！！』

これを好機と見たSタイガー隊は、隊長機を含めて一斉攻撃に乗り出した。

3機が腹部の三連装ショックカノンを連射しつつ接近。そこから隊長機がストライククローで攻撃、ライガーを吹き飛ばした。

「ぐわぁっ！！」

大佐にライガーの受けた衝撃が伝わり、声を上げた。

足をやられている為、すぐに起き上がることが出来ないライガーを隊長用Sタイガーが踏みつけた。

「ヘッ、調子に乗りやがって。これでテメェも終わりだ！」

Sタイガーは前足を振り上げ、コクピットの有る頭部を叩き潰そうとする。

（くっ…こんな所で…）

終わった。お互いがそう思ったときSタイガーの左の頬を桜色の光が直撃、昏倒させた。

「うおっ！な、何だァ！？」

「レイか！？いや、アイツは奇襲部隊だ。ここまで来るはずが…」

そこで大佐の視界に入ったのは…

「アーサーさん、大丈夫ですか！？」

「私たちも、協力させて下さい！」

「君達は…なのは！？それにフェイト！？」

純白のバリアジャケットに身を包み、レイジングハートを持ったなのはと、黒を基調としたバリアジャケットにバルディッシュを持ったフェイトだった。

第十四話　激闘、発覚

「ふむ…状況は芳しくないようだね、プロイツェン殿？」

戦況はハッキリ言って、共和国ペースだ。魔法によって強化された魔力強化部隊は猛威を振るっているが、ボーグマン大佐たちエースチームによって魔力非強化部隊はその数を減らしつつある。

「ああ。援軍を送ったほうが良いだろう。」

プロイツェンはそう言うと、ゾイド格納スペースに通信を繋ぐ。

「私だ。レイヴン小隊を前線に送り込め。」

『了解。既に準備は出来ています。』

ゾイド格納スペース。ホエールキングの口を模したハッチがハッチが開き、深紅の機体色に身を包んだ恐竜型ゾイド「ジェノブレイカー」が姿を現した。その後ろには四機のジェノザウラーが見える。

『ジェノブレイカー、発進どうぞ。』

「了解。レイヴン、ジェノブレイカー。出撃。」

ジェノブレイカーはホエールキングの口から飛び降り、背中のスラスターを噴かせて空を滑空した。ジェノザウラーたちもそれに続いて発進した。

「くそっ、何なんだコイツら！イグアンってこんなに強かったか！

？」

曇天の空の下、バンは数１００機の魔力強化型イグアンの群れに対して文句を言っていた。

通常のイグアンも確かにスピードはある。通常よりスピードがあり、魔力弾を撃てるイグアンの群れ。流石のバンも苦戦している。

「ギャーギャー騒ぐな！その辺にバスターキャノン撃つから避けろよ！」

そう言うとアーバインはジ・オーガのバスターキャノンを発射し、イグアンの群れを一掃しようとする。

基本的にイグアンの装甲は薄い。近・中距離で魔力弾をばら撒くのなら、遠距離からバスターキャノン級の砲撃を浴びせるのが効果的だ。

砲撃はイグアンの群れを飲み込み、一掃した。

「へっ、こんなもんだろ…！？な、何ィ！？」

アーバインは我が目を疑った。確かに前方のイグアンの一掃には成功した。だが、その後方のイグアンは魔方陣のようなシールドを展開し、バスターキャノンを凌ぎきったのだ。

「ケッ、妙なシールドを使いやがって。だが、あれが新兵器って訳じゃなさそうだな。」

確かに、堅牢な事で有名なロブ基地を陥落（おと）そうというのに新兵器が硬いだけのシールドな訳が無い。だとすると、矢張り破壊力のある新型ゾイドが妥当だろう。と、アーバインは考える。

「バン、どうにも妙な連中だ。気ィ抜くなよ！」
「言われなくても、分かってらぁ！！」

バンは再びイグアンの群れに向かって突撃した。同じく前線に居るコマンドウルフ隊とシールドライガー隊もそれに続く。
アーバインはそれらをバスターキャノンで、後方支援に配置されたコマンドウルフＡＣ（アタックカスタム）はロングレンジライフルで援護を始める。
前衛と後衛のコンビネーションによって、イグアンの群れはかなり減ってきた。

「よし、これなら…」
『アーバインさん！敵増援５、来ます！』
「何だと！？」

アーバインはカメラをズームさせ、増援を確認する。

「あのジェノブレイカー…バン、レイヴンだ！」
「何だって！？」

レイヴンのジェノブレイカーに反応するバン。この二人、何かと因縁があるのだ。
バンが軍に入って最初に交戦したのがレイヴンの居た中隊だし、初めて負けた相手もレイヴンだ。更にレイヴンにはジークに似たゾイド、シャドーも居る。
バンからすれば、レイヴンは永遠のライバルである。

「今日こそお前に勝ってやるぜ！レイヴン！！」
「バンか…残念だが、此処で負けるわけにはいかないんでね。」

バンのブレードライガーと、レイヴンのジェノブレイカーが対峙

する。

「いくぜ！うおおおお！！」

「殲滅する。」

Bライガー（ブレード）はブレードを展開して突撃、Gブレイカー（ジェノ）は両肩のシールドに取り付けられた巨大なハサミ状の武器「エクスブレイカー」で迎え撃つ。

ガキィィィン！！

両機は激突と同時に擦れ違い、ブレードライガーは右の鬣（たてがみ）の一部とブレードを折られ、ジェノブレイカーはシールドの上半分を吹き飛ばされた。

両機は素早く１８０。回転し、再び向かい合った。

「ヘッ、どうだ…これで右のハサミは使えねーぜ！」

「君こそ、右のブレードとEシールドは使えないよ。」

この激突で、優位に立ったのはレイヴンだ。

レイヴンのジェノブレイカーにとって、荷電粒子砲すらも両断可能なブレードはかなりの脅威。それを片方でも破壊出来たのは大きかった。

「これ以上時間はかけれないんでね。そろそろ終わりにするよ。」

そう言うとレイヴンはジェノブレイカーの頭を前に突き出し、口をめいっぱい開かせる。

「収束荷電粒子砲、発射準備。」

脚部のアンカーが地面に突き刺さり、背部の荷電粒子コンバーターがフル稼働し、口内の砲口にエネルギーが収束する。

「だったらこっちも全力で行くぞ、ライガー！！」

バンはもう片方のブレードを展開、ジェノブレイカーに向かって突撃をかける。

それに対し、レイヴンの部下のジェノザウラーが近づけまいとロングレンジパルスレーザーライフルで援護射撃を仕掛ける。

「うおおお！負けるかぁ！！」

バンは気合の叫びと共に、全ての攻撃を回避しつつも加速して接近する。

「チャージ完了。収束荷電粒子砲、発射。」

レイヴンは荷電粒子砲をブレードの根元に向けて発射。バンはそれを右にステップして辛うじて回避するが、そのせいでブレードはジェノブレイカーに当たらずに奥に居たジェノザウラーに命中し、首を刎ねた。

「チッ、外したか。」「あっぶねぇ～、危うくやられるとこだった…」

軽く舌打ちをするレイヴンと、安堵の表情を浮かべるバン。だが、レイヴンの猛攻はなおも続く。

「荷電粒子砲、連射モード。」

レイヴンは荷電粒子砲のチャージ時間を短縮し、威力を落とした連射モードに移行する。
ジェノブレイカーの口から荷電粒子砲の雨が降り注ぎ始める。
「どわぁ！避けろ、ライガー！！」
バンはブースターを噴かせて加速、荷電粒子砲の雨を回避する。
「テュラン０２から０４へ。ここは僕に任せて敵機の掃討に向かえ。」
『了解！』
レイヴンの指示を受け、他のジェノザウラーが前進した。
「アーバイン！そっちにジェノザウラーが3機向かった！」
「了解だ！こっちは俺たちに任せて、お前はレイヴンに集中しろ！」
「おう！サンキュ！」
ジェノザウラーをアーバイン達に任せ、バンとレイヴンは再び激突した。
「なのはに…フェイト…！？」
ボーグマン大佐は目の前の光景に我が目を疑った。基地に居たはずの二人が、杖を持って宙に浮いているのだ。むしろ驚かない方がどうかしている。
「ここは私達が食い止めます。向こうにムンベイさんが居ますから、

アーサーさんはそこで修理を受けてください！」
「わ、分かった。」

大佐はその場を二人に任せ、応急修理をしにムンベイのグスタフの元へ向かった。
セイバータイガー隊はなのはとフェイトを見て驚いていた。

「た、隊長！アイツら…」
「ああ、何故こんな所に魔導士が居やがるんだ！？」

隊長が驚くのも無理はない。惑星Ｚｉとミッドチルダを自由に行き来できるのは、ガイロス帝国ぐらいの物だと聞かされていたからだ。
だが今目の前に居るのは、紛れもなく管理局の魔導士。完全に想定外の存在だった。

「ええい、怯むな！一撃当てさえすれば、それで終わる！行くぞ！」
『了解！！』

セイバータイガー隊は後退する大佐のライガーを無視し、標的をなのはとフェイトに切り替える。

「管理局風情が、ストライククローで逝けぇ！！」

一機のセイバータイガーが鋭い爪でなのはを引き裂かんと迫る。

「レイジングハート！」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ。Ｄｉｖｉｎｅ　ｂｕｓｔｅｒ。』

なのはの足下に桜色の魔法陣が、レイジングハートの先端付近に

環状魔法陣が現れ、魔力が収束する。

「ディバイーン…バスター！！」

なのはが叫ぶとレイジングハートから桜色の砲撃魔法が発射され、数メートルまで接近していたセイバータイガーに直撃、爪が砕け散って吹き飛んだ。

「な、なんだとぉーっ！！」

吹き飛んだセイバータイガーは地面を二転三転し、うつ伏せの状態で静止した。

「な、なんて火力だ…魔導士というのは、あれほどの力を持っているのか！？」

隊長の体が震えだし、セイバータイガーも本能で後退りする。その隙にフェイトが広域攻撃魔法を仕掛けようと雷光を発生させ、セイバータイガーに向かって飛んで行き、命中する。

「くっ、これしき…！？何だ！？機体が動かん！」

フェイトの放った雷光はバインド効果を持つもので、この後にフェイトの攻撃が始まる魔法となっているのだ。

「バルディッシュ、サンダーレイジ！！」

『Ｙｅｓ　ｓｉｒ！　Ｔｈｕｎｄｅｒ　Ｒａｇｅ！』

元々曇っていただった空がより黒く重い雲に覆われ、雷が鳴り始める。

そして、動けないセイバータイガーの頭上に雷（いかずち）が轟音と共に落ち、直撃した。

「ぐわあぁぁぁぁ！」

セイバータイガーと中のパイロットも感電し、機体の電子回路がショートして沈黙した。

「ふぅ、此処はこれで全部かな。」

「そうみたい。じゃあアーサーさんの所へ行こう、なのは。」

なのはとフェイトはグスタフで修理を受けているアーサーとブレードライガーの下へ向かった。

「よし、こんなもんでしょ。終わりましたよ、大佐。」

褐色の肌を持つメカニック兼通信兵、ムンベイ・メ・ジャバル曹長が修理を終えて休憩中の大佐を呼ぶ。

「おっ、終わったか。スマンな、こんな前線まで出張ってもらって。」

「いえいえ、アタシも楽しみだったんですよ。なのはとフェイトが、生身の体でどう手伝うのかね。」

「？すると二人を此処まで運んだのは…」

ムンベイか、と言い切る前にムンベイが首を振って否定する。

「アタシはただ付いてきただけですよ。二人ともかなり速いんですから。ブースト全開のブレードライガー並みですよ、アレは。」

大佐は飲んでいたコーヒーを少し噴き出し、ムンベイに問う。
「いったい、あの二人は何者なんだ？」
そう聞かれたムンベイは、「う〜…」と唸りながら答える。
「信じられないかもしれないですけど…ユーノも含めて「魔法使い」みたいな物らしいですよ。」
「魔法使い…そりゃあ凄いな…。」
意外とアッサリ信じる大佐。矢張りあんな砲撃を見せられたら、信じるしかないだろう。
「「アーサーさーん！」」
「おっ、噂をすれば…」
なのはとフェイトは空を飛んでやって来て、大佐の目の前に着地した。
「聞いたぞ、二人とも魔法使いなんだって？」
「ええ、まぁ…」
「にゃはは…」
大佐にバレてしまい、苦笑する二人。
大佐はブレードライガーに乗り込みながら、なのは達に次の目標を言う。
「よし、バンたちの救援に向かう。ムンベイは戦闘区域外で待機、なのはとフェイトは俺と一緒に来い。良いな？」

「「はい！」」

大佐たちはバンの下へ向かって走り出す。

ブレードライガーの足は十分に修理され、絶好調だった。

第十四話　激闘、発覚（後書き）

もうすぐ夏休みですね。小説の執筆も学業も頑張って行きたいと思います。
あ…九月始めにテストが…ｏｒｚ
では。

第十五話　黒き稲妻（前書き）

オマケを作ってみました。
どうぞ。

第十五話　黒き稲妻

「ハァ…ハァ…まだ行けるか、ライガー？」
「くッ…僕がここまでやられるとはね…」

数時間にわたる全力と全力のぶつかり合い。それによって両機とも傷つき、バンとレイヴンも息が上がっていた。
ブレードライガーはEシールドジェネレーターと両のブレードに前足の装甲の一部、ジェノブレイカーは両方のエクスブレイカーと装甲の一部が砕けている。

「そろそろ決着（ケリ）を付けてやらぁ！！」
「それはこっちの台詞だ。君との因縁、此処で終わらせる！」
「「ゴアァァァ！！！」」

ブレードライガーとジェノブレイカーはこの戦闘で一番の雄叫びを上げ、全力をもって突進する。
双方のスピードは爆発的に増加し、ものの数秒で激突した。

「スゥトライクゥゥゥ、クロォォォォ！！」
「レーザーチャージングブレード！はあああ！！」

ブレードライガーの爪が、ジェノブレイカーの頭部の剣が輝いてぶつかり合い、周囲に衝撃波が発生した。

「押し切れえェェェ！ライガー！！」
「貫けぇ！！ジェノブレイカー！」

更に気合を込めて叫ぶ二人。するとライガーの爪にヒビが入り、

砕け始める。だが、ジェノブレイカーの剣も同様に砕けだした。

ガキィィィン！！

二機の激突が終わり、お互いに擦れ違った。ライガーの爪は砕け散り脚部にもダメージが及んだが、ジェノブレイカーの頭部の剣も折れてメインカメラも損傷、映像が乱れている。

「いてて…大丈夫か？ライガー。」

「くっ、ここまでとはね。流石だよ、バン」

レイヴンは部下のジェノザウラーの様子を見る。ジ・オーガとコマンドウルフの群れに苦戦しているが、かなりの数は倒しているようだった。

と、そこにホエールキングからの通信が入る。

『サイクス隊が作戦を開始しました。本土から援軍も到着いたしましたので、ご帰還ください。』

「テュラン０１、了解。」

レイヴンは周波数を調節し、バンに通信を入れる。

「バン、今回はここまでだ。生きていれば次の戦場で会おう。」

「な！？おいレイヴン！」

レイヴンはギリギリ見えるカメラで前を見ながらスラスターを噴かせ、部下と共に撤退した。

「今度は勝ってやるからな！」

「おいバン！拙い事になっちまった。」

アーバインからの通信だ。バンは何事かと問う。

「どうしたんだよ、アーバイン？」

「基地に帝国のゾイドが５機、とんでもねぇスピードで向かってやがる！」

「何ィ！？」

主戦場から十数キロ離れた地点に居る伏兵部隊のレイにも、ロブ基地強襲の報告が入っていた。

「くそっ！あれが新兵器って奴か！？俺達の意味無ぇじゃねぇか！！」

レイは何の意味も成していなかった自分達に嫌になりながら、コマンドウルフを十体程引き連れて基地に戻ろうと走り出した。

ロブ基地では、急ピッチで迎撃準備が進められていた。突如現れた超スピードの五つの機影。３００ｋｍ／ｈ近い速さで接近するチーター型ゾイド「ライトニングサイクス」を、何としてでも止めようと３０機のリクガメ型自走砲ゾイド、カノントータス隊を展開する。

「目標、射程圏内まで１０秒！」

「よし！各機、砲撃用意！何としてでも止めるんだ！！」

全カノントータスが砲口を接近するライトニングサイクスに向け、砲撃準備をする。

「射程圏侵入まで、3・2・1・ゼロ！」
「発射ァ！！」

隊長の叫びと共にカノントータスの「液冷式荷電粒子ビーム砲」が火を吹き、ライトニングサイクスに迫る。

「フン、旧式が！」

ライトニングサイクスは最高速まで加速し、全ての砲撃を回避。すかさず背部のパルスレーザーライフルを放ち、カノントータスを4機撃破。防御陣に穴を開けてそこから突破した。

「クソッタレ！抜かれたか！」

隊長は通信機を使い、第二ラインに連絡する。

「第一ライン、突破された！」
『了解だ。我々が止めてみせる！』

第二ラインは二連装パルスレーザーガンに二連装ビームガン、レーダードームを搭載したガンスナイパーW2隊（ワイルドウィーゼル）。装甲はカノントータスよりは劣るものの、砲撃力と高い索敵機能を得た機体だ。

「全機、砲撃準備！ここで止めて見せろ！」
『了解！！』
数秒後、5機のライトニングサイクスが射程内に入った。
「撃てェ！！」

数十機のガンスナイパーから放たれる無数の砲撃。
それらはライトニングサイクスに降り注ぎ、両サイドを走る2機に命中して撃破した。
だが残りの3機は、先程の様に防御の中央を突破した。

「くそっ!!またしても!!」

突破した3機と、基地との距離はおよそ5キロ。ライトニングサイクスのスピードなら1分足らずで到達するだろう。

「くっ…これまでなのか…」

ロブ基地防衛隊長が諦めかけたとき、ライトニングサイクスの足下に魔法陣が現れて脚を絡めとった。

「!?な、なんだコレは!?」
「い、一体何が!?」

隊長もライトニングサイクスのパイロットも面食らい、両目を見開いた。

「ふぅ、なんとか成功したか…」

バインドを罠代わりに設置し、ライトニングサイクスを捕縛したのはユーノだった。

「隊長!今のうちに!」
「ユーノ殿、かたじけない!各機、一斉射撃!」

隊長の号令が響き渡り、基地のカノントータスが砲撃する。

動きを止められたライトニングサイクスは砲撃の雨を浴び、全機沈黙した。

「全機、撃破！」

オペレーターのその一言で指令室は歓喜の声に包まれた。

プロイツェンの乗るホエールキング。ライトニングサイクス隊の奇襲作戦失敗という報告を聞いたプロイツェンは、次の指示を出した。

「ダメージの少ない部隊とシュバルツ隊、あとは「アレ」を殿（しんがり）に出し、撤退する。」

この時、この選択肢が悪夢の始まりになろうとは、誰一人として思わなかった…。

～おまけ～

バン
「ゾイド図鑑！」
一同
「ゴールデン！！」

アーバイン
「おいバン、なんなんだこの某死神マンガのオマケみたいなコーナーは？」

バン
「いやぁ、作者が他の作品を読んでてな、ウチもやってみようかと思ったんだと。」
アーバイン
「なるほどな。で、どういうコーナーなんだ?」
バン
「ああ、この話の中に出て来たゾイドを一種類選んで、そいつを紹介してしまおうというコーナーだ。」
マミ
「と、いうわけで今回のゾイドはライトニングサイクスです!」

ライトニングサイクス
チーター型
全長１８．４ｍ
全高８．８ｍ
重量６５ｔ
最高速度３２５Ｋｍ／ｈ

ヘルキャットの後継機として開発されたため、高いステルス性能を持ち、最高速度３２５Ｋｍ／ｈという驚異の速さを持つ。

マミ
「以上が機体データです。」
バン
「なるほど～。とんでもねぇ速さだな。」
アーバイン
「つーか、何でお前がそんなデータ持ってんだよ?」
プロイツェン
「私が提供したのだよ。」
アーバイン

「うおっ!?何でテメェが!?」
プロイツェン
「堅いことを言わないでくれ。せっかくのオマケなんだからな。」
アーバイン
「いやいや、てか自分の軍の兵器のデータなんて持ち出して良いのかよ?」
プロイツェン
「これはオマケだから、本編には微塵も反映されんので問題なしだ。」
アーバイン
「いいのか、そんな事で…」
マミ
「因みにこの機体にはゾイドでは有名な武装、
「ストライク・レーザークロー」が装備されているんですが、ゾイドの世界では本機が最初に搭載した機体なんです!」
バン
「マジで!?」
マミ
「マジで!!でも殆ど言われないし、あまり知られてないんだけどね。」

第十五話　黒き稲妻（後書き）

オマケの感想やダメ出しなど、お待ちしております。
では。

第十六話　死の蠍（前書き）

オールスターゲームを見に行きたいと思っている、ムーンアローです。

第十六話、どうぞ。

第十六話　死の蠍

プロイツェンが乗っているホエールキングの隣を飛ぶホエールキングの格納庫に、二人の男女が居た。

「ハルトリーゲル大尉、あのプロイツェンという男…どう思う？」

男性が女性に話し掛ける。

「どうしたのです？シュバルツ中佐」

女性は男性の質問の意図が分からずに聞き返す。

男性の名はカール・Ｌ・シュバルツ中佐。帝国屈指の指揮官であり、ゾイド乗りだ。

彼の家は代々優秀な軍人を輩出してきた、いわゆるエリート一族である。

女性の名はキルシェ・ハルトリーゲル中尉。シュバルツの副官で、シグナムにも負けず劣らずの

「スイカ」を持っている。

故に男性兵士の人気が高いが、頼れる性格から女性兵士からも人気がある。

「いや、何か妙な噂が絶えないと聞いたのでな。大尉は何か無いか？」

キルシェは少し考え、口を開く。

「そういえば、今回艦載された

「アレ」の開発の際に何か新技術を搭載しているらしいのですが、

最後にスカリエッティ殿と共に手を加えたとか…」

そう言うと、艦内放送が流れた。

『シュバルツ隊は出撃準備に移れ。繰り返す、シュバルツ隊は出撃準備に移れ。』

「む…？このタイミングでか？」

本作戦の主軸である稲妻奇襲作戦が失敗してからの出撃。中佐はこれが撤退の為の殿だとすぐに判断した。

シュバルツ隊は帝国の部隊の中でも高い生存率を誇っている為、殿にも用いられる事も多い。

「撤退か。仕方ない…大尉、出るぞ！」

「はっ！」

シュバルツ中佐は自分の愛機であるビームガトリングを装備した黒いセイバータイガーに乗り込み、キルシェはパイルバンカーを装備したレブラプターに乗り込んだ。

全機にプロイツェンからの通信が入った。

『プロイツェンだ。シュバルツ隊にデスティンガーを同行させる。データ収集を頼むぞ。』

なんとシュバルツ隊にデスティンガーを同行させるという。

シュバルツはこれを好機とみた。

（「アレ」の力を間近で見るチャンスだ。もしかしたら、プロイツェンの意図が掴めるかもしれん。）

プロイツェンの乗るホエールキングの格納庫。
そこには青紫色の重装甲に身を包み、巨大なハサミを持つ海サソリ型ゾイドの
「デススティンガー」が居た。
反り返った尾の先には強力な荷電粒子砲を搭載しており、その機体からはなにやら異様な威圧感を感じられた。

「き、緊張する…」

デススティンガーのパイロットは、機体の発する威圧感とコクピット内の異様な雰囲気でかなり緊張していた。

『デススティンガー、発進どうぞ。』
「りょ、了解！デススティンガー、出ます！」

デススティンガーは地面に降り、八本の脚で戦場へと向かった。

「デススティンガーが出たか。大尉、我々も行くぞ！」
「はっ！」

シュバルツのセイバータイガーとキルシェのレブラプターは勢い良く飛び出し、それに続いて６０機程のレブラプターが出撃した。

前線は最早共和国ペース。ジ・オーガたち援護部隊の砲撃や、伏兵部隊から合流してきたレイのシールドライガーや大佐のブレードライガーが暴れまわる。更になのはのディバインバスターやフェイトのフォトンランサーが火を吹いて、敵をみるみるうちになぎ倒していく。

『くっ、総員撤退！』

敵の隊長が撤退を指示し、ダメージの大きい部隊から先頭区域を離脱していく。

「逃がすなよ！ここで敵の戦力を削っておくんだ！」

大佐が追撃の指示を出し、シールドライガーＤＣＳが砲撃しながら追撃する。

だがここで、指令室のレーダーがあるものを感知した。

「敵部隊後方にて高エネルギー反応！…これは…！？荷電粒子砲！？物凄い大きさです！」

「何だと！？」

大佐が言った直後、後退していく敵部隊の前方から荷電粒子砲が放たれ、前線の共和国軍に襲い掛かる。

「くっ！各機、散開！」

回避の指示を出すがほんの一瞬遅く、荷電粒子砲によって部隊の三割が壊滅してしまった。

「何て事だ！新型は一種類だけじゃなかったのか！」

大佐は自らの判断ミスに嘆きながらも、荷電粒子砲を放った張本人を見た。

そこにはデススティンガーとシュバルツ隊の姿があった。

「本隊が撤退するまでの時間を稼ぐ。無闇に突っ込むな！」
『了解！！』

シュバルツ中佐の指示によりデススティンガーを中心に、レブラプターとブラックライモスの混成部隊が前に出る。
大佐たちも応戦しようとするが、後方でバンのブレードライガーを修理しているムンベイから通信が入った。

「大佐！二時の方向からかっとんで来る十数の機影を発見！」
「なんだと！？」

この状況で航空戦力まで来るのはマズい。だが、その心配はすぐに安心へと変わった。

「大佐！遅れてスイマセン！基地で全員分の補給してたら手間取ってしまって！」

到着したのはマミのストームソーダーに本国からのプテラスボマー増援部隊だった。

「マミか！早速援護に回ってくれ！」
「合点承知の助！！」

プテラスボマーが敵部隊に爆撃を仕掛け、そこからストームソーダーのブレードで敵を両断しつつ撹乱する。更に支援部隊の砲撃で次々と撃破していく。
だが、シュバルツ隊もやられるばかりでは無い。シュバルツ仕様セイバータイガーのガトリングが火を吹き、上空のプテラスボマーの群れを撃ち落とす。
キルシェのレブラプターも従来型よりも高い機動性とパイロット

自身の腕が組み合わさり、シールドライガーＤＣＳを一機ずつ潰していく。

「くっ！流石はシュバルツ隊だ。今までの兵よりも手強い！」
「あのサソリ野郎！なんつー火力だ！野郎共、集中攻撃して一気に潰すぞ！！」

大佐はシュバルツ隊の実力を改めて感じさせられ、アーバインはデススティンガーの圧倒的な破壊力に危機感を覚えて潰しに掛かる。

「なのは、私は黒いセイバータイガーに攻撃するから…」
「うん、私はあのサソリを攻撃する。フェイトちゃん、気をつけてね！」

二人は自分のターゲットに向かって飛んでいく。

（成る程、あれが共和国の魔導士か。かなりの美女だが…）
（あのセイバータイガー…特別な武装に機動性、恐らくは隊長機…でも…）

フェイトとシュバルツはお互いの第一印象を頭に浮かべる。
そして二人は同じように考えた。

（（負ける訳には、いかない！！））

今まさに、二つの巨星がぶつかり合う。

「皆さん、高町なのはです。私も援護します！！」
『了解。御協力に感謝します！！』

なのはは周囲に桜色の魔力弾を出現させる。

『Ａｘｅｌ　Ｓｈｏｏｔｅｒ』

「アクセルシューター！」

なのはは魔力弾を操ってデススティンガーの脚を狙い、装甲の薄い部分に命中させた。

デススティンガーは反撃のために尾の付け根付近に装備した９２０ｍｍショックカノンを発射したが、的が小さくゾイドよりも小回りの効くなのはに翻弄されてしまう。

「今だ！各機、砲撃始め！！」

なのはのお陰で隙ができたデススティンガーに一斉に攻撃する。

デススティンガーはＥシールドで防ごうとするが、防ぎきれなかった分が装甲を傷つけた。

「うわあああ！！畜生、ちゃんと動け！」

デススティンガーのパイロットは強力な機体に対して自らの実力が伴わず、真の性能を引き出せていない。

「コクピットを狙わせてもらうぜ！」

狼狽えている隙に一機のシールドライガーＤＣＳが無防備の頭部を砲撃し、直撃した。

するとデススティンガーが動きを止めてしまった。

「？何だ、パイロットが死にでもしたのか？」

「随分と呆気なかったな。」
「いや、もしかしたら不意打ちを仕掛けてくるかもしれん。」

帝国の新兵器に疑問を抱くライガーのパイロットたち。
たしかに一斉砲撃をしていたと言っても、帝国の隠し玉がこんなにアッサリ終わるとは思えない。
なのはがそんな事を考えていると、突然レイジングハートが警告メッセージを出した。

『警告。敵機より膨大な魔力反応。』
「ええ!?」

そう言うと、デスティンガーを中心にどす黒い巨大な魔法陣が現れ、尾の先端の荷電粒子砲にエネルギーが収束しだす。

「た、大変!すぐに射線上から退避して下さい!」
『りょ、了解!!緊急回避!』

ライガー部隊はすぐさま回避行動に移るが、デスティンガーは遂にチャージを終え、魔力を融合させた荷電粒子砲を発射した。
この瞬間、悪夢が始動した。

～おまけ～

フィーネ
「ゾイド図鑑。」

一同

『ゴールデン！！』

フィーネ
「今回は、シュバルツ中佐仕様のセイバータイガーです。」

なのは
「通常の機体色は赤ですが、シュバルツ仕様は黒。機動性も向上しています。」

マミ
「最大の特徴は、なんと言っても背中のビームガトリング砲！シュバルツ仕様のゾイドは全て搭載という拘りっ振りです。」

フィーネ
「ではシュバルツ中佐に来ていただきましょう。どうぞ」

シュバルツ
「カール・Ｌ・シュバルツだ。よろしく。」

マミ
「よろしくお願いします。早速ですが中佐、あなたにとってガトリングとは何でしょうか？」

シュバルツ
「私と共に戦ってきた、最も信頼できる武器だ。ガトリングが無ければ、今の私は居なかったかもしれん。」

マミ
「成る程、ありがとうございました！では、また次回！」

第十七話　「悪夢」（前書き）

今回はゾイド図鑑ゴールデンはお休みします。
ではどうぞ。

第十七話　「悪夢」

デススティンガーのコクピット内、機体が突然機能停止して慌てるパイロットの姿があった。

「くそっ、くそっ！何で止まっちまうんだ！？」

パイロットは機能を回復させようとコンソールを操作するが、まるで反応が無い。

ードクン。

「？な、何だ？今の音は…」

ードクン、ドクン。

パイロットはどこからともなく聞こえてくる音を感じた。音はどんどん大きくなる。

それはまるでーー

ードクン、ドクン、ドクン。

まるで心臓の鼓動の様だった。

鼓動がハッキリと聞こえるようになった時、それ以外の「何か」が聞こえた。

ー貴様ノ器、使ワセテモラウ。

それは重く低い声だった。

ーザシュッ…

「え…？」

パイロットは背中から腹部にかけて違和感を覚え、自らの目で確認する。

目の前には鋭く尖った太い金属の槍があり、自分の腹を貫いていた。

先端からはパイロットの血が滴り落ちている。

「な、何で…！？くそっ、力が…入らな…」

パイロットはそのまま意識を失い、絶命した。

「う…嘘…！？なんて破壊力なの！？」

なのは達はデススティンガーの荷電粒子砲の圧倒的破壊力に言葉を失っていた。

射線上２Ｋｍ先までの大地は削り取られ、そこに居たゾイドは敵も味方も関係無しに跡形もなく消え去っていた。

なのははすんでのところで回避に成功したが、近くのシールドライガーは避けきれず、蒸発してしまった。

射線上の近くで戦っていたフェイトとシュバルツは、距離があったため被害は無かったが、無意識に戦闘を中断して固まっていた。

「い、一体、何が起きたの！？」

バルディッシュ・ザンバーを構えたままデススティンガーを見るフェイト。

キルシェはデススティンガーの暴挙に憤慨し、デススティンガーに通信を送る。

「貴様！友軍ごと破壊するとは、どういう了見だ！！」

だが返事は返ってこなかった。キルシェは幾度となく通信を試みるが、まるで応答しない。

（無視しているのか？それとも、何かトラブルでも？）

「どうもキナ臭いな…」

シュバルツはある疑問を感じていた。それは、先程の荷電粒子砲の破壊力だ。

幾ら魔力による強化を施しているとはいえ、あれ程の威力は出ない筈だ。

「一体、あの男は何を生み出したんだ…？」

場面は変わってプロイツェンとスカリエッティの乗るホエールキング。

「ええい、まだ通信は繋がらんのか！？」

「ダメです。まるで応答がありません！」

副艦長がオペレーターに怒鳴り散らしている。

こちらでもデススティンガーに通信を試みてはいるが、矢張り応答が無い。

他のクルーが焦っている中、プロイツェンとスカリエッティは冷静を保っていた。

「ふむ…これはどうしたことだろうね？プロイツェン殿？」
「さあな。だが、あまり良い状況ではないだろう。」
どうやらプロイツェン自身も、原因はわからないらしい。
「…！艦長、デススティンガーから通信です！」
「良し、繋げ。」
ようやく通信が繋がり、モニターには”Ｓｏｕｎｄ　ｏｎｌｙ”の文字が現れた。
「貴様ァ！！自分の仕出かしたことが分かっているのか！？」
デススティンガーのパイロットを怒鳴りつける副長。そりゃあ敵を一掃したとはいえ、味方まで巻き込んでは意味が無い。
『…自分の仕出かしたこと…だと？』
聞こえてきたのはパイロットの声ではなく、重く低い威圧感のある若本ボイスのような声だった。
「！？だ、誰だ貴様は！？一体何者だ！！」
『よかろう。答えてやる。だが、貴様らだけに言うのもつまらん。』
そう言うと通信を全回線に開き、戦場に居る全機に声を届かせる。
『よく聴け、愚かな人間共よ。我こそは数万年前、貴様ら人間共に封印されたオーガノイドの名も無き魂…。そうだな、この器の名を借りて「デススティンガー」とでも名乗っておこうか。』

戦場に居る全員がこの通信を聴き、驚愕した。
デススティンガーに搭載されていた真・オーガノイド。先日、遺跡から持ち帰られたものだ。
それが機体の魔力と反応し、突然変異を起こして封印されていた自我を取り戻してしまったようだ。

「ならばデススティンガーよ。お前がその機体を乗っ取った目的は何だ！」

シュバルツがデススティンガーに問う。

『知れたこと。貴様ら憎き人間共を、我が手で殲滅し、蹂躙し、皆殺しにすることよ！』
「つまり、復讐ということか。」
『そうだ。他には何か無いか？答えてやろう。』

次に、プロイツェンが質問する。

「では訊こう。貴様は我らを滅ぼした後、どうするつもりだ？」
『ならば、貴様らが我に与えた「魔法」とか言う力で異世界に向かい、全次元の人間共を消し去ってくれるわ！』
「そんな！」

この言葉に反応したのは、なのはとフェイトだった。このまま奴を放っておけば、幾つもの世界が蹂躙されてしまう。
そんなことは時空管理局員として、なにより人として許すわけにはいかない。

『手始めに…貴様らから蹴散らしてくれるわァ！！』

そう言うとデススティンガーのハサミが突如伸び、十数m先に居るジェノザウラーを捕らえ、一撃で引き千切ってしまった。
そしてジェノザウラーの残骸を顔に持ってくると、バキバキと喰らい始めた。

「う…腕が伸びただと!?」

シュバルツは驚愕し、一瞬動きが止まった。
デススティンガーはそれを見逃さず、シュバルツを狙って動き出した。

「くっ、しまった!」

だがデススティンガーの右足にジェノザウラーのパルスレーザーライフルが命中し、注意がそっちに向く。

「中佐!今のうちに!」
「すまない、キーン!」

シュバルツはデススティンガーの隙を突いて、ガトリングによる弾幕を張りながら後退する。

『フン、小賢しい…。まとめてあの世へ送ってくれるわ…』

デススティンガーの尾の先端が展開し、荷電粒子砲をキーンのジェノザウラーの方向へ向け、ほぼチャージせずに発射した。

「う、うわあああ!!」

超極太の砲撃により１ｋｍ先まで壊滅、真正面にいたジェノザウラーは塵すら残らなかった。

「キーン！！おのれぇ！！」

シュバルツは自分を助けた部下の死に悲しみ、激怒した。

「サーベル０１より各機へ！残存戦力はデススティンガーに向け、一斉射撃！！」

『了解！！』

シュバルツの指示により、帝国軍は全ての銃口をデススティンガーに向け、ほぼ同時に攻撃した。

攻撃は全弾命中し、辺りに黒煙が充満する。

「やったか！？」

黒煙が晴れ、デススティンガーの様子を見る。

「！！なんだと…！？」

デススティンガーは未だ健在。寧ろ傷一つ負っていないのだ。

『貴様らごときが幾ら集まろうとも所詮は雑魚…。我の敵では無いわ！』

デススティンガーは、そう言いながら三度（みたび）荷電粒子砲をチャージする。

「なんと言うことだ…」

シュバルツは死を覚悟した。残存戦力といっても、数百機はあった。なのにピンピンしている。
ー勝てる訳が無い。
そう思ったとき、後方に魔力反応を感知した。
砲撃魔法のためにカートリッジロードをした、なのはとフェイトである。

「ご婦人方、敵である我々を助けようというのか！？」
「あんな物、放って置くわけにはいきません！」
「それに、もうこれ以上人が殺されるのを見たくは無い！」

“人が死ぬのを見たくない”だと？
シュバルツはその言葉に心を打たれた。自分達は軍人。戦うために存在し、それ故に戦場に居る。
その戦場で、言うに事欠いて“人が死ぬのを見たくない”。
とんだ甘ちゃんだ。だが、間違っていると思えなかった。

「全力全開！！スターライトォォ、ブレイカァー！！」
「トライデントスマッシャァー！！」

なのはは自身の最大砲撃魔法、スターライトブレイカーで、フェイトはトライデントスマッシャーで攻撃する。
砲撃は見事に直撃し、大爆発が起こった。

「す…凄ェ。ジ・オーガ並みだな。」
「やったのか！？」
「まだです。生命反応がある。」

アーバインとレイがその威力に驚き、脱帽した。

しかし、デススティンガーの頭部周辺の装甲に届いたものの、仕留める事は出来なかった。

（なのは…やっぱりＪＳ事件の時の影響が…？）

なのはは先のＪＳ事件において限界を超えた砲撃魔法の使用の際の後遺症が残っており、魔力が万全の時よりダウンしているのだ。事実、今のスターライトブレイカーもいつもの物より威力より下がっていた。

『ほう…Ｓランク超えの魔導士か。少しは骨のある奴が居るようだな…』

ひび割れた装甲の隙間から、赤く煌々と光る四つの目が見えた。

『今ので我が魔力にダメージか…。機体の調整不足の様だな…』

そう言うと、デススティンガーは延びたハサミを元の長さに戻す。

『今日はこの位にしておくとするか。続きはまた今度だ。』

デススティンガーはショックカノンから魔力の球を射出し、次元空間への道を作る。

「あいつ、逃げる気か！？」

「そうはさせない！ボクがトドメを刺す！」

ストームソーダーは上空から急降下し、装甲の薄くなった頭部を狙う。

「マミ！深追いするな！」

大佐の命令も届かず、次元空間に入ろうとするデススティンガーに肉迫するマミ。

『ほう…我に単騎で挑むか。その意気や良し…だがな…』

デススティンガーは尾の先端を後方上４５。に向け、両サイドのハイパーレーザーガンを発射する。

「うわぁっ！？」

レーザーはストームソーダーの右翼に命中し、吹き飛ばした。
更に破片が背部のジェットエンジンを傷つけ、揚力だけでなく出力までも低下する。

『その程度では、１００集まろうとも我には勝てぬわ！』

「マミ！！」

「わあああああ！！」

ストームソーダーはコントロールを失い、デススティンガーの開いた門に突っ込んでしまった。

「マ、マミ！？嘘だろ！？」

「おい、応答しろ！！マミ！」

バンは驚き、レイは必死に通信を試みるが、全く通じない。

『フン、とんだ茶番だったな…さらばだ、人間共よ。また会おうぞ。』

デススティンガーは次元空間に消えていき、その直後に門は消えてしまった。

『ち、中佐！如何致しましょう！？』

シュバルツの部下が指示を求める。

「双方共に疲弊している。一時撤退だ！」

『了解！』

生き残った兵士を纏め、シュバルツ達は撤退していく。

『追撃しますか、大佐？』

「いや、深追いはしない。此方も撤退するぞ。」

『了解！』

共和国軍も撤退し、戦闘が終了した。

この戦いでの戦死者、両軍合わせて２４４７２名、行方不明者１名。

後に、

「東エウロペの悪夢」と呼ばれるこの戦いは、惑星Ｚ.ｉ史上最悪の戦いとして記録された。

第十七話　「悪夢」（後書き）

夏休みになりました。
勉強が大変です…
では。

第十八話　流されて、本局（前書き）

夏休み突入！
銀〇的には多くの学生がハッスルしまくる時期ですね。
十八話です。どうぞ。

第十八話　流されて、本局

（ここは…ドコだろう？）

辺り一面の闇。だが自分の姿ははっきり見える。

（確かボクは、デスティンガーを仕留めようとして…）

そこまで考えて、マミは一つの結論に辿り着いた。

（ああ…ボク、死んじゃったんだ…）

そう思ったが、不思議と悲しくは無かった。

この前死にそうになったときは、心の底から死にたくないと思ったのに、いざ死んでみると心残りはあるものの、大したことはないと思った。

ただ一つ、レイに自分の気持ちを伝えられなかったのは残念だが…

「彼女の容態はどう？」

「命に別状はありません。ゆっくり休めば、良くなるでしょう。」

時空管理局本局にある、医務室前の廊下で話をする二人の女性。

一人は本局勤務の女医、もう一人はクロノの母親のリンディ・ハラオウン提督だ。

「それにしても、彼女が流れ着いてきた時は驚いたわ～。」

「そうですね。」

マミは次元空間に飲み込まれたとき、限界ギリギリのストームソーダーの中で頭を強打し気絶してしまったが、運良く本局周辺に流れ着いたのだ。
帝国が侵攻してきた事もあり警戒してはいたが、リンディの指示で治療する方針に決まり、今に至る。

「じゃあ様子を見に行きましょうか。」
「はい。」

リンディと女医はマミのベッドがある医務室に入って行った。

「ん…う～ん…？」

マミが目を覚ますと、医務室だった。
消毒液の匂いが鼻を突き、一瞬クラッとなる。

「良かった…死んだ訳じゃないんだ。」

自分が生きている事に改めて喜びを感じ、胸をなで下ろす。

「でも此処ドコ？ロブ基地じゃなさそうだし…」
「あら？気がついたみたいね。」

扉が開き、リンディが医務室に入ってきた。

「えっと…貴女は？」
「私はリンディ・ハラオウン。提督をやってるわ。」

リンディは、あなたの名前は？と聞き返す。

「は、はい！自分は、マミ・ブリジット少尉であります！！」

相手が提督と聞き、慌てて敬礼をするマミ。ほんの少しだけ声が裏返った。

「いいのよ、そんなに緊張しなくて。ここはあなたの居た軍じゃないんだから。」

「な～んだ、そうだったんですか～…って…え〝！？」

微笑みながら超重要事項をさらっと言うリンディに、信じられない事を聞いたような顔をして固まるマミ。

「じゃ、じゃあ…もしかしてガイロス！？」

「いえ、そうじゃなくて、ここは惑星Ｚ･ｉとは違う場所って事よ。」

「じゃあ一体、何処なんですか！？」

マミは段々混乱しだし、それをリンディが落ち着かせる。

「ここは時空管理局の本局。あらゆる世界の秩序を保つための組織の中心部ってところね。」

「時空管理局…ですか。」

そんな組織があるなんて聞いた事が無かった。しかも管理局やその管理世界では魔法の技術が発達していると言う。

そんな眉唾な話が現実だなんて、どうにも信じられなかった。

「そうだ！リンディさん、私のストームソーダーは！？」

マミは自分の相棒であるストームソーダーのことを思い出し、リ

ンディに尋ねた。

「ああ、あなたの乗っていた戦闘機ね。それなら2番ドックに…」

「ありがとうございます！」

マミは脱兎の如く部屋を飛び出し、廊下を駆け抜ける。

その数秒後、向こうから『廊下を走るな！』という声も聞こえた。

「あらあら、とっても大事なものだったのね。」

本局2番ドック。本来なら次元航行艦があるべきはずのスペースに、一機のストームソーダーが収容されていた。

翼は千切れ、背中のジェットエンジンは大破して拉げており、美しかった流線型の銀色のボディはひどく傷ついていた。

「しっかしスゲェ機体だな。９７管理外世界の戦闘機なんか目じゃねえよ。」

「ああ。しかもコイツ、例の襲撃者と同じ世界の機体らしいじゃねえか。」

「マジかよ！？じゃああの女の子も奴らの…！？」

ドック内は、ストームソーダーを眺める整備士の雑談で盛り上がっていた。

ストームソーダーやマミの事で、襲撃者の一味だの、ミッドチルダを破壊しに来ただの、実はあの機体は新型のエ〇ァだのと、憶測が飛び交っている。

「まぁこうして騒ぐより、キッチリ調べないと。よーし、今からこの子を分解して…」

「ちょーーっと待ったァァァァァ！」

メガネをかけた女性整備士がストームソーダーをバラそうと思った瞬間、マミが扉を思い切り開けて乱入してきた。

「な、何!?」

「情報なら何でも提供するから!ストームのデータも教えるから!だからバラすのは勘弁して！」

肩で息をしながら捲くし立てるマミに気圧され、整備士は作業を中断する。

かなり全力で走ってきたらしく、安心したマミはその場に座り込んでしまった。

「よ、良かった…ありがとう、整備士さん。」

「どういたしまして。でも、あなたはこの子がとても大事みたいね。」

「えへへ…航空隊に配属されてから、ずっと一緒に戦ってきたボクの相棒なんだ!」

満面の笑顔で答えるマミ。

（この子…パイロットにとっても愛されているのね…）

整備士は少し考える。こんなに幸せな機体をこのままスクラップにするなんて、勿体なさ過ぎる。

そして、整備士は決心した。

「ねぇ、この子を私達に預けてくれない?なんとか修理してみるわ。」

「ホントに!?ありがとう!」

マミは立ち上がり、さっき以上の笑顔を見せた。

「ボクはマミ・ブリジット。あなたは?」

「私はシャリオ・フィニーノ。シャーリーって呼んでね。」

「うん!よろしく、シャーリーさん!」

二人はしっかりと握手する。

と、そこへリンディが一人の女性を連れてやってきた。

「マミさん、あなたが良く知っている人を連れてきたわ。」

「へ?」

マミが振り向けば、そこには見慣れた薄い金髪の女性と白い小型のゾイド、フィーネとジークが居た。

「フィ、フィーネさんにジーク!?こんなトコに居たんですか!?」

「心配かけて、ゴメンね。マミ。」

「キュイ。」

所変わって、ロブ基地の食堂。

作戦を終えて帰還したバンたちはかなり、いや、物凄く重い空気に包まれていた。

つい先程、マミが行方不明者から死亡者扱いになったとの連絡が入ったからだ。

それに伴い、マミは二階級特進で大尉となった。

「何が死亡者だ…何が二階級特進だよ…!!ロクに遺体も見つけな

いで、そんな事が決められて良いのかよ…！！」

バンは爪が掌（てのひら）に食い込んで血が出るほどに、拳を握り締めていた。
マミが死んだという事に納得できないのだ。
無論、それはバンだけではない。大佐を始め、レイもアーバインも、なのはやフェイトも同じ気持ちだ。この基地に悔しがっていない人間なんて、一人も居ない。

「気持ちは分かるがな…言っててもしょうがねぇだろう。」

アーバインの台詞に反応し、バンはアーバインを睨みつける。

「…アーバイン、お前は悲しくないのかよ…マミがこんな事になって「悲しいに決まってんだろうが！！」…！？」

アーバインはバンが言い切る前に、バンを怒鳴りつけた。

「俺だって…マミが死亡者扱いだなんて納得いかねぇ。だがなぁ…グチグチ言ってても仕方がねぇだろう！」

アーバインはバンに背を向け、続ける。

「俺達は俺達に出来る事をするんだ…マミのためにもな。」

そう言って、アーバインは食堂を後にする。
その目からひとすじの涙を流しながら…。

「さて…詳しく話を聞かせてもらおうか。」
「はい。」

大佐はなのはとフェイト、レイから事情を聞いていた。
自分達は惑星Ｚ.ｉの人間ではなく、別の世界からやってきた事。
時空管理局の事。自分達と帝国の使っていた「魔法」の事…。

「成る程な…大体分かった。」

そう言って、大佐はタバコを吸い、手元の灰皿に押し付ける。

「レイ…お前の処罰は後で通達するからな。」
「レイさんの所為じゃありません！寧ろ、私達がこの世界に来たのが悪いんですから…」

レイを弁護するなのはとフェイト。隣のレイは申し訳ないといった顔をしている。

「いいんだ、なのは、フェイト。俺が勝手にやった事だから。」
「でも…！」
「お前ら、分かったから静かにしろ。話が進まん。」

大佐は三人を止め、話の軌道を修正する。

「聞いてくれ、三人共。デスティンガーの所為で、共和国（ウチ）も帝国も疲弊している。ウチは本土からの援軍が明日にも到着する。そこで、だ。」

大佐の目が、真剣さを増す。

「帝国の主要基地である、ニクシー基地を攻略する。そして、なのはとフェイトにも協力を要請したい。」

「私達に？」

なのはとフェイトは驚きの表情を浮かべた。

「勝手な話だが…先の作戦で二人の力を見せてもらった。帝国が魔法を使うなら、こちらも対抗できる戦力を用意したいのだが…どうだろう？」

二人は顔を見合わせ、うなずいた。

「分かりました。私達も協力します！」

「すまない。こんな事に巻き込んでしまって…」

「いえ、私達なら大丈夫です。巻き込まれるのは、慣れっこですから。」

フェイトの台詞に「にゃはは…」と笑うなのは。確かに、昔から色んな事に巻き込まれては助けてきた。まぁそのお陰で、今の自分と仲間が居るのだが。

「それと、レイ。お前の処分だが…」

大佐の表情がまた真剣になる。

「お前を、ニクシー基地攻略部隊の隊長に任命する。」

「へ！？処分…ですよね？」

営倉（えいそう）入りも予想していたレイは、かなり面食らった顔になった。

「次の作戦の中で、最も危険かつ重要なポジションだ。必ず成功させること。それがお前の罰だ。分かったか！」

「了解！絶対に成功させてみせます！！」

レイはすぐさま真剣な顔つきになり、敬礼して決意表明をした。

（マミ…お前のためにも、この勝負…絶対に勝つ！！）

～おまけ～

シャーリー
「ゾイド図鑑！」

一同
『ゴールデン！！』

シャーリー
「今回は、ジーク君の紹介です！ジーク君、どうぞ！」

ジーク
「キュイ。」

シャーリー
「ジーク君は、オーガノイドと呼ばれる、古代惑星Ｚｉのゾイドだそうです。」

リンディ
「野菜や農作物に良く使われている言葉ね。」

ジーク

「…キュイ？（首を傾げるジーク）」

シャーリー
「提督、それはオーガニックです。」

お客さん
「ＨＡＨＡＨＡ（フ○ハウスとかのアメリカドラマでよくある笑い声）」

シャーリー
「続けましょう。ジーク君の能力として、人と合体して戦ったり、そこからゾイドに合体して力を最大限に発揮する事も可能なんだそうです！」

リンディ
「合体って、こういうことかしら？」

某勇者王
「ファイ○ル・フュー○ョン！！ガオ！○イ！ガー！！」

シャーリー
「いや、そんなモン承認しませんから。つーかどっから連れて来たんですか！？」

ジーク
「キュイ！」

シャーリー
「ああ！ジーク君までフュージョンしちゃった！？」

ガオガ○ガーの胸のライオンがジークの頭に変化した。

某勇者王
「俺達は…一つだァーーー！！」

ドッカーーーン！！（お○ャ魔女的なノリで）

シャーリー
「えー…いい加減収拾つかなくなるので、今回はここまでです。では、また次回！」

某勇（ｒｙ
「ヘル！○ンド！ヘヴン！！」

シャーリー
「せんで良い！！」

第十八話　流されて、本局（後書き）

感想等、お待ちしております。

では。

第十九話　炎上、竜の里（前編）（前書き）

やっと書けました。
十九話です。どうぞ。

第十九話　炎上、竜の里（前編）

時空管理局本局。その応接室にはマミにシャーリー、リンディにフィーネが居た。

「デスティンガー…？」

「はい。帝国が開発した、サソリみたいなゾイドです。」

リンディは思った。デスティンガーなんて名前、どう考えても良いものであるわけがない。

「そのデスティンガーが、次元の海をさまよっているって言うの？」

「はい。デスティンガーは魔法とオーガノイドによって、自我を持ってしまったらしいんです。」

「魔法！？」

シャーリーが驚き、リンディが一つ確信した。

「おそらく、スカリエッティが技術提供をしたのね…」

矢張り、あの時スカリエッティの脱獄を許してしまったのは、かなり痛かった。

「私達の不手際の所為で、こんな事になってしまって…申し訳ないわ…」

「そ、そんな、気にしないで下さい。」

深々と頭を下げて謝罪するリンディの頭を上げさせようとするマ

ミ。

『ビーッ！ビーッ！』

そのとき、警報が鳴り響いた。

ところ変わって聖王教会病院。ヴィータは先週の戦いで、マシンガンを受けて負傷したシグナムの見舞いに来ていた。

「調子はどうだ、シグナム。」

「ヴィータか。もう傷は塞がった。後二日もすれば退院出来るそうだ。」

脇腹に包帯を巻き、ベッドで寝ているシグナムが言う。

それを聞いたヴィータは安堵の表情を見せる。

「そっか！良かった。」

ヴィータは机に持ってきた花を飾る。

「ところで…オットーはどうしてるんだ？」

オットーはディマンティスの攻撃を受け、意識不明の重体に陥った。

幸い、一命は取り留めたが、未だに意識を取り戻さないのだ。

「…まだ意識が戻らん。ディエチが付きっきりで看病してはいるんだが…。」

「そっか…」

と、そこにグリフィスから通信が入った。
「ヴィータ副隊長！緊急事態です！」
「！？どうした！」

場所を戻して本局。
「クロノ、どうしたの！？」
「緊急事態です！巨大なサソリが、第６管理世界で暴れまわっているんです！」
「何ですって！？」

モニターに現地の映像が映し出される。そこには、尾の先から荷電粒子砲を撒き散らし、巨大な牙で局員を喰らうデスティンガーの姿があった。

「これが…デスティンガー！？」
「キュウゥゥゥ…！」

リンディとフィーネは画面越しでも伝わってくる威圧感に恐怖を覚え、ジークは唸り声を上げる。

「シャーリー、すぐにはやてちゃんに連絡を！」
「了解！」

シャーリーは六課に通信を入れに向かう。

「リンディ提督、僕も向かいます！」
「わかったわ、気をつけてね。」

モニターが閉じ、通信を終える。

「リンディさん、ボク／私たちも行きます！」

マミとフィーネ、ジークが現地行きを志願する。

「あなた達…でも、ストームソーダーも使えないのにどうする気？」

「心配要りません！ジークがいますから！」

その言葉を聞き、リンディは思った。こんな人くらいの大きさのゾイドで、いったいあの化け物とどう渡り合おうというのか。

いや、その者の力は外見だけでは判断できないということを、今まで幾度となく見てきたではないか。

何よりマミの闘志に満ちた目を見たとき、何の根拠も無いが「いけるかも知れない」と感じたのだ。

（この子達に賭けてみるのも、良いかも知れないわね…）

そしてリンディの腹は決まった。

「わかったわ。クロノと一緒の船、クラウディアに乗りなさい。」

「ありがとうございます！リンディ提督！」

二人と一匹は、クロノが艦長を勤めるＸＶ級次元航行艦「クラウディア」に向かって走っていった。

第６管理世界。戦局は泥沼と化していた。

斥候の局員は8割が倒され、その内の5割はデススティンガーに喰われて肉体ごと魔力を吸収されてしまった。

『ハッ！貴様ら二流・三流の魔導士が、幾ら来ようと我には勝てぬわァ！』

そう言うと、デススティンガーはハサミ周りの装甲をずらし、105mmリニアキャノンを発射する。

「うわぁぁぁ！」

弾丸は局員のプロテクションを破壊、その局員に大きな風穴を開けてしまった。

「アッシュ！クソォ…キサマァ！！」

友を殺されて激怒した局員を中心に、生き残っている局員が一斉に砲撃魔法を発射した。

『小賢しいわァ！！』

だが、デススティンガーは喰らった局員の魔力で再生させたEシールドで、全砲撃を打ち消してしまう。

「くそっ、総員撤退だ！」
「撤退！てったーい！！」

このままでは全滅すると判断した隊長が、撤退命令を出す。

『逃がさぬ…塵となれィ！！』

荷電粒子砲に魔力が収束され、撤退する局員に向けて放たれようとする。
このままでは本当に全滅してしまう。その様子を見ていた全員がそう思ったとき…

「エターナルコフィン！！」
『ヌゥッ！？』

デスティンガーの尾が凍りつき、発射の阻止に成功した。

『この魔法、オーバーSランクか…何者だ！？』
「万事屋…じゃなかった、時空管理局提督、クロノ・ハラオウンだ！！」

右手にデュランダル、左手にS2Uを持ち、デスティンガーを見下ろす感じでクロノが居た。
え？何か間違えたっぽいって？気にするな。中の人ネタという奴だ。
更に遠距離から巨大な砲撃が五つ、デスティンガーに迫ってくる。
砲撃は凍り付いた尾に命中し、氷ごと砕いた。

『グゥッ！？』

流石にデスティンガーも予想出来なかったらしく、動揺した。

「ゴガァァァ！！」
「その調子よ、ヴォルテール！」

砲撃の主は、キャロの召喚獣であるヴォルテール。ゴジュラス並みか、それ以上の巨体を持ち、此処アルザスの守護者とも呼ばれる。

「今です！皆さん、お願いします！」
「ＯＫ！」
「任せなさい！」
「うん！」
「応！」

スバル、ティアナ、エリオ、ヴィータの順に返事をし、クラウディアから出撃する。

「よぉし！ボクたちも行くよ、ジーク君！！」
「キュイ！」

ジークはマミの後ろに立ち、上体を起こす。
すると、ジークの胸から下半身辺りまでが開く。
そこから飛び出した触手のようなコードがマミの身体を絡めとり、ジークの体内に取り込んだ。
これこそが、ジークの持つ能力、
「合体」である。

「マミ・ブリジット！行きます！！」

ジークの背中からブースターが現れ、デススティンガーに向かって飛行した。

（あんな化け物なんかに…アルザスは壊させない！）

いつになく気合いが入っているキャロ。

何故なら、ここはキャロの故郷だからだ。
数年前、キャロは幼くしてフリードリヒを従えた。だが、その力を恐れたル・ルシエの族長は、まだ幼きキャロを追放したのだ。
だが、キャロは故郷が滅べばいいとは思っていないし、憎んでもいない。
たとえ何があったとしても、アルザスはキャロにとって唯一無二の故郷なのだから。

「ぶっ潰せ！グラーフアイゼン！！」
『Ｊａ！　Ｇｉｇａｎｔｓｃｈｌａｇ！』

グラーフアイゼンはコッキング音と共にカートリッジを二発ロードし、ハンマーを巨大化させる。

「轟天爆砕！ギガントォ…シュラァァァク！！」

ヴィータは巨大化したハンマーをデスティンガーの頭部めがけて振り下ろす。それに対してデスティンガーはめいっぱいＥシールドを展開、ヴィータの一撃を受け止めた。

『ふむ、なかなかの威力…だが我の頭を潰すには、まだ足りんぞ！』
「確かにな…マミの言ってた通り、硬(かて)ぇ奴だぜ。」

そう言うと、ヴィータが叫ぶ。

「今だ！スバル、エリオ！」
「「了解！！」」

スバルとエリオが瞬時に加速し、デスティンガーに向かって両サイドから突撃する。

元々、ヴィータもギガントシュラークの一撃でデススティンガーの装甲を砕こうとは思ってない。その強大な一撃をEシールドを引き付けるための囮として使い、防御の手薄になった部分をスバルとエリオが攻撃する、といった作戦だったのだ。

「一撃必倒！ディバイィィィン…バスタァァァ！！」
「一閃必中！メッサーアングリフ！！」

スバルは零距離で、鋏脚の関節部分にディバインバスターを叩き込み、エリオはストラーダの魔力刃を巨大化させてスバルと同様に切り掛かる。

『グゥッ！？』

デススティンガーが一瞬怯み、Eシールドが弱まった。

「ジーク君、今だよ！！」
「キュイィィ！！」

更に猛スピードでマミと合体したジークが頭部に頭突きを喰らわせ、装甲の一部を砕く。
その隙に後方支援役のはやてにティアナ、ヴァイスが攻撃準備に入る。

「準備はええか、ティアナ、ヴァイス君！？」
「はい！！」
「オッケーッス！！」

そう言うと、三人は自身のデバイスに魔力を収束させる。

「遠き地にて、闇に沈め。デアボリック・エミッション！！」
「クロスファイアァァァ…シュート！！」
「撃ち抜け！ストームレイダー！！」

はやては極太の砲撃魔法を、ティアナは大量の誘導式魔力弾を、ヴァイスはストームレイダーの狙撃を連射して攻撃する。

『グオォォォ！！』

攻撃は全弾命中し、デスティンガーは爆炎と煙に包まれた。

「やったのか！？」

ヴィータがお約束の様な台詞を言う。
カンの良い方は分かると思うが、この台詞が導き出す答え…それは。

『クッ…なかなかやるではないか…』

そう。
「まだ生きている」である。
あれだけの攻撃で、装甲がところどころ砕けているだけ。本体には殆ど攻撃が通っていなかった。

『管理局も侮れん、ということか…仕方がない。』

そう言うと、デスティンガーは一呼吸置いて、一言言った。

――本気で行かせてもらう。

「…え？」

スバル達は一瞬、聞き間違いかと思った。だが、それは現実だった。

『ヌゥオオオ…！！』

「っ！？な、何や…この声…！？」

デススティンガーが低く重い声で吼え、はやては耳を貫くようなその音に、思わず耳を塞ぐ。

すると、デススティンガーの砕けた尾がピッ◯ロ張りに再生したではないか。

「な、なんやて！？んなアホな！！」

「再生…しやがった！？」

「そ…そんな…！！」

更に再生した尾の先に魔力が収束し、荷電粒子砲の発射体勢に入る。

『フハハハハ…我に楯突いたこと…後悔させてくれるわ！！』

その頃、機動六課隊舎で昼寝をしていたヴィヴィオ。両目は真っ赤になっており、寝る前に散々泣いていた事が分かる。ヴィヴィオは夢を見ていた。なのはやフェイトと一緒にお花畑で遊んでいる夢だ。

「ヴィヴィオ～」

「なのはママ～！」

ヴィヴィオはなのはに向かって走り出そうとする。

（…待って！）

ヴィヴィオはどこからともなく聞こえた声に反応し、足を止める。

（…？）

（待って、ヴィヴィオ。僕の話を聞いて欲しいんだ。）

ヴィヴィオは走り出そうとするが、再び声が聞こえ、足を完全に止めた。

「誰…？どこにいるの？」

（ここだよ。）

ヴィヴィオは声の聞こえた方向、晴れ渡った空を見上げ、そこに光り輝く玉を見つけた。

玉はヴィヴィオの下にゆっくりと降りてくる。

（はじめまして、ヴィヴィオ。）

「は、はじめまして。」

ヴィヴィオはけっこう驚いていたが、挨拶されたので一応返した。

（時間がないから、単刀直入に言うよ。君の力を貸して欲しいんだ。）

「私の…力…？」

ヴィヴィオは玉の言っていることが一瞬解らなかった。

（そう。君の持つ…聖王の力だよ。）

「ー！？」

先のＪＳ事件で、ヴィヴィオは自身の持つ聖王の遺伝子と魔力をスカリエッティに利用され、なのはを苦しめたのだ。

操られていたとはいえ、自分自身がやってしまった事に、幼いながらにもヴィヴィオは責任を感じていたのだ。それと同時に、ヴィヴィオは自分自身の持つ力を恐れてもいた。

「嫌…またみんなに迷惑かけちゃうよ…」

（みんなを守るためなんだ！頼むよ！）

何とか説得しようとするが、ヴィヴィオは自らの強すぎる力に怯え、首を縦に振ろうとしない。

（どうしても…駄目なのかい？）

ヴィヴィオはその問いには首を縦に振る。

（そう…なら仕方ない。あれを見て。）

玉の示す先には、先ほどからヴィヴィオを待つなのはとフェイト。その後ろに、地面から巨大なサソリのような化け物が現れ、なのはとフェイトを一飲みにしてしまった。

「なのはママ！フェイトママぁ！！」

ヴィヴィオが叫んだ次の瞬間、辺りを目が眩むほどの光に覆われる。

光が収まったとき、ヴィヴィオの目に飛び込んだのは…

「そ、そんな……！」

焼き尽くされた大地。全壊した機動六課隊舎にビル群。横たわるスバルたちの亡骸（なきがら）だった。

その光景にヴィヴィオは口元を押さえ、目に涙を浮かべる。

（これが…君が力を使わなかったときのシュミレーションだ。君が力に怯えた所為で、世界は滅び、君の大切なものは全て無に還る…）

ヴィヴィオはその光景と言葉によって、膝をついて泣きじゃくる。

（でも、僕に力を貸してくれたなら、こうならない確率は格段に跳ね上がるんだ！君の力が暴走しないよう、僕が抑え付ける。だからお願いだ。僕に力を貸してくれ！）

ヴィヴィオは考える。もし、また自分の力が暴走してみんなを傷つけるのは嫌だ。でも、自分の力がみんなを守る力になり得るのなら…

ヴィヴィオは決心を固め、涙を拭いて立ち上がった。

「分かった…あなたに協力する！」

（ありがとう！）

玉はヴィヴィオに感謝の言葉を告げ、再び天に昇る。

同時にヴィヴィオは意識が薄れてゆく。

（君が目覚めたとき、僕の分身が君の近くにある。それを持って、僕が作る魔方陣に入ってくれ！）

それが聞こえたのを最後に、ヴィヴィオは意識を手放した。

「う…ん…？」

ヴィヴィオは目を覚まし、しばらくボーっとする。そして周りを見渡すと、机の上に見慣れない人形があった。それはなにやらムササビのような、モモンガのような感じの機械的なフォルムだった。

ヴィヴィオはそれを手に取ると、すぐ近くの床に白い魔法陣が現れた。

ヴィヴィオが魔法陣に入ろうとすると、寮母のアイナとザフィーラがやって来た。

「ヴィヴィオ！？どこに行くの！？」

「ごめんなさい、アイナさん、ザフィーラ！みんなを助けなきゃ！」

ヴィヴィオの足が魔法陣に踏み入り、光に包まれていく。

「待って！「いや、行かせてやれ。」…え！？」

ザフィーラがアイナを制し、その間にヴィヴィオの姿は魔法陣に消えた。

「ザフィーラ！？」

「ヴィヴィオなら大丈夫だ。何か、心強い味方が居るらしい…。」

ザフィーラは人形に宿っている魔力を感じ取り、敢えて行かせたのだ。

（何処の誰かは知らんが…ヴィヴィオを頼むぞ。）

ヴィヴィオが転送されたのは、地上本部のロストロギア保管庫。
そこには先日ヴィータが持ち帰ったものもあった。

（ヴィヴィオ、その球体…ゾイドコアに触れるんだ。）
「えっと…こう？」

ヴィヴィオはゾイドコアに近づき、手のひらを押し付けるようにして触れる。
するとゾイドコアが輝き始めた。同時にヴィヴィオの体も同じように輝きだす。

（白き虎が片割れ、ザビンガの名の下に命ずる。幼き聖王に、今再び戦いの力を！）

人形―ザビンガがそう唱えると、輝くヴィヴィオの体がゆっくりと成長し、ゆりかご内部の時の姿になる。もちろん、ザビンガの制御のおかげで理性は保てている。

（場所は僕が案内する。行くよ、ヴィヴィオ！）
「うん！！」

聖王となったヴィヴィオは魔方陣を使い、第６管理世界へと跳躍した。あの夢を正夢にはさせないために…

第十九話　炎上、竜の里（前編）（後書き）

最近、雨ばかりですね。テンション下がります…
贔屓にしてる鴎の球団も鳴かず飛ばず…
でもいつか、きっと晴れるときが来ると信じています！
では。

第二十話　炎上、竜の里（後編）（前書き）

今年二回目の風邪を引きました。正直、ふざけんなって感じです。
第二十話、どうぞ。

第二十話　炎上、竜の里（後編）

第6管理世界アルザス。そこでは前回に引き続き、管理局とデスティンガーの死闘が繰り広げられていた。

『フハハハハァ！見たか！我が力を！！』

デスティンガーが放ったフルドライブの荷電粒子砲は、数キロ先にある山を貫き、巨大な風穴を開けていた。

「あ…ああ…！！」

「な、何あれ！？」

その破壊力の前にキャロもスバルも、その場に居た全員が恐怖し、言葉を発することもままならなかった。

「なんちゅうやっちゃ…ホンマもんの化け物（バケモン）やな…」

『はやてちゃん！あ、あんなのに勝てるですか！？』

リィンは圧倒的な力に怯えている。

「リィン。勝てるかどうかが問題やない。ウチらは勝つんや！！たとえ相手がバケモンでもなぁ！！」

そう叫ぶと、はやてはシュベルトクロイツを構え、再び砲撃準備に入る。

「私だって…やってやる！ランスターの、兄さんの名にかけて！！」

「ヤレヤレ、アレに勝てってか？冗談キツイが…諦める訳にゃあい

かねえぜ！！」

ティアナもヴァイスも、自分の相棒を構えて雄叫びを上げる。

『ええか！？みんな！ウチの世界のとある先生は言った。』

はやては地球の有名な先生の言葉を口にする。

『「諦めたら、そこで試合終了だ」と！！みんな、気張って行くでぇ！！』

『オオオオオオ！！！！！』

はやての鼓舞によって全局員の士気が高まり、諦めかけていた局員も立ち上がる。

「そうだ…こんな所で負けるわけにはいかない！」

「騎士が、こんな簡単に諦めちゃ、ダメだ！」

「シグナムの分まで…アタシは戦ってやる！！」

「ボクたちも負けてられないね、ジーク君！」

「キュイ！！」

六課フォワード陣とヴィータにマミは、自らを奮い立たせて立ち上がる。その瞳には、闘志という名の焔が燃え盛っていた。

『ほう…まだ立ち上がるか。その根性は賞賛に値する。だが！雑魚が幾ら立ち上がろうと、我には勝てぬ！！』

「黙れッ！！」

ヴィータはデスティンガーの言葉を完全否定し、こう続ける。

「アタシは機動六課所属、スターズ分隊副隊長…鉄槌の騎士ヴィータ！！アタシのグラーフアイゼンに…」

グラーフアイゼンは再び巨大化、更にハンマーの片面に巨大なドリル、もう片面にはブースターが現れる。グラーフアイゼンが最終形態、

「ツェアシュテールングスフォルム」である。

「砕けねぇモンは無ぇんだァァァァ！！！！」

巨大なドリルを急速回転させ、ブースターを一気に最大まで噴かせて、メジャーリーガーのスイングスピードなんて目じゃない程の速さで、最強の一撃を見舞うべく振り下ろした。

「ツェアシュテールングスゥ…ハンマァァァァ！！」

ドリルがEシールドとぶつかり合い、周囲に衝撃波が広がる。

「砕け散れェェェエ！！」

『小癪なァ！！』

デスティンガーはショックカノンを発射し、グラーフアイゼンを攻撃する。

「うあっ！こんなモンで、やられるかァ！！」

ヴィータは連射される砲撃に、手の力を緩めずに必死に耐えようとする。掌が擦れ、皮が剥けて血が滲み出す。

だが、流石は帝国の最新鋭の機体。堅牢なグラーフアイゼンが悲鳴を上げ始めている。

「スバル、エリオ、キャロ！ヴィータ副隊長を援護するわよ！」
「おう！！」／
「「はい！！」」
スバルは突撃しつつリボルバーキャノンで、エリオも同様に衝撃波で攻撃し、キャロはヴォルテールの砲撃を放つ。
しかし、デスティンガーは更にEシールドの範囲を広げ、全て無効化してしまった。

「嘘！？さっきは効いたのに！」

ティアナは圧倒的に堅くなったシールドに驚く。

「まだだ、あっちも疲れてきてるはず…」
『フンッ！！』

デスティンガーの気合いによって、Eシールドの出力が最大まで上昇、グラーフアイゼンに巨大な亀裂が走った。

「くそっ…押し負ける…だと…！？」
『詰めが甘いぞ、小娘…』

荷電粒子砲にエネルギーが収束する。幾ら強固なグラーフアイゼンでも、ヴィータもろともやられてしまうだろう。

『死ねィ！！』

ー負けた。ヴィータがそう思ったとき、遠方より炎の雨が降り注いだ。ル・ルシエの里の召喚士達が、竜を引き連れて援軍に来たのだ。

「忌々しい化け物め！我らがアルザスをこれ以上破壊させんぞ！！」
「オオオオーッ！！」

竜に乗った召喚士達は、勇ましくデススティンガーに突撃する。

『竜…か。貴様等を滅ぼす理由は無いが、人間に荷担するのなら…』

デススティンガーはヴィータに撃つ予定だった荷電粒子砲を空に向ける。

『滅ぶが良い！！』

放たれた砲撃は竜の群れを焼き尽くし、召喚士の7割が命を落とした。だが、族長は辛うじて回避に成功した。

「な…なんという事だ…！」

族長は悪夢の如き光景に言葉を失い、呆然とする。族長はふと下を見ると、ヴォルテールに乗っているキャロを見つけた。

「あれは…キャロか！？」

族長は数年前、キャロを追放したことを今までずっと悔やんでいた。本当にキャロは追放すべき存在だったのか。なぜまだ幼きキャロが帰る家も無く、放浪の旅をしなければならなかったのか。キャロは自分の事を恨んでいるのではないか、等々。族長はキャロに合わせる顔が無いと感じていた。

「族長！！」

だがそんな考えをよそに、フリードリヒに乗ったキャロが自分から族長の所へやって来た。

「キャロ…」

「ご無沙汰しています、族長。」

「グルル…」

フリードリヒは族長を見て唸り声を上げながら睨み付ける。無理もない、フリードリヒにとっては自分の主人を追放した張本人なのだから。

「良いのよ、フリードリヒ。落ち着いて。」

「ギュイ…」

キャロはフリードリヒを宥め、改めて族長と向き合った。

「族長…」

「キャロ…あの時は、すまなかった…キャロの力に恐れたわしは…あれしか方法が見つからんかったのじゃ…」

許してくれ、と族長はキャロに頭を下げる。族長はこのくらいで許してもらえるとは思っていなかった。

「いいんです。頭を上げてください、族長。もう、許してますから。」

キャロの言葉に族長は顔を上げ、驚いたような顔をした。

「わしが…憎くないのか…？」

「そんなこと、一度も思ったことなんてありませんよ。そりゃあいきなり「里から出て行け」って言われたときはショックでしたけど、そのおかげで今の私が居るんですから。」

キャロは族長に向かって微笑んだ。キャロの言う通り、里を追放されなければフェイトに拾われることも、六課に入ることも無かっただろう。キャロは今の職場が楽しい。ならば、それで良いじゃないか、と。

（おお…なんと心優しい子じゃ…）

族長は微笑んだキャロの姿が女神に見えたという…

「族長、あのデスティンガーをどうにかしないと！」
「そうじゃな。共に戦ってくれるか、キャロ？」
「もちろんです！アルザスを壊させる訳にはいきませんから！」

キャロと族長は今一度デスティンガーに向き直り、残った召喚士たちを集める。

「ゆくぞ皆の者！」
「頑張りましょう、皆さん！！」
「「「オオーーっ！！」」」

士気を高め、デスティンガーに向かって滑空する。全ては故郷を守るために。

「拙いなぁ…相手はたった一機やのに、こうも苦戦するとは…」

東北の名監督ばりにぼやくのは、本作戦の指揮官のはやてだ。本局と地上本部の連合部隊での作戦だった本作戦。だが現実はまさかの大苦戦。局員もだんだんと勢いを欠いて来た。これがぼやかずにいられようか。

『ふむ、勢いが無くなって来たか…』

デスティンガーもそのことに気が付いた。

『興も冷めたわ…去ね。』

デスティンガーの魔力が急上昇し、更に局員は威圧される。

「くっ、アイツの魔力は底無しかいな!?」

『拙いです、はやてちゃん!』

最も遠くに陣取っているはやてやリィンにも感じ取れるほどの超高濃度の魔力。そんなものを放たれたら、前線メンバーは勿論、はやてにだって被害が及ぶだろう。

だが、ここで逃げるわけにはいかない。指揮官として、部下を置いて逃げるなど、優しいはやてにはできる筈も無いのだ。例え、相手が化け物であろうとも。

『はやて部隊長!』

「グリフィス君か!なんや!?」

司令室のグリフィスから通信が入った。

『作戦区域に転移反応！推定、オーバーSです！』
「なんやて！？まだ何か来るんか！？」

これ以上妙なものが来るのは、全力で勘弁してもらいたい。そう思ったはやてだった。

『これで…幕ぞ！』
「させない！！」

空から何者かの声が聞こえ、一筋の光線がデスティンガーの荷電粒子砲を貫き、破壊した。

『くっ、新手か！？』
「な、なんや！？」

二人が、いや、一人と一機か…が空を見上げると、そこに居たのは金髪のツインテールにプラグスーツのような黒いバリアジャケット、オッドアイの少女だった。
それを見たはやては驚いた。なぜならその少女は…

「ヴィヴィオ…！？ヴィヴィオなんか！？」
「はい！高町ヴィヴィオ、これより援護します！！」

聖王の力を持ったヴィヴィオだったのだ。

「ヴィヴィオ、そのカッコは…」
「説明は後です！今はアイツの撃破を！！」

そう言うとヴィヴィオは大型化したザビンガの背に乗り、デスティンガーに向かって滑空した。

「キャロさん！弾幕をお願いします！」
「うん！族長！」
「うむ！皆の者！！撃てい！！」

ヴィヴィオの背後から竜の放つ炎が降り注ぎ、突撃をサポートする。

「ザビンガ！武器を頂戴！」
『ＯＫ！　Ｗｉｎｇ　Ｓｒａｓｈｅｒ！』

ヴィヴィオの両手に、ザビンガの翼を型取った銀色の双剣が現れ、逆手に構える。

「やぁぁぁぁぁあ！！」

ヴィヴィオはザビンガのスピードを利用して威力を上乗せした斬撃で、デスティンガーの右の鋏脚を斬り落とした。

『ぐおおお！！』

今まで一度たりとも悲鳴を上げなかったデスティンガーが、初めて悲鳴を上げた。

「いまや！畳み掛けるでぇ！！」
「了解！クロスファイアー！…シュート！！」
「ディバイィィィン…バスタァァア！！」
「スタールメッサー！！」
「ヴォルテール！お願い！」
『ゴオオオオオ！！』

「行くよ！ジーク君！突撃ィ！！」
『キュイイ！！』
「ぶっ潰せ！アイゼン！！」

ヴィヴィオの作った隙を突いて、全局員が総攻撃をかける。その結果、エリオが最初に攻撃した側の鋏脚の破壊に成功した。

「これで、トドメ！プラズマスマッシャー！！」

稲妻を纏った砲撃がデススティンガーに直撃、他の攻撃の威力もあり、辺りが土煙に包まれた。

「これで倒せてなかったらウチ泣くで…」
「ホントッスね…」

土煙が晴れ、デススティンガーが姿を見せる。両の鋏脚は斬り落とされ、尾は千切れ、装甲は意味を成さない程に砕けている。頭部の装甲は完全に砕け、煌々と光る数個の目が剥き出しになっていた。どうやら限界が近いようだ。

『おのれェ…人間ごときが、ふざけた真似をォ！！』

デススティンガーの足元に巨大な魔法陣が現れ、デススティンガーの体が地面に沈んでいく。

「逃がすかよ！！」
「待ちや、ヴィータ！追わんでええ！」

追撃しようとしたヴィータを諫めるはやて。

『次会うときが…貴様らの最期の日だと思え！！』

そう言い残し、デススティンガーは姿を消した。

「良いのかよ、はやて。追わなくて？」

「こっちも疲弊しとるしな。それに、あの様子なら当分は仕掛けて来ぃへんやろ。」

次元航行艦に任せて破壊でもしてもらえばいい、ということだ。

なにはともあれ、こうして地獄の如き死闘は一先ず幕を閉じた。

～おまけ～

なのは

「あれ？今回はゾイド図鑑じゃないんですか？」

レイ

「ああ。次回からやっとニクシー基地攻略戦だからな。そこで、今回は特別企画だ。」

アーバイン

「題して、『パフェのその後』だ。」

フェイト

「…？パフェ？」

レイ

「ほら、なのはがバンに作ってくれた翠屋の特製パフェだよ。」

なのは
「ああ、そういえば！デススティンガーのおかげですっかり忘れてた！」

アーバイン
「で、どうなったかというと…作者、宜しく。」

作者
「はい。フツーに傷みました…」

なのフェイ
「「…え？」」

作者
「なのはと同じく、食べるの忘れてたんだってさ…」

アーバイン
「とゆー訳で、折角のパフェをパーにしたフトドキ者を連行してきた。」

バン（縄でグルグル巻き）
「ゴメンなのは！ワザとじゃないんだ！」

フェイト（怒）
「折角なのはが作ってくれたパフェを…」

バン
「あれ？フェイト？何でバルディッシュを起動させてんの？待って

！待ってくださいフェイトさん！！アッーーー！」

なのは

「にゃはは…フェイトちゃん、ほどほどにね～…」

第二十話　炎上、竜の里（後編）（後書き）

次回、ついにニクシー基地攻略戦開始！
お楽しみに！
では。

第二十一話　デストロイヤー兵団（前書き）

やっと出来ました。
第二十一話です。
どうぞ。

第二十一話　デストロイヤー兵団

時空管理局本局。デススティンガーとの死闘を終えた機動六課メンバー達は、聖王の姿で現れたヴィヴィオとザビンガに事情を聞いていた。

「成る程なぁ…つまり夢の中にそこのザビンガ君が出てきて、力を貸す言うたらヴィータが持って帰ってきたロストロギアのとこに連れてかれて、そこで聖王の力を復活させた…と。」

「はい…」

ヴィヴィオはやや項垂れて答える。はやてが自分を怒っていると感じたのだろう。

「ええんよ、ヴィヴィオ。ウチは別に怒っとる訳や無いんやから。」

落ち込むヴィヴィオを元気付けようとするはやて。

「それにしてもザビンガさん、あなたは一体何者なんです?」

リィンが人形サイズに戻ったザビンガに問う。

「僕はかつて、聖王に仕えていた三匹の虎の一体、ワイツタイガーの一部です。」

「三匹の…虎?ワイツ…タイガー?」

聞き慣れない単語に頭上に?マークを浮かべるはやてとリィン。

「はい。かつて聖王陛下には、その御身を賊からお守りする守護獣

的な存在がありました。それが、“白き虎”ワイツタイガー、“青き虎”レイズタイガー、“黒き虎”ブラストルタイガー。それを纏めて、三匹の虎といいます。」
「そのまんまやな…」
「ちょっと待ってください。あなたさっき、“一部”って言ってたですよね？」

リィンはふと疑問に思い、ザビンガに問う。

「はい。ワイツタイガーは三匹の中でも最も忠実かつ最強の存在。故に、緊急時のみ僕と合体し、全力で御身をお守りするということでした。」
「なるほどな。ちゅー事はあのロストロギアは…」
「ワイツタイガーのゾイドコア。つまり心臓部です。」

その言葉に驚くはやてとリィン。成る程、道理で膨大な魔力が込められている訳だ。

『はやてさん！お取り込み中スイマセン！』
「なんやマミ。どないしたん？」

マミからの通信だ。けっこう慌てている様子だ。

『言い忘れてました。私の居た世界に、なのはとフェイトが来てました！』
「な、何やてぇーーーー！？」

その頃のなのはとフェイト。ロブ基地にやって来た共和国軍首都

直属の大部隊の機体を、レイやバン達と一緒に観ていた。

「しっかし…共和国軍（ウチ）の開発部は、なんつーモンを作っちまうんだろうね？」

レイが見ていたのは、本土から輸送されてきた機体のひとつ、ウルトラザウルス・ザ・デストロイヤーである。

ウルトラザウルスは、全ゾイド中トップクラスの巨大な身体に、それに見合った火力に母艦としての指揮能力を持つ、首都にも一機しか無い機体だ。

だがそれは通常機のスペック。このデストロイヤーには、史上最大の超巨大砲「１２００ｍｍウルトラキャノン」が搭載されている。ウルトラの胴体よりも長い砲身、１２００ｍｍという常識外れの超巨大な砲門、最大射程１００ｋｍという大砲には有り得ない長射程。更にメガトン級の破壊力を持った特別製のデストロイ弾。

まさしく、共和国軍の決戦兵器だ。

「こんな大砲、いったいどれ位の威力があるんですか？」

なのはが問う。

「カタログスペック上だと…一撃で町ひとつがぶっ飛ぶぐらいの破壊力らしいぜ。」

「ええ！？そんなの撃って大丈夫なんですか！？」

「ま、市街地には撃たねぇだろうから、被害被（こうむ）るのは軍人ぐらいだろうな。」

「はぁ…」

そうあってほしい、と思うなのはであった。

「ん？なんか廊下が騒がしいな。」

なにやら廊下から騒ぎ声が聞こえる。主に男どもの喜びの声だ。

Ｉｎ廊下。

「みなさ～ん、ご声援ありがとうございま～す（ハート）」

「ウォォォオ！！ブルーガー曹長サイコー！！」

廊下を歩きつつ声援を浴びるのは、共和国海軍第３特殊潜航艦隊所属のマリン・ブルーガー曹長だ。基地内だろうが機体コックピット内だろうが、常に白い水着を着ており、共和国水着美女コンテストでも３年連続グランプリに輝いている程の美人だ。

彼女はロブ基地には滅多に来ないため、男性兵士達は大喜びだ。

「何だ何だ？何の騒ぎだ？」

「ったく、喧(やかま)しくてオーガの整備も出来やしねぇ。」

余りにも五月蝿(うるさ)かったらしく、ボーグマン大佐とアーバインが様子を見にやって来た。

「あら、大佐にアーバイン。お久し振りです。」

「お久し振りじゃないだろ。まだそんなカッコしてんのか、マリン曹長。」

大佐が尤もなツッコミを入れる。確かに普通、基地内で水着は無いだろう。

「良いじゃないですか、大佐。それに、大佐も嫌いじゃないでしょ？こーいうの。」
「いや、そういう問題じゃ…」
と言いつつ、満更でもなさそうだ。
（やれやれ、大丈夫かよ…）
アーバインは呆れてその様子を見ていた。

その頃バンは、本土から輸送されてきたブレードライガー用の追加パーツの装備作業を行っていた。
「おおっ、これがアタックブースターか！」
バンは新しい玩具を貰った子供のように目を輝かせる。
アタックブースター。それはブレードライガーに不足していた射撃能力の強化に加え、同時に搭載されたブースターにより更なる格闘能力と最高速度の強化を図る、共和国軍開発部の技術の結晶だ。
これにより、ライガーの最高速度は３３０ｋｍ／ｈにも達するのだ。
「これがあれば、レイヴンにだって…」
勝てるだろう。そう考えたバンだが、脳裏にマミの姿が浮かび、真剣な顔つきになる。
（いや、コイツはレイヴンに勝つために作られたんじゃない。この戦いを終わらせるために在るんだ！）

もう、マミのような目に合う人間を増やしたくない。バンあの日から、その事ばかり考えていた。おかげでパフェが駄目になってしまったが、そんなことはどうでもいい。パフェは作り直せるが、人の命はそれっきりなのだから。

「よう、バン！」

格納庫入り口から、やや太い声がバンを呼ぶ。

「ハーマン大尉！お久し振りです！」

男の名はロブ・ハーマン大尉。独立第１１機甲大隊の隊長を勤める程のエース級パイロットだ。

「大尉も来てたんスね。」
「当たり前だ。ニクシー基地を陥落(おと)そうってのに、俺が来ないわけないだろ？」
「確かに。」

二人は雑談し、ハハハと笑う。ふと、ハーマンがライガーを見る。

「おっ、似合ってんじゃん。アタックブースター・ユニット。」
「でしょう？なんたって、俺の最高の相棒ッスからね。」
「成る程。」

と、そんな話をしていると、基地内に放送が流れる。

『これより、ブリーフィングを行う。至急ブリーフィングルームへ集合せよ。』
「おっ、作戦会議か。行くぞ、バン。」

「了解ッス！」

二人は駆け足でブリーフィングルームへ向かっていった。

ブリーフィングルーム。

「よし、皆揃ってるな。」

ボーグマン大佐は主要メンバーが揃っている事を確認すると、作戦の説明に入る。

内容はこうだ。まずウルトラキャノンを使うため、最大射程の１００ｋｍまで接近する。そこにウルトラキャノンを叩き込み、バン達の高機動部隊が防御網を粉砕、レイ達の強襲部隊が一気に基地まで殴り込んで制圧する。という寸法だ。

「と、いう訳だ。異議のある奴は居るか？」『……』

全員、沈黙をもって作戦内容に賛成した。

「よし、作戦開始は明日０９１５。今日は各自休息を取り、作戦に備えろ。以上だ。」

ブリーフィングが終了し、全員、自分たちの部屋へ戻っていく。

その全ての瞳には、闘志が宿っていた。

「フェイトちゃん、マミちゃんの為にも、絶対勝とうね。」

「うん。でもなのは、無茶はしないでね。」

「にゃはは…頑張る…」

とは言っても、なのはの事だ。また何かしらの無茶をやるに違いない。１０年来の付き合いであるフェイトは、なんとなくそう感じた。

ニクシー基地。その格納庫にはシュバルツとキルシェが居た。

「ハルトリーゲル大尉、新型の開発状況はどうなっている？」

シュバルツの目の前にあるのは、黒い機体色を持つライオン型と恐竜型の新型ゾイドである。

両機はしばらく前からここ、ニクシー基地で開発されていた。

「はい。機体はほぼ完成、後は装甲と武装のみです。」

「そうか。早く完成してほしいものだ。」

これさえあれば、不利な現状を打開できるかもしれない。シュバルツはこの機体にとても期待しているのだ。機体なだけに。ハイ、スイマセン。

「もうパイロットは決まっているのですか？」

「ああ。たしか…」

「俺とデルダロス大佐だ。」

二人の後ろから声がし、振り向く。そこに居たのは金髪ツンツン頭の青年、ヴォルフ・プロイツェン大佐だ。名前から分かるように、摂政ギュンター・プロイツェンの息子である。

「先の戦い…悲惨だったらしいな。」
「はっ…お恥ずかしい限りです。」

戦場の指揮官だったシュバルツは頭を深々と下げる。それを見たヴォルフは首を振り、シュバルツに向かう。

「いや、デスティンガーが強すぎた…そしてそれを制御出来なかった。それが原因だ。お前の所為じゃ無ぇさ。」

そう言うとヴォルフは新型の方を見る。

「シュバルツ中佐。ハルトリーゲル大尉。自分の相棒の準備をしておけ。共和国が仕掛けて来るなら、今この時の筈だ。」
「「はっ！」」

二人は敬礼し、自分たちの機体の下へ向かった。
入れ替わりに、栗色の髪の女性が入ってきた。

「ここにいたのね、ヴォルフ。」
「アンナか。捜させちまったか？」

ヴォルフと呼び捨てで話すこの女性はアンナ・ターレス少尉。ヴォルフとは幼なじみで、互いに信頼しあっている。

「ううん、大丈夫。そんな大した用事じゃないから。」
「そうか。」
「楽しみなんでしょ？完成するのが。」

アンナも新型を見て言う。

「まあな。コイツを駆って、父上の夢を実現させたくてな。」

ヴォルフの父親、プロイツェンの夢。それは壮大かつ大胆な物だ。ヴォルフは尊敬するプロイツェンのため、目覚ましい活躍を続けてきた。

「ヴォルフなら、きっと出来るよ。」

「ありがとな。アンナ。」

そう言ってヴォルフはアンナに微笑みかけた。

翌日、作戦開始直前。ロブ基地格納庫には出撃の最終準備をするレイ達の姿があった。ハーマン大尉はウルトラザウルス頭部のメインコクピットに乗り込み、出撃の合図を待っていた。

ウルトラザウルス両脇には弾薬やアンカーを装備したゴジュラスが一機ずつ居る。ウルトラキャノンの反動を抑えるためと、ウルトラザウルスの支援をするための機体だ。

「なのは、フェイト。」

ウルトラザウルスの背中で待機しているなのはとフェイトに、レイが話し掛ける。

「今回は敵の懐に飛び込む危険な大博打だ。ヤバくなったらさっさと…」

「「イヤです。」」

レイの言葉を口を揃えて否定する二人。

「私たちは、あなた達に力を貸すと決めたんです！」
「ですから、今更逃げる算段なんてしたくありません！」
「なのは…フェイト…」
「それに、逃げろなんて、レイさんらしくないですよ。」

レイは二人の言葉に胸を打たれた。もし自分が逃げの策を考えておけなどと言われたら、やはりそれに従うわけにはいかないだろう。

「…そうだな。よっしゃ、気張っていくぞ！！」
「「はい！」」
（ヤバくなったら逃げろなんて…確かに、俺らしくもねぇな。）

自分自身の迷いも振り払い、レイは今一度気を引き締めた。
そこに、大佐から全機に通信が入った。

『作戦開始２０秒前だ。準備は良いな！？』
『はい！！』
『よし！カウント始め！』

大佐の指示でムンベイがカウントを始める。

『五秒前！四、三、二、一…ゼロ！！』
『よし！作戦開始！！』

大佐が叫び、各機次々と出撃していく。

「バン・フライハイト！ブレードライガーＡＢ！」
「レイ・グレック！シールドライガーＤＣＳ－Ｊ！」
「アーバイン・キャバリエーレ、ゴジュラス・ジ・オーガ。」

「ロブ・ハーマン！ウルトラザウルス・ザ・デストロイヤー！」
「アーサー・ボーグマン！ブレードライガー！」
「高町なのは！」
「フェイト・T・ハラオウン！」

『出撃！！』

今ここに、ニクシー基地攻略特別隊
「デストロイヤー兵団」による作戦が開始された。

～おまけ～

なのは
「レイさん、何やってるんですか？」

レイ
「ああ。ちょっと遺書をな。」

なのは
「ええ！？レイさん！何があったんですか！？早まっちゃダメですよ！」

レイ
「…いや、お前が考えてるのは絶対違うからな。軍人は出撃前に書く決まりになってんの！」

なのは
「あ、そうだったんですか…良かった～」

レイ
「ったく…よし書けた。」

なのは
「何て書いたんですか？」

レイ
「馬鹿。他人のプライバシーを侵害する気かよ。」

なのは
「それもそうですね。…あれ？」

レイ
「？どした？」

なのは
「あれって…アーバインさんの？」
チャラリラッチャチャ～。なのははアーバインの遺書を手に入れた！

レイ
「ほったらかしかよ。」

なのは
「アーバインさん居ないみたいですし…こっそり見ちゃいません？」

レイ
「う〝～ん…アーバインの遺書ねぇ…興味あるなぁ。」

なのは

「でしょ？」

レイよ。プライバシーはどうした。

レイ

「何々…『俺が死んだらレベッカの事を…』」

？？？

「…おいこら。」

なのレイ

「「ギクッ！！」」

アーバイン（アオスジだらけ）

「てめぇら何勝手に読んでやがる…」

なのレイ（冷や汗まみれ）

「「あ…あはは…ごめんなさ～い！！」」

アーバイン

「あ、てめえら！！待ちやがれ！！」

鬼ごっこは暫く続いたそうな…

第二十一話　デストロイヤー兵団（後書き）

この話を投稿した日、地震がありました。自分は飼ってるインコが騒いでるのを聞いて起きたところ、その直後に揺れが来ました。恐るべし、インコ。

では。

第二十二話　ニクシー基地攻防戦（前編）（前書き）

モン〇ン3面白いです！

やっと出来ました。二十二話です。

どうぞ。

第二十二話　ニクシー基地攻防戦　（前編）

ニクシー基地では共和国の進軍を確認し、急ピッチで出撃準備が進められていた。

『第二、第三大隊は直ちに出撃準備に入れ！繰り返す、第二、第三大隊は…』

オペレーターのアナウンスが基地内にこだまし、兵士はあちらこちらへと走っている。

「矢張り来たか…アンナ。お前は死なない程度にな。」
「うん。頑張る。」

アンナは改造型ジェノブレイカーの「プロトブレイカー」に乗り込み、胸部コクピットハッチを閉める。

「アンナ・ターレス、プロトブレイカー。出ます！」

プロトブレイカーは火花を散らしながらカタパルトを疾走し、勢い良く射出された。

「前方２００ｋｍに帝国の部隊を確認。数、およそ五千！」
「ハーマン大尉！最大戦速にて進軍！」
「了解！機関、最大戦速！」

ウルトラザウルス頭部コクピットに乗るハーマン大尉は機体を最

大まで加速させる。といっても元が遅い上に、ウルトラキャノンを積んでる所為で５０ｋｍ／ｈ程度しか出ないが…

「大尉！後どんくらいかかるンスか！？」
「ああ、あっちは守備隊だからゆっくりだしな…だいたい一時間ぐらいってところか。」
「マジすか…」

ハーマン大尉の予想所要時間を聞いたバンは、テンションが下がった。一時間ゆっくりと進軍するのは流石に退屈してしまう。

「じゃあなのはとフェイトは、ウルトラの背中に乗っててくれ。」
「はい。」
「分かりました。」

大佐はなのはとフェイトの飛行中の魔力消費を抑えるため、ウルトラザウルスの背中に二人を乗せる。

「きゃあっ！？」
「し、振動が…わっ！」

背中に乗った瞬間、その巨体と重量、鈍足から来る強烈な振動に足元がふらつく二人。

「大丈夫か～？」
「は、は～い…」
「なんとか…」

頑張って踏ん張ろうとする二人だったが、やっぱりフラつくので足元をバインドで固定する事にした。

そうこうしていると、敵が牽制のためかミサイルを放ってきた。

「敵部隊より長距離ミサイルの発射を確認！数、五十！」

「一番、二番対空砲、てぇーっ！！」

ウルトラザウルスの対空砲が火を吹きミサイルを迎撃するが、墜とし損ねた数発がウルトラザウルスに迫る。

「アクセルシューター！」

「フォトンランサー！」

だがなのはとフェイトの射撃魔法によって、一つ残らず迎撃された。

「二人とも、よくやった！」

「ありがとうございます！」

レイがなのはとフェイトを褒め、礼を言う。

直後に大佐へ通信を繋いだ。

「大佐！敵部隊にアイアンコングが数十機は居ます！先に叩いた方が良いんじゃないですか！？」

レイは大佐に作戦を提案する。

レイの考えは当たっていた。今の長距離ミサイルはアイアンコングに搭載されている物だ。２００ｋｍ先から攻撃してきた事がそれを肯定している。

「よし、バン！フェイト！行ってこい！」

「了解ッス！」

「了解！」

バンはブレードライガーの追加ブースターを噴かし、フェイトはソニックムーブで超高速移動する。

「バルディッシュ、ハーケンフォーム！」

『Ｈａｋｅｎ　ｆｏｒｍ』

バルディッシュは斧の部分を変形し、魔力刃を展開して鎌のような形状になる。

「ハーケンセイバー！」

『Ｈａｋｅｎ　Ｓａｂｅｒ』

フェイトはバルディッシュを振りかぶり、魔力刃をブーメランの様に発射する。

刃は前線のアイアンコングの右肩に命中し、右腕の破壊に成功した。

帝国は反撃とばかりにレッドホーンやブラックライモスの小型ミサイルを一斉発射、フェイトに襲いかかった。

「プラズマランサー！」

『Ｐｌａｓｍａ　Ｌａｎｃｅｒ』

フェイトは雷の魔力弾を大量に生成、ミサイルの雨に向けて発射した。

それらはミサイルの全弾迎撃に成功した。

「バンさん、今です！」

「応！突っ込め！ライガァァァア！！」

ブレードライガーはアタックブースターによって爆発的に加速、その勢いのまま敵陣にブレードで斬り込む。
結果、アイアンコング数機、セイバータイガー十数機を一太刀の下に斬り伏せた。

「よし、二人とも戻ってこい！」
「はい！バルディッシュ！」
『Ｂｕｌｉｚ　Ａｃｔｉｏｎ』
「了解ッス！ライガー！」
『ゴォォオ！』

フェイトとバンは全力ではないが加速して後退する。数機のセイバータイガーがそれを追撃し、ウルトラザウルスとの距離が縮まっていく。
ウルトラザウルスとの距離がおよそ２０キロ程になった頃、ウルトラの背中で桜色の魔力が収束し始めた。
そして距離が3キロ程になったとき、光が放たれる。

『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ』
「ディバィィィイン…バスタァァァア！」

なのはの叫びと共に放たれた桜色の砲撃は、セイバータイガーの脚を中心に命中し、機能を停止させた。
だが帝国軍はこれ以上基地に近付けまいと、前進してくる。空には百機ほどのレドラーがウルトラザウルスに向かい、音速で接近してくる。レドラーは一分ほどで共和国軍本隊に接触、ウルトラザウルスを仕留めようとブレードを展開して突撃してきた。

「対空ミサイル、一番から三番、撃てェ！」

ウルトラザウルスは負けじと対空ミサイルで応戦するが、墜とせたのは四十機。残りがウルトラの首をはねようと向かってくる。

『Ｓｔａｒ　Ｌｉｇｈｔ　Ｂｒａｋｅｒ』

「スターライトォ…ブレイカァァァア！！」

「撃ち抜け、オーガ！バスターキャノン！！」

だが、それは出来なかった。なのはとアーバインの放った先程より強力かつ極太の砲撃がレドラーの群れを一撃で蹴散らしたからだ。

「くっ…！これ以上共和国軍を基地に近付けるな！全機、前進！」

帝国軍先行部隊の司令官が焦った声を上げながら、ウルトラザウルスに向けて前進の指示を出す。だが、これも裏目に出てしまう。

『敵部隊、射程圏内に到達！』

「ウルトラキャノン、発射準備開始！」

『了解！ウルトラキャノン、準備開始！』

二機のゴジュラスがウルトラザウルスの後ろ両脚にしがみつき、地面にアンカーを突き刺す。

『目標との相対距離、およそ９０ｋｍ！仰角、誤差修正！』

『ターゲット、ロックオン完了！』

レーダー係と砲座手が敵部隊をロックオンする。

「よし！１２００ｍｍウルトラキャノン、発射！」

『了解！ウルトラキャノン、発射！』

そして、巨大な砲身が起動し、莫大な熱量を伴った必殺の砲弾が轟音と共に遂に放たれた。
発射時の反動は凄まじく、ウルトラザウルスを支えていたゴジュラスすらも吹き飛びそうになった程だ。
砲弾は弧を描きながら飛んでいき、敵部隊のほぼ真ん中に着弾した。その瞬間、とんでもない熱量を孕んだ超巨大な炎をドームが発生、五千機の帝国軍が飲み込まれた。

「うおおっ！？ここまで衝撃が伝わりやがる！」

ウルトラザウルスの前方に居たレイにも響くほどの衝撃と爆音。
その威力は推して知るべし、である。
しばらくして、着弾地点が視認できるほどに土煙が晴れた。そこにあったのは巨大なクレーター。五千機の部隊が殆ど跡形もなく消し飛んでいた。

「す…凄い…」
「ミッドじゃ、絶対に使えないわ…」

その圧倒的破壊力に口を開けて驚くなのはとフェイト。
ひとまず、ウルトラキャノンの威力を帝国に知らしめ、敵部隊の一つの壊滅に成功した。だが作戦はこれからだ。ウルトラザウルスが撃破されないように進軍し、基地を落とさなければならない。
ウルトラザウルスはウルトラキャノンの冷却を完了させ、再び進軍を始めた。周りを守る、一万の軍勢と共に。

その頃ニクシー基地では、ウルトラキャノンの威力を見た佐官たちによる会議が行われていた。その中には、シュバルツやヴォルフ

の姿もあった。

「一体どうするのだ！あんなものがここに来て見ろ、一撃でニクシー基地は消し炭だ！」

ややメタボ気味の初老の佐官が焦りながら叫ぶ。

「まぁ落ち着け。あんなデカブツ、ライトニングサイクスを十機も送ればどうと言うことは無い。」

「だが、共和国（むこう）にも腕利きの魔導士が居ると言うぞ。」

「そ、そうだ！だから一刻も早く、ここを放棄すべきだ！」

他の佐官も自分の意見を言い合い、話し合いは一向に纏まらない。だが、シュバルツは冷静に戦況を見極め、発言する。

「まだ撤退には早いでしょう。少しでも敵の戦力を削ぐ事に専念し、その後に撤退…という策は如何でしょうか。」

他の佐官たちはひとまずはシュバルツの意見に賛成し、ライトニングサイクス五十機、レブラプター二百機、ジェノザウラー三十機、ジェノブレイカー四機を投入する事になった。勿論、レイヴンも含まれている。

既に前線に居るメンバーにも、その旨は伝えられた。

『…という事だ。守りを中心に、隙あらば敵を倒せ。いいな？』

「分かったわ、ヴォルフ。それで、バーサークフューラーとライガーゼロはまだ出られないの？」

『コンバットシステムが不完全でな。もうしばらくは無理だ。』
「分かったわ。もう少し頑張ってみる。」
『スマンな。なるべく急がせる。』

ここは帝国軍前線キャンプ。ウルトラキャノンによって撃破された部隊の後方の隊に、アンナは配属されていた。
通信を切り、プロトブレイカーを下りる。既に日は沈んでおり、大小二つの月と数多の星が夜空を照らしていた。

「ターレス少尉、コーヒーは要るか？」

アンナに話しかけるのは、両手にコーヒーを持ったキルシェだ。煎れたてらしく、湯気が立っている。

「あ、ハルトリーゲル大尉。すいません。」
「なに、気にするな。」

コーヒーを手に取り、飲み始める。だが予想よりも熱かったらしく、舌を出して熱がる。

「しかし共和国があんな物を持ち出してくるとはな…」
「ええ…。アレがもし、ニクシー基地に撃ち込まれたりしたら…」

少しだけ弱音を吐くアンナ。それを見たキルシェは、そっと頬に手を当ててアンナの顔をこちらに向けさせる。

「そうさせないのが、私達の仕事だ。ここで弱気になっていたら、勝てる物も勝てない。」
「ハルトリーゲル大尉…」
「だから、もっと前向きに行け、ターレス少尉。」

キルシェの凛とした顔が微笑み、アンナは顔をほんの少し赤らめた。同時にアンナの心に勇気が宿った。

「大尉、私、自分がどれだけ出来るか分かりませんが…やります！」

「よし、その意気だ。」

アンナはキルシェに礼を言うと立ち上がり、テントの中に入った。

「さて、私ももう一頑張りするか。」

そう言うとキルシェは自分のレブラプターの整備に向かった。

一方、共和国軍も野営を張り、休息に入っていた。ウルトラザウルスも長い首を地に降ろし、整備を受けている。そのウルトラの背中の甲板に、なのはとフェイトが居た。バリアジャケットを解き、管理局の制服を着ている。

「こんなとこに居たのか。」

突然聞こえた声に反応し、なのはとフェイトは後ろを見る。そこにはコーヒーを三つ持ったレイが立っていた。

「レイさん。」

「よっ。隣、良いかい？」

「あ…はい。」

レイはなのはの隣に腰掛け、

「冷えるだろ？」と言って二人にコーヒーを渡した。

「わ…美味しい！」

「だろ？ムンベイのスペシャルブレンドだからな。」

三人は美味しいコーヒーを堪能し、甲板に寝転がった。

「わぁ…すごい綺麗な星空！」

なのはは満天の星空を見て感動する。ここまで綺麗な夜空は見たことがなかった。

「なのは達の世界は、星が見えねぇのか？」

「見えないことは無いけど…ここまでハッキリとは見えませんよ。場所にもよりますけど。」

「なるほど…世界が違うだけで、空も違うんだな。」

レイにとっては当たり前の夜空だが、なのはとフェイトにとっては感動モノなのだ。レイはこの夜空の有り難さを、改めて感じた。

「レイさん、昼に撃ったウルトラキャノン…まだ使うんですか？」

「…そりゃあな。場合によっちゃあ、ニクシー基地にも叩き込むかもな。」

レイの言葉に反応し、なのはとフェイトは体を起こす。

「そんな…！あんなの基地に撃ったら…！！」

「なんとか撃たなくて済む方法は無いんですか！？」

レイは寝転がったまま、目線だけをなのはとフェイトに合わせて

答える。

「さぁな。それを決めんのは俺じゃねぇ。司令官の大佐だ。」

なのはとフェイトは口を閉じ、数秒経ってから再び口を開く。

「…じゃあ…レイさんは、どう思ってるんですか？」

「…そりゃあ、基地には撃たない方向で行きたいけどな。今、この場で撃たないとは言い切れねぇ。」

ーそれが戦争ってモンだ、と言ってレイは立ち上がり、出入口へ歩き出す。

「俺はライガーの整備してから寝るけどよ、なのはとフェイトは早めに休んどけよ。」

ーお前らは、そのまんま体が資本なんだからよ。と付け加えて、レイは甲板を降りる。

なのはとフェイトはしばらく星空を見ていた。

第二十三話　ニクシー基地攻防戦（中編）（前書き）

夏休みももう少し…そして前期期末テストか…さて、どうしたもんか…な感じのムーンアローです。
第二十三話、どうぞ。

第二十三話　ニクシー基地攻防戦（中編）

ニクシー基地攻略作戦二日目。太陽が眩しく照りつけ、生き物たちが活動し始める時間帯だ。

「起床時間ですよ～！起きてくださ～い！」

大きな鉄製の中華鍋をおたまで叩きながら、テントの近くを歩き回るムンベイ。シンプルな起こし方だがその威力は大きく、兵士たちがゾロゾロとテントから出て来る。

「ふぁ～あ、よく寝た。」

ユーノも同様にテントから這い出て、メガネを掛けて欠伸をした。

「「……」」

「？どうしたの、なのは、フェイト？」

なのはとフェイトはユーノを見て固まった。

「えっと…ユーノ君、いつ来たの？」

「いやいや！最初からウルトラザウルスに乗ってたよ！作者が書いてないだけで！！」

そうなのだ。ユーノは最初からウルトラザウルスのクルーとして搭乗していたのだ。ユーノの言うとおり、自分が書き忘れ…もとい、書いてないだけで。

「おい！今、書き忘れてたって言いかけただろ！」

気のせいです。…たぶん。

戦場での朝食は、缶詰めや携帯食料など、基本的に軽い。理由として、直ぐにでも出撃出来るようにするため。そして一万を超える兵士たちのために、料理を作る時間も人員も居ないからだ。

「レイさ～ん、お水無いですか？」
「ああ、それならそこの川に腐るほどあるぞ～。ろ過して飲んでくれ。」

と、なのはに簡易式ろ過装置を手渡す。だが装置と言っても、砂や土などを層にして作った代物だ。
なのはとフェイトはそれを持って川辺へと向かい、ろ過して綺麗になった水を飲む。

「ふぅ、生き返った～。」
「水も現地調達なんですか？レイさん。」
「基本はな。まぁ、砂漠地帯での戦闘じゃ、そうはいかねぇけどな。」

あ、俺にもくれ、と付け加え、レイも水を一気に飲み干した。共和国軍の携帯食料はカロリー〇イトに近く、それ故に喉が渇く。缶詰めもあるのだが、基本的に塩っぽいのでやっぱり水は要る。

『まもなく、進軍を開始する。各員、配置に就け！』

大佐によって、作戦開始を呼びかける放送が入る。

「お、もうそんな時間か。行くぜ、なのは、フェイト！」
「「はい！」」

なのはとフェイトはでウルトラザウルスに、レイはシールドライガーＤＣＳ－Ｊに向かって駆け出した。

『偵察機
「ジェミニィ」より、敵部隊の情報を取得！モニターに出します！』

偵察機タイプのプテラス、「プテラス・ジェミニィ」から受信した情報をモニターに映す。
モニターには簡単な戦場の地図が表示され、敵部隊の位置を示した。
敵部隊は広範囲に広がり一個から三個大隊で構成され、それが十数部隊あった。

「なるほど…ウルトラキャノン対策を立ててきたか。」

ウルトラキャノンの弱点。それは急造かつ巨大な為に弾数がかなり少ないこと、高い破壊力故に至近距離では撃てないこと、以上の二点から敵が纏まっていなかったり高機動隊だったりすると下手に撃てないのた。

「クレイジー０１より各機へ。ウルトラキャノンは使用せず、その他主砲、副砲と護衛部隊で応戦せよ！」
『了解！』

護衛部隊がウルトラを中心に展開し、帝国の攻撃に備える。上空ではレーダーを搭載したプテラスが帝国の動きをチェックする。

数分後、帝国の第一波がウルトラを目指して突撃してきた。

「第一波、来ます！ライトニングサイクスが五機、セイバータイガーＡＴ（アタックタイプ）百機が先行しています！」

「よし！とっとと片付けんぞ！！支援部隊、構え！」

アーバインの号令によって数百機のカノントータスが砲撃準備に入る。アーバインのジ・オーガも同様にエネルギーを収束させる。

『全機、準備完了！』

「よし、撃てェ！！」

その瞬間、数百の砲撃がライトニングサイクスに降り注いだ。大量の砲撃の前に逃げ場を失ったサイクスは、持ち前の機動力を生かせぬまま撃破されていく。サイクスの後ろから突撃してきたセイバータイガーも砲撃に巻き込まれ、半分が沈黙した。だが砲撃の雨をかわした残りの五十機がなおも突撃してくる。

「ライガー小隊！ウルフ中隊！フェイト！応戦するぞ！！」

ボーグマン大佐が十数機のシールドライガーとコマンドウルフ、フェイトを引き連れ、残りを撃破しに向かう。

「一刀・両断！！オォォォォォオ！！」

大佐はブレードを展開し、ブースト全開でセイバータイガーの群れに突進する。ブレードはセイバータイガー十数機のの体を紙のように斬り裂いた。

「バルディッシュ、サードフォーム！」

『Ｙｅｓ　ｓｉｒ！　Ｚａｍｂｅｒ　ｆｏｒｍ！』

バルディッシュはカートリッジを一発消費、自らの姿を雷の大剣（俗に言う斬馬刀型）へと変えた。

「ハァァァァア！！」

フェイトはセイバータイガーの群に突っ込み、巧みにバルディッシュ・ザンバーを操ってセイバータイガーの脚や武器を斬り落としていった。ザンバーを使用したフェイトは、スピードに加えて一撃の威力が強力になる。つまり、ほぼ無双状態である。

「チェーンバインド！」

ユーノが拘束魔法、チェーンバインドでセイバータイガーの動きを止め、更にライガーやウルフ達がセイバータイガーを片付けていき、残るは遅れてやってきたレブラプター数十機の群れだ。

「ウルトラザウルス、対地砲撃、用意！」

「レイジングハート！」

『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ．　Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ．』

「バルディッシュ！」

『Ｙｅｓ　ｓｉｒ．　Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ　Ｐｈａｌａｎｘ　ｓｈｉｆｔ．』

ウルトラザウルスは機体前方に装備した八連装ミサイルポッドや対人用バルカン砲で牽制、なのははディバインバスター、フェイトはフォトンランサー・ファランクスシフトのチャージを始める。

ウルトラはレブラプターを数十機片付け、なのはとフェイトに指示を送る。

『お二方、撃破をお願いします！』
「了解です！ディバイィィン…」
「フォトンランサー！」

レイジングハートの先端に魔力が収束し、フェイトの周りには雷を帯びた無数の魔力弾が発生する。

「バスタァァァア！！」
「ファイア！！」

二人の魔法が放たれた。ディバインバスターはレブラプターの群れを飲み込んでいき、フォトンランサーはなのはが撃ちもらした残りを捉え、一掃した。

『帝国軍第一波、全滅！続いておよそ三分後、第二波及び第三波、来ます！』

第二波はカブトムシ型のサイカーチス。低空飛行による集団高速戦闘が売りのゾイドだ。それが二百機の部隊。第三波はブースターとビームキャノンが一体化した、「ブースターキャノン」を両翼に搭載したレドラーBC（ブースターキャノン）が八十機、通常のレドラーが百二十機の部隊だ。

「低空と高高度のサンドイッチか…厄介な組み合わせだな。」

低空のサイカーチスに集中すれば、レドラーの砲撃が飛んでくるし、空を警戒すれば、サイカーチスの高速攻撃の餌食だ。更にサイカーチスもレドラーもかなりの機動力を誇る。ユーノのバインドも役には立たないだろう。

「サイカーチスはライガー隊、ウルフ隊でどうにかする。レドラーはウルトラとジ・オーガ及び対空部隊が対応しろ！」
『ウルトラ０１、了解！副砲、一番から三番、撃てェ！』
『Ｄｉｖｉｎｅ　ｓｈｏｏｔｅｒ』
「ディバインシューター！」
「オラァァァア！ぶっ飛びやがれ！」

ウルトラザウルスは副砲を上空に撃ち、なのはは誘導式魔力弾でレドラーを撹乱、そしてジ・オーガのバスターキャノンで撃ち落とす。ウルトラキャノンのアンカー役だったゴジュラス二機も小型ミサイルで応戦する。ウルトラキャノンのアンカー役だったゴジュラス二機も、小型ミサイルで応戦する。
レドラーの部隊には被弾して高度が下がる機体、高度を上げて回避、再び向かってくる機体、空中で爆発して四散する機体などがいた。

『隊長！ワイバーン０６、０９から８８まで撃墜されました！』

レドラーのパイロットが中隊長に報告する。

『怯むな！各機ビームキャノン、一斉砲撃！』

二十機のレドラーＢＣがウルトラザウルスに向けて、計四十条のビームキャノンが降り注ぐ。

「頭部及び背部Ｅシールド、展開！」
「了解！シールド展開します！」

ウルトラザウルスは頭部と背部ブリッジを守るためにＥシールド

を展開し、ビームキャノンをやり過ごそうとする。

ドォォォオン！！

「うおおおっ！！」

頭部への直撃は免れたが、ブリッジ付近に命中したらしく、衝撃がブリッジにも伝わった。ウルトラザウルスの装甲は堅牢に出来ている為ちょっとやそっとではやられないが、数を食らうと流石に厳しい。

「くそっ！！対空砲、撃てェ！」

「俺達も援護するぞ、ライガー！！」

ブレードライガーのアタックブースターユニット後部の銃口が空を向き、エネルギーを急速充填する。

「行けェ！ハイデンシティ・ビームキャノン！！」

機体左右の銃口から、まるで機関銃の如く出力を絞ったビームの弾幕が大空へばらまかれる。ブレードライガーに対空兵装は無いだろうと高を括っていたレドラー隊は、予想外の出来事に驚愕し、次々と撃墜されていく。

ハイデンシティ・ビームキャノン。直訳すると高密度ビーム砲だ。通常よりも高密度のビームを放つことにより、砲身の大きさの割には強力な砲撃を実現した、最新鋭兵器だ。今回は放つビーム弾の大きさや密度を調節し、連射させたのだ。

「援軍のストームソーダー小隊、まもなく本隊に合流します！」

「よし、クレイジー０１よりマッハ０１へ。部隊をレドラーとサイ

カーチスに分けて掃討させろ！」「了解！マッハ０１より各機へ。ナンバーが奇数の者は私と共にレドラー。偶数の者はサイカーチスに当たれ！」

『了解！』

五十機のストームソーダーが二手に分かれ、レドラーとサイカーチスの掃討を開始する。

サイカーチスは主に高速低空飛行での機銃による掃射を得意としているが、逆に空中戦にはめっぽう弱い。故にプテラスやストームソーダーといった戦闘機タイプを苦手としているのだ。

「喰らいやがれェェェエ！」

ストームソーダーの両翼に収納されたブレードを展開し、機体をジャイロ回転させながら突撃する。それに巻き込まれたサイカーチスは紙の如く斬り裂かれ、あっと言う間にジャンクと化した。

他のストームソーダーもコマンドウルフ隊の援護射撃を受けつつ、次々とサイカーチスの群れを撃破していく。

「これでェ…」

「終わりだァ！！」

ストームソーダーが最後のサイカーチスを、アーバインのジ・オーガが最後のレドラーを撃破し、全滅させた。だが共和国のダメージも少なくはなく、ここまでで四百機余りが墜とされた。

「各機、隊列を組み直せ！いつでも動けるようにしろ！」

ダメージの少ない機体が前に出、ダメージの大きい機体は後方でムンベイのグスタフ等による簡単な応急修理を受ける。

「レーダーに反応はあるか？」
「今のところは…！？いえ、反応ありました！数、四百！それにこれは…！？」

レーダー係が敵部隊のコードをチェックし、驚愕の声を上げた。

「どうした！？」
「カスタムタイプのセイバータイガーにジェノザウラー…それにこの反応…魔導士です！」
「何！？」

大佐はその報告を聞き、驚愕した。帝国が魔法を使用しているからには、やはり帝国にも魔導士が居るのだろう。だが今まで戦場には出て来なかった。帝国も本気のようだ。

（この魔力反応…フェイトお嬢様に…エースオブエースか…）

戦場に居る帝国側の魔導士、それはセッテだった。右手には大型のブーメラン状の武器が握られている。どうやら、なのはとフェイトの魔力反応をキャッチしたらしい。

（この世界でも戦う事になるとはな…だが、ここで終わらせる！）

セッテは右手の武器を力強く握り締め、その瞳に炎を宿らせた。

第二十三話　ニクシー基地攻防戦（中編）（後書き）

感想など、ありましたら宜しくお願いします。
では。

第二十四話　ニクシー基地攻防戦（中編2）（前書き）

この間の衆院選、自分的には勝敗は見えてましたが…あれ程とは思いませんでした。
少しでも日本が良くなることを願って、第二十四話です。
どうぞ。

第二十四話　ニクシー基地攻防戦（中編2）

ニクシー基地格納庫。そこでは開発中のライオン型ゾイド『ライガーゼロ』と恐竜型ゾイド『バーサークフューラー』の最終調整が、ヴォルフの立ち会いの下に行われていた。

「整備兵、前線はどうなっている。」
「はっ、数分後にシュバルツ中佐とセッテ殿の隊が交戦しますが、やや劣勢かと。」
「そうか…」

ヴォルフは少し考える。

「よし、俺もジェノトルーパーで前線に出る。後は任せたぞ。」
「はっ！」　整備兵はヴォルフに敬礼し、ヴォルフは自分の機体の所に向かう。

（早く行かなければ…アンナが墜とされる訳にはいかねぇ！）

やや公私混同気味な思考だが、幼なじみの危機を案じない者は居ないだろう。それに、少しでも戦力があれば共和国の勢いを削れるかもしれない。そう考え、ヴォルフはウイングを搭載し、短時間ながら飛行可能になった改造ジェノザウラー、
「ジェノトルーパー」に乗り込んだ。

「ヴォルフ・プロイツェン、ジェノトルーパー。出るぞ！」
ジェノトルーパーはカタパルトから勢いよく射出され、スラスターを全開にして飛行、戦場へ向かった。

「ええ！？帝国の魔導士が！？」
「ああ。敵部隊の先頭に反応があった。十分に警戒してくれ。」
「了解しました！」

その通信が終わった瞬間、通信士からの連絡が入った。

『部隊前方より、未確認の飛行物体を確認！』
「何ィ！？」

そして次の瞬間、前方から飛来した『何か』が部隊前方に位置していたライガー部隊を斬り裂き始めた。それは縦横無尽かつ変幻自在の軌道で飛ぶ、ブーメラン状の武器であった。

（あの武器は…！まさか！？）

フェイトはその武器と動きに見覚えがあった。その使い手はＪＳ事件の際、スカリエッティのアジトで刃を交えた少女。戦闘機人ナンバー７－－。

「セッテ…！！」

そう。ナンバーズの中でも屈指の強者、セッテだ。そしてその武器の名は『ブーメランブレード』。軌道の操作のカラクリはＩＳ『スローターアームズ』。投げた武器の軌道を自由に操作し、敵を一掃する、といった特殊能力だ。

ブーメランブレードが攻撃を終了し、持ち主であるセッテの手に戻っていく。

「お久しぶりです、フェイトお嬢様。」

「セッテ…！何故あなたがこんな所に！？」

フェイトはこの世界に魔導士が居るのは分かっていたが、それがセッテだとは思わなかった。

セッテは淡々と説明する。

「数週間前、クラナガンで管理局と帝国による大規模な戦闘があった。管理局の目がそちらに向いている隙を突き、プロイツェン殿が私達を救出した、という訳だ。」

「そんなことが…！」

フェイトはセッテの言葉に驚愕した。自分たちがクラナガンを離れている間に、そんな大事件が起こっていたなんて。もし自分たちがこの世界に来ていなければ…といった思考がフェイトの脳内を駆け巡る。

「…ちゃん！フェイトちゃん！」

「ふぇ！？な、なのは！？」

耳元で叫ぶなのはの声にビクッとしながらも、我に返るフェイト。

「どうしたの、フェイトちゃん？」

「う、ううん、何でもない。」

「そう、なら良いけど…あんまり考え込んじゃだめだよ。今は目の前の戦いに集中しなきゃね！」

なのははフェイトの考えている事をなんとなくだが察し、フェイトを元気づける。

「うん！ゴメン、なのは！」

フェイトは後悔を吹き飛ばし、なのはに向けて笑顔を作った。

「そうそう、そうやって笑ってるフェイトちゃんが一番可愛いよ！」

「そ、そんな、クラナガン1の美女だなんて言い過ぎだよ、なのは！」

「いや、そこまでは言ってないけど…」

なのはに褒められて、半ば暴走気味のフェイト。ここは戦場のド真ん中だというのに、まるで緊張感が無い。

「さ、行くよ、フェイトちゃん！」

「うん、なのは！」

なのはとフェイトはデバイスを構え、改めてセッテと対峙する。

「寸劇は終わったようだな。では、こちらも全力で行かせてもらうぞ！」

どうやらなのはとフェイトのやり取りは、セッテにとってコントでしかなかったらしい。セッテも戦闘態勢になり、身構える。

「ボーグマン大佐！こっちは任せてください！」

「了解だ！気をつけろよ！」

フェイトはバルディッシュをサイスフォームに変形させ、セッテに接近しようとする。セッテはフェイトのリーチに入る前に、掌から数発の砲撃を放つ。フェイトはそれらを難なく回避、自身の射程圏内に入るとバルディッシュの魔力刃で斬りかかった。

「ハァァァアッ！！」
「くぅぅうっ！！」

セッテは両手のブーメランブレードで刃を受け止め、踏ん張ろうとする。

「この程度ッ！！」

セッテはバルディッシュを弾き返し、その衝撃でフェイトは一瞬だけバランスを崩した。

「そこだッ！！」

たたみかける様にブーメランブレードを投擲し、フェイトに防御させるヒマを与えない。

「うわぁぁあッ！！」

至近距離からの攻撃にフェイトは防御魔法を使うヒマも与えられず、とっさに両腕を交差させて防御した。ブーメランブレードは両腕のバリアジャケットを切り裂き、フェイトの素肌にも傷が付いた。

「まだだ！続けて行け！」

セッテはフェイトの背後に飛んでいったブーメランブレードを呼び戻し、再び攻撃に向かわせる。更にセッテは掌から先程よりも強力な砲撃の準備を始める。

前にはセッテの砲撃、後ろと左右からは戻ってくるブーメランブレード。つまり挟み撃ちの陣形が完成した。

「ディバイィィイン…バスタァァァア！！」

なのはのディバインバスターがセッテに向けて放たれ、セッテは砲撃を中止して桜色の砲撃を回避する。

「くっ、エースオブエースか！！」

「私の目が黒いうちは、フェイトちゃんは墜とさせないの！！」

「なのは…そんなに私のことが…！」

またフェイトの顔が紅潮し、妄想を始めている。今回のフェイトはコレばっかである。

『セッテさん！私が援護します！』

セッテの背後に現れたのは、アンナ操るプロトブレイカーだった。背部のビームキャノンの銃口をなのはとフェイトに向け、チャージを開始する。

「セッテさん、避けてくださいよ！発射！」

「ああ。」

セッテは素早く上空へと飛び上がり、その瞬間にビームキャノンが放たれた。

「！？レイジングハート！」

「バルディッシュ！」

『『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ！／Ｙｅｓ　ｓｉｒ！　ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ！』』

なのはとフェイトは瞬時にプロテクションを展開し、ビームキャ

ノンを受け止める。

「きゃぁぁあっ！」

フェイトは着弾した際の爆風に煽られ、数メートル後方に吹き飛ばされる。

「フェイトちゃん！」

「余所見をしている暇など無いぞ！エースオブエース！」

一瞬フェイトに気を取られたなのはに、セッテが襲い掛かる。

――ガキィィィン！！

「ううっ！！」

勢い良く振り下ろされたブーメランブレードをレイジングハートの柄で受け止める。かなりの力だったらしく、苦痛に顔が歪む。

「拙い、なのは！」

フェイトはなのはを助けるために向かおうとするが、プロトブレイカーの猛攻の前に向かうタイミングが掴めない。

「あなたの相手は…私です！向こうには行かせません！」

「くっ…！速い！」

プロトブレイカーに搭載された高機動スラスターを片側だけ噴かせ、急速にターンしてなのはへの最短ルートを塞ぐ。更にそこから口を開き、フェイトを口腔内に収めようと突進する。

「ーッ!?」

プロトブレイカーは大きく開かれた顎(あご)でフェイトを捕らえ、重機並みの力で上下から圧迫する。

「ぐッ…ぁぁぁぁあ…!!」

フェイトはバルディッシュをザンバーフォームに変形させ、両腕両足で噛み砕かれまいと力を込める。だが、それでゾイドの持つ強靭な顎を押さえきれる訳もなく、じわじわと圧迫される。

「しぶとい…!だったらこれで!」

アンナは顎に加わる力を更に上げ、全力でフェイトを潰しにかかる。

フェイトの四肢は更なる力に耐えかね始め、ミシミシと悲鳴を上げている。

(いける!このまま押し潰して…)

「チェーンバインド!!」

アンナが勝利を確信した瞬間、突如として地面からプロトブレイカーの下顎に鎖が絡まり、口を全開にさせる。更に猿轡(さるぐつわ)の様に鎖が何重にも巻き付き、顎を完全に押さえつける。

その隙にフェイトは顎から抜け出し、一旦距離をとる。

「何!?誰の仕業!?」

「このバインド…ユーノ!?」

二人の視線の先には、ムンベイのグスタフとその最上部に乗るユーノが居た。

「ムンベイさん！今です！」
「オッケー！ムンベイさん特製６００ｍｍレールキャノン、スタンバイ！」

グスタフのトレーラーの一両目のコンテナが開き、６００ｍｍ口径の大型レールキャノンが姿を現す。

「発射ァ！！」

鋼鉄の弾丸が音速で放たれ、プロトブレイカーの頭部を狙う。

「こんな…物でェッ！！」

アンナは弾丸が放たれた瞬間、バインドを無理矢理破壊して素速く右にステップした。
弾丸は直撃こそ逃したが、頭部左側のカメラをえぐり、破壊していた。

「…ッ！このォッ！！」

アンナはプロトブレイカーの口を全開にし、荷電粒子砲のチャージを始めた。

「！ムンベイさん！」
「ヤバッ！トレーラー切り離し、緊急回避！！」

まだレールキャノンには弾が残っているが、いくら重装甲のグス

タフといえども、荷電粒子砲は流石に防げない。重荷となる三両のトレーラーを切り離し、全速力で回避行動に移る。
そして数秒後、プロトブレイカーの口腔から荷電粒子砲が放たれた。

「うわぁぁあッ！！ムンベイさぁぁぁあん！！」
「うぉぉおっ！！かっ飛べ！グスタフＥＶＯ！！」

ムンベイは全力でアクセルを踏み込み、グスタフのスピードを上げる。それを追撃する荷電粒子砲。

ドォォォオン！！

軍配が上がったのは辛うじてムンベイだった。トレーラーは直撃を受けて蒸発したが、グスタフは機体後部をかすった程度で済んだ。

「ふぅ、危なかったよ。」
「じゅ…寿命が半世紀は縮みましたよ…」

ムンベイの荒っぽい運転と迫り来る荷電粒子砲のプレッシャーで、ユーノの口からは魂が抜けかけていた。

「くそっ、外したァ！なら接近して…」
「させないッ！！」

その声が聞こえた直後、背部スラスターが斬り落とされ、右足に巨大な亀裂が入った。

「きゃぁぁあっ！？」

プロトブレイカーは右足のダメージでバランスを崩し、大きな音を立てて横転した。

「大丈夫ですか、ムンベイさん！ユーノ！」

「なんとかね。ありがと、フェイト！」「僕らの事より、なのはを頼む！」

「分かった！」

フェイトはムンベイとユーノの無事を確認すると、セッテと交戦中のなのはの下へ向かった。

（なのは…！絶対に間に合わせてみせる！！）

「どうした。この程度では、エースオブエースの名が泣くぞ。」

「う…うぅっ…！」

なのはは地面に仰向けに叩きつけられ、その上からセッテが見下ろす様な形を取っている。

なのはの純白のバリアジャケットは所々破れ、血が滲んでいた。

セッテはゆっくりとなのはに近づいて行く。

なのはは思った。もう駄目だ。脚や肋の骨が折れているらしく、体を起こすことすら叶わない。目の前も痛みと疲労で霞んで見える。

（私…もう駄目なのかな…？）

なのはの脳裏にスバル、ティアナ達フォワード陣の姿や故郷の海鳴市の家族に親友、そしてヴォルケンリッターの面々を始めはやてにユーノ、クロノやフェイト、果てにヴィヴィオの姿が映った。

（ゴメンね…みんな…。ゴメンね…ヴィヴィ…オ……。）

もうみんなの所へは帰れないのか。そう思いながら、なのはの意識は薄れていく。

尚もセッテは距離を詰め、なのはとの距離が１メートルも無くなるとブーメランブレードを持った右腕を振り上げーー

「これで…トドメだ。」

ーー最後の一撃を振り下ろした。

第二十四話　ニクシー基地攻防戦（中編２）（後書き）

来週テストなので、次の話が遅れるかもしれません。１２日には待望のポケモン金銀復活しますし…それでも二週間以内にはなんとかしたいと思います。

では。

第二十五話　ニクシー基地攻防戦（中編３）（前書き）

まだまだ暑い日が続きますね。
第二十五話です。どうぞ。

第二十五話　ニクシー基地攻防戦（中編3）

なのは達と数ｋｍ離れた位置にある最前線では、一進一退の激戦が繰り広げられていた。五個師団もあったコマンドウルフ隊は、その数を一個師団程にまで、ライガー隊は二百機程しか残っていない。

それというのも、セイバータイガーの性能を遺憾なく発揮させているシュバルツの天才的な操縦テクニックが大きい。その力の前にコマンドウルフは圧倒されてしまった。

共和国も水牛型ゾイドの『ディバイソン』百数機が援軍に駆けつけたものの、苦しい戦いに変わりはなかった。

「喰らぇぇえ！！」

レイのシールドライガーとガンスナイパー大隊が砲撃し、レブラプターの群れを撃破する。だがその後方から数十機の量産型ジェノザウラーのレーザーライフルが飛んでくる。

「ちっ、なかなかしぶとい連中だ…。」

レイはシールドを展開、なのはに状況を聞くために通信を入れる。

「なのは、オレだ。そっちはどうなってる？」

『……』

「おい、なのは？」

返事が返ってこない。レイは何度も呼びかけるが、通信機からはウンともスンとも聞こえてこない。

（まさか！？）

レイは厭な予感がした。なのはから帝国の魔導士、セッテははかなりの手練と聞いていた。レイの脳裏に最悪のシナリオが浮かぶ。

「くそッ！！クレイジー０２よりガンスナイパー隊へ！ここは任せた！オレは高町なのは及びフェイト・Ｔ・ハラオウンの救援に向かう！」

『了解！お気をつけて！』

レイはライガーのブースターを噴かせ、猛スピードでなのはの所へ向かう。

『レイさん！どうしたんスか、急に持ち場を離れたりして！？』

ウルトラザウルス後方で補給を受けていたバンからの通信だ。

「バンか！？なのはが危ねぇんだ！」

『！？ど、どういう事ッスか！？』

「説明は後だ！ディバイソン十機ほど引き連れて、ガンスナイパー隊の援護に向かってくれ！」

『りょ、了解ッス！』

レイは通信を終え、更に加速して荒野を駆け抜けていった。

「何…！？」

セッテは、驚いていた。管理局のエースオブエースであるなのはにトドメを刺そうとした瞬間、自分の体は宙を舞っていた。何者か

が横から体当たりを仕掛けて来たのだ。
それが誰かは、言うまでもなく――

「なのはは…殺させない…！！」

――真・ソニックフォームを解放したフェイトであった。
バリアジャケットは子供時代を思わせる黒いレオタードの様な形状。両手には雷の双剣になったバルディッシュ・ライオットブレードが握られていた。

「その形態…前の様にはさせない！」

セッテはブーメランブレードを握り直すとフェイトに向かって走り出し、負けじとフェイトも迎え撃つ。

「「はぁぁぁぁぁあ！！」」

フェイトとセッテのブレードが真っ向からぶつかり合い、鍔迫り合いの形になる。だが戦闘機人であるセッテの方が腕力には分があり、じわじわとフェイトを押している。

（くっ…やっぱり前よりも力が上がっている…！？）

フェイトは感じた。セッテの力、特に単純な腕力が前よりも上がっている。事件から数ヶ月が経っているものの、この成長スピードは尋常ではない。何か改造を加えたのだろうか。

「どうした。プロジェクトFの遺産はこの程度か？」
「くそっ…こんな所で負ける訳には……！」

なんとか踏ん張ろうとするフェイトだが、いよいよ厳しくなってきた。

「待ちやがれぇぇぇぇぇ！！」

「「！？」」

突如として声が聞こえ、二人がその方向を見ると、そこにはライガーのキャノピーを開いてパンツァーファウストを構えるレイの姿があった。

「レイさん！？」

「フェイトォ！避けろ！！」

レイが叫んだ直後、セッテに向けて一発のロケット弾が放たれた。

「何！？」

「ちょ、レイさぁぁぁぁあん！？」

――ドッカァァァァァアン！！

フェイトとセッテの居た場所を中心に大爆発が起こり、辺り一面は土煙に包まれた。レイは撃ち終わった砲身を素早く投げ捨て、キャノピーを閉める。

「フェイトとなのはの発信機の反応…有。なんとか避けたみてぇだな。」

フェイトの生存を確認すると、キャノピーに何かが飛びついてきた。それは埃まみれになったフェイトだった。

「レイさん！なんて事してんですか！？てゆうか、何撃ったんです！？」

「おう、パンツァーファウストっつってな、対重装甲用の兵器だ。」

そんなの人に向けて撃たないでください！と、叫ぶフェイト。

「つーか何だお前、その格好。ここは海でもなけりゃ、新体操の試合会場でもねぇぞ。」

「ほっといてください！速さを追求した結果が、これなんですから！」

「へぇ、ボディコン着るだけで速くなんのか。それじゃブルーガー曹長なんか最速だな。」

「だからぁ！！」

顔をやや赤くしてムキになりながら、レイと漫才を繰り広げるフェイト。この作戦中、どうもフェイトはお笑い担当になりかけているような気がする。

「全く…お前らはそんなに漫才が好きなのか？」

フェイトとレイが声の方向を見ると、服と武器がややボロボロになったセッテの姿があった。どうやらギリギリで避け切れなかったらしい。

「フェイト、なのはを連れて退がってろ。後は俺がやる。」

「レイさん…！？」

レイはライガーのシールドを展開し、ジェットブースターを噴かせながらセッテに向かって突進する。

「うおぉぉぉぉお！！」
「くっ、甘い！」

セッテはブレードを思い切りEシールドに振り下ろし、バリアブレイク効果を付加させた斬撃で両断した。そのまま擦れ違いざまに、ライガーの頭部から左脚にかけて斬り裂いた。

「ぐわぁぁぁあ！！」

パイロットのレイにも衝撃が伝わり、ライガーはそのまま転倒した。

（ちぃっ、なんて奴だ！シールドがまるで紙切れみてぇに…！）

ライガーは再び立ち上がり、脚のダメージを抱えつつもセッテと対峙する。

（シールドは意味が無ぇ、この脚じゃあマトモに走れねぇ…だったら…！）

レイの考えが固まり、ビームキャノンによる砲撃を行うことにした。

「ダブルキャノン、発射シーケンス開始…。エネルギー１５０％まで充填。ターゲット、ロックオン。」

ビームキャノンの砲口に限界に近いエネルギーが集まり、砲身がかなりの高熱に覆われる。砲身がオーバーヒートしかけているというコンバットシステムからの警告も完全に無視、ただ目の前の脅威を打ち抜くことのみを考える。

「シールドライガーに高エネルギー反応…。ならば撃たれる前に、斬る！！」

セッテはブーメランブレードを二つ投げ、もう二つを構えて突進する。

「現在１２０％…仕方ねぇ、ここで撃つ！」

レイはビームキャノンの安全装置（セーフティー）を解除、素早く発射体勢を作った。

「させるかぁぁあ！」

「間に合え！発射ァ！！」

ライガーの背中の二門の砲口から極太のビームが放たれ、反動で後ずさる。それを投擲（とうてき）されたブーメランブレードが先に受け、数秒間耐えたものの破壊された。更にセッテが両手のブレードで受け止め、逆に押し返そうとする。その時の砲口との距離、８ｍ。だがほんの僅差で、徐々にセッテが押している。

「踏ん張れェェエエ！ライガァァァァア！！」

『ゴォォォオン！！』

レイの気合いとライガーの雄叫びで、キャノンの出力が更に上昇する。

「何！？まだこんな力が！？」

レイとライガーの気合いに驚くセッテ。この世で唯一、精神論が

適用できる機動兵器、それがゾイドだ。故に、機体とパイロットの性格、お互いの信頼関係、気合い、経験などにより、カタログスペック以上の力が発揮できるのだ。

（ぐぅっ…！押し負ける…だと！？）

次第にレイが優勢になり、セッテを押し始めた。だがそう余裕は無い。さっきからライガーのコクピット中に警報と『ＷＡＲＮＩＮＧ！！』の文字が浮かんでいる。砲身の限界が、すぐそこまで迫っているのだ。

『危険、危険、危険…』

「くそッ、もう少しだけ踏ん張ってくれ！！」

ビームを放ち始めてから、一分が経過した。遂に砲身が悲鳴を上げ始める。

（このまま乗り切れば、私の勝ちだ！）

「もう一息だ！根性見せろ、ライガァァァァア！！」

『ゴォォォオ！！』

ライガーが今日一番の雄叫びを上げ、ビームキャノンの出力が瞬間的に爆発する。

その威力にブーメランブレードが遂に悲鳴を上げる。刀身にヒビが入ったのだ。

「ぐっ…ぐぁぁぁぁぁあ！！」

そしてブーメランブレードが砕け、セッテはビームの柱に飲み込まれた。

「よっしゃァ！」

レイが歓喜の声を上げるが、その直後にビームキャノンが『ボン』と音を立てて爆発した。

「やっぱイカレちまったか…お疲れさん。」

レイは自分の無茶に付き合ってくれたライガーを労い、ダブルキャノンの送電システムを切り離す。それからキャノピーを開け、拳銃を構えて砲撃の着弾点を確認する。煙が晴れ、中に人影が見えた。

「おいおい、マジかよ…！」

人影はセッテだった。体中がボロボロになり、機械の部分が露出していてもなお立っていた。

「！？アイツの体…機械なのか！？」

レイはセッテが戦闘機人だと知らされていなかったため、その正体に驚いた。

「レイさん！後は私が！」

なのはを安全地帯まで移したフェイトが、セッテを逮捕すべくやって来た。

『フェイト！』

「ユーノ！？どうしたの！？」

『気をつけて！そっちに帝国の機体が向かってる！！』

ユーノから通信が入り、フェイトに助言した直後、ユーノの居る方向から猛スピードで滑空する真紅の機体が現れた。その両足には、中破したアンナのプロトブレイカーが掴まれていた。

「何だ!?うぉぉお!?」

シートベルトを外していたレイは真紅の機体、ジェノトルーパーの起こした風圧に煽られ、危うくコクピットから転げ落ちそうになる。

「プロイツェン大佐か!」
「セッテ、撤退だ。乗れ。」

胸部コクピットハッチが開き、パイロットのヴォルフが姿を現す。セッテは素早くジェノトルーパーに飛び乗るとその脚に掴まる。

「司令部、目標の回収を完了。帰還する。」
『了解しました。お気をつけて。』
「ああ。」

通信を切ると、ジェノトルーパーのスラスターが火を噴き、ニクシー基地方面に飛んで行った。

「テメェ!待ちやがれ!」

レイは追撃しようとするが、ライガーの脚のダメージが酷く、叶わなかった。

「レイさん!大丈夫ですか!?」

「ああ、なんとかな。だが、一旦本隊に合流するぞ。脚を換えなきゃならねえ。」

レイとフェイトはライガーの脚を予備と交換するため、前足を引きずりながら本隊に向かった。

途中でムンベイとユーノにも合流し、グスタフを一機要請した。

ところ変わって共和国軍本隊。シュバルツ操るセイバータイガーがコマンドウルフに続いて、ガンスナイパーやシールドライガーを撃破していっている。

だがジェノザウラー隊やレブラプター隊の殆どが撃破され、未だに共和国が優勢だ。

「くっ、このままではジリ貧だ…『ピピッ』…通信？」

打開策を立てようとするシュバルツに、司令部からの通信が入った。

『シュバルツ中佐。直ちに戦闘区域を離脱し、ニクシー基地に撤退せよ。』

「了解。」

敵の戦力をある程度削り、これ以上こちらの戦力を失いたくないと上が判断したのだろう。シュバルツの提案通り、遂に撤退命令が出された。

「全機に告ぐ。司令部より撤退命令が出された。直ちにこの区域を離脱する！」

『了解！』

帝国軍は撤退命令を受け、一機残らず全速力で撤退を始めた。

「大佐！帝国軍が撤退を始めました！」

「前線の機体は追撃せず、ウルトラザウルスまで後退、補給を受けろ！」

前線部隊は指示に従い、後退を始める。

「ウルトラザウルス！ウルトラキャノンの発射準備だ！」

『了解！ウルトラキャノン、準備開始！』

その号令と共に、二機のゴジュラスがウルトラの両後脚にしがみつき、アンカーを打ち立てる。

『デストロイ砲弾、装填完了！』

『目標との相対距離、確認！誤差修正、完了！』

「最終安全装置、解除！」

『了解。最終安全装置、解除！』

ウルトラキャノンの準備に数分かけ、その間にシュバルツ隊との距離は４０ｋｍ程になっていた。だがその程度なら、余裕でウルトラキャノンの射程圏内だ。

『ウルトラキャノン、発射準備完了しました！』

「よし！ウルトラキャノン、発射ァ！！」

その瞬間、とてつもない爆音や衝撃波と共にウルトラキャノンの砲弾が放たれた。両後脚を支えるゴジュラスたちも、反動を抑える

のに必死だ。

『中佐！敵の巨大砲弾が発射されました！』

「やはり撃ってきたか！全機、最大戦速にて振り切れ！」

シュバルツ達は機体のスピードを限界まで加速させ、迫り来る一撃を回避しようとする。

『砲弾の着弾まで、後二十秒！』

「くっ、間に合え！」

一直線に大地を駆け抜けるシュバルツ達。シュバルツの顔に、焦りの表情が見える。

『着弾、五秒前！四、三、二、一…』

「オォォォオ！！」

シュバルツ達はラストスパートをかけ、必死で大地を駆け抜ける。

『ー零！』

遂に砲弾が着弾し、超高熱のドームが形成される。それは辺りの地形を飲み込みながら拡大していき、シュバルツ達の機体に迫っていく。

『うわぁぁぁぁあ！！』

『ぎゃぁぁぁぁあ！！』

『た、助けてくれェェェエ！！』

シュバルツのセイバータイガーに、後方で爆風に飲み込まれてい

く部下達の断末魔が通信機を通じて聞こえてくる。

（すまない…お前たちの無念、必ず晴らしてみせる！）

―だから今は、絶対に生き延びる！そう心に誓い、シュバルツは叫ぶ。

『逃げ切れェェェエ！！』

その数秒後、遂にシュバルツはウルトラキャノンから逃げ延びることに成功したが、部隊の六割が巻き込まれるという結果になった。この苦い経験を次に活かし、リベンジしてみせるとシュバルツは誓い、戦場を後にした。

『敵残存戦力、戦闘区域を離脱しました！』

「よし、全機前進！このまま基地を攻める！」

歩を止めていたウルトラザウルスを含めた全機が、基地攻略に向けて再び歩き出した。

第二十五話　ニクシー基地攻防戦（中編３）（後書き）

次回、ニクシー基地攻防戦、終結！
あの重装甲ゾイドが、物凄く働きます！
では。

第二十六話　ニクシー基地攻防戦（後編）（前書き）

ニクシー基地攻防戦編も、いよいよ大詰め！
遂に、大人気のあの二機が登場します！

第二十六話、どうぞ！

第二十六話　ニクシー基地攻防戦（後編）

「第一から第三騎兵中隊は至急、ホエールキングへ機体を積み込め！」

『第五から第十五小隊、積み込み完了しました！』

『シュバルツ中佐より入電！後四十分で合流点に到達するとのことです！』

「よし、すぐにホエールキングを一隻向かわせろ！」

ニクシー基地ではパイロットに整備員、その他スタッフが撤退準備に追われていた。

「あと何時間掛かるんだ！？」

「ハッ！計算では、後五時間は掛かります！」

五時間。あまりにも長すぎる。そんなに掛かっていては、撤退準備をしているうちに共和国が基地を攻撃するだろう。特にあのウルトラキャノンを撃たれれば、あっという間に壊滅だ。

「拙い…。このままでは総崩れだ…」

それだけは絶対に避けなければならない。いったいどうすれば、この現状を打開出来ると言うのか。何も思いつかず、遂に司令官は頭を抱えてしまう。

「指令！」

苦悩する司令官の下に、数十名のパイロットがやってきた。

『我らが時間を稼ぎます！その間に脱出を！』
「お前たち……！」

なんと彼らは自らの命を賭して、全部隊の撤退を助けると言うのだ。彼らの愛国心に司令官は心を打たれ、目にうっすらと涙を浮かべる。

「すまない…！ロールアウトしたばかりのエレファンダーが百機ある…。それを使ってくれ…！」
『ハッ！！ありがとうございます！！』

司令官は、お礼を言いたいのは私の方だと呟き、駆け出していくパイロットたちの背中をその量目に焼き付けた。
そして百機のエレファンダーを載せ、シュバルツの救援も兼ねたホエールキングが飛び立っていった。

『大佐！前方２００ｋｍ先にホエールキングを確認！セイバータイガーを積んで行きます！』
「救援部隊か。ストームソーダーを何機か向かわせて、可能なら撃破しろ！」
『了解！』

六機のストームソーダーが、高速でホエールキングに向け飛んでいく。
そのうちの一機がホエールキングに斬りかかろうとするが、何者かがホエールキングの口腔から放った対空ミサイルが左翼を直撃、炎を上げながらホエールキングを掠（かす）めて墜落してしまった。

「何！？」

突然の出来事に他のパイロットは面食らい、慌てて宙返りして距離を取る。

そして口腔からその『何者か』が姿を現した。

「あれは…新型か！？」

現れたのはつい先日ロールアウトしたばかりの最新鋭機、象型ゾイド（鋼の牙を持ち、どちらかと言うとマンモスに近い）の『エレファンダー』だった。ドスン、ドスンと足音を響かせながら、ウルトラ目指して進軍し始める。

「来るか…ウルトラキャノン、発射準備！」

「駄目です！先程の砲撃で、砲身が焼けてしまいました！」

「何ィ！？」

ウルトラキャノンの砲身は、シュバルツを追い詰めるために撃った際に一部が融解してしまったという。ウルトラキャノンはその巨大な砲弾を放つため、使用する火薬の量も並ではない。その火薬を発火させた際の超高熱に砲身が耐え切れなかったのだ。

「接触まで、あと何分だ！？」

『およそ一時間です！』

『大佐！グレック中尉が帰艦しました！』

ここでようやくレイのライガーを載せたグスタフが戻ってきた。

「すんません大佐！右前脚とダブルキャノンがイカレました！」

「遅い！整備班！大至急レイのライガーの修理だ！」

『了解しました！』

グスタフは後方のネオタートルシップにライガーを運び込み、整備班が換装作業を始める。

「医療班！なのはがヤバイから手伝って！」

「はい！」

ムンベイが医療班を指揮し、なのはをストレッチャーに乗せて医務室へ向かった。フェイトとユーノもそれに付いて行く。レイは修理と整備が終わり次第出撃しなければならないので、なのはに付いて行く事はできなかった。

コーヒーを飲みながら、自分の相棒を見守るレイ。前脚は根元から切り離され、通常カラーのライガーの脚が取り付けられる。全身黒の機体に右前脚だけ青。不恰好にも程があるが、この際仕方が無い。

ダブルキャノンは予備パーツが無かった為、代わりにコマンドウルフＡＣ用のロングレンジライフルを搭載した。

「中尉！換装及び修理が完了しました！」

修理開始から三十分。ようやく作業が終了した。

「よっしゃ！ハッチを開けてくれ！」

レイはライガーのキャノピーを開けると、素早くコクピットに乗り込んだ。

正面のハッチがゆっくりと開いていく。

「レイ・グレック、シールドライガー。征くぜ！」

『ゴォォォオン！！』

ライガーは短く咆哮すると、開いたハッチに向かって駆け出し、勢い良く飛び出した。

「右脚良好…全武装、問題無し！」

新しい脚の不具合も無く、今まで通りに動ける事を確認すると、すぐに前衛部隊に合流する。

「レイさん！なのはは！？」

「負傷はしてるが、医療班とフェイトが付いてる。大丈夫だろ。」

心配しているバンに状況を伝え、エレファンダーを迎え撃つために隊列を組む。

「しかし敵も新型を送り込んでくるなんて…帝国も本気って事ッスかね？」

バンが率直な感想を述べるが、レイは首を振った。

「いや、違うな。コイツ等は捨て駒だ。」

「！？でも敵さん、新型ッスよ？」

「本気で俺たちを潰そうってんなら、全軍をもって仕掛けてくるはずだ。」

あれじゃあ幾ら何でも少なすぎだ、と付け加え、話を続ける。

「つまり、アイツ等は殿って訳だ。今頃ニクシー基地は撤退準備でもしてんだろ。」

「つまり…それが終わるまでの時間稼ぎってことスか！」

「そんなとこだろ。それなら、俺達の取る戦法は何だ？」

バンにこの状況で最も有効な策は何か、と問う。

「敵陣中央に戦力を割いての一点突破！そのままニクシー基地へ一直線！」

「正解だ！征くぜ、バン！」

「了解！」

レイとバンは敵陣の中央に突撃し、それを追う形でディバイソン、シールドライガー、ガンスナイパーなども同様に突撃する。

「よし、ウルトラザウルス及び支援部隊！あいつらを援護しろ！」

『了解！』

「了解！撃ち抜け、ジ・オーガ！！」

ジ・オーガがエレファンダーの群れにバスターキャノンを叩き込み、周辺のカノントータスも一斉に砲撃を開始した。

「リニアキャノン一番、二番、撃て！」

ウルトラザウルスも６４０ｍｍリニアキャノンを放ち、突撃を援護する。

共和国の一斉砲撃で起こった爆風により、エレファンダーの群れは視認出来なくなるが、レーダーで確認できた。

「レーダー、敵の様子はどうだ？」

『…そんな…！？敵数、依然変化ありません！』

「何だと！？」

爆風が晴れ、大佐たちは驚愕した。エレファンダーが一機たりとも倒れていないのだ。
それもその筈、エレファンダーには高出力かつ強力なEシールドが搭載されており、半端な攻撃は簡単に弾かれてしまうのだ。

「シールドか…成る程、伊達や酔狂で来ちゃいないみてえだな。」

流石は殿ってところだな。と付け加え、大佐の指示を待つ。

（Eシールドとは厄介だな…。下手な砲撃は効かんとなると…）

少し考え、大佐の頭脳に作戦がまとまった。

『全機に告ぐ。砲撃部隊は両側のエレファンダーを砲撃で抑え、突撃部隊は敵陣中央に戦力を固めて一点突破を狙え！ウルトラザウルスは突撃部隊を援護しろ！』
『了解！』

突撃部隊は更に中央に固まり、レイにバン、ディバイソンを中心に突撃していく。

「各機、一斉砲撃！突撃を援護しろ！」

大佐の号令の直後、支援部隊が再び砲撃を行う。
対してエレファンダーは再度シールドを展開し、砲撃を防ぎながら前進する。アメフトで言うと、ディフェンス同士の力がぶつかり合っている感じだ。
そのド真ん中をランニングバックの様に突破しようとするレイたち。もちろん一直線上のエレファンダーも黙って見ている訳はなく、鼻の先端にあるレーザーガンや、背中のパルスレーザーライフルで

対抗する。
数発がディバイソンに命中したが、ディバイソンもかなりの重装甲の為にびくともしない。

「オラァァア！！」

レイのライガーが先頭のエレファンダーに飛び掛かり、ストライククローで斬り裂こうとする。が、やはりシールドに阻まれて大したダメージにはならなかった。

「ちっ、やっぱ厳しいか…」
「ぶった斬れ！ライガァァァア！！」

バンは最大出力のレーザーブレードでシールドに斬り掛かる。

「ぐっ、ぐぁぁぁあ！」

ブレードはエレファンダーのシールドを両断し、同時に本体を斬り裂いた。エレファンダーは轟音と共に、爆散した。

「一丁上がりィ！」
「いいぞ、バン！でも、残りのエネルギー量も考えろよ！」

そう。今の攻撃でエレファンダーのシールドは破ることが出来たものの、最大出力の一撃をそうそう何度も使うことは出来ない。調子に乗って多用すれば、敵陣のド真ん中でガス欠、という事にもなりかねないのだ。

「やっぱり一機ずつチマチマやるしかねェか…」

レイがそう考えていると、一機のディバイソンが鋼鉄の角でエレファンダーに突進している。だがエレファンダーは鼻の先端から、ガンダムよろしくビームサーベルを生成して斬り払い、牙でカウンターを喰らわせた。

「遠近両用、防御は堅牢。おまけに殿故(しんがり)の決死隊…か。こりゃ簡単には突破出来ないな。」

エレファンダーのパワーは今のディバイソンを見れば、大型ゾイドの中でもトップクラスだということが分かる。

なぜなら、ディバイソンは突撃に特化した、共和国軍でも屈指のパワー型のゾイドだ。その突進を防ぎ、カウンターまで食らわせたのだ。どう考えても殿をする為に生まれてきたゾイドではない。

もし共和国にウルトラキャノンが無ければ、今頃はエレファンダーの前に倒れ、蹂躙(じゅうりん)されていたことだろう。

「ま、気張るしか無ェか！」

レイは再び、堅牢な壁を突破するために駆け出した。

決死隊とデストロイヤー兵団が激突してから、二時間が経過した。

「部隊の輸送準備、四割が完了！」

「続いて３２から３５中隊、積み込み急げ！作業の終了した艦は、順次出航せよ！」

作業が終了したホエールキングが順番に飛び立って行き、開いた

スペースに次のホエールキングが進入してくる。

「プロイツェン大佐！大佐もお早く！」

「俺はまだ良い。お前らから先に行け！」

「了解！お先に失礼します！」

ヴォルフは自分を呼びに来た兵士を追い返し、ライガーゼロとバーサークフューラーのある格納庫へ向かう。

「コンバットシステムは準備できたか？」

「ハッ！あと二時間は掛かるかと思われます！」

「そうか。引き続き、作業を続行しろ。」

『了解！』

機体の開発状況を確認し、アンナに通信を送る。

「アンナ。俺はもう少しだけ残る。先に行っていてくれ。」

「分かったわ。あまり、無茶しないでね？」

「分かっている。じゃあ、また後でな。」

―プツン、と音を立てて通信が切れた。

（ああは言ったが、最悪俺がコイツで……）

バーサークフューラーを見上げ、ヴォルフは呟いた。

交戦から三時間半。陣の中心部のエレファンダーに、ようやくダ

メージが蓄積され始めたようだ。先程よりもシールドの出力が落ちている。

「今だ！ぶち抜け、ライガァァァァア！！」

バンのブレードライガーのブレードを前に向け、Ｅシールドとブレードの出力を一点に集中させる。そしてそのまま、エレファンダーの壁へ突進する。

エレファンダーもシールドを展開し、ブレードライガーの突進を弾き返そうとする。

「糞ッ！踏ん張ってくれ！」
「うぉぉぉお！！」

先頭のエレファンダーのパイロットが突破させまいと踏ん張るが、遂にシールドにヒビが入り始め―

「う、うわぁぁぁぁあ！？」

―最大出力のライガーの前に崩れ去った。

バンはその勢いのまま、放たれた弾丸の如くエレファンダーの群れを弾き続け、遂には突破に成功した。

『バン・フライハイト機、殿部隊を突破しました！』
「よぉし！基地侵攻部隊は全機、バンのブレードライガーに続けェ！！」

バンがこじ開けた道をガンスナイパーが、ディバイソンが、レイのシールドライガーが駆け抜ける。周りのエレファンダーは陣の穴を塞ごうとするが、ウルトラザウルスやジ・オーガなどに足止めさ

れ、結局侵攻部隊を全て通してしまった。

「各機へ。これより全速でニクシー基地に向かう！征くぞ！！」

『了解！』

レイとバンを先頭に、約百機の部隊が全速力で大地を駆け始めた。

「指令！第２０大隊の脱出準備が完了！後はプロイツェン大佐の部隊のみです！」

予定の時刻まで残り三十分。ようやく脱出準備の九割強が完了した。

「エレファンダー隊はどうなっている！？」

「ハッ、共和国軍、約百機がエレファンダー隊を突破！こちらに向かっています！エレファンダー隊は、足止めされ動けません！」

「そうか…だが、良くやってくれた。大至急、機体の輸送準備だ！」

「了解！」

レイたち、侵攻部隊が基地に向かっているという情報を聞き、兵士たちが更に慌ただしく動き始めた。

「…ああ。俺の部下を優先しろ。俺は最後でいい。」

格納庫で通信をしているヴォルフ。自分の部下を最優先で脱出さ

せろとの指示を送っていたのだ。

（俺の予想が正しければ、脱出完了のギリギリに奴らが乗り込んでくる筈…）

故に、自分が最後の殿になろうというのだ。

「バーサークフューラーの準備は出来たか？」

「ハッ、準備完了であります！」

整備兵の報告を聞くと、ヴォルフはバーサークフューラーのコクピットに乗り込み、起動準備に入った。

ＯＳの最適化が終わった辺りで、基地内に警報が鳴り響く。

『共和国軍が基地内に侵入！総員、大至急脱出せよ！』

どうやらレイたちがニクシー基地に到着したらしい。それを聞いたヴォルフはほんの少しだけ口元を歪めた。

「来たな…稼動テストも兼ねて、少し暴れるとするか…」

レイはガンスナイパーを数十機引き連れ、ニクシー基地の侵入に成功していた。

大半が事前に脱出を済ませていたため、基地内の格納庫は殆どもぬけの殻だった。

「ちっ、見事になんにも無ぇな…」

エレファンダー隊のド根性に舌打ちをしながら、どんどん奥へ進んでいく。
そして最後のブロックに到達したとき、レイの目に飛び込んで来たのは―

「こ…コイツは一体…!?」

帝国の新型ゾイドである、ライガーゼロとバーサークフューラーだった。両機ともまともな装甲を纏ってはいないが、それでも堂々とした姿にレイは目を奪われていた。

(なんなんだコイツら…装甲すら無い癖に、力強さや荒々しさが伝わって来やがる…まるで…)

兵器転用前の野生体みたいだ。とレイが考えていたとき、バーサークフューラーのコクピットに人影が見えた。

「貴様にも分かるか?この二機の素晴らしさが…。」

「!?」

レイがその声を聞き、それが目の前の機体のパイロットの物だと気づいたときにはもう遅かった。
バーサークフューラーの目に光が灯り、次の瞬間にはライガーの懐まで飛び込むと、その鋭く力強い牙でライガーののどぶえを噛み千切った。

『グギャァァァア!!?』
「うぉぉぉお!?ライガァァァァア!!」

ライガーはそのまま押し倒され、数秒の後には完全に息の根を止

められていた。

「動けんのか!?あの状態で!!」

押し倒される前にコクピットからの脱出に成功したレイだったが、目の前の脅威と無残な姿の相棒を見て、ただただ唖然としていた。

「シールドライガーを一撃か…。予想以上の代物だな。」

ヴォルフはバーサークフューラーの性能に感心し、続けてガンスナイパー隊を駆逐し始めた。圧倒的な力の前にガンスナイパーは蹴散らされていくばかりで、反撃の隙すらも生まれない。

(拙い、アイツを止めねぇと!)

だが、今のレイにはバーサークフューラーを止めるほどの力が無い。相棒も先程破壊され、戦いはおろか動くことすらできない。

レイが辺りを見渡すと、バーサークフューラーの隣にあったライオン型、ライガーゼロが佇(たたず)んでいる。

(そうだ、アレなら!)

レイはライガーゼロに向けて走り出す。数名の整備兵はレイの目的を察知すると、機体を守るために銃口を向ける。

「止まれ!止まらんと撃つぞ!」

「そう言われて、はいそうですかと止まる馬鹿が居るかよ!」

レイは整備兵の放った弾丸を避けると、お返しに銃弾を足にお見舞いする。撃たれた整備兵はその場に蹲(うずくま)り、その隙にレイはライガ

ーゼロのコクピットに到着した。
キャノピーを開いて、操縦桿を握る。レイはその瞬間に、この機体の溢れる力を感じ取った。

「コイツは…いけるぞ！」

機体を起動させ、中央の画面に『Ｌｉｇｅｒ　Ｚｅｒｏ』の文字が浮かび上がる。

「ライガーゼロ…か！頼むぜ！」
『ゴォォォオ！！！』

任せろ、と言わんばかりに咆哮し、驚異的な瞬発力でバーサークフューラーに迫る。そのままバーサークフューラーの腹に、思いっきり頭突きを食らわせた。
突然の攻撃に、一瞬ふらつくバーサークフューラー。すぐに体勢を立て直すと、ライガーゼロの方を向く。

「貴様…ゼロを奪取したのか…」
「これ以上は、やらせねぇぞ！」

ゼロの爪が輝き始め、同時に強力なエネルギーが発生する。対してバーサークは頭と尻尾を一直線上に伸ばし、口腔に超強力なエネルギーが収束する。

「征くぞ、ゼロ！」
「焼き払え、バーサーク！」

ゼロはバーサークに向けて突進し、飛び掛る。バーサークは微動だにせず、ゼロを引き付けている。

ゼロの画面には『Ｓｔｒｉｋｅ　Ｌａｓｅｒ　Ｃｌａｗ』の文字が、バーサークの画面には『Ｃｏｎｖｅｒｇｅｎｃｅ　Ｃｈａｒｇｅｄ　Ｐａｒｔｉｃｌｅ　Ｃａｎｎｏｎ（収束荷電粒子砲）』の文字が浮かび上がっている。

「ストライク・レーザークロォォォォォオ！！」

「荷電粒子砲、発射ァ！！」

ゼロのストライク・レーザークローは直撃こそ逃したがバーサークの頬を掠り、荷電粒子砲も同様に直撃はしなかったもののゼロの胸部周辺を掠り、その表面を溶かした。

「ちぃっ、やるじゃねぇか！」

「貴様こそ、たいした腕だ。」

お互いに実力を認め合うレイとヴォルフ。すると、不意にバーサークがジャンプした。天井を突き破ると、その上空で待機していたホエールキングに収容された。

「てめぇ！逃げんのか！？」

「そうだ。これ以上戦ったとしても、こちらには何のメリットも無いからな。」

はっきりと逃げることを断言したヴォルフ。その言葉にレイは少し驚いた。まさか自分から逃げることを明言するとは思わなかったのだ。

「そうだ。最後に貴様の名を聞いておこう。俺はヴォルフ・プロイツェンだ。」

「俺はレイ！レイ・グレックだ！」

「レイか…。覚えておこう。」

そう言い残し、ホエールキングは帝国の本拠地である暗黒大陸へと飛び立っていった。

『レイ！状況はどうだ！？』

ボーグマン大佐からの通信だ。

「大佐！ニクシー基地、無事…とは言い難いですが制圧しました！」

『よくやった！こちらも新型は全機撃破した！今からそっちに向かう！』

「了解。あと、敵の新型機を発見、鹵獲（ろかく）しました。」

『何！？…分かった。技術班を真っ先に向かわせる。』

大佐からの通信を終え、レイはコクピットから降りるとゼロの足元に座り込んだ。戦っていて気づかなかったが、空は朝焼けに染まっていた。

「なんだ…一晩中戦ってたのか…道理で疲れるはず…だ…ぜ…」

そう言うと緊張の糸が切れたのか、レイはその場で眠ってしまった。

第二十六話　ニクシー基地攻防戦（後編）（後書き）

次回、時空管理局ＩＮ惑星Ｚｉ！になる予定です。

荷電粒子砲の英訳が間違ってんぞ、などの感想やご指摘がありましたら、お待ちしております。

では。

第二十七話　来訪者、そして帰還（前書き）

遅くなりました！ちょっと…いやかなり金銀のリメイクにハマってしまいまして…。
オリジナルでは容量の都合で削られていた部分も作られていて、かなりオススメです！（って俺は任天堂の回し者か？）

第二十七話です。どうぞ。

第二十七話　来訪者、そして帰還

共和国軍がニクシー基地を制圧した翌日、海のド真ん中を高速で飛行する一機のストームソーダーが居た。

「こちらゾイド工学研究所所属、メリッサ・スー。あと三十分でニクシー基地に到着します。着陸許可をお願い致します。」

『こちらニクシー基地管制塔。了解しました。すぐに準備いたします。』

ストームソーダーのパイロットは十代前半の少女。名を、メリッサ・スーという。見た目は子供でも、大学は卒業して博士号まで持っている天才だ。更に六歳の頃には海底資源開発のために海水から機雷を作る『ＭＳ理論』を構築した経歴もある。

「急ぐわよ、風剣（フェンジャン）。」

風剣と呼ばれたストームソーダーはバーニアを噴かし、ニクシー基地を目指して飛んでいった。

「どうだ？ムンベイ。」

「あー、こりゃ駄目だね。急所を完全にやられてるよ。」

ムンベイはバーサークフューラーに破壊されたシールドライガーのチェックをしている。ムンベイの話では、急所を破壊された上にその前の無茶のおかげで復帰は不可能だということだ。

「そうか……すまねぇな、ライガー。無茶ばっかさせちまって…」

レイは顔を俯かせ、ライガーに謝る。

「ハイハイ、落ち込まないの。そんな顔してたら、ライガーだって成仏できないよ。レイが元気なら、ライガーも本望だろうさ。」

「ムンベイ…」

ムンベイに励まされ、顔を上げるレイ。そしてライガーの亡骸を、その両目にしっかりと焼き付ける。次の相棒をこんな目に遭わせないために。

数十分後、メリッサの風剣がニクシー基地の格納庫に到着した。風剣の口が開き、メリッサがワイヤーに掴まって降りてくる。

「おーい、メリッサ～！」

「バン！久しぶり！」

バンの元へ走っていくメリッサ。バンは軍が無断でメリッサのMS理論を軍事転用して開発された機体、コードネーム『ヴァイキング』の捕獲作戦をアーバインと共に手伝った際に知り合い、それ以来仲が良い。

「元気だったか？」

「ええ。お蔭様で。それで、レイ少尉が鹵獲したって言う機体は？」

「ああ。こっちだ。」

バンはメリッサをゼロの居る格納庫へ案内する。

「あっ…」

「ん？メリッサか。久しぶりだな。」

メリッサは途中の廊下でアーバインに出会い、足を止める。

「？どうかしたか、メリッサ？」

「う、ううん…何でもないわ。」

顔をやや紅くしているメリッサを見て、バンは頭上に疑問符を浮かべる。メリッサはヴァイキング捕獲作戦以来、アーバインの事を意識している。つまり、惚れてしまったのだ。

「大丈夫か？顔が赤いぞ？」

「だ…大丈夫だってば！気にしないで！」

バンは他人の色恋沙汰には鈍感なため、メリッサの心情が理解できていない。

だがアーバインは別だ。伊達にバンより長くは生きていない。

「何だ？調子が悪いなら、ムンベイにでも診てもらうか？お灸ぐらいはしてくれるかもな。」

「ちょっ！！待ってアーバイン！それは勘弁して！」

ムンベイのお灸と聞いて慌てるメリッサ。ムンベイの治療は効果が高いが、お灸だの針治療だの、如何せんキツいものばかりだからだ。

アーバインはそんなメリッサに背を向け、笑いながらその場を立

ち去る。

（まったく！アーバインったら！）

メリッサは頬を膨らませながら格納庫へ向かった。

「部隊長！八神部隊ちょぉぉぉお！」

そう叫びながら、シャーリーが部隊長室のドアを『バァァァァアン』という効果音と共に開け放った。自動ドアなのに。

「な、なんやシャーリー！？どないしたん！？」

「な、何が起きたですかぁ！？」

おやつのプリンを食べようとしていたはやては危うく床にプリンを落としかけ、カバンの中で昼寝をしていたリィンは驚いて飛び起きた。

「分かったんです！分かったんですよ！！」

「お、落ち着きやシャーリー！ハイ、深呼吸！」

シャーリーははやての言う通りに深呼吸し、ようやく落ち着いた。

「…で、何が分かったん？」

「そうでした。なのはさんやフェイトさんの今居る世界です！」

「ああ、なのはちゃんの…って何やてェェェェエ！？」

シャーリーの報告で、今度ははやてが慌て出した。

「ぶ、部隊長！おちついて！」

「よし、これでお終い！」

シャーリーと入れ替わりでストームソーダーの修理をしているマリエル・アテンザ、愛称マリーが言う。遂に修理が完了したのだ。

「すごい…完璧です！」

一緒に修理していたマミも驚くほど、修理が完璧にできていた。流石、１３年もの間働いてきた実力だ。

「マリーさん、ありがとうございます！」

「ううん、私はちょっと手伝っただけ。マミちゃんがこの子を直したいっていう気持ちがあったから、ここまで直せたんだよ。」

「でも、やっぱりマリーさんやスタッフの皆さんが居たからでもありますよ。ボクだけじゃ、とてもここまでは…」

と、二人が謙遜しあっているとき、格納庫にクロノがやってきた。

「あれ、クロノ提督。どうしたんですか？」

「ああ。二人とも至急、艦に乗る準備とストームソーダーの発進準備をしてくれ。惑星Ｚｉが見つかった。」

「ホントですか！？」

マミは身を乗り出し、クロノの目の前に顔を近づける。

「あ、ああ。ついさっき、発見してね。」

クロノの話によると、再三に亘る帝国の侵攻の際に発生した転移反応、それにデススティンガーの魔力の痕跡やストームソーダーから得たデータを参照した上で捜索した結果、意外と早く見つけることが出来たと言う。

「クロノ提督、それに皆さん！ありがとうございました！」

そう言うとマミはストームソーダーの口に入り、発進準備に取り掛かる。

「さて、僕も準備をするか。」

クロノも準備をしに、艦に戻っていった。

「う～ん…」

ニクシー基地の研究室では、メリッサがライガーゼロから採取したデータとにらめっこをしていた。

「どうだ？コイツの事で何か分かったか？」

ゼロのデータを取るために、散々動作テストをさせられたレイが

訊ねる。汗を拭きながら、水分補給をしている。

「オーガノイドシステム非搭載、なのに従来のブレードライガーを凌ぐ瞬発力と運動性…。すごい、こんなの今まで見たことがありません。」

「ま、帝国の新型だからな。並じゃないってのは確かだろう。」

「いえ、この機体の凄さは、性能だけじゃないんです。」

そのメリッサの一言に、レイの頭上に疑問符が浮かんだ。

「…？どういう事だ？」

「この機体、従来の開発方法と異なって、完全に野生体のゾイドがベースなんです。」

通常、ゾイドはゾイドコアを中心に、そのゾイドの元の姿と似た機械の体に組み込むこと、つまりサイボーグ化することによって作られる。だがこのライガーゼロは違う。野性ゾイドの元々のコアを使用することで、野生の荒々しさや力強さを得ることが出来るのだ。

「成る程。ゾイドの持つ、本来の力を最大にまで引き出せるって訳か。」

「はい。しかし、この機体…ゼロの場合だと一機作るのにとんでもない数の人員、経費、戦力が必要になります。」

メリッサが言うには、ゼロのコアを持つ野性ゾイドは個体数がかなり少なく、凶暴さも他の物とは比べ物にならないため、かなりの費用と危険を伴うのだという。つまり、下手に量産してもコストパフォーマンスが悪く、裏目に出る可能性もあるという。

「そういや、野生体ベースのゾイドがもう一機居たぜ。帝国らしく、

ティラノ型だ。」
「本当ですか!?」
「ああ。確かパイロットは…ヴォルフ・プロイツェンとか言ってたな。」
「プ…プロイツェン!?」
メリッサはレイの発言に驚き、危うく椅子から転げ落ちそうになった。
「野生体ベースのゾイドが二機に、プロイツェン家…何か企んでなきゃ良いけど…」
メリッサが考えていると、突然基地内に警報が鳴り響いた。
「!?」
「何だ!何が起きた!?」
研究室の扉が開き、兵士が入ってきた。
「グレック中尉!スー主任!急ぎ、ブリーフィングルームへおいで下さい!」
「何事だ!?」
「基地上空に、次元転移と思われる反応を感知しました!」
「何ですって!?」
報告を聞くと、レイとメリッサは駆け足でブリーフィングルームへ向かった。

「各機、対空砲火準備！！」

基地の外ではカノントータスやジ・オーガ、それとバンのブレードライガーにフェイトが対空砲撃の体勢に入っていた。

そして空に穴が開き、そこから現れたモノを見てフェイトは驚いた。

「く、クラウディア…！？」

自分の義兄、クロノが艦長を勤めるＸＶ級次元航行艦クラウディアだった。

すぐさま大佐に砲撃中止を求める通信を送る。

「大佐！あの艦は敵じゃありません！私の仲間です！」

「何！？分かった！各機、砲撃中止！砲撃中止ィ！」

全ての機体が対空砲火の構えを解き、警報が解除された。

その直後、一機のストームソーダーがクラウディアの後ろから姿を現した。

『こちら共和国軍航空隊所属、マミ・ブリジット少尉です！』

と、言った所でマミは自分の発言を後悔した。

（げ！ここってニクシー基地じゃん！！）

ヤバイ。機体を蜂の巣にされて今度こそ死ぬ。そう思っていたとき、レイが応答した。

「マミか!?俺だ!レイ・グレックだ!!」
「センパイ!?レイセンパイ!」

ニクシー基地からレイの通信が来たということは、既に共和国が占領したと判断し、一安心するマミ。

「バッキャロー!今までどこほっつき歩いてた!とっとと着陸しろ!」
「は、はい!すいません!」

レイに怒鳴られ、急いで基地の滑走路に着陸し、コクピットからロープで降りてくる。
目の前にはレイにバン、アーバインや大佐にフェイトなど数名が居た。マミがオロオロしていると、レイがマミのところへ歩み寄ってきた。

「あ…あの…」

レイは怒られると思っているマミの目の前に立つと―

『ポカッ!』
「あ痛ぁっ!?」

―頭を軽く小突いた。ちょっと涙目になるマミ。

「この馬鹿!心配させやがってェ～～!!」
「うわぁ!」

そこから両側のコメカミを握り拳で挟み、グリグリという効果音

と共にお仕置を加える。

「ちょっ！センパイ、痛い痛い！」
「喧しい！皆に心配かけた罰だ！」

そんなレイを見ていたバンたちもお仕置に加わり、マミはもみくちゃにされる。

「うわぁ！？皆まで！？」
『さっきも言ったけど、心配かけた罰！』

全員が口を揃えて言い放った。

「うわ～ん！折角帰ってきたのに～！」

この日、マミの死亡及び二階級特進は正式に取り消された。

第二十七話　来訪者、そして帰還（後書き）

先日、巨人がリーグ優勝を果たしましたね。ですが、面白くなるのはこれからです。クライマックスシリーズが今から楽しみなムーンアローでした。

では。

第二十八話　エースの復活

ニクシー基地司令官室。テーブルを挟んで両側に、はやてとボーグマン大佐がソファーに座っている。

「さて、まずは自己紹介から行こうか。ヘリック共和国軍大佐、アーサー・ボーグマンだ。」

「時空管理局、古代遺失物管理部機動六課部隊長、八神はやて二等陸佐です。」

大佐ははやての自己紹介を聞き、眉をピクンと動かした。

「ん？失礼だがお嬢さん、今何歳だ？」

「…は？１９ですが、それが？」

「いや、若いのにもう左官クラスとは、たいしたものだと思ってな。」

軍で左官クラスになるのは、戦場で大きな戦果を挙げた者や長く勤めて少しずつ戦果を挙げた者だ。大佐には、目の前の嫁入り前の娘が既に二等陸佐（軍では中佐に相当。）にまでのし上っているのが、どうにも不思議だった。

「ああ、管理局（ウチら）は万年人手不足なもんで。」

「成る程。納得したよ。」

大佐は喉に刺さった小骨が取れたようにスッキリした表情を浮かべた。そしてすぐにきりっとした真面目な表情になる。

「さて、そろそろ本題に入るか。この度は我が軍のブリジット少尉、

並びにフィーネを助けて頂き、感謝する。」
「いえ、私たちもブリジット少尉にデススティンガー撃退の手助けをして頂き、感謝しています。」
はやての一言に、大佐は目を開いた。
「デススティンガー!?そちらにも現れたのか!?」
「はい。おそらく偶然だとは思いますが。」
「そうか…迷惑をかけてしまい、申し訳ない。」
はやてに頭を深く下げて謝罪する大佐。
「い、いえ!頭を上げてください!大佐が謝ることなんかありません!」
はやてがあたふたしていると、テーブルの上の電話が鳴り出した。
「ん?ちょっと失礼。…『ガチャ』もしもし、俺だ。」
『大佐。ヘリックシティからの連絡で、帝国は停戦勧告を無視したとのことです。』
「そうか。報告ご苦労。」
『ハッ。失礼します。』
受話器を戻し、再びはやてと向き合う。
「我々と敵対しているガイロス帝国が、停戦勧告を無視した。ここに居れば、そちらにも危害が及ぶ恐れもあるが…どうする?」
どうやら共和国と帝国との戦争はまだ続くらしい。大佐の提案に対し、はやては少しだけ考える。

「いえ、こちらの世界に私たちが逮捕した魔導士が居ると聞きました。それなら、私たちが逃げ帰る理由はありません！」

はやての力のこもった声に、大佐はある事を感じた。

（成る程、ただ単に人数不足で佐官になった訳じゃなさそうだな。）

とても未成年とは、女性とは思えない気迫とサッパリした性格に、一発で並みの指揮官ではないことを悟った。

「と言うより…出来れば共同戦線を組みたいと思うんですけど…どないでしょうか？」

「ふむ…共同戦線か…。」

大佐は考えた。共和国と手を組みたい理由は、帝国と戦う上でゾイドの知識や戦い方を学んで役立てたいからだろう。それに、こちらとしても対魔導士戦を考えれば、管理局の存在は大きい。利害はこの上なく一致し、お互いに恩もある。断る理由など、何処にも無い。

「分かった。大統領に進言してみよう。断ることは無いと思うが。」

「ありがとうございます！助かります！」

大佐とはやては立ち上がり、がっちりと握手をした。

ドタドタドタドタ……バン！！

「なのはさん！！」

ティアナとスバルはなのはが負傷したと聞き、基地の医務室に駆け込んだ。

医務室にはフェイトにヴィータ、怪我から復帰したシグナムにエリオ、キャロが居た。

「フェイトさん！なのはさんは大丈夫なんですか！？」

ティアナとスバルは慌てているためか、大声でフェイトに訊ねる。

「うるせーぞ馬鹿ども！医務室では静かにしやがれ！！」

「いやヴィータ、お前も充分五月蝿いぞ…」

ヴィータが二人に注意するが、ヴィータ自身も五月蝿かったためシグナムにツッコまれた。

「セッテの攻撃をまともに受けたみたいで、けっこう骨折が酷いみたい…。でも、命に別状は無いって。」

「よ…よかった…。」

「まったく…スバルがなのはさんが死んじゃうなんて言うから…」

ティアナとスバルは安心して力が抜けたのか、その場に座り込んだ。

「命に別状が無いのは良いんだけどよ…なのはのヤツ、一向に目を覚まさねぇんだ。」

大きなガラス窓の向こうのベッドに寝ているなのはは、口に呼吸器を着けて眠っている。心電図も安定しているようだ。だが、白く美しい肌に所々巻かれた包帯が、痛々しさを感じさせる。

「よくもなのはさんをこんな目に…！帝国め！！」

ティアナの目が怒りに燃え、あの模擬戦のとき以上の目付きをしている。それは相棒のスバルさえも怯えるほどだ。

「ティ…ティア、怖いよ…」
「キュルク～…」

その後ろで、ドサッという何かが落ちる音がした。

「ティア…さん…」

ヴィヴィオが持っていたお気に入りのぬいぐるみが落ちたのだ。ティアナの黒いオーラに中てられたらしい。

「ほらティアナ。ヴィヴィオが怖がってるよ。少し落ち着こう。」
「…はい。」

ティアナはすぐには落ち着けなかったらしく、速足で医務室を後にした。スバルもそれを追うようについて行く。
ヴィヴィオはとことことガラス窓に近づき、なのはを見ようとしてへばりつく。

「フェイトママ…なのはママ、大丈夫なの…？」
「うん。お怪我してるけど、今はお休みしてるだけだよ。」

だから心配しないで。と付け加え、涙ぐむヴィヴィオを抱っこして慰める。
そんな葬式のような暗い雰囲気の医務室に、誰かが入ってきた。

「バンさん。それと…」
「あなたに会うのは初めてだったわね。私はフィーネ。それとこの子はジーク。」
「キュイ～。」
「あ…初めまして。フェイト・T・ハラオウンです。」

フェイトはフィーネとは会った事が無いため、お互いに挨拶を済ませる。

「でもバンさん。どうしたんですか？」
「ああ。フィーネの力が役に立つんじゃないかと思ってさ。」
「…？フィーネさんの？」

フェイトたちはその言葉の意味がよく分からず、首を傾げた。何か薬の調合術だろうか。
フィーネが看護士同伴でガラス窓の向こう側に入り、なのはの呼吸器を外す。フェイトたちはこれから何をするのかも分からないまま、ただただ固唾を呑んで見守っている。
フィーネはなのはの上体を起こし、抱きかかえると――

『――！？！？！？』

――なんとあろうことか、なのはに接吻をしたのだ。その光景を目の当たりにしたメンバーはまず口をあんぐりと開けて驚き、その後の反応は様々。フェイトは何故か悔しがり、シグナムは顔を真っ赤にしてそっぽを向き、ヴィータはそのままの姿勢で石化。エリオ

は顔を真っ赤にした後、盛大に鼻血を噴射して失神、キャロはその介抱をしている。ヴィヴィオは特に無し。まぁ当然と言えば当然なのだが。

そしてフィーネが口を離してから数秒後、その場の六課メンバー全員が、再び驚く。

「う……う〜ん…？」

なんとなのはが意識を取り戻したのだ。この出来事に一同は驚きと嬉しさで何が何やら分からなくなっている。

「おおい、みんな落ち着いて！はい、深呼吸！」

『す〜っ…ハ〜ッ…』

バンがフェイトたちに深呼吸をさせ、落ち着かせた。

そうこうしているうちに、なのはが扉を開けてガラス窓の向こう側からフィーネに連れられてきた。

「なのは！」

「お、おい、大丈夫なのかよ！？骨折してたんじゃ…」

そうだ。なのははセッテの攻撃で数箇所骨折していた筈だ。だが、当のなのはは骨折している様子も無く、ピンピンしている。

「にゃはは…フィーネさんのお陰で、骨折も一緒に直っちゃったみたい。」

「マジかよ…」

なのはは軽く言うが、シャマルもビックリの回復能力だ。

「なのはママ～！」

ほぼ完治したなのはの元に、ヴィヴィオが駆けてくる。

「ヴィヴィオ！」

なのははその場にしゃがみ込み、ヴィヴィオを受け止めて抱きしめる。

「ぐすっ…なのはママ～！」

「ごめんね、ヴィヴィオ。心配かけて、ホントにごめんね…」

血の繋がりは無いとはいえ、親子の感動の再会を目の前に、フェイトたちも自然と涙ぐむ。

「ママ…か。」

バンが呟いた。バンの母親はバンが物心つく前に他界している。故に母親と言うものをよく知らない。だが、なのはとヴィヴィオを見て、母親の大切さ、偉大さを改めて感じさせられた。

「よかった。これでひとまずは一軒…落ちゃ…く…」

突然、フィーネがふら～っと倒れだし、それをバンが受け止めた。

「！？フィーネさん！」

「お、おい！大丈夫かよ！？」

フィーネの突然の事態に、慌てて駆け寄るフェイトとヴィータ。

だが、その心配はまるで必要なかった。

「ス～…ス～…」
「…あれ？」
「もしかして…寝てんのか！？」
「ああ。フィーネがコレやった後は、大抵こうなるんだ。今日は久々だったから、疲れたんだと思うけど…」
「な、なんじゃそりゃぁあ！」

ヴィータのツッコミが炸裂した。それにしても、今日のヴィータはよく叫ぶ。

「…ねぇフェイトちゃん、訊いても良いかな？」
「ん？何、なのは？」
「何でエリオの周りが血の海なの？」

そう言われてフェイトがなのはの目線の先を見ると、血の海の中のエリオと、それを介抱しようとしているキャロが居た。

「……あああああ！！エリオが大変な事に！？」
「いかん、すっかり忘れていた！」
「シャマルさん早く来て！シャマルさぁぁぁぁぁあん！！」

こうして、再び慌しくなる医務室であった。因みに、なのはがどうやってフィーネに治してもらったかを知るのは、もう少し先の事である。

帝都ヴァルハラの郊外にあるプロイツェン邸。そこにアンナは居た。ヴォルフに呼び出されていたのだ。

「え…？私が？」

「そうだ。アンナ。お前を『プロジェクトＫＦＤ』の開発責任者に任命したい。」

プロジェクトＫＦＤ。それは先日のデススティンガーの暴走によって中止となった、デススティンガー計画の流れを汲む極秘プロジェクトだ。ヴォルフはその責任者にアンナを抜擢したのだ。

「成功すれば、アンナの発言力の確立や昇進も出来るんだが…。」

「いいわ。ヴォルフの役に立てるなら、昇進なんか関係無いもの。」

それを聞いて、ヴォルフは安心した。

「ありがとう、アンナ。」

「礼には及ばないわ。私とヴォルフの仲じゃない。」

こうして、プロジェクトＫＦＤが始動した。

第二十九話　迷える戦士（前書き）

気づけば遂にアクセス数が５００００を突破しました！自分の小説を読んで下さっている方々に、この場を借りてお礼を申し上げます！ありがとうございます！これからも、応援よろしくお願いいたします！

第二十九話です。どうぞ。

第二十九話　迷える戦士

「え！？本当ですか！？」
「ああ。レイ、お前にライガーゼロを預ける事になった。」
大佐から告げられた言葉に、レイは驚きのあまり素っ頓狂な声を上げた。

「先の作戦によるライガーゼロ鹵獲の功績、その際に機体を失った事を考えての采配らしい。よかったな、レイ。」
「そう言われると何か複雑ですけど…。」
自分の油断で長年連れ添ってきた相棒を失った事で、ゼロを新しい相棒に出来ると思うと、嬉しいような悲しいような気持ちで苦笑いを浮かべるレイであった。

「ああ、そうだ。明日からお前大尉な。」
「はぁ、そうですか……ってええ！？」
何気なく世間話のように言う大佐に、これまた驚くレイ。

「因みに、バンは明日から中尉、ロブは少佐だ。」
「それは本人に言ってあるんですか？」
「いや？俺はこれから忙しいから、お前から言っておいてくれ。」
そんなことで良いのか、と思いながら、レイはバンとハーマンにその旨を伝えに行くのであった。

「ありゃ？バンとハーマン大尉、どこ行ったんだ？」

昇進を知らせに来たレイだったが、当の二人が見つからない。自分にも仕事があるので、あまり時間を掛けてはいられない。

どうしたもんかと思っていると、近くにフェイトが居た。

「おーいフェイトー。バンとハーマン大尉知らないか？」

「あ、レイさん。お二人なら、ユーノたちと一緒に特別任務だって言ってましたよ。」

「…？よくわからねぇが、後にするか。」

伝言は後回しにし、自分の仕事に戻るレイだった。

その日の夜、基地で一番広い第一格納庫で機動六課歓迎会兼レイとバン、ハーマンの昇進祝いのパーティーが開かれた。

「えー、それでは、俺たち共和国とー」

「ウチら時空管理局との団結を祝してー」

大佐とはやてがワイングラスを高々と掲げる。

「「乾杯！」」
『カンパーイ！！』

二人の号令と共に、パーティーが始まった。

「うわぁ、コレ美味しい！エリオも食べてみなよ！」
「はい！…ホントだ、美味しいです！」「…確かに美味しいけど…」
「二人とも、何人分食べる気なんでしょう…」

スバルとエリオの手によって、山のようなご馳走が平らげられていく。因みに、エリオの鼻には未だにティッシュが詰められている。ティアナとキャロは、それをただ見ているだけである。

「ハァ～イ♪シグナムちゃん、ご機嫌いかが？」
「…？お前は？」
「私はマリン・ブルーガー。階級は曹長よ。よろしくね♪」

シグナムの所へワイングラス片手にやってくるマリン。今回は流石にパーティーと言うことで、いつもの水着の上に軍服の上着を羽織っている。顔をやや赤らめており、早くも出来上がっている様だ。

「あ…ああ。よろしく頼む。だが、どうして私の名前を？」
「あなたのトコの部隊長さんに聞いたわ。それにしても…」

マリンの目線が、シグナムのある一点に集中し、嘗め回すように見ている。

「部隊長さんの言った通り…かなりの『メロン』ねぇ～♪」
「え……？」

そう言った直後、マリンはフェイトもビックリのスピードでシグナムの後ろに回りこみ、両手でシグナムの持つ二つの『メロン』を掴んで揉み始めた。

「…ひゃあっ!?」

「う～ん、形も大きさも良いわね～♪こんな上モノ、滅多に無いわ～♪」

マリンはアルコールも合わさってノリノリになり、シグナムの『メロン』を更に早く揉みしだく。

「ちょっ…ふあっ!ブルーガー…やめ…んんっ!」

「あらあら、お硬そうな口調だったのに、意外と感じやすいのね♪それじゃあもっと…」

「調子に乗んな、馬鹿。」

「…ふげっ!」

更に暴走しかけるマリンを、アーバインが空手チョップでブレーキを掛ける。

「いったぁ～い…。もう、何すんのよ～!」

「そりゃこっちの台詞だ。飯ぐらい落ち着いて食え。」

オラ、行った行った。と言ってマリンを追っ払うアーバイン。

「す…すまない、礼を言う。」

「いや、こっちこそすまねぇな。あの馬鹿にはよく言っとくからよ。」

シグナムに礼を言われてもあまり表情を変えず、ワイングラスの

ワインをくいっと飲み干した。

「ま、今日はパーティーなんだ。楽しくやろうや。」

「…ああ、そうだな。」

アーバインの言葉で、シグナムの顔に笑みがこぼれた。と、そこでシグナムはあることに気づく。

「そういえば、お前の名前を聞いていなかったな。私はヴォルケンリッター・剣の騎士、シグナムだ。」

「俺はアーバイン。アーバイン・キャバリエーレだ。呼び方は適当でいいぜ。」

「へぇ～、なかなかいいムードだね。」

「うん。シグナムも楽しそう。」

アーバインとシグナムの様子を、少し離れたテーブルから眺めるなのはにフェイト、それとはやて。

「…なんやろ、何かアンニュイな気分になってきたわ…」

「どうしたの、はやてちゃん？」

「夜天の主のウチが彼氏居ない暦１９年やのに、シグナムが先に彼氏持ちになるってどういうことやねん！納得いかへん！絶対納得できへんわ！！」

どうやらはやても酔っ払っているらしい。内側に仕舞い込んでいた本音が次々と飛び出してくる。仕事がキツ過ぎるだの、休みが少ないだの、彼氏が出来ないだのと、言い出すとキリが無い。

「それに比べて、なのはちゃんはええよなぁ～」
「ふぇ？何の事？」
「だってそうやろ！？なのはちゃんにはユーノ君がおるやないの！彼氏の心配なんかせんでええもんなぁ！」
「ええ！？…ゲホッ！」

はやての放った一言でなのはは驚き、食べていた料理を喉に引っ掛けて咳き込んだ。

「ちょっ、何大声で言ってんのはやてちゃん！」
「そうだよ、なのはの恋人は私なのに！」
「いや、そういう話でもないんだけど…フェイトちゃんも酔ってるの？」

安心しろ、フェイトさんはいつもこんな感じです。
ところで、そのフェレットもどきことユーノはというと…

「あ〜…疲れた…」
「まさか、あんなにてこずるとは思わなかったな…」
「まったくッスよ…」

格納庫のほぼ真ん中にある、ウルトラザウルスの足元に座り込むユーノとハーマン、それにバン。レイがバンたちに伝言をしようとしていた時、彼らは食材集めに行っていたのだ。

「流石にエウロペガニを千匹はキツかったな…」
「基地周辺じゃ足りなくて、わざわざ東の方まで行く羽目になりましたからね…」

ムンベイやフィーネが先日の戦闘の影響で、ニクシー基地には市場からの輸送が出来ないというので、バンたちが採りに行ったのだ。

「お疲れ様、バン。」

満身創痍のバンの前に、大好物のサンドイッチ『ポルトマーナ』を持ったフィーネがやってきた。

「おおっ！ポルトマーナ！サンキュー、フィーネ！」

「あっちにもまだあるよ。一緒に食べよう。」

そう言われて、ヤッホイと言わんばかりに駆けていくバン。さっきまでの疲れはどこかへ行ってしまったらしい。

「なーにしょげてんのさ、大尉さん。」

「…ムンベイ。」

ハーマンの前に、酒の入った瓢箪を片手にもったムンベイがやってきた。

「折角のパーティーなんだからさ、もっと楽しもうよ。ほら、立った立った。」

「お、おいおい…」

向こうであたし特製のスタミナ料理でも食べなよ。と言って、ハーマンを引っ張っていった。

「二人とも行っちゃったよ…ハァ…」

バンとハーマン、それに周りの人たちが楽しそうにしているのを

見て、ユーノはため息をついた。自分はもう19歳で、もうすぐ20だ。なのに考古学や発掘に熱中していたおかげで浮いた話のひとつも無い。友人からはなのはとは何か無いのかと言われたが、そもそもなのはとはそんな関係ではない。

（もしかして…僕はずっとこのまま…）

めずらしくまともな青春を送らなかった事を嘆くユーノ。だんだん悲しくなってきて、体育座りの姿勢で顔を俯かせる。

「どうしたの？ユーノくん。」

その声に反応して顔を上げると、目の前にはなのはの顔があった。

「なの…は…」

「そんな所で座ってても面白くないよ？こっちで一緒にご飯食べよ？」

ユーノを立たせようと、手を差し伸べるなのは。その言葉が天然なのか好意を持って言っているのかは分からないが、どちらにしてもユーノはとても嬉しかった。眼鏡を上に押し上げ、涙ぐむ目をごしごしと拭き取る。

「…うん！ありがとう、なのは。」

「ふふっ、やっぱりユーノくんには笑顔がよく似合うよ。」

ユーノとなのははお互いに微笑むと、元居たテーブルに向かう。

「おーおー、見せつけてくれるやないか！このラブラブカップル！」

「もう、はやてちゃん！」

「あ、あはは…」

手を繋いで歩いてきた二人に向かって茶々を入れるはやて。さっきよりも更に酔っ払っている。なのははちょっと恥ずかしそうだが、ユーノは満更でもない様だ。

「よう、なのは。楽しんでるか？」
「あ、大佐。はい、おかげさまで。」
「そうか。ソイツは良かった。ところで、レイの奴を見なかったか？」
「レイさん…ですか？」

そういえば、このパーティーでなのははまだレイを見ていない事に気がついた。

皆がパーティーで盛り上がっている頃、レイは基地のテラスで寝転んでいた。

（ゼロが俺の新しい相棒…か…。）

レイはニクシー基地攻略戦で破壊された、シールドライガーＤＣ（ダブルキャノンスペシャル・ジェット）Ｓ一Ｊの事を考えていた。自分が目の前のゼロに見惚れていた所為で咄嗟の判断が遅れた為に、最愛の相棒を失ってしまったのだ。それなのに、ゼロのパイロットを務めて良いのだろうか、と。

（お前はどう思ってんだろうな…ライガー…）

今は亡きライガーに問いかけるように、レイは呟いた。

「こんなトコに居たんですか、センパイ。」

「…マミか。」

マミが真上からレイの顔を覗き込み、隣に座る。

「パーティーに参加しないんですか?」

「さっき顔出して、軽く飯は食ってきた。今はあんまり騒ぎたい気分じゃねぇんだ。」

「…ライガーの事…考えてたんですか?」

「…そんな所だ。」

マミはレイの声から、いつもよりレイの元気が無いことを感じ取った。

「なぁマミ…」

「はい?」

「俺ァいったい…どうすりゃいいんだろうな…。」

声に覇気が無い。レイの気持ちはどんどん沈んでいっているようだ。

「センパイ…失礼します。」

そう言うとマミは、再びレイの顔を覗き込むと、レイの両頬を抓(つね)って引っ張った。

「!?痛ててて!!」

レイは突然のことに驚き、たいした痛さではなかったが不意打ちのために声を上げる。マミは数秒後にやっと頬を抓るのを止めた。すぐにレイは起き上がり、マミに文句を言おうとする。

「てめぇ！いきなり何を…「甘ったれんな！！」何だと…！？」

文句を言おうとしたレイに飛んできたのは、マミの一喝だった。これまた突然の事に、レイは驚いてマミをみる。

「過去のことばっかり考えてウジウジしやがって！そんなんじゃあ、永遠に前には進めねぇぞ！！」

そう一気に言い放つと、マミはやや俯いて続ける。

「…いつものセンパイなら…今のセンパイにこう言う筈です！そんなに後ろ向きなセンパイ…ライガーに見られたら、笑われますよ！」

そう言われて、レイははっとした。自分の所為で死なせてしまったライガーのことばかり悔やんでいて、前を見ることを忘れてしまっていた。なるほど、確かに今の俺を見たら、俺と長年付き合ってきたライガーは俺のことを笑い飛ばすだろう。いや、むしろ今、俺を見て笑っているか情けなく思っているかもしれない。

「…マミ、ごめ…」

『ごめん』と言おうとしてマミの方を向いたとき、マミが目を潤ませながらレイに抱きついてきた。

「…！？お、おい！？」

「…センパイが悲しんでると…ボクも悲しいんです…だからもう、

悲しむのは…止めてください…！」

マミの目からは涙が零れている。レイはその時、再び自分の過ちに気がついた。

（マミまでこんなに心配させて…ったく！いったい俺は、何をやってんだ！）

後輩にまで迷惑をかけた自分に嘆き、レイはその両腕でしっかりとマミを包み込んだ。

「マミ…心配かけて悪かった。…ゴメンな。」

「分かってくれれば…良いんです。」

二人の間に、暫くの沈黙が出来る。その沈黙は、マミの一言で破れた。

「…センパイ…好き…です…」

「な、何！？おいマミ！」

突然のカミングアウトに驚くレイ。聞き間違いかとも思い、マミにもう一度問おうとするが、返事は返ってこなかった。

「う～ん…ムニャムニャ…」

「…寝ちまったよ。マミの奴、酔っぱらってたのか？」

取り敢えず抱きついたままのマミを剥がそうとするが、しっかりと両腕で抱き締められている為、なかなか剥がれない。

「…まぁ、もう少しこのままでもいいか…。」

無理矢理剥がすのもなんなので、暫くこのままにしている事にした。

さっきの告白も、本当は酔いによるものかも知れないが、まぁそれは明日訊けばいいかと思い、マミの温もりを感じる事にするのであった。

次の日、レイが目を覚ますと、目の前でマミが寝息を立てていた。

「うぉっ!?…あ、そうか。あのまま俺も寝ちまったのか…」

どうやらマミと抱き締め合ったまま、寝てしまったらしい。レイの真後ろで朝日が輝いている。

「やべぇな。誰かに見つかる前に…さっさと…」

見つかって誤解されないように証拠隠滅しようとしたが、時すでに遅しのようだ。いつからかは知らないが、レイの真横にリィンが居た。

「…どわぁあ!何でお前がこんなトコに!?」

「それはコッチの台詞です!レイさんこそ、何をしてたんです?」

まくし立てるリィン。そこでリィンはある一つの仮説にたどり着く。

「…ま、まさか、みんながパーティーに夢中なのをいいことに、ゴーカ…」
「違うわ!!何でそっちの方向に持っていくんだ!?」

マミをレイの体から無理やり引っぺがし、とんでもない誤解をしているリィンに必死で弁明しようとするレイ。
そうこうしているうちに、なのはにフェイト、はやてがやってきた。

「…レイさん?こんな所で何をしているんです?」
「聞いてくださいはやてちゃん!レイさんったら、マミさんが寝ている間に淫らな事を…!」
「だーから違うっつてんだろうがァァァァア!!」

更に誤解させるような発言をするリィン。するとレイとリィンが騒いでいる所為で、マミが目を覚ました。

「ん…あれ?何でボクこんなトコで寝て…?」
「おおマミ!頼む!俺の誤解を解いてくれ!昨日俺たちは何やってた!?」
「え?え~っと…」

昨日の出来事を思い出そうとするマミ。パーティーで飲んで食べて歌って踊って…

「ああ!思い出しました!」
「ホントか!?じゃあそれを話してくれ!」
「はい!確か昨日はパーティーで飲んで食べて、その後…センパイの温もりを感じながら寝ちゃったんです!」
「そうそ…って、最後が違うだろーがァァァア!」

マミも酔っ払っていた所為か、記憶が曖昧になっているようだ。
そしてこの証言は、誤解を更に加速させる要因となってしまった。

「どういう事なの？レイさん…？」
「皆がパーティーで楽しんでるときに、ヨロシクやってたんですか…？」
「これはキッツーイお仕置が必要みたいやなぁ…」

三人はバリアジャケットを装備し、各々のデバイスをレイに向けて構えた。

「ちょっ！三人とも、誤解だっての！！デバイスを収めて…」
「スターライトォ…」
「プラズマザンバァァァ…」
「ラグナロクゥ…」

三人のデバイスに魔力が集中し、かつて闇の書の防衛プログラムをも撃破した連携技の準備をし――

「「「ブレイカァァァァア！！」」」
「ギャァァァァァァア！！！！」

――レイめがけて放たれ、レイの体を飲み込んだ。

「う～ん…頭が痛い…」

レイがお仕置執行されている横では、マミが頭痛に苦しんでいた。

第二十九話　迷える戦士（後書き）

次回、ティアナの特訓開始か！？
みたいな感じで書きたいと思います。

では。

第三十話　熱血！共和国軍ゾイド道場（前書き）

楽天、クライマックスシリーズ進出おめでとう！自分の贔屓するロッテがＢクラス確定の今、自分が期待するのは楽天の優勝のみです！

さて、野球の話はこのくらいで、遂に第三十話まで来ました。どうぞ。

第三十話　熱血！共和国軍ゾイド道場

機動六課フォワード陣のまとめ役、ティアナは考えていた。この状況で、自分は不利なんじゃないか、と。最初に帝国がクラナガンに侵攻してきた時から思っていたが、ゾイドの堅い装甲の前にはティアナの射撃魔法は効きにくいのだ。スバルやエリオは並のゾイドなら自力で撃破出来るが、ティアナの場合はキャロがブーストを掛けてくれないと厳しい。それなのに今居る場所は惑星Ｚｉ。敵も味方もゾイドだらけだ。いつまでもキャロに頼るわけにもいかないし、別々の任務になる可能性だってある。

そこでティアナはひとつの結論を出し、それを申し出るためにムンベイの所にやってきた。

「ムンベイさん！私に…対ゾイド戦の訓練をしてください！」

「何？ティアナが特訓？」

朝飯を食べ終えて、デスクワークに取り掛かろうとしていた大佐の元に、ムンベイが機体の使用許可を取りに来ていた。

「ええ。なので、ガイサックとコマンドウルフの使用許可を頂きたいんですけど…。どうでしょう？」

「別に構わないが…なかなか熱心なヤツだな。」

昨日パーティーがあったばかりなのに、その翌日の朝からもう訓練をしようというティアナに感心する大佐。

「よし、後で俺も見に行く。しっかりコーチしてやれよ。」

「了解！」

そう言うとムンベイは司令官室を出て、格納庫に向かった。

ニクシー基地から１ｋｍほど離れた平野に、バリアジャケットを着てクロスミラージュを構えたティアナと、サソリ型ゾイドの『ガイサック』に乗ったムンベイが向かい合っていた。その様子を、少し離れた位置でなのはとヴィータ、それにアーバインが見ている。

「なのは、他の連中の訓練は良いのか？」

「フェイトちゃんに頼んで来たから、それは大丈夫です。」

「しっかし…いくら味方とはいえ、アイツを見てると昔のことを思い出しやがるぜ…」

ヴィータはガイサックを見て、昔なのはに重傷を負わせた兵器を思い出していた。その兵器も、ガイサックと同じく多脚型だったのだ。

「よーし、そんじゃあ最初は対近接戦の練習からやるよ！」

「はい！よろしくお願いします！」

双方共に準備が整い、アーバインが拡声器を構えて開始の合図を出す。

『3、2、1…GO！』

開始と同時に、ガイサックが弧を描きながらティアナに接近しようとする。それを見てティアナは周囲に魔力弾をすばやく生成する。

「クロスファイァァァア…シュート！」

両腕を交差させてすばやく振り抜くと、オレンジ色の魔力弾がガイサックめがけて飛んでいく。ガイサックは加速してかわそうとするが、魔力弾は軌道を変えて追いかけてきた。

「おっと、追尾式か…だったら！」

ムンベイは機体前方に付いているスモークディスチャージャーを使用し、辺りに煙幕を張る。

「くっ、煙幕!?クロスミラージュ、モードツー！」

『OK. Dagger Mode.』

ガイサックの姿を見失った為、ティアナは魔力弾の誘導を中止、クロスミラージュをダガーモードにして身構える。

（どこから来る…？）

ティアナはガイサックの奇襲を警戒して、視界が乏しい中必死でガイサックの姿を探す。すると、後ろで何か機械の起動音がかすか

に聞こえた。

「！そこっ！！」

ティアナが素早く振り向くと、数メートル前方にハサミを振り上げているガイサックを発見した。早めに反応できたため、ハサミの回避に成功。直後に攻撃の隙を突いて、ガイサックの脚を斬りつける。

だが魔力刃は『ガキィン！』と鈍い音を立てて弾かれてしまった。

「っ！やっぱり駄目か…！」

装甲に弾かれた所為で、手がじぃんと痺れるティアナ。

ガイサックは本来、砂漠地帯での奇襲攻撃を得意とする機体で、砂の中に隠れるためにさほど重く堅くは造られていない。だがそれでも、ティアナの魔力刃を弾くぐらいの堅さは持っている。

（この機体は、共和国でも旧式でそんなに強い部類には入らないって聞いた…）

（この程度が倒せないんじゃ、帝国には勝てないよ。さあ、どうする？）

ガイサックは一瞬怯んだティアナに向けて、訓練用のマーカー弾を装填したマシンガンを発射した。

だがティアナはそれをすんでの所でかわし、お返しに二丁拳銃に戻したクロスミラージュの魔力弾を数発お見舞いする。回避運動の直後に撃った為、ロクに照準を合わせなかった射撃はガイサックのハサミ、胴体、コックピットを襲い、キャノピーにヒビを入れた他、背部のマシンガンを破壊することに成功した。

「ありゃ、マシンガンがやられちゃったか…だったら…」

ガイサックはティアナと向き合い、何か仕掛けてくると判断したティアナはバックステップで距離を取る。

「行くよ、ティアナ！突撃ィ！」

八本の脚を素早く動かし、一気に加速してティアナに突進するガイサック。両方のハサミを振りかざしながら、自動車並みかそれ以上の速さで突進してくる１０メートル程の兵器を見たら、普通の人間は怖気（おじけ）づいて動けなくなるだろう。だがティアナは違う。こんなモノよりも強大でキツい、『ＪＳ事件』と言う名の修羅場を乗り越えてきたのだ。

「こんな物に…ビビッてられない！」

ティアナは冷静にガイサックを引き付け、ギリギリの所で横に飛んで回避した。

「うわっ！？あそこから避けれるかね、フツー！？」

「今だ！クロスファイァァァア…」

ティアナはすぐに飛び起きると、周囲に5、6個の魔力スフィアを発生させ、それらを自身の正面で渦巻かせながら一つに収束させる。

（あれ？あの術式は…）

なのははその魔法に見覚えがあった。かつて、ティアナとの模擬戦の時になのはがティアナに対して使ったクロスファイアシュート

のバリエーションだ。

「シューーーート！！」

収束された魔力スフィアはあたかも一種の砲撃魔法となり、勢いを抑えきれずにオーバーランして背を向けていたガイサックに直撃した。

「わぁぁぁぁあっ！？」

ムンベイは背後からの一撃に声を上げ、ガイサックはそのまま機能停止（テムフリーズ）（シス）した。

「よし、そこまで！」

アーバインが模擬戦終了の合図を出し、この模擬戦はティアナの勝利で終わった。

「ふぅ、やるじゃん！」

「うん。クロスファイアシュートのバリエーションも良かったしね。」

「ありがとうございます！」

模擬戦を終え、グスタフのトレーラーの中で休憩しているティアナとムンベイ。ムンベイとなのはに褒められて、ティアナは顔に笑

みを浮かべる。

「ま、ガイサックを倒したくらいで喜んでちゃ、キリがねぇけどな。」

アーバインの一言に、ティアナは少しムッとした。だがアーバインの言うことも一理ある。ガイサックは最早旧式の機体。帝国の主力機であるレブラプターはこれよりも強力だ。

「じゃあ、どうすれば認めてくれるんです？」

「そうだな…」

アーバインは辺りを見渡し、ムンベイが持ってきた二機目のゾイド、コマンドウルフを見つける。

「よし、しばらく休んだら俺と模擬戦でもやるか？」

「わかりました。私が勝ったら、認めてくださいね？」

「…考えてやるよ。」

そう言うと、アーバインはコマンドウルフに乗り込んで準備を始める。

「コマンドウルフか…久しぶりだな。」

アーバインはコマンドウルフのコックピットに座ると、かつての相棒だったロングレンジライフル搭載型のコマンドウルフを思い出した。軍に雇われる以前はコマンドウルフで賞金稼ぎをやっていたが、軍と契約した後に大破し、直後にジ・オーガに認められてパイロットになった為、それからは乗っていなかった。

「さて、勘が鈍ってなきゃ良いけどな。」
アーバインはウルフを起動させ、辺りを軽く走りに行った。

「おぉい、なのはー。」
デスクワークを終えた大佐が、ブレードライガーに乗って見学しに来た。

「あ、大佐ー。仕事は終わったんですか?」
「おう、バッチリだ。で、どうなってる?」
「ええ。最初にムンベイさんのガイサックと戦ったときは勝ったんですけど…」

「どうしたどうした!機動六課のフォワードのリーダーってのは、そんなもんかよ!?」
「くうっ…!まだまだァ!」

アーバインの操るコマンドウルフの前に、ティアナは苦戦していた。隙の無い立ち回り、高い回避能力、一瞬の隙すらも見逃さない洞察力。どれをとっても一級品だ。流石、長年コマンドウルフで戦ってきただけのことはある。
アーバインはティアナに向け、ウルフの頭を下げて頭突きの体制で突撃を仕掛けて来る。

「どしたぁ!?ボサッとしてると轢かれるぜ!」
「くそっ!」

ティアナは咄嗟に右に飛び込んで回避する。ガイサックよりも数段速い為、引き付けるなどと余裕のある行動は取れなかった。

「よし!死角を取った!」
「甘ぇな!」

ティアナは飛び起きて直ぐに射撃の体勢を取ったが、オーバーランしかけていたウルフが瞬時に左135度の急旋回を行い、あっという間にティアナの正面に躍り出た。

「!?そんな…!!」

射撃の体勢を取っていたために回避が間に合わなかったティアナは、ウルフの頭突きを正面からモロに喰らってしまった。

「がはっ…!」

ティアナは勢いよく後方に吹き飛ばされ、それをなのはが魔力のネットで受け止める。アーバインがちゃんと加減をしていたとはいえ、ゾイドの突進からの頭突きを受けたのだ。バリアジャケットのお陰で外傷こそ無かったが、ティアナは意識を失ってしまっていた。
ウルフはブレーキを掛けてなのは達の数メートル手前で停止し、コックピットからアーバインがひらりと飛び降りた。

「お疲れさん。しかし、もう少し手加減した方が良かったんじゃないか?」

「今すぐに戦力が必要なんです。そんなヌルい事してたら、いつまで経ってもモノになりゃしませんよ。」
「そうですね。やっぱり実戦形式でボコボコになった方が学ぶことは沢山ありますよ。」
「物凄い教導方針だが…成る程、一理あるな。」

さて、そろそろ帰るぞ。と大佐が言い、なのは達は基地に帰っていった。

「あれ?基地の前で何かやってますよ?」

なのはがグスタフの背中から基地を見ると、三機のぎこちない動きのガンスナイパーが基地の前をうろついていた。そのうちの二機が頭をぶつけ合い、バランスを崩して横転した。

「ようお前ら。何やってんだ?」
「あ、なのはさん。」

大佐が声をかけると転んでいないガンスナイパーのキャノピーが開き、中から現れたのはヘリパイロットのアルトだった。

「ア、アルト!?何やってんの!?」
「いやあ、この世界にはヘリなんて無いじゃないですか。だから、主力のガンスナイパーだけでも乗りこなしておこうかと…。」

アルトの話によれば、ハーマン大尉…もとい少佐がヴァイスとアルトがヘリのパイロットだと聞き、それなら試しにゾイドに乗ってみるかと言ったのが始まりで、操縦の練習をしていたらしい。
因みに横で転んでいるのはヴァイスとシャーリーだという。

「あたたた…あれ、なのはさん？今お帰りで？」
「あははは…恥ずかしい所見られちゃいましたね…」
「ヴァイス君はともかく、何でシャーリーまで乗ってるの？」
「いやあ、これから修理したりするのに、ゾイドの事も知っておこうかと思いまして…」

ところで、質量兵器が禁止されているミッドチルダの組織である管理局の局員がゾイドに乗っても良いのかと言うと、この世界は管理外世界のため、その法律が適用されないからだ。

「…まぁヴァイス・グランセニック陸曹及びシャリオ・フィニーノ一等陸士。お前らガンスナイパー横転の際に一部破損させたから、始末書な。」
「え〝え〝！？」
「そんなぁ！大佐は私たちの直接の指揮官じゃあないじゃないですかぁ！」
「今は協力関係にあるんだから、俺の直接の部下じゃなくてもそれくらい命令できるんだよ。ほら、分かったらさっさと始末書書いて来い。」
「「は～い…」」

ガンスナイパーをグスタフに起こしてもらい、ゆっくりと転ばないようにしぶしぶと格納庫に向かって歩き出す二人であった。

「にゃはは…すいません大佐。」
「いや、気にするな。（しかし…初めてにしちゃあセンスが良いな。もう少し練習させればモノになるかもしれん…）」
今度はやてに言っておくか。と思いながら大佐はブレードライガーを格納庫に向かわせる。

「体の調子はどうだね？セッテ。」
「はい。何処も異常ありません。ありがとうございます、ドクター。」
ここはルドルフに支給されたスカリエッティ専用ラボ。
スカリエッティに体を直してもらい、負傷前と変わらない体に戻ったセッテ。
「そうか。今回はこちらの技術を使用してみたのだが、異常は無い様だな。」
どうやら負傷前とは微妙に違うらしい。ゾイドに使われる技術を戦闘機人用にして流用し、ゾイドに乗った際のシンクロ率を極限まで高められるようになったのだ。つまり、この改造は『ゾイドに乗ること』を前提にした上での改造なのだ。勿論、乗らなくとも充分強いのは変わらないのだが。
「ドクタ～。」

クアットロが語尾を伸ばした声でスカリエッティを呼ぶ。

「どうしたんだい？クアットロ。」

「摂政さんがお呼びですよ～。至急屋敷に来てくれ、と。」

「そうか、分かった。直ぐ行く。」

スカリエッティは椅子から立ち上がり、白衣を靡(なび)かせながらスカリエッティ用のレドラーが居る格納庫に向かった。

第三十話　熱血！共和国軍ゾイド道場（後書き）

さて、今回の大佐の言動でヴァイスたちがゾイドに乗ることがほぼ確定しました。『ぜひあのゾイドに乗ってほしい！』などのリクエストや感想、お待ちしております。

では。

第三十一話　なのはさんの特別レッスン（前書き）

この小説に平行して、別のクロス小説も書き始めました。そちらもよろしくお願いします。

第三十一話です。どうぞ。

第三十一話　なのはさんの特別レッスン

「う〜ん…？」

ティアナがコマンドウルフにはね飛ばされてから数時間が経ち、昼も過ぎた辺りでティアナが目を覚ました。

「そうだ、私はアーバインさんに負けて…！？今何時！？」

ティアナは慌てて辺りを見渡すと、医務室の壁に掛かった時計を見つけた。

「…嘘！もう二時！？」

ティアナは慌ててベッドから飛び起きると、基地内の訓練室に向かって走り出した。

「うおぉぉぉぉぉお！！」

訓練室では、フォワード陣対なのは・ザビンガ組が模擬戦を行っていた。

なのは目掛けて、スバルがリボルバーナックルを突き出しながら突進する。

「レイジングハート！」
『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』
レイジングハートがなのはの目の前に魔方陣の様な円形の障壁を展開し、スバルの一撃を力点をずらして受け流す。
「わわっ！？」
攻撃を受け流されたスバルはその勢いを止められずに、バランスを崩して転倒した。
「アクセルシューター！」
『Ａｘｃｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ』
なのはは自身の周囲にピンク色の魔力弾を四つ発生させ、追い討ちとばかりに転んでいるスバルに向けて発射した。この体勢なら、六課に配属されたばかりの頃のスバルだったら直撃していただろう。
「うわっと！」
だが今は違う。『ＪＳ事件』を戦い抜いてきたスバルは最初の頃よりも格段にレベルアップしている為、咄嗟に起き上がって回避に成功した。
「いい一撃だよ、スバル！でも、あんまり突撃ばっかりっていうのも良くないよ！」
「はい！すいません、なのはさん！」
なのはに諌められ、その部分を反省するスバル。そして再びなのはに一撃を喰らわせるために、カートリッジを一発ロードしてから

なのはに向けて走り出す。
リボルバーナックルに環状魔方陣が現れ、その中に水色の魔力が収束する。だがなのはも同様に、レイジングハートの先端にピンク色の魔力が収束している。

「一撃必倒！」
「全力全開！」
『ディバイィィィィイン…バスタァァァァァア！！』

スバルとなのはは同時にディバインバスターを発射し、お互いの魔力がまるで刀同士の鍔迫り合いの如くぶつかり合う。

「おりゃぁぁぁぁぁあ！！」
「うっ…凄い気迫だね…でも、まだ甘いよ！」
「！？」

そう言われてスバルがほんの少しだけ左を見ると、ヴィヴィオが乗っていたときのサイズに縮小したザビンガがスバルに向かって突進してきた。

「なのはさんに気を取られすぎだよ！」
「くっ！」

スバルはディバインバスターを中止し、体を捻りながら後ろに飛んで、なのはのディバインバスターをギリギリで回避した。

「！？しまった！」

ザビンガはスバルを狙って飛んでいたが、そのスバルが回避運動を取ったおかげで、スバルの居た場所にはなのはのディバインバス

ターがあった。

「ザビンガ君！」
「大丈夫！うおりゃあ！」

ザビンガは砲撃に直撃するギリギリで真上に体を逸らし、なんとか回避に成功する。

「エリオ！今！」
「はい！」

スバルがエリオに合図を送った。気づくとザビンガの真上には、フリードリヒに乗ったエリオがストラーダを構えていた。

「げ。しまった…」
「うおぉぉぉお！紫電・一閃！」

エリオの右手に電撃が纏い、勢いよくフリードリヒからダイブしたエリオがその右手でザビンガを殴りつけた。

「うわぁぁあ！！」

電撃の拳をまともに受けたザビンガは、そのまま墜落した。

（ちぇっ、僕の方がスバルに気を取られすぎだった、ってことか…）

自己反省しながら、ザビンガは手のひらサイズになってヴィヴィオの元に飛んでいった。

ティアナが訓練室に着いた頃には、既に模擬戦が終了した後だった。エリオの話によるとザビンガを倒した後、ほんの一瞬油断したスバルたちの隙を見逃さずに、なのはがディバインバスターを撃ち込んだらしい。

「今日はティアナが居ない中、いい動きだったよ。」

「ま、詰めが甘かったけどな。」

なのはが良かった所を言い、ヴィータが悪かった所を述べる。

「すいません！遅れました！」

全力で走ってきたティアナが、息を切らしながら叫んだ。

「何だティアナ。もう終わっちまったぞ。」

「す、すいませんでした！」

「いいんだよ、ティアナ。さっきアーバインさんと戦ったばっかりなんだから。」

アーバインが全力でやったから仕方ないと言うなのはだが、遅れてしまった上に訓練まで休むのは図々しいと言って食い下がる。

「う～ん…どうしようか…」

ふと、なのははさっきのムンベイとの模擬戦を思い出し、ティアナの今日の訓練メニューを思いついた。

「じゃあティアナ、あなたに特別メニューを与えます。」
「特別…メニュー…？」
なのはの提案に首を傾げるティアナ。
「今回訓練するのは、クロスファイアシュートのバリエーション。」
「…バリエーション、ですか。」
「そ。例えば今日の朝、ムンベイさんに使ったアレとかね。」
つまり、クロスファイアシュートを応用した砲撃魔法に近い物を完成させ、自在にコントロールさせようと言うことだ。
なぜ砲撃魔法を教えないのかと言うと、新しい魔法を覚えるよりも既に持っている魔法の応用版を習得する方が早く、安定して使えるからだ。
「さて、それじゃあ訓練を始めよっか。」
「よろしくお願いします！」
「じゃあまずは、普通にやってみて。」
なのはの指示を聞いたティアナが意識を集中し、自分の正面に魔力スフィアを四つ生成する。そしてそれらを一つに纏めていく。
「クロスファイア……シュート！」

大きく一纏めになったスフィアは一直線に飛んで行き、アーバインが持ってきたスクラップに直撃する。

「うん、良いよティアナ。じゃあ次は、もう少し大きくしてやってみて。」

「はい！」

ティアナは先程よりも多くのスフィアを使い、大きいスフィアを作り出す。それを再びスクラップに向けて撃ち込んだ。

「じゃあもう少し大きく！」

「はい！」

更に多くのスフィアを纏めて発射する。そんな訓練を続けていった。

「はい、今日はここまで！」

「あ…ありがとう…ございました…」

訓練を終えたティアナは、息を荒らげて満身創痍になっていた。なにせなのはの観る中、数時間も砲撃バリエーションの訓練をしていたのだ。かなりのプレッシャーだっただろう。

「よう、なのは。終わったみてぇだな。」
「あ、アーバインさん。はい。たった今。」

訓練室にアーバインがスポーツドリンクを持ってやって来た。

「よっ、お疲れさん。」

そうティアナに言うと、右手のドリンクをヘロヘロのティアナに渡す。

「…どうも。」

ティアナはアーバインの手から、ドリンクをひったくるかの様に受け取る。

「にゃはは…。嫌われちゃいましたね。」
「やれやれ、とんだじゃじゃ馬だな。」

ティアナはそっぽを向いて、ドリンクをストローから一気に吸い上げる。

「そんなティアナに、訓練後のクールダウンを提供してやろう。」
「…？クールダウン？」
「おうよ。ムンベイ！」
「はいは～い♪」

突如ムンベイが現れ、ティアナを担ぎ上げる。

「ちょっ！ムンベイさん！？」

「一名様、ごあんな～い♪」

じたばたするティアナをよそに、どこかに強制連行するムンベイ。

「ムンベイに任しときゃ、明日に疲れが残るなんて事はねぇだろうよ。」

「ええ。…ところでアーバインさん、これから何が始まるんです？」

なのはがアーバインに訊ねる。

「ああ、『お灸』だ。」

「…え？」

どんな技術なのかと思っていたなのはは、一瞬ポカンとする。

「地球出身だってんなら、知ってるだろ？」

「知ってますけど…。もっと凄いテクノロジーとかかと…」

「そんなのより、アイツのお灸の方がよっぽど効くぜ？…その分かなりキツいけどよ。」

昔、自分が怪我をした時のことを思い出すアーバイン。そのときも、ムンベイのお灸が活躍したのだ。

「ぎゃァァァァァァ！！」

「…始まったみてぇだな。」

「…にゃ、にゃはは…」

ティアナの絶叫を聞き、引きつった笑顔になるなのはであった。

ニクシー基地の廊下を、なのはとアーバイン、それと気絶したティアナを抱えるムンベイが雑談しながら歩いていた。

「そういや、訊こうと思ってたんだが…」
「？なんですか？」
「ヴィヴィオっていったい誰の…」

話をしている途中だったが、目的地のロビーにたどり着いた。

「なのはママ～！お帰りなさ～い！」
「ただいま、ヴィヴィオ。」

なのはの姿を確認した瞬間、ヴィヴィオはなのはに飛びついていった。

「フェイトママと良い子にしてた？」
「うん！」

なのはの問いかけに、満面の笑みで答えるヴィヴィオ。なのはとフェイトが見つかったこともあってか、落ち込んでいた分を取り戻すかのように、最近は特に明るい。

「やっぱり、親子って良いですよね～」

ムンベイから『魂の抜けかけたティアナ』を受け取ったスバルがアーバインとムンベイに言うが、当の二人は真っ白になって固まってしまっている。

「…あの、アーバインさん？ムンベイさん？」

スバルが言葉を掛けるが、まるで返事が無い。ただの屍のようだ。

「えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！？？」

十数秒後、二人の驚愕による叫びが基地内にこだました。

第三十一話　なのはさんの特別レッスン（後書き）

今回は少し短かったですが、感想等、お待ちしております。

では。

第三十二話　六課と共和国の今後（前書き）

ゾイド人気が再び再燃する事を願っているムーンアローです。
やっぱりバンの時代が一番だったなぁ…

第三十二話です。どうぞ。

第三十二話　六課と共和国の今後

「なぁんだ。もう、ビックリさせないでよ～」

フェイトから、ヴィヴィオについての説明を受けたムンベイが言う。

「しょうがないですって。いきなり『なのはママ』なんて聞いたら、絶対混乱しますよ。」

「ああ。それにしても…」

レイが少し離れた所に居る、ジークに乗って遊ぶヴィヴィオを見る。

「あんな小さな子供まで利用して反乱を起こすなんて、そのスカリエッティとか言うヤツはかなりの外道みてぇだな。」

「おまけに戦うために生まれた『戦闘機人』とか言う連中…。それだけでも十分に外道だろ。」

「そんなヤツらが惑星Ｚｉに逃げてきた上、帝国と手を組んでる。笑える話じゃないね。」

レイたちがなのはから聞いた情報を整理する。幾つか伏せている部分もあったが、大体の事情は理解した。

会話をしていると、ロビーの扉が開いてボーグマン大佐が入ってきた。

「よう、お前ら。これからミーティング始めるから、ミーティングルームに集合な。」

『了解！』

「了解です！」

周りが了解と言うのに合わせ、ヴィヴィオも真似して敬礼して了解と言った。

「おっ、えらいぞ。褒美にこれを与えよう。」

大佐がヴィヴィオに与えたのは、どこにでも売っていそうなイチゴ味の飴玉だった。

「ありがとうございます！」
「はっはっは。どういたしまして。」

ヴィヴィオは貰った飴玉の包みを開き、中身を口に頬張ると満面の笑顔を浮かべた。

「すみません、大佐。」
「いや、気にするな。それにしても、よくできた娘さんだ。」
「にゃはは…」

お前もいるか？と言って、懐から同じ飴玉を取り出す。

「いえ、私は…」
「冗談だ。お前ら、ミーティング遅れるなよ。」

そう言って大佐は部屋を出て行った。
ヴィヴィオは美味しそうに飴玉をなめている。

「ヴィヴィオ、美味しい？」
「うん！」

フェイトが訊くと、ヴィヴィオは再び満面の笑みを浮かべ、その場に居た全員が和んだ。

大佐のミーティングの内容は、これからの共和国軍及び、管理局の方針だった。

共和国と管理局が協力して帝国に協力するスカリエッティ一味を拘束すること、そしてなにより、この戦争の早期終結が目標となった。

だが、共和国も先の戦いで疲弊しているので、戦力の立て直しが急務だ。そこで、本国で企画された新型がいち早くこの基地に配備される事になったのだ。

因みにはやては六課のデスクワークが残っている為、一度ミッドに帰っていてこの場には居ない。

レイたちはミーティングで、その新型機のカタログスペックの説明を聞いていた。

「さてメリッサ。よろしく頼む。」

「はい。では、まずはこちらをご覧ください。」

メリッサが言うと、モニターに大型の狼型ゾイドの完成予想図が映し出された。

「まずはＲＺ－０５３『ケーニッヒウルフ』です。この機体は、先日レイ・グレック大尉が鹵獲したライガーゼロと同じく完全野生体ベースによる開発方法を採用しており…云々…」
「…固いな。」
「はい？」

説明をするメリッサに、大佐が横槍を入れるような発言をする。

「いや、説明してくれるのは良いんだがな。ここにいる連中が、その説明を完全に理解できるかどうかがちょっと不安でな。」
「大佐。そいつァまるで、俺たちがバカばっかりみたいな感じに聞こえるんですけど？」

レイがカチンと来た様子で大佐に言う。

「別にバカばっかりとは言わんさ。だが、お前らはメリッサの説明を完全に理解できてるか？」
「…そりゃあ…まぁ…。完全には…」
「だろ？安心しろ。俺だって全部は理解出来ちゃいないさ。」

あんたがそれじゃ拙くないですか？とハーマンが突っ込んだが、大佐は華麗にスルーした。

「ハァ…。分かりました。簡単に説明します。要は、コスト面で辛いライガーゼロの代わりとして、操縦しやすくて主力になり得る機体という事です。」
「成る程。ゼロやジ・オーガと違って、乗り手は選ばないって事か。」

かなり簡単な説明で、その場の全員が瞬時に納得した。
他にも遠距離砲撃を得意とするアンキロサウルス型の『ガンブラスター』、コマンドウルフの後継機で隠密戦闘を得意とするキツネ型の『シャドーフォックス』等が紹介された。

「そして最後が、ご存知の方も多いと思いますが…」

モニターには、巨大なボディに二本のドリル状の角、灰色の重装甲を持つどっしりとしたゾイドが映し出された。

「…！メリッサ。そいつはまさか…！」
「はい。トリケラトプス型陸上旗艦ゾイド、『マッドサンダー』です。

マッドサンダーの名が出た途端、その場の共和国メンバー全員がどよめきの声を上げた。
だが、なのはやフェイトといった機動六課メンバーは何がなにやら分からない。

「あの…マッドサンダーって？」

意を決して、なのはが質問する。

「おお、そうだった。なのはたちは知らなかったよな。メリッサ、よろしく。」
「はい。マッドサンダーとは、半世紀ほど前の大戦で共和国の決戦兵器だった機体です。前面に装備された反荷電粒子シールドは、内部に内蔵された特殊な振動体が荷電粒子砲を吸収して無効化、さらにそこに装備された巨大ドリル『マグネーザー』は如何なる重装甲だろうと貫く程の破壊力を持ちます。」

「だが、その大戦の後に起こった『惑星Ｚｉ大異変』によって個体数が極めて減少した。それで実戦配備には程遠い、伝説的な存在になったって訳だ。」

メリッサの説明の後にレイが付け加えた。

「最強の矛と盾を持った機体…か。撃破はされなかったのですか？」

シグナムはその存在自体が『矛盾』と考え、大佐にマッドサンダーの戦歴を訊く。

「ああ。そいつは共和国を勝利に導いた程強力な機体だったらしいが、空を飛べずに帝国の大型飛行ゾイドに墜とされたと記録されている。」

シグナムはその答えを聞き、真に最強なのは『矛』のみであり、やはり絶対無敵は有り得ない事を理解した。

「で、ソイツらは何時来るんだ？」

アーバインがメリッサに訊く。

「ケーニッヒウルフとガンブラスターは開発も順調だから、半月もすれば配備されると思うわ。」

「半月か。ならそれまでに俺たちがやるべき事はやっちまわねぇとな。」

その後、スカリエッティ一味の顔写真やナンバーズの能力についての説明を行い、ミーティングは終了した。

ミーティング終了後、レイはメリッサに呼び止められた。

「グレック大尉。ゼロの件でちょっと…。」
「？分かった。直ぐに行く。」

ニクシー基地の研究室。そこでレイはゼロに搭載されたシステムの説明を受けていた。

「ＣＡＳ（チェンジング・アーマー・システム）？」
「はい。これは戦況や任務に合わせて、ライガーゼロの装備を装甲ごと変更できるシステムです。」

パソコンのディスプレイにライガーゼロの再現ＣＧが表示され、近接戦闘タイプ、高機動タイプ、重装甲の砲撃戦用タイプの三パターンのイメージが現れる。

「野生本来の力に加え、あらゆる状況にも対応できる機体…。なるほど、どうやら俺はとんでもない代物をかっぱらって来たらしいな。」
「今頃気づいたんですか？」
「薄々は気づいてたさ。コイツは他のゾイドとは一味も二味も違うってな。」

レイは自分が初めてゼロの姿を見たときの事、その操縦桿を握っ

たときの事を思い出す。その短時間でレイはゼロが他のゾイドとは違う、特別な存在だという事は認識していたが、ここまでの存在だとは思ってもいなかった。

「しかし、コイツが何機か居りゃあ、頼もしい限りだよな。」
「そうですね。という訳で…」

メリッサは椅子を回転させ、レイに向き合うと明日からの任務を言い渡す。

「ゼロの野生体を三体、部隊を率いて捕獲してきて下さい！」
「おお……何!?」

メリッサの突然の指令に、レイは驚く。

「量産化でもすんのか?」
「いえ、ゼロはコストが高すぎるため、次期量産型はケーニッヒウルフに決定しています。この三体は、エース用の機体として運用する予定です。」

ゼロはどんなに安く見積もってもブレードライガーの三倍のコストが掛かる為、実力のあるエース用に捕獲するのだという。

「了解だ。ウチの部隊の連中に伝えとく。一週間以内で完了させて見せるぜ。」
「はい！頼りにしてますよ?」

じゃ、明日のためにとっとと寝るわ。と言って、レイは自室に戻っていった。

第三十二話　六課と共和国の今後（後書き）

感想等、お待ちしております。では。

第三十三話　ライガー・クエスト（前書き）

学校でもオフィスでも、プロ野球界でもインフルエンザが蔓延っている今日この頃、皆様如何お過ごしでしょうか。ムーンアローです。ホントにヤクルトはインフルエンザさえなければ、もう少しいいセン行ってたと思います。

ちょっと遅くなりましたが、第三十三話です。どうぞ。

第三十三話　ライガー・クエスト

広大なエウロペ大陸の更に西、西エウロペ大陸。そこは大陸の中でも人口密度がかなり低く、多くの野生体ゾイドが生息する。
今回のレイたちの任務は、この西エウロペ大陸に棲むライガーゼロの野生体を三体、捕獲する事だ。

「つー訳で、この艦は後三十分で作戦区域に進入する。各自、持ち場に着け！」
『了解！』

本作戦の司令官であるレイの指示と同時に、パイロットは自機の出撃準備に向かい、艦のクルーも持ち場に向かった。
因みに今回のメンバーはレイを始めバンにマミ、フェイトにユーノ、シグナムとヴィータを中心に、プテラスとストームソーダーの混成式一個小隊、コマンドウルフ二個小隊、それと今乗っているものを含めたネオ・タートルシップが三隻だ。
何故野生ゾイドの捕獲任務に戦力が割かれるのかと言うと、野生ゾイドは基本的に凶暴な物が多く、今回のターゲットであるライガーゼロのような個体の捕獲は、下手な戦いよりも過酷な任務になりかねないからだ。

「あれ？レイさんのゼロは？」

なのはが格納庫内を見渡すと、レイのライガーゼロが何処にも無い事に気づいた。

「どした？なのは。」

「いえ、ゼロが何処にも…まさか忘れてきたんじゃ！？」

「そんな訳あるかよ。まだ装甲が完全じゃねぇんだ、こんな過酷な任務に持って来れねぇっての。」

レイ曰く、素体のゼロはガチンコ必至のこの任務には向かないので置いて来たとのことだった。

「だから今回は、量産型のシールドライガーを借りてきたんだよ。」

「ああ、そういうことですか。」

レイの説明に納得するなのは。

レイの持ってきた量産型のシールドライガーには、簡単な高機動スラスターが搭載され、さらに特殊兵装にスタンバレット、つまり目標を痺れさせて動きを止める弾丸を装備している。

「なのはも準備しとけよ。お前ら魔導士のバインドには、期待してんだからよ！」

「任せて下さい！」

レイに期待され、なのはは笑顔を浮かべて元気よく返事をする。

レイはコクピットに乗り込み、今回限定の相棒の出撃準備をする。

「さて、よろしく頼むぜ。相棒代理！」

そう言って、コンソールをぴたぴたとほんの軽く叩く。

『グレック大尉、あと一分で作戦区域に進入します！』
「了解だ！航空戦力を順次発進させろ！」
『了解。プテラス第一波、出撃どうぞ！』

三隻のネオ・タートルシップからプテラスの第一波、およそ二十機が発進する。

「なのは、甲板には着いたか？」

レイはなのはに通信を送る。通信越しに、カンカンと鉄の階段を駆け登っていく音が聞こえる。

『後少し…今着きました！』
「よし！高町一等空尉、Ｔ・ハラオウン一等空尉、スクライア司書長は、直ちに出撃せよ！」
『了解！スターズ０１、高町なのは！』
『ライトニング０１、フェイト・Ｔ・ハラオウン！』
『ユーノ・スクライア！』
『『『行きます！』』』

機体発進用とは別の甲板から、なのはにフェイト、ユーノが飛び立っていった。

「おい、アタシたちは出なくてもいいのかよ？」

三人が出撃して行った後も指示待ちのヴィータがレイに訊く。

「五人全員出てったら、三体捕まえるのにスタミナが保たないだろ？なのはとフェイトが戻ってきたら、入れ替わりでシグナムと一緒に行ってもらうから待っててくれ。」

「りょーかい。」
「グレック、ひとつ訊いていいか?」
「どした?シグナム。」
「あの三人が、そう簡単にスタミナ切れするとは思えないんだが。」
シグナムの言う事は尤もだ。なのはは多少消耗しているとはいえ、管理局のエース・オブ・エースと呼ばれ、フェイトも六課最速のオールレンジアタッカーと呼ばれている。幾ら相手が強くても、そうそうスタミナ切れは無いだろう。
「念には念を入れて、ってな。用心するに越した事は無ぇだろ?」
「なるほど…了解した。」
「じゃ、出番までコンディションを調えるなり、戦意を高揚させるなり好きにしててくれ。」
そう言うとレイは通信を切り、コックピットの中で深く深呼吸をする。そしてモニターの電源を入れ、ブリッジに映されている物と同じものを見る。どうやら、まだ獲物は出てこないようだ。
『マミ・ブリジット、ストームソーダー。行きます!』
作戦区域進入から十分。マミのストームソーダーが発進した。

「マミが出たか…。なのは、そっちはどうだ？」
「まだ見つからないですね。フェイトちゃんは？」
「駄目。こっちも見つからない。」

なのはとフェイトはまだ見つけられていないようだ。確かに獲物は大きいが、個体数が少ないゼロの野生体を見つけるのは簡単ではない。それはレイも分かっていた。

「ま、地道に探そうや。急いでるとはいえ、焦った所で…」
「レイさん！見つけました！」

気楽に行こうとしていたレイの元に、ユーノから通信が入った。

「何！？分かった、直ぐに向かわせる！」

レイはユーノとの通信を、ユーノの近くにいる機体に回す。

「各機、指定したエリアに急行しろ！」
『了解！』

指示を受けたプテラス十機、マミのものを含めたストームソーダー四機が現場に向かった。

ユーノが居るエリアに、指示を受けて向かっているプテラスが集

結しつつある。
その大地には、一体の野生体ライガーゼロが居た。

「うわぁ…。す…凄い…。」

ユーノはその存在に、ただただ、見とれていた。力強くもしなやかで、そして尚且つ美しい白銀色の、文字通り『鋼の筋肉』を持つライガーに。
ユーノが見とれている間に、なのはとフェイトが現場に到着し、二人もユーノと同様に目を奪われる。

「凄い…、綺麗…！」
「あれが、ゾイド本来の姿…！？」

今まで『兵器』としてのゾイドしか見た事が無かった三人は、この星が生み出した『野生』としてのゾイドを見るのは初めてだった。
しかも初めて見た野生ゾイドがライガーゼロと言う最上級の代物。あらゆる存在をも凌駕する圧倒的な美しさを前に、なのは達は言葉も出なかった。

「っと、いけない。危うく本来の目的を忘れるとこだったよ。」
「うん…、つい見とれちゃってた。」
「僕も、学者の魂が疼いちゃって…」

なのはが我に返り、フェイトとユーノも続いて我に返る。本来の目的を忘れてしまっては話にならない。
集結した航空隊の先陣を切り、なのはとフェイトがライガーゼロに向かって飛んでいく。
すると野生体ゼロはなのは達の意思を感じ取ったのか、なのは達の方向に顔を向けて睨み付ける。そして体ごと向くと―

『ゴオォォォォォオ！！』

―大地が抉（えぐ）られる程に力強く脚を踏みしめ、大音量の咆哮が放たれた。その叫び声の振動で木々は揺れ、大地の小石が僅かに跳ね、周囲の小型ゾイドの野生体は慌ててその場を立ち去っていった。

「ーっ！」

「な、なんて威圧感…！」

先程まで野生体ゼロを『美しい』と感じていたなのはたちだったが、今の咆哮で瞬時に認識を改めた。この存在は確かに美しい。だが、荒々しさがそれを圧倒的に上回っている、と。

『クレイジー０２より各機へ。全体的にダメージを蓄積させろ！多少傷つけても構わない、とにかく動きを止めるんだ！』

『了解！』

プテラスは編隊を組んで野生体ゼロを囲うように展開、マミのストームソーダーはその真ん中を飛行する。なのはとフェイト、ユーノは足を止めて射撃魔法の準備を始める。野生体ゼロは微動だにせず、上空の様子を窺（うかが）っている。

左右のプテラスの胴体から無誘導式の爆弾が一斉に投下され、野生体ゼロに降り注ぐ。

その瞬間、野生体ゼロは瞬時に爆弾の落下地点を予測し、勢い良く大地を蹴って一直線に走り出す。爆弾が地面に着弾して爆発したのは、既に野生体ゼロが爆弾の包囲網から脱出した後だった。

だがそれで終わりではない。

『Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ』

「フォトンランサー、ファイア！」
『Ｄｉｖｉｎｅ　Ｂｕｓｔｅｒ』
「ディバイィィィイン…バスタァァァァア！」

フェイトの放った十数個の雷の魔力弾と、なのはの砲撃魔法が同時に放たれて野生体ゼロに飛んでいく。

『ー！？』

野生体ゼロは一瞬だけ驚きながらも、直ぐに回避行動に移る。結果としてディバインバスターは掠めたが、フォトンランサー数初が命中した。だが相手は野性の中で鍛え上げられた鋼の筋肉を持つライガーゼロ。フォトンランサーの一つや二つ命中したところで、大したダメージにはなっていないようだった。

そして野生体ゼロは進行方向を自身に攻撃を命中させたフェイトに切り替え、猛スピードで突進してきた。中に人が乗っていないこともあり、兵器転用されたゾイドよりも高い加速度でスタートを切ったことで、瞬時にフェイトとの距離を詰めていく。

「っ、レイジングハート！」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｓｈｏｒｔ　Ｂｕｓｔｅｒ．』

レイジングハートの先端から、威力と射程距離を削って発射速度を高めたディバインバスターを放ち、野生体ゼロの動きを止めようとするが、素早く左右に動いて回避される。

「ええ！？嘘ぉ！」
「なのは、上に逃げよう！」

なのはは高い命中精度を誇る自分の砲撃魔法をあっさりと避けら

れたことに驚きながらも、ユーノに連れられてフェイトと一緒に高度を上げる。
だが考えが甘かった。野生体ゼロは思い切り大地を蹴り、二十メートルも高く跳躍したのだ。

「ふえええええ!?」
「な、なんて筋肉してるの!?」
「くそっ!」

野生体ゼロの右前脚の硬く鋭い爪が、なのはたちの前に迫る。だがユーノが咄嗟にプロテクションを展開した為、衝撃は受けたものの直撃は免れた。

「ぐっ…!二人とも、大丈夫!?」
「う、うん。ありがとう、ユーノくん!」
「ユーノ、昔見たときよりよりプロテクションの強度が上がってない?」
「まぁ、考古学者になっても練習はしてたからね。」

自身の成長を指摘され、少し喜ぶユーノ。
プロテクションによって弾かれた野生体ゼロは空中で体勢を立て直し、安全に着地する。と、そこに突っ込んでくる一つの機影があった。

「スキありィィィィイ!!」

マミのストームソーダーだった。機体を右に45度ロールさせ、ウイングに搭載されたブレードをエネルギーを纏っていない状態で展開して突撃してくる。不意を突いた一撃だったため、ゼロの反応が一瞬遅れた。

ガキィィン！！

マミの一閃は野生体ゼロの右の前脚と左脚に命中し、高速で衝突されたことで野生体ゼロの体は後方に吹き飛ばされ、巨大な岩肌に激突した。

「今だよ！なのは、フェイト！」
「オッケー！」
「ありがとう、マミ！」

マミが作ったチャンス、無駄にはしない！と意気込み、二人は砲撃魔法の準備を始める。その間、プテラスたちがミサイルやバルカンなどで野生体ゼロの足止めを図る。

「準備完了です！」
「射線上から、退避してください！」

フェイトの警告を聞き、すぐさま散開するプテラス隊。
野生体ゼロは体中に傷を作りながらも立ち上がるが、目の前に待っていたのは―

「スターライトォォ…ブレイカァァァァア！！」
「トライデントォ、スマッシャァァァア！！」

―桜色と金色の砲撃だった。野生体ゼロは二つの一撃に飲み込まれ、すぐ後ろの岩壁をも貫通して倒れた。

「えーっと…あれって大丈夫なの？」
「さ、さあ…」
『Ｒｅｉ ｓａｉｄ，ｄｏｅｓ ｎｏｔ ｓｅｅｍ ｔｏ ｈａｖｅ ａｎｙ ｐｒｏｂｌｅｍ（レイさん曰く、問題は無いそうです）』
『よーし、捕獲班！電磁ネット頼むぜ！』

なのはの心配をよそに、馬力強化型のプテラスが三機掛りで、野生体ゾイド捕獲用の電磁ネットを運搬してきた。だいたいの形状は、茶碗をひっくり返した様な形だ。
気絶している野生体ゼロの上空に運ばれ、電磁の網が展開されて体を包み込んだ。

『捕獲完了しました！』
『よーし、よくやった！直ちにネオ・タートルシップに運搬してくれ！』

強化型プテラスは背部の大型スラスターを噴かし、野生体ゼロをネオ・タートルシップに運んでいった。

『収容完了！これより、ニクシー基地に帰還します！』
『了解だ！スー主任によろしくな！』

野生体ゼロを載せたネオ・タートルシップはニクシー基地に帰っ

ていった。

『なのはたちもそろそろ戻って、ゆっくりと休んでくれ。』

「はい！」

レイとの通信を切ったなのはとフェイト、ユーノはレイの居る艦へと戻っていった。

第三十三話　ライガー・クエスト（後書き）

感想や出してほしいゾイドのご意見等、お待ちしております。

では。

第三十四話　英雄の名を冠する獅子（前書き）

遅くなりましたが、第三十四話です。

どうぞ。

第三十四話　英雄の名を冠する獅子

レイたちが捕獲任務に向かってから四日。ニクシー基地ではメリッサがライガーゼロ用の装甲、『ゼロアーマー』を開発していた。防御力と機動力を同時に要求されたそれは、無駄な武装を一切積まずに野生の力を引き出すための配慮がなされている。実際、追加された武器は尻尾のハイデンシティ・ビームガンと背部のイオンターボブースター位のものだ。

「ふぅ、もう少しで完成か。グレック大尉が戻ってくるまでには間に合うわね。」

メリッサはアーマーをレイが任務中に完成させるべく、ここ数日徹夜続きでその目の下にはクマが、辺りの床にはコーヒーの空き缶が散乱している。

「さあ、もうひと踏ん張り…」

「スー主任！」

出入り口の自動ドアが開き、慌てた様子で兵士が入ってきた。

「どうしたの？」

「こ、この書類を！」

メリッサは兵士から書類を受け取り、内容に目を通す。そして、両目を見開いて驚いた。

「な…なんですって！？」

書類の内容はこうだ。

『西エウロペ大陸にて、突然変異と思われる大型かつ狂暴な野生体ライガーゼロを確認。
周辺の生態系及び近隣の町が破壊される恐れ有り。近隣の部隊はこのライガー、コードネーム『シーザー』の討伐に当たるべし。』

「大変…！グレック大尉に連絡は！？」
「それが…、現場にレアヘルツ（惑星Ｚｉ特有の磁気嵐）が発生している為か、連絡がつきません！」
「まずいわね…。」

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！』

レヴァンティンがガシャン、という音を立ててカートリッジをロード、空薬莢を排出する。

「飛竜…一閃！」

シグナムは刀身が蛇腹状になったレヴァンティンを横薙ぎに振り抜き、目標の野生体ゼロを斬りつける。

『グオォォォオッ！？』

レヴァンティンの一撃をまともに食らった野生体ゼロはよろめき、

さらに横からジークと合体したバンのブレードライガーが突進してくる。

「いっけぇぇぇぇぇ！」

野生体ゼロの横腹にブースター全開の頭突きが直撃し、野生体ゼロの体は吹き飛ばされて横転した。

「よし、スタンバレット！」

レイのライガーに搭載された対野性ゾイド用麻痺弾が発射され、倒れこんだ野生体ゼロに命中した。

ビクン、ビクンと痙攣している野生体ゼロにプテラス三機によって電磁ネットが展開され、そのまま艦に運ばれていった。

「これで二体目か。思ったよりてこずったな。」

「ああ。そんじょそこらの魔法生物なんか比じゃねーな。」

野生体ゼロと交戦したシグナムとヴィータが言う。二人は十年前に異世界の巨大な生物と戦った事があるのだが、その中のどんな物よりも野生体ゼロの方が強い、と二人は感じていた。

『二人ともお疲れさん。疲れてたら一旦艦に…』

「いや、この程度なら問題ない。」

「おうよ。アタシらはまだ大丈夫だ。」

『そうか？じゃあ、なのはたちを向かわせるから、合流してくれ。』

「了解だ。」

シグナムはレイとの通信を切り、十分後になのはたちがやってきて合流した。ラスト一体、頑張って行こう、となのはが言った。

三体目の野生体ゼロ捜索中、バンはある違和感を抱いた。

「…そういえばさ、ふと思ったんだけど…」

「？どうしたんです、バンさん？」

「いやね、なーんか野性ゾイドの数が少ないな～って思ってさ。」

バンが言うには、西エウロペ大陸は野性ゾイドが広範囲に多くの種類が生息するエリアだと言う。なのに、野生体ゼロを捜索しているときに見つけた野性ゾイドが少なすぎるのだ。

「言われてみりゃ、そうだな。これはちょっと少なすぎるぞ？」

レイもバンの意見に賛成する。なのはたちは来た事が無いのでなんとも言えないが。

すると目の前に、シールドライガーの野生体が姿を現した。

「なんだコイツ、シールドライガーか？」

「なんだ、ちゃんと居るじゃねぇか。」

ヴィータは初めて見る野生体のシールドライガーにやや驚き、レイは他の野生体が居ることに安心する。

だが、その安心はすぐに打ち砕かれることとなる。

『キュイ!?』
「!?どうした、ジーク!」

ブレードライガーと合体しているジークが、何かの気配を感じ取ったらしい。バンはすぐに警戒態勢に入る。それを見た他のメンバーも、周囲の警戒を始める。
そしてその直後、巨大な岩の陰から何かが飛び出してきた。

「あ、あれは…!?」
「ライガー…ゼロか!?」

飛び出してきたのは、額に大きな傷を持ち、通常よりもやや大柄な野生体ゼロだった。野生体ゼロは目の前の野生シールドライガーの頭部に喰らい付き、そのまま頭を捻じ切ってしまった。

「あ…ああ…!」
「酷い…!」

なのはは右手で口元を押さえ、無残な屍と成り果てた野生体のシールドライガーを見て恐怖していた。先程まで野生体ゼロに抱いていた『美しい』イメージよりも、今目の前に居るそれは『恐怖』の方が遥かに上回っていた。
それもその筈、なのはたちの目の前に居る野生体ゼロこそが、メリッサの元に届けられた書類に記されていた『シーザー』だったのだ。
シーザーは野生体シールドライガーを一通り喰らうと、なのはたちの方を向き、新たな獲物として定めた。

「奴(やっこ)さん、やる気マンマンって感じだな…。」

「センパイ、どうします？あのサイズじゃあ規格外ですよ？」

そう、通常よりも大型のライガーゼロであるシーザーは、ＣＡＳ（チェンジング・アーマー・システム）を有するライガーゼロには適しているとは言えないのだ。

「メリッサはエース用の機体にするって言ってたんだ。ちょっとぐらいデカくたって、なんとかするだろ。つー訳で諸君、あれを全力で捕獲するぞ！」

『りょ、了解！』

先陣を切って突撃するレイに続いて、航空部隊とコマンドウルフ隊が広範囲に展開し、シーザーを取り囲む。

「プテラスはバルカンで、ウルフはビームガンで一斉射撃！バンとマミ、なのはにフェイトも撃ちまくれ！」

『了解！』

プテラスはバルカン砲、コマンドウルフはビームガンで弾幕を張る。

「いっけぇえ！ストームソーダー！」

「ライガー！ハイデンシティ・ビームキャノン、発射ァ！」

「ディバィィイン…バスタァァァア！」

「フォトンランサー、ファイア！」

「シュワルベ・フリーゲン！」

「飛竜・一閃！」

マミはストームソーダーの爪付近にあるパルスレーザーガンで、バンはハイデンシティ・ビームキャノンで、なのはディバインバスター、フェイトは合計千発を超えるフォトンランサー・ファラン

クスシフトで、ヴィータは四つの鉄球をグラーフアイゼンで打ち出すシュワルベフリーゲンで、シグナムは飛竜一閃でシーザーを一斉に攻撃した。

『グォォォォン！』

だが、それらがシーザーの身体に命中する直前に、シーザーはその強靭な筋肉で大地を蹴り、宙に舞った。その高さは助走無しでの通常のライガーでは有り得ない高度、実に４０メートル上空にまで到達した。

「な、何ィ！？」
「なんて跳躍力なの！？」

レイとなのはが驚きの声を上げ、放物線の頂点に到達したシーザーが落下を始める。その際、真下に居たプテラス二機を巻き込んで更に下に居たコマンドウルフ三機を、プテラスごと踏み潰した。
そしてその直後、バンのブレードライガー目掛けて真っ向から突進を始めた。

「くっ、シールド展開！」

バンはとっさにシールドを展開して、シーザーの頭突きを防ごうとする。

『グォォォォオ！！』

シールドに衝突するシーザー。シールドがシーザーを押し退けようと斥力を働かせるが、シーザーは断固として抵抗を続けながらシールドを破ろうと牙を立てる。

野生の中で磨かれ鍛え上げられたそれは、シールドに食い込んでブレードライガーが押され始めた。

「うぉぉお！踏ん張れ、ライガァァア！！」

だがバンの気合いも虚しくシールドは砕かれ、ブレードライガーここコックピット目掛けて強烈な頭突きが極まった。

「うわぁぁぁあ！」

ブレードライガーは吹き飛ばされ、二回、三回と大地を跳ねて横転した。

「バン！」「くっ、レヴァンティン！」
「征くぞ、アイゼン！」
『『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！』』

レヴァンティンとグラーフアイゼンが電子音と共にカートリッジをロードし、レヴァンティンが蛇腹剣型のシュランゲフォルムに、グラーフアイゼンが巨大な鎚のギガントフォルムに変形した。

「グレック、五秒で良い。奴の足止めを頼む。」

シグナムがレイに言う。レイはすぐにはシグナムの意図が分からなかったが、彼女の強さを信じて承諾した。

「了解だ！プテラス隊はヤツの上空を押さえ、他はバルカンで足元を狙え！」

レイの指示通り、上空のプテラスと地上のコマンドウルフはバル

カンでシーザーを牽制する。シーザーもこれは避ける必要が無いと判断したのか、その場で耐える。

「征け、レヴァンティン！」

『Ｊａ！（御意！）』

シグナムはレヴァンティンの鞭状化した刀身をしならせ、シーザーの前脚を絡めとる。シーザーはレヴァンティンの軌道に一瞬戸惑い、ほんの少しだけ反応が鈍くなった。

「ヴィータ！」

「応！」

シグナムの指示を受けたヴィータは巨大化したグラーフアイゼンを振り上げ、力を溜める。

「轟天爆砕！ギガントォォオ…シュラァァァアク！！」

そして、シーザーの頭部に向けて振り降ろされる。

だが、シーザーもこのままやられるような存在ではない。レヴァンティンが巻き付いた右脚を力一杯引き、宙に浮くシグナムを引き寄せようとする。

「何っ！？ぐぁっ！」

幾ら歴戦の強者であるシグナムと言えども、自分より遥かに巨大な相手に力比べでは分が悪く、簡単に力負けしてしまった。

更に運の悪いことに、シグナムが引っ張られて来た所はシーザーの頭部付近、つまりギガントシュラークの攻撃線上だった。

「危ねぇ！シグナム！」
「ちぃっ！」

レヴァンティンをシーザーの脚からなんとか解き、すぐにシュベルトフォルムに戻す。

「レヴァンティン！」
『Ｐａｎｚｅｒ Ｓｃｈｉｌｄ！』

瞬時にベルカ式魔法陣型の障壁を展開、ギガントシュラークを受け流しにかかる。
その隙をシーザーは見逃さない。瞬時にヴィータとシグナムの横に回りこむと、飛び掛りながら右前脚を振り上げて反撃を仕掛けようとする。
ヴィータとシグナムはシーザーの対応に間に合わず、振り下ろされた一撃をまともに受けてしまった。

「わぁぁぁぁあ！！」
「ぐわぁぁぁぁあ！！」
「ヴィータちゃん！シグナムさん！！」

強烈な一撃で二人は地面に叩きつけられ、そのまま倒れこんでしまった。
周囲のコマンドウルフはシーザーを止めるべく撃ち続けるが、大したダメージも与えられずに次々と撃破されてしまっていく。

『コマンドウルフ第二小隊、壊滅！』
「センパイ、このままじゃ…！一度退がりましょう！」
マミがレイに一時撤退を提案する。確かに、これから帝国と戦おうというのに、ここで戦力を減らす訳にはいかない。

「くそっ、クレイジー02より各機へ！これより撤退に移る！残存戦力は生存者を回収の後、ウルフ隊はスモークディスチャージャーを展開、なのはたちはバインドを目標に仕掛けて作戦区域を脱出しろ！」

『了解！』

ユーノとなのははシーザーの脚にバインドを仕掛け、撤退のための時間を稼ぐ。ユーノの十八番であるバインドはかなりの耐久力を誇り、シーザーであってもすぐに破壊は出来ないようだ。

「ヴィータちゃん！大丈夫！？」

「お…おう、悪ィな…なのは。」

「シグナム！」

「くっ…、すまない…テスタロッサ…。」

傷を負ったヴィータとシグナムに駆け寄るなのはとフェイト。痛む体をゆっくりと起こし、ヴィータはなのはに、シグナムはフェイトに肩を預けて作戦区域を離れる。

コマンドウルフ隊も動ける者は自力で撤退し、大破した機体を放棄した兵士の回収も完了し、スモークディスチャージャーを展開しながら全速力でシーザーとの距離を離していく。

『ゴオォォォオ！！』

シーザーがバインドを破壊して辺りを見渡したときには、捕獲部隊は既に撤退した後だった。

獲物を見失ったシーザーは、新たな獲物を求めてどこかへ歩いていった。

第三十四話　英雄の名を冠する獅子（後書き）

感想や出て欲しいゾイドのご意見等、お待ちしております。

では。

第三十五話　白銀の鎧（前書き）

寒くなりましたね。この時期は毎年しんどいムーンアローです。

ゼロ捕獲任務完結の第三十五話、どうぞ。

第三十五話　白銀の鎧

シーザーとの戦いから数時間。辛くも撤退に成功したレイ率いる野生体ゼロ捕獲部隊は、ニクシー基地のメリッサからシーザーについての情報と作戦命令を聞いていた。

「シーザー…ねぇ。ったく、情報が遅ぇよ。」

「申し訳ありません、レアヘルツの影響で通信が出来なかったもので…」

事前に情報が来なかった事に文句を言うレイ。

「しょうがないですよ、レイさん。第一、あんなの情報があったって勝てるかどうか分かりませんし…」

なのはがメリッサの弁護をする。確かに、相手は通常のものより遥かに高い身体能力を誇るシーザーだ。情報があったとしても勝のは難しいだろう。

「…まぁいい。で、俺達に通信が繋がるまでの間に、何かいい作戦は考えてあんのか？」

「作戦とは言えませんが…まず、そちらに援軍としてライガーゼロを向かわせます」

「ゼロを！？」

メリッサの案に驚くレイ。そもそも今回の作戦にまともな装甲の無いゼロは不向きだと判断し、基地に置いていったのだ。それをどうして援軍とするのか、レイは直ぐには理解できなかった。

「このゼロに、つい先程完成したばかりの追加装甲『ゼロアーマー』を装備させてシーザーに対抗します！」
「ゼロアーマーを！？完成したのか！？」
「はい。そちらにデータを送ります。」

メリッサからゼロアーマーのデータが送られ、大型モニターに映し出される。白銀に塗られ、一切の無駄を省いたシャープな装甲。それはまさしく、野生体ゼロの美しさと力強さを再現したと言っても過言ではないだろう。

「武装は最低限、近接戦闘メインの装備か…。」
「今から雲剣（ユンジャン）で輸送します。明日の朝頃には到着させますので…」
「ちょっと待ってくれメリッサ。ついでにもう一つ上のサイズの電磁ネットも送ってくれないか？」
「もう一つ上のサイズ…って、まさか大尉！シーザーを捕獲する気ですか！？」

レイの提案に驚くメリッサ。メリッサはシーザーを討伐するつもりだったので、余計に驚いてしまった。
「当たり前だろ？俺らに捕獲任務を命じたのはどこの誰だよ。」
「それは…。しかし、危険すぎます！」
「危険は承知だ。その代わり捕獲できた暁には、最高の機体にしてくれよ？」

モニターの向こうのメリッサに向けて白い歯を見せながら微笑むレイ。それを見たメリッサは溜め息を吐きながら答える。

「まったく…。分かりました。すぐに準備します。」
「おう、よろしく頼む！」
「その代わり、無茶はしないで下さいよ？」

「へいへい。」

通信を切り、椅子を回して机の上のコーヒーを口に運ぶ。

「まったく、ゾイド乗りって本当に野蛮なんだから…」

アーバインの姿を思い浮かべながら、休息を求める身体を押してメリッサは電磁ネットの手配をしに行った。

次の日の朝、捕獲部隊のベースキャンプにライガーゼロと補給物資を載せた、輸送特化型ストームソーダー・雲剣（ユンジャン）三機が到着した。

腹部に取り付けられた大型コンテナの正面ハッチが開き、白銀の装甲を身に纏ったライガーゼロが姿を現す。

「おお～！これがあのゼロ！？」

「凄い…野生ゼロよりもかっこいいよ！」

バンとマミが、ゼロのシャープなフォルムに反応する。

「コラコラ、今からはしゃいでんじゃねーよ。そんな体力あんなら、本番まで取っとけ。」

はしゃぐバンとマミを諌めつつ、レイはゼロのコックピットに乗り込んで機体を起動させる。中央のディスプレイに『Ｌｉｇｅｒ Ｚｅｒｏ』の文字が浮かび、各システムが起動を始める。

「よーし、各機は出撃準備。メリッサ曰く、そろそろアイツが飯を食いに来る頃らしい。そこを狙うぞ。」

『了解！』

レイの指示を受け、それぞれが自身の持ち場に就く。

なのはにフェイト、ユーノはデッキに、バンとマミは機体ハンガーに向かった。ヴィータとシグナムは負傷の為、待機を命じられた。

「ねえ、なのは。」

なのは達がデッキに向かう途中、マミがなのはに話し掛ける。なのははフェイトとユーノを先に向かわせ、足を止めて聞く。

「どうしたの、マミ？」

「なのはは…シーザーが怖くないの？」

マミの突然の問い掛けに、なのはは一瞬キョトンとした。

「う～ん…やっぱり怖い…かな。」

シーザーに出会ったときの野生体シールドライガーの無残な逝き方を思い出し、顔を俯かせるなのは。

「じゃあさ…、戦いたくない、とか思わないの？」

続いて問うマミ。そのとき、マミの表情が暗くなっている事にな

のはは気づいた。
さっきバンと一緒にはしゃいでいたのは、不安を紛らわせる為だったのだろう。

「それは…出来るなら戦いたくないけど…」

なのはは一呼吸置いてから続けて言う。

「あのシーザーを放っておいて、周りの人や野生ゾイドが苦しむことになるのなら…、やっぱり戦うしかないんだと…ううん、戦って止めてあげるべきなんだと思うな。」

きっとシーザーだって、暴れたくて生まれて来たんじゃないと思うから…と、最後に付け加える。

「…やっぱり、なのはは強いや。強くて優しいよ。」

「マミ…？」

「何でかな…。もう一度シーザーと戦うって言うのに、今頃になって怖くなったみたいなんだ…」

マミの体が小さく揺れ始め、目が涙ぐんできた。
見かねたなのははマミと向き合い、両腕でマミを包み込んだ。

「…なのは…？」

「大丈夫だよ。マミは一人じゃない、私たちがついてるから…。だから怖がらないで、笑顔でいて…。」

なのはに頭をなでられ、マミは顔を少しだけ紅潮させる。さらになのはのシャンプーの香りが鼻を突き、ぼんやりとした気持ちになってきた。

「さ、早く準備しに行こう？」

一分程の時間が経ってなのはに声をかけられるが、マミは未だに顔を赤らめながらぼんやりとしている。

「…？マミ！」

「うわぁっ！？な、何！？」

耳元でなのはに大きめの声で呼ばれ、我に返るマミ。

「どうしたの？早く準備しないとまたレイさんに怒られちゃうよ？」

「ご、ごめん。ボーっとしてた…」

なのははフェイトとユーノが待つデッキに向かって走って行き、マミはゆっくりとした足取りで機体ハンガーに向かう。どうやら、まだ上の空のようだ。

（ヤバイ…。ボク、なのはに惚れちゃうかも…。でもレイセンパイも好きだし…）

頭をボーっとさせながら、そんなことを考えているマミ。

そんな状態で出撃して、大丈夫なのだろうか…。

広大な草原の岩陰で、シーザーが芋虫のような容姿をした野生体のグスタフを朝食として喰らっていた。丸っこい身体を生きたまま牙と爪で引き裂き、肉片にしながら食べていく。

「ギ…ギィィッ…」

野生体グスタフが苦しさのあまり悲鳴を上げるが、シーザーはそんな事お構い無しに鋼の肉を食べていく。

数分の後にはゾイドコアを残し、ほぼ全ての肉が食い尽くされてしまった。

空腹を満たしたシーザーはその場を立ち去ろうとする。だが、それを許さない存在が現れた。

―ドゴォォォォン！！

『ゴアッ！？』

超遠距離からミサイルが飛来し、シーザーの左側面に命中した。

これが一つ目の作戦、『気付かれる前に一撃を食らわせる作戦』である。バンでさえもストレートすぎるネーミングだと評するこの作戦、どうやらピタリと的中したようだ。

「長距離ミサイル、シーザーに命中！」

「よォし！航空隊、出撃！」

プテラスとストームソーダーの混成部隊が、シーザー目掛けて飛行を始める。

「スターズ０１、高町なのは。」

「ライトニング０１、フェイト・Ｔ・ハラオウン。」
「ユーノ・スクライア！」
「「「行きます！」」」

なのはたちも一斉に出撃して行く。
だが、一機だけ動いていない機体があった。

「おいコラ、マミィ！」
『は、はい！？何ですか！？』

そう、未だにさっきの出来事が頭から離れきっていない、マミのストームソーダーだ。レイが通信で怒鳴りつけて、漸く反応したようだ。

「何ですか、じゃねぇ！出撃だ、とっとと行け！」
「す、すいません！マミ・ブリジット、行きます！」

空中で静止していたストームソーダーのジェットエンジンが作動し、シーザーの所に向かっていった。

「ったく、何ボケッとしてんだアイツは。」

レイは首を傾げながら、ゼロのコンバットシステムを起動させ、出撃準備を完了させた。

「レイ・グレック、ライガーゼロ！行くぜ！」

ネオ・タートルシップの機体ハンガーからゼロが飛び出し、他の機体を追う形でシーザーの元へ向かった。

『ゴォォォォ！！！！』

シーザーは自分に向かってくるプテラスたちに向け、大音量の咆哮を上げる。兵器化されていても残っている、ゾイドの本能が咆哮一つで僅かに震えだす。

直後、シーザーは巨大な岩肌を軽くジャンプしてから力強く蹴り、恐るべき跳躍力で空に居るプテラスに迫る。

「ディバィィイン…バスタァァァア！」

爪がプテラスを捉える直前、横からなのはがディバインバスターを浴びせる事に成功した。

『グォォォッ！？』

唸り声を上げながら地面を転がるシーザー。昨日とは違う動きに少々驚きながらも、直ぐに起き上がって反撃の機会を待つ。だがレイたちは、この行動パターンも利用する。

「全機、攻撃をするなよ！向こうから来るのを待つんだ！」

そう、昨日の戦闘の映像を見て研究した結果、シーザーが大群や

力のある者と戦うときは大抵敵の攻撃後の隙を突いてくる事が分かっていた。故にシーザーが待ちきれなくなったときを狙って総攻撃、一気に捕獲する作戦を立てた。

両者の睨み合いが数十分、数時間と続く。

そして、戦闘開始から二時間程経ったときだ。遂にシーザーが痺れを切らし、自分から攻撃の体勢に入ったのだ。

「来るぞ！各機、フォーメーションパターンB！」

レイの号令の直後、フェイトとストームソーダーが走り出したシーザーの背後を取り、周囲をなのはやバンを中心に方位、そしてシーザーの正面にはゼロに乗ったレイが立ち塞がる。

昨日はある一ヶ所のコマンドウルフが撃破された事で包囲網が崩されてしまったが、シーザーの前後左右の守りを強固にする事で突破されないようにした。

『グルッ！？』

眼前の敵の動きが明らかに昨日と違う事に戸惑うシーザー。だが、そのほんの一瞬だけ作った迷いを、ユーノは見逃さなかった。

「そこだ！ストラグルバインド！」

シーザーの前後両脚にバインドを仕掛け、動きを止めることに成功する。

「レイさん！」

「よくやったユーノ！全機、一斉射撃！」

四方八方からの攻撃を受け、シーザーが悲鳴を上げる。

「なのは、今だ！」
「オッケー、ユーノくん！レイジングハート！」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．　Ｓｔｅｒｌｉｇｈｔ　ｂｒｅａｋｅｒ．』
なのははレイジングハートの先端をシーザーに向け、桜色の魔力を収束させる。
シーザーは膨大な魔力を察知したのか、脚に纏わりついているバインドを破壊しようと暴れるが、ダメージを受けている所為でなかなか壊れない。
その間に、なのはが魔力の収束を完了させた。
「全力全開！スターライトォォォオ…ブレイカァァァァア！！」
なのはの叫びと同時に、極太の砲撃が一直線にシーザーに襲い掛かる。
『グギャァァァァア！！』
シーザーは回避出来ずに、直撃を受けて大音量の悲鳴を上げながら、桜色の光に飲み込まれていった。
「やったのか…？」

バンが呟く。あれ程の砲撃だ、直撃しては只では済まないだろう。
誰もがそう思っていた。
だが数秒後、それは全員に否定された。
『グ…グゴガァァァア！！』
「マジかよ…！？なのはの全力全開だぞ！」
野生の力に加え、規格外のスタミナを持つシーザーに驚くバン。
「ダメージは溜まってる筈だ！各機、後ろに下がれ！後は俺がやる！」
レイはなのは達や他の機体を後ろに退げ、シーザーと向かい合って一騎打ちの形になる。
「さぁて、ここで終わらせようや！征くぞシーザー！」
『ゴォォォォオ！！』
掛かって来いと言わんばかりに雄叫びを上げ、レイの乗るゼロに突進するシーザー。
レイもゼロのイオンターボブースターを噴かせ、シーザーに向けて駆け出した。
『グルァァァア！！』
シーザーは大地を蹴り、自慢の鋭い爪をゼロに浴びせんと飛び掛かる。
「そう来るか、こっちも征くぞ、ゼロ！」

レイのゼロも大地を蹴り、必殺の『ストライクレーザークロー』の使用のため、シーザーと同じく飛び掛かる。

「ストライクゥゥ…レーザークロォォオ！！」

お互いの爪が空中でぶつかり合い、すれ違った後に着地する。
その場に居た全員が固唾を飲んで戦いの結果を見守っている。

「ど、どっちが勝ったの！？」

なのはが呟く。その直後、シーザーの体がフラつき、地響きを立てながら白銀の巨体が大地に倒れ込んだ。

「す…すげぇ！！」
「レイさん！！」

バンとなのはの一言を皮切りに、全員が勝利を祝う歓喜の声を上げる。

『ゴォォォオ！！』

ゼロも特大の雄叫びを上げる。勝利に喜んでいるのだろう。

（や…やっぱりセンパイ、カッコいい！！）

ストームソーダーのコックピット内で顔を紅潮させているマミ。
一瞬想いがなのはに傾きかけたが、やっぱり自分はレイの事が好きなことを改めて認識した。

「それじゃ、とっとと捕獲して引き上げるか。マミ！」
「え！？あ、はい！」

マミのストームソーダーが大型の電磁ネットを作動させ、シーザーの身体を拘束、プテラス四機と共にネオ・タートルシップに運び込んだ。
レイは全部隊を集めて帰還の準備を始める。

「えー、これで任務完了だ。でも、基地に帰るまでが任務だからな！最後まで気ィ抜くなよ！」
「レイさん、遠足じゃないんですから…」

そんなお決まりのやり取りもそこそこに、レイ達は基地に帰っていくのであった。

第三十五話　白銀の鎧（後書き）

感想やご意見等、お待ちしております。

では。

第三十六話　白鯨出陣（前書き）

ちょっと遅くなりました。いつも沢山の感想、ありがとうございます！

第三十六話、どうぞ。

第三十六話　白鯨出陣

野生体ゼロ捕獲任務から、無事に帰還したレイ達。
早速、ネオ・タートルシップから眠っているシーザーが運び出される。

「どうだい、スー主任殿？」
「凄い…。これならカタログスペック以上の機体が造れます！」

送られてきた情報でデータは確認していたものの、実際に自分の目で視たシーザーはそれ以上の存在感を醸（かも）し出していた。

「気に入ってもらえたみてぇだな。じゃ、俺はそろそろ休ませてもらうわ。」
「お疲れさまでした、グレック大尉。」
「おう、お前もほどほどにな。」

レイはメリッサに背を向け、自分の部屋に戻って行った。

「大丈夫？ヴィータちゃん、シグナムさん。」

医務室のベッドにはヴィータとシグナムが寝転がっている。シーザーから受けたダメージは大した物では無かったが、大事を取って

おけとのボーグマン大佐の指示でこうして休んでいるのだ。

「大丈夫だって、これで何回目だよ。」

「…今のでちょうど十回目だ。もう少し落ち着け、高町。」

さっきから幾度も訊いているのだろう、ヴィータもだんだんとウンザリしてきたようだ。

なのはもかつて再起不能寸前の重傷を負った経験がある。その為、部下や仲間が負傷すると異常なまでに心配性になってしまうのだ。

「つーか、チビ共の訓練はどうしたんだ?」

「ああ、それなら…」

「どうしたどうした!ペースが下がってるぞ!気合い入れていけ!」

「「「「は、はい!」」」」

六課フォワード陣は基地正面で他の兵士達と一緒に、ボーグマン大佐の監督の元で走り込みを行っている。ティアナとスバルは二十キロマラソン、エリオとキャロは年齢を考慮して十キロだ。

「ぜぇ、ぜぇ…ティア~、しんどいよ~…」

「無駄口…叩いてんじゃ…無いわよ…バカスバル…」

「ハァ、ハァ…キャロ、大丈夫?」

「う、うん、なんとか…」

だんだんと息が上がっているフォワード陣。近頃は応用訓練や模擬戦が多かった為、長距離の持久走をあまりやっていなかったのだ。

（久々とはいえ二十キロも走れないようじゃ、フォワード陣のリーダーとして、なのはさんの教え子として失格ね…）

そんなことを考えたティアナのペースが、ゆっくりだが上がりだしている。そしてスバル達よりも前に進む。

「ちょ、ティア！そんなにペース上げたら…！」

「やってやる、やってやるわよ！」

ティアナには既にスバルの言葉も届かず、『うぉぉぉお！！』と雄叫びを上げて加速していく。

「ティ、ティア～！」

スバルもティアナに続くようにペースを上げて残りの距離を走るのだった。

「よーし、今日の訓練はこれまで！クールダウンを忘れるなよ！」

『はい！ありがとうございました！』

数百の兵士とフォワード陣が、腹から声を出して一斉に返事をし、

解散する。

「あの～…お二人とも、大丈夫ですか？」

地べたに寝転がり、肩で息をしているスバルとティアナを見ながらエリオが訊ねる。

「え…ええ、なんとかね…」

「ティアったら…飛ばしすぎだよ…」

「何もアンタまで…合わせる必要…なかったじゃない。」

「そ…そうだけどさぁ…」

スバルとティアナが言い合っていると、ジークとザビンガが近付いて来た。ジークはやや中腰になりつつスバルに背中を向け、ザビンガはティアナの近くに着陸した。

『キュイ～』

「『背中に乗って』ってさ。」

「あ…ありがと。」

「じゃ、失礼して…」

ティアナはやや照れくさそうにしながらザビンガの背中にうつ伏せに乗っかり、スバルはジークの背中にしがみつく。二人がしっかりと掴まったのを確認すると、ジークとザビンガは基地に向かって歩き出した。

「ところでティアさん。」

基地の正面玄関に着いた辺りでザビンガが言う。

「？何よ？」
「意外と胸、あったんですね。」

いきなり予想の斜め上を行く発言をするザビンガ。
ティアナがザビンガの背中にしがみつく形になっていたので、ティアナの胸がザビンガの背中に当たっていたのだ。

「なっ、何言ってんのよ、このバカゾイド！」
顔を真っ赤にしながらザビンガの頭をグーで叩くティアナ。後ろでジークに乗ったスバルが必死に笑いを堪(こら)えている。

「それだけ元気があれば大丈夫ですね。なのはさんが呼んでいたので、後で行っておいて下さい。」
「…分かったわ。」

ティアナはザビンガの背中から降り、早足で基地に入っていった。

（分かり易いな～、ティアさんは。）

心の中でクスクスと微笑しながら、主であるヴィヴィオの元へと戻って行くザビンガであった。

（私…そんなに貧乳に見えるのかしら…）

自分の胸を触りながら思うティアナ。ザビンガに言われたことが相当気になっている様だ。

（確かに私はスバルやフェイトさん、シグナム副隊長よりは小さいけど…）

自分の周りに居るスタイル抜群の面々がティアナの脳裏に浮かぶ。そこ、なのはが居ないって言わない。

「女の魅力は、胸だけで決まる訳じゃないんだからね！」

両手を握り締めながら高らかに叫ぶティアナ。いきなり聞いたら、かなりの誤解を招く発言だろう。

「何喚いてんだ？ティアナ。」

ティアナの後ろからバンが声を掛ける。

いきなり言われたので、ティアナはビクッと体を震わせて驚く。

「バ、バンさん！？驚かさないで下さいよ！」

「あ…悪い。」

頭をポリポリと掻きながら、ばつが悪そうにバンが言う。

それをジッと見つめるティアナ。

（バンさんも…やっぱり胸は大きい方が好きなのかしら…）

「…？」

プイときびすを返して廊下を歩き出すティアナ。バンは訳も分からず、頭上に大量の疑問符を浮かべていた。

帝国首都ヴァルハラ。そこの帝国軍基地ではニクシー基地攻撃作戦が行われようとしていた。

帝国軍ヴァルハラ基地第三格納庫の中央に鎮座しているのは、純白に塗られた超高高度巡航仕様のホエールキング、その名も『モビーディック』である。その機体ハンガーには、大量の無人機仕様の爆撃機ゾイド、ザバットが格納されている。

「プロイツェン閣下、出撃準備が完了致しました。」

「よし、作戦を開始しろ。」

「了解！格納庫ハッチ、開け！」

モビーディックがある格納庫の正面ハッチが開き、モビーディックが巨大なレールに沿って直進を始める。

レールは進む度に段々と反り始め、最終的にはほぼ垂直になって先が途切れている。

モビーディックは勢いをつけてレールの先端から飛び出し、大空へと飛び立っていった。

「あ。来たね、ティアナ。」

なのははティアナが来たことに気が付き、立ち上がる。どうやらヴィヴィオを寝かしつけていたらしい。

「なのはさん、私に用って言うのは…？」

「うん、実はね…」　なのはが用を言おうとしたその時、突如として基地全体に警報が鳴り響いた。

「！？なのはさん！」

「うん！急ごう、ティアナ！」

なのはとティアナは大急ぎで、ブリーフィングルームへと駆け出した。

第三十六話　白鯨出陣（後書き）

ご意見、感想等お待ちしております。

では。

第三十七話　晴れのち爆撃（前書き）

遅くなってすいません…。もう片方のクロス小説もかなり遅れてますが、遅くとも週末には投稿します。

第三十七話、どうぞ。

第三十七話　晴れのち爆撃

『総員、第一種戦闘配置！繰り返す、第一種戦闘配置！』

警報と放送が鳴り響く廊下を走り、なのはとティアナはブリーフィングルームに到着した。

「大佐！」

「おう、なのはか。」

大佐は決して物怖じせず、落ち着いた様子でブリーフィングルームの中心に立ってモニターを見ていた。

モニターには、プテラス・ジェミニィから送られてきた映像が映し出されており、そこには純白のボディに帝国軍のエンブレムがでかでかと描かれたホエールキングの姿があった。

更にホエールキング腹部のハッチが開き、黒い何かがばらまかれていく。

「！？あれって…！？」

ティアナはその黒い物体に見覚えがあった。ミッドチルダに初めて帝国が侵攻して来たとき、確かにその機体はミッドの空を飛んでいたのだ。

「ティアナ、知ってるの！？」

「はい。あれは、なのはさんが行方不明になった直後に侵攻して来た機体の一つでした。名前は…」

「コウモリ型爆撃機ゾイド、『ザバット』だ。」

名前の所で詰まっていたティアナに、大佐が助け舟を出す。

「この映像は何処で？」

なのはが訊く。

「プテラス・ジェミニィが、この基地の上空二万メートル付近で生放送している。ホエールキングが居るのは三万メートルだがな。」

「さ、三万メートル！？」

「成層圏のド真ん中じゃないですか！」

とんでもない高さから仕掛けようとしている帝国軍に驚き、思わず声を上げる。

「そうだ。だからこそ、厄介なんだよ。」

「？何故ですか？」

ティアナが大佐に訊ねる。

「考えてもみろ、成層圏まで飛んで行ける戦闘機が、そうそうあると思うか？」

「あっ…！」

ティアナは思った。何故そんな当たり前の事が、大佐に言われるまで気が付かなかったのか、と。

もちろん成層圏に向かえるゾイドは、ジェミニィの様に無いことはない。だが、ザバットを叩けて尚且つホエールキングまで撃破出来る程の火力を持っていないのだ。

それにギリギリで撃破に成功したとしても、帝国はこの作戦が極めて有効だと判断し、再び同じ作戦を実行してくるだろう。そうな

れば、二度目や三度目は守りきれるかは分からない。

「じゃあ、どうすれば良いんですか！？」

「これから考えるしか無いだろうな。取り敢えず、おまえ達はザバットの迎撃に回ってくれ！」

「「了解しました！」」

なのはとティアナは駆け足で基地の屋上に向かって走っていった。

ザバットの群れは既にニクシー基地上空三百メートル地点に到達し、機体を水平にしつつ爆撃を開始していた。

基地の対空システムが迎撃に当たっているものの、撃ち漏らした爆弾が着弾しては爆発して基地にダメージを与えていく。

「くそっ、なんて数だよ！これじゃキリがねぇ！」

ヴァイスがガンスナイパーに乗り込み、両腕のビームマシンガンや背中のミサイルポッドを駆使し、他のガンスナイパー隊と共に爆弾の迎撃に当たっている。

「お待たせしました！今から応援に入ります！」

「遅かったスね、なのはさん、ティアナ！」

なのははは声を掛けてきたガンスナイパーのパイロットが、ヴァイスだということに気が付く。

「ヴァイス君!?何でガンスナイパーに!?」

「なのはさん達が任務に行ってる間に、練習しといたんですよ。…っと、危ねぇっ!」

ヴァイスがなのはの頭上にビームマシンガンを発射すると、やや大きめの爆発が起きた。どうやら、すぐ近くまでに爆弾が落ちてきていたようだ。

「あ、ありがとう、ヴァイス君!」

「礼には及びません!それより、援護をお願いしますよ!」

「うん、任せて!行くよ、ティアナ!」

「はい!」

なのははレイジングハートを、ティアナはクロスミラージュを空に向けて構える。

なのははレイジングハートの先端に魔力を収束させ、ティアナの周りには数十個のオレンジ色の魔力スフィアが展開される。

「ディバィィィイン…」

「クロスファイアー…」

二人の上空に、新たに投下された爆弾が降り注いでくる。だが、管理局のエース・オブ・エースであるなのはと、その教え子であるティアナにそれらは恐れるに値しなかった。

「バスタァァァア!!」

「シュウウウト！！」
なのはが放った桜色の砲撃は幾つもの爆弾を飲み込んで消滅させ、ティアナの魔力スフィアは全弾が的確に爆弾を捉えて破壊した。

「ひゃ～、流石高町一尉！」
「俺も負けてられねぇな！」
「爆弾なんぞに負けてたまるかよ！」

なのはとティアナの活躍に刺激され、他の兵士達の士気が上がっていく。
だが爆弾はまるで限りが無いかのように降り続き、やはりほんの数発は撃ち漏らしてしまう。
それに、今回は基地の守りに着いている六課メンバーが少ないのも原因の一つだ。理由として、作戦の内容が『落下してくる爆弾の迎撃』という点にある。つまり、参加できるのは必然的に、射撃型ないし砲撃型の魔導士に限定されてしまうのだ。『た、弾が！う、うわぁぁあ！』

一機のガンスナイパーのコックピットに爆弾が直撃したらしく、ガンスナイパーの頭が吹き飛んだ。最後の通信から察するに、弾切れだったらしい。

「くそっ！いつまで続くんだ、この大雨はよ！？」

落としても落としても降り続く爆弾の雨に焦りだすヴァイス。その焦りからか、一発の爆弾を撃ち漏らしてしまった。しかもヴァイスの直撃コースだ。

「やべっ…！」
「ショートバスター！」

真横から飛んできた桜色の砲撃が、撃ち漏らした爆弾を撃ち抜いた。

「すんません、なのはさん！」

「気にしないで、これでおあいこだよ！」

なのははヴァイスの乗るガンスナイパーに向け、親指を立てて拳を突き出した。

基地上空数百メートル地点ではザバットを撃墜すべく、フェイトやマミ、それに航空隊がザバットの群れを相手に激しいドッグファイトを繰り広げていた。

「ハーケンセイバー！」

振り降ろされたバルディッシュから金色の魔力刃が放たれ、ザバットの翼の片方を切り落とす。揚力を失った鋼のコウモリは、重力に引っ張られて墜ちていった。

その仇を討つかのように、三機のザバットがフェイトを取り囲む。

「させないよ！」

マミのストームソーダーに臨時で搭載された空対空ミサイルが二発放たれ、一発ずつザバットに命中した。「バルディッシュ！」
『Ｐｌａｓｍａ　Ｓｍａｓｈｅｒ』

ミサイルでダメージを受けたザバットの一機に、フェイトがプラズマスマッシャーを放ち、直撃させる。そのザバットは爆散したが、辺りにはまだまだ何十機のザバットが飛び交っている。

「くっ、この調子じゃキリが…」
『Ｍａｓｔｅｒ！』

フェイトがバルディッシュに促されて後ろを見ると、丁度ザバットが翼に搭載されたレーザーガンをフェイトに向けて放っていたところだった。

「くっ、バルディッシュ！」
『Ｓｏｎｉｃ　Ｍｏｖｅ！』

ソニックムーブによる高速移動を使い、すんでのところで回避に成功する。そして速度を維持したままザバットの背後に回り込み、プラズマスマッシャーを叩き込んだ。

これでフェイトが墜としたザバットは七体目になるが、一向に減る気配がない。そんなとき、マミから提案があった。

『フェイト！ボクがザバットを引き付けるから、纏めて片付けて！』
「分かった。でも…、」
『無茶はしないで、でしょ？』

自分の言いたい事をあっさりと言われ、キョトンとするフェイト。

『何回も言われれば、だいたい見当は付くよ。大丈夫、ボクを信じて！』
「…うん！」
マミの乗るストームソーダーを見て、笑顔を浮かべながら頷くフェイト。
『その役目、俺にもやらせてくれないか？』
マミとフェイトの通信に何者かが割り込んだ。それはフェイトの背後から接近して来る機体からだった。
「ハーマン少佐！」
その正体は、共和国本国から先行して輸送されてきたレイノスに乗ったハーマンだった。
「お願いします！行きますよ、少佐！」
『おう！』
ストームソーダーとレイノスが牽制の意味を込めた機銃を放ち、ザバット達の注意を引く。
「バルディッシュ、真・ソニックフォーム！」
フェイトは自らのバリアジャケットをレオタード状の真・ソニックフォームへと変化させ、バルディッシュを双剣型のライオットブレードに変形させる。更に双剣型のバルディッシュを連結させ、フェイトの身の丈以上の大きさを持つ大剣、ライオットザンバーに姿

を変える。

『フェイト！お願い！』

『団体様のご案内だ！』

マミとハーマンが囮役として奮闘した結果、ほぼ全てのザバットがストームソーダーとレイノスを追いかけて来ている。そのままフェイトを目掛ける様に飛行を続ける。

フェイトはバルディッシュを横に構え、黄金に輝く刀身に更に魔力を注ぎ込み、数十メートルの超巨大な剣を作り上げた。

「ジェット…ザンバァァア！」

フェイトが剣を構えたまま、ザバットの列とすれ違いざまに斬る形で突進する。その瞬間、ストームソーダーとレイノスはギリギリの所で急降下し、必殺の斬撃はザバットの行列のみを両断した。

これで残りは五、六機程度だ。守りきった、と誰もが思った瞬間、残ったザバットが全速力で急降下を始めたのだ。

「！マズい、アイツら基地に突っ込む気だ！」

「そんな！」

ザバットは残った爆弾や燃料を機体ごとニクシー基地にぶつけ、大打撃を与える作戦に出たのだ。これはパイロットが居ないザバットにこそ出来る、必殺の一撃と言えよう。

「私にはもう、戦うだけの魔力が無い…。マミ、お願い！」

「合点承知！」

ジェットザンバーを使用した事が原因で、フェイトの魔力が底を

着いてしまった為、マミと少佐を先頭に航空隊が止めに向かう。
だが命を惜しむ必要がないザバットは、大地に近付こうとも決してスピードを緩めることがない為、現在の高度を計算して降下しなければならないマミ達との距離は必然的に広がっていく。

「少佐！これ以上突っ込むと…！」
「ああ。地面とキッスするのはゴメンだな。各機、速度を緩めろ！」

ハーマンの指示で航空隊全てが減速する。真下が基地のため、下手にミサイルすらも放てないのだ。

「ニクシー基地！降下するザバットの迎撃を頼む！」
『了解！アーバイン少尉及び高町一尉、お願いします！』

「言われなくても、準備は完了だ！」
「いつでも行けます！」

迎撃の指示が出る前に、砲撃の用意を済ませておいたアーバインとなのはが応える。

「征くぞ、ジ・オーガ！バスターキャノン…」
「スターライトォォオ…」

ザバットが基地に激突するまで、後三秒。

「発射ァ！！」

「ブレイカァァァア！！」

だが、ジ・オーガのバスターキャノンとなのはのスターライトブレイカーがそれらを一瞬のうちに飲み込み、全て撃破した。

『ザバット六機、全滅を確認！』

オペレーターの報告を聞いた基地内の人間全員が、ワァッと歓喜の声を上げた。だが、それはジェミニィからの通信を境に、収まってしまう。

『こちらジェミニィ！ホエールキング級、更に二隻の出現を確認！』

「何だと！？」

ジェミニィからの映像が送られてくる。元々居た一隻と入れ替わりに、新たに二隻が大量のザバットを投下し始めたのだ。

指揮を執る大佐は考える。フェイトは魔力切れ、基地のダメージもあり、これ以上の爆撃を受ける訳には行かないのだ。

「仕方ない、俺がウルトラザウルスで出る！クルーは至急準備しろ！」

そう指示を出し、大佐がウルトラザウルスのブリッジに向かおうとしたとき、基地のレーダーに三つの機影が映った。

「大佐！レーダーに大型航空ゾイド三機を確認！」

「何だと！？敵か！？」

「いえ、シグナルは友軍です！」

突如として現れた友軍に、指令室はどよめきだす。そうこうしていると、その友軍機から通信が入ってきた。

『こちらストラトス０１。ニクシー基地、応答願います。』

ストラトスをコールサインに持つのは、共和国首都防衛第三航空隊だ。つまり、本国からの援軍という事になる。

「こちらニクシー基地司令官、アーサー・ボーグマン大佐だ。」

『ボーグマン大佐、我々はこれより上空三万メートルまで上昇し、ホエールキング級艦船二隻の撃沈を行います。宜しいでしょうか？』

「出来るのか？」

隊長の提案に疑問を持つ大佐だったが、直後にモニターに映された映像を見て疑問は直ぐに解消された。

『ご安心を。我々のサラマンダーにとって、成層圏は縄張りの様なモノです。』

モニターに映るのは、巨大版のプテラスの様な超高高度爆撃機ゾイド『サラマンダー』であった。背部には一機につき二発の戦術ミサイルが搭載されている。

だが隊長機の背部にはミサイルではなく、ゴジュラス用のキャノンが搭載されている。

「よし、ホエールキング級の撃沈は貴官らに一任する。隊長機はザバットの迎撃を支援してくれ。」

『了解！各機、散開せよ！』

大佐の指示で左右の通常機は成層圏を目指して上昇、隊長機は降下を始める。

「通信兵、航空隊を弾薬や燃料が少ない順に呼び戻せ。」

「了解。ニクシー基地指令室より、航空戦力全機へ。補給が必要な機体を優先して帰還せよ。」

「了解！全機、聞いての通りだ。適当に撃って帰還するぞ！」

『了解！』

「フェイト、お前もさっさと戻れよ！」

「はい！」

「フェイト、ストームソーダーのコックピットに！」

マミがフェイトにゆっくりと近づき、開いたコックピットに入るように促す。素早くストームソーダーの口腔内に入り、口を閉じると直ぐに降下を始める。

「よぉし！残った機体は、俺に続け！コウモリ退治を始めるぞ！」

ハーマンのレイノスを先頭に、ストームソーダーやプテラスが数十機のザバットの群れに突っ込んで行く。ミサイルを撃っては離れ、

機銃を叩き込むなど奮闘する。

「うおっ！？」

だがオートパイロットのザバットも馬鹿ではなく、ミサイルを放った直後の隙を突いてハーマンのレイノスにビームガンを浴びせた。

レイノスの両翼から煙が上り、これ以上の戦闘が不可能だという事を知らせる。

『少佐！』

「くそっ！スマンが先に帰還する！後は…」

『俺に任せてくださいよ！』

その通信がハーマンの元に入った直後、目の前に巨大な二門の砲身を背負ったサラマンダーが姿を現した。

『こちらストラトス０１！本機はこれより、ザバットに対し砲撃を行う！射線上の機体は直ちに退避せよ！』

サラマンダーのパイロットがそう言い切ると、背部の砲門に高出力のエネルギーが収束し、数秒後に二条の砲撃が放たれた。

砲撃はほぼ一カ所に固まっていたザバットの群れに直撃し、一撃の元に一掃した。

「あれは…サラマンダーに、ゴジュラスキャノンか！？」

『ハーマン、本国から来たサラマンダーがホエールキング級艦船二隻の撃沈に成功した。全機を帰還させろ。』

「りょ、了解！」

レイノスから煙を立ち上らせながらも、ハーマンはニクシー基地

に帰還していった。

第三十七話　晴れのち爆撃（後書き）

ご意見、感想等、お待ちしております。

では。

第三十八話　親の心、子の心（前書き）

多くのご意見やご感想、ありがとうございます！

第三十八話です。どうぞ。

第三十八話　親の心、子の心

ニクシー基地ブリーフィングルーム。そこにはサラマンダーのパイロットである三人が居た。

「共和国首都防衛第三航空隊所属、ゴゴ・サティ大尉であります。」

ゴゴ・サティ。この渋い風貌のベテラン兵士こそが、ゴジュラスキャノンを搭載していたサラマンダーのパイロットだ。部下の二人も、自己紹介をして敬礼する。

「アーサー・ボーグマン大佐だ。この度の救援、感謝する。」

「いえいえ、ここを陥落させる訳にはいきませんから。」

あくまでも本国からの命令だと謙遜するゴゴ。

「そうそう、大統領閣下からの伝言を預かって来たんですわ。」

ゴゴは懐から茶封筒を取り出し、大佐に渡す。封筒には『大統領府』と書かれた印が押されている。

「…拝見しよう。」

大佐は封を切り、中に入っていた書状を取り出して黙読する。読んでいる途中に大佐の目が一瞬強張った。暫くすると読み終えたのか封筒に書状を戻す。

「サティ大尉、確かに拝見した。皆、よく聴いてくれ。」

大佐の表情はいつになく真面目で、大佐と付き合いの長い兵士達

は非常に重要な案件だと判断した。

「大統領閣下より、俺達に直々の御命令だ。これより我々は、ガイロス帝国首都のある『暗黒大陸』への進軍準備を開始する！」

「な、なんだって！？」「遂にヴァルハラを攻撃するのか！？」「決着をつけるって事か！？」

兵士達は全員が驚き、ざわめきが広がる。

「待て待て、何も今すぐって訳じゃない。準備が完了してからだ。」

大佐はざわめく兵士達を落ち着かせ、これからの方針を告げる。まずはウルトラザウルスを海戦仕様、巨大な空母兼用の軍艦へ改修し、本国からの戦力をネオ・タートルシップに搭載させて暗黒大陸を目指すことを目標にする。そして航海を安全に行うために、ハンマーヘッドに新型の強化パーツを装備させる等、海戦戦力の底上げも図る。

陸海空、全てが十二分な状態にした上で上陸を目指すのだ。

「…という事だ。各員、速やかに準備を進めてくれ。以上だ、解散！」

兵士達は直ぐに散らばっていき、自分のすべき事をしに向かっていった。

「なのは、今言った方針をはやてに連絡しておいてくれ。」

「はい！」

なのはは背を向け、六課の面々が集まるロビーに向かった。

「…という訳なんだ。」
『了解や。この仕事が終わったら直ぐに行くさかい、待っといてや。』

画面の向こうで、はやてが書類仕事に精を出している。だが机の両サイドには、まだまだ多くの書類が積まれている。

「…はやてちゃん。その書類、どう考えても直ぐには終わりそうにないんだけど…」
『ああ、いざとなったら有能な副官に任すから大丈夫やて。』

またグリフィスに押しつけて来るつもりらしい。有能すぎるのも考え物だ。

「にゃはは…。駄目だよはやてちゃん、あんまりグリフィス君に苦労掛けちゃ。」
『分かってるて。なるべく量は減らしておくわ。ほなな～。』

なのはは通信を終え、ヴィヴィオの所へ向かおうとする。

「なのは、ちょっと良いかな？」

が、フェイトに呼び止められたので、後回しにした。

「どうしたの？」
「うん…ヴィヴィオの事なんだけど…。私達がこれから帝国の首都に行くなら、やっぱりアイナさんにお願いした方が良いんじゃないかな？」

そう、ヴィヴィオはなのはとフェイトと再会するために、ここまでやって来たのだ。だが、これから暗黒大陸に向かうのに、ヴィヴィオを連れて行くのは余りにも危険すぎる。そこでフェイトは、ヴィヴィオを世話役のアイナさんに任せて戦いに行こうと考えたのだ。

「うん…、そうだね。ザビンガ君が居るとは言っても、危険なことに変わりはないよね…。」

なのはだって勿論、その事については考えていた。だが、ヴィヴィオがまた自分たちと離れたら悲しむのではないかとも思い、答えを出せずにいたのだ。今回フェイトが言ってくれなければ、ズルズルと悩み続けていたかもしれなかった。そういった点で、なのははフェイトに感謝した。

「じゃあ仕方無いけど、アイナさんに連絡して…」

―ガタン。なのはの背後で物音がした。なのはが音源を見ると、そこにはヴィヴィオが眠っている部屋に通じる扉があった。扉は僅かに開いていた。

「ヴィヴィ…オ？」

なのはがそう問い掛けると扉はゆっくりと開き、寝間着姿のヴィヴィオが目を潤ませながら立っていた。

「…今の話、聴いてたの？」

なのははヴィヴィオの目線に合わせてしゃがんで訊く。ヴィヴィオはコクンと頷く。

「そう…。ヴィヴィオは、ミッドに帰りたくないの？」

「…なのはママや、フェイトママと…離れたくない…。」

ヴィヴィオの言い分は尤もだ。だが、なのはは暫定的とはいえヴィヴィオの親だ。自分の幼い娘をみすみす死ぬ確率の高い戦場に連れて行くわけには行かない。

「でもヴィヴィオ、なのはママやフェイトママがこれから行く所は戦場なんだよ？もしかしたら、死んじゃうかもしれないの。だから…」

「…それでも！私は…、なのはママと一緒に居たいの！！」

なのはの言葉を遮り、ヴィヴィオが叫ぶように言い放った。そしてなのはの横を走り抜け、廊下に飛び出していってしまった。

部屋を飛び出したヴィヴィオは、ただひたすらに廊下を走っていた。減速せずに角を曲がると、誰かにぶつかった。

「おっと…なんだヴィヴィオか。どうしたんだ?」

ヴィヴィオが顔を上げると、ぶつかった相手がバンであることに気が付く。

「えぐっ…バンさん…」

「お、おいおい、本当にどうしたんだよ!?」

ヴィヴィオは両手で涙を拭うが、更に溢れ出て一向に止まらない。バンはそれを見てオロオロしている。

「どうしたの、バン?」

『キュイ?』

そこにフィーネとジークがやって来る。

「いや、なんだかよく分かんないんだけどさ…」

「その件は、僕が説明します。」

ヴィヴィオの頭に手のひらサイズのザビンガが停まり、説明を始めた。

「なるほどなぁ…これからは危ないから、ヴィヴィオをなのは達の世界に帰そうって話か。で、それでヴィヴィオは帰りたくない…と。

」

う～ん、と腕を組んで考え込むバン。これはどちらかと言うと、なのはとフェイト、それにヴィヴィオの問題だ。部外者がどうこう言って良い話ではない。

「どうしたもんかなぁ…。俺が口出す訳にもいかないし…」

「ねぇヴィヴィオ。」

頭を抱えるバンに助け舟を出すかの様に、フィーネがヴィヴィオに話し掛ける。

「ヴィヴィオは、なのはママとフェイトママのことは嫌い？」

「…ううん、大好きです…。」

フィーネの問い掛けに首を振って答えるヴィヴィオ。

「うん。じゃあなのはママとフェイトママも、きっとヴィヴィオの事が大好きな筈だよ。だったら、ヴィヴィオの事を一番に考えているんじゃないかな？」

フィーネは優しくヴィヴィオの説得を試みるが、まだ今ひとつ決心が着かないようだ。

「本当に…なのはママとフェイトママ、私の事が好きなのかな…？もしかしたらもう嫌いに…」

「ちょっと待った、ヴィヴィオ。俺にも話させてくれないか？」

ヴィヴィオの言葉を制し、バンが語り始める。

「俺の父さんは、俺が小さい頃に村を守るため、野良ゾイドと戦って死んじゃったんだ。」
「……」
ヴィヴィオは黙って話を聞く。
「父さんは、村のみんなを…そして何よりも、俺や姉さん、自分の大切な家族を守りたいって思ったからこそ戦えるんだ、って言ってた。」
「……」
ヴィヴィオはなおも黙っている。
「えっと…つまりさ、親っていうのは、自分の大切なもの…特に家族を守るためなら死ぬ気で頑張れる物なんだ。だからさ、なのはもフェイトもヴィヴィオが嫌いなんて事、絶対思ってないって。」
最後がしどろもどろになりながらも、バンは自分の考えを纏めた。
「…分かりました。」
「よっし。それじゃ、なのはとフェイトの所に行こう。ちゃんと謝って、言いたいことは言わないとな。」
バンはヴィヴィオの小さな体を持ち上げ、肩車をするとなのはの居る部屋に向かって歩いていった。

第三十八話　親の心、子の心（後書き）

機体解説

サラマンダー・ボンヴァーン
ゴゴ・サティ大尉の愛機。
本来、超高高度爆撃機であるサラマンダーの機体コンセプトを半ば無視したかのように、背部にゴジュラス用のバスターキャノンを搭載している。理由は、ゴジュラスキャノンの扱いにかけては右に出る者は居ないと自負する、サティ大尉の趣味。それ以上でもそれ以下でもない。

ご意見、ご感想等お待ちしております。

では。

第三十九話　爆熱的復讐心（前書き）

お待たせしました！やっと中間テストが終了したので、投稿させて頂きます。長い間お待たせしてすいませんでした…。

第三十九話　爆熱的復讐心

バンとフィーネはヴィヴィオを連れて、なのはとフェイトの部屋の扉を開いた。

「ヴィヴィオ！」

フェイトが椅子から立ち上がり、バン達の所へ駆けてくる。

「お届け物で～す…なんちゃって。」

ちょっとおどけてみたりするバン。

「もう、心配したんだよ。」

「ごめんなさい…。」

ヴィヴィオはフェイトに咎められ、少しだけ顔を俯かせる。

「まあまあ、あんまり叱らないでやってくれよ。」

「すみませんバンさん、フィーネさん、ご迷惑をおかけして…」

「気にしない気にしない。」

少しだけ頭を下げるフェイトに、バンが手を軽く振って謙遜する。

「ところで、なのははどうしたんだ？」

バンは辺りを見渡して、なのはの姿が見えないことに気づいた。

「なのはなら、ついさっきヴィヴィオを捜しに…」

「ただいま、フェイトちゃん…」

扉が開き、顔を俯かせたなのはが部屋に入ってきた。

「よっ、なのは。」

「バンさん、それにヴィヴィオ!?」

バンは抱きかかえていたヴィヴィオをなのはに渡す。

「もう、ヴィヴィオが心配で、基地中を捜し回っちゃったんだよ。」

「ごめんなさい…。」

フェイトの時と同じように、少しだけしょんぼりするヴィヴィオ。

「あんまり叱らないでやってくれよ?ヴィヴィオだって、なのは達と一緒に居たいだけなんだしさ。」

「それはそうなんですけど…やっぱり、航海中に何か遭ったら…」

どうしたものか、と思案していると、扉が開いて大佐が現れた。

「よう、ヴィヴィオは見つかったか?」

「あ、大佐。はい、お陰様で。」

「そうかそうか、そいつは良かった。でな、用はそれだけじゃないんだ。」

大佐は身なりを整え、両足を肩幅に開き、両手を腰の辺りで組んだ。それを見たなのは達も身なりを整え、体側に両手をぴったりと合わせる。

「高町なのは一等空尉及び高町ヴィヴィオ。以上二名を明日より、

2ヶ月間の臨時休暇を与える！」
「は…ええ！？」
突然休暇を与えられ、驚くなのは。周りのメンバーも同様に驚く。
「な、何故ですか！？突然休みだなんて…！」
「なのは。お前、ミッドでデカいヤマ片付けた所為で、本来の力を出せないらしいじゃないか。」
「うぅ…」
大佐の言う通りだった。なのははＪＳ事件での無茶が祟り、本来の力の何割かしか使えていなかった。それでも、あれだけの砲撃を撃てるのだから、流石は管理局のエース・オブ・エースといった所だろう。
しかし、今のコンディションのまま全力投球していれば、必ず体が壊れてしまう筈だ。事実、大佐はそんな部下や同僚を沢山見てきていたのだ。
「お前はまだ若い。司令官としても、人生の先輩としても、お前にはまだこんな所で潰れてもらう訳には行かないんだ。ゆっくり体を休めてこい。」
「し、しかし…」
まだ納得できかねないと言っているような表情をするなのは。自分はまだ戦える、そう言いたそうだった。
「それに、お前がミッドに戻ればヴィヴィオだって、寂しい思いはしなくても良いしな！」
「…！！」

その言葉で、なのはは大佐の意図に気付いた。なのはとヴィヴィオを引き離せたくないことと、なのはのコンディションを整えて万全な状態で戦ってほしいことを考えての、大佐に出来る限りの好意であったのだ。

「ま、完全回復したら、またこき使ってやるからな。だから、今はゆっくり体と心を休めてこい！」

「ひゃっ！？」

バン、となのはの背中の中心を平手で叩く大佐に、なのはは驚いて声を上げた。

「大佐、ありがとうございます！」

「なぁに、いいってことよ！」

ハッハッハッハと豪快な笑い声を上げながら、大佐は部屋を出ていくのだった。

帝都ヴァルハラ、帝国軍本部第十八格納庫。そこではレイブンとトーレの専用機の開発が行われていた。

レイブンの機体は、シャドーをイメージしたフォルムとカラーリングが施され、十枚の翼兼ブレードを装備したバーサークフューラ

ー。　トーレの物は、両腕に巨大なノコギリ状のブレードを始めとして全身にブレードを纏ったアイアンコングだ。
双方共にエース級パイロットの機体として（トーレはパイロットではないが）、かなりの存在感を放っている様に思える。
それら二機の改修作業を、壁にもたれかかって眺めている二つの影が居た。レイブンと彼が従える黒いオーガノイド、シャドーだ。
一人と一体は何を言うでもなく、ただただ自分が乗るであろう機体を眺めている。

「あら～、こんな所にいたのね～」

そこにクアットロが現れ、レイブンの隣に歩み寄った。

「…アンタか。何の用だ？」
「つれないわねぇ、こ～んな美人の女の子に声を掛けられたのに、何にも思わないのぉ？」

やや膨れっ面でレイブンに顔を近づけ、からかおうとするクアットロ。普通の男なら、赤面して顔を逸らすなりするだろう。だがレイブンは違う。常に冷静な性格な上、興味の無いものには一切関心を示さない。クアットロの存在もまた然りだ。この性格は、バンと初めて出逢った少年時代から変わっていない。

「別に、何も？」

何の感情も込めず、ただハッキリと言い切る。

「ふぅん、じゃあ私達、ナンバーズの事は気にならないのぉ？」
「アンタらが戦闘機人とやらだろうが、魔導士だろうが関係ない。僕はただ共和国を、ゾイドを破壊し、蹂躙し、消し去れればそれで

良いんだ。」

今度は眼光を鋭く、拳を握りしめ、感情、主に怒りと憎しみのこもった声で答えた。

それを見たクアットロは、目の前のレイブンをふざけたような目ではなく、真剣かつ興味津々な目で見据える。

（ふぅん…。この子、なかなか面白いじゃない…）

クアットロはレイブンの心に潜む憎しみという名の焔（ほのお）の巨大さを感じ取り、ほんの一瞬だが惚れかけた。

「で、そんな話をするために僕を捜していたんじゃないだろ？」

「そうそう、レイちゃん今度からこの機体に乗り換えるんでしょ？だからぁ…」

「構わないさ。乗るなりジャンクにするなり、好きにすればいい。」

「あらぁレイちゃん、ジェノブレイカーに思い入れとかは無かったのぉ？」

ジェノブレイカーに乗せてくれと言い切る前に、あっさり承諾したレイブンに訊くクアットロ。

「別に…。ゾイドは敵を潰すためのただの道具だ。戦えなくなるか、もっと強いゾイドが手に入れば用はないさ。」

役立たずは僕には必要無い。そう言い切ると、レイブンはシャドーを連れてどこかに行ってしまった。

「役立たずは要らない…ねぇ。」

多少なりとも気が合いそうだ、と思ったクアットロであった。

次の日、なのははヴィヴィオと共にミッドチルダに戻るため、簡単な荷造りをしていた。

「えっと、着替えに歯ブラシ…後はアイナさんのお土産を入れて…っと。うん、準備完了！」

薄茶色のバッグを閉じ、ふぅ、と一息つくなのは。後ははやてが乗って来る次元航行艦を待つだけだ。だが、なのはは何か心に引っかかるものがあった。

「…？何か忘れてるような…」

腕を組んで両目を瞑り、何とかして思い出そうとするなのは。

「……ああっ！！」

数分間考え込み、ようやく思い出した。ザバットの所為で忘れていたが、ティアナを呼び出して特訓の成果を見ようと思っていたのだ。

なのはは急いで部屋を飛び出し、ティアナの元へ走り出す。

廊下の突き当たりを右に曲がろうとしたとき、誰かにぶつかった。

「「きゃっ！？」」

走っていた為に、お互いに尻餅を突いた。

「いたた…ってティアナ？」

「痛た…あ、すいません、なのはさん。」

打った部位をさすりながら、ゆっくり立ち上がって謝るティアナ。

「ううん、こっちこそ…っと、ちょうど良かった。実は昨日の話なんだけど…」

「あ、私もなのはさんにお願いしたい事が…」

二人はやや焦っていた為か同時に口を開き、ほぼ同じタイミングで発言する。

「「クロスファイアシュートのバリエーションを見て（見せて）ほしいんですが（だけど）……え？」」

お互いの台詞が見事にハモり、一瞬ポカンとする二人。どうやら同じ事を言いたかったらしい。

「…なんか、同じ事考えていたみたいだね。」

「…ですね。」

クスクスと微笑しながら、二人は基地の外に向かって歩き出した。

「じゃあ、模擬戦を始めるよ！二人共、準備は良い！？」
「はい！」
「おうよ！」

晴れ渡った空に響くような声で返事をするティアナとアーバイン。
因みに相手がアーバインなのは、前に行った模擬戦でティアナが敗北しているからだ。つまり、これはティアナのリベンジ戦でもある。
今回もアーバインは、汎用型ロングレンジライフルを背部に搭載したコマンドウルフに搭乗している。

「うん。それじゃあ、レディー…」

身構えるティアナと、操縦桿を握る手に力がこもるアーバイン。

「Ｇｏ！」

なのはの右手が勢いよく挙げられ、模擬戦が開始された。

第三十九話　爆熱的復讐心（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第四十話　針の穴を通す一撃（前書き）

ヴァイス
「クーリスマス、クリスマスー。背中に背負ったモテオーラー、ひとつー俺めに下さいなー…ううう（泣）」

…もうすぐクリスマスということで、ヴァイス君に一曲歌って貰いました。歌詞はきびだんごの引用、更に五秒で作りました。

第四十話です、どうぞ。

第四十話　針の穴を通す一撃

中央大陸の南沿岸部のとある軍港では、ニクシー基地に向かう予定の輸送艦隊が出港準備を行っていた。

停泊しているネオ・タートルシップ二十隻と、ウミガメ型貨物船ゾイド『クラーケン』十隻で輸送予定の機体数は、大小合わせておよそ一万機だ。機体内容にはケーニッヒウルフ十機やシャドーフォックス数十機といった新型機をはじめ、ガンブラスター等の再就役機も含まれている。

その中でも、特に目を引く二体のライガーがある。

一つはカーキ色の機体色に重装甲、シールドライガー用のダブルキャノンに十六連装ミサイルポッド、更にガトリングガンを装備という超砲撃仕様のシールドライガー。もう一つは対照的に、日本刀をモチーフにした切れ味抜群の強化型レーザーブレードを左右に有する漆黒のブレードライガーだ。

勿論これらは個人専用の改造機であり、軍内にもこれ一機しか無い。所謂（いわゆる）、エースパイロット専用機である。

「失礼します。イスルギ少佐、アルドワーズ中佐がお見えになりました。」

「ああ、通してくれ。」

ネオ・タートルシップの一室に伝令係の一般兵が訪れ、アジアンビューティーという言葉の似合いそうな女性佐官ーケイ・イスルギ少佐に要件を告げた。そしてイスルギ少佐の指示を受けた兵士は、部屋の外で待たせている人物を部屋に招き入れた後、自分の持ち場に戻っていった。

「失礼するよ、イスルギ少佐。」

「お久しぶりです、アルドワーズ中佐。」

部屋に入ってきた薄紫の髪に眼鏡を掛けた男性――セレス・アルドワーズ中佐に向け、イスルギ少佐は挨拶と共に敬礼する。

「ああ、本当に久しぶりだね。最後に会ったのは…」

「四年前の合同演習が最後でした。」

「もうそんなに経つのか…。早いものだね。」

しみじみとした口調で言うアルドワーズ中佐。

「そういえば、その合同演習に居たバン・フライハイト少尉やレイ・グレック中尉を覚えておいでですか?」

「ああ。ライガー乗りの二人だろう?先日、昇進したんだってね。」

アルドワーズ中佐は四年前の合同演習を思い出す。まだ十六歳だったバンが突っ込みすぎて、全身ペイント塗(まみ)れになっていたのを思い出し、思わず微笑した。

「彼等は印象的だったよ。ただの兵士とは、何かが違っていたからね。」

「ええ、熱血で馬鹿正直で…。何より、『大切なものを守り抜きたい』という気持ちがよく表れていました。」

まだバンが一等兵でレイが上等兵だった頃、ヘマをした二人にイスルギ少佐は『何故軍人になったのか』という問答をした。

バンは『大切なもの、本当に守りたいものを死ぬ気で守り抜くため』と答え、レイは『弱い自分が許せなくて、大切なものを守り抜ける力を得るため』と答えた。

続けてイスルギ少佐は、『作戦の結果、多くの生命(いのち)を見捨てなけ

ればならない状況になったらどうするか』とも訊いた。すると二人は揃ってこう言った。

『それでも救える生命があるならば、必ず救い出してみせるし、そんな状況を作り出さない為に、俺達は強くなる』と。

「実に青臭い考えでした…が、私もそう思っていた時期が少なからずあります。ですが、私は隠密部隊だった為、それを棄てざるを得ませんでしたが…」

「すると、彼等はその精神を貫き続けたまま強くなった、と？」

「あの二人なら、あり得…いや、必ずそうなっている筈です。」

イスルギ少佐は当時のバンとレイの瞳に宿っていた信念という名の炎を思い出し、多少偏見も含むが断定する。

「なるほど…君がそう言うのなら、信じても良さそうだ。じゃあ、魔導士はどう思う？」

「魔導士…ですか。」

イスルギ少佐も話は聞いていた。自分達の世界…惑星Ｚｉ以外からやって来たという、ゾイドにも匹敵する力を持った人々、と。

「最初はとんだ眉唾（まゆつば）だと思いましたが、エウロペから送られてきた映像を見たら、信じざるを得ませんでした。」

イスルギ少佐が見た映像には、ディバインバスターでアイアンコングの装甲を貫くなのはや、シュバルツ専用セイバータイガーと互角に渡り合うフェイトが映されていた。

魔法を知らない者が見れば、それはまるで天使か悪魔か、はたまた化け物くらいにしか見えなかっただろう。事実イスルギ少佐も、

その高い戦闘能力に終始驚かされ続けていた。

「ですが、実際にこの目で間近に見なくては彼女等の力は分かりませんが…」

ふとイスルギ少佐は机の時計を見ると、既に午前十一時を回っていた。

「中佐、申し訳ありませんが訓練の時間なので…」

「ああ、もうそんな時間か。すまないね、少佐。」

「いえ、お気になさらず。」

イスルギ少佐とアルドワーズ中佐は部屋を出て挨拶をし、廊下を別々に歩いていった。

「どうした！特訓の成果ってのは、そんなもんか！？」

「くっ…まだまだァ！」

ティアナとアーバインの模擬戦が開始してから二十分。幻術を駆使して序盤はティアナがリードしていたものの、アーバインの持ち前のカンや洞察力で見破られ、再び劣勢に立たされている。ティアナの放った魔力弾が、多少は命中しているのが唯一の救いだ。

ティアナはコマンドウルフの訓練用ペイント弾の攻撃を避けるため、ゾイドの残骸に隠れて対抗策を思案する。

（このままじゃジリ貧ね…だったら！）

『アレ』を使うしかない、という結論に辿り着き、ティアナが残骸の『左右』から姿を現して走り出す。片方は幻術で作り出した偽物だ。

「両方同じ動きか…どっちだ…？」

アーバインは目を凝らして本物を見極めようとするが、多めの魔力を使った幻術はかなり精巧に出来ており、アーバインはカンに頼らざるを得なくなった。

「ちっ、しょうがねぇ。一か八か…右だ！」

アーバインは向かって右のティアナに、背中のロングレンジライフルからペイント弾を発射した。だがそれは分身だったらしく、命中と同時に霧散した。

「ちいっ、ハズレかよ！」

アーバインは急いで機体を左に旋回させるが、目の前には魔力チャージを既に完了させたティアナが、クロスミラージュを構えていた。

「クロスファイアシュート…」

「くそっ、例の砲撃魔法か！」

アーバインは緊急回避を試みて、ティアナの射線上から離れた。だがティアナはすぐにコマンドウルフの移動した方向に銃口を向け、なおも発射体勢を崩さない。

「ピンホール・シフトォォオ！！」

クロスミラージュの銃口からオレンジ色の細めの砲撃が放たれ、同時にクロスミラージュを構えるティアナの両腕が反動で跳ね上がった。

「なっ！？方向を変えただと！？」

この砲撃の一番の利点は、発射するまで射線を自分を軸に３６０。変更できる事だ。更にギリギリまで収束された砲撃は高い貫通性能を誇り、巧くすればアイアンコングの重装甲すらも貫ける。

そんな砲撃がコマンドウルフの首に命中し、見事に風穴を空けた。

「うぉぉおっ！？」

コマンドウルフは倒れ込み、そのままシステムフリーズした。

「凄いじゃないティアナ！一週間ちょっとで、ここまでやるなんて思わなかったよ！」

ティアナを抱き締め、頭を撫でながら褒めちぎるなのは。ティアナの気持ちは恥ずかしさと嬉しさで半々だ。

「あ、ありがとうございます！」
「おい、ティアナ。」
アーバインがティアナに声を掛ける。ティアナはなのはの体から離れ、アーバインの目を見ながら向き合った。
「…なんですか？」
ややきつめの口調で言う。どうせまた、なにかしらの文句を付けようというのだろう、とティアナは思っていた。
「…ちったあやるじゃねぇか。見直したぜ。」
予想もしていなかった言葉を掛けられ、戸惑うティアナ。まさかアーバインの口からそんな言葉が出るなんて、まるで考えもしていなかったのだ。
「その…、ありがとうございます…」
ティアナは戸惑いながらも、とりあえず例を述べる。一流のゾイド乗りであるアーバインに褒められたのは嬉しいが、まだ信じられないような気持ちがあるのだ。
「うん。それじゃあ、後片付けを始めよっか。」
大破して横たわるコマンドウルフを指差すなのは。ああなることは予想していたものの、ここまで見事に動けなくなるとは思っていなかった。
「…なのは、修理費は共和国軍（ウチ）と六課（そっち）で割り勘って事になってるか

らな。」
「…マジですか。」
「あ、あはは…」

ティアナとなのはは苦笑いを浮かべながら、コマンドウルフの回収作業に取り掛かるのだった。

「よし、本日はこれまで！」
「はっ！ありがとうございましたァ！」

再びとある軍港。イスルギ少佐は自分直属の部下であるタクマ・I・サンダース軍曹に剣術の稽古をつけていた。

タクマの名字にイスルギと付いているのは、イスルギ家と親しい間柄にあるサンダース家の当主に大層気に入られ、サンダース家に子供、つまり跡取りが居なかった事もあって養子になったからだ。

「タクマ。一つ訊くが、良いか？」
「なんですケイ姐さ…いえ、イスルギ少佐。」
「お前は何故、軍人になった？」

座り込んでスポーツドリンクを飲むタクマに、かつてバンとレイにした問答をするイスルギ少佐。

「…三年も部下に置いといて、今更ですか？」
「良いから答えろ。何故軍人になった？」

タクマはスポーツドリンクを座っている段差の隣に置き、立ち上がって真剣な眼差しでイスルギ少佐を見つめる。

「俺が軍に入ったのは…イスルギ少佐、貴女のお役に立つためです！」

躊躇（ためら）い無くハッキリと言い放ったタクマ。それを聞いたイスルギ少佐は思う。

（やれやれ…どうしてライガー乗りというのは、熱血が多いのだろうな。タクマになら、アレを託しても良いかもしれん…）

目を閉じて微笑しているイスルギ少佐を前に、タクマは疑問符を浮かべるだけであった。

第四十話　針の穴を通す一撃（後書き）

クロスファイアシュート・ピンホールシフト

その名の通り、針の穴に通る様な細く貫通性能の高い砲撃魔法。
数個の魔力スフィアを束ね、一直線に放つ。束ねる魔力の量や密度で、威力や射程距離などを自在に変更可能。
誘導こそ出来ないが、射線を自分を中心に３６０。自由に変更可能。

こんな感じです。ご意見、ご感想等、お待ちしております。

第四十一話　思惑（前書き）

なのはの劇場版が、近所の映画館で公開されない事が残念でならないムーンアローです。

第四十一話です、どうぞ。

第四十一話　思惑

ティアナの模擬戦から数分後、ニクシー基地にはやての乗った次元航行艦が到着した。

「なのはちゃん、お待たせや～」

「あ、はやてちゃん。ううん、そんなに待ってなかったよ。」

「さよか…ってなのはちゃん、何でバリアジャケットなん？」

はやてはなのはの服装がバリアジャケットである事に気付く。なのはは自分の到着を待っていただけの筈だ、とはやては思った。

「にゃはは…それがね…」

『キュイ。』

なのはが言い切る前にジークがやって来て、口にくわえた紙をはやてに渡した。

「おっ、何やジーク？」

はやては折り畳まれた紙を広げ、目を通す。そして数秒後、

「な、なんじゃこりゃぁぁぁぁあ!?」

はやての叫びが、ニクシー基地の空に響き渡った。因みにはやてが読んだ紙には『請求書』と銘打たれており、内訳は『コマンドウルフの修理費の半額』だった。

なのはがバリアジャケットだったのはコマンドウルフの撤去作業を手伝うためだったのだ。

この後なのはとティアナは、はやてにこっぴどく叱られたとか。

「まったく…ティアナの実力が上がったんはええねんけど、余計な出費まで出てもうたわ…。」

なのはとヴィヴィオがミッドに戻った後。机に突っ伏して、目の前に座るフェイトに愚痴を漏らすはやてが居た。

「あはは…でも、ティアナが成長できたのが分かったんだし、安いものじゃない？」

「そう言うてもなぁ…ただでさえ、最近は出費がかさんでるんよ。」

はやての言う通り、最近の六課の財布はややピンチなのだ。ＪＳ事件で隊舎が半壊したとき、退役ギリギリのＬ級次元航行艦アースラを臨時の隊舎としてレンタルしたり、デバイスを修理・強化したりしていた為、予定外の出費が多くなってしまっている。

「せやから、少しでも節約したいんやけどなぁ…ミッドも最近不景気やし…スバル達にも、あんまり訓練で物壊さんように言うといてや。」

はやてがフェイトに愚痴をこぼしていると、ハーマンがやって来た。

「はやて二佐、大佐がお呼びだぜ。」
「ああ、さよか。ほんならフェイトちゃん、宜しくな。」
「はいはい。」

はやては立ち上がり、ハーマンの後に付いて部屋をロビーを出て行った。

「失礼します。八神二等陸佐です。」
「おう、入んな。」

扉を軽く叩き、はやては司令官室の扉を開ける。

「大佐、お呼びでしょうか。」
「ああ、今度こっちに本国からの部隊が合流するんだ。この資料に目を通しておいてくれ。」

はやては大佐から二枚の紙を受け取る。そこにはアルドワーズ中佐とイスルギ少佐のプロフィールや、その愛機のデータが書かれていた。

「分かりました。あ、それと大佐。ミッドから連れてきた追加メンバーを紹介したいんですが…」
「ああ、良いぞ。」

「ほなら失礼して…ヴィータ、みんなを連れてきてや。」

ヴィータに念話を送り、連れてくるように指示を出す。

「直ぐ来るそうです。」
「そうか。コーヒーでも飲むか？」
「じゃあ、お言葉に甘えて…」

大佐ははやてを机の椅子に座らせて立ち上がり、コーヒーを淹れる。部屋一面にコーヒーの香ばしい香りが広がり、コーヒーにあまり詳しくないはやてでも良いコーヒー豆を使っているのが分かる。

「ほらよ。」
「ありがとうございます。」

はやては大佐からコーヒーの入ったカップを受け取り、中身を口に軽く含んだ。

「わ…美味しい！」
「良かった、気に入って貰えたみたいだな。」
「レイさんのコーヒーもそうやけど…大佐のもむっちゃ美味しいです！」

はやては前にレイが淹れたコーヒーの味を思い出した。味もどことなく似ている気がしたのだ。

「そりゃそうだ、レイにコーヒーを教えたのは俺だからな。」
「ああ、なんとなく味が似てるな～って思てたんですよ。」

そんな感じで談笑していると、扉を叩く音がした。ヴィータが来

たらしい。

「失礼します。」

扉が開くとヴィータを先頭に、はやての言う追加メンバーが後に付いて入ってきた。

一方その頃、プロイツェン邸に数人の軍人が訪れていた。

「ギュンター・プロイツェン閣下、我々と共にご同行願います。」

「…貴官等は？」

「軍部治安維持局の者です。ホマレフ閣下の命を受けて参りました。ご同行願えますか？」

ホマレフと言えばガイロス帝国宰相にして、アンナの親族だ。何か嗅ぎつけられたのか。

「…分かった。直ぐに向かおう。」

プロイツェンは下手に拒否するのは得策ではないと判断し、同行することを承諾した。

「何だって、プロイツェンが連行された？」
「ええ、今し方。」
プロイツェンから与えられた研究所で機体の開発をするスカリエッティに、ウーノが伝える。
「ふむ…何か情報が漏れたのかな？」
「恐らくは、『あの計画』ではないとは思われますが。」
ウーノの言う『あの計画』はプロイツェンとスカリエッティ、それにナンバーズやヴォルフ位にしかまだ伝えていない為、漏洩はまず無いとスカリエッティは考える。
（すると、漏れたのはＫＦＤの方か…開発スタッフにホマレフの手の者が紛れていた…と考えるのが妥当だね…）
管理体制がなっていないな、と残念がるスカリエッティ。と、そこに通信が入った。
宙に浮かび上がったモニターには、数名の治安維持局員が映っている。どうやら用件はプロイツェンに対するものと同じらしい。
（やはり来たか…）

「ドクター、如何致します？」
「そうだね…私が戻るまでの間、妹たちを頼むよ。」
そう言って、スカリエッティは部屋を出て行った。

その数日後、帝都ヴァルハラの議事堂で緊急会議が開かれた。議題はプロイツェンとスカリエッティを中心に進められていた、量産型デスステティンガーである『ＫＦＤ（キラー・フロムザ・ダーク）』の無断開発の是非についてだ。
あるホマレフ派の議員は「いくら摂政とはいえ、議会や皇帝陛下にことわりも無しに開発を行うのは如何なものか」、「第一、先日暴走したデスステティンガーの量産型を開発する事自体、国民の不安を煽るのでは？」といった意見が出され、プロイツェン派の議員からは「開発費用は全て、プロイツェン閣下の私財で賄われており、軍の予算は一切使われていなかったので軍に迷惑は掛けていない」、「ドクター・スカリエッティが暴走を抑える技術を開発してそれを搭載しているため、暴走に関しては全く問題は無い」という反論を行った。
反論の内容に関しては嘘ではない。事実、開発費用はプロイツェン家の莫大な財産を利用していたし、スカリエッティが数日前にオーガノイドの一種である『インターフェース』を発見していた。
これはデスステティンガーに搭載される真オーガノイドを制御出来る代物で、かつて戦場に投入された機体の様に暴走する事は有り得なくなるのだ。

だがそうは言っても、皇帝ルドルフに無断で開発を行っていたのは事実として、プロイツェンとスカリエッティは軍法会議に掛けられる事になった。

「ヴォルフ！」

帝国軍ヴァルハラ基地の廊下で、アンナがヴォルフに駆け寄る。

「ああ、アンナか。どうした？」

ヴォルフは疲れが溜まっているのか、目の下にうっすらと隈が出来ている。父親のプロイツェンが拘束され、ＫＦＤ開発計画の事後処理に追われている所為だろう。

「私の部下の所為でお父上が…その、ごめんなさい…」

「ああ、気にするなよ。アンナの所為なんかじゃないさ。」

涙ぐみながら頭を下げ、必死に謝るアンナ。ＫＦＤ開発の責任者としての、責任感によるものもあるだろう。ヴォルフはアンナの左肩に右手を乗せて気にし過ぎるなと言う。

「でも、もしもこれがきっかけでヴォルフの立場が悪くなったりしたら…」

プロイツェンの不祥事によって、息子のヴォルフの立場が危うくなることを不安がるアンナ。
アンナも自身の生まれから、軍内での立場があまり強くはない。
だからヴォルフはこの計画が上手くいくことによって、アンナの立場を少しでも強めようとも考えていたのだ。

「ありがとなアンナ、俺の心配してくれて。」

ヴォルフは両腕でアンナの身体を引き寄せ、軽く抱きしめる。

「でももう心配は要らない、俺にはお前がついてれば、何も怖くは無いんだ。」
「嬉しい…ヴォルフ…」

二人は互いに抱きしめ合い、心なしか辺りにピンク色の空間が広がった気がする。父親が裁判に掛けられようという時に、お熱い二人である。いや、こんな時だからこそ、なのだろうか。
そうして二人は暫くの間、抱きしめ合っていた。因みに、その光景を偶々通りかかったトーレに見られていたのは内緒である。

更に数日後、軍法会議の結果が出た。

内容は『ＫＦＤの開発は認めるが、一週間以内に完成させて実戦投入せよ』だ。

このテストが成功すれば、ＫＦＤは正式に軍に配備される事になるだろう。だがプロイツェンはそれが気に入らなかった。元々プロイツェンはＫＦＤをＰＫ師団に配備するために開発していた。それが軍全体に配備される事になっては『あの計画』実行の際に都合が悪くなるのだ。

何故悪くなるのかは、まだ明言出来ないので伏せておく事にする。

「で、どうするんだい？閣下殿。」

「どうもこうも、このまますんなりと事を運ばせはしない。」

軍法会議が閉廷し、拘束を解かれたスカリエッティとプロイツェンは、他に人の居ない廊下を歩きながら今後の事を話していた。

「ふむ、完成させない訳にはいかないしね…どんな策を用意しているんだい？」

「何を言う。頭の切れる貴様なら、既に察しがついているだろう？」

プロイツェンがそう言うと、常に緩み気味のスカリエッティの口元が、更に曲線を描く。

「フフ…流石はギュンター・プロイツェン閣下殿だ、私の事などお見通しと見える。」

「誉めても何も出んぞ。…戻って作業を進めるとしよう。」

二人は早足になり、それきり黙って廊下を歩いていった。

～おまけ～

レイ
「ふぅ、今日の訓練終わり…っと。」
なのは
「お疲れさまです。そういえばレイさん、前から思ってたんですけど…」
レイ
「？なんだ？」
なのは
「レイさんって声がストラーダの音声と似てませんか？」
レイ
「そうか？…考えた事無かったな。」
ヴィータ
「ああ、そういやそうだな。ついでに言うなら、アタシのアイゼンやシグナムのレヴァンティンにも似てるぜ？」
レイ
「マジかよ…」
シグナム
「まぁ、このシリーズではさほど珍しくもないがな。」

第四十一話　思惑（後書き）

ご意見、ご感想等お待ちしております。

第四十二話　二人の剣豪（前書き）

２０１０年最初のリリカルＺＯＩＤＳの更新となります。今年もよろしくお願いします。

第四十二話　二人の剣豪

プロイツェン家地下の私設兵器工場。そこには迷彩塗装が施された量産型デススティンガー、ＫＦＤ（キラー・フロムザ・ダーク）二十機があった。

「ようやく完成したか…」

「当初の注文通りに完成したが…いつ細工するんだい？」

スカリエッティが隣に居るプロイツェンに訊ねる。

「明日の正午、ヴァルハラの兵器開発局の人間が最終チェックに来る。その直後に実行する予定だ。その際、ウーノとクアットロを使わせてもらうぞ。」

「ああ、構わないさ。クアットロは最近退屈そうだったからね、張り切ってくれるだろう。」

この所クアットロは自分に向いた作戦が行われず、やる事と言ったらシミュレーターでのゾイドの操縦訓練ばかりだったので、やや退屈気味だったのだ。

「そうか、それならば訓練の成果は出ているのか？」

「ふむ…今度本人に訊いて…「上達しております。先日はシミュレーターでの模擬戦で、難易度“上”のジェノザウラータイプ十機を撃破しました。」

二人が声がした方を向くと、ウーノが立っていた。

「おやウーノ、いつの間に居たんだい？」

「たった今来たところです。少々ドクターのお耳に入れておきたい事があるのですが…」
「ん、なんだい？」
スカリエッティはウーノに歩み寄って耳を傾ける。
「シュバルツ中佐が、私達の事を嗅ぎ回っているようです。如何致しましょう？」
「シュバルツ君が？ふむ…」
スカリエッティはシュバルツとは基地内で一度会っていた。その時のシュバルツの印象は、『えらく真面目な男』であった。
上官から与えられた任務は文句も言わずに実行し、戦場の指揮官としても優秀で部下からも慕われている。隊長としてはこの上ない程の実力者だ。
「構わん、放っておけ。」
「良いのかい？」
「別に今すぐに消さずとも良い。奴にはまだ、働いてもらわねばな…」
プロイツェンはそこで一度言葉を切り、ウーノに指示を出した。

「異動…でありますか？」
「ああ、カール・L（リヒテン）・シュバルツ中佐、貴殿及びその部隊をニクス大陸南部の基地に異動とする…人事局からの正式な辞令だ。」
シュバルツは突然の人事に愕然とした。
「待って下さい！何故突然…！」
偶々シュバルツと雑談していたキルシェが抗議する。が、それをシュバルツの手が制した。
「止せ、大尉。抗議したところで私に選択権は無い。」
「しかし中佐！」
最も信頼できる上官であるシュバルツに諫められながらも、キルシェは納得できずに食い下がる。
「私はロブ基地攻略とニクシー基地防衛に失敗した。それでも首都に居れたのが幸いだったのだ。…文句を言えた立場じゃない。」
「くっ…」
シュバルツの言葉を聞いたキルシェは、食い下がることを止めた。

人事局の人間が立ち去った後、キルシェはシュバルツと話をしていた。

「申し訳ありません中佐、部下である我々が非力な所為で…」

「いや、大尉達だけの所為じゃない。非力だったのは私とて同じだ。」

キルシェに背を向けて話していたシュバルツはキルシェに向き直り、話を続ける。

「こんな指令官だが、付いてきてくれるか？キルシェ・ハルトリーゲル大尉。」

その言葉を聞いたキルシェは口元を軽く歪ませ、答える。

「私の命は、とうの昔に中佐に預けました。たとえ地獄の果てだろうと、お供いたします！」

そう言い切ってから、ビシッと敬礼する。

「…ありがとう、大尉。」

シュバルツも感謝の意を込めて、同様に敬礼で返した。

一方そのころ、ニクシー基地には共和国本国からの援軍が到着し、それらの機体を搬入が急ピッチで進められていた。

「ハーマン少佐、このコンテナどこに運びますか？」

「それは第三格納庫に頼む。ああ、それとスピノサパー隊は第四格納庫に運んでくれ。」

ハーマン少佐は次から次へと運ばれてくるコンテナや機体に、指示を出して運ばせている。

「おっ、少佐になって早速リーダーシップを発揮してるな。」

「つーか、少佐になったのにあんな仕事って…もっと整備兵とかがやるんじゃないんですか？」

ハーマン少佐の働きを、少し離れた所から見ているボーグマン大佐とレイ。

「整備兵は全員、機体の調整に追われてるからな。偶々ロブが大した仕事も無かったから、ああしてやらせてるんだ。」

「はぁ…ホント、人手不足もいいとこですね。」

溜め息を吐くレイ。自分はゼロの整備や調整があったから良かったものの、何もする事が無かったらそれこそハーマンの代わりをしていただろう。ハーマンには悪いが、自分は大尉にもなってそれはまっぴらゴメンだ、と思うレイ。

ふとハーマンの右五メートルを見ると、レイにとって懐かしい顔が歩いてくるのを見つけた。アルドワーズ中佐とイスルギ少佐であ

る。

「お久しぶりです、ボーグマン大佐。」
「おう、セレスにケイか。久しぶりだな、元気でやってるか？」
「ええ、お陰様で。」

大佐とアルドワーズ中佐はがっちりと握手をし、互いに懐かしがる。

一方イスルギ少佐はレイの前に立ち、話し掛ける。

「久しいな、レイ・グレック大尉。」
「こちらこそお久しぶりです、イスルギ少佐。」

一時期とはいえ、かつての師匠だったイスルギ少佐に敬礼するレイ。顔には出さないが、イスルギ少佐も成長したレイの姿を見て少し嬉しそうだ。

「お前の活躍は聞いている…なんでも、帝国の新型機を奪取したそうじゃないか。」
「ええ。ついでにその新型も、自分の愛機として頂きましたけど。」
「そうか…ならば、実力も前よりは上がっているのだな？」
「ええ。ダンチですよダンチ。」

レイの自信に満ち溢れる態度を見て、イスルギ少佐はそれを頼もしく思う。

「なんでしたら、ご自分で確かめてみます？」
「それも良いが…今回は先に私用があってな。シグナム二尉はどこに居る？」

レイはイスルギ少佐が売られた勝負をすぐに受けず、シグナムを指名したことに内心驚く。

「シグナムですか？それなら多分、はやて部隊長と一緒に…」
「レイさ～ん、ちょっとええかな？」

噂をすれば影とは正にこの事か、はやてがヴィータにシグナム、リィンを連れてやって来た。

「お、はやてか。ちょうどいいや、こっちもお前に用が…」

レイが言い切る前に、イスルギ少佐が一歩前にでて来る。

「ライトニング分隊副隊長、シグナム二等空尉だな？」
「そうですが…貴女は？」

突然自分の名前を呼ばれ、少々戸惑うシグナム。

「共和国情報部より出向中のケイ・イスルギ少佐だ。単刀直入に言おう。」

イスルギ少佐は腰に差した軍刀を鞘から抜き、シグナムに突きつける。周りのレイ達は驚きの表情を表すが、そんな事は気にしていないようだ。

「シグナム二等空尉、貴様に勝負を申し込みたい。」
「勝負…ですか？」
「そうだ。無論、一対一での真剣勝負だ。」

シグナムは正直な所、驚いていた。大抵は自分が勝負を仕掛ける

事はあっても、相手から仕掛けられた事は滅多に無い。ましてや、魔力資質すら持たない人物からなど、有り得ない話だった。

「…何故、私と？」「貴様のデータは、移動の艦（ふね）の中で読ませてもらった。だがそれだけではまだ足りんのでな…直接手合わせして、見極めたいのだ。」

共に作戦に参加する上官として、戦力を把握しておく事が目的だ、という事を説明した。

「了解しました。では、エリオ…部下に木刀を用意させますので少々お待ちを…」

シグナムは念話でエリオに話しかけようとする。が、すぐにイスルギ少佐に止められる。

「シグナム二尉、その必要はない。貴様の愛刀…レヴァンティンとやらさえあれば十分だ。」

シグナムはその台詞を聞いて驚く。

「木刀などという甘ったれた物は必要無いと言っている。早々に太刀を抜け、シグナム二尉。」

「し、しかしそれは…」

イスルギ少佐には、魔力資質など当然ながら無い。それなのにイスルギ少佐は、訓練用の木刀ではなくデバイスのレヴァンティンを指名したのだ。驚かない方がおかしいだろう。

シグナムは魔力も無いイスルギ少佐にレヴァンティンを振るうのは気が引けるようで、なんとかして説得しようとする。だがイスル

ギ少佐は考えを変える気は無いようだ。

「くどいぞシグナム二尉。それとも何か？ヴォルケンリッターの烈火の将とやらは、私が魔力すら持たんというのを言い訳に逃げる臆病者だったのか？」

「ちょ、少佐！？」

レイが驚きのあまり声を上げるが、イスルギ少佐はそんな事お構い無しに続ける。

「夜天の主を守るヴォルケンリッターの将がこのような腑抜けでは…主である八神二佐の底が知れるわ！！」

「んなっ！？イスルギ少佐！？」

目の前にその夜天の主が居るというのに、ズバリと言い切るイスルギ少佐。勿論はやても驚いて声を上げた。

そしてその台詞を聞いたシグナムは、目を見開いてイスルギ少佐を睨み付けながら言う。

「…私を侮辱するのは構いません。ですが…主はやてを侮辱するその台詞だけは、聞き捨てなりません！！撤回して頂きたい！！」

「ならば、貴様の力を以て撤回して見せろ！！」

「承知！レヴァンティン！！」

『Ｊａ！』

シグナムはレヴァンティンを起動させ、瞬時に騎士甲冑に着替える。

「フッ、そうこなくてはな…。」

かくして、二人の剣豪の戦いが始まろうとしていた。

第四十二話　二人の剣豪（後書き）

次回はシグナムｖｓイスルギ少佐の話の予定です。
ご意見やご感想等、お待ちしております。

第四十三話　ぶつかり合う剣豪（前編）（前書き）

最近この話を書いてて思いました。
…あれ？ゾイド同士のバトル、今年まだやってなくね？
それと言い忘れてましたが、ユーノは溜まった仕事を片付けるためにミッドに帰りました。

第四十三話　ぶつかり合う剣豪（前編）

ニクシー基地練兵場。そこには仮設の観客席が設置され、基地内の兵士の殆どが集まっている。

後一時間で、シグナムとイスルギ少佐の模擬戦という名目の真剣勝負が始まるからだ。

大量のギャラリーが了承された理由は、ボーグマン大佐が「兵の士気アップと息抜きをさせるため」と言ったからだ。実のところ、大佐もこの二人の戦いが観たいだけだったりする。

「さーあ、烈火の将シグナム二尉対共和国屈指の剣豪イスルギ少佐の真剣勝負！勝つのはどっちだァ！？」

「俺シグナム二尉！」「いやいやイスルギ少佐！」「俺もイスルギ少佐！」「シグナム二尉が負ける訳ない！」

観客席の隅では腹巻きを巻いてハリセンをドラム缶に叩きつけ、兵士達を焚き付けて賭けを始めているヴァイスの姿があった。アンソロで賭けを扇動し、最終的にシグナムに制裁を食らったというのにこの男、なかなかいい度胸である。

「ヴァイス…シグナムにレヴァンティンの錆にされても知らねぇぞ？」

近くを通りかかったヴィータが一応声をかける。

「あ、ヴィータ副隊長。大丈夫ッスよ、今回賭けるのは現金じゃないですから。」

「じゃあ何賭けんだ？」

ヴィータは頭上に疑問符を浮かべながら訊ねる。

「このビスケットですよ。これを一袋あたり５００ゼニーで配って、後で換金するんです。これなら現金を賭けてないから大丈夫なんですよ。」

自慢げに説明するヴァイス。

「…なんか昔、はやての持ってたマンガに似たような話が載ってたような…」

「ええ。部隊長から借りたマンガから引用したんです。確かじゃりン子…」

「ん？ヴァイス、そろそろリングアナウンサーのリハーサルの時間じゃねーのか？」

ヴィータが練兵場の壁に掛けられたデジタル時計を見て言う。

「いっけね！急がねぇと！」

ヴァイスは慌ててテキ屋ルックからＳ○ＡＰもビックリの早さで普段の制服に着替えると、駆け足でオペレータールームに向かっていった。

練兵場の近くに位置する一室。ここは今、シグナムの控え室として使用されている。
部屋の中には、木刀を軽く振ってウォーミングアップをしているシグナムと、セコンドとしてスタンバイするエリオとヴィータが居る。

「シグナム副隊長…やっぱり全力でやるんですか？」

エリオが訊く。

「ああ。主はやての名誉を取り戻すためにも、全力を以てイスルギ少佐を倒さねばならないからな。」

シグナムは素振りの手を休めずに答える。

「ですが、イスルギ少佐は魔力も無いんですよ!？それじゃあ結果は…」
「エリオ、それは違うな。」

エリオの台詞を遮ってシグナムが言う。

「イスルギ少佐は、私の力を知りたいと言っていた。それはつまり、私と対等かそれ以上の実力が無ければ出来ない。…油断すれば、こちらが斬られかねん。」

シグナムは素振りを終え、木刀を机の上に置く。

「そろそろ時間だ。行くぞ、エリオ、ヴィータ。」
「は、はい！」

「おう！」

シグナム達は部屋を出て、対決の舞台に向けて歩き出した。

『…年前から愛してるーッ！…ってレイの旦那！？いきなりマイクの入力変えんで下さい！外に漏れたじゃないッスか！』

『はっはっは、ちょっとした茶目っ気だ、ヴァイスよ。ついでに時間だからアナウンス頼むぜ。』

その放送を聞いて、練兵場のキャパシティギリギリまで入った観衆に笑いの渦が巻き起こる。

『あー、エヘンエヘン。失礼しました。只今より、シグナム二尉ＶＳイスルギ少佐による、エキシビジョンマッチの開会式を執り行います！』

待ってましたと言わんばかりに歓声が巻き起こる。

特設リングの中央にボーグマン大佐がマイクを持って移動した。

『あー、みんな試合開始を今か今かと待ち望んでいるとは思うが、先に先日ミッドチルダから出向してきた五人を紹介したいと思う。』

大佐がリングの脇に合図を送ると、その五人が一列に並んでリングに上がった。

『時空管理局陸士１０８部隊より機動六課に出向中の、ギンガ・ナカジマ陸曹です。スバル・ナカジマ二士の姉です。よろしくお願いします！』

一番左端のギンガが大佐からマイクを受け取って自己紹介する。終わるとマイクを隣に回す。

『地上本部より出向中の、オットー特別陸士です。得意分野は広域戦です。』

「え…オットー！？治ったんですか、部隊長！」

モニターで式の模様を見ていたティアナが驚きの声を上げる。

「うん、ウチがここに来るちょっと前にな。マリエルさんが気張ってくれたお陰や。」

以前ディマンティスから負った傷は、殆ど残らずに治っていた。だが病み上がりという事もあり、当分は前線（まえ）には出さないとの事だ。

『同じく、ディードです。オットーの妹です。よろしくお願いします。』

ディードが淡々と自己紹介を終え、次に控えるウェンディにマイクを渡す。

『はいはーい、ウェンディッス！ディードの姉で、オットーの妹ッス！どうぞよろしくッス！』

マイクを手にした瞬間、右手を高々と上げ、嬉々として名乗るウェンディ。観客席からはその元気の良さに、ちらほらと笑い声も聞こえてきた。

「こらウェンディ、もう少し自重しろ。公衆の面前だぞ。」

「あ、ごめんッス。」

隣の背の低い銀髪の少女に諫められ、ウェンディは頭をポリポリと掻く。そしてマイクは最後の一人に渡された。

『まったく…。コホン。えーオットー、ウェンディ、ディードの姉のチンクです。よろしくお願いします。あと、名前の最後を伏せ字にしないようにお願いします。』

眼帯をした銀髪の少女、という風貌に多くの兵が驚いていたが、最後に付け加えた台詞のおかげで場が和んだ。…主に男性を中心にだが。

全員の挨拶が済むと、観客席から歓迎の意を込めての拍手が巻き起こった。

『さて、いよいよ本日のメインイベントの始まりだ！』

大佐が宣言すると、待ってましたと言わんばかりに観客席から大歓声が上がる。

『赤コーナー、時空管理局機動六課所属…シグナムゥゥゥ二等ォォ空尉ィィィイ！』

歓声と共にシグナムがリングに上がり、レヴァンティンを出現さ

せる。

『青コーナー、共和国軍情報部所属…ケェェイ・イスルギィィイ少ォォ佐ァァァア！』

続いてイスルギ少佐がコールされると、シグナムに負けず劣らずの大歓声が上がった。

両者はリング中央に向かい合って立ち、お互いを睨み合う。

「始めから本気で来い、でないと斬り捨てられても知らんぞ。」

「言われる迄もありません。主はやての名誉の為にも、貴女を倒して見せます。」

短い会話の後、レフェリー役の大佐が二人を所定の位置に移動させる。

「制限時間は二十分、一本勝負。どちらかがギブアップするか、試合続行不可能と俺が判断したら終了だ。いいな？」

「了解です。」

「問題ありません。」

ルールを確認し、同意すると互いに自らの愛刀を構える。そして大佐がリングから降りると、試合開始を告げるゴングが勢いよく鳴らされた。

「いやぁぁぁぁぁあっ！！」

「はぁぁぁぁぁあっ！！」

試合開始と同時に二人は勢いよくリングの床を蹴り、正面の相手に向かって剣を降り下ろす。互いの剣は火花と金属音を立ててぶつ

かり合い、鍔迫り合いの形になる。
十秒近くの鍔迫り合いの後、二人は一旦距離を取って剣を構え直す。そして弧を描くように摺り足で相手の様子を伺いながら、じりじりと移動する。
シグナムの額にうっすらと汗が流れる。イスルギ少佐の隙の無い構えと威圧感溢れる眼光に、ほんの僅かだが気押されしているのだ。
ヴォルケンリッターの将であるシグナムを僅かでも怯ませることが出来る人物が、果たして何人居るだろうか。それ程にイスルギ少佐は強いのだ。

「せぇいっ！！」

その僅かな隙を、イスルギ少佐は見逃さなかった。あっという間に距離を詰め、怒涛のラッシュを掛ける。

「ぐぅっ！」

シグナムはその猛攻に対して、レヴァンティンとその鞘を盾代わりに凌ごうとする。だがイスルギ少佐の剣戟は一撃一撃が重く、じわじわと押されていく。

「シグナム副隊長が…押されてる！？」

スバルが驚きの声を上げる。自分たちがどんなに頑張っても敵わなかったシグナムが、魔力も無いイスルギ少佐に単純な力で押されているのだから無理もないだろう。たとえ自分たちが未熟な事を差し引いても、だ。

「どうした！守ってばかりでは、勝利など得られんぞ！」
「くぅっ、レヴァンティン！」

『Ｊａ！』

レヴァンティンはコッキング音と共に空薬夾を排出し、刀身に魔力を込める。刀身は瞬間的に炎に包まれ、その剣戟でイスルギ少佐の刀を弾き返した。

それを見たイスルギ少佐は直ぐに連打を止め、バックステップで二メートル程後退する。

「カートリッジシステム…魔力を込めた弾丸を使用する事で、一時的に威力を高めるシステム…。これ程とはな。」

イスルギ少佐は刀を再び両手持ちで構え直し、感想を述べる。

「やはり報告書だけで、その者の実力は測りきれんな！」

「同感です！レヴァンティン！」

『Ｓｃｈｌａｎｇｅ　ｆｏｒｍ！』

レヴァンティンから再び空薬夾が吐き出され、それを見たイスルギ少佐は何か仕掛けてくると判断し、更にバックステップで距離を取る。

その直後、レヴァンティンの刀身が鎖状に変形し、縦横無尽に空間を駆け巡ってイスルギ少佐に襲い掛かる。

「シュランゲフォルムか…ならば！」

イスルギ少佐は暴れ回る刃の中心、シグナムに向けて一直線に走り出す。左右からレヴァンティンの刃が襲い掛かるが、右手に持った刀を軽く振る事でいとも容易く弾き返してしまう。

「まずい、レヴァンティン！」

『Ｊａ！』

シグナムは直ぐにレヴァンティンの刀身を元に戻す。近接戦はシュランゲフォルムでは不向きだからだ。

早い判断が効を成し、すんでのところでイスルギ少佐の一撃を受け止めた。

「ほう、やるな。」

「…自分の武器の弱点は、分かっているつもりです。」

そう言うと二人は直ぐに離れ、体勢を立て直して相手の様子を伺う。

（くっ…なんという太刀筋だ…。速すぎて隙が見付からん！）

（流石は古代ベルカの騎士…一撃が重すぎるな。これでは此方が力負けせんとも限らんな。）

互いに警戒すべき点を脳内で整理し、対策を考える。それにより、勝負はほんの少しの間膠着状態になった。

第四十三話　ぶつかり合う剣豪（前編）（後書き）

バトルシーンが上手く書けたか不安ですが、ご意見やご感想等、お待ちしております。

第四十四話　ぶつかり合う剣豪（後編）

「す、凄い…！！シグナム副隊長もイスルギ少佐も、一歩も引いてない…！」

シグナムとイスルギ少佐の熾烈なぶつかり合いを見て、ティアナはただただ驚いていた。

最初は魔力を持たないイスルギ少佐に勝ち目は無いと思っていたが、今は寧ろシグナムが倒されそうだとも思ったりしていた。

「ああ。イスルギ少佐は共和国軍随一の剣の使い手だけあって、確かに強ェ。」

ジ・オーガの整備を終え、ティアナの隣に来たアーバインが言う。

「ま、少佐の強さは剣の腕だけじゃねえけどな。」

「どういうことです？」

「少佐の使ってる刀…名刀・村雨は上質のリーオで鋳（う）たれてんだ。」

「リーオ？」

ティアナがリーオについて訊く。

「ああ、リーオってのは…」

「別名メタルＺｉとも呼ばれ、あらゆる金属の存在する惑星Ｚｉでも極めて希少かつ最上級の金属…ですね。」

アーバインが答えようとしたとき、誰かが代わりに答えた。

ティアナが声のした方向を見ると、眼鏡を掛けた茶髪の青年が歩いて来るのを見つけた。

「そしてリーオは武装の素材としても優秀で、無類の切れ味と強度を誇ります。ですが、その加工は非常に難しく…」
「…あなたは？」
ティアナが青年に訊ねる。
「あっと、これは失礼。僕はバディター・ロウエン伍長と言います。以後、お見知り置きを。」
「はあ…私はティアナ・ランスター二等陸士です。」
「あなた方、機動六課の噂は聞いています。異世界からやって来た、生身でもゾイドと互角に渡り合える強者揃いの部隊だとか…」
ティアナはバディターの博識ぶりにやや困惑する。
「へぇ、お前らも有名人だな。」
アーバインが軽くからかいの意味も含んだ口笛を吹いて言う。
「あ、ありがとうございます。でも何故、私達の事を？」
「それはもう、あなた方の事は中央大陸でも有名ですから。首都のヘリックシティには、西方大陸の戦況も逐一伝えられますしね。」
バディターは嬉々として言う。実際、ゾイドの群れを相手に真っ向から渡り合えるのは、なのはやフェイトといった隊長格に限られるのだが、それは黙っておく事にした。
「ところで、あなたはもしや傭兵の…」
「ああ。アーバイン・キャバリエーレだ。」

それを確認すると、バディターの口は再び開いた。

「やはりですか。あなたも有名ですよ、『鬼神に認められた男』って。」

鬼神とはジ・オーガの事だろう。まあ誰にも乗りこなせなかった機体を我が物としたとあれば、嫌でも名前は知れ渡るというものだ。

「そうかい。そう言うお前さんも有名人だぜ、『士官学校を卒業したにもかかわらず、一兵卒を希望した変わり者』ってな。」

アーバインはハッキリと言う。

士官学校というのは将来のエリート候補を育成する場であり、一兵卒を希望するなら訓練校に入り、所謂『鬼軍曹』のしごきを受けた後に卒業して前線に出撃していく、というのが普通だ。

それは軍隊に近い時空管理局で己を磨いてきたティアナにも分かる事だった。

だが今、自分の目の前に居る男――バディターはそのセオリーを半ばねじ曲げる形の経歴を持っているのだ。

バディターが何を考えて道を選んだかはティアナには分からない。理由を聞くのも野暮な話だと思い、それを聞くのは止めた。

「何で士官学校に行ける程の奴が、わざわざ一兵卒なんかになろうと思ったんだ?」

問答無用でバディターに訊くアーバイン。とことん容赦ない男だ、とティアナは感じた。

「…僕は士官学校で学ぶうち、自分の適性は指揮官ではなく現場だと判断しました。それを信じて進んだまでです。」

バディターは淡々と言う。その口調は先程とは打って変わり、楽しいという感情が殆ど感じられなかった。

「それより、勝負が動くみたいですよ?」

バディターがモニターに映るシグナムとイスルギ少佐を指差して言う。

アーバインとティアナは、再びモニターを見ることにした。

「…こちらダイバー01、周辺海域に異常ありませ~ん…」

ニクシー基地沖合の海中をマリン・ブルーガー曹長率いるハンマーヘッド隊が潜行している。共和国首都より送られてきた追加武装、ヴァイキングランスを搭載しての試運転を兼ねた、周辺海域の哨戒任務の最中である。

「ダイバー02、了解。…てか、どうしたんスか曹長?ご機嫌斜めみたいッスけど。」

「訊いてやるなよ、兵長。シグナム二尉とイスルギ少佐の勝負を楽しみにしてた矢先に、この哨戒任務が入っちまったんだからさ。」

「ああ成る程…。そりゃあ難儀な話だな。」

マリンの部隊の兵長と伍長が話している。

「分かってるなら訊かないでよね…」

回線が開きっぱなしだったため、二人の会話がマリンにも筒抜けだった。おかげでマリンは更に不機嫌になる。

「まあまあ、帰ったらみんなで飲みに行きましょうや。昨日、ニクシーの街に良い飲み屋を見つけたンスよ。」

兵長はマリンの機嫌を直すために、飲み会の提案をする。

「…そうねぇ、日頃の鬱憤でも、晴らしてやろうかしら～？」

「決まりッスね…ん？」

兵長がふとレーダーを確認すると、索敵範囲ギリギリの距離に数十の反応があった。

「…！曹長！十二時の方向に反応多数！シグナルはガイロス帝国、ウォディックです！」

「あらま、やっと仕事終わりだと思ったのに…」

マリンは溜め息混じりに言う。

「しょーがないわね！ダイバー０１より各機へ！フォーメーションパターンをＢに変更、ウォディックの迎撃に向かうわよ！！」

『了解！』

「それと伍長！至急ニクシー基地に交戦の報告！出来ればプテラス隊を寄越して貰って！」

「了解ッス！」

マリンの指示を受け、二十機程のハンマーヘッドが三機一組のフォーメーションを取る。

数分後、マリン達の前にガンメタルに塗られた分厚い対水圧装甲に身を包んだ魚型潜水艦ゾイド、『ウォディック』数十機が姿を現した。

（狙いはこっちの海戦力を消耗させる…ってトコかしら？）

マリンは自分なりに考える。帝国は目の前のウォディックに加え、シンカーというように海戦戦力は共和国に比べて充実している。だが一方の共和国はワニ型のバリゲーターこそあるが、それだけではシンカーやウォディックには勝てない。

その戦力差を埋めるためにハンマーヘッドが開発されたのだが、まだまだ本格的な量産化までには至っていないのだ。

更に言うと、共和国軍全体のハンマーヘッドは全てがニクシー基地に配備されている。つまり…

（ここで私達をボロボロにしておけば、来（きた）る洋上戦で帝国が有利に戦える…か。）

「曹長！プテラス隊が後三十分程で所定のポイントに駆けつけるそうです！」

先程兵長が要請しておいた援軍が来るらしい。

「ＯＫ！場所は！？」

「ここより南に五キロ！到着次第、対潜水艦用の爆雷を投下するとのことです！」

「分かったわ！各機、後退しつつウォディックに応戦して！誘い出

すのに気付かれないようにね！」

そう言った直後、横一線に並んだウォディックの口腔内から、超音波を利用した水中用兵装『ソニックブラスター』が一斉に放たれた。

マリン達は操縦桿を素早く動かし、散開してそれを回避する。

「新型の性能、見せてあげるわよ！」

マリンのハンマーヘッドがウォディック一体に向けて突撃し、他の二機がバルカン砲で援護射撃をする。

ハンマーヘッド前部のミサイルポッドを廃して搭載された槍、『ヴァイキングランス』が高熱を帯びて赤く変色し始める。

「食らいなさぁぁいっ！」

ヴァイキングランスがウォディックを捉えると、深海の水圧にも耐えられる強化装甲がいとも容易く貫かれた。

「一丁上がり～！」

「曹長、後ろ！」

兵長がマリンの後方から、ウォディックが迫っているのを知らせる。マリンは機体を急浮上させ、ソニックブラスターの回避に成功した。

「っとお！危ない危ない！」

そのまま円を描く様に潜行し、ウォディックの後ろを取ると、飛行用の翼に搭載した魚雷を二発放って撃沈させた。

「サンキュ、兵長！」
「いえ、礼には及びません！」

マリンは兵長に感謝する。
その後もウォディックの放つ魚雷やビームガンを巧みに回避し、バルカン砲を中心に魚雷やヴァイキングランスをトドメに使用する戦法で、後退しつつもチマチマと一機ずつ確実に仕留めていく。
だがウォディックの数は多く、次第にこちら側が消耗し始めてきた。

（このままじゃジリ貧だわ…。プテラス隊はまだなの！？）

マリンが焦り始めたとき、強化された３Ｄレーダーに新たな反応が現れた。だが、それはプテラス隊が来る予定の後方ではなく前方――つまり、ウォディックの出現地点よりも後ろだったのだ。

「そ、曹長！敵の増援を確認！シンカーです！」
「ええ！？」

マリンがレーダーを見ると、その数は三十にも及んでいる。
いくら『全ての面でシンカーを上回る』というコンセプトでハンマーヘッドが開発されているとは言え、ウォディックとの戦いで消耗し始めている機体では、とても太刀打ち出来ないだろう。

「ど、どうします曹長！？」
「まともにやり合って、勝てるわけ無いわね…。回避に専念して援軍を待つわよ！」
「りょ、了解！」

いつもはノリで動いているマリンだが、戦闘中――特にこのようなジリ貧寸前の状況では冷静に対処しようとする。
シンカーの群れから大量の魚雷が放たれ、ハンマーヘッドに襲い掛かる。

（さぁ～て…ここが正念場ね…。意地でも凌ぎきってやろうじゃない！）

マリンは心の中で自分自身にゲキを飛ばし、目の前の危機に立ち向かっていくのであった。

「いいぞーっ！そこだそこだァ！」

マリン達がシンカーと遭遇する少し前、ニクシー基地練兵場のボルテージは最高潮に達していた。
シグナムとイスルギ少佐の激闘の末に残り時間も一分を切り、二人の対決ははいよいよクライマックスに近付いていたのだ。

「レヴァンティン！残りのカートリッジ全てを叩き込むぞ！」
『Ｊａ！』

レヴァンティンから大量の空薬夾が排出され、その刀身に巨大な

炎を纏った。

「それが貴様の残り全てか…。ならばそれを、真っ向から受けさせてもらおう！」

イスルギ少佐も名刀・村雨を握り直し、持てる力の全てをそこに注ぎ込む。

観客席が少々ざわめいているが、今の二人にはまるで耳に入っていない。

「紫電…一閃！！」

「ハァァァァア！！」

そして互いに全力全開で床を蹴り、リング中央で刃をぶつけ合う。

「ウオォォォォォオ！！」

「でりゃァァァァア！！」

シグナムもイスルギ少佐も最早目の前の好敵手（ライバル）しか見えておらず、自らの愛刀に込める力と気合いが限界まで高められる。

そして遂に、剣が弾かれる音が高らかに響いた。

弾かれた剣が高々と宙を舞っている。つまりそれは、決着が着いたという事だ。

観客は皆、宙を舞う剣に注目し、どちらの勝利かを知った。

「村雨が、弾かれたか…」

アーバインが呟く。彼の言う通り、宙を舞っていたのは名刀・村雨だった。

村雨は重力に引かれて落下し、イスルギ少佐の頭を掠めて床に突

き刺さった。

そしてイスルギ少佐の喉元には、レヴァンティンの切っ先が突きつけられていた。

イスルギ少佐は普段は鋭い目をほんの少しだけ見開き、突きつけられているレヴァンティンに怯える事無く、シグナムの目を見て直立している。後頭部で纏めていた緑髪は村雨の刃が髪留めに僅かに当たっていたらしく、髪留めが切れた事で自然に下ろされていた。

「それまで！！勝者、シグナム二等空尉！」

大佐がすかさずマイクを手に取って宣言する。その瞬間、二人の健闘を讃えんと大歓声が巻き起こった。

シグナムはレヴァンティンの切っ先をイスルギ少佐から離し、待機モードに戻す。

イスルギ少佐も足下に突き立っている村雨を引き抜き、何も言わずに腰に差している鞘に戻した。

「…完敗だな。見事だったぞ、シグナム二尉。」

イスルギ少佐はシグナムに歩み寄り、右手を差し出して握手を求める。

「いえ…カートリッジが無ければ、私が負けていたでしょう。あれで漸く勝てたぐらいです。」

シグナムも右手を出し、イスルギ少佐の右手をがっしりと掴んで握手を交わす。

「何を言っている、貴様は自ら持てる力の全てを注ぎ込み、その力

で正々堂々と私を打ち負かしたのだ…。そう謙遜する事など無い。」
「…ありがとうございます。」

イスルギ少佐はそう言うものの、シグナムは魔力も無いイスルギ少佐に、魔力を使ってギリギリで勝利した事がどうもスッキリとしなかった。そしてまた、次は魔法無しで、剣の腕のみで勝利を得たいとも思っていた。

「しかし参ったな…。上官である私が負けてしまっては、私の部下達に申し訳が着かんぞ…」

イスルギ少佐が言う。彼女の部下には彼女を師と仰ぐ者も少なくない。剣士としても、勿論、ゾイド乗りとしてもだ。その憧れの的が自分よりも低い階級の者に敗れてしまっては、それを残念に思う者も少なからず居るだろう。

「そこで…だ。この戦いが終結したら、今一度貴様と剣を交わしたい。どうだ?」

つまり、リベンジマッチである。シグナムとの死闘を繰り広げた所為か、ここにまた一人、バトルマニアが誕生してしまったようだ。

シグナムは少し意外に思いながらも――

「…はい!喜んで受けましょう!」

ハッキリと良く通る凛々しい声で答えた。

返事を聞いたイスルギ少佐は口元を軽く歪める。

「フッ…その時が楽しみだな。それとシグナム二尉。」

イスルギ少佐はシグナムに背を向け、歩き出しながら言う。

「…次は魔法無しで勝ちたいなどと、間違っても考えるなよ？」

そう言われてシグナムは一瞬ギクッとする。完璧に思っていた。現在進行形で。

（まさか…心を読まれた…？）

「さて、タクマ！」

「…！？は、はい！」

イスルギ少佐のセコンドに着いていたタクマは、いきなり大きめの声で話し掛けられて一瞬だけ驚く。

「先程から何やら騒がしいが…何があった？」

第四十四話　ぶつかり合う剣豪（後編）（後書き）

書いてる途中で思ったんですが、なんかシグナムとイスルギ少佐の勝負が少なかった気がします…

ご意見やご感想等、お待ちしております。

第四十五話　刃の竜巻（前書き）

先日投稿した話で、ミッドチルダの通貨をゼニーとしましたが、通貨の単位の公式設定があったら教えていただけると幸いです。

第四十五話　刃の竜巻

「…何？哨戒任務中のハンマーヘッド隊が？」
「ええ。これからプテラス隊に爆雷やら魚雷やらを積んで、救援に向かう予定です。」
タクマが答える。
「そうか…」
イスルギ少佐は口元に手を当て、少し考える。
「よし、ならば私も向かおう。」
「そうですね、それが……ってええ！？」
イスルギ少佐があまりにも自然に言った為、危うく流れでゴーサインを出しかけたタクマ。
「…何を驚いている？」
「そりゃ驚きもしますよ！少佐のライガーには、水中用の兵装なんか無いんですよ！？」
タクマの言う通り、イスルギ少佐のブレードライガーには一一というかライガータイプは基本的に地上での運用を主体として設計されている為、水中戦には殆ど向いていない。
「それなのにウォディックの群れに突っ込むなんて、死にに行くような物ですよ！？」
「…並みのゾイド乗りならばな。それとも、お前は私がどこにでも

居る様な人間に見えるか？」
「…いえ、そんな事は…」
イスルギ少佐にそう言われると、何も言い返せないタクマ。
「心配するな、何も私だけで現場に行く訳じゃない。」
そう言ってイスルギ少佐は、マイクを手に取った。
『ゴゴ・サティ大尉！貴様のサラマンダーを準備しろ！私を運んでいけ！』「了解（アイ・マム）！」
サティ大尉は席から立ち上がって返事をすると、大急ぎで格納庫へと走っていった。
それに合わせて、イスルギ少佐も自身の愛機が置かれている格納庫に向け、新しい髪留めで髪を結いながら歩き出した。
十分後、ニクシー基地格納庫のハッチが開き、プテラス隊が飛び立っていく。
それに遅れてイスルギ少佐のブレードライガーＫＳが格納庫から飛び出し、海に向かって走り出す。

『ブレードライガーＫＳ、発進しました！サラマンダーボンヴァーン、発進どうぞ！』
「了解だ！ゴゴ・サティ、サラマンダーボンヴァーン！出撃るぞ！」
サラマンダーボンヴァーンは格納庫から歩いて外に出て、巨大な翼を羽ばたかせて飛翔する。
その後ゆっくりと加速して滑空を始め、ブレードライガーＫＳに直角に飛んでいき、大きながっしりとした両脚で背中を掴むと、マリン達の救援に向かって最大出力で飛んでいった。

『うぁっ！？さ、左側面に被弾っ！出力が安定しません！』
『こっちはイオンブースターが中破！スピードが出ません！』
マリン達はシンカーとウォディックの群れに囲まれて動きが取れなくなっている。それなりに硬い装甲を持つハンマーヘッドだが、次第にダメージが蓄積されていく。

「合流地点には着いてるわ！後少しだけ、持ちこたえて！」
「そんな事言ったって！さっきから機体も集中力も限界ギリギリですよ！」
「そんなの私だって一緒よ！」
先程から数で押され、ほぼ全てのハンマーヘッドが限界間際の状

態だ。寧ろ、ここまで良く耐えた方と言える。

「きゃああっ！？」

「そ、曹長ォ！」

マリンの乗るハンマーヘッドに、シンカーの魚雷が直撃した。コックピットに警告音が鳴り響き、ディスプレイに『Ｗａｒｎｉｎｇ』の文字が浮かび上がって自らの危機を報せている。

「うぅっ…あと一発食らったらあの世行きね…」

基本的に楽天家なマリンだが、今回ばかりは自らの命の危機に怯えていた。

『ハッ、共和国の最新鋭機も大したことねぇな！』

マリンを攻撃したシンカーのパイロットが鼻で笑いながら言う。

続けて動きの鈍くなったマリンのハンマーヘッドをロックオンし、トドメを刺そうとする。

『これで終わりにしてやらぁ！』

シンカーのパイロットが魚雷の発射ボタンを押そうとしたとき、レーダーが高速で接近する『何か』を捉えた。

『？レーダーに反応…！？な、何だこりゃあ！？』

レーダーに映ったのは救援の為のプテラス隊。だが、それだけではここまで驚くことはない。パイロットが本当に驚いたのは、プテラスの群れにたった一つだけ混じっている存在――ブレードライガーを掴んだまま飛んでいるサラマンダーボンヴァーンに対してだっ

た。

『な、なんでサラマンダーがブレードライガーを!?…っておわぁ!』

パイロットが面食らっている隙に、プテラス隊がシンカーやウォディックに向けて爆雷や魚雷を投下する。

それにより、シンカーやウォディックを十数機撃破する。

「よし、サティ大尉、投下しろ!」

「了解!」

サティ大尉は指示通りにサラマンダーの足を開き、イスルギ少佐の乗ったブレードライガーを海に落とした。

大きな水しぶきを上げて着水したブレードライガーは、マリン達が戦っている深度まで潜行する。

『ブレードライガー、海に潜りました!』

『何ィ!?水中戦用武器も無いくせに、どうしようってんだ!?』

シンカーのパイロット達の意見は尤もだ。普通、ブレードライガーが水中に潜って戦おうなんて、よっぽどの馬鹿か自殺志願者としか思えない、と。

「…前後両脚及び背部ジェットブースターへのエネルギー供給を遮断、それによる余剰エネルギーの七割をEシールドジェネレーターへ、残りをブレードへ配分…。」

しかし、彼らの眼前に居るのはそのどちらでもなかった。

『あんな馬鹿に構うこたぁ無ェ、シンカー隊は上空のプテラスを叩

け！』
『了解（アイサー）！』

敵の隊長はその事に気付かず、シンカーを海面から飛び出させ、上空のプテラスの迎撃に回してしまった。

「Eシールド、出力八割で機体後方に展開！バン・フライハイト、貴様の技、暫し借りるぞ！」

ブレードライガーの臀部にEシールドが展開されると、シールドの持つ反発力を利用する事によって推進力を獲得、物凄い速さでウォディックの群れに突っ込んでいったのだ。

『た、隊長！ブレードライガーが突っ込んできます！』
『な、何ィ！？んな馬鹿な話が…！』
『機体右上及び左下にシールド追加、ブレード展開、残存エネルギーを全てブレードに集中！』

追加されたシールドの反発力を利用し、ブレードライガーの体がまるで拳銃の弾丸の如くジャイロ回転を始める。そのまま敵陣中央へ突撃する。

「切り刻め！『獅刃竜巻（ブレードツイスター）！』」

回転しながら長い日本刀型のブレードでウォディックの群れの中央を突破し、周囲に居た機体を見事に両断した。

『ウォ、ウォディック隊、ほぼ壊滅！』
『畜生！なんてこった！』

陸戦型ゾイドにいとも容易く撃破され、コンソールを叩いて悔しがる隊長。だが、今はそんな事をしている場合ではなかった。

「戦闘中に、よそ見してる暇なんざねぇぜ!?」

シンカーに乗る隊長の目の前では、サティ大尉のサラマンダーボンヴァーンがゴジュラスキャノンの砲門をシンカーに向けて飛んでいた。

「ゴジュラスキャノン、ファイア!」『ぐあぁぁあ!?』

シンカーの群れも、ゴジュラスキャノンの一撃とプテラス隊の攻撃で、大半が撃墜されていた。

『クソッ、隊長がやられた!全機撤退だ!』

隊長が撃墜された事で指揮系統が乱れ、敵残存戦力は全て撤退していった。

「ケイ姐さん…こういう事だったのか…。」

現場の様子を基地のモニターで見ていたタクマは、自身の師匠の

強さに改めて驚かされていた。まさかシールドの反発力を推進力に変換するなんて、誰も思い付かないだろう。

「おおっ、あれ昔お前が提案してた奴だろ？」

隣で見ていたレイがバンに言う。

「ええ、前にイスルギ少佐に言ったンスけどね、『莫迦（バカ）も休み休み言え』って一蹴されましたよ。」

いやー、覚えててくれたンスかね？と笑いながら言うバン。

そんな二人をよそに、タクマはまたもや驚いていた。今度はバンの事だ。

イスルギ少佐が昔バンから聞いた事を覚えていた上、実行に移したのがタクマは羨ましく思った。それと同時に、僅かながら嫉妬心も芽生え始めていた。

（俺は…まだケイ姐さんに認められてないってのか…！？）

タクマは悔しさから拳を握り締める。

そして任務を終えて帰還してくるイスルギ少佐を出迎えるため、その場を立ち去った。

「ん？タクマ…？」

レイはタクマの機嫌が悪くなっているのを、なんとなくだが感じ取った。

数十分後、イスルギ少佐やマリン達が無事に基地に帰還した。幸運なことに戦死者は無く、大破しかけたハンマーヘッドが十機程度あっただけだ。

「イスルギ少佐、お疲れさまです！」

ブレードライガーから降りたイスルギ少佐のもとに、タクマはドリンクを持って真っ先に駆け寄った。

「ん、すまんなタクマ。」

イスルギ少佐はドリンクを受け取ると、ストローに口を着けて中身を吸い上げる。

そしてストローから口を離すと、タクマは口を動かす。

「…少佐、先程の戦い、お見事でした。」

「？ああ、ありがとう。」

「それで…先程の技、フライハイト中尉の…アイディアだったんですか？」

タクマは手を軽く震わせながら訊ねる。

「ああ。昔フライハイト中尉が、ライガータイプの水中戦プランを持ち掛けてきた時に私に提案していてな。その時は一蹴したのだが…」

イスルギ少佐の口から、真実だという確証が取れた。それを聞いたタクマは、更に手を震わせる。勿論、イスルギ少佐には気付かれないように。

「そうだ、あの時のフライハイト中尉は…」

「…少佐、質問にお答え頂き、ありがとうございました。…失礼します。」

イスルギ少佐が言い切る前に、タクマは踵(きびす)を返し、早足でその場を立ち去った。

「お、おいタクマ……全く、どうしたというのだ…」

タクマが不機嫌なのは行動と言動で理解したが、その理由が分からずに困惑するイスルギ少佐であった。

～おまけ～

ヴァイス

「いや～、今回はバッチリ上手くいったな。後は別々に一人ずつビスケットを換金して…」

シグナム
「…随分と楽しそうだな、ヴァイス。」

ヴァイス
「うおっ!?し、シグナム姐さん!?いつの間に!?」

シグナム
「…仲間をダシにして賭けをするなと、以前言った筈だが?」

ヴァイス
「な、何の事ッスかね～…ここにあるのはビスケットだけ…」

シグナム
「残念だったな、『じゃり○子チエ』なら全巻読破している…。そのビスケットの意味も分かるぞ?」

ヴァイス
「やべぇ、逃げ…」

シグナム
「逃がさん!」

ヴァイス
「ね、姐さん止め…アッーーーー!」

第四十五話　刃の竜巻（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第四十六話　闇より出（いづ）る殺戮者（前書き）

先日、劇場版のなのはをみなとみらいまで遠征して見て来ました。
自分の住む三浦半島からは、結構大変な距離でした。
なんだかバリアジャケットがガンダムっぽくなってたりバルディッシュがより斧っぽくなってたり…物語もとても面白かったですね。

第四十六話　闇より出（いづ）る殺戮者

シグナムとイスルギ少佐の模擬戦から三日。その勝負を観たお陰か、兵士達の士気とやる気はうなぎ登りで作業が順調に進行している。

「この具合なら、五日後には暗黒大陸に向けて出発出来そうだな。」
「ええ。ウルトラザウルスの戦闘空母への改修作業も、明日には終了する予定ですし…」
「ハンマーヘッドの修理も、終わりましたしね。」

ニクシー基地の廊下を歩きながら、ボーグマン大佐とアルドワーズ中佐、それにはやてが肩にリィンを乗せて話している。

「はやて、フォワード陣の調子はどうだ？」
「バッチリです。ティアナのCF（クロスファイア）・ピンホールシフトも安定してきましたし…スバルやエリオ、キャロのコンビネーションも良くなってます。」
「いつでもオッケーですよ！」

はやてとリィンが笑顔で答える。

「セレス、お前の部下達はどうだ？」
「機体の細部強化と調整は完了しました。ですが…」

アルドワーズ中佐の語尾が少し濁る。

「？どうかしたのか？」
「サンダース軍曹の事なんですが…」

「…ハッ！…ハッ！」

基地の中庭。タクマは上着を脱ぎ、ただ一心不乱に木刀を振っていた。

細く引き締まった躯（からだ）、所謂細マッチョと呼ばれる肉体は自らの汗で濡れ、太陽の光を浴びてキラキラと輝いている。

「997…998…999…千！」

素振りが千まで行ったところで、タクマは木刀を止める。足下に置かれたバッグからタオルを取り出し、躯から滴り落ちる汗を拭う。

「ふぅ…」

頭の汗を拭いながらベンチに腰を下ろし、隣に置かれたドリンクを手に持ってストローで中身を吸い上げる。

「あ、サンダース軍曹。イスルギ少佐が…って…」

タクマが声のした方を向くと、そこには顔を赤らめるティアナが居た。

最初は顔の赤い理由が分からなかったタクマだが、自信の格好を見ると一瞬で理解できた。

「きゃぁあ！サ、サンダース軍曹、何やってんですか！？」

「ゴメンゴメン、ちょっと素振りをな…」

ティアナは物凄い勢いでタクマに背を向ける。

「イ、イスルギ少佐がお呼びです！すぐに行ってください！服着て、全速力で！」

「りょ、了解ッ！」

タクマは慌てて上着を羽織り、その場からダッシュで立ち去った。

「タクマ・Ｉ・サンダース軍曹、只今参りました！」

イスルギ少佐の部屋に入り、敬礼するタクマ。

「ああ、随分と速かったな。」

「ええ、まぁ…ちょっと急がざるを得なくなったもので…」

苦笑いを浮かべるタクマ。イスルギ少佐は訳が分からず頭上に疑

問符を浮かべるばかりである。

「…まあ良い。本題に入ろう。お前は次の作戦では、ボーグマン大佐の部隊に配属する事にした。」

「…え!?」

タクマは驚愕した。思えばタクマは今までずっと、イスルギ少佐の部隊で戦ってきた。それを突然、『ボーグマン大佐の部隊に出向』と宣告されては、ショックも大きいだろう。

「…何故ですか?」

「…次の作戦を、円滑に進める為だ。その為に、お前は大佐の部隊に…」

「嘘だッ!!」

タクマの口から部屋中にーーいや、部屋の外まで届きそうな怒号が放たれた。突然の事態に、イスルギ少佐の両目が見開かれる。

「イスルギ少佐…貴女は本当は、俺に愛想を尽かしたんじゃないですか!?」

「…何故、そう思う?」

イスルギ少佐は机に両肘を突き、顔の前で手を組み、タクマの言い分を聞こうとする。

「先日、イスルギ少佐はフライハイト中尉の考案した、ライガータイプの運用方法を実践しましたよね?」

「…ああ。」

「数年前の事を覚えていた上に、それを迷わずに実行に移した……それは貴女が、フライハイト中尉を高く評価しているって事じゃな

いんですか！？」

タクマはほんの少し下を向き、腹の底から捻り出すように言う。

「それに中央大陸を出る前、イスルギ少佐は俺に軍に入った訳を訊きました……それはつまり、俺の答えに難癖付けてそれを理由に見切りを付けようとしたんじゃないんですか！？」

言い放つタクマ。こじつけしい所もあるが、それを冷静に判断する気力を今のタクマは持ち合わせていなかった。その証拠に、タクマの目からはうっすらと涙が流れている。

「……」

イスルギ少佐は、ただ黙ってタクマの言い分を聞いていた。

「……言いたいことは…それだけか？」

悲しみと怒りが入り乱れ、必死に呼吸を整えているタクマに訊く。

「……はい…。」

「そうか……ならば、下がれ。」

イスルギ少佐はタクマの答えを聞くと、部屋を出させた。

「ふう…」

タクマが部屋を出ると、イスルギ少佐は椅子の背もたれにもたれ掛かって一息吐く。

すると扉を叩く音が二回し、ボーグマン大佐が現れる。

「よっ、ケイ。今度の作戦の件なんだが…って、どうかしたのか？元気が無いみたいだが…」
「いえ…教導というのは、難しいと感じさせられていただけです…」
「…？」

（畜生…畜生…畜生ッ…！！）

タクマは走っていた。頭に血が上り、心中ではイスルギ少佐がバンを高く評価している事への嫉妬心と、イスルギ少佐に自分だけを見ていてもらいたいという独占欲で満たされていた。
自分にあてがわれた部屋に入り、扉が閉まるのを確認すると、部屋の壁を思い切り殴りつけた。一度だけではなく、二度、三度と力を込めて思い切り殴りつける。
硬い壁を殴りつけた事によって拳から血が流れ、激痛が走る。
拳から血を、目からは涙を流しながら、遂にはその場に膝を突いて座り込んでしまう。

「畜生ッッ！！何でだよケイ姐さん！何で俺の事を見てくれないんだ…！」

畜生ッ！！と叫びながらうずくまり、嗚咽（おえつ）を漏らす。タクマは一

晩中、悔しさと寂しさに押し潰されていた。

その次の日、暗黒大陸とニクシー基地の中間の洋上に帝国軍の輸送艦『レヴィアタン』が二隻浮かんでいた。
その機体ハンガーにはＫＦＤが十機ずつ搭載され、発進準備が行われている。

「よし、最終チェック完了…っと。」

アンナが自らのＫＦＤの最終チェックを終え、コックピットに乗り込む。

「アンナ…。」
「あ、ヴォルフ。どうしたの？」

アンナのＫＦＤにヴォルフが歩み寄って声を掛ける。

「…すまない、アンナまで出撃させる事になってしまって…」

アンナはＫＦＤの開発責任者に任命された故に、否が応でも乗り込む事になってしまった。ヴォルフはその事について謝りに来たのだ。

「ううん、気にしないで。これもヴォルフやプロイツェン閣下の為だもんね。だったら、私も頑張らなくちゃ。」
「…ありがとう、アンナ。」
ヴォルフがそう言うと、軽々とジャンプしてアンナの乗るコックピットに入る。元々二人乗りではない為、やや狭いが。
「アンナ…無事に帰ってきてくれ…」
ヴォルフはアンナを体を抱き締めて言う。
「うん…約束する。」
アンナもヴォルフの体を抱き返し、二人の唇が重ね合わされた。それはほんの数十秒だったが、二人にとってはとても長い時間のように感じられた。
数十秒後、互いの唇が離れるとヴォルフは機体を降り、アンナに言う。「また後で」ーーと。
そしてヴォルフはブリッジへ向かって歩いていった。
『ＫＦＤのパイロット各位へ。まもなく、作戦開始五分前です。全機、出撃に備えて下さい。』
オペレーターの放送が入り、ＫＦＤのコンバットシステムが起動、頭部装甲の下に隠れた四つの目が赤く輝く。
パイロットはどこにも異常が無い事を確かめ、自身を落ち着かせて自らを激励する。
そして全てのパイロットが気持ちを落ち着かせた頃、レヴィアタン艦首のハッチが鮫が口を開くかの如く開いた。

「アンナ・ターレス、ＫＦＤ壱号機、出ます！」

アンナの乗るＫＦＤを先頭に他の機体も勢いよく飛び出し、尾を一直線に伸ばして大海原に潜っていった。

『ビーッ、ビーッ！』

ニクシー基地に、けたたましく警報が鳴り響く。

『ニクシー基地に高速で接近する機影を確認！総員、第一種戦闘配置！繰り返す、第一種戦闘配置！』

放送を聞いたパイロットや整備士が、大急ぎで格納庫に向かって廊下を走る。

「何事だ！？状況知らせ！」

ボーグマン大佐が基地指令室に到着し、状況を確認する。

「大佐、北より未確認機十五が、基地に向けて海中を巡航中です！」

「何！？機体識別は！？」

「試みましたが、データがありません！」

大佐の問いにフィーネが答える。

「少なくとも、ウォディックやシンカーの類ではありません…恐らく、新型です。ですが…たったこれだけというのが引っ掛かります。」

「ふむ…」

はやてが自分の意見を言う。

確かに、共和国側にデータの無い機体を使用しての奇襲攻撃にしては数が少ないし、全て新型機というのも妙な話だ。通常なら、これにウォディックやシンカーないし、レドラーの様な航空機を配置し、それらのコンビネーションによって作戦を遂行するのが常識的な戦術だ。

（我々を誘い出しての罠か？）

上空にホエールキングを潜ませ、共和国の戦力を誘い出しての不意打ち狙いとも考える。それはかつて、なのは達の世界ー地球で行われた第二次世界大戦における、ミッドウェー海戦のような状況だ。

だがすぐにその考えは放棄された。レーダーによると、上空にはホエールキングどころか飛行ゾイドも発見できなかったからだ。

「どうします？」

「そうだな…罠かもしれんが、通常通り出撃させろ。警戒は怠るなよ？」

「了解。各機、出撃どうぞ。」

オペレーターの指令により、ブレードライガー等の陸戦型ゾイドは海岸線まで移動、ストームソーダー等の空戦型は更に前に陣取った。

「未確認機、浮上してきます！」

基地の沖合三キロ地点で、未確認機が水しぶきと共に海面に姿を現す。そしてその瞬間、基地全体に戦慄が走った。

「こ、これは…！？」
「大佐！あれって…！！」
「ああ…間違い無い…！！」

浮上したのが巨大な海蠍型ゾイド――デススティンガーの量産型だったからだ。

第四十六話　闇より出（いづ）る殺戮者（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第四十七話　若獅子の焦り（前書き）

レイ
「近いな…」

フェイト
「レイさん、何の話ですか？」

レイ
「いや、今メタル化した某大人気ベーゴマのアニメがそろそろ終わるかもしれない、終わるとしよう。するとどうだ？ビーダ○ンのメタル化は失敗したし、次はいよいよ新生ゾイドの時代が来るんじゃないか！？」

フェイト
「ああ、近いってそういう事ですか。確かにありそうですね。」

レイ
「だろ？」

大佐
「…今度は爆○のアニメを始めるらしいぞ、テ○東で。」

レイ&フェイト
「……」

第四十七話　若獅子の焦り

「デスティンガーだと！？量産化に成功したのか！？」

ボーグマン大佐を始め、その状況を見た者全てが驚いていた。機体色こそ迷彩パターンだが、その姿はかつて共和国か帝国かも構わずに多大な被害を出し、その後キャロの故郷に現れて管理局を苦しめた凶戦士、デスティンガーそのものだったのだ。

「…っ！大佐、私がフォワード陣を連れて出ますんで、指揮を頼みます！」

「了解だ、気を付けろよ！」

はやては踵を返して指令室を飛び出す。

廊下と階段を駆け抜けて基地の外に出ると、既に視認できる所までＫＦＤの姿が見えていた。

「行くで、リィン！」

「はいです！」

はやては夜天の魔導書とシュベルトクロイツを起動し、バリアジャケットを身に纏うと、背中に左右三対の魔力の羽根が現れる。

「「ユニゾン・イン！」」

はやてとリィンが同時に唱えると、リィンの小さな体がはやての体の中に溶け込み、魔力を強化すると共にバリアジャケットの一部のカラーリングが変わった。

「ロングアーチ００、八神はやて！行くでぇ！」

はやては宙に舞い上がり、基地港湾部に上陸せんとするＫＦＤを見る。

『ロングアーチ００よりフォワード陣へ。敵をなるべく上陸させず、水際で食い止めてや！格納庫、特にウルトラのある第二ドックは死守するんや！』

『了解！』

『フェイトちゃんとギンガ、チンクとディードもその方向で頼むで！』

『了解！』

指示を受けたフェイトにスバル、チンクとウェンディ、それにエリオとギンガが前進し、ＫＦＤと交戦する。

『指令室、アーサー・ボーグマン大佐より全機へ通達！前回の様に暴走されてはかなわん、出来るだけ頭部への直撃は避けろ！』

前回デススティンガーが暴走した原因は、ビームキャノンの頭部への直撃が真オーガノイドの覚醒を促してしまったことだ。量産型になっている以上、暴走の心配は無いのだろうが、念には念を入れての作戦だった。

「はぁぁぁあっ！！」

「クロスファイアァァア…シュゥウト！」

エリオはティアナの援護を受け、デススティンガーのバルカン砲を掻い潜って接近する。

「食らえぇぇぇえッ！！」
『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！』

ストラーダからカートリッジが排出され、先端に魔力刃が現れる。
それに加速力を上乗せして、ＫＦＤの背中の装甲を切り裂く。
だが流石に最新鋭の機体らしく、装甲を完全に貫くことは出来なかった。

「くそっ、流石に硬い！スバルさん！」
「りょーかい！」

スバルはウイングロードに乗ってエリオの攻撃した地点まで滑り込む。

「必殺ッ！振・動・拳ッ！！」

切り裂かれた装甲部分に、スバルのＩＳ・振動破砕を利用した拳をぶつける。
拳から送られる振動波により、表面の装甲どころか内部装甲にもダメージを与える。

「ぐうッ！？おのれぇッ！」

パイロットにも僅かに衝撃が伝わったらしく、唸り声を上げる。
パイロットは直ぐにコンソールを操作し、ちょうどスバルの目の前に位置する９８０ｍｍショックカノンに火を送る。
二門の砲門がエネルギー充填により光り出し、スバルを狙う。

「うわわっ！？」
「ブチ抜けぇッ！アイゼン！！」

『Ｋｏｍｅｔｆｌｉｅｇｅｎ！』

スバルが避けきれないと思ったとき、ショックカノンに大きな鉄球が直撃し、砲身を破壊した。

「ヴィータ副隊長！」

「ボサッとしてんじゃねぇ！次来るぞ！」

ヴィータの指差した方を見ると、アルドワーズ中佐の駆るアームドライガーが、スバルの乗っかっているＫＦＤに砲門を向けていた。

「ナカジマ二士、退いてくれ！」

「は、はい！」

スバルは急いでＫＦＤの背から降りる。

「全砲、目標へ向け一斉射撃！ファイア！」

中佐がトリガーを引くと、二門のビームキャノンや１６連装ミサイルポッドが一斉に火を噴き、ＫＦＤの巨大な体を爆音を伴って飲み込んだ。

「目標、一機撃墜！」

「続いてサンダース機、フライハイト機、キッド機、グレック機が出撃、交戦開始（エンゲージ）！」

格納庫からレイのライガーゼロ、タクマの量産型シールドライガー、バンのブレードライガー、それにもう一機、微妙に水色がかった装甲を持つライガーゼロが現れる。

『こちらメリッサ・スー。キッド少尉、機体の調子はいかがです？』
「こちらウィナー・キッド少尉。駆動系統及び機体速度、良好。流石はメリッサ・スー主任だな。寧ろ、問題点が見つかんねーよ。」
『ありがとうございます。』

通信でメリッサと話すのはウィナー・キッド少尉。バディターの相棒で、アルドワーズ中佐の部隊に所属しているライガー乗りである。

「じゃ、よろしく頼んますよ、先輩方？」
「あ、ああ…」

軽口を叩くウィナーに少々戸惑うバン。

「お喋りはその辺にしとけ。行くぞ！」
「応！」「了解ッス！」「やってやる…！」

レイのゼロの先頭に、バンのブレード、ウィナーのゼロ、タクマのライガーが二機のＫＦＤに向かって猛進する。

「ウィナー、お前は俺と来い！バンはタクマを頼むぜ！」
「了解！」

レイの後ろにウィナーが、バンの後ろにタクマが移動し、二手に分かれて対処に当たる。

「しっかり付いて来いよ、ウィナー！」
「合点承知ッス！吼えろ、ライガァァアッ！」
「お、おいタクマ！前に出過ぎだ！」
「俺がアイツを片付ければ…ケイ姐さんも！」

ウィナーはレイと並んで走るが、タクマはバンよりも少し前に出る。バンが止めようとするが、タクマは聞く耳を持たない。

「後方支援、始めェ！」
「了解！ロングレンジバスターキャノン、発射！」

猛進するレイ達を支援すべく、アーバインのジ・オーガが砲撃を始め、それに続いてカノントータスやガンスナイパーが援護射撃に移る。

「ストームレイダー、モードスナイプに移行！」
『ＯＫ．Ｇｕｎｓｎｉｐｅｒ，ｓｎｉｐｅ　ｆｏｒｍ．』

ガンスナイパーに乗るヴァイスは相棒であるストームレイダーに呼び掛け、ガンスナイパーを狙撃形態にさせるように言う。
機体の向きを真逆にし、座席が後退しながらリクライニングする。そのまま反転して狙撃手の取るような前傾姿勢になった。
ヴァイスは目の前に現れた狙撃銃の銃身にカード形態のストームレイダーを差し込み、グリップを握る。
照準用モニターには一キロ弱程の距離にいるＫＦＤが映り、レティクルは頭部装甲の上部にある、Ｅシールドジェネレーターを捉え

ている。

『Ｔａｒｇｅｔ　ｌｏｃｋ　ｏｎ』

「食らいやがれ！」

ヴァイスが引き金を引くと、ガンスナイパーの尾の先端から特別製の徹甲弾が放たれ、ＫＦＤの頭部を狙う。

だがＫＦＤは弾丸を察知したらしく、シールドを展開して防ぐ。弾丸は弾き飛ばされずにシールドにめり込んでいる。

それを見たヴァイスは二発、三発と続けて撃ち込む。それらは一発目と寸分違わず、同じ地点に着弾した。

するとどうだ、二発目と三発目がシールドの強度を奪い、シールドを貫通してジェネレーターを直撃したのだ。

ジェネレーターは破損し、シールドも消滅した。

「サンキュー、ヴァイス！」

「うひょーっ、なんつー腕ッスか！」

レイは感謝し、ウィナーは精密な狙撃に度肝を抜かれる。

両者のゼロはＫＦＤに向けて走り、同時に跳躍した。

「ダブルストライクゥ…」

「レーザークロォォオ！」

さらに必殺のストライクレーザークローを同時に使用、背部装甲と反り返った尾を紙のように切り裂いて爆発を引き起こした。

「よし、一丁上がり！」

（流石はグレック大尉…でも、俺だって！）

タクマはレイの戦いを見て、呟いた。

目の前にはほぼ無傷のＫＦＤ。タクマはそれに向かって、自らのシールドライガーを走らせる。

それに対して、ＫＦＤは機体後部の鋏に追加装備されたレーザーライフルで応戦する。

タクマはシールドを展開し、レーザーの嵐を防ぎながらなおも猛進する。

「うぅっ…！こ、この程度ッ！」

シールドを展開していてもその衝撃はコックピット内のタクマに伝わり、それをタクマは歯を食いしばって耐える。

「タクマ！無茶すんな！」

「大丈夫です、この程度でシールドは破れません！」

またしても聞く耳を持たないタクマ。そのままＫＦＤに飛びかかり、右の鋏に牙を立てる。

「このまま、引きちぎってやる！」

シールドライガーの顎に力が込められ、鋏周りの装甲を貫く。

「旧型が…図に乗るなァァア！」

だがＫＦＤのパイロットも黙っているだけではない。もう片方の鋏を振り上げ、タクマのライガーに叩きつける。

「うあぁぁあっ！？」

シールドライガーは噛みついていた部位に折れた牙を残し、周囲の木々をへし折りながら吹き飛ばされた。

「フン、調子に乗ってるからだ、旧型が！」

ＫＦＤは尾の先端の荷電粒子砲のチャージを開始し、砲門を起き上がりかけのタクマのライガーに向ける。

（ま、マズい、避けきれな…）

「うぉぉぉおーっ！！」

タクマが絶望しかけた時、バンのブレードライガーがＫＦＤに突撃し、反り返った尾を切り落とす。荷電粒子砲は蓄積されていたエネルギーを制御しきれなくなり、爆発する。

「フ、フライハイト中尉…」

「無事か、タクマ！だから用心しろって言っただろ！」

「す、すいません…」

バンの叱責を受け、うなだれるタクマ。

「クソが…よそ見なんてしてんじゃねえ！」
「！？」

バンに尾を切り落とされたＫＦＤが、ライガーの牙が刺さったままの鋏でブレードライガーの後脚を掴んだ。

「しまっ…」
「おらぁッ！」

ブレードライガーはそのまま投げ飛ばされた。

「うわぁぁあっ！？」
「フライハイト中尉！」

機体が二度、三度とバウンドし、コックピットのバンに衝撃が伝わる。

「くっそ…油断しちまった…」
「へっ、これで終わらせてやるよ！」

レーザーライフルの銃口がバンのブレードライガーを捉え、轟音と共に光線を幾度も放つ。

「ぐぁぁぁあっ！」
「クソッ！止めろォ！」

タクマも機体を起こしながら背部の二連装２０ｍｍビーム砲でＫＦＤを攻撃するが、機体が安定しない為に照準が安定せず、レーザーライフルに命中せずに重装甲に阻まれる。
そうこうしているうちにバンのブレードライガーの鬣（たてがみ）はボロボロ

に砕かれ、脚のフレームやレーザーブレードも大きなダメージを受けている。
遂にはコックピットを守るキャノピーにもヒビが入り、いよいよもってバンの命すら危険な状況に陥りつつあった。

「こんな…所で、負けるわけには…いかねぇ…！」
「さァて、逝っちまいな！」

亀裂の入ったキャノピーに狙いを定め、レーザーライフルが放たれようとしていた。

第四十七話　若獅子の焦り（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

レイ

「じゃあ言わせてくれ！ゾイド復活させてください、タカラ〇ミーさん！」

お前には言ってませんがね。

第四十八話　負けられない戦い（前書き）

なんだか長くなりましたが、ようやく書けました。

第四十八話　負けられない戦い

「…ドクター、本当にこれで良かったんでしょうか？」

ＫＦＤを載せてきた輸送艦レヴィアタン級の一室で、トーレが椅子に座るスカリエッティに訊く。

「どうしたんだい、藪から棒に？」

「プロイツェン大佐とターレス少尉の事です。…あの二人はたまに見かけましたが、お互いに愛し合っていました…。なのに…」

「それを引き裂くような真似をするのか…と、言いたいのかい？」

トーレは黙って頷いた。それを見たスカリエッティは椅子から立ち上がり、紅茶の入っているポットを手に取る。

「仕方が無いさ、戦争という物には犠牲が付き物だからね…。それに、これは我々の計画の下準備でもあるんだよ…」

紅茶をティーカップに注ぎながら、淡々とした口調でスカリエッティは言うのだった。

ニクシー基地軍港。そこにはかなりの早さで、量産型シールドライガーやコマンドウルフを薙ぎ払っていくＫＦＤが居た。

「こちらＫＦＤ壱号機、シールドライガー及びコマンドウルフの一個小隊を撃破！続けて基地内部へ進軍します！」

『指令室、了解。吉報を待つ。』

そう、アンナ・ターレス少尉の駆るＫＦＤ壱号機だ。アンナは自らが蹴散らした機体の残骸を押しのけ、更に二機のＫＦＤを引き連れて基地内部へと侵攻しようとする。

『第八混成小隊、壊滅！敵機が基地内部へ向かっています！至急援護を！』

「こちらクレイジー０２。俺が向かう、俺の代わりに誰か寄越してくれ。」

『指令室了解。ライトニング０１、お願い頂けますか？』

「こちらライトニング０１、了解しました。直ぐに向かいます。」

そう言うとフェイトは高速移動魔法『ソニックムーブ』ですぐさまウィナーのもとに到着した。

「ありがてえ！ウィナーを頼むぜ、フェイト！」

「はい！レイさんも気を付けて！」

軽く会話を済ませ、レイはＫＦＤ三機の迎撃に向かった。

「こっから先には、通さへんでぇ！」

アンナ達の前にはやてとシグナム、エリオが立ち塞がる。その背後には、戦闘空母に改修されたウルトラザウルスが格納された二番ドックがある。

（…ここを突破される訳には、いかんのや！）

これを墜とされれば、暗黒大陸上陸作戦は暗礁に乗り上げてしまう。そうすればこの戦争の早期集結は勿論、スカリエッティ一味の逮捕も叶わない。

「はやて部隊長！助太刀に来たぜ！」

レイがはやてと合流し、防衛に加わる。

「おおきに、レイさん！」

「真ん中の奴は俺が対処する、シグナムと部隊長は残りを頼むぜ！」

「了解！」「了解や！」

「アーバインにヴァイス、援護よろしく！おらぁぁあ！」

『ガォォォオン！！』

レイはゼロと共に雄叫びを上げ、三機編成の真ん中一一アンナのＫＦＤを狙って突進する。

シグナムとエリオも交戦し、三機編成を崩すようにそれぞれ立ち回る。

（このライガーゼロ…もしかして、ヴォルフの話してた…）

アンナはレイのゼロに向けて通信を試みる。

「そこのライガーゼロのパイロット、レイ・グレックね！？」

「…？ああ、その通りだ。アンタは？」

突然名指しされ、一瞬戸惑うレイ。

「私はアンナ・ターレス少尉。ヴォルフ・プロイツェンから話は聞いているわ。」

「ヴォルフ・プロイツェン…ああ、アイツか。」

レイはゼロを奪取した時、ティラノ型ゾイドに乗っていたヴォルフを思い出した。

「で、アンタはそいつの恋人かなんかか？」

「まあ、そんな所ね。」

「へぇ…あんなイケメンの彼女となると、さぞかし可愛いんだろうな。顔が見たいところだぜ。」

「なっ…！？」

レイが冗談混じりに言うと、アンナはコックピットで顔を赤くする。どうやら、相手を動揺させるには充分だったようだ。

「ふ、ふざけないで！そんな口を叩いていられるのも、今のうちよ！」

「ヘッ、そうかい…じゃあそろそろ、おっ始めようや！」

アンナはＫＦＤの鋏を振り上げ、レイはゼロの雄叫びで互いに威嚇し合い、戦いを始める。
最初に動いたのはアンナだ。ＫＦＤの巨大な鋏を覆う装甲に収納された実体剣を展開し、それを用いてゼロの脚を斬りつける。

「うおっと！」

レイはゼロをバックステップさせて難なくかわし、胸部の二連装ショックカノンを放つ。
だがアンナはシールドを展開、反撃が装甲に届く事は無かった。

「チッ、流石は新型…一筋縄じゃあ、いかねえな。」

レイは軽く舌打ちし、ＫＦＤの堅牢さを思い知る。さっきはウィナーとの連携で倒せたが、１対１（タイマン）だとそう簡単にはいかないようだ。

（…このＫＦＤ、やっぱりおかしい…）

状況はアンナがやや有利だが、そのアンナは機体に違和感を感じていた。事前に伝えられたカタログスペックより、動きが鈍重なのだ。
動きだけではない。内蔵型及びオプション武装の威力も、情報よりもやや弱いのである。

（調整不足？…いいえ、準備は万全だった筈。だったら何故…？）
「どうした！？動きが鈍いぜ！？」

アンナがモニターに映るカメラからの映像を見ると、レイのゼロが飛びかかって来るのが見えた。

「ッ！」

アンナはシールドの展開が間に合わないと判断し、ＫＦＤの巨大な鋏を盾にする。

「ストライク・レーザークロォオ！」

ゼロのストライクレーザークローは鋏を覆う装甲を切り裂き、内部の装甲が露出する。

ゼロはそのまま斬り抜けようとするが、突如として動きが止まった。

「！？何だ！？」

レイが機体状況をチェックすると、ＫＦＤ後部の遊泳脚に取り付けられた鋏に、ゼロの後脚を捕らえられてしまっていた。

「悪いけど、タダじゃあやられてあげないわよ！」

「うおおッ！？」

鋏の大きさは鋏脚に劣るものの、それでも力はある。アンナは機体ごと回転させ、掴んだゼロを海岸側に投げ飛ばした。

ゼロは中身の特に無い倉庫に激突し、建物はその巨体が衝突した衝撃で崩れ落ちた。

「ぐあッ！…やりやがったな、こんチクショウ！」

レイはゼロの体を起こして反撃しようとするが、ＫＦＤはゼロに背を向けて一直線に基地を目指して走っている。

「あっ…！てめぇ逃げる気かよ！？」
「冗談！私の任務はニクシー基地の攻略、アンタを倒すことじゃないのよ！」

アンナの言い分は尤もだ。軍人として、強敵との戦いに夢中になって本来の任務を疎かにする訳にはいかない。

「レイさん、私らに任してや！」

アンナの前にはやてが立ちはだかる。術式は構築済み、魔力のチャージも数秒で終わる所だ。
その後方からアーバイン達が援護射撃を行い、はやてを支援する。

「こんなもので、私は止まらない！」

アンナは砲撃を回避しつつ前進、避けきれずに数発は被弾したが、分厚い装甲の表面が多少剥がれたくらいで問題無く前進を続ける。

「チッ、なんて硬さだよ！ヴァイス、俺も前線に出る、支援を…」
「アーバインさん、ちょいまち！先に一発ぶちかまさせてや！」

アーバイン達の砲撃が足止めにはなったのだろう。はやては砲撃準備を完了させ、発射体制に移る。

「来よ、白銀の風、天よりそそぐ矢羽となれ！」

はやての正面には大きな魔法陣があり、その周りに小さな魔法陣が四つ浮かんでいる。

「フレース…ヴェルグ！」

先に小さな魔法陣から順番に白い砲撃が放たれ、最後に中心の魔法陣から強力な一撃が放たれた。

「くっ、シールド展開！」

アンナはとっさにＥシールドを最大出力で展開して凌ごうとするが、フレースヴェルグがシールドに着弾した瞬間、魔力が広範囲に広がってアンナのＫＦＤを包み込もうとする。

「きゃぁぁあっ！？」

アンナは突然の出来事に面食らい、声を上げる。

フレースヴェルグの爆発によって巻き上げられた土煙が晴れると、機体前面の装甲を中心に中破したＫＦＤが姿を現す。シールドを最大出力で前面に展開していた事で、機体後部へのダメージは最小限に抑えられたのだ。

「はぁ～っ、何ちゅう防御力や…」

『いくらシールドを張ってたとはいえ、フレースヴェルグをここまで防ぐなんて…硬すぎです！』

はやてとリィンはＫＦＤの重装甲に改めて驚嘆する。

「くっ…機体各部の損傷チェック開始…」

アンナはコンソールを素早く打ち、機体のダメージを確認する。

「収納式ブレード及びリニアキャノンが破損、Ｅシールドジェネレーター出力６０％まで低下、脚部の一部破損によって機動力低下…

この程度なら、まだ行ける！」

損傷は微々たる物ではないが、任務遂行にはギリギリ問題ないとアンナは判断し、はやてに向けて尾部のパルスレーザーガンを牽制程度に撃ちつつ前進する。

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

「うぁあっ！？」

はやてはプロテクションを張って防ぐが、衝撃が伝わり声を上げる。

「クソッ、行かせるかよ！」

レイはゼロのブースターを展開して急加速、ＫＦＤに接近する。

「ストライクレーザ…」

「甘いわよッ！」

ゼロがＫＦＤに飛びかかり、ストライクレーザークローで切り裂こうとするが、ＫＦＤは遊泳脚のブースターを利用して急速旋回し、長い尾をゼロの頭部に叩き付けた。

「うぉおッ！？」

ゼロは体勢を崩すが、倒れずに踏みとどまった。

「アンタに構ってる暇は無いって、言ってるでしょ！」

「へッ、目の前の敵も倒さねぇで、何が任務遂行だ！とんだ腰抜けじゃねぇかよ！」

「…！！」

「彼女のテメェがそんななら、ヴォルフとか言う奴も大した事はねぇんだろうよ！？」
「……！！」」

アンナはレイの言葉に密かに反応した。
レイは再びＫＦＤに向けて走り、飛びかかる。
するとＫＦＤは飛びかかって来るゼロの前脚を鋏脚で掴み、機体を何回も旋回させてジャイアントスイングの要領で放り投げた。

「またかよ、こんちくしょう！」

悪態付くレイだが、ゼロが投げ飛ばされたのは海側ではなく基地の本舎側だったのだ。これにはレイも驚く。

「…何のつもりだよ、俺の相手をしてる暇なんて、無いんじゃなかったのか？」
「ええ、その通りよ。でもね…何度もあんな風に来られたら、面倒くさくてしょうがないのよ。だから、アンタを片付けてから基地を陥落（おと）す事にしたわ！」

ズバリと吐き捨てるアンナ。先程の台詞が余程トサカに来たのだろう、その声は怒りに満ちている。
ＫＦＤの装甲に覆われた四つの眼が妖しく光り、ゼロに向かって突進を始めた。

ゼロとＫＦＤが戦っている時より少し前。シールドジェネレーターも大破し、身動きを取り辛くなっているバンのブレードライガーに、アンナとの物とは別のＫＦＤがトドメを刺すべくレーザーライフルの銃口を向けていた。

「この一撃で…」

終わりにしてやる、とＫＦＤのパイロットが言い切る前に、ブレードライガーを狙っていたレーザーライフルが突然爆発した。

「!?な、なん…」

「遅い。」

ＫＦＤのパイロットが何者かの接近に気付くより先に、機体はブレードによって両断されていた。

「ば…馬鹿な…レーダーには、増援なんか映ってな…」

「…戦場において、常に不測の事態に備えるのは基本…それを怠った貴様の負けだ。」

その言葉を言い切るのとほぼ同時にＫＦＤは爆散し、何者かが突如として姿を現した。

「イ、イスルギ少佐!?」

何者かの正体は、イスルギ少佐の乗ったブレードライガーＫＳだった。

ブレードライガーＫＳには共和国が開発した最新鋭のステルス装

甲が試験的に搭載されており、それによってレーダーは勿論、人間の眼すらも欺ける程の擬態が可能である。だがエネルギーの消費が激しいため、一分が限度だ。それでもレーダーの電波を吸収する特殊塗料のお陰で、通常のステルス機能も持ってはいるが。

「……フライハイト中尉、残りを片付けに行くぞ。」

「りょ、了解！」

イスルギ少佐はタクマを一瞥し、バンを連れて他のＫＦＤの撃破に向かっていった。

（…ケイ姐さん…）

タクマはコックピットの中で、ただただ歯を食いしばって悔しがる事しか出来なかった。

話は元の時間に戻り、レイのゼロとアンナのＫＦＤが一進一退の攻防を繰り広げていた。

「レイさん！私も援護を…」

「いや、はやて部隊長はエリオやシグナムの援護をお願いしたい！あっちも厳しそうだ！」

はやてがエリオやシグナムが戦っている方を見ると、お互いに合流して背中を合わせてそれぞれＫＦＤと睨み合っている。
エリオはかつてない程の強敵と一人で戦っていた所為か、息が上がっている。
援護をしていたキャロの魔力も切れかかっているのか、フリードに乗って安全域まで下がっている。

「そうみたいやな…ほなら任したで、レイさん！」

そう言うとはやてはエリオとシグナムの近くまで飛んでいった。

「これであなた以外、基地の入り口を守るのは居なくなった…一体、何を考えてるの？これであなたが負ければ、基地が陥落するのよ？」
「だからこそ、俺は負けられなくなった…。『背水の陣』って奴だ。」

レイはそう言うと息を吸い込んでゆっくりと吐き出し、気持ちを整える。

「征くぜ、ライガァァァア！！」
『ゴォォォォン！！』

ゼロは力強く地面を蹴り、アンナのＫＦＤに接近する。

「来たわね、また放り投げてあげるわ！」

ＫＦＤは身構え、ゼロの脚を掴もうと画策する。
そして二機の距離がほぼ零まで縮まったとき、ＫＦＤの鋏がゼロを捕らえるべく動いた。

「そこっ！」
「今だッ！跳べ、ゼロ！」
アンナがゼロの脚を捕らえたと確信した瞬間、巨大な鋏が空を切った。
「なっ…！？」
アンナは予想外の出来事に驚き、ゼロの姿を探す。
ゼロの体は宙を舞っていた。ＫＦＤの目の前で大地を蹴って跳躍したゼロは、バック転の様に宙返りをしていたのだ。
更にゼロは宙返りの体勢から、尾の先端に装備された１０８ｍｍハイデンシティビームガンをＫＦＤに連射――いや、まともに照準すら合わせていない為、乱射と言った方が良いのかもしれないが、撃ちまくった。
「あああっ！？」
シールドを張るのが間に合わず、数発はまともに食らってしまった。それでもゼロが撃った半数は、明後日の方角へ飛んでいったりして当たらなかったが。
「このぉ、やったわね！」
アンナも負けじと尾部のレーザーガンとビームガンを連射し、着地しようとするゼロを攻撃する。
「うぉおっ！？」

レイはゼロの頭を下げてコックピットへの直撃を避けようとするが、足元でレーザーガンによる爆発が起こり、体勢を崩された。
それを好機と見たアンナは全速力でゼロに突進し、自らの機体と基地の防壁で挟み込むように叩きつけて押さえ込んだ。

「が…はっ…！」

レイの体にとんでもない程の衝撃と激痛が走り、逆流した胃液が吐き出される。

「まだまだ！続けていくわよ！」

アンナはゼロを押さえ込んだまま背部のショックカノンを連射し、レイとゼロを追い詰める。

「このままトドメを…」
「ＩＳ発動、ランブルデトネイター！」

アンナがトドメを刺そうとしたとき、上空から数本のナイフがＫＦＤの装甲に突き刺さり、一斉に爆発した。

「大丈夫か、大尉。」

長い銀髪に眼帯を着けた小柄な少女が、レイに訊ねる。

「お、おう。お前は確か…」
「チンクだ。宜しくな、大尉。」
「そうそう、助かったぜ、チンク。」
「礼には及ばない。それより、やるなら今だ。」

チンクが指差した先には、ランブルデトネイターで背中周りの装甲がやや砕けたＫＦＤが居た。

「…負けられない、ヴォルフの為にも…ここで負ける訳には、いかない！」

そう叫ぶと、アンナはＫＦＤを荷電粒子砲発射モードへと移行し、チャージを開始した。

「くそッ、ここで切り札かよ！」

「大尉、援護する！」

レイは荷電粒子砲の発射を止めるために走り出した。

第四十八話　負けられない戦い（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第四十九話　愛する人の為に（前書き）

テスト終わった～！理系の自分ですが、それ系の教科はまるで点が取れてません…ｏｒｚ
それなのに世界史は９０点台…俺は一体、何系なんだ…

第四十九話　愛する人の為に

帝都ヴァルハラ、帝都防衛部隊基地の格納庫では、シュバルツ中佐の部隊が大陸南部に位置する基地への移動準備を行っていた。

「シュバルツ中佐、クーリム・リン少佐をお連れしました。」

機体や物資を積み込んでいるグスタフを眺めていたシュバルツ中佐に、キルシェが呼び掛けた。

キルシェの隣には、シュバルツ中佐が呼び出したクーリム・リン少佐が立っている。

リン少佐は半年前までシュバルツ中佐の部下だった人物であり、中佐の事をとても信頼してもいる。

「リン少佐。わざわざ呼び出したりして、すまないな。」

「いえ、お気になさらず。それで、ご用件は…？」

中佐は軽く咳払いし、キルシェとリン少佐にしか聞こえないように小声で話す。

「私がヴァルハラを離れている間、プロイツェン閣下やＤｒ．スカリエッティの事を調べていて欲しい。勿論、極秘にだ。」

それを聞いたリン少佐はやや驚きながらも、シュバルツ中佐の考えを察した。

「Ｄｒ．スカリエッティはともかく、プロイツェン閣下もですか…？」

「ああ。これは私の憶測にしか過ぎないが…プロイツェン閣下は何

かを企てている、そう思えてならないのだ。」
「…確かに、ＫＦＤの件もありますし…妙な噂も絶えませんしね…」
リン少佐はううん、と小さく唸り声を上げる。
「…分かりました。どこまで調べましょうか？」
「スカリエッティとプロイツェンの経歴、それとＫＦＤの開発記録を中心に頼む。」
「了解です。」
リン少佐はシュバルツ中佐に向けて敬礼し、中佐もまた敬礼した。
「ＫＦＤ伍号から九号機、沈黙！」
「同じく拾弐号、拾参号、拾四号機、戦闘不可！」
レヴィアタン級に次々と伝えられる、圧倒的劣勢の報告。
それを聞いているヴォルフの両手には、悔しさのあまり爪が手のひらに食い込むほどの力が入っていた。
「参号機、大破！」
「くっ…、残存戦力に伝えろ！全機撤退…」
「それは許可できんな。」

ヴォルフが声に反応して後ろを見ると、父親にして帝国摂政のギュンター・プロイツェンが立っていた。

「何故です父上！状況はどう見ても劣勢です！ならば、これ以上の犠牲は…！」

「ここで退けば、先に散っていったＫＦＤのパイロットは無駄死にに等しい。今は少しでも、ニクシー基地に打撃を与える事の方が優先事項だ。」

ヴォルフの目を見て威圧的な声で言い放つプロイツェン。

いくらヴォルフと言えども、父親であり摂政のプロイツェンに逆らえる訳もなく、歯を食いしばって堪える事しか出来ない。

（アンナ…頼む、生きて帰って来てくれ…！）

この状況でヴォルフに出来ることといえば、アンナの無事を祈ることぐらいであった。

ニクシー基地本舎前では、アンナのＫＦＤが荷電粒子砲の発射準備を完了させようとしていた。

それを阻止すべく、レイはチンクの援護を受けながらＫＦＤに突

進する。

「ランブルデトネイター！」

チンクが投擲したナイフがＫＦＤの装甲に触れ、順次爆発する。だがダメージが蓄積されているにもかかわらず、なかなか装甲を破ることが出来ない。それでも、多少のダメージは与えられてはいるのだが。

「発射準備完了…！」

「クソッ、させるかよ！」

ゼロのブースターの出力を最大まで引き上げ、ＫＦＤに肉迫して飛びかかる。

「ストライク・レーザークロォォオ！」「荷電粒子砲、発射！」

レイとアンナがそう叫んだのは、ほぼ同時だった。ゼロのストライクレーザークローと荷電粒子砲の光が交錯し、互いに押し切られまいとする。

ゼロのコックピットに、ストライクレーザークローの耐えきれる限界が近いことを報せる警報が鳴り響くが、そんなものに構っている暇はない。

更に、異変はＫＦＤにも起こっていた。

「！？…荷電粒子砲の出力が下がってる！？」

ＫＦＤのモニターを見たアンナが呟いた。画面には荷電粒子砲の出力を示すメーターが表示され、その数値が低下し始めているのだ。

「駆動炉にダメージは…装甲が破られてないから、有り得ない。じゃあ何故…！？」

原因が解らず、困惑するアンナ。ともかく、このまま出力が低下すれば、ゼロのストライクレーザークローに押し切られる事は間違い無い。それは何としても避けたいアンナだが、無情にも出力の低下が止まる気配は無い。

「お願い…！もう少しだけ持ちこたえて…！！」

「何だ？出力が下がってんのか？何にしても、チャンスだ！押し切れェェエ！！」

アンナは必死に出力を上げようと、コンソールを操作したり祈ったりするが、上手く行かない。更にレイが異変を何となく感じ取り、ゼロに気合いを込めてストライクレーザークローの出力を上昇させる。

「ウォォォオッ！！」「きゃぁぁぁあッ！？」

遂にゼロの爪が荷電粒子砲の光を切り裂き、砲身を周辺の武装ごと破壊した。

切り裂いた光が基地本舎に命中したが、大した被害でもないので問題無い。

「くっ！まだよ、まだ負けた訳じゃ…！」

「…アンタのヴォルフに対する想いは認めるさ。でもな…俺だって、負ける訳にはいかねぇんだ！」

レイは機体を反転させ、再びＫＦＤに向けて走り出す。決着を着ける為に。

「悪いけど、これで終わらせる！」

ゼロの爪にエネルギーが限界まで集中する。
ゼロはエネルギーの溜まった爪を振り上げてＫＦＤに飛びかかり、砲撃やランブルデトネイターによってダメージの蓄積された背の装甲を狙う。その装甲の下には、ゾイドコアが納められているためだ。

「ストライクゥ…レーザークロォォォオ！！」

ゼロはＫＦＤの背部装甲に真上からストライクレーザークローを突き立て、中枢を貫こうと力を込める。

「ブチ抜けェェェエ！！」
『グォォォォア！！』

レイとゼロの雄叫びに呼応するように、ストライクレーザークローの出力が限界を更に超え、堅牢な装甲どころか腹部装甲まで貫いた。

「あぁぁぁあっ！？」

コックピット内部でも小さな爆発が起こり、アンナはとっさに腕で顔を守る。
レイはゼロをＫＦＤから離し、念のために様子を伺う。
ゾイドコアとジェネレーターが大破した事で、機体のあちこちから爆発が起こる。

「…ヴォルフ、ごめんね……約束、守れなくて…」

俯きながらそうアンナが呟くと、瞳から涙が流れ、その直後に機体が爆発を起こして散っていった。

その報せは、勿論ヴォルフの乗るレヴィアタン級にも伝えられた。

『ＫＦＤ壱号機…信号消滅（シグナルロスト）…』

「な…なん…だと…！？」

ヴォルフは両目を見開いて口を少し開け、信じられないというような表情をする。

「嘘だろ…？あいつが、アンナが…墜とされただと…！？誰か、嘘だって…言ってくれ！」

ヴォルフはかすれた様な声で艦のクルーに問いかけるが、彼らは目を瞑るか顔を逸らすかして、明確に言葉は発しない。

「有り得ない…アンナが、アンナが！」

「ヴォルフ！」

両手で頭を押さえ、錯乱しだすヴォルフをプロイツェンが一喝する。

「…父上…」
「これは現実だ。ターレス少尉は戦死したのだ。」

プロイツェンは冷静な口調でヴォルフを諭す。
だがヴォルフは納得しない。自身の恋人が戦死したなどと、普通はその事実を受け入れられないだろう。ヴォルフもその例に洩れることはなかった。

「父上、レドラーで出ます…出撃許可を…！」
「駄目だ。今お前が行った所で、ターレス少尉を生きたままで回収はできん。それとも、お前も彼女の後を追うつもりか？」
「それでも構わない！俺はアンナを助けに…！」

―バシッ！

ヴォルフが言い切る前に、プロイツェンの拳がヴォルフの頬に直撃し、ヴォルフは膝を付く。その光景にクルーは驚き、注目する。

「な…！？」
「…自惚れるな！お前はたった一人の為に、命を捨てて良い人間ではない！現実を見ろ！」

珍しく怒号を上げるプロイツェンに息子のヴォルフだけでなく、クルー達も驚いていた。彼らには、常に冷静なプロイツェンの印象しか無かったからだ。

「！閣下、ＫＦＤ弐号機が沈黙！これにより、ＫＦＤ部隊が全滅しました！」
「…作戦は失敗、直ちにこの海域を離脱する。」

「りょ、了解。面舵いっぱい！」

二隻のレヴィアタン級は艦首を回頭させ、暗黒大陸へ進路を取って最大戦速で進んでいった。

「…嘘だ…」

…嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ…
アンナが死んだ…！？そんな事、信じられねぇ！約束したじゃねぇか！絶対、生きて帰ってくるって…！なのに……！！

「…うわぁぁぁぁぁぁぁあ！！」

レヴィアタン級ブリッジに、ヴォルフの悲痛な慟哭がこだました。

「…え！？次回の任務から外す！？」

タクマは作戦終了後、大佐から告げられた言葉に驚いていた。

「そうだ。次の任務は艦隊戦になる。タクマ、お前にも援護射撃をしてもらおうと思ったが、あんな無茶をしたお前を出す訳にはいかないと判断した。」

大佐は淡々とタクマに告げる。

「それと、これはイスルギ少佐からの伝言だが…」

大佐は一度言葉を切り、咳払いをしてから言う。

「タクマ・Ｉ・サンダース軍曹、貴官に二週間の営倉入りを命ずる、との事だ。」

「ー！？」

タクマは俯き気味だった顔を跳ね上げ、信じられないと言わんばかりに大佐の目を見る。

営倉入り。その言葉を聞き慣れないスバルが頭上に疑問符を浮かべる。

（…ねえティア、営倉入りって？）

スバルが念話でティアナに訊く。

（営倉ってのは、軍人が命令違反や上官批判とかをした時に入れさせられる懲罰房…要は反省室ね。そこにしばらく入って、反省しろって事よ。）

ティアナが答え、スバルは納得した。

二人は知らないが、タクマは上官批判も命令違反も両方やってしまった為、理由としては十分と言える。

前者はイスルギ少佐への暴言、後者はバンが止めるのも聞かずにＫＦＤに単独で突撃した事だ。

「期限は明日の午前8時より二週間だ。何か異論があれば聞くが？」
「…いえ、特にはありません。」
「…そうか。では各自、自分の持ち場に戻ってくれ。解散！」

反省会が終了し、それぞれが持ち場に戻る。

「大佐、ちょっと良いですか？」
「ん、どうしたレイ？」

レイが部屋に向かおうとする大佐を呼び止める。

「さっき俺が倒したデススティンガーのパイロット…回収したんですか？」

レイの質問の内容が大佐にとって予想外だった為、一瞬目を開いた。レイがいくらお人好しだと言っても、敵パイロットの心配はそうそうしない。故にどういう事かと思ったのだ。

「一応回収したが…もう息は無くなっていたぞ？」
「…そうスか…」

残念そうに肩を落とすレイ。コックピットがほぼ無傷だった為、もしかしたら生きているかと思ったが、ダメだったようだ。

「まぁ外傷は大した事無かったが…どうかしたのか？」
「…あのパイロット、ヴォルフ・プロイツェンの彼女だったらしいんです。」
「…ギュンター・プロイツェンの息子のか？」

レイの証言に驚く大佐。

「ええ。…彼女、ヴォルフの為に必死だったみたいで…正直、殺したくはありませんでしたね。」
「…珍しく弱気だな。分かってると思うが、戦場では…」
「誰にでも平等に死は訪れる…そんな事くらい、理解はしてますよ。」

レイだって今まで多くの仲間を失ってきた。そして、次は自分がこうなるかもしれない事を理解し、覚悟した上で戦っているのだ。寧ろ、覚悟も無く戦いに赴く者は居ないだろう。

「でも…彼女は、戦うと決めたら一歩も退きませんでした…例え、自分の機体に不備があったとしても、ヴォルフ・プロイツェンの為になるのならと…。」
「全ては愛する人の為に、か…そうそう真似できるもんじゃないな…」

大佐は顎周りの髭をいじりながら、アンナに感心したような口調で言う。

「ですから…彼女に少しでも、敬意を表したいんです。撃墜した本人が言うのもなんですが…」
「そうだな…で、どうする気だ?」
「…彼女の故郷に、出来るだけ綺麗な形で、埋葬してあげたいんです。」

レイの台詞に大佐は反応した。アンナの故郷に埋葬一一それはつまり、暗黒大陸への上陸を果たした上で、帝都ヴァルハラまで到達する事を前提とする提案だった。

「…本気で言ってるんだな？」
「ええ、本気ですよ。」
「それを行う以上、負ける訳にはいかなくなるぞ？」
「ハナッから負ける気なんてありませんよ。必ずヴァルハラまで辿り着いてみせます！」

大佐の問答にレイは一歩も退かず、その瞳には決意の炎が燃え盛っている。

「…敵兵一人の為にそこまでするか…とんだクレイジーだな。」
「大佐には絶対言われたくないですよ、そんな台詞。」
「ハッハッハッ、全くだな！」

大佐は高笑いし、レイに向き直る。

「特に反対する理由は無いな。良いだろう、言ったからにはやり遂げてみせろ！」
「ありがとうございます、大佐！」

レイは感謝の意を込め、大佐に敬礼した。

ニクシー基地の安置室。そこには戦死した兵士や、基地内で病死

もしくは寿命の迎えた人物の亡骸が仕舞われている。
その中央に真新しい黒塗りの棺桶が置かれており、他の棺よりもどことなく風格が感じられる。
棺桶の近くにはレイが佇み、その中身――アンナを見据えている。

「アンナさんよォ…アンタの体、必ずヴァルハラに、旦那の所に届けてやるからな！」

棺桶の小窓から見えるアンナの顔に向けて決意表明し、安置室を後にするレイ。
心なしか、アンナの表情が優しい笑顔になったような気がしたが、背を向けていたレイが気付くことは無かった。

第四十九話　愛する人の為に（後書き）

う～ん、悲しみを表現するのって難しい…
ご意見ご感想等、お待ちしております。

第五十話　アンナ・ターレス（前書き）

先日、家から2、3キロ離れた中古屋で、ゾイドタクティクスを３８０円で購入しました。…なんという安さ爆発さく（ｒｙ

第五十話　アンナ・ターレス

――その少女は、物心ついた頃から傍にいた。笑顔がとても眩しく、眺めているだけで元気を分けて貰えるような、太陽の様な存在だった。

十数年前。俺――ヴォルフ・プロイツェンの周りにはいつも誰かしら人間が居たが、その中に純粋な気持ちで接している奴はほぼ皆無だ。

どいつもこいつも、父上の権力や財産目当ての薄汚い下郎だらけ。それは子供であっても例外はない。学校なんかじゃ両親に『ヴォルフ様とお近づきになって、出来れば親友になりなさい』とか言われてすり寄ってくる、純真無垢なんて言葉を何処か彼方に放り投げて忘れてきた様な下心丸だしの連中ばかりだった。　そんな高貴なんだか薄汚いんだかはっきりしない環境なもんだから、俺の心は子供ながらに荒み、まるで某ＡＴフィールドでも展開したかの様に心を閉ざしていった。

でも、そんな世を儚んで出家しそうな俺にも唯一人だけ、俺の心の防壁を解除する気にさせてくれる娘が居た。

「どーしたの、ヴォルフ？一緒に遊ぼ？」

それが、プロイツェン家に雇われた乳母の子、アンナ・ターレスだった。

俺には母親が居ない。父上の話によると、俺を産んだ直後に病気にかかって亡くなったとのことだ。だから乳母が居るという訳ではなく、元々高貴な家には乳母が居るものだし、うちだって父上が摂政という十分な貴族だ。

…話がちょっと逸れた。まぁとにかく、乳母が公務に忙しい父上に代わって面倒を見てくれた。

その乳母が仕事に来るときに連れてくる娘が、アンナだったという訳だ。

実はその乳母はホマレフ派の人間で、父上が良からぬ動きをしないかどうか監視する任務もあったらしかったのだが、当時の俺は知る由も無かった。

アンナは自分の母親の任務を知ってか知らずか――いや、恐らくは知らなかったのだろう。その言動や行動、笑顔には、プロイツェン家の財産や権力しか考えてない連中から流れ出しているオーラが一切無かったからだ。アンナはいつも俺に近づいて来ては、満面の笑顔でこう言った。

「一緒に遊ぼ♪」

と。その笑顔に俺は何の疑いも持たず、スキッパー（ロードスキッパー。非戦闘用の小型ゾイド。惑星Ｚ・ｉでは、地球における馬や牛のような存在。）乗りに興じたり、近くの川で魚を釣ったりしてクタクタになるまで遊び倒し、楽しく休日を過ごしていた。

そんなアンナの存在を、快く思わない連中も居た。先に述べたが、俺に取り入ろうとおべっかを使っていた連中だ。

母親がホマレフ派な上、いつも俺に拒否される事無く傍にいるアンナが気に入らなかったらしく、上流貴族の子息がアンナに対して嫌がらせを始めたのだ。

主に精神的イジメで、アンナの机に落書きしたり、ロッカーにゴミをしこたま入れたり…上流貴族を名乗る割には、随分とオーソドックスで汚い内容だった。

クラスが違っていた所為もあったとはいえ、俺は不覚にもアンナの苦しみに気付くのが遅れてしまった。

イジメを受けていたにも関わらず、俺の前では常に笑顔だったからだ。その理由が、「ヴォルフに心配かけたくなかった」のだと言う。仮にもまだ十歳にも満たない少女が、好きな男に心配させないように努力していたのだ。その苦しみたる物、想像を絶する物だろう。

「何言ってんだよ！そんなの俺に言ってくれれば、助けてやれたのに！」

「…ごめんね、ヴォル…フ…」

そう言った直後、アンナはその場に崩れ落ちた。

「お、おい！アンナ！？」

俺が慌ててアンナを抱き起こすと、アンナの顔は赤く、呼吸が激しくなっていた。俺は徐に額を触ってみた。

「熱っ！すごい熱だ…！」

アンナは高熱を発していたのだ。

「爺や！すぐに来てくれ！爺やァ！」

俺は力の限り叫び、当時執事をやっていたギャリソンを呼んだ。

プロイツェン邸の医務室。

「ど、どうだ？」

アンナの診察を終えた、プロイツェン家お抱えの医師に俺は訊いた。

「大丈夫、流行病（はやりやまい）じゃありませんですじゃ。恐らく、ストレスと過労によるものでしょうな。」

「よ、良かった…」

医師の診察結果を聞いた俺は、安心してその場に座り込んだ。

「ヴォルフ様の言うとおりにイジメがあったとすれば、悩みをヴォルフ様に打ち明けた事で安心したんでしょうな。その所為で、疲れがどっと出たんでしょう。なぁに、暫くお休みになれば元気になりますわい。」
「そうか…ありがとう、恩に着る。後で父上にボーナスを出して貰うよう、頼んでおくよ。」
「ありがたき幸せ、ですじゃ。」

医師は「薬を調合して来る」と言って、隣の調合室に歩いていった。

「ヴォルフ様、ご迷惑をおかけして、申し訳ございませんでした。」

アンナの母上が俺に頭を下げる。

「気にしないでくれよ…アンナが苦しんでるのを察してやれなかった、俺にも責任はあるんだ。」
「ああ…勿体無きお言葉でございます…」

ヴォルフは寝息を立てて眠っているアンナを一瞥し、医務室を出る。

医務室の扉の近くには、ギャリソンが立っていた。

「…ギャリソン、調べてほしい事があるんだ。頼まれてくれないか？」
「承知いたしました。して、何を調べましょうか？」

その翌日、ギャリソンが情報を持ってきた。
イジメの首謀者の名前はズィグナー・フォイアー。帝国議会のフォイアー議員の息子だ。
フォイアー議員は議会でも高い発言力を持ち、息子のズィグナーも自分のクラスを牛耳る存在だ。

「フォイアー家の長男か…」
「いかが致しましょうか？」
「爺やは手を出さないでくれ。俺が何とかするから…」

次の日の昼休みに、俺はズィグナーのクラスに乗り込んだ。両手には、あまり身に着けないような真っ白な手袋を着けて。

「ズィグナー・フォイアー殿はいらっしゃるか！？」

突然の訪問者に、クラス中の連中が注目した。ギュンター・プロイツェンの息子が乗り込んできた事に驚いたのだろう。

「おやおや、どうしました?ヴォルフ・プロイツェン殿。」
「お前が、ズィグナー・フォイアーだな?」
「いかにも、僕がズィグナーですが…」

そう聞いた瞬間、俺は左手の手袋をひっぺがす様に脱ぎ、ズィグナーの胸目掛けて投げつけた。

「俺はヴォルフ・プロイツェン。ズィグナー・フォイアー…貴様に決闘を申し込む!」

俺の発言で、教室がどよめきに包まれる。

「…何故です?僕は貴方に、無礼を働いたでしょうか?」
「お前はクラスを指揮して、アンナ・ターレスに苦痛を与えていたらしいな…それ即ち、俺への無礼に等しいという事だ!」

ズィグナーに指を突きつけ、高らかに宣言する。周りの生徒達は、ばつが悪そうな表情を浮かべている。

「とんだ言いがかりですね…僕がターレスさんに何をしたと?」
「あくまでも白を切るか…まぁ良い。受けるのか受けないのか、どっちだ。」

ズィグナーは関与を否定するが、俺は納得しない。決闘の申し込みの回答を迫ると、ズィグナーは足下に落ちたままの俺の手袋を拾い上げた。

「これが僕の答えです。」

投げつけられた相手の手袋を拾い上げる。この行為は、決闘を受けるという意思表示を意味している。

「俺が勝ったら、俺の命令をなんだろうと従うこと。無論、拒否権は無ェ。」

「良いでしょう。僕が勝ったら、同じように貴方に命令させて貰います。勿論、拒否権は無しで。」

「決まりだな。開始は放課後だ！首洗って待ってやがれェ！」

そう言った俺は、ズィグナーの教室を後にした。

その日の放課後。俺とズィグナーは決闘用の正装に着替え、右手に訓練用のレイピアを持って学校の中庭に集合していた。この戦いの行く末を見ようと、中庭に入りきらない程のギャラリーが集まっているのには驚いたが。

審判は公平を保つため、訓練校の鬼軍曹にわざわざ来てもらった。この軍曹、賄賂や不正が大嫌いな正直者で、軍部ではかなりの有名人だ。これならどちらかを贔屓する事はまず有り得ないだろうと、ズィグナーも認めてくれた。

「ではルールを説明する！1ラウンド二分、3ラウンド勝負！どちらか一方が降参するか、俺が決着が着いたと判断したら試合終了と

する！顔などの急所は出来る限り狙わないように！何か質問はあるか！？」

「無い！」「ありません。」

互いにルールを確認し、レイピアを構えて所定の位置に移動する。

「それでは、試合開始！」

軍曹の合図と共に試合が開始し、ギャラリーが応援を始める。

俺とズィグナーはすぐには動かず、互いの様子を伺う。先走って不利になるのはゴメンだからだ。

だが、あまりのんびりしてると反則を取られるので、適度に攻撃の意思を見せる。

「…せいッ！」

先に動いたのは俺だった。不覚にも、ズィグナーの冷静さに痺れを切らしたのだ。

ズィグナーは落ち着いて体を右に動かして回避し、カウンターを試みる。

「くっ…！」

右腕を伸ばしたままでズィグナーの剣を防げないと判断した俺は、右に思い切り体を倒して避ける。その所為でバランスを崩してふらついたが、ズィグナーはその隙に乗じて追撃しようとはしなかった。

「…どういうつもりだよ。」

「こんな勝ち方、僕の美学に反しますから。」

ふらついた俺を斬るのは気に入らないと言われ、俺の頭に血が上る。

「…んだと!?後悔させてやる!」

俺の頭には、冷静になるという言葉は無くなっていた。恥ずかしい話だが、当時の俺は頭に血が上りやすい典型的なガキだったのだ。俺が怒りのままに放った剣戟はことごとく捌かれ、俺は焦り、ズィグナーに冷静さが積み重なるだけだった。

「第1ラウンド、それまで!」

軍曹の指示で一旦戦いを止め、互いに休憩用の椅子に腰掛ける。ズィグナーは余裕綽々といった様子だが、俺の額には青筋が浮かび、息も荒くなっていた。

「あの猫かぶりがァ…!」

結局、俺は少しも落ち着く事無く、第2ラウンドが始まった。

「はぁぁぁあッ!」

先程とは打って変わって、怒涛のラッシュを掛けるズィグナー。スタミナを消耗している俺は避けるのもギリギリで、何度もレイピアの先端が体を掠った。

「どうしました?先程の威勢はどこへやら…」

「チッ、まだ第2ラウンドだ!これからが本番だ!」

俺はズィグナーの突きが放たれる瞬間、左右でなく屈んで避ける。

そこからボクシングのアッパーを喰らわせるように、レイピアを胸めがけて突き上げた。

「なっ…！？」

ズィグナーは迫り来る剣の切っ先を、尻餅を着く倒れ方で避けた。勿論ズィグナーは一瞬だけ無防備になった。

その時、誰もが決着が着いたと思った。が、俺はレイピアを倒れたズィグナーに突き付ける事をしなかった。

「…一体、どういう…」

ズィグナーが体を起こしながら俺に訊ねる。

「お前に倣っただけだ。これで、貸し借りはチャラ…という事だ。」

つまりは、先程俺が受けた屈辱のお返しだ。

そして、第2ラウンドも終了した。

椅子に戻った俺とズィグナーは、互いに睨み合う。俺はズィグナーにお返しをした事で、冷静さを取り戻していた。

そしてしばしの休憩の後、最終の第3ラウンドが始まった。

「ヴォルフ君、君の騎士道精神に敬意を評して、本当の事を言いましょう。確かに僕は、ターレスさんを妬んで彼女に嫌がらせをした…」

ズィグナーの突然の告白に、俺は驚いた。

「やっと認める気になったか…そんなら、そろそろ決着（ケリ）を着けようか！」

「これで僕も荷が軽くなりました…ですが、試合には勝たせて貰います！」

互いに剣を構え直し、地面を思い切り蹴り飛ばして突進する。

「はぁぁぁあッ！！」「でりゃぁぁぁあッ！！」

互いの剣が振り下ろされたのは、全くの同時だった。それをかわしたり防いだりするという選択肢は、もはや頭には無い。ただ自らの全力を以て、相手を斬り伏せるのみだ。

そして互いの剣が完全に振り下ろされ、切り抜ける形になる。今度こそ、完全に決着が着いたのだ。

軍曹の目は決着の瞬間を、完璧に捉えていた。その結果を俺とズィグナー、周りに居るギャラリーに伝える。

「それまで！この勝負、勝者…」

ギャラリーは耳を傾け、固唾を飲む。

「ズィグナー・フォイアー！」

ズィグナー側の応援席から歓声が上がる。そしてギャラリー全員が、俺とズィグナーの健闘を称えて拍手が起こった。

だが、ズィグナーはどことなく納得していない様な表情を見せていた。

（…ヴォルフ君が僕に斬りかかるとき、足元が凹んでいた…もし窪みにヴォルフ君が足を捕られてなかったら…！）

負けていたのは自分だった。自分の勝因は、ただほんの少しだけ

運があった事だ。

「チッ…俺の負けだ！さぁ何でも実行してやる、言ってみろよ！」

俺は剣を地面に突き刺し、胡座(あぐら)をかいてぶっきらぼうに言い放つ。自分で言うのもなんだが、戦った相手と握手もしないとは大変ガキである。…まぁガキだったんだけど。

「そうですね…じゃあ、ターレスさんの所へ僕を案内して下さい。」

「了解了解！アンナのとこだろうと何処だろうと……って何だって？」

という訳で、俺はズィグナーの要望通り、アンナが休んでいるプロイツェン邸の医務室に向かってズィグナーと共に廊下を歩いているのだ。

「流石はプロイツェン邸…僕の家とは比べ物になりませんね。」

「そうか？あんまりデカくても、移動がダルいだけだけどな…っと、着いたぜ。」

気づいた頃には、既に医務室の前に立っていた。雑談しながら歩いていたからか、長い廊下を歩くのが大して億劫にならなかったのだ。

俺は扉を二回軽くノックし、中の医師に了承を取って部屋に入った。

「よっ。元気か、アンナ？」

「あ、ヴォルフ…それに、フォイアー君？」

アンナは自分を虐めていたズィグナーがこの場を訪れた事に、少し驚いていた。

「えっと…フォイアー…君？」

「ターレスさん、この度は申し訳ありませんでした。もう二度と、あの様な真似はしないと誓います。」

ズィグナーはアンナに向け、深々と頭を下げて言った。その行動に俺とアンナは驚いた。

「ヴォルフ君との決闘で、僕は目が覚めました。彼のターレスさんを想う気持ち、とても無視できなかった…」

「け、決闘！？ヴォルフ、私が寝てる間に何やってるのよ～！」「いや、その…」

頭を下げて謝罪するズィグナーに俺を叱るアンナ、その剣幕にたじろぐ俺。ついでに医師はコーヒーを飲みながら微笑している。医師にとっては、なんとも滑稽な光景だったのだろう。

そしてアンナもズィグナーを許し、こう言った。

「じゃあ、ズィグナーも私達と友達にならない？」

ズィグナーは驚いた表情を見せる。

「僕と…ですか？あなたの苦しみの原因であった僕と？」
「うん♪だって、キミは反省してるんでしょ？だったら、もうそれで良いじゃない。」

「後はあれこれ言いっこ無しだよ♪」と、微笑みながら付け加える。

それを見た俺とズィグナーの顔が紅潮した。

こうして、俺とアンナ、それにズィグナーの三人は親友となったのだった。他人をロクに信じられなかった俺が、ズィグナーと友になることを良しとしたのも、アンナの存在が大きかった。

その日以来、俺達は三人で居ることが多くなった。学科を修了し、士官学校に入学しても、大抵は三人で行動していた。訓練のときも食事を取るときも、仲良く三人だった。

士官学校も卒業し、正式な軍属になったすぐの頃、ハルトリーゲル曹長（当時）の平均を大きく超えたサイズの胸に見とれていて、アンナを怒らせてひっぱたかれた事もあった。後でアンナが自分の平均以下な胸をかなり気にしていたが…

次第に思春期になると、ズィグナーは俺の近くからちょくちょく離れるようになった。気を遣わせてしまったのだろう。

まぁそんなズィグナーの気遣いもあり、俺とアンナの距離はセイバータイガーのキラーサーベルが届く程に縮まっていた…

「…ん？っといけねぇ、寝ちまってたか…にしても、懐かしい夢だったな…」

ヴォルフはレヴィアタン級の自室の机に突っ伏して眠ってしまっていたようだ。外を見ると、水平線の向こうから朝日が昇り始めていた。体を伸ばし、体内時計を合わせる。

（…あの時、俺が父上を説き伏せて、アンナ達を撤退出来ていたら…）

こんな事にはならなかったかもしれないと、自分の弱さを後悔するヴォルフ。

そんな事を考えていると、部屋の扉が軽く二回叩かれ、ズィグナーがやって来た。今や大尉になり、アンナに次いでヴォルフの片腕になっていた。ヴォルフも決闘が終わるまでは、こんな未来など予想もしていなかっただろう。

「ヴォルフ様、本艦は無事に港に到着致しました。」
「ああ、ありがとう。」

ヴォルフは椅子から立ち上がり、ズィグナーと共に廊下を歩く。

「さっきな…昔の夢を見てたよ。」
「夢…ですか？」
「ああ。俺がアンナに出逢って、お前がいじめっ子だった頃の夢だった。」
「あ、あの頃はスイマセン…」

ズィグナーは申し訳なさそうに頭を掻く。

「気にすんな、もう時効だ。それに、あれがあったからこそ、お前と親友になれたんだからな…」

ヴォルフは微笑しながら、当時を懐かしむように話す。

だが一方でズィグナーは、ヴォルフの心中を察していた。

アンナを失った悲しみと、アンナのＫＦＤを破壊したパイロットへの怒りで、ヴォルフの心はズタズタになっている。いくらヴォルフが戦場では平等に命を落とすという事を理解していても、アンナを殺した者への怒りは変わらない。それを少しでも紛らわす為、昔の話を引っ張り出して談笑しているのだろう。

「…そうだズィグナー。お前、今晩俺と付き合えよ。」

「え!?だ、ダメですよヴォルフ様！いくらアンナがいなくなったからって、そっちの方向に走っては…！」

ズィグナーはあたふたと両手を振って、ヴォルフを誤った道から引きずり戻そうとする。勿論、ズィグナーの考えている事は誤解なのだが。

「…ちげーよ、ＢのＬじゃねぇ。そうじゃなくて、酒に付き合えって意味だよ！」

「ああ、そっちでしたか。いやあお恥ずかしい。」

「ホントだよ全く…」

酒を飲んで、少しでも気分を良くしようって意味で言ったんだ、とヴォルフは呆れ顔で言う。

「冗談ですよ。喜んで、お付き合いさせていただきます。」

ヴォルフとズィグナーは悲しみを抱えつつも、廊下を歩いていっ

た。

第五十話　アンナ・ターレス（後書き）

執事のギャリソン…元ネタ分かる人は多分いる。スパロボＡとかやってれば。
ズィグナーが昔いじめっ子だったって、どうなんだ…？

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第五十一話　決戦への船出（前書き）

二週間近くほったらかして申し訳ありませんでした。
シンガポール…結構楽しめました。食べ物も美味しかったですし。
でも飛行機はかなりドキドキしました。
いい修学旅行だったと思います。

第五十一話　決戦への船出

帝都ヴァルハラより北東、暗黒大陸本土のニクス大陸とテュルク大陸の境界付近に、ガイロス政府さえも認知していない秘密基地があった。

『ウーノ主任、開発ラインの進行状況はどうなっている？』

「マッカーチス及びディマンティスは目標数に到達、アイアンコングにジェノザウラーは目標の６０％が完成…全ライン、支障なく稼働しております。」

『そうか。…なら空いたラインで新たにディロフォースとグレイヴクアマの開発に取り掛かれ。』

「了解致しました。」

通信が切れると、ウーノは手の空いている開発ブロックに連絡を送り、プロイツェンの指示を伝える。

「それにしても…こんな辺境にここまでの施設があるとは、思わなかったわね…」

「ここは政府にも知られていない、プロイツェン様が秘密裏に建設した施設だからね。」

ウーノが後ろを向くと水色ショートカットの髪型で、知らない人が見れば少年にも見える小柄な少女が、ジークと似たような小型の恐竜型ゾイドを連れて立っていた。

「あら、リーゼ。それにスペキュラー。」

「ウーノ、僕とスペキュラーの機体…出来てる？」

「ええ。第８格納庫に置いてあるわ。後でテストするけど、協力し

てくれるかしら？」
「いいよ。先に行ってるね。行こう、スペキュラー。」
リーゼはスペキュラーを連れて、第８格納庫に向かって歩いていった。

ＫＦＤのニクシー基地強襲から十日。基地の施設や戦力もようやく回復し、再び暗黒大陸進出の準備を進めていた。

「やれやれ、二週間近くも遅れるとはな…あのデススティンガーの特攻も、無駄じゃなかったって事か。」
「そうですね…ですが、ホバーカーゴやライガーゼロ用の武装も完成した訳ですし、悪い事ばかりではありませんでしたね。」
「まあな…」

ボーグマン大佐とアルドワーズ中佐が、基地の敷地内に置かれた新型のカタツムリ型輸送艦『ホバーカーゴ』を見て話す。　ホバーカーゴはライガーゼロの運用の為にあると言って良い様な艦で、ＣＡＳの装甲をスムーズに交換できるように設計されている。
つまり、これがあると無いではゼロの性能も大分違ってくるのだ。
さらに名前からも判る通り、ホバークラフトのようなホバリングによる移動方式を用いているため、地形を選ばない。おまけにＥシ

ールドも装備と、なかなか豪華でしかも居住性も高いため、長期遠征にも対応している。

「ゼロ一機につき一隻って…何か贅沢な艦じゃないか？」

「まあその方が、ＣＡＳをスムーズに運用できますからね…」

ニクシー基地に居るゼロは、レイの物とウィナーの物に加えてパイロット未定の一機。更に南のニューヘリックでメリッサが完成させたエース用の特注品が一機。つまり、ホバーカーゴは四隻も配備されているのだ。

「本国も太っ腹なのか…いや、俺達に戦力を押し付けて、とっとと決着を着けさせるつもりなのか…？」

「否定できませんね。ただでさえ、この基地にはエース級パイロットや管理局の魔導士がゴロゴロしてますから…」

「そうだな…だからこそ、俺達が負ける訳にはいかん。頼んだぞ、セレス。」

「ええ。全力を尽くさせて頂きます。」

大佐とアルドワーズ中佐は、改めて堅い握手を交わした。

ニクシー基地の地下営倉で、タクマは寝転がっていた。目には暗

い色の天井が映り、その色はあたかもタクマの心境を表しているかのようにも思える。

（俺は…一体どうすれば…）

タクマは今後の事を考えていた。元々自分は、サンダース家の当主に人柄を気に入られて養子になった。だが今の自分を見たら恐らく、いや、間違い無く失望するだろう。そうなれば自分は勘当されない事も無いだろうし、イスルギ少佐とも関われないかもしれない。

（…別に関係ないか……もう俺は、ケイ姐さんには見放されてんだから…）

そんな事を考えていると、当番のエリオが食事を持ってきた。

「サンダース軍曹、ご飯をお持ちしました。」

「ああ…そこに置いておいてくれ…」

タクマが指定した場所に、エリオは食事の載ったアルミ製のトレーを置く。

エリオがふと床を見ると、量があまり減っていない食事のトレーを見つけた。

「サンダース軍曹、あまり食べてないじゃないですか。」

エリオは心配そうに言う。

「…どうにも食欲が無くってね…」

「ダメですよ！ちゃんと食べないと、倒れちゃいます！」

「そうなんだけどね…」

エリオが必死に説得しようとするが、タクマはうなだれてハッキリしない返答をする。

「エリオ…エリオはどうして、管理局に入ったんだ？」

「え…？」

突然タクマに話を振られ、一瞬困惑するエリオ。

「ウチの軍には、十代の兵士も多いけど…エリオみたいに、十歳で前線（まえ）に出て戦ってる兵士は居ないから…気になってね。」

タクマは機動六課と合流した日から、六課の戦力の殆どが十代半ばから後半で、二十代がヴァイスくらいしか居ない事が気になっていた。

その中でも、エリオとキャロは十歳だ。幾ら人員不足といっても、子供を戦場に出すのはどうかと思った。

何か特別な理由があるのだろうとタクマは考えていた。

エリオは周りに誰も居ないのを確認し、営倉の鉄格子に顔を近づけて話す。

「…実は僕…まともな産まれ方をしてないんです。」

「？どういう事だい？」

「僕は、元々居たエリオ・モンディアルのクローンなんです。」

「クローン…？君が？」

タクマは予想外の告白に驚く。クローンなんて単語、随分前に読んだＳＦ小説で見たきりだ。それが目の前に現実として存在している。聴いただけではなんとも眉唾な話だ。

そう思ったが、タクマは子供の戯言として流さずに耳を傾ける事

にする。

「…僕の元になったエリオ・モンディアルは富豪の息子で、病気で亡くなりました。それを受け入れられなかった両親は、プロジェクトF．A．T．E…既に違法研究とされていたクローン技術によって、息子の代わりを産み出しました。」

「…それが君…俺の目の前に居るエリオ・モンディアル…と？」

エリオは軽く頷いて肯定する。

「でもそれは違法研究…僕はある研究機関によって連れて行かれ、研究対象として監禁にも等しい扱いを受けました。」

「酷い…ご両親は止めるなりしなかったのかい？」

「最初はそうしましたけど……事実を突きつけられた途端、抵抗を諦めましたよ…。」

エリオは少し俯いて答える。

「…ゴ、ゴメン。無神経で…」

タクマは地雷を踏んだと判断し、すぐにエリオに謝る。

「いえ、気にしないで下さい。…続けますね。その施設から僕を連れ出してくれたのが、フェイトさんだったんです。」

「ああ、ハラオウン執務官…ん？」

タクマがある事に気付く。

「エリオ、訊いて良いかな？」

「？何です？」

「『プロジェクトF．A．T．E』って……もしかしてハラオウン執務官も…」
「…ええ。フェイトさんも…というか、プロジェクトF．A．T．E自体が、フェイトさんの元々の存在を産み出すために構築された研究だったんです。」
予想が的中し、タクマは戦慄した。なるほど、フェイトもそれによって産み出されたのならば、エリオに何かしら親近感を持って助けようとするだろう。
「僕は僕を助けてくれたフェイトさんに、恩返しをしたくて…だから僕は戦ってるんです。」
「なるほど…じゃあ、エリオの魔法もハラオウン執務官が？」
「はい。フェイトさんに教わりました。」
「そっか…」
タクマは再び硬いベッドに寝転がり、天井を見ながらエリオとの話を続ける。
「エリオ…君は幸せ者だよ。仲間に恵まれ、優しくて腕の立つ魔法の師匠までいて…しかも君はそれをどんどん吸収して強くなっていく…俺なんかよりもね…」
「そ…そんな事ありませんよ！僕だって、サンダース軍曹に敵わない事も多いです！」
「…例えば…？」
「え、えっと…」
落ち込んでいくタクマに具体例を求められ、考えるエリオ。
「ほ、僕にはゾイドの操縦ができません！」

「…練習すれば大抵の人間は出来るようになるよ。出来ない奴の方が圧倒的に少ないさ。」
「う……」
最初から否定され、エリオは口ごもる。
「じ、じゃあ…」
「…良いんだ、無理に探さなくても…君が俺なんかの相手をしてるよりも、訓練をしている方がよっぽど有意義だよ。」
「そんな事…」
エリオは自分の台詞を言い切らずに止めた。ここでまた何か言っても、タクマが否定して堂々巡りになる可能性が高いからだ。
「…分かりました。僕は訓練に行ってきます。ですが…これだけは聴いて下さい。」
エリオは立ち上がり、タクマに向き直る。
「…悲しい事は、ずっと永遠になんて続きはしません。楽しいことや嬉しいことは、探していけば絶対に見つかる筈なんです！」
エリオは力を込めて言い放った。
それはかつて、エリオがフェイトと初めて出逢った時にフェイトが語った言葉。その言葉はエリオが進むべき道を探すきっかけとなり、今の自分がいる。
その言葉を、エリオはタクマに告げたのだ。
「それに…師匠っていうのは、いつも弟子の事を気にかけてくれている筈です。フェイトさんがそうだったように……失礼します、サ

ンダース軍曹。」

エリオは早足で営倉を後にした。

エリオが立ち去ってから数分後、タクマは足を振り上げた反動でベッドから立ち上がり、エリオの言葉を思い出す。

「…探していけば、絶対に見つかる筈…か。」

その言葉はタクマの心に届き、動かした。

「エリオみたいなちびっ子に諭されるなんて…何やってんだろうな、俺は。」

タクマは己の右手を見やり、力一杯握り締める。

そしてそのままの力で、壁を一回だけ殴りつけた。それは以前のような悲しみの拳ではなく、己に喝を入れるための拳。

拳から血が少し滲み出るが、そんな事は気にしていない。

「もう一度…頑張ってみるか！」

やってやるぜェェェエ！と、タクマの叫びが地下に響き渡った。

四日後、タクマの営倉入りの期間が終了し、タクマは久し振りに太陽の下に姿を現した。

「うおっ！眩しッ！？」

二週間ぶりの日光に目が眩むタクマ。

「よっ、タクマ。おつとめは終わったのか？」

「あ、ボーグマン大佐。お陰様で…」

タクマは後頭部を掻きながら返す。

「イスルギ少佐の所には？」

「これから行くところです。ご迷惑もおかけしましたし…」

「そうか…っと、その必要は無くなったみたいだぞ？」

大佐がタクマの後ろを目で示し、タクマはその方向を見る。するとそこには、いつも通りのアジアンチックな衣類を身に着けたイスルギ少佐が立っていた。

「ケ……イスルギ少佐…先日は、その…」

タクマは心の準備もままならぬ状態で、言葉に詰まる。

「ぶ…無礼な言動や、行動をしてしまい…申し訳ー―」

「…いや、今回は私にも問題があった。…すまなかったな。」

タクマはイスルギ少佐に謝罪するが、イスルギ少佐もまた、自分に落ち度があったと謝罪する。

「タクマ…正直お前は、私に失望したか?」

弟子の苦しみに気付いてやれず、焦る弟子を止めることも出来ず、挙げ句の果てに命の危機にまで晒してしまった。師匠としては、完全に失格だ。イスルギ少佐はＫＦＤの奇襲攻撃以来、そんな事ばかりを考えていた。

そして、自分は本当にタクマを導いてやれるのか、不安になっていた。

「…最初は正直、裏切られたと思いました…。でも…営倉にエリオが来てくれた時、それは俺の誤解だったと理解しました。イスルギ少佐は、いつも俺の事を気にかけていてくれてるんだって……ですから、俺は失望なんてしてません。寧ろ、惚れ直しました。」

「タクマ…」

「ですから…イスルギ少佐ー―いえ、ケイ姐さん。今一度、俺を導いて下さい!お願いします!」

タクマは半歩だけ後退し、深々とイスルギ少佐に頭を下げる。

「…私で、良いんだな?」

「ええ。俺の師匠は、ケイ姐さん以外には居ませんよ!」

タクマはイスルギ少佐の胸元に向け、軽く拳を突き出す。

「ありがとう、タクマ…」

「こちらこそ、ケイ姐さん。」

互いの蟠り（わだかま）が解け、再び師弟関係が復活を遂げた。

「よう、仲直りは出来たのか？」

ニクシー基地の指令官室。机に向かってコーヒーを飲む大佐は、部屋を訪れたイスルギ少佐に訊ねる。

「ええ。大佐、ありがとうございました。」

「なぁに、俺は大したことはしてないさ。」

「いえ、大佐が私とタクマの充電期間を設けて下さったお陰です。」

実はタクマの営倉入りを提案したのは、イスルギ少佐ではなくボーグマン大佐だった。自分が師弟関係に介入して、事態がややこしくなっては元も子もなくなる為、イスルギ少佐の命令という事にしたのだ。

「そうか？だがまあ、タクマが立ち直って一安心だな。これで心置

きなく出港が…ん？」

大佐が机のモニターに目を遣ると、通信係からの呼び出し音が鳴っている事に気づいた。

『大佐、ニューヘリックのスー主任から通信です。』

「メリッサから？繋いでくれ。」

大佐が指示を出すと、モニターにメリッサの顔が映し出される。

『大佐、お忙しい所失礼します。実は、完成した『シーザー』の件なのですが、最終チェックの為にバンとフィーネ、それにジークを寄越して頂けないでしょうか？』

「今からか？だが、俺達の明日は出港だぞ？」

『それは存じ上げております。ですが、今やらなくては他にやるチャンスが有りませんので…申し訳ありません。』

メリッサがニューヘリックシティにまで輸送して、開発を進めていた特注のライガーゼロ、『シーザー』。規格外の体躯という事もあり、ゼロの持ち味であるＣＡＳをあえて廃しており、その野生の力をフルに引き出すというコンセプトで開発された。

そしてこの機体のパイロットは、メリッサを含む技術者が三日三晩悩んだ末、バンに決定した。

大佐がモニターに映ったメリッサの顔を見ると、目の下には隈があり、髪の毛は少し跳ねていた。おそらくこの二週間強で完成させるために、ロクに休まずに開発を続けていたのだろう。

（…随分と頑張ってるみたいだな…）

ならば、現場の人間として技術者の要望には、なるべく応えるべ

きだろうと考えた。技術者あってのパイロットなのだから。

「分かった、すぐに向かわせよう。」

『ありがとうございます、大佐。』

メリッサは画面越しにお辞儀をし、通信が切れる。

「このタイミングでフライハイト中尉が抜けるとは…」

「まぁ仕方ないさ。メリッサ達、技術者の頑張りには報いないとな。空いた穴は俺達で埋めれば良いだけだ。」

大佐は笑いながら言う。

「それじゃあケイ、バンに伝えてきてくれないか?」

「はっ、お任せ下さい。」

イスルギ少佐は敬礼してから部屋を出ていった。

その夜、バンのブレードライガーをムンベイのグスタフに載せ、バンとフィーネはニューヘリックシティに向かう準備をしていた。

「じゃあ、気をつけてな。」

「ええ。ちゃっちゃとシーザー貰って、合流します！」
「大佐達も、どうかお気をつけて。」
「バンが居ない分はボクがカバーするからさ、安心して行って来てね！」
「マミがかぁ？……いまいち不安だな。」
「なんだと～！？」

両腕を縦に思い切り振って抗議するマミ。

「マミ、あんまりはしゃぐな。明日の体力、残しとけ。」

騒ぐマミをレイが諫める。

「バン、そろそろ出すよ！」

コックピットからムンベイが顔を出して言う。

「ああ！それじゃ、バン・フライハイト中尉、行って来ます！」

バンとフィーネが一両目のコンテナに備え付けられた居住スペースに入ると、グスタフのタイヤが動いて走っていった。

翌日、日の出と共に第二格納庫のハッチがゆっくりと開き、戦闘母艦仕様のウルトラザウルスが浸水を始める。
ウルトラザウルスを先頭に、ネオ・タートルシップやホバーカーゴが続けて動き、巨大な行列を作り上げた。

「大佐、出港準備が完了しました！」
「よし！我々はこれより、暗黒大陸上陸作戦を開始する！全艦、微速前進始め！」
『了解！ヨーソロー！』
『ギュァァァア！』

ウルトラザウルスが軽く雄叫びを上げ、その巨体が動き出す。
時間は午前五時半。遂に、暗黒大陸上陸作戦が開始された。

第五十一話　決戦への船出（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第五十二話　もっと、真っ直ぐに、ひたむきに（前書き）

ここ最近、とてつもない強風が吹き荒れてますね。うちの周りは海なので、より一層暴風になってます。

第五十二話　もっと、真っ直ぐに、ひたむきに

ニクシー軍港を出港して半日が過ぎ、西の水平線には沈み行く太陽が見える。
今は夕飯の時間で、乗組員たちは交代で食堂に集まって腹ごしらえをしている。

「…しっかし、スバルにギンガ、それにエリオはよく食うなぁ。」

正面に座る三人を見て、焼き肉定食を食べながらレイが呟く。
ギンガとエリオの隣には、料理が食べ終わった後の食器が大量に積み上げられている。スバルに至っては、二本目の食器のタワーの建設が始まっていた。

「スバル達みたいなフロントアタッカーは、エネルギーの消費量が尋常じゃないらしいですからね…」
「それに反比例して、メシの量も増えるってか…大丈夫なのか、食費とか？」
「まぁ…六課じゃあどうにか切り詰めてやってますけど……」

レイの左隣に座っているティアナは、レイの食べている料理を見る。

「…レイさんも、普通の人よりは食べてますよ？」
「？…そうか？」

レイの横には、食べ終わった焼き肉定食の皿が三つ重なって置かれていた。確かに普通よりは十分に多い量だ。

「ティアナが食欲無いだけじゃねーのか？」
「私はいつも、これくらいですよ。」
ティアナは一旦口を止めて、再び料理を食べ始める。
「あー、疲れた。偵察も楽じゃないよ。」
肩を回して関節をコキコキと鳴らしながら、マミが食堂に現れた。
「フェイトー、交代よろしくー。」
「うん、今行くね。」
フェイトは食べ終わった食器を手早く片付けると、偵察に向かっていった。
「先輩、隣失礼しまーす。」
「お、おお。」
マミはレイの右隣の席に防寒用の上着を掛け、料理を注文しに行った。
「そういえばレイさん。」
「ん？どうした？」
「レイさんとマミさんって、付き合ってるんですか？」
「ブッ！？」
あまりにも予想外だった質問に、レイは口の中の物を吹き出してしまった。
「ちょ、汚いですよレイさん！」

ティアナが文句を言う。

「ゲホッ…わ、悪ィ…つーか、いきなり何言ってんだお前は!?」
「だって、一時期噂になってましたよ?『グレック大尉とブリジット少尉がイチャついてたらしい』って。」「はぁ!?」

レイは寝耳に水だとばかりに声を上げる。

(アレか?俺がウジウジしてた時、マミが俺と寝てた事が噂になってんのか!?)

レイは右手を額に押し付けて、苦虫を噛み潰したような顔をする。
まぁ一緒に寝たといっても、ベッドでではなく酔っ払ってバルコニーに寝転がったまま、朝を迎えてしまっただけなのだが。

「どうなんですか、レイさん!?」

スバルは興味津々らしく、スプーンをマイクに見立ててレイの口元に近付ける。

「こ、こらスバル!レイさんが困ってるでしょ!?」
「すいませんレイさん。妹がご迷惑を…」

ティアナはスバルを諫め、ギンガはレイに妹の無礼を詫びる。

「いや、噂が出てるんならこの際ハッキリ言わせてもらう。」

レイは覚悟を決め、自らの想いを語ることにした。

「俺は…マミの事がーー」

「ボクがどうかしたんですか？」
「どわぁ！？」

料理を持って戻ってきていたマミに突然声をかけられて驚いたレイは、危うくひっくり返りそうになった。

「な、なんだよマミ！驚いて寿命が縮んじまったじゃねーか！」
「あ、ごめんなさい。で、ボクが何か？」
「い、いや、その…」

マミはレイに顔を近付けて訊ねるが、覚悟を決めたはずのレイの口調はしどろもどろになっている。
マミがすぐ隣にいることで、急に照れくさくなってしまったのだ。

「…っと…そうそう、ゼロの整備しねぇと！」

そう言うとレイは食器を返却し、格納庫に向かって走り去っていった。

「あ、先輩！？」
「あ～あ、意気地無し…」
「も～、タイミング悪いですよマミさん…」
「え！？な、何が！？」

話が読み切れずに困惑するマミであった。

「敵前逃亡……軍法会議に銃殺刑物だな…」

ウルトラザウルスから連絡橋を使って、ホバーカーゴ級一番艦の格納庫に移動したレイは、自身のゼロの前脚に手を突いてうなだれていた。

「『俺はマミの事が好きだ』なんて台詞、マミの前以外じゃあ楽に言えんのによォ……とんだ根性無しだな…」

レイの気持ちが沈み出してだんだんと膝が曲がっていき、遂にはその場にしゃがみ込んでしまった。

「あ～、くっそ…鬱だ…」

「グレック大尉、どないしました?」

レイが顔を上げると、はやてとリィンが隣に立っていた。といっても、リィンは宙に浮いているのだが。

「あ、はやて部隊長。いや、そんなに大した事じゃねぇッスよ。部隊長こそ、何でこんなとこに?」

「ホバーカーゴの中な、まだ見てへんかってん、リィンと一緒に見学しとるんよ。」

はやては微笑しながら、頬を掻いて言う。

リィンは新しい艦にはしゃぎ出し、格納庫中を縦横無尽に飛び回っている。

（…はやてになら、相談しても問題無ェか…？）

レイは心の中でそう思った。

スバルに相談してもすぐに言いふらしそうだし、ティアナは努力家で恋愛経験は薄そうだ。エリオやキャロは若すぎて相談相手には成り得ないし、他の男性陣ーーヴァイスやアーバインに言おうものなら何を言われて茶化されるか分からない。

以上を踏まえた上で考えた結果、はやてなら口は固そうだし、真面目に聴いてくれる可能性が一番高そうだ。と、レイはその結論を出した。

「…はやて部隊長、ちょっと良いッスか？」

「…成る程なぁ…マミちゃんに上手く自分の気持ちを伝えられへんと。」

「ええ…。他で言う分には良いンスけど、いざマミに面と向かって言うとなると…」

「グレック大尉って、意外と純情なのですね～」

「…うっさい曹長。」

レイを茶化すリィンに対し、レイは顔を少し紅くして背ける。

「うん、確かにグレック大尉は純情さんや。」
「ちょ、部隊長まで…」
はやてにも茶化され、相談相手を見誤ったかとも思い始めるレイ。
「あはは、ゴメンなぁ。私も協力したるから、堪忍な。」
「…へ?」
「せやから、協力したるって言うたんよ。上官として、部下の士気を維持するように務めるのも仕事の内や。」
レイは顔を上げ、はやての目を見る。
「いいンスか?仕事とか…」
「大丈夫や。いざとなったら、ごっつ有能な私の副官に手伝って貰えばええ。」
何やら随分あっさりと凄い事を言ったこの部隊長。レイは会ったこともないその有能らしい副官に、心の中で合掌した。
「で?どんな感じで協力してくれるんです?」
「うん、まずはこれを見て欲しいんやけど…」

はやてはレイに一枚のプリントを手渡す。

「何々…『第一回　チキチキ！レイ・グレック大尉チェリーボーイ卒業計画～ポロリもあるよ～』……なんスか、これ？」

プリントのタイトルを読み上げたレイだが、意味が掴めずにはやてに訊ねる。というか、この文章の意味を理解できる人物がいるかどうか疑問だが。

「見ての通りそのプリントには、グレック大尉を強化するためのプランが書いてあるんよ。」

「へえ…」

レイはタイトルの次に書かれた文章に目を通す。

プラン1…告白したい相手に直接言って練習する、と書かれていた。

「ん？部隊長、これおかしくないですかね？」

「何がおかしいん？」

「だってこれ、練習ですよね？なのに書いてあることは、そのまま本番じゃないですか。」

確かに文章を見た感じでは、マミに告白することで練習するという意味が取れるが、それでは一度実行した時点で練習も本番も完了という事になってしまう。

「フフフ…甘いなぁ、グレック大尉。ゴデ〇バの生チョコよりも甘いでぇ！」

「どういう事です？」

「確かにマミをサンドバッグに練習するんやけど、使うのはホンモ

ンのマミやない。これや！」

はやてが指差した方向には、いつの間にやらティアナが立っていた。

「うぉ、いつの間に！？」

「さっきから居ましたよ。」

体をビクッと震わせて驚くレイだが、ティアナは淡々とした口調で返す。

「私が念話で呼んだんよ。ティアナの十八番（オハコ）、幻影魔法を応用するんや。ほな、頼むで。」

「はい！」

ティアナの足元にオレンジ色の魔法陣が現れ、レイの目の前に幻影魔法で作り出した偽物のマミが姿を現した。

「へぇ、リアルだな。」

「動く事も出来ますよ。」

幻影のマミがレイに向かって手を突き出し、額にデコピンをする。

「痛ッ！？…触感まであんのか！？すげえなオイ！」

額を押さえて痛がってはいるが、その完成度と再現率の高さに感心するレイ。

「ありがとな、ティアナ。こんなすげぇ練習台用意してくれてさ！」

「…別に、レイさんがまともに機能してくれないと、戦力が低下す

るから手伝ってるだけです。」

レイに感謝され、照れくさいのを隠すようにそっぽを向いて言うティアナ。

（素直じゃねぇな、このツンデレ娘…）

ニヤニヤしながら、照れ隠しをするティアナを見つめるレイ。

「あーもう！時間も無いんですから、さっさと始めますよ！？」

「了解、了解。」

ティアナが顔を紅くして逆ギレしそうになったので、急いで始めることにした。スポンサー様を怒らせる訳にはいかない。

「ほな行くで。テイク１、アクション！」

はやてが言うと、リィンがどこからともなく取り出したカチンコを鳴らす。

「あ、あのさ…俺…マミのことが……ダメだ、言えねぇ！」

「どーん！」

「ぐえっ！？」

幻影相手でも想いを伝えられないレイに、はやてが振り下ろした六課の技術力を結集して作り上げた特注ハリセンが炸裂する。
その威力の凄まじさに、レイは二メートル程吹き飛ばされてしまう。

「ちょ、部隊長！？」
「なんや今のは！ホンマにやる気あるんか疑いとうなる台詞やな！」
「だってまだ、一回目じゃないッスか！」
「問答無用！私が一晩中鍛え直したるわァ！」
「は、はやてちゃんが本気です！」
「部隊長～、残業手当てお願いしますよ？」

リィンははやての勢いに戦慄し、ティアナは溜め息を吐いて残業手当てを請求するのだった。

「さあもう一度や！」「俺はマミの事がぁッ！」「あかぁん！もう一回！」「俺はお前がッ！」「やり直しや！もっかい！」「俺はマミの事がぁぁぁぁぁ！」「もっと力を込めて！」「俺は！お前がァァァァ！」「オカマ口調で！」「アタイ、マミの事が…ス・キ♪」
「…アホちゃうか？」「えっ！？」

そんな特訓が一晩中続いたそうな。

そして、東の地平線から太陽が顔を出し、遂に夜が明けた。
レイの顔には、はやてにハリセンで叩かれた跡や隈ができており、ティアナも眠たそうな顔をしている。

「俺はッ…！お前の事がッ…！好きだァァァア！！」

練習開始から約七時間。遂に自分の想いを、マミの幻影にぶつける事に成功した。相手が幻影と言えど、練習開始直後のレイと比べればかなりの進歩である。

「や…やりましたね、レイさん…」
「ああ…！俺はやったんだ！ありがとな、ティアナ！」

あまりの眠さに、今にも倒れそうなティアナの両手を感謝の意を込めて握り締めるレイ。

「…んあ？なんや、出来たんか？」
「はい、お陰様で…てか部隊長、いつの間に寝てたんスか！？」

はやてとリィンはいつの間にか敷かれた布団で途中から寝ていたらしく、レイの歓喜の声で目が覚めたようだ。

「いや、だって私部隊長やし…なにより夜更かしは美容の大敵やからなぁ。」
「お肌が荒れるのです！」
「そっちが最優先！？」

はやてがもっともらしく言うが、レイは残る力を振り絞って突っ込みを入れた。

「んで、早速マミちゃん本人に言うて来るんか？」

「う～ん…」

レイは暫し考える。

「…今は止めときます。」

「何でや？折角、自信がついたんやし…」

「自信がついたからッスよ。これで俺は、いつでもマミに想いを伝える事が出来る…。でも今は、言うべきタイミングじゃないんです。この戦いに集中して、なにもかもが終わった後に、伝える事にします。」

下手なタイミングで告白して、浮き足立った状態で戦いに出る訳にはいかない。兵士という戦闘のプロである、レイなりのプロ意識から導き出した結論であった。

「さよか。ほんなら、絶対死ぬ訳にはいかへんな。」

「ええ。アンナ・ターレスとの約束もありますし…絶対に…生き残って…や……」

レイの体がフラフラと揺れ、床に倒れ込んでしまった。

「ちょ、グレック大尉！？」

「大丈夫ですか！？」

慌ててはやてとリィンがレイに駆け寄る。

「う〜ん、もう食えねぇ…」
「…なんや、寝とるんかい！…まぁ一晩中やっとったんやし、しゃーないな。」

そう言って、同じく眠そうな表情のティアナの方を向く。

「おおきにな、ティアナ。部屋に戻ってゆっくり休んでや。」
「言われなくても、そうしますよ。残業手当て、弾んで下さいね？」
「うん、任せとき。」

ティアナはフラフラとした足取りで、部屋に戻っていった。

「グレック大尉は…起きそうにないなぁ。リィン、手伝ってや。」
「はいです！」

はやてとリィンは床に寝転がったままのレイを、つい先程まで自分たちが使っていた布団に移した。

「う〜ん…マミ〜、好きだ〜…」
「ふふっ、まるで子供みたいな寝顔やなぁ。」

はやてが覗き込んだレイの寝顔は、まるで嬉しい事があった子供のようだった。

「スカリエッティ、そちらの進行状況を報告してくれ。」

プロイツェンは自身の家、プロイツェン邸の自室から秘密工場を指揮するスカリエッティと通信をしていた。

『一通りは完成したさ。マッカーチスにグランチャー、ディロフォースにグレイヴクアマ…。それにリーゼ仕様のジェノザウラー。デスザウラーは予定数の半分が完成したよ。』

「そうか…なら残り全てのラインを使ってデスザウラーの生産を進めてくれ。その他の機体は、共和国軍が海上で戦闘を始めた頃に、予定の位置に送ってくれ。」

『了解したよ。私が作り上げた最高の兵器達だ、存分に使ってくれ賜え。』

プツン、という音を立てて通信が切れる。

（これでまた、我等の計画が進む…だが…）

プロイツェンは一抹の不安を覚えていた。それは、息子のヴォルフの事だ。

プロイツェンはヴォルフの優しすぎる心を利用して共和国に対する怒りを一気に増幅させるために、アンナがほぼ確実に戦死するように仕組んだ。

だが、ヴォルフはアンナの死から未だ立ち直れず、部屋に閉じこもるようになってしまった。結果的に、怒りよりも悲しみの方が上回ってしまったのだ。

（これは誤算だった…さて、どうしたものか…）

プロイツェンは、ヴォルフが立ち直ることを願うのだった。

第五十二話　もっと、真っ直ぐに、ひたむきに（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第五十三話　アンダー海海戦（前書き）

オリジナルゾイドやキャラクターについてのご意見、ありがとうございます！
皆さんの期待に応えられるよう、頑張っていきたいと思います！

第五十三話　アンダー海海戦

「こちらボンバー０１、哨戒中の区域に異常無し。」
「ボンバー０２、同じく異常無し。」
「ボンバー０３、異常ありません。」

航海七日目の昼。サティ大尉とその部下二名の乗るサラマンダー三機が、周辺の哨戒任務に当たっていた。

『了解。次の部隊と交代して下さい。』
「了解……ん！？」

サティ大尉が帰還しようとした時、サラマンダーのレーダーが機影を感知した。

「こちらボンバー０１！訂正する、レーダーに反応あり！帝国軍だ！」

サティ大尉は急いでウルトラザウルスの通信士に連絡する。

『了解！総員、第一種戦闘配置！パイロットは、機体コックピット内にて、魔導士は甲板にて待機せよ！』

艦全体に警報とアナウンスが響き渡り、廊下をパイロットやフェイト達魔導士が急いで駆け抜ける。

『サティ大尉、出撃準備に多少かかります。それまで、足止めをお願いします！』
「了解！行くぞ、ボーリック、キャリオン！」

「「了解！」」

サティ大尉の合図と共に三機は散開、海上及び航空戦力の撹乱に向かった。

「ライトニング０１、フェイト・Ｔ・ハラオウン、行きます！」
「ライトニング０２、シグナム、出るぞ！」
「スターズ０２、ヴィータ、行くぜ！」

ウルトラザウルスの甲板からフェイト達が飛び立つ。
魔導士はゾイドの様に機体の最終チェックなどの出撃準備が殆ど必要無いため、すぐに出撃する事が出来た。

「サティ大尉、状況は？」
「ブラキオスが六十、サイカーチスが四十ってとこだ。流石にサラマンダー三機だけじゃ無理があるな…」
「了解しました。これより、援護します！バルディッシュ！」

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ』

ソニックムーブで急加速し、一気に戦闘区域に移動するフェイト。

『Ｈａｋｅｎ　ｆｏｒｍ』

バルディッシュの先端が変形し、金色の魔力が刃を形成する。

「ハーケン、セイバァァア！！」

バルディッシュを横薙ぎに振り、魔力刃をブーメランのように飛ばす。

魔力刃は回転しながら飛んで行き、カメラアイと牙を装備したブラキオスの首を、三つ程刈り取った。

ブラキオスも負けじと対空砲を放つが、的が小さく機動力の高いフェイトにはまるで当たらない。

『駄目です隊長！相手が速すぎます！』

『くうっ…！相手はバリアジャケットを着けているとはいえ、ほぼ生身だ！一発だけでも当たれば…！』

「おおっと、俺達の事も忘れんなよ！？」

サティ大尉のサラマンダー・ボンヴァーンが背面飛行の体勢から、ゴジュラスキャノンを海上のブラキオスに向けて二、三発程発射する。

大きな水しぶきを伴い、数機のブラキオスを沈めると共に陣形を崩した。

「やるな、私も負けてられん！レヴァンティン！」

『Ｊａ！　Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ！』

レヴァンティンは刀身を蛇の様に変形し、魔力が込められたカートリッジを使用して空薬莢を排出する。

「飛竜…一閃！」

刃が空間を縦横無尽に駆け巡り、ブラキオスの首を跳ね、対空砲を刈り取り、胴体に巨大な傷跡を残した。

「くっ、流石に胴体は硬いか…」

「副隊長！加勢するッスよ！」

シグナムが背後を振り返ると、固有武装のライディングボードに乗って海面スレスレを滑空するウェンディの姿があった。

「食らうッス、エリアルショット！」

ボードの先端から魔力の弾丸が飛び出し、ブラキオス一機に命中した。

続けてウェンディが指を鳴らすと、弾丸を受けたブラキオスの硬い装甲が内側から爆発し、海の底にに沈んでいった。

「やったッス！改良した炸裂弾、良い感じッス！」

子供の様に嬉々としてはしゃぐウェンディ。

「よくやったウェンディ、続けて援護を頼む！」

「合点承知ッス！」

シグナムの期待に応えるため、ウェンディは元気よく返事をし、シグナムと共にブラキオスの駆逐に向かった。

「マミ・ブリジット、ストームソーダー、行きます！」

ウルトラザウルスの後部に増設されたカタパルトから、マミの乗るストームソーダーが飛び立って行き、それに続いてストームソーダーが十機、プテラスも三十機が飛び立って行った。

「スバルさん、僕達も…！」

「う～ん、そうしたいのはやまやまなんだけど…」

「敵部隊との距離が開きすぎだ。まだ、許可出来んな。」

早くシグナム達の力になりたい気持ちを抑えられないエリオを、イスルギ少佐が諫める。

「その心意気は認めるけど、もう少しだけ我慢してくれないかい？必ず、君の出番は来るからね。」

「はい…」

眼鏡を人差し指で押し上げながら、笑顔でエリオを説得するアルドワーズ中佐。

エリオは少し残念そうな表情を浮かべるが、どうにか納得したようだ。

「ふ～む…エリオ君、やる気満々みたいですね…」

少し離れた位置から、バディターがその様子を眺めていた。

「…ん、そうだ。」

バディターが何かを思い付くと、踵を返してその場を立ち去った。

「ブラキオス第三中隊、全滅！」

「第五、第六中隊、壊滅寸前です！」

ホエールキングに伝えられる劣勢の報せ。それを聞く司令官は、悔しさから唸り声を上げる。

「うぬぬ…！レドラー大隊を出せ！それと三色電光隊（ドライ・ブリッツ）もだ！」

「了解。三色電光隊、出撃せよ！」

「了解！行くぞ、ゲルプ！ロート！」

ブリッジからの指示を受け、隊長のブラオを先頭に三色電光隊（ドライ・ブリッツ）が発進した。

「お前ら、魔導士なんぞに気後れするなよ！一発当てれば、それで決まるんだからな！」

部下を鼓舞するブラオ。ここで管理局の魔導士を撃退出来れば、自分たちは更に高い位置に出世できるはず。そう信じて、共和国軍旗艦のウルトラザウルスに向けて飛行するのであった。

『大佐、本艦は三分後に戦闘区域に侵入します！』
「よし、六課フォワード陣は順次出撃！」

大佐の指示を受け、スバルとギンガがウイングロードを展開して駆け抜ける。

「私達も行くわよ、エリオ！キャロ！」
「「はい！」」

ティアナに続いてエリオとキャロが甲板に出るために走り出そうとする。

「おっと、待って下さいよお三方。」

だが、バディターに呼び止められて急ブレーキを掛ける。

「何ですか？バディター伍長。」
「どうやって、この海の上で戦う気ですか？」

「どうやってって…ルシエ三士の竜、フリードに乗って…」

ティアナはキャロの肩に乗っているフリードを指差して言う。

「竜魂召喚、というやつですか。戦闘記録を拝見しましたが、些(いささ)か機動力に欠けるようですね。」

バディターは眼鏡を軽く押し上げて言う。

キャロの竜、フリードは基本的にキャロを、もしくはそれにエリオを乗せて飛行する。それに加えてティアナが乗った場合、重量の増加によって機動力が損なわれ、格好の的になる恐れがある。それを撃ち落とされては大打撃だ。

「…じゃあ、どうしろって言うんですか?」

ティアナがややイラついた表情と口調で言う。

「そこで、これを提供しましょう。」

バディターは背中に背負える程度の小さなコンテナを開き、中身を取り出す。

中には翼を折り畳んだ凧のような物に、推進装置が付いた物が入っていた。

「これは?」

エリオが訊ねる。

「シーガルカイトといいます。これがあれば、人間単独での飛行が可能になります。前大戦の代物ですが、僕が趣味で改良していまし

た。あまり高くは飛べませんが…」

右手にシーガルカイトを一つ持ってペラペラと解説するバディター。

「分かった、分かりましたから！」

野放しにしておくと永遠に語り続けそうなので、ティアナが適当な所で止める。

「…ありがたく、使わせて頂きます！」

「どういたしまして。あ、最後に操作説明だけさせてくれませんか？」

バディターは簡単に操り方を説明する。今度は三十秒程度で済んだ。

「…で、飛ぶときは軽く助走を付けると良いですよ。」

「分かりました。ありがとうございます。行くわよ、二人とも！」

「はい！バディターさん、ありがとうございました！」

エリオが満面の笑顔でバディターに感謝の意を表す。

シーガルカイトを背負い、ティアナ達は甲板を軽く駆けてから飛び立っていった。

「ウェンディ、前！」
「うおわぁっ！？」

ウェンディは慌ててボードの機首を真上に向けて垂直に飛び、高速で飛んできたサイカーチスを避ける。もしスバルの声が無ければ、余所見をしていたウェンディははね飛ばされていただろう。
道路だろうが空中だろうが、脇見運転は良くない事だと改めて肝に命じたウェンディであった。

「ひゃ～っ、危なかったッス～！」

胸をなで下ろしたウェンディの背後から、今度はレドラーが飛来してくる。
だが先程のような油断はもう無い。

「甘いッスね！」

ウェンディはすかさず急加速してレドラーの背後を取り、砲撃を翼に叩き込んだ。
左翼をもがれ、バランスの取れなくなったレドラーはコックピットからパイロットを脱出させ、海の底に沈んでいった。

「硬い装甲だぁ？そんなモン、アタシとアイゼンがぶち抜いてやらァ！」
『Ｒａｋｅｔｅｎｆｏｒｍ！』

カートリッジを一つ消費し、グラーフアイゼンはラケーテンフォ

ルムに変形する。続けて更にカートリッジを2つ消費、打撃部の片方に現れたブースターを点火させる。

「ラケーテン…ハンマァァア！」

自身を軸にハンマー投げの選手の様に回転、その勢いを乗せて硬い装甲を有するブラキオスのボディに叩き付ける。

数秒の拮抗の後、ブラキオスの装甲を貫いて爆発を引き起こす事に成功した。

それを見たスバルも負けじとブラキオスに接近、ウイングロードを思い切り蹴って跳躍する。

「一撃、必倒！」

両手で円を描く様に魔力を練り上げて前方に魔力スフィアを形成、それをリボルバーナックルで思い切り殴りつける。

「ディバィィィン、バスタァァア！」

水色の砲撃がブラキオスのボディを飲み込み、一撃の元に撃沈させた。

爆風を利用してスバルはウイングロードに戻るが、着地した瞬間を狙ってレドラーが真上から突撃してきた。

「しまっ…」

「あんまぁぁぁあいっ！！」

スバルはダメ元でプロテクションを展開するが、レドラーの刃が届く前にそのボディはマミのストームソーダーによって、真っ二つに両断された。

「マミさん！」
「スバル達だけに美味しい所は渡してあげないよ！」
コックピットの中で親指を立てるマミ。勿論、スバルには見えていないが。
そのまま他のレドラーと交戦し、一機、また一機と斬り捨てていく。
「はぁぁぁぁあっ！！」
エリオはシーガルカイトの扱いに早くも慣れたようで、ブラキオスの背に着地してはストラーダの魔力刃で装甲を斬り裂いていく。
「敵部隊の約三割を撃破！」
「…なかなか順調だな。」
恐ろしい位に。大佐はオペレーターからの報告にそう感じていた。
（確かに六課のフォワード陣は、なのはが鍛えてるだけあって強い。だが、それにしたって順調過ぎだ。）
何か裏がある。大佐はそう思っていた。
すると、ウルトラザウルス艦内に警報が鳴り響いた。
「何だ！？」
「十二時の方向、五十キロの位置に敵増援部隊が出現！戦闘区域に侵入して来ます！」
オペレーターが報告した直後、フェイト達の目の前に三色電光隊

のサイカーチス三機を筆頭とした、レドラーの大隊が姿を現した。

「各機、散開して攻撃を開始せよ！」

『了解！』

ブラオの指示で編隊を組んでいたレドラーが分散し、フェイト達に襲い掛かっていった。

第五十三話　アンダー海海戦（後書き）

シーガルカイト…知ってる人がどれくらい居るか分かりませんが、これは使えると思って出してみました。
あと、サティ大尉の部下二名の名前は、某カモメの球団に所属していた助っ人選手の名前から取りました。
ご意見ご感想等、お待ちしております。

第五十四話　大博打

ニューヘリックシティの共和国軍兵器研究所。その模擬戦闘エリアで、とあるライガータイプの模擬戦が始まろうとしていた。
その体躯は美しく無駄の無い白銀の装甲に包まれ、背部にはこれまた白銀の翼の様なユニットを搭載している。
相手はストームソーダー二機とブレードライガーＡＢが一機。模擬戦の相手にしては、かなり本気の組み合わせである。

「バン、フィーネ、準備は良い！？」
「ああ、いつでもいけるぜ！」
「私も良いわ。」

見学席からメリッサがバンとフィーネに通信を入れ、模擬戦開始の了解を取る。

「では、模擬戦を開始して下さい！」

メリッサの合図と共に、新型ライガーの模擬戦が始まった。

「フォトンランサー、ファイア！」

アンダー海での戦闘は熾烈を極めていた。
三色電光隊（ドライ・ブリッツ）が指揮する航空部隊は直前まで戦っていたそれとは違い、実に的確な動きでフェイト達を苦しめている。
三色電光隊の隊長であるブラオ大尉に、その直属の部下のゲルプとロートはフェイトを取り囲み、得意の連携攻撃で反撃の隙を与えない。
勿論シグナムやヴィータも援護に向かおうとしたが、レドラーやブラキオスに邪魔されて近づく事が出来ずにいた。

「ええい、貴様等に構っている暇など…！」

シグナムがレヴァンティンでレドラーに斬り掛かるが、その瞬間にレドラーは機体を弾丸の様に回転させ、シグナムが接近するのを妨害する。

「くっ…！」

シグナムは下手に接近して跳ね飛ばされる事を恐れ、攻撃を中止する。

『ヴィータ、そっちはどうだ！？』

シグナムは自分と同じく、このレドラーの群れを突破しようとしているヴィータに念話を送る。

『駄目だ、コイツらまるで攻撃して来ねぇ代わりに、アタシの攻撃がさっぱり当たらねぇ！これじゃあまるで…！』

一一まるで、時間稼ぎをしている様だ。ヴィータは念話を通して

シグナムにそう言った。

「時間稼ぎ…？」

シグナムはその言葉に、僅かだが違和感を覚えた。

確かに、シグナムもまるで時間稼ぎをしている様な感じはしていたが、それはサイカーチス三機がフェイトを撃ち落とす為の物だと思って深く考えてはいなかった。

「ああもう！何でこんなに纏わりついて来るの！？　コレじゃあ、お互いに攻撃が出来ないよ！」

シグナムの耳に聞こえてきたのは、歩兵用の通信機から聞こえてくるマミの愚痴。

「お互いに攻撃出来ない…？」

シグナムは再び考える。フェイトを倒すつもりで、他の戦力をサイカーチスに近付けたくないなら、共和国軍側の空戦力を物量で叩き潰せば良いだけの話だ。なのに、何故時間稼ぎに拘るのか。

「っ！　エネルギーが無くなってきてる！」

マミがストームソーダーの燃料計を見ると、長時間の戦闘の所為でエネルギーが尽きかけていた事に気付いた。マミの機体がこれでは、同時刻に出撃したプテラスも限界だろう。

「こちらストーム０１、補給が必要なため、着艦許可を！」

『ウルトラ００、了解。補給が必要な機体は、順次着艦せよ。』

着艦の許可を取り、ストームソーダーやプテラスがウルトラザウルスの甲板に戻る。
着艦を妨害されないよう、ネオ・タートルシップからカノントータスやガンスナイパーが、ホバーカーゴからは砲撃戦用のユニットを装備したライガーゼロ、『パンツァー』が対空射撃で着艦を支援する。
シグナムやティアナ達も、戦線を下げて守りの体勢に入った。

「敵機をウルトラザウルスに近づけるな！ここで食い止めるぞ！」

シグナムが呼びかけるが、マミのストームソーダーが着艦しても、プテラス隊が着艦を始めても、レドラーは追撃して来ない。

「はぁぁぁぁあっ！！」
『うぉぉおっ！？』

シグナムが不審に思うが、そうこうしている内にフェイトがロートのサイカーチスの翼を斬り、三色電光隊のフォーメーションを崩して脱出した。

『申し訳ありません、脱出します！』

サイカーチスのコックピットからロートが座席ごと脱出し、パラシュートでゆっくりと海面に着水する。

「ゲルプ、ロートを連れていったん下がれ！」
「りょ、了解！」

ゲルプは海面を漂うロートを回収、全速力で後方のレヴィアタン級に戻っていった。

フェイトも着艦の支援の為に後退し、共和国軍側の戦力はウルトラザウルスの周囲に集合した。

「そろそろか…こちらブリッツ０１、クアットロ特務大尉、作戦をフェイズ３に移行されたし！」

『了解で～す♪』

戦場のほぼ真下に位置する海底。そこには五十機以上のシンカーが、クアットロのＩＳ『シルバーカーテン』で姿を隠していた。

「それでは…全機、最大戦速にて急速浮上。目標はウルトラザウルス級…叩き潰しちゃいましょう♪」

クアットロの指示で、全てのシンカーが海上を目指して浮上を始めた。

プテラスもウルトラザウルスの格納庫に収納し終え、現在急ピッチで補給が行われている。
フェイト達、魔導士や対空砲撃に当たっていたレイ達は帝国の追撃に備えて外で待機しているが、レドラーやブラキオスが攻撃してくる気配はない。

「…何故だ？　この状況で睨み合いの意味など…」

シグナムが呟き、ふと帝国の今までの動きをまとめてみる。

「最も機動力のあるテスタロッサの動きを封じ、互いに攻撃出来ないようにするような動き、それにこの睨み合い……まさか！？」

一つの結論に辿り着き、自らの足元を見る。

「ブルーガー！　周辺に不審な物は無いか！？」
「へ！？　そうね…レーダーには特に…」

マリンがハンマーヘッドのレーダーを見るが、怪しい物は映し出されていない。

「どうしたシグナム、何かあったのか？」
「大佐！　ウルトラの真下に警戒を…」

シグナムの言葉が言い終わる前に、ウルトラザウルスの右舷から轟音と共に水しぶきが上がった。

「うおおおっ！？」

「きゃあああっ！」

突然の出来事に対応が遅れ、大佐を含めた乗組員達が声を上げる。

「くっ、何が起きた！？」

「右舷艦低、中破！恐らく、魚雷による爆発です！」

「魚雷だと！？　そんな物レーダーには…！」

「本当です大佐！　さっき、私のハンマーヘッドのすぐ隣を通って行きました！」

レーダーに何の反応の無かった事に驚く大佐。使用していた物が最新鋭のレーダーであっただけに、ショックでつい大声を上げてしまった。

「レーダーに反応無し…クアットロか！」

シグナムの脳裏に浮かんだのは、かつて時空管理局地上本部襲撃事件の際に使われた、最高の隠れ蓑とそれを持つ伊達メガネの女性。直後、海中から大量のシンカーが飛び出してきた。その数は優に五十を超えている。

シンカーがウルトラザウルスのほぼ真上に到達した辺りで、大量の魚雷と爆弾がバラ撒かれた。

「マズい！　総員、迎撃しろ！」

レイやウィナーのライガーゼロ・パンツァーを始め、アルドワーズ中佐のアームドライガーやイスルギ少佐のブレードライガー、加えてフェイトやシグナム、ティアナ達フォワード陣等も、降り注ぐ爆弾の迎撃に当たった。

「敵は真上ばかりではないぞ！　全機、攻撃再開！」

だがこの時を待ちわびていたと言わんばかりに、動きを見せていなかったブラオ達が爆弾の迎撃を妨害に動く。

「ぐぁぁぁあっ！？」

しかし、流石のフェイトやシグナムでも、真横からの掃射と真上から爆撃の同時攻撃を全て捌くのは不可能だった。爆弾が数個、ウルトラザウルスの甲板に着弾し、爆発を引き起こした。

「あああああっ！？」

フォワード陣は甲板の上で対応に当たっていた為、たまたま爆風の近くにいたティアナが煽られて海に放り出されてしまった。

「ティア！」
「ティアさん！　きゃあっ！」
「危ない！　キャロ、こっちに！」

キャロが爆風に巻き込まれるのを避けるため、スバルとエリオがキャロとフリードを庇いながら艦内へと誘導する。

『ティア、大丈夫！？』

スバルが念話でティアナに呼びかける。

『大丈夫、なんとか生きてるわ。マリンさんのハンマーヘッドにしがみ付いてる。アンタ達は？』
『大丈夫です。今、スバルさんやキャロと一緒に艦の中に避難して

ます。』

ティアナが無事なことを知り、安堵の表情を浮かべるスバルとエリオ。だが、状況はまだ苦しい。

『対空砲、一番から四番が沈黙！』

『左舷装甲、耐久力低下！』

『ウルトラザウルス、コンディション低下に伴い艦出力減少！　大佐、このままでは危険です！』

「くうっ…！」

このままでは艦が沈む。それだけは、なんとしてでも避けなければならない。

しかし、既に暗黒大陸までかなり近い地点まで来ている為、後退した所で状況は良くはならない。下手をしなくとも、航行不能に陥り、ウルトラザウルスを放棄しなければならなくなる可能性もある。

退がる事も、正面から突破する事も出来ない。この状況で、大佐はある賭けに出る事を決意した。

「ウルトラザウルスより全機へ。本艦はこれより進路を北東に修正、トライアングルダラスの突破を目指す！」

その言葉に、誰もが耳を疑った。

「なっ…！　本気ですか大佐！？」

「バカ野郎、冗談でこんな事言うか！　本気に決まってんだろ！」

一応ハーマンが確認するが、大佐はこの決定を変える気は無いらしい。

「あの…トライアングルダラスって？」
「そんなにヤベー所なのか？」
フェイトとヴィータは聞き覚えの無い単語に疑問符を浮かべる。
フェイトだけではない、六課メンバー全員が聞いた事の無い言葉だった。
「では、僕が説明しましょう。」
バディターが通信に割り込み、説明を始める。
「トライアングルダラス…それを説明するには、半世紀前に起きた惑星Ｚｉ大異変にまで遡りたいのですが…時間がないので割愛しましょう。」
バディターは逸る気持ちを抑え、要点だけを説明する。こんな状況で蘊蓄（ウンチク）を並べる訳にはいかないからだ。
「トライアングルダラスは、極めて強力な電磁の嵐が常に吹き荒れている海域……そこに機械類を侵入させたら、どうなるかぐらいは分かりますよね？」
「…！　電磁波で狂わされる…！」
フェイトが答える。
「ご名答。ゾイドも生命体とは言えその大半は機械化されていますから、例外無くシステムが狂わされ、暴走してしまう…ですが、それは帝国にも言える話です。」
「つまり、そこに入り込めば帝国軍は追って来れないって事か？」

ヴィータが言う。

「その通り。ゾイドには対電磁波用の防御プログラムもありますが、それを使うとコンバットシステムが処理に追いつけずに使うことが出来なくなりますし、絶対大丈夫という訳でもないですから。」

トライアングルダラスに侵入できれば、帝国の追撃は不可能となる。だが、共和国のゾイドが暴走、最悪ウルトラザウルスが暴走する危険性も孕んでいる。まさに、一かバチかの大博打だ。

「おもしれぇ！その話、俺は乗ったぜ！」

レイが共和国側の全回線を通じて叫ぶ。

「な…！　レイ！？」

「これ以外何もいい策が無いんなら、そのプランに賭けるしかないッスよ！」

ハーマンはまだ乗り気ではないようだが、レイはこれ以外に方法が無いと断言する。

「ハーマン少佐、私もその案に賛成です。」

「テスタロッサ・ハラオウン執務官！？」

「このまま手をこまねいているより、今出来ることを全力でやるべきです！」

フェイトがハーマン少佐の説得を試みる。

「少佐！　俺も賛成です！」「私もです！」「こういうのは好きじゃねぇんだが…やるしかねぇか！」

ウィナーにマリン、少々難色を示すがアーバインも、アルドワーズ中佐もイスルギ少佐も、他の兵士達も賛成に回る。
その力強い言葉に、ハーマンも改めて考えなおす。

「…よし、やってやろうじゃないか！　大佐！」

遂にハーマンも賛成し、満場一致で可決された。

「応！　フェイトにシグナム、ヴィータにハンマーヘッド隊はウルトラ周辺の守備、ネオ・タートルシップ級及びその搭載戦力はウルトラを囲って対空砲火！　ウルトラザウルスの針路を右に４０度修正、トライアングルダラスを突っ切るぞ！」

各自が配置に付き、今ここに平和を勝ち取るための大博打が始まった。

第五十四話　大博打（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第五十五話　突入、トライアングルダラス（前書き）

しばらく間が開いてしまいました。待ってくれていた方々、すいません。

第五十五話　突入、トライアングルダラス

「失礼します。」

メリッサの居る模擬戦の見学室に、栗色サイドポニーの髪の女性――なのはがやって来た。

「あれ？　なのはさん、予定より早かったですね。休暇はおしまいですか？」

「うん。ヴィヴィオも満足したみたいだから、早めに来ちゃった。」

体も軽く動かしたかったしね、となのはは言う。

「ところで……あのゾイドは？　随分と綺麗な機体だけど…」

なのははたった今模擬戦を終えたライガーに目線を遣り、メリッサに訊ねる。

「ああ、あれは『シーザー』ですよ。」

「え！？　それって、額に傷があったあの！？」

かつてゼロ捕獲部隊と死闘を繰り広げた怪物だという事を知り、なのはは驚く。

「ええ。苦労しましたよ、規格外のボディとパワーの為に一から装甲を作らなきゃいけなかったんですから。おかげで毎晩徹夜続きでしたよ。」

メリッサは溜め息を吐く。

「にゃはは…、ご苦労様。それで、この子の名前は？」
「ライガーゼロ・シーザー・ザ・キングっていいます。」
「シーザー・ザ・キングか…。うん、確かに『百獣の王』って感じがする。」

日の光が反射して美しく輝く銀色の装甲、シンプルかつ猛々しい機体フォルム。まさに、『王』の名を持つに相応しいゾイドである。

『メリッサ、良いデータは取れたかな？』

シーザーから通信を通してバンの声が聞こえてくる。

「ええ、最高のデータが取れたわ。機体に不具合も無さそうだし…。」
『良かった、シーザーとジークも喜んでるわ。良い体をありがとう、って。』

続けてフィーネの声も聞こえてきた。

「え…!?　もしかして、シーザーのパイロットって…」
『あれ？　なのは、来てたのか？』
『なのは、久しぶり～』

バンとフィーネはなのはが着ていることに気付き、モニターに自分達の姿を映す。シーザーは前がバンで、後ろがフィーネの複座式らしい。

「ふぇえ!?　二人とも、暗黒大陸に行ったんじゃなかったの!?」
『そのつもりだったんだけど…土壇場でメリッサに呼び出されてさ。

』
『シーザーの調整や実戦テストをしていたの。』
「そうだったんだ…。今度は二人乗りなんだね。」
「ああ、フィーネがバックアップに回ってくれるから、いくらか楽になるよ。」

久しぶりの再会で、会話に花が咲く。

「コホン。三人とも、ちょっといいかしら?」

メリッサが三人に声を掛け、注目させる。

「シーザーのテストはこれで全部終了。なのはさんも到着したことだし、バンとフィーネは街に羽休めに行ってもいいわよ。」
「ホントか!?」

漸く休暇が貰えると聞くやいなや、子どもの様にはしゃぎだすバン。

「バンとフィーネ、それにジークには手伝ってもらったから、少しならボーナスも出すわよ?」
「うひょ〜! マジかよ!」

ボーナスまで付いて来ると聞いて、バンのテンションは更に高くなる。

「ここまで喜んでくれるとは…。」
「にゃはは…。あ、そうだメリッサ、訓練用スペースって借りれるかな? 体も動かしたいし。」
「大丈夫ですよ。使用許可を取っておきますから、どうぞ使って下

さい。」
「ありがとう、メリッサ。」
一言だけ感謝の言葉を言って、なのはは部屋を出た。

『第二、第三艦隊、壊滅！』
『第四艦隊壊滅！　敵機が接近してきます！』
『ホバーカーゴ級一番艦、側面に被弾！　被害は軽微です！』

ウルトラザウルスの司令室に寄せられる多くの被害報告。形勢は圧倒的に不利な状況で、暗黒大陸上陸作戦は佳境に差しかかろうとしていた。

「くっ…あと少し、あと少しでいい！　トライアングルダラスに侵入するまで、なんとか持ちこたえてくれ！」

ハーマン少佐が檄を飛ばすが、それで劣勢がひっくり返るかといえば、そうはならない。
ウルトラザウルスを中心に艦隊を護るフェイトにシグナム、それにはやてやヴィータにフォワード陣。そのいずれからも、疲労感が漂い始めている。

「こんちきしょォ！　ここを通す訳には、いかねぇんだ！」
「まだだ！　我が命がある限り、膝を折るわけには！」
「ハァ、ハァ…大丈夫、バルディッシュ？」
『Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ，ｍａｓｔｅｒ』
「フレース、ヴェルグ！　…ああもう！　全然減らんやないか！」
「撃って撃って、撃ちまくるしかないわね、この状況じゃッ！」

だが誰一人として、諦め始める者は居ない。ここを乗り切れば、全滅を免れられると信じ、今自分に出来る事だけを続けていく。

「撃つんだ、ゼロ！　全弾撃ち尽くせェ！」
「ローリングキャノン、一斉射撃開始！」
「テメェら、遠慮すんなよ！　バスターキャノン、たらふく喰らってけェ！」

レイやウィナーのゼロ・パンツァーにバディターのガンブラスター、アーバインのジ・オーガにアルドワーズ中佐のアームドライガーも砲撃を放ち、上空のシンカーやレドラーの群れを撃ち落していく。

だが、それらの隙間を掻い潜り、大量の爆薬を積んだ無人機仕様のザバットがウルトラ目掛けて突撃して来ていた。

「ッ！　テスタロッサ！」
「はい！　プラズマランサー、ファイア！」

フェイトは素早く周囲に環状魔法陣を数個展開し、雷を付加させた魔力弾を一斉に撃ち出す。

数発がザバットの翼に命中して破壊したが、後一歩遅かった。ふらつきながらも勢いは落ちず、ウルトラザウルスの横っ腹に激突して大爆発を引き起こしてしまった。

「うわあぁぁあっ！！」
「キャァアッ！？」

衝撃で船体が大きく揺れ、甲板に居たフォワード陣の足元がふらつく。だが二度も同じミスはせず、再びティアナが海に投げ出される事は無かった。

『ティアナ！　大丈夫か！？』

同じく甲板で、ガンスナイパーに乗っているヴァイスがティアナに通信を送る。

「はい、なんとか…。ってか、陸曹！　ちゃんと対空放火してました！？　あれくらい撃ち落としてくださいよ！」
「…その様子なら、問題ねぇな。」

心配して損した、と言わんばかりに溜め息を吐くヴァイス。

「目標地点まで、あと五キロ！」
「ラストスパートだ、もうひと踏ん張り行くぞ！」

オオー！と、大佐の激に呼応して兵士達が雄叫びを上げる。
ウルトラザウルスは残る力を振り絞り、エンジンを限界ギリギリまで回転させて推進力を引き上げ、生き残っている全ての対空砲も撃ち尽くす勢いで弾をバラ撒く。
敵のレドラーがミサイルを放ち、損傷の酷い右舷を集中的に狙う。

「させるかよッ！　アイゼン！」
『Ｓｃｈｗａｌｂｅｆｌｉｅｇｅｎ！』

ヴィータはピンポン球サイズの鉄球を八つ取り出し、自身の前に展開する。

「いっけぇぇぇえ！！」

グラーフアイゼンを力強く振り回し、ハンマー部分で叩いてミサイルに向け、四発弾き飛ばす。更に返す刀で、残りの四発も同じ様に弾く。

鉄球はミサイルに見事に命中したが、ミサイルの数はヴィータが放った鉄球よりも多く、ピンチは脱していなかった。

「まだまだァ！　おらおらおらおらおらァ！」

ヴィータは先程とは比べ物にならない数の鉄球を展開し、自身の体を軸にあたかもベーゴマの様に回転して鉄球を片っ端から撃ち続ける。

大量の鉄球が、同じく大量のミサイル群とぶつかり合い、爆発していく。

だが、いくらヴィータといえども一度にここまで大量の誘導弾を操り切る事が出来ず、ミサイルを五発も落とし損ねてしまった。

「しまっ…！」

「ＩＳ発動、レイストーム！」

ヴィータが絶望しかけた時、数多の光線が渦を巻くように飛来し、残りのミサイルを迎撃すると共に数機のレドラーをも撃墜した。

「誰だ！？」

ヴィータが光線の発射元を確認すると、そこには中性的な顔つきや体つきをした少女、オットーが立っていた。

「誰だ、とはご挨拶ですね。折角、助けて差し上げましたのに。」
「お前…オットーか！　体はもういいのかよ？」
「お蔭様で、リハビリはこの一週間で完了しました。」

ディードを説得するのが、一番難しかったのですが。と、オットーは後ろを振り向く。そこにはオットーの双子の妹に等しい存在のディードが、愛用の双剣『ツインブレイズ』を持って立っていた。

「私はオットーの事が心配なんです。…前みたいに、大怪我を負ったりしたら…」

ディードは顔を俯かせて言う。
オットーがディマンティスの攻撃で大怪我を負って死にかけた時、ディードは誰よりもオットーを心配し、何故守れなかったと同じ戦場に居たディエチやシャッハを罵倒していた。
それはディードが、オットーと同じ体をベースにして生まれた戦闘機人であり、双子同然の関係だからこその行動だった。

「心配しないで、ディード。僕は大丈夫だから…」
「でも…」
「なぁに、いざとなったら、姉がお前たちを護ってやる。だからそう案ずるな。」

食い下がるディードの背中を軽く叩いてチンクが言う。

「姉様…」
「さて、お喋りはここまでだ。行くぞ、二人とも！」

「「はい！」」

チンクが二人の前に出て両手にナイフを構える。
ディードは甲板を蹴って飛び上がり、上空のレドラーの背に着地する。

『何ッ！？』
「はぁぁあっ！！」

素早く片翼をを切断し、墜落させる。

『クソッ！』

前後からレドラー二機が挟み撃ちを仕掛け、宙に浮くディードを狙ってミサイルを撃つ。

「…遅い。」

ディードは茶色のロングヘアーをはためかせながら素早く回避、ミサイル同士がぶつかって爆発が起きる。

『くっ、こいつ！』
『逃がすか！』
「此方の事を忘れてもらっては困る！」

レドラーのパイロット達はディードを追撃しようとしたが、チンクの爆発するナイフとオットーのレイストームが直撃して翼を折られた。
パイロット達はコックピットハッチを開き、座席ごと勢いよく脱出した。機体は海面に激突し、水しぶきを上げた後に爆発した。

「有難うございます、姉様。」
「これくらい、どうという事はないさ。」

チンクはあくまで当然の事だ、と言う。

『ウルトラザウルスより各機へ。本艦はまもなくトライアングルダラスへ侵入します。格納庫内へお戻りください！』
「ライトニング０１、了解。これより帰還します！」

指示に従ってフェイト達は降下し、ウルトラザウルスに戻っていく。

「フェイトさん！」
「エリオ、キャロ、大丈夫だった？」
「はい、ヴァイスさんやティアナさんのお陰でなんとか…」

フェイトはウルトラザウルスに戻ると、すぐにエリオとキャロの所へ向かい、安否を確かめた。

「そう…、ありがとうティアナ、ヴァイス陸曹。」
「どういたしまして。」
「いえ、私もヴァイス陸曹に助けられた所もありましたから…」

自分は大した事はしていないと言うティアナ。

「いや、お前も良くやってたさ。…つーか、お前その格好で気持ち悪くねぇのか？」
「へ？」

ヴァイスがティアナの今の状態を指摘する。海に落ちた後にシャワーを浴びていないので、体中が海水まみれでベタベタになっている。

更にベタベタの所為で、バリアジャケットが肌に貼り付いており、ボディラインがくっきりしている。

「…シャワー浴びてきます。それと、クロスミラージュを整備に回しておいて下さい。」

「へいへい。」

ヴァイスに言われてようやく気付いたらしく、ティアナは同じく海水まみれの相棒(クロスミラージュ)をヴァイスに預けると、大急ぎでシャワールームに駆けていった。

「やれやれ、忙(せわ)しない奴だなぁ。」

「ヴァイス陸曹…、あの反応を期待してませんでしたか？」

「フェイトさん、分かります？」

「ハァ…、まったく…」

ヴァイスの子供の様な振る舞いに、フェイトはやや呆れて溜め息を吐く。

「テスタロッサ！」

「フェイトさん！」

スバルとギンガ、それにシグナムとウェンディがフェイトの所に走ってきた。

「どうやら、無事の様だな。」

「はい。シグナムも、なんともないみたいで。」

「ああ、あの数は流石に厳しかったがな。」

シグナムは腕を組み、軽く息を吐いてリラックスする。

「あれ？　フェイトさん、ティアは？」

「海水でベタベタするから、シャワールームに行くって。」

「そうですか。じゃあ、私も行ってきます。」

そう言うと、スバルはマッハキャリバーを走らせてシャワールームへ向かった。

『3、2、1……全艦隊、目標地点の通過に成功しました！』

オペレーターの放送が艦全域に通達され、全乗組員が歓喜の声を上げる。

『隊長！　ウルトラザウルスが、トライアングルダラスへ侵入します！』

「くっ…全機、これ以上は追うな！　電磁波に巻き込まれるぞ！」

ブラオの指示で、この海域にいる帝国軍の全戦力が動きを止め、後退していく。

『敵部隊、追撃を中止しました！』
「ようし、よくやった！　第一種戦闘配置を解除してくれ。」
大佐は警戒を緩めるように指示を出し、戦闘がひとまずは終了した事を伝える。
「ふぅ…取り敢えず、一安心かな？」
フェイト達はロビーに移動し、椅子に腰掛けて一息つく。
「安心するのは、まだ早いぜ。」
フェイトが声のした方を見ると、レイとアーバインが立っていた。
「どういうことです？」
「忘れたのかよエリオ、ここは端ではあるが、一応はトライアングルダラスの内側なんだぜ？　不測の事態に注意しろって事だよ。」
アーバインが言う。
トライアングルダラスは中央大陸と暗黒大陸の間に位置している。
実は、両大陸の距離はさほど離れてはいない。寧ろ距離だけで言えば、今回ウルトラザウルスが航海してきたアンダー海の移動距離よりも短いのだ。
つまり、わざわざ西方大陸を経由して遠回りしなければならない程の危険度があるという事である。
ゴゴゴゴゴゴ…
突然ウルトラザウルスが揺れ始め、立ち上がろうとしていたフェ

イト達はバランスを崩す。

「きゃあっ！？」

「うわぁっ！？」

「な、何だ！？」

突然の出来事に驚き、思わず声を上げた。

「さっそく問題発生みてぇだな。フェイトとシグナムは外の警戒を頼む！　ヴァイスとフォワード陣は、俺と格納庫に行くぞ！」

艦の内側と外側の二手に分かれ、それぞれ警戒に当たる事になった。

――ウルトラザウルス第二格納庫。

「大丈夫か、マミ！？」

「センパイ！　この子たち、今にも暴れ出しそうなんです！」

マミや整備班達は機体整備用の大型コンソールを叩き、電磁波に狂わされそうになっている機体を外部からコントロールしようと躍起になっている。

「わかった、すぐに手ェ貸す！　お前ら、コイツを！」

レイはエリオやヴァイス達に、白いディスクを渡した。

「レイの旦那、コイツは？」

「対電磁波用防護プログラム、パルスガードのディスクだ。コックピットに端から乗り込んで、直接インストールしてくれ！」

「了解だ！」

各自ディスクを持って、暴れ出しそうな機体のコックピットに入っていく。

「グレック大尉、コックピットが開きません！」

チンクは何度もプテラスのコックピットハッチの開閉スイッチを押すが、電磁波の所為か何の反応も無い。

「どうせ後で直すんだ、力ずくでこじ開けてくれ！」

「了解。　ランブルデトネイター！」

チンクはレイの言う通りにキャノピーを爆破して中に入る。

その直後、レイの腰に携えた通信機が鳴った。

「グレック大尉！　大尉のライガーゼロが暴走しかけてます！」

「分かった、すぐに行く。マミ、連中を頼む。」

「りょーかい！」

レイは急いでウルトラザウルスとホバーカーゴを繋ぐ連絡橋に向かう。

連絡橋の扉を開けるとーー

「うおわぁっ！？」

ーー外は暴風雨に見舞われていた。
トライアングルダラスで恐ろしいのは、電磁波の嵐だけではない。
中心部に近い場所ではほぼ常に暴風雨が吹き荒れているのだ。
レイは不覚にも、暴風雨の事を忘れていた。

「くそっ、この雨風はキツいぜ…」

連絡橋は組み立ての簡易化の為に屋根が付いておらず、あるのは柵だけだ。

「レイさん！」
「フェイトか！　そっちは大丈夫か！？
「大丈夫…とは言い難いですけど…」

この嵐の中、周囲の警戒に当たっているフェイトが目線を右に遣る。

『パンツ赤いッス！』
「な、何を言っている、レヴァンティン！」
『この頃流行りの女の子～』
「アイゼン！　どうしちまったんだ！？」

声優ネタを乱発するグラーフアイゼンとレヴァンティンと、その様子に慌てるシグナムとヴィータの姿があった。これも電磁波の影響だろう。多分。

「…よくわからねぇが、大変そうだな。無理すんなよ！」

レイは足元に気をつけてなんとか橋を渡ると、一直線に格納庫に駆けていく。

「悪い、待たせた！」

「大尉！　これ以上は抑え切れません、お早く！」

「ああ！」

レイは素早くゼロの頭部に飛び乗り、コックピットを開けて中に入る。

『グォォォオン！！』

「正気に戻れ、ゼロ！　お前はこんな電磁波ごときにやられるようなタマじゃねぇだろうが！！」

レイは艦全体に叫び声を響かせて暴れようとするゼロに呼び掛け、操縦桿を全力で握り締めて抑えつける。

だがゼロが元に戻る気配は無く、左右の壁に体当たりを始めてしまう。

その衝撃は艦全体に広がり、ホバーカーゴが大きく揺れる。

「止めろ、ゼロ！　止めねぇか！」

レイが声を張り上げるが、ゼロの耳には届かない。

「止めろって…言ってんだろうがァァア！！」

いくら説得しても耳を貸さないゼロに激昂し、コンソールに渾身の頭突きを叩き込んだ。

レイの額から、うっすらと血が流れ落ちる。

「止まれ、止まれ、止まれェ！！」

痛みに耐えて歯を食いしばり、二度、三度と自らの額を叩きつける。頭突きの回数を重ねる度、レイの額から流れる血の量が増えていく。

その所為で、ゼロのコンソールは赤く染まり始めていた。

だがレイの気合いを嘲笑うかの様に、ゼロの様子が改善される気配は無い。

「ハァ、ハァ…いい加減にしやがれ……この、ウスラトンカチがァァァア！！」

レイが渾身の叫びと共に再び額を叩きつけようとした時、ゼロの眼が一瞬だけ光を放つ。

すると、レイの腕力に逆らっていた操縦桿が急にニュートラルに戻り、暴走が止まった。

レイは驚き、コンソールまで数センチの所まで迫っていた頭突きを止めた。

「ゼロ…もう、大丈夫なのか？」

『グォォォォオン！！』

心配無用、と言わんばかりに雄叫びを上げるゼロ。

「システム、オールグリーン…ライガーゼロ、正常に戻りました！」

整備士が報告する。

だが、何がゼロを暴走から解放したのか。

レイの頭突きによって、ゼロに物理的にも精神的にも気合いを入れることに成功したからなのか、それとも『ウスラトンカチ』にゼロが反応して、それを否定するために自力で理性を取り戻したからなのか。

いずれにせよ、レイとゼロの絆が無ければ成し得なかっただろう。

「取り敢えず、こっちは一安心か…？」

レイは背もたれに体を預け、力を抜く。

『ビーッ、ビーッ！』

だがその直後、艦全体に警報が鳴り響いた。

「どうした！？」

「本艦前方に、機影を確認！　シグナルは……帝国軍です！」

「何！？　何故こんな所に帝国軍（トライアングルダラス）が居るんだ！？」

ウルトラザウルスの目の前に、紫色の装甲を持った小型海戦用ゾイドが姿を現した。

「見たことが無い型だな…数は！？」

「数は…一機のみです！」
「何だと!?　あれ一機だけか!?」

偵察機、いや、この海域にそんなものを送り込む理由がないし、何のメリットも無い筈だ。大佐は首を傾げて謎の機体の正体を考える。

「大佐、未確認機が信号を発信しています。」
「…内容は？」
「『ツイテコイ』、と…。いかが致しますか？」

帝国軍の機体が、共和国軍の艦隊を誘導しようとしているのだ。普通なら、十中八九罠だろう。だが、腑に落ちない点がいくつかある。

単純に艦隊を潰したいのなら、トライアングルダラスに侵入した時点で放っておけば良いだけだ。通常、この海域を何の対策も無しに通り抜ける事は不可能であり、大抵は身動きが取れなくなってそのまま壊滅、という筋書きが成り立つからだ。

それなのに、前方の未確認機はボロボロのウルトラザウルスを誘導しようとしているのだ。それが脱出不可能なトライアングルダラスの中心なのか、はたまた暗黒大陸なのかは不明だが。

「罠の可能性もあるが…このままじゃ、にっちもさっちもいかないだろうしな…。」

現在、大佐に残された選択肢は二つ。一つは、未確認機に付いて行くこと。もう一つは、誘導に乗らず自力で活路を見出すことだ。後者はまず不可能に近い。下手をしなくとも、活路を見出す前に壊滅してしまうだろう。

そう考えると、一択になってしまった。

「…各員へ通達、本艦はこれより、未確認機の後を追うこととする！　未確認機へ返事を出してくれ！」

この選択が、吉と出るか凶と出るか。

未確認機は返事を受け取ると、反転して誘導を始めた。

第五十五話　突入、トライアングルダラス（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第五十六話　告白（前書き）

最近、自宅のある市内中の古本屋をよく見るのですが…上山版ゾイドの五巻が見つからない…。なんとか四巻までは買ったんですが…。まあ、四巻まで買えたのもある意味ラッキーでしたが。

第五十六話　告白

時は少し遡り、ウルトラザウルスのシャワールームで、ティアナが海水まみれになった体を洗い流していた。

（あ～、まだベタベタする…）

普段はツインテールにしているオレンジ色の髪の毛を、シャンプーを用いて重点的に洗う。

（それにしても…ヴァイス陸曹に言われるまで気付かなかったなんて……）

先程、自分の体にバリアジャケットが海水でへばり付いていた事を思い出す。おそらく、海水の所為でインナーが僅かなりとも透けていただろう。それをフェイトやスバルに見られても、別にどうということはない。だが、ヴァイスは別だ。

（ヴァイス陸曹には…見られたくなかったわね…）

うなだれるティアナ。自分の格好をいやらしい目で見られたくなかったからなのか、それともヴァイスにみっともない姿を見せて幻滅されたくなかったからなのか。

もしも後者だとしたらーー

「アタシ…もしかしてヴァイス陸曹の事が…」

ーー好きなのかもしれない。ティアナの脳裏にその一言が浮かんだ。

「……まさかね。アタシがヴァイス陸曹の事を？　ないない。」

ティアナは自分で否定する。

「ヴァイス陸曹はあくまで…そう、兄貴分。アタシ達フォワード陣の。…頼れるかどうかは別にして。だから、好きなんて事……」

蛇口を捻ってシャワーの勢いを上げ、小声でブツブツと言う。

「ティア～♪」
「ひゃあっ！？」

いつの間にか背後に居たスバルが声を掛け、ティアナは一瞬だけ体を震わせて驚く。

「ス、スバル！？　アンタいつから…」
「えっと…ヴァイス陸曹の事が…って辺りからかな？」
「…じゃあ、だいたい聴かれちゃったって訳ね。」

ティアナは溜め息を吐いてシャワーを止め、シャワールームを出る。

すると、スバルから念話が送られてきた。

（…ティア、相談なんだけどさ、良いかな？）
（相談？　良いわよ。）
（えっと…私の身体の事なんだけど、やっぱり共和国のみんなにも、ちゃんと打ち明けた方がいいのかな？）

ティアナは体をタオルで拭きながら、スバルの話を聴く。

（これじゃあ、せっかく私達の事を信頼して戦ってくれてるのに、なんか騙してるみたいで…）
（…帝国に味方するナンバーズが、アンタと同じ戦闘機人だから？）
（……うん…）
（……）

二人の間に暫しの沈黙が流れる。

（…そんなの、いつかは言わなくちゃならなくなるわよ。）

ティアナは衣服用の籠から下着を取り出し、身に着けながら言う。

（大体、なのはさん達にアンタが戦闘機人だったって知れた時、どうだったか思い出しなさいよ。アンタを化け物扱いした？）
（…してなかったけど、共和国のみんなはどう反応するか分かんないよ…）

声から判断するに、スバルの気持ちは沈んできている様だ。

（ふーん、そう。じゃあ、アンタはレイさんやバンさん、それにボーグマン大佐の事も信頼してないの？）
（そ、そんな事…！）
「だったら、ウジウジしてないで覚悟決めなさいよ！」

シャワールームの扉を勢い良く開き、念話ではなく、自らの口でスバルに言い放つ。

「ティ、ティア！？」

ティアナのあまりの剣幕に、スバルは少し戸惑った。

「確かに、アタシ達は惑星Ｚｉに来て間もないし、レイさん達との付き合いも短いけど…少なくともレイさんは、アンタが戦闘機人だって知って幻滅するような小さい人間じゃないと思うわ！」

ティアナはスバルの両肩を掴み、スバルに訴えかける。

「それに、アンタが迷ったままだったら、勝てる勝負も勝てなくなるんだから…」

「ティア…」

あくまでも勝つため、と強調するティアナだが、本心では長年の相棒であるスバルを心から心配しているのだ。だが、負けず嫌いな性格の所為で、素直になりきれないのだが。俗に言う、ツンデレと呼ばれる所以（ゆえん）である。

「ん…ありがと、ティア。」

「…うっさい。」

微笑んで感謝するスバルだが、嬉しさを隠すため、ティアナは憎まれ口を叩く。

「うん、決めた！　明日、みんなに話すよ。」

「そう。でも、まずはこのトライアングルダラスを抜けない事には、明日すら怪しいもんよね。」

「あはは、そうだね……ッ！？」

ティアナは踵を返して、また濡れた体を拭こうと脱衣場に戻ろうとした時、後ろでゴトリ、という感じの物音がした。

ティアナが振り返ると、そこには先程までの元気さが微塵も感じられない、倒れたスバルの姿があった。

「ちょ…スバル！？　どうしたのよ突然！」

「あ…あれ…？　なんか、力が入らな…」

ティアナはすぐにスバルの元へ駆け寄った。意識が朦朧としているのか、言葉の歯切れが悪くなっている。

助けを求めるため、ティアナはシグナムに念話を送る。

（シグナム副隊長、こちらティアナ！）

（シグナムだ。どうした、落ち着け！）

（スバルの様子がおかしいんです！　大至急、シャワールームまでお願いします！）

（了解した。すぐに行く、待っていろ！）

念話が切れる。ティアナはスバルを持ち上げ、脱衣所まで慎重にゆっくりと運ぶ。

「いったい、どうなってんのよ！」

ティアナは小声で悪態をつき、相棒の無事を案ずる。

だが、異変が起きていたのはスバルだけではなかった。

「ふう…これでしばらくは何とかなるよ。ありがと、ギンガ、チンク達。」
「これ位、礼には及ばんさ。」
「そうそう、困った時はお互い様ッスよ。」
「お役に立ててよかったわ。」

マミやチンク達は、格納庫の全機体にパルスガードをインストール及びバージョンアップを終えた所だった。

「じゃあさ、皆はそろそろ休憩しなよ。さっきまで表で戦ってくれてたんだし。」
「そうだな、そうさせてもら…ッ!?」

チンクはコックピットから格納庫の床に降りたと同時に、両手で頭を抱えて膝を突いた。

「チンク!?　どうしたの!?」
「く…気にするな、これ位なんとも…」
「嘘だよ、顔がこんなに真っ青じゃない!」

チンクの突然の急変ぶりに、マミを始めとしたその場の全員が騒然とする。

「チンク姉!?　どうし…ッ!」

姉であるチンクを心配したウェンディも同様に、ライガーのコックピット内で頭を押さえて苦しみだす。

「あ…頭が、痛いッス…！」
「うぅ…僕も、頭痛が…！？」
「く、苦しい…！？」
「これは…一体…！？」

さらにオットーにディード、加えてギンガも、チンクやウェンディと同様に頭痛を訴え始めた。

「ど、どうなってるの！？」
「チッ、医療班！　大至急来てくれ！」

ヴァイスが通信機で医療班を呼ぶが、マミは目の前の光景に思考能力を失い、ただ混乱するだけだった。

そして現在、ウルトラザウルスは謎の帝国ゾイド『マッカーチス』に導かれ、トライアングルダラスの安全ルートを航行している。それと同じくしてスバル達の頭痛も治まり、現在は医務室で眠っている。

「もう、心配無いわ。ゆっくり休めば良くなるでしょうね。」
「ありがとうございます、先生。」

ティアナは医師に礼を言い、医務室を出る。
するとドアの前の壁に、アーバインが寄りかかっていた。ティアナが出て来るのを待っていた様だ。

「よう、スバル達は？」
「…もう大丈夫だそうです。ご心配をおかけしました。」
「そうかい。じゃ、すぐにブリーフィングルームに行くぞ。大佐が呼んでんだ。」

アーバインは軽く手招きし、ティアナを連れて歩き出した。

ブリーフィングルームに着くと、レイやマミ、なのはやフェイト等の主力メンバーが集まっていた。

「やっと来た。遅いわよ、アーバイン。」
「悪いな、ティアナがチンタラしてたからよォ。」
「アタシの所為ですか…」

別に待っててくれなんて頼んだ覚えは無い、と言わんばかりにティアナは溜め息を吐く。

「これで揃ったな？　では、始めるぞ。」

招集したメンバーが揃ったのを確認すると、軽く二、三度の咳払いをして話し始める。

「今回集まってもらったのは、スバル達の事についてだ。俺も聴いてしかいないから多くは分からんが…五人とも、ほぼ同じ時間帯に頭痛を訴えたそうだな？」

「はい…。それまでは元気だったのに、突然苦しみだして…ボクもどうすれば良いか分からなくて…。ヴァイス陸曹が居てくれたから良かったんですけど…」

マミが落ち込んだ声で答える。とっさに何も出来なかったのが響いているらしく、いつもの元気が無い。

「なのは、過去に似たような事は？」

「いえ、これといって特には…」

なのはは小さく首を振って答える。

「大佐、ちょっといいッスかね？」

アーバインが手を挙げて発言する。

「どうした？」

「スバルやギンガ、それにお譲達が苦しみだしたってのと同じ頃に、俺の左目の調子もおかしかったんですよ。」

「左目？　そうだった、お前の左目は特殊なんだったな。」

「？　アーバインさん、左目が特殊っていうのは…？」

アーバインの隣に座っているエリオが訊ねる。

「ちょうどいいや、見せてやるよ。」

アーバインは左目を覆っている、サングラスと同構造の眼帯に指を掛けて引っ張る。

「あ、アーバインさん…それって…！」

エリオはアーバインの左目を見て衝撃を受けた。本来、人間の眼球があるはずの場所にはそれが無く、代わりにゾイドの眼で作られた義眼が埋め込まれていた。

「ガキの頃、ちぃとヘマしちまってな。おかげでこのザマだ。」

別に苦労はしてねぇがな、と付け加え、再び眼帯を着ける。

「大佐、アーバイン中尉の眼に異変が起きた原因…恐らく、電磁波の影響かと思われます。」

バディターが席から起立して言う。

「アーバイン中尉の眼は、ゾイドの物が使われていると聞きます。それならば、格納庫のゾイド達と同じように暴走の一種だったと判断できます。」

「なるほどな…。確かに、アーバインの義眼にはパルスガードどころか、トライアングルダラスを想定しての処置なんぞ出来そうにないな。」

大佐はバディターの意見に納得する。

「では、中尉の義眼が電磁波の影響で狂いかけたという事は…もしかして、ナカジマ二士達も同様に…？」

ふと思った事をアルドワーズ中佐が発言し、ティアナや六課メンバーが反応する。

「おいおい、いくら魔導士だからって、生身の人間が電磁波なんかに…」

「…いえ、間違っていないかもしれません。」

大佐が否定しようとしたとき、ティアナが立ち上がって言う。

「…どういうことだ、ティアナ・ランスター二等陸士？」

大佐の表情が、真剣な面持ちに変わる。

「スバルは……帝国に与するナンバーズと同じ、戦闘機人だったんです。」

「なんだと…！？」

「スバルだけじゃありません。その姉のギンガ・ナカジマ陸曹にチンク、オットーにウェンディ、ディードも戦闘機人です。特に、チンク以下は元ナンバーズでした…」

ティアナの言葉をきっかけに、ブリーフィングルームがどよめきに包まれる。

つい先刻まで信頼して戦っていた仲間が、実は六課が追っているスカリエッティによって造られたという事実は、共和国メンバーに衝撃を与えるには十分過ぎたようだ。

ティアナもこの反応は予想範囲内だった。だが、問題はこの後、レイ達のスバル達に対する風当たりがどうなるのかというのかが、

スバルが最も気にしていた所だ。

「…ティアナ、何故黙っていた？」

大佐は真剣な表情で訊く。

「…スバルは自分の正体を明かす事で、これまでの信頼関係に亀裂が出来るのを恐れていました。…ですから、私もスバルの考えを尊重して黙っていました…申し訳ありません。」

ティアナは大佐に向かって、深く頭を下げる。

「ですが、シャワールームで倒れる前に自分で告白するとは言っていた事は、記憶に留めていただけると…」

「…そうか、大体の事情は分かった。顔を上げてくれ、ティアナ。」

大佐はティアナに顔を上げさせる。

「…くだらねぇ。」

ティアナの後ろから、誰かが言う。ティアナが後ろを向くと、パイプ椅子から立ち上がって仁王立ちしているレイの姿があった。

「スバルやギンガ達が戦闘機人？　だからなんだってんだ。アイツらは、俺達と一緒に戦ってきた仲間だ。その事実に変わりはねェ。そうだろ？」

レイは全員の注目を一身に集め、言い放つ。

「みんな、聞いてくれ。俺はスバルが戦闘機人だろうが、なのはが

管理局の白い悪魔だろうが関係ねぇ。問題なのは、俺達が互いに信じ合っているかが大事なんだ！　もしスバル達を仲間だと認めねぇって奴が居たら、俺の前に来い！　意地でも認めさせてやるからよ！」

「レイさん…！」

ティアナはレイの言葉に感動した。今までにスバルが戦闘機人だと告白した時、後に仲間だと認めても、ほんの少しだけでも好奇の目で見るものは少なくなかった。

だが、レイは一瞬でもスバルへの見方を変えなかった。それは、スバルを心の底から信じていたからだろう。

「レイの言うとおり、スバルは俺達と何も変わらない人間で、大切な仲間だ。そうだろう、みんな？」

「そうだな。少なくとも、化け物なんかじゃねぇさ。」

「そうよ。スバルちゃん達は、私達の大切な仲間だもの。素性が何だろうと、仲間外れなんかにはしないわよ。」

「スバルとは何度も助けあったんだし、今更スバルが何者だって関係ないよ。」

「俺も賛成ッス。寧ろ、体に機械が入ってるなんてちょっとカッコ良いッス！」

「ウィナーは単純で良いですね。…いや、するとナカジマ二士はサイボーグという事ですよね？　技術者として、分析したい気も…」

「だーから、そういう考えがダメだって言ってんだよ！」

ハーマンを始めとして、アーバインにマリン、ウィナーとバディターも賛同するが、バディターが暴走しかけたのでウィナーがそれを諫める。

その様子を見た他の面々も次々と肯定的な意見を言い続け、ブリーフィングルームは満場一致で、改めてスバルを仲間だとした。

「ティアナ。もう、お前やフェイト達だけが背負わなくてもいいんだ。なんせ、俺達は仲間なんだからな。」

大佐は一度言葉を切り、全員に向き直る。

「みんな、俺達共和国軍は改めて、スバルにギンガ、他の姉妹達の事を歓迎するぞ！」

ブリーフィングルームが、拍手の渦に包まれる。

「大佐…、皆さん…ありがとうございます！」

六課メンバーは立ち上がり、共和国メンバー全員に向かって深々と感謝の言葉を述べた。

すると、ブリーフィングルームのモニターに、ブリッジから通信が入ってきた。

『大佐、あと数分でトライアングルダラスを突破します。』

「分かった。皆、聞いての通りだ。もしかしたら、初っ端から戦闘にならんとも限らん。各自、機体のコックピットにて待機！」

『了解！』

レイ達はブリーフィングルームを出て、各々の愛機の元へと向かっていった。

（…スバル、みんなはアンタやギンガさん達を認めてくれたわ。今はゆっくり休んでて。）

ティアナは未だ眠る相棒に念話を送る。それが聞こえていようが

いまいが、そんな事は関係無い。ただ少しでも早く、スバルを安心させたかったのだろう。
その時、医務室のスバルの表情がほんの少しだけ、緩んだ気がした。

『ウォォォォオン！！』

苦しみから解放されたとも言いたげなウルトラザウルスの雄叫びと共に、共和国艦隊は、遂にトライアングルダラスの突破に成功した。

「俺達を先導してくれた機体に、通信を繋いでくれ。礼を言わなきゃな。」

マッカーチスに通信を申し込むと、意外にも応じてくれた。こういう時は機密保持のために応じない事が多いからだ。
モニターに『Ｓｏｕｎｄ　Ｏｎｌｙ』の文字が浮かぶ。流石に顔は出したくないらしい。

「ウルトラザウルス艦長、アーサー・ボーグマン大佐だ。この度は我々の危機を救って頂き、感謝する。」
『…礼には及ばん。こんな所で倒れられても困るのでな。』

「…何？　どういう意味だ？」
『……』
マッカーチスのパイロットは質問に応答せず、黙り込んでしまう。
「おい、何とか言ったらどうなんだ！？」
「止めろ、ロブ。話したくないなら、無理に話させる事はない。」
「はっ…し、失礼しました…」
ハーマンは興奮しすぎたと、自分を反省する。
『…安全に上陸出来る場所まで、誘導する。よろしいか？』
「…ああ、宜しく頼む。」
「た、大佐！？　よろしいのですか、彼を信じて！？」
ハーマンは驚いて大佐に訊く。大佐は通信に声が入らないように、小声でハーマンに耳打ちする。
「もし俺達を沈めるのが目的なら、そんな事はトライアングルダラスで出来たはずだ。…まぁ何か、裏があるのは確かだろうがな。」
今回は敢えて、それに乗ってやろうじゃないか、と付け加える。
「了解した。其方のご好意に感謝する。」
『…では、付いて来ると良い。安心しろ、騙し討ちはしないと約束する。』
パイロットがそう言うと通信が切れた。
「…ロブ、念の為にお前もケーニッヒで待機していてくれ。」

「…！　了解！」

ハーマンはブリッジを離れ、新たな愛機であるケーニッヒウルフの元へ向かう。

大佐はマッカーチスのパイロットを完全に信用した訳ではなかった。もしかしたら、万が一という事も十分にあり得るのだ。指揮官として、慎重に動くに越したことは無いだろう。

（さて…鬼が出るか、蛇が出るか…）

大佐は両腕を組んで、たとえ表面だけでも堂々とした姿勢を取る。暗黒大陸は、最早目と鼻の先。大海は青く穏やかだが、大佐や艦隊のクルー、フェイトやレイ達の心中はその間逆と言っていい程、緊張状態に陥っていた。

「…？　…あれは！？」

そんな中、いつでも出撃出来るように甲板に出たフェイトが、ある物を見つける。

「どうした、テスタロッサ？」

「シグナム、あれを！」

フェイトの後に付いて甲板に出たシグナムも、フェイトが指差す方角を見る。

「な…黒煙だと！？　大佐！」

「ああ。こちらでも確認した。」

大佐は再びマッカーチスに通信を試みる。

「パイロット君、どういう事だ？　君が指定した場所で、何が起きている！？」
『…さあな。気になるなら、偵察部隊でも送ったらどうだ？』
「なんだと！？」
「大佐！　私とシグナムで偵察に出ます！　よろしいでしょうか？」
フェイトが通信に割り込む。
「…よし、頼めるか？」
「はい。ライトニング０１、フェイト・Ｔ・ハラオウン、出ます！」
「ライトニング０２、シグナム、出る！」
フェイトは金色、シグナムは紫の軌跡を残しながら勢いよく飛び立ち、黒煙が立ち上る場所まで高速で飛行して行った。

第五十六話　告白（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第五十七話　鉄竜騎兵団（アイゼン・ドラグーン）

帝国首都ヴァルハラの最南端に位置する、帝国軍首都守備隊基地内部のデータルーム。そこにはヴァルハラから送られてくる帝国の情勢や大小様々なニュース、企業の株価や一週間の天気予報までもが蓄積されている。

そんな場所に、シュバルツ中佐の命を受けてプロイツェンやスカリエッティ関連の情報を引き出そうとする、クーリム・リン少佐の姿があった。

指示自体はしばらく前に受けていたのだが、誰も来ないような時間帯と状況を確保するために時間が掛かってしまったのだ。因みに、この部屋は深夜には頑丈なロックが掛けられて出入りが出来なくなる為、昼間か夕方位しか入れない。

現在、部隊の大半は基地から東に位置する平原に演習に出ている。その部屋からリン少佐がヴァルハラのデータベースにアクセスすると、当然の如くプロテクトが掛かっており、パスワードの提示を求められる。

「パスワード…シャン軍曹、宜しく。」

「はいはーい。」

今回、リン少佐は自分の隊で最も情報工学に精通している、ズィーガー・シャン軍曹を同行させていた。

シャン軍曹はディスプレイにノートパソコンを接続、キーボード上を両手の指がダンスするかの様に素早く動き回り、コンピューターに『正しいパスワードが入力された』と誤認させる事で、ロックを解除した。

「まずは、ジェイル・スカリエッティ……生命操作や生体改造に精

通…医学の心得も有り…。それに…広域次元犯罪者、か…やっぱりロクでもない奴だったわね。シャン軍曹、データを記録しておいて頂戴。」

「はいはーい♪」

ズィーガーは鼻歌を歌いながらキーボードを叩く。

「次はギュンター・プロイツェン閣下だけど……」

リン少佐はモニターにプロイツェンのプロフィール等、詳細なデータを表示する。その中で、リン少佐は何気なく、経歴の項目に目を移してみた。

「…嘘でしょう…！？　もし、これが真実なら…！」

その情報を見た瞬間、リン少佐は驚愕し、同時に自分がとてつもない事実を知ってしまった事に気がついた。

「（早くシュバルツ中佐にお知らせしなければ…）…ありがとう軍曹、助かったわ。」

「いえいえ…。此方こそ、ありがとうございました、少佐♪」

リン少佐がズィーガーの方を向いた瞬間、自分の顔に軍支給の拳銃が向けられている事に気付いた。

「な…！？　どういうつもりなの、ズィーガー・シャン軍曹！　上官にこんな事をして…悪ふざけじゃ済まないわよ！？」

「リン少佐こそ、どういうつもりです？　データベースへの不法アクセス、加えて軍部最高機密の無断での持ち出し…。これはプロイツェン閣下に…帝国に対する重大な反逆行為ですよ？」

ズィーガーは笑顔のまま、淡々とした口調で言う。

「なっ…、それを言うなら、私に協力したあなただって……まさか…！」

「ええ。僕は少佐に協力した覚えはありません。…あなたに不穏な動きがあると判断されたプロイツェン閣下が、その証拠を掴む為、僕を派遣しました。」

「…成る程。つまり、貴方はおとり捜査官で、私の動きは筒抜けだったという事ね？」

「まぁ、そんな所です。…さて、このまま大人しく僕と来て頂けませんか？　そうすれば、手荒な真似は致しませんが…」

ズィーガーはリン少佐の額に銃口を近付け、最後の警告を告げる。

「…そう。それなら――」

次の瞬間、リン少佐の顔がズィーガーの視界から消失した。

「な……！　うわっ！？」

その直後、ズィーガーの体は左に傾きながら一瞬だけ宙に浮き、そのまま転倒する。リン少佐が素早く体勢を低くした後、ズィーガーに足払いを仕掛けたのだ。

更に少佐は扉まで素早く移動し、備え付けられていた消火器を手に取ると、その中身を部屋中に散布した。

「ゲホッ、こ、こんな目眩ましぐらいでッ！」

ズィーガーは消火剤に咳き込みながらも、なんとか視界を確保し

ようと腕を振り回して消火剤を掃おうとする。
その隙にリン少佐は部屋を脱出し、自分の機体が置かれている格納庫に向けて走り出した。

「こちらライトニング０１、目標地点に到達しました。」
『ウルトラザウルス、了解だ。状況はどうか！？』
「それが……帝国軍守備隊は全機沈黙…壊滅状態です！」
『何だと！？』

守備隊が壊滅。そんなバカな。大佐の頭脳は訳が分からず、混乱していた。だからと言って、自分を攻撃はしないが。

「そちらに映像を送ります。バルディッシュ。」
『Ｙｅｓ　ｓｉｒ.』

フェイトはバルディッシュを通じて、ウルトラザウルスのブリッジに映像を送る。
船体がほぼ真ん中で、某豪華客船の様に真っ二つに折れ曲がり炎上するレヴィアタン級。煙と炎を上げながら、小さな爆発を繰り返しては朽ちていくホエールキング。手足はもぎ取られ、引き裂かれ、砕け散ったジェノザウラーやレッドホーン。
その光景は、まさに地獄絵図そのものだった。

「…これは酷いな…」
「加えて、十二時の方向に帝国軍の部隊を確認しました。規模は…一個師団程度です。」
続けてシグナムが報告する。
「大佐、いかが致します？」
オペレーターが大佐に訊ねる。
この状況は大佐も判断に苦しむ。帝国軍内部で仲間割れが起きたのか。それとも、この残骸が共和国軍に自分たちは味方だと思わせ、油断させて誘き寄せる為の罠なのか。どちらにせよ、十分に注意は払わなくてはならないだろう。
「…総員、第一種戦闘配置だ。俺もブレードライガーで出る。全機、出撃準備を万全にしておけと伝えてくれ！」
「了解！」
大佐は艦長席を離れ、格納庫へ向かう。
『総員、第一種戦闘配置！　繰り返す、第一種戦闘配置！』
艦内にアナウンスが響き渡り、持ち場に着いていたクルー達が一斉に動き出す。
ウルトラザウルスの右舷カタパルトがスライドを始め、ウルトラの右斜め前に展開される。カタパルト上に、マミのストームソーダーが姿を現した。
「レーダー及び高度計、コンバットシステム、オールグリーン…」

『ブリジット機、発進どうぞ！』
「了解！　マミ・ブリジット、ストームソーダー、行きます！」
ストームソーダーはカタパルトから勢い良く発射され、大きな銀色の翼を広げて飛翔した。
『クレイジー０１より各機へ。状況がハッキリしていない以上、下手に攻撃はするなよ！』
『了解！』
ウルトラザウルスやネオ・タートルシップから、次々と飛行型ゾイドが飛び立って行き、その間に艦隊はエントランス湾に進入していく。
『大佐、後続の艦隊がエントランス湾に進入しました。』
『地上部隊を順次出してくれ。』
『了解。グレック大尉、キッド少尉、発進どうぞ！』
「了解だ！　レイ・グレック、ライガーゼロ。行くぜ！」
「ウィナー・キッド、ライガーゼロ！　ＧＯ！」
ホバーカーゴのカタパルトから、レイとウィナーのゼロが勢い良く飛び出して岸壁に着地した。この瞬間、遂に共和国軍は暗黒大陸の大地を踏むことに成功したのだ。
「よっしゃあ！　やったッスよレイ大尉！　俺達、暗黒大陸に一番乗りッスよ！」
ウィナーは自分が偉業を成し遂げたと言わんばかりにテンションを上昇させる。

「はしゃぐなっての！　…気持ちは分かるけどよ。」

レイも暗黒大陸に到達した喜びを叫びにして表したかったが、この状況で下手な事をするわけにはいかない為、心の中にしまっておくことにした。

「マミ！　連中の動きは！？」
「それが…こっちが結構近くまで飛んで行っても、迎撃しようっていう動きが無いんです。」
「なんだって？」

レイは頭上に疑問符を浮かべる。

「じゃあ、敵じゃ無いって事か？」
「それだったら、向こうだって何かしらの通信を入れてくると思うんだけど…」
「だよなぁ……」

フェイトがレイのゼロのコックピット近くまで降りて来て言った。

「いずれにせよ、帝国の守備隊を片付けちまった連中だ。かなりの戦力があるんだろうよ。」

大佐のブレードライガーＡＢが、レイやウィナーの後ろから歩いて来る。

「…そうッスね、じゃあ暫くは様子見を……」
『グルルル…』

ふと、レイはゼロの様子がおかしい事に気付く。

「…ん？　どうした、ゼロ？」

ゼロに問い掛けると、コックピット右のスクリーンに映像が映し出される。そこには、ゼロと同じように白い装甲を身に纏った、新型のティラノサウルス型ゾイドが映っていた。

「コイツは…ニクシー基地の奥に居たヤツか！？」

レイは確信した。基地の地下で見た黒い本体を装甲で覆おうとも、ゼロが睨み付けている事を考えれば、あの機体は間違いなくヴォルフが乗って撤退していった機体だ。

「大佐！　あの恐竜型…恐らく、ヴォルフ・プロイツェンの機体です！」

「何ィ？　なら、あの部隊はＰＫ師団か？」

だが、ＰＫ師団の象徴であるスズメバチのエンブレムは付いておらず、代わりに赤い龍を象ったエンブレムが描かれていた。

『ボーグマン大佐、バディター・ロウエン伍長です。』

ウルトラザウルスのブリッジで待機しているバディターから通信が入った。

『たった今、前方の未確認部隊の通信を傍受、記録に成功しました。』

「そうか、よくやった！　すぐに流してくれ。」

『了解。』

バディターは記録した通信を、共和国軍の回線に流した。

『……我…、鉄竜騎兵団（アイゼンドラグーン）……帝国…為……』

所々ノイズが混入している為、全て聞き取れないが、重要な部分は記録できていた。

「鉄竜騎兵団……奴らの部隊名と考えて良さそうだな。」

大佐がそう言った直後、艦隊を先導していたマッカーチスがライガーの横を通り抜け、鉄竜騎兵団に向けて走り出す。

「大佐！　あのザリガニ、鉄竜騎兵団に合流するみたいですよ！？」

マミが大佐に伝える。

「放っておけ、この状況で追撃したってロクな事にはならん。」

「…寧ろ、我々を見逃してくれる様だ。」

シグナムの言う通り、鉄竜騎兵団はマッカーチスが合流するとすぐに踵を返して後退していく。その時、バーサークフューラーは最後までレイのライガーゼロと睨み合っていた。

（……ヴォルフ・プロイツェン…あれに乗ってたなら多分、俺の事に気付いてただろうな…）

ヴォルフは恋人の敵（かたき）を目の前にして、敵討ちも出来ずに後退して行った。その心中は恐らく、想像出来ない程の憎しみに包まれていたのだろう。

場所は再び帝国首都守備隊基地に戻る。
リン少佐はようやく自分の機体、ダークホーンが置かれている格納庫に到着した。

「少佐！　ご無事で！」

格納庫には、リン少佐の部下六名が自分達の上官を待っていた。

「あ、あなた達!?」
「ご安心を。我等はリン少佐を心よりお慕いしております！」
「ささっ、此方へ！　少佐のダークホーンはいつでも出撃できるよう、整備しておきました！」
「あなた達…！」

リン少佐は嬉しかった。信頼して連れて行ったズィーガーには、自分はプロイツェン派であると告げられ、もうこの基地には味方は居ないと思っていた。だが、それは思い違いであり、まだ自分を慕ってくれている部下が居る。それが少佐にとっては、この上ない喜びであった。
少佐の瞳に、思わず涙が浮かぶ。

「…ありがとう、本当にありがとう…！」

「少佐、涙をお拭き下さい！　すぐに追っ手が来ます！」

リン少佐は部下から手渡されたハンカチで涙を拭うと、急いでダークホーンのコックピットに滑り込んだ。

部下達は、ダークホーンを囲む様に並べられたレブラプターに乗り込んでいく。

「やるわよ、ダークホーン！」

ダークホーンの目が黄緑色に光ると、背部に搭載されたビームガトリングが回転を始め、銃口から無数の光線が放たれた。

ビームは全弾が格納庫のハッチに直撃、爆発を伴って破壊する。

その穴から、ダークホーンを先頭に六機のレブラプターが基地から脱出した。

「ハァ…ハァ…クソッ！　逃げられた！」

一足遅く、ズィーガーが息を上げて走ってきた。どうやらデータルームから全力疾走してきたらしい。

息を整えながら、懐から通信機を取り出す。

「コンチョ、僕だ。リン少佐に逃げられた。」

『おいおい、何やってんだよ。「僕に任せてくれ」って言ったのは誰だったっけェ？』

通信機の向こう側から、コンチョと呼ばれた男が呆れたような口調で言う。

『ま、弁明があれば聴くぜ？』

「…リン少佐が、軍隊格闘の達人だったってのを忘れてたんだよ。

…そんだけ。」

『了解した。ま、次取り戻してくれりゃあ良いとして……追撃、頼むわ。』

「ああ。自分のケツは自分で拭かなきゃ――」

ズィーガーが自分のヘルディガンナーに向けて歩きだそうとした時、何者かが通信に割り込んできた。

『……その機体の始末、僕に任せてくれ。』

「…！！　その声、まさか…！！」

基地から南へ数十キロの地点に、平原を走るダークホーンと六機のレブラプターが居た。

「追っ手は…まだ来てないみたいね。今のうちに、中佐のいらっしゃる基地に急ぐわよ！」

『了解！』

ダークホーンは更に加速し、レブラプターもそれに合わせて加速する。

「…！　４時の方向に機影を確認！」

「…来たわね！　数は！？」
「それが…一機のみです！」

その数秒後、レーダーが感知した通りに4時の方向から、漆黒の装甲と八枚の翼を持ったバーサークフューラーが姿を現した。

「黒い…バーサークフューラー…！？」
「クーリム・リン少佐、こちらレイブン大尉だ。直ちに武装を解除し、投降しろ。そうすれば、命までは取りはしないさ。」

黒いバーサークフューラーに乗るレイブンから、リン少佐のダークホーンに警告が告げられる。

「少佐、投降してはなりません！」
「我々が時間を稼ぎます！　その間に離脱を！」

ダークホーンの後方を守っていたレブラプター二機が、上空のバーサークフューラーに対空機銃を掃射する。

「……抵抗の意志ありと判断。これより、攻撃を開始する。…行くよ、シャドー。」

黒いバーサークフューラーの瞳が怪しく光り、レブラプターの対空攻撃をかわしながら地上に降りる。

「…ルシファーブレード、展開。」

機体の各部に搭載された翼を広げ、先端から光の刃が現れる。

「…斬り刻め。」

レイブンが呟いた直後、ホバリングしながら背中のブースターを点火させて急加速、すれ違いざまに二機のレブラプターを一瞬で鉄屑に変えてしまった。

「な…！　なんて速さなの！？」

リン少佐はレイブンのバーサークフューラーの圧倒的な力の前に、恐怖心を覚える。

少佐が以前、ゴジュラスと戦った時やエース級のパイロットと戦った時も、その力の前に臆することはあったが、今回の様に恐怖する事は無かった。つまり、この機体にはそれまで少佐が戦ってきた相手が、持っていなかった物を持っている事を意味していた。

少佐はダークホーンの足を止め、旋回させる。

「少佐！？」

「あの機体を放置していては、私達が全滅しかねないわ。撃破が出来なくても、戦闘不能までは漕ぎ着けるわよ！」

『ア、了解（アイ・マム）！』

残りのレブラプターも足を止めて旋回し、口腔内の機銃をバーサークフューラーに向ける。

「ふぅん…、僕とシャドーを倒すつもりみたいだね。」

「…全機、攻撃開始！」

リン少佐の合図と共に、ダークホーンのビームガトリングとレブラプターの機銃が一斉に火を吹いた。

物凄い量の弾幕が、バーサークフューラーに向けて降り注ぐ。

「…甘いね。」

レイブンが呟く。次の瞬間、バーサークフューラーは脚部スラスターを全開にし、驚異の加速力で弾幕を回避、その勢いのまま、ルシファーブレードでダークホーンとレブラプターの間を斬り抜けた。

「キャァァアッ！！」

「うわぁぁあっ！？」

残りのレブラプターは先程と同じくバラバラに斬り刻まれ、ダークホーンはビームガトリングの砲身ごと、右足を前後とも破壊された。

「そんな…！　強すぎる…！！」

「…フン、所詮は雑魚か。『シャドーエッジ』の戦闘テストにもなりゃしない。」

シャドーエッジはスラスターを噴かせてダークホーンの真上、上空５０メートル地点まで飛び上がる。

「…これで終わりだ。……死ね。」

シャドーエッジの口が開いて収束荷電粒子砲が現れ、尾と頭部を一直線に伸ばす。

暫くの充填時間の後、無抵抗なダークホーンの背中に荷電粒子砲が放たれた。

「あぁぁぁぁあッ！！」

リン少佐の叫びがコックピットにこだまする。

ダークホーンの黒く硬い装甲はみるみるうちに融解し、ゾイドコ

アごと機体を貫いて爆発を起こした。

「…申し訳…ありません……中佐……」

コックピットでも小さな爆発が連続して起こり、リン少佐は薄れゆく意識の中で、自身の任務を遂行出来なかった事をシュバルツ中佐に謝罪する。

そして、最後に機体を飲み込む程の大爆発が起こり、ダークホーンと共にリン少佐は散っていった。

「……」

レイブンは後に残ったクレーターと残骸を、まるでハエ叩きで潰したハエの死骸を見るかのように一瞥すると、その場を飛び去っていった。

第五十七話　鉄竜騎兵団（アイゼン・ドラグーン）（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第五十八話　エース・オブ・エースと白銀の獅子王（前書き）

ちょっと遅れてしまいましたが、ようやく書けました。

第五十八話　エース・オブ・エースと白銀の獅子王

共和国軍と機動六課が暗黒大陸に上陸した日の翌日、エントランス湾の砂浜に共和国軍と機動六課のベースキャンプが設置された。
はやてはエントランス湾に停泊しているウルトラザウルスの甲板で、時空間通信を使って本局に定時連絡を入れていた。

「…うん、無事に暗黒大陸に上陸できたよ。」
『分かった。それと、トライアングルダラスの安全ルートのデータを、ニクシー基地に送ればいいんだね？』
「せや。ありがとうなロッサ。普通の通信やと、トライアングルダラスに引っ掛かってしもて通らへんのや。」
『いやいや、これ位はお安いご用だよ。』

ヴェロッサは笑顔で答える。

『そうそう、先日、高町一尉が惑星Ｚｉ（そっち）に向かったよ』
「なのはちゃんが？」
『ああ。ニクシー基地に居ると思うから、伝言があれば伝えるけど？』
「せやなぁ…」

はやては少し考える。

「…じゃあ、暗黒大陸（こっち）に来たらバリバリ働いて貰うさかい、体力は温存しとくようにって言うといてな。」
『ハハ、了解。』

なのはも大変だな、と言いたげなヴェロッサの笑いを残し、通信

が終了した。

「はやてちゃん、スバル達が目を覚ましたですよ～」

「さよか。おおきにな、リィン。」

はやては連絡に来たリィンを肩に乗せ、医務室に向かった。

「失礼しま～す。」

はやては一声掛けてから、医務室の扉を開く。

「あ、八神部隊長。」

「みんな、調子はどないや？」

はやてがスバル達に訊ねる。

「はい、すっかり良くなりました！」

「五人とも、異常はありません。」

スバルとオットーが言う。

「申し訳ありません、八神二佐。我々がご迷惑をお掛けしたようで

…」

「気にする事あらへんよ、チンク。電磁波にやられてもうたんやから、しゃあないわ。」

はやてはチンクの頭を軽く撫でる。

「それとな、スバル達が戦闘機人やって事…共和国のみんなに話してもうたんやけど…」

スバル達は驚いて、一斉にはやての顔を見る。

「ああ、大丈夫やて。みんな今まで通り、仲ようしてくれるよ。」

「…本当、ですか…？」

ギンガが訊ねる。

「ホンマや。ボーグマン大佐もそれでも仲間やー、って言うとったし、安心してええよ。」

「そ、そうですか…。良かった～」

スバルは安心した様子で、ほっと胸をなで下ろした。

「…本当に、そうでしょうか？」

その場の全員が声のした方向、ディードを見た。

「…その場の全員が一度は賛同したとは言え、心の奥では気に入らないと思っている人間も、一人ぐらいは居る筈です。」

ディードは淡々と言う。

確かに、自分達の仲間にスカリエッティによって力を得た者が居ると突然言われても、戸惑ったり不信感を抱く者も居るだろう。人間の気持ちという物は、そう簡単に一つにはなれないのだ。

「ディード、何て事を言うですか！　あなたはレイさん達を信用してないですか！？」

「止しぃや、リィン。」

ディードに激昂するリィンを諫め、はやてはディードに歩み寄る。

「ディードの言う事も一理ある。…私も、最初はなかなか信用してもらえへんかったからなぁ…」

はやては十年程前、自分となのはの故郷である地球の海鳴市で発生した『闇の書事件』の当事者であった。

幸いにも周辺地域や他の世界にはこれといった影響は無く、はやてやシグナム達ヴォルケンリッターは、リンディ提督やクロノ達アースラスタッフが尽力してくれたお陰で大きな罪に問われる事は無かった。

だが、その後管理局に入局した直後は裁判で無罪が決まったにも関わらず、アースラスタッフ以外の局員にはあまり大きな信頼はされていなかった。

九歳という幼い身体に、管理局でもかなり高い部類に入る魔力。加えてロストロギア級の代物である夜天の書を持ち、『歩くロストロギア』とまで称された。これがなのはやフェイトとの差となり、局内では二人よりも化け物扱いされ、その魔力が夜天の書と共に、いつか暴走するという噂まで流れていた事もあったのだ。

「せやけど、なのはちゃんやフェイトちゃん、アースラスタッフのみんなは私の事を信じてくれた。信じてくれるみんなに支えられて、

私は目一杯頑張った。そんで周りの評価を変える事が出来たんや。」

そう言うとはやては、ディードの両肩を掴んで真っ直ぐにディードの目を見る。

「もしもディードやスバル達の事を信用してへん人がおったとしても、私やなのは隊長が信じとるし、大佐やレイさんだって信じてくれとる。そんで目一杯頑張って、周りの見る目を変えさせたるんや。」

「…八神部隊長……。」

はやては手をディードの両肩から離し、頭を撫でる。

「…分かりました。これから一層、精進し、絶対的な信頼を勝ち取ってみます。」

「ん。せやけど、あんまり無茶したらアカンよ？　オットーやみんなが悲しんでまうからな。」

「…はい。」

ディードの返事を聞き、スバル達の表情からも笑顔が零れる。

「ほな、私はこれから会議やから、失礼するよ。」

「はい。部隊長、ありがとうございました。」

ギンガが代表して礼を述べた。

「鉄竜騎兵団（アイゼン・ドラグーン）……奴らは一体、何者なんだ？」

ウルトラザウルスの小会議室で、ボーグマン大佐がしかめっ面で言った。

イスルギ少佐にアルドワーズ中佐、二等陸佐であるはやてにボーグマン大佐、そしてハーマン少佐と何故だか大尉のレイが、円形のテーブルを囲む様に席に着いている。

「通信の内容を聴く限りでは、帝国軍所属の部隊のようですが…」

「しかし、それでは味方である筈の守備隊を壊滅させるのはおかしい。」

「ええ、問題はそこです。帝国の為、とも言っていたにも関わらず、帝都を守る守備隊を何故蹂躙するのでしょう…？」

「…守備隊に、共和国軍に内通していたという疑いが掛かっていたというのは？」

「せやけどハーマン少佐、それだと疲弊している私達を攻撃しなかったのが説明できませんし…。それに、あの守備隊の惨状は奇襲攻撃でも仕掛けられない限り有り得ないと思います。」

「そうだね、何故、鉄竜騎兵団とやらは我々を攻撃せず、見逃してくれたのか……実に腑に落ちない。」

それぞれが意見を出し合い、会議が白熱する。

「…え～っと…ちょっと、よろしいッスかね…」

レイが申し訳なさそうに手を挙げて発言し、全員がレイを見る。

「どうした？」
「いや、これって指揮官クラスの会議ッスよね？　何で大尉で、精々小隊長の俺が呼ばれてるのかと…」
レイの言う通り、この場にいるのは殆どが佐官クラスで、指揮官を務めている。その中に大尉のレイがポツンと紛れているのだ。レイにしたら、居心地が悪いというか、正直居辛かった。
「ああ、その事か。なに、お前があの恐竜型の機体を知ってるようだったからな。話しを聞きたいと思って呼んだんだ。」
どうやら大佐は、レイが知っているバーサークフューラーの情報が欲しかったらしい。
「そういう事ですか。…分かりました。」
レイは話し始める。ニクシー基地でライガーゼロと素体のままで並んでいた事、基地を脱出した時のパイロットはヴォルフ・プロイツェンだったという事を話した。
「…そして、鉄竜騎兵団（アイゼン・ドラグーン）に配備されていた機体に、ヴォルフ・プロイツェンが搭乗していると思われます。」
「その根拠は？」
「…ゼロがあの機体を見つけた途端、目の色が…と言うか、様子が変わりました。まるで、一度は全力でぶつかり合った宿敵を睨むかの様に…。」
「なるほど…」
ヴォルフがバーサークフューラーのパイロットに選ばれていたの

なら、最後まで基地に残ってバーサークフューラーに乗って基地を脱出したのも、説明が着きそうだ。

「じゃあ何か？　ヴォルフ・プロイツェンが大軍を率いて、自軍の守備隊を壊滅させたと言うのか！？」

「その可能性もあるという話だ、ハーマン少佐。」

興奮し出したハーマンを、イスルギ少佐が落ち着ける。

「ヴォルフ・プロイツェンか……とすると、その親父が問題だな。」

「ギュンター・プロイツェンですか。」

「ああ。本来ＰＫ師団に居る筈の自分の息子が勝手に抜け出して鉄竜騎兵団を組んだとしても、奴がそれを知らない訳が無いし、野放しにしておく訳も無い。」

「つまり、父親であるギュンター・プロイツェンの命で動いている…と？」

アルドワーズ中佐が、眼鏡を軽く押し上げながら言う。

「ああ。その可能性が高いし、本当にそうなら、あの部隊もＰＫ師団の一部だと考えて良いだろう。」

「……」

鉄竜騎兵団の概要がほんの少しだけ見えてきた時、レイは腕を組んで考え込んでいる。

「…？　どうかしたか、グレック大尉？」

隣に座っているイスルギ少佐が、レイに訊ねる。

「いや、よくよく考えてみたら……なんで連中は、俺達にトライアングルダラスの抜け道を教えたりしたのか、って思いまして…」
「「「「…！！」」」」

レイの発言に、その場の全員が目を見開いた。同時に、トライアングルダラスを抜けるのに必死で、そんな簡単な事に気付かなかった自分を恥じる。

「…そうです！　何故、奴らはあの安全なルートから中央大陸に攻め込まないのです！？」
「確かに…ヘリックシティさえ落ちれば、我々の負けが決まる…」
「そうしないって事は、何かしらの意図があるって事だろうな。」

そう言うと、大佐は席を立った。

「奴らの意図を知るためにも、探りを入れてみるか。ケイ、頼むぞ。」
「はっ。」

イスルギ少佐は立ち上がって敬礼し、会議はひとまず解散となった。

「クーイン少尉は居るか？」
「はい。何かご用でしょうか？」

イスルギ少佐がロビーで訊ねると、奥で談笑をしていた、薄い茶髪に竜巻の如く渦を巻いたツインテールが特徴的な十代半ばの少女がやって来た。彼女が、イスルギ少佐と同じ情報部所属のサヤカ・クーイン少尉である。

「我々情報部は、一時間後に偵察任務に出る。準備をしておけ。」
「ハッ！　了解しました！」

サヤカは敬礼し、元気よく返事をした。

「何！？　リン少佐が！？」
「はい…昨日、軍事機密に当たる情報を無断で持ち出して部下と共に逐電。…抵抗したため、機体を破壊されて死亡、と…」

シュバルツ中佐に、キルシェが報告する。

「…私の所為だ。私が、リン少佐に頼んだ所為で…」
「中佐……」

シュバルツ中佐は椅子に座って頭を抱え、自身の行いを後悔する。
キルシェはシュバルツに掛ける言葉も見つからず、静かにシュバルツの部屋を後にした。

（…中佐に何の言葉も掛けられなかった……副官失格だな……）

シュバルツを慰める事も出来ず、キルシェは深くため息を吐いた。

「どうかされましたか、大尉？」

後ろから声がした。キルシェが振り向くと、そこにはシュバルツの弟のトーマ中尉が居た。

「シュバルツ中尉か……私はいつも通りだが？」
「ごまかさんで下さい。大尉の今の表情、誰が見たって元気が無いって思いますよ。」
「……」

トーマに見抜かれ、黙ってしまうキルシェ。

「…兄の、事ですか？」
「…！」

キルシェは驚いて足を止め、トーマの顔を見る。

「どうせまた、自分一人で何かを背負い込もうとでもしてるんでしょう？　兄は昔から、そういう性格でしたから…」
「……」

キルシェは黙ってトーマの話を聞く。

「まぁいつもの事ですし、じきに立ち直るとは思いますが…。もし気になるのでしたら、兄の傍に居てあげてはくれませんか？」
「…だが、私は中佐に掛ける言葉が見つからんのだ…」
「そんな小難しく考えなくても…ただ一言、『私が傍にいる』とかでも良いんですよ。」

トーマが言った途端、キルシェの顔が少しだけ紅くなった。

「な…！　それではまるで、私が中佐に好意を抱いているようではないか！」
「あれ？　違ったんですか？」

トーマがからかう様に言うと、キルシェの顔が茹で蛸の如くどんどん真っ赤になっていく。

「～っ！　も、もう良い！」

キルシェはそう言うと、自分が歩いていた廊下を早足で戻り始めた。

「ハハッ。やっぱりハルトリーゲル大尉は、ああじゃないとな。」

キルシェが少しでも元気になって良かった、といった様子で、トーマは廊下を再び歩き出した。

ニクシー基地から少し西に位置する平原。そこでは基地の留守を任された部隊が、演習に励んでいた。

「アクセルシューター！」

演習にはなのはもタクマと共に参加し、若手兵士の乗るガンスナイパーやゴドスを相手に戦闘訓練を行っている。

なのはが放ったアクセルシューターは縦横無尽に動き回り、ゴドスの足元に着弾して小さな爆発を起こす。

「うわぁあ！」

「くっ、高町一尉を取り囲むんだ！」

リーダー役の青年がガンスナイパーやゴドスを指揮し、なのはを取り囲む。

「一斉射撃だ、撃てェ！」

「レイジングハート！」

『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ．　Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．』

ガンスナイパー達はペイント弾をなのは目掛けて撃つが、プロテクションで防がれる。

そして弾幕が一瞬止んだ隙を突き、なのはは上空数十メートルまで飛び上がる。

「行くよ、レイジングハート。作戦Ｃ！」

『ＯＫ．　Ｄｉｖｉｎｅ　ｓｈｏｏｔｅｒ．』

なのははレイジングハートを地上に向け、螺旋を描いて急降下しながら、ディバインシューターを連射する。

攻撃は次々とガンスナイパーやゴドスのコックピット付近に命中、演習モードに設定されたコンバットシステムをフリーズさせる。

『ブーマー隊、ブライアント隊、全滅を確認。演習エリアより退去してください。』

オペレーターの指示に従い、十数機のゴドスやガンスナイパーが撤退していく。

『流石は高町一尉！　お見事です！』

「ありがとう。さぁ、今度は君達の番だよ！　頑張ってね！」

『ハッ！！』

なのはの後ろで構えていたタクマのシールドライガーとコマンドウルフ隊が、なのはと入れ替わりに前に出て残りの機体と交戦する。

タクマのライガーは走りながら胸部の三連衝撃砲を放ち、ゴドスを牽制する。

コマンドウルフＡＣ達はしばらく進んだ後に足を止め、背中の２５０ｍｍ二連装ロングレンジキャノンを放って攻撃する。

「いっけぇエエエエ！」

そしてタクマのライガーは前方にシールドを展開し、ゴドスやガンスナイパーの群れに体当たりを仕掛けた。

『うぉぉおおっ！！』

直撃を受けた機体はシールドの反発力で吹き飛ばされ、コンバットシステムがフリーズした。
ふとタクマが、吹き飛ばした機体の傍を見ると、そこにはバンのライガーゼロ、シーザー・ザ・キングの姿があった。

「バン、いいの？　隊長役が前に出ても。」

シーザーの後部座席に座るフィーネが訊く。

「これだけこっちが負けてるのに、俺だけ黙って見てるのは性に合わないからさ。それに、何よりコイツが『俺も戦いたい』って、言ってる気がするんだ。」
『ウォォォォン！！』

その通りだと言わんばかりに、シーザーは大音量の雄叫びを上げた。

「…うん。その通りだって、ジークも言ってる。」
「よし！　じゃあ行くぞ！　ジーク、シーザー！」

バンはペダルを踏み込み、操縦桿を押してシーザーを走らせる。

「高町一尉！」
「オッケー！　チャージ終わったよ！　各機、散開して！」

なのはの正面に居る機体が左右に散らばり、一本の道を開く。
なのははレイジングハートを構え、先端に現れた環状魔法陣の中心に魔力が集束していく。

「ディバィィィイン…バスタァァァア！」

集束していた魔力を砲撃へと変換し、解放して一直線に放つ。小手先抜き、全力全開での一撃である。

「バン、前！」

「分かってる、シーザー！」

シーザーは背中のブレードを前に向け、高出力のシールドを展開した。

その直後、ディバインバスターがシールドに直撃し、数秒間照射した後に爆発を起こした。

辺りが砂煙に覆われ、なのははレイジングハートを持っていない右腕で、砂煙から顔を守る。

「くっ…！　レイジングハート、目標は！？」

『Ｉｔ　ｉｓ　ｓｔｉｌｌ　ｔｈｒｉｖｉｎｇ.　Ｏｎ　ｔｈｅ　ｃｏｎｔｒａｒｙ, ｈｅ　ｓｅｅｍｓ　ｔｏ　ｂｅ　ｌｉｔｔｌｅ　ｄａｍａｇｅ.（未だ健在。寧ろ、ダメージは軽微のようです。）』

「ええ！？」

砂煙が晴れると、そこには全力のディバインバスターを受けたにも関わらず、特別大したダメージを受けた様子の無いシーザーの姿があった。

「ひゃあ～っ…凄い耐久度だな…」

その鉄壁っぷりは、使用したバンでさえも驚く程だった。

「What would you do, master?（どうします、マスター？）」

レイジングハートはなのはに問いかける。

「ディバインバスターが駄目なら……もっと全力全開で行くよ！」

『Please do not forget to be practice.（…演習だという事を、お忘れなく）』

「はいはい。」

なのはは再びレイジングハートを構え直し、先端に先程以上の魔力を集中させる。

「バン、また来るわ。」

「ああ！　もう一度防ぎきるぞ、シーザー！」

バンはその場からシーザーを動かさず、シールドの準備をする。バンとしても、シーザーのシールドの耐久度はしっかりと把握しておきたかったので、ちょうど良い機会といえるだろう。

「行くよ、バン君！」

「おう！　来い、なのは！」

なのはとシーザーの間に、緊張感が張り詰める。

『…おい、今なら高町一尉を墜とせるんじゃないか？』

『馬鹿言うな。…この状況でそんな事してみろ、お前は一生卑怯者のレッテルを貼られるぞ。』

『けどよ、これは演習なんだし……だいたい、戦場で油断してる方が悪いんだよ。イスルギ少佐だって、いつもそう言ってただろ？』

『…そりゃそうだが……』

緊張感が張り詰める中、バンのチームに所属するガンスナイパーのパイロットとゴドスのパイロットが会話をする。

『…とにかく、俺は行くぜ！』

『あ、おい！？』

ゴドスのパイロットが止めるのも聞かず、ガンスナイパーはなのはに向けて走り出す。

『Ｍａｓｔｅｒ！　Ｂｅ　ｃａｒｅｆｕｌ！（気を付けて、マスター！）』

「くっ、やっぱり来るかあ…」

こうなる事はなのはも予想していたが、空気を読んで攻撃せずにいてくれるだろう、と高を括っていた。しかし、ここは演習場と言えど戦場であることに変わりはなく、攻撃してきた兵士を責めることはできない。寧ろ責められるのは、油断していたなのはの方だろう。

『食らえ！』

ガンスナイパーはペイント弾が装填された腕のガトリングガンをなのはに向け、パイロットの指は引き金を引こうとしていた。

「させるかぁぁぁあ！！」

ペイント弾が放たれようとした瞬間、タクマのシールドライガーがガンスナイパーの真横から体当たりを食らわせた。

『ぐわぁっ！？』
「功を焦り過ぎたな！　今です、高町一尉！」
「ありがとう、タクマ君！　…これが私の全力全開！」
なのはのレイジングハートを握る手に、更に力が込められる。
「スターライトォォォオ……ブレイカァァァア！」
なのはの渾身の叫びと共に、桜色の極太の砲撃が放たれた。
「シーザー！　シールド、最大出力で展開だ！」
シーザーはシールドを最大出力で展開し、怒涛の勢いで襲い来るスターライトブレイカーに、真っ向から立ち向かう。
直後、展開されたシールドにスターライトブレイカーが直撃し、シールドの反発力と拮抗する。
「う…うぉぉぉお！？」
「きゃあっ！」
シールドを展開しているにも関わらず、バンやフィーネの乗るコックピットにまで衝撃が伝わってくる。
更に、シーザーの強靭な躰（からだ）が照射されるスターライトブレイカーの巨大な出力に押され始め、かなりの力で大地に爪を突き立てているにも関わらず、少しずつ後退させられていた。
「ま、負けるかぁ！　気合いで持ちこたえろ、シーザァァァア！」
『ウォォォォ！！』

シーザーは雄叫びを上げ、全身に更に力を込める。すると、押されていたシーザーがじわりじわりと、前に進み出した。

「ちょ、高町一尉のスターライトブレイカーを押し返してる！？」

これにはタクマも驚いた。

タクマはなのはのスターライトブレイカーは、先日の訓練中に見た事があった。その時のタクマは、『ジェノザウラーの荷電粒子砲並みか、それ以上の破壊力』と感想を述べた。だが今回のそれは、先日の物を上回っている。その威力は正に、ジェノブレイカー並みであった。

―ドゴォォォォォォォォン！

そしてスターライトブレイカーが数秒間の照射を終えた瞬間、爆音が響き、爆風によって着弾地点を中心に土煙が舞い上がった。

『うぉぉぉっ！？』

「ど、どっちが勝ったんだ！？」

タクマがレーダーを見ると、どちらの反応も消失（ロスト）はしていない。どちらとも、殉職だけはしていないようだ。

そうすると、勝敗の決着はシーザーのシールドが破られたか否かという事になる。

次第に土煙が晴れ、なのはとシーザーの姿を視認できるようになった。

「けほっ…レイジングハート、大丈夫？」

『Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ．Ｈｏｗ　ａｒｅ　ｙｏｕ，ｍａｓｔｅｒ？（問題ありません。マスターはどうですか？）』

「うん、特に大怪我はしてないよ。でも…」

なのははレイジングハートを案じた後、シーザーが居るであろう場所を見やる。そこには、大きく亀裂が生じながらも、限界ギリギリの状態でシールドを維持しているシーザーの姿があった。

「…負けちゃった、みたいだね。」

『Ｉｔ　ｌｏｏｋｓ　ｌｉｋｅ　ｉｔ．（そのようですね）』

なのはは自身の敗北を確認すると、ゆっくりと地に降りた。

『演習終了。高町一尉の戦闘不能により、フライハイト中尉チームの勝利です。』

演習場の全機体にオペレーターからの通信が入り、演習の終了を知らせた。

「高町一尉、お疲れ様です！」

「タクマ君、お疲れ様。」

制服姿に戻って腰を下ろすなのはに、タクマが飲み物を持って来た。なのはは飲み物を受け取ると、演習後の疲れ果てた体に一気に

浸みこませるように、ストローを吸い上げる。
「お隣、よろしいでしょうか？」
「うん、いいよ。」
タクマもなのはの隣に腰掛けて一息つく。
「さっきはありがとう。やっぱり、油断しちゃ駄目だよね。」
「ああ、さっきの事ですか？　お気になさらないで下さいよ、高町一尉。」
「ううん、あれは私が演習だからって、甘く思ってたのが駄目だったんだよ。」
「いやいや、それだけ俺達が信頼されてるんなら、嬉しい限りですよ。大体、これはあくまでも演習なんですから、本番でやらなきゃいいんです。そんなに気にする事じゃありませんよ！」
タクマはなのはの目を正面から見つめ、力強く言い切った。なのははその剣幕に、少したじろぐ。
「あ……す、すいません、生意気な事言って…」
「…ううん、タクマ君の言う通りだよ。ありがとう。」
なのははにっこりとタクマに微笑みかけて礼を言った。
その予想以上の可愛さに、タクマの顔が少しだけ赤らんだ。
「い、いえ、その、た、高町一尉が、げ、元気を取り戻してくれて…よ、良かったです、はい。」
なのはの笑顔で、今度は逆にタクマがたじろいだようだ。

「にゃはは…。あ、それとタクマ君。私がタクマ君の事を名前で呼んでるんだから、タクマ君も私の事、名前で呼んでよ。」
「え!?　いや、そんな失礼な事…」
「失礼なんかじゃないよ?　ほら、名前で呼んでみてよ。上官命令です。」
「うっ…」

タクマは軍人だ。上官命令と言われたら、逆らわない訳にはいかない。恥ずかしそうに頭を軽く掻き、意を決して口に出す。

「な…なのは…さん…」
「うん、まぁ良いかな。これからも、それで呼んでね?　六課のみんなも、それで呼んでるから。」
「は…はぁ……」

タクマは赤くなった顔を隠すように、顔を俯かせる。

「おぉい、なのは~。」

バンがなのはに駆け寄って来た。

「どうしたの、バン君?」
「ついさっきニクシー基地から連絡があって、先発隊が暗黒大陸の上陸に成功したってさ!」
「本当に!?」

なのははスクッと立ち上がった。

「ああ。俺達も、すぐ基地に戻って出航の準備だってさ。」
「うん、分かった。行こう、タクマ君!」

「あ、はい！」

タクマも腰を上げ、走り出したバンとなのはに併走する形で走り出す。

（……いいなぁ、フライハイト中尉は…何の気兼ねも無く『なのは』って呼べて……）

タクマはバンの背中を見て、ゾイド乗りとしての腕にも、その他の事に関しても、羨ましく思うのだった。

第五十八話　エース・オブ・エースと白銀の獅子王（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。
というか、最近感想がなかなか来ないので、できるだけ書いて頂ければ嬉しいです。
ここが駄目だ！　とかでも構いませんので…
では。

第五十九話　成長の兆し（前書き）

うーん、また遅くなってしまった…
やっぱり携帯だと、パソコンに比べて書くのが遅くなりますね。
まぁ携帯でも早く書ける方は居るんでしょうけど…

第五十九話　成長の兆し

『…第三防衛ライン、突破されました！』
『敵部隊、最終防衛ラインに向けて侵攻中！　このままでは防ぎきれません！　至急、援護を！』
『こちらサンチェ隊、ガルベス隊が壊滅！　我々も壊滅寸前です！』
『メーデー、メーデー！　…うわぁぁぁぁぁぁあ！！』

共和国軍が拠点を置いたエントランス湾から数百キロ北、ウィグリド湖の湖畔に位置する要塞の指令室では、先程から絶望的な報告や通信しか聞こえていなかった。

「ええい、どうなっている！　やつらは何者なのだ！？」
「ハッ！　おそらく、エントランス湾に駐留していた守備隊を全滅させた部隊かと…」
「そんな事は聞いておらん！　やつらの所属はどこだ！？　帝国軍の部隊なのか！？」

司令官のヘンケル中佐は怒りと焦りが募り、側近の兵士の足元に空のワイングラスを投げつけ、八つ当たりをした。

「い、いえ……あのような部隊は、データベースにも存在しておりません。少なくとも、正規軍ではありません…」
「ぬうッ……」

ヘンケル中佐の額に汗が流れ、更に焦りの表情が浮かぶ。

「き、近隣の基地や要塞に、救援要請は出したのか！？」
「それが…周囲を強力なジャミングで覆われているようで、連絡が

できません…」
「な、何だと!?」

ヘンケル中佐の表情が、一気に青ざめる。

「…やむを得ん、我々だけでも逃げるぞ!」
「なッ…! 部下達を見捨てるおつもりですか!?」
「ええい煩い(うるさ)い! ワシはこんな所で死ぬ訳にはいかんのだ! 早く準備をしろ!」

ヘンケル中佐は椅子から立って、その場に居る兵士を怒鳴り散らす。が、兵士達は、このまま仲間を見捨てて逃げて良いのかを考え、すぐには動かない。

ーズギューン!

兵士たちが迷っていると、突然、室内に銃声が鳴り響いた。兵士達が振り返ると、胸から血を流して倒れている兵士と、銃口から煙の上がっている拳銃を持つ、ヘンケル中佐の姿があった。

「貴様ら、何をしている! こうなりたくなければ、さっさと脱出の準備をしろ!!」

ヘンケル中佐は迷っている兵士たちに痺れを切らし、催促するために一番近くに居た部下を撃ち殺してしまったのだった。

「中佐…! ご自分が何をなさったのか、お分かりですか!?」

兵士の一人が立ち上がり、ヘンケル中佐を睨み付けて激昂気味の口調で言う。他の兵士も次々に立ち上がり、ヘンケル中佐を軽蔑の

眼差しで睨みつける。

「だ、黙れ！　貴様らも死にたくなければ、さっさと脱出の…」

その時、防衛ラインを守る部隊から通信が入って来た。

『こ、こちらクロマティ隊！　最終防衛ライン、突破されました！』

その内容は、極めて絶望的だった。最早、脱出も間に合わないだろう。

ヘンケル中佐の表情が一気に真っ青になり、ショックのあまり構えていた拳銃を床に落とした。

「み、見ろ！！　貴様らがもたついていた所為で――」

――ズギューン！

再び、銃声が部屋中に響き、ヘンケル中佐の心臓を鉛の弾が貫いていった。兵士の一人が、自分の足元に転がって来たヘンケル中佐の拳銃を拾い上げて発砲したのだ。

「が……あ……ッ…」

ヘンケル中佐は力無くうつぶせに倒れた。

「……おいおい、何もこんな老害の為に、お前が手を汚すこたァなかっただろうに…」

発砲した兵士の同僚が言う。

「……こんな老害だからだよ。名誉の戦死なんて、コイツには勿体ねェ。…他の名誉の戦死を遂げた連中に迷惑だ。」
「…ヘッ、違ェねェや。」

そんなやり取りの直後、指令室のモニターに穴が空き、鉄竜騎兵（アイゼン・ドラグーン）団の尖兵であるディマンティスが姿を現した。

「あ〜あ、チェックメイトか…。どうするよ？」
「好きにしろよ。…俺は足掻かせて貰うけどな！」

兵士は拳銃を構え、ディマンティスに立ち向かった。

「…！　あれは！？」

哨戒任務に就いているサヤカは、木々の遥か向こうから立ち上る黒煙に気付いた。

「少佐、数十キロ北で戦闘が行われているようです。」
「何？　……ふむ。」

サヤカの報告を受け、イスルギ少佐は足を止めて考える。

「……よし、シャドー０１より各機へ。シャドー０２及び０３は、私と共に戦闘が行われていると思われる地点の付近まで移動。０４から１０は周囲に展開、残った者は報告に戻れ。」

『了解！』

イスルギ少佐の指示で、シャドーフォックス達が散らばっていく。

「よし、我々も行くぞ。」

「「ハッ！」」

イスルギ少佐のブレードライガーが走り出し、それに続いて副隊長とサヤカのシャドーフォックスも走り出す。

しばらく走っていくと森林地帯が姿を現し、イスルギ少佐のブレードライガーが足を止めた。

「二人とも、止まれ。…光学迷彩を作動させろ。」

「「…了解。」」

三機は足を止め、光学迷彩を作動させて姿を隠す。戦場が近いのだ。

「…もし見つかったら逃げるぞ。応戦は絶対にするな。」

イスルギ少佐が副隊長とサヤカに言う。敵の戦力や目的が不鮮明な事を考慮すると、下手に交戦した場合、思わぬ事態に陥る可能性が高い。それを防ぐための指示だ。

「…全機、微速前進。」

ブレードライガーとシャドーフォックス二機は静かに、ゆっくり

と歩き出す。

（うぅ～っ、ドキドキするよ～ッ…）

張り詰める緊張感に、押し潰されそうになるサヤカ。エウロペに行く前に、光学迷彩を用いた偵察任務の演習は数え切れない程こなしたが、本番は今回が初めてだった。

「……止まれ。」

しばらく進むと、イスルギ少佐が停止の指示を出した。前を見ると、薄いエメラルドグリーンの機体色に、巨大な背ビレを持った恐竜型ゾイドの姿があった。

「少佐、あれは…？」

サヤカがイスルギ少佐に訊く。

「分からん。が、おそらくは敵の新型だろう。」

帝国の正規軍か、鉄竜騎兵団（アイゼン・ドラグーン）かは分からんがな。と付け加える。イスルギ少佐は敵に気付かれないよう、その近くを通り過ぎようとする。

「……ッ！！　全機、止まれ！」

だが、イスルギ少佐は再度停止の指示を出し、後退する。

「ど、どうしたんです、少佐！？」

「…この先に、極めて強力なジャミングが張られている。…これ以

上は進めんな。」

引き上げるぞ、とイスルギ少佐のブレードライガーが転進し、サヤカがそれに続こうとした時だった。

―ガサッ！

サヤカのシャドーフォックスの尾が木を揺らし、物音を立ててしまったのだ。

敵がその音を見逃す訳も無く、恐竜型ゾイドの頭がその方向を向き、背ビレの左右にあるキャノン砲を向けた。

「くっ…逃げろ、クーイン少尉！」

イスルギ少佐はサヤカに逃げるよう指示するが、サヤカのシャドーフォックスの足取りが重い。

「ダ…ダメ……手が…震えて…」

極度の緊張感と恐怖心で、サヤカの四肢は硬直してしまっていた。サヤカの実戦経験の薄さが、脳から体の到る所に送られる信号を遮断してしまったのだ。

そして、その感情は搭乗するシャドーフォックスにも伝わってしまい、コンバットシステムの一時的なフリーズまで引き起こした。

しかし、そんなサヤカに敵が情けを掛けてくれる訳も無く、キャノン砲の弾丸がサヤカ目掛けて発射されてしまう。

「クーイン少尉ッッ！！」

もう終わりだ、とサヤカが目を閉じて心の中で呟くが、シャドー

フォックスの体が何者かによって突き飛ばされた。

「きゃあっ！？」

サヤカは何が起きたのかすぐには理解できなかったが、横を見ると、光学迷彩を解除してEシールドを展開している、イスルギ少佐のブレードライガーの姿があった。

「し、少佐…！」

「くっ…、この大莫迦者！　貴様のお陰で、敵に見つかってしまったではないか！　何故すぐに逃げようとしなかった！？」

イスルギ少佐はサヤカが無事な事を確認すると、通信機越しにサヤカを怒鳴りつけた。

「ひっ…も、申し訳…ありません……」

サヤカはイスルギ少佐の怒号に怯え、口ごもる。

「…まぁいい、立てるか？」

「…は、はい…」

サヤカはシャドーフォックスを起き上がらせ、損傷部分のチェックをする。

「よし。…ミッチェル大尉、クーイン少尉を連れて先に逃げろ。」

「ハッ！」

副隊長のミッチェル大尉はサヤカを誘導し、スモークディスチャージャーを展開して撤退する。

サヤカのすぐ後ろで、恐竜型ゾイド――ダークスパイナーの砲撃音と、それがシールドに跳ね返る音が聞こえる。イスルギ少佐がサヤカ達を逃がす為、体を張って時間を稼いでいるのだ。
サヤカはその音を聞いて、とてつもなくやりきれない気持ちになっていた。

その数十分後、サヤカは無事にエントランス湾の共和国拠点に帰還した。

「よう、お疲れさん。」
「あ…ボーグマン大佐。…サヤカ・クーイン少尉、ただいま帰還しました…」

サヤカは敬礼する。

「その様子だと、上手くいかなかったみたいだな。」
「……はい。」

サヤカは表情や声から心境を読み取られ、半ば驚きながらも顔を俯かせる。

「……ま、俺がどうこう言うとケイに怒られちまうから、何も言わ

んさ。…だが…まぁ、あんまり引きずるなよ？」

大佐はサヤカを励ます程度の事を言って、立ち去っていった。
その更に数十分後、ようやくイスルギ少佐のブレードライガーが残りのシャドーフォックス達と共に帰還してきた。

「イスルギ少佐、お疲れ様です！」
「ああ。整備班、シールド周りを念入りにやっておいてくれ。」
「ハッ！」

イスルギ少佐は近くの整備士に注文し、コックピットから降りると、サヤカに歩み寄った。

「あ…あの……」
「…何故あの時、逃げなかった？」

イスルギ少佐は突き刺さるような視線と、淡々とした口調でサヤカに訊ねる。

「……その…あの機体の目を…見たら…こ、怖くて…震えてしまって…」

途切れ途切れに話すサヤカは、まるで怯えたハムスターのようだった。

「……そうか。…実戦ではなくて良かったな。」「え……？」

イスルギ少佐の意外な言葉に、サヤカは顔を上げる。

「一度恐怖を経験しておけば、もうあの様な事態には陥らんだろう。

…戦場での恐怖は、必ず自らを死に追いやる。気を付けることだ。」
「は、はい！　肝に銘じます！」

イスルギ少佐の厳しくも優しい言葉を受け取り、サヤカは感激した。

「それと、少尉が逃げ損ねたのも、どうやら帳消しに……とは言わんが埋め合わせぐらいは出来そうだぞ？」
「…と、言いますと？」
「少尉を逃がすために例の新型と交戦している時、面白い物（データ）が採れた。これから解析班に持っていくのだが、来るか？」

イスルギ少佐は懐から一枚のディスクを取り出してサヤカに見せる。

「あ…はい、是非！」

情報部に属する者として、少しでも多くの情報や知識を仕入れておきたい、と思ったサヤカは喜んでイスルギ少佐について行く事にした。

「ケイ・イスルギ少佐だ。失礼する。」

イスルギ少佐は一言だけ声を掛けてから、解析班が仕事をしているウルトラザウルスの一室に入る。

「おや、少佐殿。」

「ロウエン伍長、例のディスクを持って来た。解析の方、頼むぞ。」

イスルギ少佐はディスクを取り出し、先に話を聞いていたらしいバディターに手渡した。

「…確かに。では、結果が出ましたらお知らせ致しますので。」

「いや、クーイン少尉の後学のために見学させてほしいのだが…構わんか？」

「そうですか。ええ、どうぞどうぞ。」

バディターはパイプ椅子を二つ用意し、イスルギ少佐とサヤカを座らせる。更にコンソールを素早く叩き、全員に見せるために大きめのモニターを稼働させ、そこにバディターの操作する画面を映す。

「さて、やりますか！」

バディターは眼鏡の位置を直し、軽く深呼吸すると、とても人間業とは思えない速さで指を動かし、コンソールを叩いていく。それに合わせて画面上の文字やウィンドウが、目まぐるしく変化していく。

「えええええ！？　は、早すぎてよく見えな…」

サヤカはそれらを何とかして眼に焼き付けようとするが、如何せん早すぎる為、ただ目が回るだけに思えてきた。

「…ふぅ、お二方、終わりました。」
「ん、そうか。ご苦労だった。」

開始から数時間が経った。バディターは手を止め、イスルギ少佐に解析の完了を告げた。

「クーイン少尉、見てみろ…ん？」

イスルギ少佐が横を見ると、目を回して伸びているサヤカの姿があった。

「…おい、クーイン少尉！！」
「は、はいぃッ！？」

イスルギ少佐の怒鳴り声で、サヤカは意識を取り戻した。

「少尉、何を寝ているのだ。」
「す、すいません！　あんまり画面がコロコロ切り替わるもので…」
「それで、眼を回したのか。修行が足りんな。」
「あうぅ……」

サヤカはちょっと釈然としないような感じで項垂れる。

「…？　ちょっと待ってください、少佐は見えてたんですか？」
「ああ。目を回す事無く、全て読めた。」
「どんだけ動体視力がいいんですか！？」

あっさりと答えるイスルギ少佐に、サヤカは改めて少佐の凄さを思い知らされた。

「さて…ロウエン伍長、解説を頼む。」
「はい。…イスルギ少佐が持ち帰られたデータですが、敵の新型…そうですね、『ジャマーザウルス』とでも呼称しますか。」
バディターがコンソールを操作し、画面を切り替える。
「まずこのゾイドの特徴として、極めて強力なジャミングを発生させる事が出来るようですね。その発生装置は、おそらくこの巨大な背ビレ…。かつて旧ゼネバス帝国が運用していた電子戦用ゾイド、『ディメトロドン』のそれと酷似しています。」
ダークスパイナーの画像の隣に、ディメトロドンの画像が表示される。
「ホントだ、確かによく似てる…」
カラーリングや全体的なフォルムこそ異なるが、どちらも大きな背ビレを持っている。
「背ビレから発せられるのは、通信を妨害する物やミサイル系の兵器を撹乱させる物……他にもありそうですが、やはり情報が些か不足していますね。」
「それと、奴が攻撃に移るときに周囲のジャミングが薄くなっていた。」
イスルギ少佐がバディターの台詞の後に付け加えた。
「つまり、ジャミングと攻撃を並行して行う事が難しい。接近できれば、撃破は容易いかもしれません。……しかし、先程のディメト

ロドンと比較すると、四足歩行から二足歩行に変わっているので…」
「…格闘も、意外とイケる…とか？」
「可能性はありますね。どちらにせよ、要注意である事に変わりはありません。」

バディターはデータを保存し、画面を閉じる。

「と、以上です。」
「時間を取らせてすまなかった。礼を言うぞ、伍長。」
「いえいえ。おかげで、戦闘がいくらか有利になりますよ。」

バディターとイスルギ少佐は互いに感謝の言葉を述べる。
そのすぐ後に、艦内放送が流れた。

『総員に通達、本艦隊は明日１０００（イチマルマルマル）、先刻陥落したと思われるウィグリド要塞へ進軍する。各員、準備を怠らぬよう。』
「少佐、ウィグリド要塞って…」
「ああ。我々が偵察に向かった要塞だ。…私は会議に出てくる。早く休めよ。」

そう言うとイスルギ少佐は足早に部屋を出て行った。

翌日、午前十時。ウルトラザウルスは母艦仕様の為、エントランス湾に残った守備隊と共に待機し、ホバーカーゴを中心に艦隊を再構成。ウィグリド湖へ向けて出発した。

「あ～あ、行っちゃったわね……私も一緒に行きたかったなぁ…」

ウルトラザウルスの甲板で愚痴を零すマリン。愛機のハンマーヘッドは空水両用の機体ではあるものの、空の戦いには水中ほど強くなく貴重な海戦戦力であるため、部隊ごとウルトラザウルスの護衛に回されたのだった。

「無茶言わんで下さいよ曹長。それに、母艦の護衛だって重要な任務ですよ？」

マリンの部下が甲板をデッキブラシで掃除しながら言う。

「…ですから、曹長もサボってないで真面目にやってください。」

部下が目線をマリンの足元に向けると、そこには倒れたデッキブラシがあった。マリンも掃除の途中だったのだ。

「てか、何で曹長にもなって下っ端の仕事やってんのよ、私は！？」

「人手が足りないんですから、仕方ないでしょう。それを言ったら、自分だって兵長なのに掃除してるんですよ？」

「ぶ～ッ…」

マリンはまるで子供のように顔を膨らませるのだった。

「てやぁぁぁぁあっ！！」
「踏み込みが足りんぞ、エリオ！」

エントランス湾を出発して数時間後。ホバーカーゴの訓練室で、シグナムは木刀を用いてエリオに稽古をつけていた。

「ハァッ！」
「うわあっ！？」

シグナムはエリオの木刀を払い、弾き飛ばす。そのままエリオの眉間に木刀の切っ先を突きつけ、エリオは思わず尻餅を突いた。

「勝負あり、だな。」
「…参りました……」

エリオはゆっくりと立ち上がる。

「なに、そう落ち込むことはない。以前より上達はしている。」
「あ…ありがとうございます！」

シグナムに褒められたのが嬉しかったらしく、エリオは姿勢を正して深くお辞儀をした。

「シグナム、エリオ、お疲れ様。」

訓練室の扉が開き、フェイトが飲み物を持って来た。

「すまんな、テスタロッサ。」

「ありがとうございます、フェイトさん。」

二人はフェイトに礼を言って飲み物を受け取ると、壁に寄りかかってしゃがみ込む。

「どうですかシグナム。エリオは強くなりました？」

「ああ。少しずつだが、確実に腕は上がっている。」

飲み物を飲みながらフェイトとシグナムが話す。

「特に、惑星Ｚｉ（ここ）に来てからは著しい。…尤も、ゾイド相手に突撃していれば嫌でも強くなるだろうがな。」

「あはは……」

核心を突くシグナムに苦笑いを浮かべるフェイト。

「そう言うシグナムは、ゾイドと戦って強くなったと思いました？」

「…あまり変わった気はせんな。昔戦った原生生物も、あれ程のサイズの奴も居たしな。」

シグナムは十年程前、砂漠の世界で巨大な百足の様な生物と戦った時の事を思い出す。フェイトと初めて一対一の真剣勝負を繰り広げたのも、その時だった。

「だが、強いて言うなら航空型のゾイドは遣りづらいな。」

「ああ、シグナムみたいなベルカの騎士は、近接戦闘が基本ですか

らね。」

ヴィータはシュワルベフリーゲンの様な射撃魔法は使えるが、シグナムは射撃と言ったら、フルドライブ時のシュツルムファルケン位しか持っていない。しかし、たかが量産型にそんな大技を使うのは魔力の無駄遣いなので、連続して使える遠距離攻撃は、シュランゲフォルム時の飛竜一閃位しか無いのだ。

「そういう時は、私達ミッド式魔導士に任せて下さいね、シグナム。」

「…フッ、よろしく頼む。」

フェイトの頼もしい発言に、シグナムは軽く笑みを浮かべる。

「とは言え、やはり練習しておくに越した事は無いな。…誰か暇そうな奴を探して…」

「あ、フェイト。ここに居たんだ。」

自動ドアが開き、マミが姿を現した。

「マミ、何かご用？」

「うん。大佐が目的地にはもうしばらく掛かるから、今のうちに隊長会議をするって。」

「そう、分かった。」

フェイトが立ち上がろうとした時、それより早くシグナムが立ち上がる。

「ブリジット、ちょっと良いか？」

「はい？　何です、シグナムさん？」

振り返って部屋を出ようとしていたマミに、シグナムが話し掛ける。

「丁度、航空型と模擬戦をしようと思っていた所だ。付き合え。」

「へ!?　い、今からですか!?」

「そうだ。どうせ暇だろう?」

「そりゃあ……分かりました。準備がありますから、しばらく待ってて下さいよ?」

そう言ってマミは、自分のストームソーダーがある格納庫に駆けていった。

「もう、シグナムったら…」

フェイトはマミに無理を言う程やる気満々なシグナムを見て、シグナムらしいなと言いたげな笑顔を浮かべるのだった。

「シグナム副隊長、準備はよろしいですか?」

「ああ、いつでも構わん。」

艦隊の横の上空に、エンジンを弱めて空中で静止するマミのスト

ームソーダーと、レヴァンティンを腰に差した鞘に収めて宙に浮くシグナムの姿があった。

『…では、まもなく模擬戦を開始致しますが、くれぐれも艦隊から離れすぎない様、お願いします。』

「了解です！」「ああ。」

「では、始めて下さい！」

オペレーターの合図と同時に、ストームソーダーのエンジンが出力を上げ、加速する。

シグナムはストームソーダーがある程度の速度を出すまで待つ。ロクに動いていない機体を倒しても、訓練にはならないからだ。

「こんなもんかな。…さぁて行きますよ、シグナム副隊長！」

ストームソーダーが十分な速度を得たと判断し、マミは機首をシグナムの居る方向へ向ける。

シグナムもレヴァンティンを鞘から抜いて構える。

「撃ちます撃ちまぁす！」

ストームソーダーのバルカン砲から大量のペイント弾が放たれ、シグナムに襲い掛かる。

だがシグナムはそれらを軽くかわすと、レヴァンティンのカートリッジを一発消費し、シュランゲフォルムに変形させて反撃に移る。

「はぁぁぁぁあっ！！」

シグナムがレヴァンティンを振ると、鞭の様に伸びた刀身がしなり、意志を持つかの様な動きでストームソーダーに襲い掛かる。

「うわわわわっ！？」

マミは慌ててストームソーダーを急上昇させ急降下させ、レヴァンティンの追撃を振り切ろうと動き回る。しかし、レヴァンティンの刀身は限り無いと思える程に伸び、ストームソーダーを追い回す。

「あぁもう、埒があかないよ！　こうなったら…」

マミは縦横無尽に動き回らせていたストームソーダーの姿勢を修正し、機首を再びシグナムに向け、バルカン砲を掃射しながら突撃する。

「くっ、レヴァンティン、戻れ！」

シグナムはレヴァンティンの刀身を手元まで引き戻し、自分の体を守るように展開してペイント弾を弾き飛ばす。

ペイント弾の嵐が終わると、今度はストームソーダーがシグナムの目前まで迫り来る。

「くっ！」

流石にゾイドの体当たりを、シールドで防いだり剣戟で斬り払ったりするには厳しすぎる。言うなれば、突っ込んで来るトラック相手に、機動隊御用達のジュラルミンの盾で対抗する様な物だ。

騎士甲冑がある程度は衝撃を和らげてくれると言えど、まともに食らっては洒落にならない。シグナムは即座に回避行動に移り、ストームソーダーの翼を避ける。

「くぅ～っ、惜しい！」

マミはもう少しでシグナムを撃墜出来たのに、と悔しがる。
ストームソーダーはすぐさま反転してシグナムの頭上に回り込み、そこからの攻撃を目論む。

「これでどう！？」

ストームソーダーの翼から訓練用に威力を低下させたミサイルが放たれ、シグナムの頭上目掛けて飛んで行く。

「レヴァンティン！」
『Ｊａｗｏｈｌ！　Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！』

シグナムはレヴァンティンを一旦鞘に納め、カートリッジを一発消費、空薬莢を排出する。
レヴァンティンの刀身に魔力が込められ、シグナムは居合斬りの構えを取る。

「飛竜……」

ミサイルがシグナムとの距離を縮めていき、着弾まであと一秒あるか無いかの所まで迫っている。が、シグナムは姿勢も表情も揺らがない。

「…一閃！」

レヴァンティンを勢い良く抜刀し、魔力と刀身の二段攻撃が放たれた。斬撃によってミサイルは両断され、真っ二つになった事でシグナムには命中せず、その左右を通り過ぎて爆発した。
一方で魔力の斬撃はストームソーダーに襲いかかるが、マミは寸

での所で回避に成功し、撃墜の判定は受けずに済んだ。

「ひゃあ、危ない危ない……！？」

マミが魔力の斬撃が空へと消えて行くのを確認して前を向くと、そこには炎を纏ったレヴァンティンを片手に、真正面から全速力で向かってくるシグナムの姿があった。

「ちょ、姿勢制御を…！」

ストームソーダーは飛竜一閃を緊急回避した直後という事もあり、姿勢を崩していた。シグナムはその僅かな隙を見逃さなかった。

「遅い！　はぁぁぁぁあっ！！」

シグナムは雄叫びを上げ、ストームソーダーの背部ジェットエンジン付近の銀色の装甲を、擦れ違いざまに斬り付けた。この後の整備班の苦労を考え、深くは斬り付けなかったが。

その直後、ストームソーダーのコックピットに、模擬戦の終了とマミの敗北を示す文字が浮かんだ。

「あ～あ、ボクの負けかぁ…」

ストームソーダーを降りたマミがぼやく様に言う。

「よっ、お疲れさん。」

「あっ…センパイ。」

突然レイが現れ、マミは少し驚く。

「惜しかったなぁ、マミ。もう一息だったじゃねぇか。」

「え、そうですか？」

マミはまた少し驚く。マミ自身の評価では、攻めに行った所で悉くカウンターを食らい、挙げ句前方不注意で墜とされてしまい、まるでダメだったと思っていた。

マミがその事を話すとレイは、

「いや、攻め方はそんなに悪くなかったし、シグナムのカウンターをギリギリとは言え避けれたんだ。あれを避けんのは結構難しいぜ？」

と、レイは何のお世辞も無く言った。

「センパイ…」

「ま、最後のうっかりぐらいはどうにか直さねぇとな。」

「うっ…」

喜びかけたマミだったが、最後のレイの一言で反省した。

「そうだな。最後のアレが油断もあったのなら、直ちに直さんとい

かんな。」

管理局の制服に戻ったシグナムが、マミに歩み寄りながら言った。

「むぅ…副隊長まで…」

シグナムにまで最後のミスを指摘され、更に気持ちが沈むマミ。

「だが、航空型との戦い方の参考にはなった。礼を言う。」

シグナムは笑顔を軽く浮かべた表情でマミに言った。

「ほれ、シグナム副隊長殿もこう言ってんだし、元気出せよ。」

レイはうなだれるマミの頭を、猫でもあやすかの様に軽く撫でる。

「よーしよし、元気出せー。」

「もう、センパイ！　ボクは愛玩動物か何かですか！？」

「はっはっは。冗談だよ。…半分。」

「半分って言った？　今ボソッと半分って言いました！？」

「気のせいだ、気のせい。」

「もー、センパーイ！」

ホバーカーゴの格納庫に、楽しげな笑い声が響くのであった。

第五十九話　成長の兆し（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第六十話　山脈の先に（前書き）

久々におまけを付けてみました。
面白いかどうかは微妙ですが…

第六十話　山脈の先に

ウィグリド湖の湖畔にある帝国軍要塞。野を越え、雪が積もり始める山々を越えた共和国艦隊は、エントランス湾出発から十時間弱を掛け、この要塞に到着した。

「…こちらスターズF、要塞内部に進入しました。」
「同じくライトニングF、進入。」

機動六課フォワード陣が要塞内部に進入を始める。

「こちらアーバインだ。俺達も行かせてもらうぜ。」

アーバインにウィナーはサブマシンガンを、ヴァイスは愛銃のストームレイダーを携えて他の兵士達と共に要塞に突入する。
フォワード陣は途中でスターズとライトニングで二手に分かれ、廊下を駆けていく。

「うっ…！」

両足のマッハキャリバーを走らせていたスバルだったが、口元を押さえて突然足を止めた。
追い付いたティアナが見ると、廊下に帝国の兵士達の屍が横たえられ、床は血で染まっていた。

「……行くわよ、スバル。」
「え…あ、う、うん…」

ティアナも嫌悪感を示すが、なんとか耐えようと足早に廊下を進

む。

（…やっぱり、なかなか慣れられないわ……）

ティアナが内心呟く。ミッドチルダでは基本的に非殺傷設定をデバイスに施して戦っていた為、直接的に誰かを殺す事は無かった。だが、この惑星Ｚｉに非殺傷設定などという物は存在せず、戦いは常に生きるか死ぬか、命懸けで行われているのだ。尤も、魔法が存在しない他の世界ではそれは当たり前の話なのだろうが。

（まだまだ甘いって事かしらね…）

ティアナも将来執務官になれば、あらゆる事件の現場に赴き、その惨状を見る事になる。ごく少数でも、質量兵器を用いた大量殺人や虐殺事件もあるかもしれない。その時に血や死体を見てたじろいでいては、執務官など務まらない、とティアナは考えていた。

そんな事を思いながら走っていると、スバルが『指令室』と書かれた両開きの自動ドアを見つけた。

「…せーの、で突入するわよ。」

「…うん。」

既に陥落した要塞とは言え、何かが待ち構えていないとも限らない。ティアナとスバルは慎重になる。

「「せーのっ！」」

合図と共に自動ドアが開かれ、ティアナはクロスミラージュを、スバルはリボルバーナックルを構える。が、何かが襲い掛かる気配は無く、そこにはぽっかりと穴が空いたスクリーンと、床に転がる

兵士達の屍だけが存在していた。
ティアナは部屋に入り、司令官と思われる老人の死体へと歩み寄る。

「…心臓を拳銃で撃たれたのね…」

ティアナは死体の胸部を見て判断する。
その後も指令室の亡骸を見て回り、スバルが拳銃を握り締めた兵士の亡骸に辿り着いた。

「あれ…？　この人…」

スバルが見た兵士の表情には、『俺は最後まで戦い抜いた』とでも言いたげな、満足そうな笑顔が浮かんでいた。
そうこうしていると、アーバインから通信が入った。

『こちらアーバイン。今、どこにいる？　どーぞ。』
「こちらスターズ０４。要塞の指令室です。…兵士は全員死亡、大型モニターが破壊されています、どーぞ。」

ティアナは指令室の状況を報告する。

『こっちも似たようなモンだが……どうも妙だぜ、どーぞ。』
「…妙って、どういう事です？　どーぞ。」
『こっちはお前らのいる所よりも、どっちかってェと攻撃を受けやすい場所だ。なのに、大した被害が無けりゃ略奪された形跡も無ェ。どーぞ。』
「…確かに…」

アーバインの言う事が本当なら、確かに妙だ。

要塞は陥落させたら、普通は奪い取って拠点にするものだ。だがこの要塞にはゾイドと兵士の亡骸しか無く、肝心のこの要塞を陥落させた部隊が残っていない。

ならば、物資を奪って行ったのか。それにしたって、何かが奪われた形跡も無いという。大体、物資を奪うことだけが目的なら、要塞は要らなくなり、破壊していくはずだ。と言うか、要塞は重要な拠点となり得るので、攻略した要塞をそうそう破壊はしない。が、先程言ったように駐留している部隊がどこにもいない。

「つまり、陥落させた『だけ』ですね。」

『ああ。まるで、俺達に使ってくれと言わんばかりの状態だ。』

勿論これが罠である可能性もある。が、この要塞を陥落させた部隊が鉄竜騎兵団（アイゼン・ドラグーン）なら、トライアングルダラスやエントランス湾での事を考えると、そうでない可能性もある。

どちらにせよ、油断できない状況ではある。

『こちらライトニング０３。武器庫と思われる部屋を確認しました。これより進入します。』

割り込みでエリオからの通信が入った。

「こちらスターズ０４。了解、気を付けて。」

エリオは十分に用心し、扉を開く。その瞬間、後ろからキャロがシールドをエリオの正面に展開する。

「……」

エリオはストラーダを構えてしばらく様子を見る。特にトラップ

は無さそうだった。
エリオが慎重に部屋に入ると、大量の弾薬に機関銃、更に先程の戦闘で使われなかった兵器が並んでいた。
状況報告のため、アーバインとティアナに回線を繋ぐ。

「…こちらライトニング０３。弾薬や兵器等が、殆ど残されています。」
『何？　そのままか？』
「はい。特別、運び出された形跡はありません。」
『そうか……』

アーバインは腕を組んで、この奇妙な状況を考える。

『……よし、一旦、ホバーカーゴに戻るぞ。特に罠は無さそうだしな。』

アーバインの提案に全員が賛成し、探索を終了してホバーカーゴに戻っていった。

「……とまぁ、以上が探索結果になります。」

ホバーカーゴの小会議室。アーバインはボーグマン大佐やイスルギ少佐、アルドワーズ中佐やハーマン少佐やはやてに報告し、席に着く。

「なるほどな…確かに奇妙な話だ。」
「ええ。帝国本土の、しかも帝都への通り道にある要塞を、物資を残したままで敵である我々に明け渡すなど……」
ボーグマン大佐とイスルギ少佐も、狐につままれた様な怪訝な顔になる。
「……アイツら一体、何の目的で私達を助けるような真似をするんや…？」
はやてが両手を組んで考え込む。
「ですが、イスルギ少佐の部隊が偵察に向かった時、少佐達は攻撃を受けたのですよね？」
「……ああ。だがあの時、我々は工学迷彩を使用していたし、数発受けてもブレードライガーのシールドで軽く防げる程度の攻撃しかして来なかったが……」
「全力で排除しようとしていなかった、と言う事ですか？」
「確証は無いがな。」
『……』
室内が沈黙に包まれる。
「…まぁ、こうして考え込んでも埒があかんだろう。ケイ、また周囲の偵察を頼めるか？」
大佐が徐(おもむろ)に席を立ち、イスルギ少佐に偵察を頼む事で沈黙を破る。
「ハッ、了解しました。」

「それと、今回は広範囲に偵察部隊を展開したい。……はやて、ナンバーズの嬢ちゃん達は動けるか？」

大佐ははやての方を見て言う。オットーのステルス能力や、チンクとディードの身軽さに着目しての人選だ。

「ええ、大丈夫やと思いますよ。」

「そうか。じゃあ伝えておいてくれ。…今回の会議は以上だ。」

大佐は会議の終了を告げ、各々は部屋を出て行く。

『…ヴィータ、ギンガ、ちょっとええか？』

はやてはヴィータとギンガに念話を繋ぐ。

『今から一時間後、イスルギ少佐の部隊が偵察に出るさかい、ナンバーズの皆を連れて一緒に行ってほしいんよ。…ええかな？』

『ああ、構わねーよ。』

『一時間後ですね？　了解しました。』

『さよか。ほな、よろしく頼むで～』

ヴィータとギンガははやての指示を受け入れ、回線を切る。

「ほなリィン、私らも広域サーチに行くよ？」

「了解です！」

リィンは元気よく答え、はやての肩に乗ってはやてと共に艦の外に出て行った。

雪の積もる山々を、イスルギ少佐のブレードライガーと、サヤカ達のシャドーフォックスが駆けていく。
更にその上空にはマミのストームソーダーにサティ大尉のサラマンダー、大型レドームを搭載したプテラス達が編隊を組んで飛行している。

「クーイン少尉、足元には気を配れよ。先日の様には助けてはやれんからな?」
「は、はい!」

イスルギ少佐がサヤカに激を入れる。
雪が積もった事で、足元が滑りやすく不安定になっている。今居る場所は谷間なので危険性は少ないが、もし崖が近くにある道を進む場合は、いくらゾイドに乗っているとは言え、落ちれば助からないだろう。

「サティ大尉、其方のレーダーに反応は無いか?」
「いやァ、これと言って特には……」

イスルギ少佐は上空のレーダー部隊に訊くが、サティ大尉のサラマンダーや他のプテラスのレーダーには、何も奇妙な物は映ってはいなかった。

「少佐ァ、もう少し範囲を広げてみましょうや。」

サティ大尉が提案する。

「いや、無闇に分散させて撃墜される可能性もある。このまま行くぞ。」

「…了解。」

イスルギ少佐は少しだけ考えて却下する。

「だが、貴様等が居なくては我々が有利に戦えん。…期待している。」

「へへっ、了解ッス！」

半ばガッカリしかけたサティ大尉だったが、期待されていると知るとすぐにやる気を出した。ベテランの割には単純な性格である。

とは言え、イスルギ少佐はただサティ大尉のモチベーションを上げる為だけにそんな言葉を言った訳ではない。山岳地帯という足場の悪い地形に加え、降り積もる雪。こういう時、この地形が得意な機体や航空型と交戦した場合、イスルギ少佐のブレードライガーなどだけでは分が悪い。そこで、地上の戦力を助けるため、地形に左右されにくいサティ大尉のサラマンダーやプテラスが、そういった敵機の迎撃用に必要になってくるのだ。

（…とは言っても、この状況で交戦しては我々が圧倒的に不利……。出来れば敵と遭遇したくはないな…）

イスルギ少佐の心中は、とても穏やかとは言い難かった。

「…シャドー０１よりスターズ０２へ。其方の状況はどうか？」

イスルギ少佐は帝都方面の偵察に向かっているヴィータに、通信の回線を繋ぐ。

『こちらスターズ０２。…丁度、そっちに連絡しようとしてた所です。』

「…何があった？」

「ゲフィオン山脈付近の平地に、帝国の大部隊を確認。おそらく、ウィグリドの要塞を取り返そうとしてるかと。」

『…そうか、了解した。一旦退いて、その事を本隊にー』

「…！！　待って下さい、山脈側に大規模な部隊の反応を確認！」

ギンガが通信に割って入る。

『何！？　鉄竜騎兵団か！？』

「確認は出来ていませんが、おそらくは。」

ギンガの言葉の直後、山脈の隙間からミサイルが飛び出し、帝国の部隊に不意打ちを仕掛ける。

ミサイルは部隊のド真ん中に直撃。エレファンダーのＥシールドジェネレーターを破壊し、アイアンコングの戦術ミサイルは誘爆を

引き起こして味方を巻き込んだ。
大部隊はたちまち混乱状態に陥り、その隙に山脈からレドラーBCが飛来して砲撃を食らわせる。
更にディマンティスやハンマーロック、ディロフォサウルス型の小型ゾイドのディロフォースにアイアンコングが追撃を掛け、体勢を立て直そうとする帝国部隊を掻き回すと、面白い様に瓦解していった。

「な…なんつー強さだよ、ありゃあ…」

その様子を隠れて傍観するヴィータ達は、鉄竜騎兵団の圧倒的な強さに唖然としていた。
そんな中、帝国のアイアンコングが放った砲撃が、ヴィータ達のすぐ近くに流れ弾となって飛んで来る。

「うおっ！？」

ヴィータはその砲撃が着弾した際の爆発で、ハッと我に返る。

「ヴィータ副隊長、このままでは我々も巻き込まれかねません。撤収を提案します。」

チンクがヴィータに進言する。

「…ああ、そうだな。ギンガ！」
「は、はい！　そ、総員、撤収ッ！」

偵察部隊は一斉に転進し、山脈から全力で撤退を始める。

「ギンガにチンク、オットーにディードはアタシと一緒に残れ！

少しでも多く、情報を持って帰るぞ！」
「「「「了解！」」」」」
「アーバイン！　指揮は頼んだ！」
「おう、任せとけ！」

偵察任務用にステルスバイパーに乗ったアーバインに撤退の指揮を任せ、ヴィータ達五人は戦場に残って情報収集を開始した。

『こちらアーバイン。ヴィータ副隊長等五名を残し撤収を開始しています。其方に何か進展は？』

ユグドラシル山脈のイスルギ少佐に、アーバインから通信が入る。

「……」
『…？　少佐？』

イスルギ少佐からの返事が返って来ないのを不審に思い、アーバインはもう一度声を掛ける。

「…進展、か……。あったぞ、これ以上無い物がな…。」

イスルギ少佐のブレードライガーのモニターには、険しい山岳地

帯の中に建設された、軍需工場が併設された大規模な基地の映像が映し出されていた。

～おまけ～

ーウィグリド要塞探索中の事ー

ヴァイス
「どうだウィナー、なんかめぼしい物はあったか？」

ウィナー
「そうッスね……おおっ！？」

ヴァイス
「どうした？」

アーバイン
「何か見つけたのか？」

ウィナー
「ちょ、これ見て下さいよ！」

ヴァイス
「こ、これは！　ピーー（自主規制音）な本!?　ちょっと見せてみろ！」

ウィナー
「何言ってんスか！　見つけたのは俺ッスよ!?」

アーバイン
「おめぇら……そういうのは後にしろよ。」

ヴァイス
「何言ってんスかアーバインの旦那ァ、旦那もこういうの、好きでしょ？」

アーバイン
「う……」

ウィナー
「ほら、口ごもってるじゃないッスか。なんだったら、読む順番譲ってあげるッスよ。」

アーバイン
「チッ……ひとまず休憩だ、休憩。」

ウィナー
「へへっ、そうこなくっちゃ。他にも無ェかな～っ♪」

アーバイン
「おおっ…こ、コイツァ……」

ヴァイス
「旦那も好きッスねェ。」

アーバイン
「ケッ、うるせーや。」

シグナム
「…お前たち、何をしている？」

アーバイン
「うおっ！？」

ヴァイス
「ね、姐さん！？」

シグナム
「まったく…またこの様な破廉恥な物を…。それにキャバリエーレ、お前まで何をしているのだ。」

アーバイン
「チッ、だから俺はいいっつったのによ…」

ウィナー
「…ん？　何だこりゃ？」

ヴァイス
「どーした、ウィナー？」

ウィナー
「何かまた本が…」

アーバイン
「あぁ？　またアレな本でも出て来たか？」

ウィナー
「いや、これは…『これで勝つる、激烈剣術指南』？」

シグナム
「…何！？　何故、ミッドで生産終了になった幻の書物がここに！？」

ヴァイス
「ああ、きっと前に惑星Ｚｉに漂着したっていうＸＶ級の積み荷に含まれて……って、姐さん？」

シグナム
「貸してみろ、キッド少尉！」

ウィナー
「うわぁっ！？」

シグナム
「ふむ、なる程……」

ヴァイス
「姐さん、シグナム姐さん？」

シグナム
「……」

ヴァイス
「ダメだこりゃ、完全に集中しちまってる。」

アーバイン
「…やれやれ、人の事言えねぇじゃねぇか…」

第六十話　山脈の先に（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第六十一話　それぞれの戦い方（前書き）

先日、ゾイドサーガ2を中古屋で２８０円で買いました。
資料が増えるのは良いんですが、何でゾイドのゲームって中古屋だとびっくりするほど安いんでしょう…

第六十一話　それぞれの戦い方

「何！？　ウィグリド湖に向かった部隊が壊滅しただと！？」
「はい…。例の、鉄竜騎兵団（アイゼンドラグーン）による攻撃との情報が…」
「くっ、またしても奴らが……！」

シュバルツ中佐は兵士からの伝令を聞き、鉄竜騎兵団の行動に憤りを感じていた。

「…ご苦労だった。下がってくれ。」
「ハッ！」

シュバルツは伝令を終えた兵士を下がらせる。

「くっ…！　何故だ、何故奴らは我々同胞に牙を剥く…！？」
「…由々しき事態ですな、シュバルツ中佐。」

シュバルツは自身に声を掛けた者が居る方を向く。

「…ツェルカンプゥ少佐か。」

シュバルツに声を掛けたサングラスの男性は、アイン・ツェルカンプゥ少佐という。

「ガイロスの部隊でありながら、同胞を蹂躙するなど……。私としては、これ以上鉄竜騎兵団を放置しておく訳にはいきません。」
「どうしようと言うのかね、ツェルカンプゥ少佐？」

シュバルツは腕を組んで問う。

「…私の部隊で彼奴等を捜索し、正体を突き止めます。出撃許可を。」

ツェルカンプゥ少佐はシュバルツに歩み寄り、サングラスを外して真っすぐに彼の眼を見つめて頼み込む。

シュバルツはツェルカンプゥ少佐の鋭い眼差しに物怖じしなかったが、少佐の熱意は伝わって来た。普段はクールなシュバルツだが、人一倍義を重んじ、そしてなにより、熱い魂を持つ男であった。

「……よし、出撃を許可しよう。ただし、無茶はするな。この大陸には、共和国軍も来ているのだからな。」

「ハッ！！　ありがとうございます！！」

ツェルカンプゥ少佐はお辞儀をすると、駆け足で格納庫に向かって行った。

「少佐、どちらへ？」

ツェルカンプゥ少佐の隊の副隊長、シピンが話しかける。

「シピンか。我が隊はこれより、鉄竜騎兵団捜索の任に就く。他の兵にも伝えておいてくれ。」

「ハッ！」

シピンは放送室へと走って行った。

ツェルカンプゥ少佐はやや速足で歩き、自身の相棒であるライトニングサイクスが置かれている格納庫に到着した。

素早くコックピットによじ登り、キャノピーを開いて座席に座ってシステムを起動させる。

「全員、揃ったか？」
「ハッ！　欠員、ありません！」
「よし。…サンダーボルト中隊、出撃！」

ツェルカンプゥ少佐の合図と共に格納庫のハッチが開き、少佐のライトニングサイクスを先頭に次々とライトニングサイクスが出撃していく。

（待っていろ、鉄竜騎兵団…。貴様等は必ず、私が捕らえてみせるッ！）

操縦桿を握る、ツェルカンプゥ少佐の両手に力が込められた。

ユグドラシル山脈にて偵察任務に当たっているイスルギ少佐達は、険しい山々の中に建設された巨大な基地を発見していた。

「少佐…これってまさか…！」

サヤカがイスルギ少佐に言う。

「ああ…。帝都を護るにしては進行ルートから外れすぎ、中継地点にしては立地条件が悪い…。典型的な秘密基地だ。おそらく…」

「鉄竜騎兵団の本拠地…っつう所ッスかねェ？」
「…その可能性が極めて高いだろうな。」

イスルギ少佐は美味しい所を持って行かれた、と言いたげな表情を浮かべる。なんだかんだ言っても、イスルギ少佐も負けず嫌いな所はあるのだ。

「それで、どうします？」

サヤカがイスルギ少佐に訊く。
イスルギ少佐はすぐに表情を元に戻し、サヤカの問いに答える。

「……どうもこうも、まさか我々だけで陥(お)とせる訳でもあるまい。ここは一度要塞に戻って…」
「少佐、ちょいとお待ちを。…どうやら奴さん、俺らを逃がしてくれる訳にはいかないらしいですぜ？」

そうサティ大尉が言うと、周囲には既にハンマーロックが、空にはグレイヴクアマ型の小型飛行ゾイド『グレイヴクアマ』数十機がズラリと並べられ、イスルギ少佐達を包囲しようとしていた。

「…そのようだな。…よし、サティ大尉は包囲を突破してこの事を本隊へ通達、残った者は後退しつつ迎撃。本隊が来るまでの時間を稼ぐ！」
『了解ッ！！』

サティ大尉はサラマンダーを加速しながら機体を宙返りさせ、背面飛行の体勢を取る。

「退(ど)きやがれ！　バスターキャノン、発射ァ！！」

サラマンダーボンヴァーンのバスターキャノンから極太の光線が放たれ、退路を阻むグレイヴクアマを一掃する。
更にサティ大尉はブースターを最大出力で噴かせ、その空域を離脱しようとする。

『くっ、逃がさんッ！！』

グレイヴクアマの群れがサラマンダーを追おうとする。

「させるもんですか！」

が、シャドーフォックスの鋼鉄をも貫く威力を誇るレーザーバルカンの掃射によって、グレイヴクアマは次々と撃墜されていく。

『このぉっ！』

サヤカのシャドーフォックスに背後からハンマーロックが襲い掛かり、その中型ゾイドとは思えない力を持つ剛腕で、レーザーバルカンの砲身を押さえつける。

「きゃあっ！？」

グレイヴクアマの迎撃に気を取られていたサヤカは反応が遅れ、回避行動に移れなかった。

「ちょっと、離しなさいよ、このゴリラッ！」

サヤカは操縦桿を動かしたり、ペダルを踏み込むなどして抵抗するが、機動性重視のシャドーフォックスでは、パワーが売りのハン

マーロックには到底敵わない。徐々に押され、レーザーバルカンの砲身がミシミシと悲鳴を上げ始めている。

「ぐぎぎぎ…！　や、ヤバいかも…！」

「じっとしていろ、クーイン！」

イスルギ少佐の声が通信機越しに聞こえ、サヤカは今の姿勢を維持する。

「はぁぁぁぁぁぁあっ！！」

次の瞬間、レーザーブレードを展開して突進して来たイスルギ少佐のブレードライガーが、ハンマーロックの両腕を上半身ごと両断した。

ブレードライガーは前脚を軸に回転して体勢を整え、余計な滑走を防ぐ。

「…大丈夫だったか？」

「は、はい！　ありがとうございます！」

サヤカは助けてくれたイスルギ少佐に感謝の言葉を述べる。

「ダメージは、どれくらい受けた？」

「えっと…レーザーバルカンの耐久度が低下した程度で、他は特にありません。」

「そうか。サティ大尉も、このエリアを離脱した。これでようやく、自分の敵に集中できるぞ。」

そう言うと、イスルギ少佐は他のシャドーフォックスも集め、陣形を組み直させる。

「いいか、とにかく粘れ。本隊が来るまで、何としてでも粘るんだ！」

『了解！』

イスルギ少佐の言葉に、全員が力強く返事を返した。

『…こちらストラトス０１。ジェミニィ、応答願う！』

サティ大尉のサラマンダーはほぼ最高速度で巡航を続け、プテラス・ジェミニィが電波を拾える範囲まで辿り着いた。

『こちらジェミニィ！　どうされました!?』

「鉄竜騎兵団の基地と思われる建造物を確認した！　イスルギ少佐が交戦しているが、戦況は不利だ！　ウィグリド要塞へ大至急援軍要請と、俺のサラマンダーの着陸許可を出してくれ！」

『了解！』

ジェミニィのメインパイロットは通信士に指示を出し、すぐにウィグリド要塞の指令室に回線を繋がせる。

「ジェミニィより入電！　『イスルギ少佐の隊が、鉄竜騎兵団の部隊と交戦中。至急、援軍を送られたし』とのことです！」

ジェミニィからの報告が、オペレーターの口からボーグマン大佐達に伝えられる。

「分かった。セレス、俺の留守は任せたぞ。」
「了解です、大佐。ご武運を。」
「おうよ！」

大佐はアルドワーズ中佐とハイタッチし、ネオタートルシップに積まれているブレードライガーＡＢの処へ向かう。
屋外に出ると、フェイトとシグナムが走ってくる。

「大佐、私とシグナムが先行します。よろしいでしょうか？」
「ああ、俺たちは出発に時間が掛かるからな…。よし、行って来い！」
「「了解！」」

フェイトとシグナムは敬礼して自身のデバイスを取り出す。

「バルディッシュ！」
「レヴァンティン！」

「「セットアップ！！」」

二人が高らかにコールすると、一瞬で衣服がバリアジャケット及び騎士甲冑に変化する。

そしてそのまま、二人は金色と紫色の光を残して飛び立って行った。

「はぁ～っ、もう出撃したのですか。早いもんですじゃ。」

その場に居合わせたベテラン風の老整備士が呟く。

「…そうだな、確かに早い。それに比べて俺達ァ、機体をデカい艦に載せないと山越えはキツいからなぁ。どうしてもアイツらには負けるぜ。」

それは時間が掛かれば掛かるほど、現場に到着するのが遅れ、助けられた筈の命が失われていくという意味も込められている、大佐の皮肉でもあった。

フェイト達のような魔導士は、デバイスさえあれば瞬時に戦闘態勢を作れるが、ゾイド等の兵器はそうもいかない。機体の調整に始まり、各部の最終チェック、ハンガーからハッチへの移動等、やるべき事が多く時間が掛かる。

大部隊が移動するともなると、まず機体を艦に載せなければならない為、さらに時間が掛かる。少なくとも、魔導士の部隊が準備を済ませるのに要する時間よりも掛かってしまう。

「…図体ばかりデカくても、役に立たなければ意味は無い、な……」

大佐はネオタートルシップに向かいながら、そう呟いた。

「なぁに、どれだけ魔導士さんが優秀だろうが、ゾイドにだって良い処は山程ありますわい。」

老整備士が大佐に言う。

「例えば、パワー。魔導士と言えども、やはり人の子。ゾイドの馬力には敵いますまい。」

老整備士は上着の袖を捲り、自らの力瘤を見せる。

「ま、適材適所という事ですじゃ。そんな事を気にするなど、らしくありませんな、大佐殿。」

ほっほっほ、と思わず気が抜けそうな笑い声を上げながら、老整備士は大佐より先にネオタートルシップの機体ハンガーに向かっていく。

「…そうだ、俺は今更何を言ってんだ。」

大佐の顔に闘志が戻り、顔を上げて老整備士の元へ駆けて行き、追い抜いた。

「ご老人、お陰で目が覚めた。感謝するよ！」

「ほっほっほ、礼を言うのは早いですぞ。まだ私の仕事ではお役に立てておりませんからのぉ。」

老整備士はよく磨かれた、銀色に輝くスパナを取り出して微笑んだ。

フェイトとシグナムは全速力で飛行し、連絡のあった座標の地点へ向かう。

「…！　シグナム…！」

フェイトが指差す。その先には、頻発する大小の爆発があった。

「あれか…。私が右から行く。テスタロッサは左を頼む。」

「はい。」

フェイトとシグナムは二手に分かれ、戦場を挟み込むように立ち回る。

『！　隊長、敵の増援です！』

ハンマーロックのパイロットが、フェイトとシグナムの戦場への進入を隊長に伝える。

『狼狽えるな！　機影はたったの二つだ、物量では我々が勝っている！』

「果たして、そうか？」

『！？』

通信にシグナムが割り込む。

「飛竜、一閃！！」

シグナムが振り下ろした鞭の様にしなる刀身は、ハンマーロック達の体を上半身と下半身に斬り分け、一掃する。

『な…！　あ、あれは烈火の将…！』

「プラズマランサー、ファイア！！」

続いてシグナムとは真逆の方向から、金色に輝く雷の弾丸が大量に降り注ぎ、グレイヴクアマの群れに直撃して地に叩き落とした。

「お待たせしました、イスルギ少佐！」

「シグナム二尉にハラオウン執務官か…。他に援軍は居ないのか？」

「いえ、素速く動ける我々が先駆けて参りました。」

イスルギ少佐は辺りを見渡してから訊ね、それにシグナムが答える。

「そうか。なら、本隊が到着するまでの時間稼ぎの手伝いを頼む。」

「お戯れを…我々は時間稼ぎの為に先行したのではありません。」

「…何？」

イスルギ少佐の言葉に、シグナムは淡々とした口調で否定する。

「…私とテスタロッサは、この基地を陥落させる為に、ここに居るのです！」

シグナムは両目を見開き、レヴァンティンを刀身を戻して構え直

し、力強く言い放った。

「ほぅ…言ったな？　ならば、貴様が口だけではない事を証明してみせろ！」

「了解！　征くぞ、テスタロッサ！」

「はい！」

シグナムとフェイト、イスルギ少佐のブレードライガーが一斉に加速し、残りのハンマーロックやグレイヴクアマに向かう。

『き、来ます！　隊長！』

『ひ、怯むな！　落ち着いてーー』

隊長は指示を出そうとするが、それより先にザンバーモードのバルディッシュに、胴体とコックピットのある頭部を切り離されてしまう。

「紫電、一閃！」

レヴァンティンの刀身が炎に包まれ、その一撃は中型ゾイドの中でも硬い部類に入るハンマーロックの装甲を袈裟斬りに両断した。

「はぁぁぁあっ！！」

更にイスルギ少佐のブレードライガーも次々とハンマーロックを斬り払い、気がつけばフェイトとシグナムの登場で、戦局は共和国側に傾きつつあった。

『な、なんだこいつら!?　化け物か!?』

その一騎当千並みの強さに、鉄竜騎兵団の兵達は恐れ震え上がっていた。

「少佐！　もしかしたらもしかすると、私達だけで……！」
「いや…どうやら、そうはいかんらしい。」

サヤカが勝利を確信しかけた時、鉄竜騎兵団の基地のハッチが開き、中から三機の隊長機と思われる機体を先頭に、アイアンコングやダークホーン、黒く塗られたレドラーの『ブラックレドラー』を有する大部隊が姿を現した。

『貴様ら、たった数百にも満たん偵察部隊相手に、何を手こずっている。』

ジェノトルーパーに乗る仮面の男が、あまりの不甲斐なさを感じて同胞に言い放つ。

『おっ、ライガータイプが居るじゃねぇか。アレ、俺様の獲物な。』

セイバータイガーＡＴに乗る青年が、イスルギ少佐のブレードライガーを見るなり言った。

『フン、魔導士ごときなど、私が駆逐してくれる！』

レドラーのカスタムタイプであるブラッドラーに乗る女性は、魔導士に対して対抗意識を燃やしている様な台詞を言う。

『ガ、ガルド中佐！　アボロス中尉、リバイアス大尉までもが！？』
『退(ど)け。奴らは、我々が始末する。』
『し、しかし…！！』

兵士達は、まだやれると言いたげな口調で、ガルド中佐と呼ばれた仮面の男に嘆願する。

『くどいぞ、貴様ら！　貴様等では、足を引っ張る程度にしかならんのだ！』

『くっ…！』

リバイアス大尉と呼ばれた女性が、兵士達を叱責し、退かせた。

「シグナム、イスルギ少佐……」

「ああ。どうやら、隊長格が出て来たらしいな。」

「…それで？　奴らが出陣しても、我々だけでもこの基地を陥落できると言えるのか、シグナム二尉？」

イスルギ少佐は、シグナムに皮肉混じりに言う。

「…それ位の気概が無ければ、この基地は落とせません。」

「フッ…そうだな。だが、無理はするなよ？　貴様には、ヴァルハラでも一仕事してもらう予定だからな。」

「フフッ、了解です。」

シグナムはレヴァンティンを構え直し、眼前に並ぶ鉄竜騎兵団の大部隊を見据えて身構える。

その直後、先陣を切ってジェノトルーパー、ブラッドラー、セイバータイガーＡＴが崖を駆け上ってシグナム達に立ちはだかった。

「さて…貴様等には、早々にお帰り願おうか。」

「…可翔型のジェノザウラーか…。面白い！」

ガルドのジェノトルーパーを前に、シグナムは闘志に火を点ける。

「テメェの相手はこの俺様だァ！　覚悟しやがれよォ！？」

「フン…。威勢だけは良いようだな。」

セイバータイガーＡＴのパイロット、レッツァー・アボロスはイスルギ少佐のブレードライガーに興奮するが、イスルギ少佐は逆に冷静な様子で操縦桿を握る。

「プロイツェン様の為、お前は私が倒す！」

「私だって…負ける訳には、いかないんだ！」

早々に勝利宣言するリバイアスに、ザンバーモードのバルディッシュを握る手に力を込めるフェイト。

こうして、エース級同士の戦いは始まるのだった。

第六十一話　それぞれの戦い方（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第六十二話　仲間の力（前書き）

前回の投稿からひと月も経ってしまいました。
これじゃあ夏休みにガンガン投稿して、多くの人に見て貰おうという俺の作戦が……ゲフンゲフン。

第六十二話　仲間の力

暗黒大陸に向かうネオタートルシップを中心に構成された共和国軍艦隊は、ウルトラザウルス艦隊が横断したアンダー海を、同じように横断していた。

「ん～っ、いい風～っ♪」

クラーケンの甲板で、なのはが体を伸ばしている。

「よっ、なのは。」
「あ、バン君。」

なのはが振り向くと、釣竿とクーラーボックスを持ったバンが歩いて来ていた。

「その荷物…釣りでもするの？」
「ああ。この辺には滅多に来ないからな。」

バンはなのはの隣に腰を下ろし、釣りの準備を始める。

「なのはもやる？」
「あー…うん、やるやる。」

バンはもう一本の竿をなのはに手渡す。

「で、エサはこれなんだけど…」

バンはなのはに、エサとして用いられるミミズの様な虫の入った

入れ物を見せる。中で虫がうねうねと蠢き、虫嫌いの人が見たらゾッとするような光景だ。

「えっと……俺が付けようか？」

「ううん、これ位は触れるから大丈夫。」

なのはは虫を一匹摘むと、エサとして丁度いい位の大きさに千切って釣り針に刺す。

それを見たバンは、唖然とした表情になっていた。

「……」

「…？　バン君、どうかした？」

「いや、女の子なのによく気持ち悪がらないで触れるな、と思ってさ…」

普通、女子はミミズの様な環形動物を毛嫌いする傾向にあるが、随分あっさりと触った上に千切ったなのはを意外に思っていた。

「まぁ、今までいろんな事があったからねぇ。これ位じゃ、怖がらなくなっちゃったみたい。」

「ハハッ、年寄り臭いな。」

「……え、何か言ったかな？　少し、頭を冷やす必要がありそうな言葉が聞こえたんだけど…」

「何モ言ッテマセンゴメンナサイ！」

バンは自らの失言でなのはの雰囲気が変わったのを天性の勘で察知し、物凄い勢いで平謝りした。その時のなのはの背後には、バンが見たことが無い筈の般若の面が浮かび上がっていたという。

それはともかく、バンとなのはは竿を振って糸を垂らし、魚が掛かるのをのんびりと待つ。

空に浮かぶネオタートルシップから、レイノスが数十機ほど飛び立っていく。周辺の警戒に当たるのだろう。
しばらくすると、木刀を担いだタクマが甲板に上がって来た。

「あ、フライハイト中尉、高町一尉。釣りですか？」
「ああ、タクマか。せっかくこんな沖まで来たことだしな。」
「タクマ君、私の事は名前で呼んでって前に言ったよね？」
「あ…す、すいません。何か慣れなくて…」

なのはに呼び方を指摘され、後頭部を掻きながら言うタクマ。

「ですから、フライハイト中尉が羨ましいですよ。何の躊躇いも無く、高町一尉を名前で呼べるんですから。」
「へ？　なのはって言うのに、何か躊躇わなきゃいけない理由でもあんの？」

バンは人の名前を呼ぶのを特に深く考えた事も恥ずかしがる理由も無かったし、それが当たり前の事だと思っていた。バンの鈍感な性格の所為だろう。

「そういう所ですよ、フライハイト中尉の事が良いなとか思うのは。」
「ふーん…？」

バンはなんだかよく分からず、釣竿の先端を何気なく見る。

「…あ！　引いてるぞ、なのは！」
「ふぇっ！？」

なのはが握る釣竿の先端がピクピクと揺れ始め、海面に浮いてい

たウキが沈んだ。何かが食い付いたのだ。

「頑張れ、なのは！」

「お、重いッ…！」

なのはは立ち上がって力を込めて釣竿を引くが、獲物がかなりの大物らしく、なのはが力負けしている。

「タクマ、手伝うぞ！」

「は、はい！」

バンとタクマも立ち上がり、バンがなのはの、タクマはバンの腰に手を回して加勢する。

「ふぉぉおッ…！　こ、これはデカい…！」

バンは歯茎が剥き出しになる程に顎と両手に力を込め、なのはが海に引きずり込まれない様に踏ん張る。

「な、なのはッ、離すな、絶対に離すなよ！？」

「う、うん！」

なのはは両手に更に力を込め、絶対に離すまいと釣竿を体に引き寄せる。

そんな中、甲板にジークが上がってきた。

「あ、ジーク！　頼む、手伝ってくれ！」

ジークに気付いたタクマが声を掛ける。

『…キュイ！』

ジークはおそらく了解したのだろう。歩いて真っ直ぐなのは達の所に――

「あ、あれ！？　ジーク！？」

――来なかった。ジークは近くに置かれているスピノサウルス型工兵ゾイド、スピノサパーの所へ向かっていた。それはもう、真っ直ぐに。

「ちょ、ジーク！　お前のご主人がピンチだってのに、ほったらかしはないだろ！？」

タクマがジークに向かって叫ぶ。

「大丈夫だタクマ、あれでいい。」

「へ！？」

バンの言葉の直後、ジークは体をハート型に変形させて飛び上がり、スピノサパーの頭部から融合して合体した。

スピノサパーのキャノピーにジークの顔を思わせる模様が入り、軽く雄叫びを上げてから動き出す。

スピノサパーの背部に搭載されたアームを動かし、なのは達をいっぺんに掴んだ。

「いいぞジーク！　そのまま引っ張ってくれ！」

『キュイ！』

バンの合図を受け、ジークはなのは達を掴んでいるアームを、勢

い良く持ち上げた。

「きゃあっ！？」
「おおおっ！」
「うわぁっ！？」

持ち上げられた際の急な加速度で、なのは達はジェットコースターに乗った時に似た感覚を覚える。そしてその力は針に掛かった獲物にも伝わって海面から飛び出し、甲板にその巨体をを現した。

「う、うわぁ…。バン君、タクマ君…」
「あ、ああ。コイツは…」
「すごく、大きいです…」
『…キュイ。』

なのは達は釣り上げた魚のあまりの巨大さに、思わず喉を鳴らす程驚いていた。

「オラオラオラァ！」
「くっ…この男、やるっ！」

鉄竜騎兵団（アイゼンドラグーン）の秘密基地では、エース級同士による激しい戦いが繰

り広げられており、レッツァーの駆るセイバータイガーＡＴに、イスルギ少佐は苦戦を強いられていた。

「貴様、ただ騒がしいだけの男ではないようだな。」
「おうよ！　俺様の名前はレッツァー・アボロス！　ライガーを狩る事、それが俺様の生き甲斐よォ！」
『ガォォォオン！！』

レッツァーは高らかに名乗り、それに呼応するようにセイバータイガーＡＴもまた、雄叫びを上げる。

「そうか…。私はケイ・イスルギ、階級は少佐だ。…ライガーを狩るのが貴様の生き甲斐と言うなら、我が愛機の牙をへし折り、屈伏させてみせろ！」
「ヘッ、言われなくてもそのつもりだぜェ！！」

イスルギ少佐はレッツァーを挑発し、レッツァーもまた、その挑発に真っ向から勝負を挑む。
両者とも同時に走り出し、レッツァーは三連衝撃砲を、イスルギ少佐は二連ショックカノンを走りながら放つ。が、走りながら撃った為に射線がずれ、牽制程度にしかならず大したダメージには至らない。

「オラァ！！」

レッツァーのセイバータイガーＡＴは砲撃を止め、イスルギ少佐のブレードライガーに飛びかかると、ストライククローでコックピットを斬り裂きに掛かる。
それに対し、イスルギ少佐のブレードライガーは足を止め、なんとシールドも張らずに襲いかかるストライククローを待ち構える。

「貰ったァ！」
「…そこっ！」

ストライククローが命中する寸前、イスルギ少佐のブレードライガーがセイバータイガーＡＴの右に回り込み、その前脚に噛み付いた。

「何ィ！？」
「せぇいッ！」

一瞬の出来事に驚くレッツァーだが、イスルギ少佐はそんな事はお構い無しに、セイバータイガーＡＴの勢いを利用してブレードライガーを一回転させ、セイバータイガーＡＴを投げ飛ばした。

「がっ！？」

セイバータイガーＡＴは機体をゴツゴツした山肌に叩き付けられて転がり、レッツァーにも衝撃が伝わる。

「隙ありッ！」

勿論、これで終わりではない。イスルギ少佐は操縦桿を一気に押し込み、ブレードライガーのブースターを点火させて急加速、更にブレードを展開すると、セイバータイガーＡＴ目掛けて突進する。

「叩き斬れ、ライガー！」
「ちぃッ！」

ブレードはレッツァーの目前に迫り、セイバータイガーＡＴを両

断せんとする。レッツァーはすぐにセイバータイガーATを起こし、緊急回避に移る。

その判断が功を成したのか、ブレードの一閃はセイバータイガーATのスタビライザーを斬り落とすに留まった。

「なッ…！　あの体勢から、避けただと!?」

イスルギ少佐は完璧に『捉えた』と思っていた。が、レッツァーの驚異的な反応速度にその確信が打ち砕かれ、イスルギ少佐は驚いていた。

「へ…へへッ、これこれ、このスリル！　これがあるから、ライガー乗りとの戦いは止められんねぇのさ!」

レッツァーはギリギリで回避に成功した事よりも、ライガーとの戦いで生死をさまよいかけた事のスリルに喜びを感じていた。

「少佐さんよォ…もっともっと、俺様と殺し合おうぜ!!」

レッツァーのテンションが上昇するにつれ、セイバータイガーATの雄叫びも大きく、荒々しくなっていった。

イスルギ少佐とレッツァーが戦っている近くで、シグナムとガルド中佐もまた、激しい戦いを繰り広げていた。

「小賢しい…墜ちよ！」

ガルドのジェノトルーパーは機体を弾丸の様に回転させ、背部に搭載された四つのパルスレーザーライフルをシグナムに向けて乱射する。

「くっ！」

シグナムは飛来するレーザーの間を縫って回避しつつ、ジェノトルーパーに接近しようとするが、激しい弾幕に阻まれて思うような戦いが出来ていない。

『ピピピッ！』

「む、撃ちすぎたか…」

ジェノトルーパーは数秒間に渡ってレーザーライフルを連射したが、それによる砲身のオーバーヒートを避ける為に一時的に射撃を中止する。

「弾幕が止んだ…今だ！」

シグナムはそれを好機と捕らえ、ジェノトルーパーへ突撃する。

「甘い！」

ガルドは操縦桿を操作すると、ジェノトルーパーの右腕のストライククローが開き、ロケットパンチの如くシグナム目掛けて放たれ

た。

「くっ、レヴァンティン！」

『Ｊａ！』

シグナムはレヴァンティンのカートリッジを一発使用し、魔力を込めた斬戟で弾き返そうとする。

――ガキィィン！

「ぐあっ！」

だが、人の体以上の大きさと質量を持ち勢いよく放たれた鋼鉄製の爪は、レヴァンティンとほんの数秒間だけ拮抗した後、その刀身ををシグナムごと跳ね返した。

弾き飛ばされたシグナムが体勢を立て直そうとしている時、発射されたジェノトルーパーの右手はワイヤーによって巻き取られ、元々あった右腕に戻される。

そしてジェノトルーパーの顔がシグナムの方を向き、緑色に光るカメラアイがその姿を捉えた。

ガルドはすぐに機体全体をシグナムに向け、ジェノトルーパー頭部のレーザーガンを数回連射する。

シグナムは一・二発目を避け、三・四発目をレヴァンティンで弾いてジェノトルーパーに接近する。

「はぁぁぁぁあッ！！」

シグナムはジェノトルーパーの下に回り込むと接近する際の加速力を利用し、ジェノトルーパーの顎目掛けてレヴァンティンを振り上げる。

「ぬぅッ！」

ガルドはとっさにジェノトルーパーの右腕を動かし、レヴァンティンの一撃を防ごうとする。だが、先程のレヴァンティンとの拮抗によるダメージが蓄積されていた所為か、鋼鉄の爪は一撃を受け止めると同時に亀裂が入り、一部が砕け散った。

「なッ…！　鋼鉄製のクローが…！？」

ガルドはレヴァンティンの一撃とシグナムの力に驚き、仮面の下の目を細める。

「……恐るべき太刀筋だ。……流石は烈火の騎士といった所か。」

「誉めてくれるのは嬉しいが、手加減する気はないぞ？」

シグナムはジェノトルーパーから離れすぎない程度に距離を取り、レヴァンティンを中段の位置で構え直す。

「その様な意図は毛頭無い。が、貴様が僅かなりとも手加減をすれば、間違い無く死ぬ事になるだろうがな。」

「何…！？」

ガルドの言葉の直後、ジェノトルーパーの頭部から尾の先端までが一直線上に伸び、尾部の装甲が開いて数基の放熱フィンが姿を現わす。そしてジェノトルーパーの口が開き、口腔内に装備された集束荷電粒子砲の砲口がシグナムに向けられる。

『Ｇｅｆａｈｒ！（危険！）』

「くっ、荷電粒子砲か！　あれは空中でも撃てるというのか！？」

集束荷電粒子砲にエネルギーが集束し、発射準備が進められる。
その隙に、シグナムは退避しようとする。が、シグナムの進路上にオートパイロットのザバット十数機が立ちはだかる。

「足止めか……いいだろう、叩き斬ってくれる！」
『Ｓｃｈｌａｎｇｅｆｏｒｍ！』

レヴァンティンはカートリッジを一発使用し、シュランゲフォルムに変形する。

「はあっ！！」

数十メートルにも亘る鎖状の刃が唸りを上げ、ザバットを薙ぎ払う。

『！？！？！？』

ザバットの何機はか丁度上下半分に両断されて爆散、また何機かは方翼を切り落とされてバランスを保てなくなり山々の間に墜落、残りは足など機体の一部を切り落とされただけに留まり、シグナムの邪魔を続けようと立ち回る。

「くっ……まだ邪魔をするか…！」
「ご苦労。もう足止めは十分だ。」

ガルドが呟く。
シグナムが振り向くと、そこには荷電粒子砲の発射準備を終えたジェノトルーパーの姿があった。あとはガルドが引き金を引くだけで、必殺の一撃を放つことができる。

「…ッ！　しま……」
「…滅びよ。」

ガルドが呟いた瞬間、ジェノトルーパーの口腔内からシグナム目掛けて集束荷電粒子砲が放たれた。その一撃は友軍であるはずのザバットをも飲み込み、地平線の彼方へと消えていった。

「…！？　シグナム！」
「余所見とは余裕だな、魔導士！」

フェイトはシグナムの危機を感じるが、リバイアスが操るブラッドラーが襲い掛かり、シグナムの援護に向かう事が出来ずにいる。

「くっ…！　プラズマランサー！」
『Ｐｌａｓｍａ　Ｌａｎｃｅｒ』
「ファイア！」

フェイトの周囲に八つの環状魔法陣が出現し、その中心に金色の魔力弾が生成され、合図と共にブラッドラー目掛けて一斉に発射される。

だが、リバイアスは機体を傾ける等、機体の姿勢を変える事で巧みにかわしていく。

「その程度か！　もっと骨のある奴だと思ったのだがな！」

リバイアスが言い放つと、フェイト目掛けてブラッドラーを突進させる。それをフェイトはさらに高く飛び上がって回避する。

リバイアスはフェイトが上空へ逃げる事で回避したのを確認すると、ブラッドラーを宙返りさせてブレードを展開、背面飛行の姿勢から勢いを極力殺さずにフェイトへと再度攻撃を仕掛ける。

「きゃあっ！？」

フェイトはブラッドラーの機動性の高さに驚きつつも、ブレードが当たるギリギリで回避運動を取った。直撃こそ免れたが、白いマントの丈は半分になり、美しく輝きを持つ見事な金髪も数センチ程カットされてしまった。

（…あ、危なかった……）

フェイトは切り口を見てゾッとする。もし回避のタイミングが後コンマ数秒遅れていたら、自分の胴体がこのマントや髪のようになっていただろう。対ゾイド用に作られた刀剣で人を攻撃すればどうなるかは、言わずもがなである。

「一発でも当たれば終わりなら……。」

フェイトはブラッドラーを見据えて呟く。その直後、フェイトの周囲が金色に輝きだした。

『Ｇｅｔ　ｓｅｔ』

「オーバードライブ……真・ソニックフォーム！」

『Ｓｏｎｉｃ　ｄｒｉｖｅ』

フェイトのバリアジャケットが変化を始め、子供時代のそれに近いレオタードの様な姿へ変わる。

『Ｒｉｏｔ　Ｂｌａｄｅ』

続けてバルディッシュはカートリッジを一発消費し、鎌の様な姿からザンバーフォーム時の様な大剣よりもやや小振りの片刃の剣へと形を変える。

「む…魔力値が増大…？」

リバイアスは手元の計器を見て、フェイトの魔力が増大したのを確認する。

「持久戦をする余裕は無い……二撃、できれば一撃で決める！」

「何を企んでいるかは知らんが……次で終わりにしてくれる！」

フェイトはこの状態が魔力の消費が大きい事を考慮し、直ぐに決着を付けようと考え、リバイアスはフェイトが何か策を立てたと判断し、それが生かせないうちにケリを付けようと考えた。

つまり、どちらも次の一撃で勝負を終わらせようと考えているのだ。分かりやすいことこの上ない話である。

まずリバイアスはフェイトの動きを封じるため、ミサイルポッドを展開して弾幕を張る。

だがフェイトは真・ソニックフォームになった事で機動力や反射神経が上昇しており、ミサイルの雨を難無くかわし切る事に成功する。

「なるほど、更に速くなったか…。だが、私のブラッドラーは負けん！」

リバイアスはブラッドラーの操縦桿を押し込み、ウイングブレードを展開させてフェイトに突進する。

「来る……！」

ミサイルを切り抜けたフェイトはブラッドラーが向かって来るのを確認すると、バルディッシュを振りかぶって迎え撃とうと構える。

「「はぁぁぁぁぁあーッ！」」

二人の渾身の雄叫びの直後に決着は付いた。ブラッドラーのブレードは空を切り、バルディッシュはブラッドラーの下に回り込み、すれ違いざまに翼を根元から斬り落とした。

「何だとッ！？　この私が、魔導士ごときにッ！」

ブラッドラーはバランスを保てず、落下を始める。その途中、コックピットのキャノピーが吹き飛び、リバイアスが座席ごと飛び出して脱出した。

『Ｄｏ　ｙｏｕ　ｐｕｒｓｕｅ　ｉｔ？（追撃しますか？）』

「ううん、それよりも、他の皆を援護しないと…」

フェイトはパラシュートを展開してゆったりと落ちていくリバイアスを後目に、ハンマーロックの群れに苦戦するサヤカ達の援護に向かう。

（おのれ魔導士……この借りは、必ず返してやるぞ！）

リバイアスは飛び去っていくフェイトを睨みつけ、リベンジを誓うのだった。

「オラァァァアッ！！」

「ちぃッ、これしきッ！」

勢いに任せて猛ラッシュを掛けるレッツァーを相手に、意外にもイスルギ少佐は押されつつあった。

「変幻自在……いや、セオリー無視の戦法に、これ程まで手を焼くとは……」

天性のカンと反射神経から繰り出される、予測困難且つ型に囚われない戦闘スタイル。それは正規の戦闘訓練を受けていなかった傭兵のレッツァーが、自ら編み出した偶然の産物と言っても過言では無いだろう。

「……だが、それ故に欠陥も多くなる…。」

イスルギ少佐は戦闘の中で、レッツァーの戦法の弱点を幾つか見

つけていた。
　一つは攻撃を中心に立ち回っており、接近戦を多用している事。それ故、先程の様にカウンターが決めやすい。だが、レッツァーの反射神経やテクニックによって体勢を立て直されたり、思わぬ反撃を食らう可能性があるため、一撃で極める必要がある。
　流石のイスルギ少佐も、カスタムタイプのセイバータイガーを一撃で倒すのは難しい。
　二つ目は、レッツァーはイスルギ少佐のブレードライガーしか目に入っていないらしいという事。故に、イスルギ少佐以外の誰かが奇襲を仕掛ければ、深手を負わせられる可能性がある。しかし、中途半端な攻撃では反撃を受けてたちまちスクラップにされてしまいかねない。そうなると、有効なのは遠距離からの狙撃だろう。が、シャドーフォックス隊はハンマーロック等の対処に追われ、そんな余裕は全く無い。

（味方の援護は無し、半端な攻撃は効かず、下手をすれば此方が返り討ちか……）

　弱点を見つけたイスルギ少佐だが、それを突く作戦が実行し辛い。イスルギ少佐はレッツァーの猛攻を回避しつつ、頭脳をフル回転させて考える。

「くっ…！　止むを得ん！」

　イスルギ少佐はブレードライガーの脚を止め、崖を背後にセイバータイガーＡＴを見据える。

「あァ？　そうか、遂に観念しやがったかァ！」

　それを見たレッツァーは、イスルギ少佐が諦めたと思い、止めを

刺すべく突撃する。

（よし、掛かった……だが、まだ引き付けなければ…！）

イスルギ少佐の目論見はこうだ。自分が諦めたとレッツァーに思わせ、自分に突撃させる。それをギリギリまで引き付け、脚を捕らえて突撃の勢いを利用し、セイバータイガーＡＴごと崖から飛び降りる。

先程の様に投げ飛ばしてもいいが、崖の岩肌に爪を突き立てて踏ん張らないとも限らない為、確実に仕留めるには相手の動きを封じた方が良いだろう。

「逝っちまいなァ！」

「……！　よし、今だ――」

――ドォォォオン！！

イスルギ少佐がカウンターを仕掛けようとした瞬間、突如として鳴り響いた轟音と同時に、レッツァーのセイバータイガーＡＴが真横に吹き飛んだ。

「な、何…！？　何が起きた！？」

イスルギ少佐も突然の出来事に面食らい、周囲を見渡す。が、付近にセイバータイガーＡＴが吹き飛んだ原因を作った者の姿は無い。

困惑しているとブレードライガーに通信が繋がり、キャノピーに相手の映像が映し出された。

『こちらハーマン！　イスルギ少佐、ご無事ですか！？』

『ハーマン!?　今のはもしや……!』
「ええ。機動六課が誇る凄腕狙撃手、ヴァイス・グランセニック陸曹による狙撃です。」

ハーマンの乗るネオタートルシップ。その開いた格納庫ハッチの上に、ヴァイスの乗ったガンスナイパーが狙撃モードで置かれていた。

『ほう…。グランセニックがか……』
「へへッ、どうですイスルギ少佐?　俺だって、ただの軽い男じゃないッスからね。」

ヴァイスは得意げに言う。

『……奴との一騎打ちに水を差すとは……。後で覚悟しておけよ?』
「うぇえ!?　そりゃねぇッスよ少佐ァ!　せっかくピンチに助け舟を出したってのに!」

イスルギ少佐のドスを効かせた声に、ヴァイスは軽く涙目になる。危機を救ったというのに、返って来たのが叱責の言葉では涙目にもなるだろう。

『フフッ、冗談だ。…正直、少し危ない所だった。礼を言うぞ。』

「……へ？　は、はぁ……」

イスルギ少佐らしからぬいきなりの冗談に、ヴァイスは驚いた。いつもはお堅く真面目なイスルギ少佐が冗談を言ったのが、余程意外だったのだろう。

「……ロウエン伍長、戦闘エリアとの距離は？」

『約五十キロです。』

ハーマンはバディターに距離を訊き、飛行ゾイドなら出してもいいと判断する。

「よし、航空部隊を出撃させろ。サティ大尉とブリジット少尉、頼めるか？」

『ええ！　任しといてくだせぇ！』

『お安いご用です！』

別のネオタートルシップのハッチが開き、サティ大尉のサラマンダーボンヴァーンを先頭に、マミのストームソーダーとレイノスを中心とした航空部隊が飛び立っていく。

「八神二佐！　行けますか！？」

「うん、オッケーや！　行くでぇ皆！」

「うん！」「ああ！」「「「「了解！」」」」

はやての号令と共に、フェイトとヴィータ、チンクにオットーにディードが飛び立ち、スバルとギンガはウィングロードを展開してその上を走りだす。

それに遅れる形で、胴体に小型コンテナを積んだ二機の非武装のプテラスが姿を現す。

「行くぜ、坊主！」
「準備は良いか、ランスター二士！」
「「はい！」」

パイロットはコンテナの中身、エリオとティアナに声を掛けてから、勢いよく発進する。

『機動六課の出撃を確認。三分後には戦闘エリアに到着する予定です。』
「よし…。大佐、指揮をお願いします。」
「お願いしますっつったって、お前何処行くんだよ？」

ハーマンはボーグマン大佐に指揮を任せると言って、格納庫に向かって歩き出そうとする。

「決まっているでしょう、俺もレイノスで出るんですよ。」
「止めとけ止めとけ。お前、飛行型乗って墜っこちなかった事無いだろ？」
「うっ……」

大佐に図星を突かれ、言葉が出なくなるハーマン。ハーマンのゾイド乗りとしての実力は高いが、プテラスやレイノスといった飛行型を極端に苦手としており、演習ではともかく、実戦に飛行型で出撃して撃墜されなかった事は無いのだ。故に、大佐の言う事も決して大袈裟ではない。

「少しは落ち着け。全体の指揮官がそんなんじゃ、俺が安心して前線で戦えんだろう？」
「…はっ、申し訳ありません。」

敬礼をして、大佐に詫びの言葉を言うハーマン。

『ハーマン少佐、機動六課が間もなく戦闘区域に進入します。』

「む…？　援軍か！？」

間一髪、ジェノトルーパーの荷電粒子砲をかわし切ったシグナムは、レヴァンティンをシュベルトフォルムに戻して防御に専念していた。

「シグナム！」

「主はやて！」

シグナムのもとに、はやてとヴィータ、リィンが飛んでくる。

「堪忍な、シグナム。遅れてしもて。」

「いえ、私は大丈夫です。それより…」

はやてはシグナムの安否を気遣い、シグナムが示した方向にいるジェノトルーパーを見る。

「ほほ～、アレがシグナムと戦ってた相手やな？」

「ふん……何人増えようとも、私の前には無力だ…」

「ああ！？　言ってくれるじゃねーか！　テメー一人で、アタシ等を相手出来んのかよ！？」

ガルドの余裕綽々な態度と挑発に、ヴィータはグラーフアイゼンを向けて言い放つ。

「……誰が私一人で戦うと言った？」

ガルドはそう言うと、指を軽くパチンと鳴らす。すると、自動操縦のザバット十数機程が姿を現した。

「なっ…！　テメェ、卑怯だぞ！？」

「先に増援に駆けつけたのは貴様等だろう？　…ならば、こちらが数を増やした所で、文句は無いはずだが？」

「んだとォ！？」

「落ち着きや、ヴィータ。敵さんがぎょうさん増えても、ウチらは負けへんよ！」

「はやて……」

はやてはガルドの簡単な口車に乗るヴィータを宥め、臨戦態勢を取る。

「……そうだな！　アタシらヴォルケンリッターは、そう簡単に負けやしねェ！」

「主はやて、あのザバットは残しておくと厄介です。」

「うん、おおきにな、シグナム。…行くでぇリィン！」
「はいです！「ユニゾン・イン！」」

リィンの体がはやての体に吸い込まれるように融合し、髪の毛と瞳の色が変わる。

「ザバットは私がなんとかする。その後、シグナムとヴィータはあの赤いヤツをお願いや！」
「おう！」「はっ！」

シグナムとヴィータは各々のデバイスを構え、詠唱の際に無防備になるであろうはやての周囲を守るように立ち回る。

「ほな、よろしくな、リィン。」
「了解です！」
「……来よ、白銀（はくぎん）の風……」

はやてはシュベルトクロイツを高々と掲げる。足元に魔法陣が展開され、左手に置かれた夜天の書のページが自動的にめくられていく。

「……天よりそそぐ矢羽となれ！」

正面に大きな魔法陣を中心に、四つの隅に小さな魔法陣が展開され、魔力が集束する。

「ほな行くでぇ！　フレース……ヴェルグ！！」

はやてがシュベルトクロイツを振り降ろすと、小さな魔法陣から順番に砲撃が始まり、最後に中央の大きな魔法陣から特大の砲撃が

放たれた。

「……この砲撃魔法は……」

ガルドは機体からデータを引き出し、フレースヴェルグの情報を見る。

自動操縦のザバット達は直線的に飛来する砲撃を確認し、機体を傾けつつ回避運動に入る。

（……データのコンペアは間に合わんか……）

ザバットにはフレースヴェルグのデータが入っていなかったらしく、普通の砲撃を避けるような動きしかしない。ガルドはそれらを助けるのを諦め、飛行高度を急激に下げて地上に逃れる。

はやてに接近しようとするザバットもやはりいたが、それはシグナムとヴィータが撃破していく。

そして、フレースヴェルグは着弾予定地点に到達すると、その地点を中心に炸裂し、単調な動きしかしていなかったザバットを巻き込んで一掃する。

『!?!?!?』

ザバットのＡＩが、自身が回避した筈の砲撃に巻き込まれたのを認識した瞬間、その機能は停止して塵となって消えていった。

「……ほう…データ通り……いや、それ以上か。」

「ボーっとしてんじゃ…ねぇ！」

ガルドがフレースヴェルグの威力を確認していると、ヴィータがジェノトルーパーの頭部目掛け、打撃部分が巨大化したグラーフア

イゼンを振り降ろそうとしていた。

「ちっ…」

ギガントハンマーが直撃する直前、ジェノトルーパーの脚部のスラスターを噴かせて横にスライドし、一撃必殺級の攻撃を回避する。

「くそっ、外したか！　シグナム！」

「言われるまでも無い！」

ジェノトルーパーが移動した先にシグナムが待ち構え、居合の構えを取っている。

「飛竜……一閃！」

シグナムは勢いよくレヴァンティンを鞘から引き抜き、炎を纏ったシュランゲフォルムの刀身がうねりを上げてジェノトルーパーに襲い掛かる。

「ぬうっ！？」

再びジェノトルーパーの脚部スラスターを急速的に稼動させ、今度はバックステップで回避しようとする。が、押し寄せるレヴァンティンの刃をかわし切れずに主翼と右腕を切り落とされた。

「ぐっ……！」

「まだ終わらへんよ！」

「！？」

ガルドが上を見るとそこには、フレースヴェルグとは違う術式が

組まれた環状魔法陣を展開したはやての姿があった。魔法陣の中心には周囲の魔力がかき集められ、集束している。

『はやてちゃん、準備完了です！』

「うん！　…なのはちゃん、ちょっと借りるよ！」

はやての両手に力が込められ、これから来るであろう衝撃に耐える準備をする。

「スターライトォ……ブレイカーやァァァァ！！」

放たれたのは、エースオブエースと呼ばれる、ほんの一部では管理局の白い魔王とも呼ばれる親友の必殺魔法。極太の砲撃はジェノトルーパーに襲い掛かり、飲み込もうとする。

「ぐっ……ぐあああああッ！！」

スターライトブレイカーの着弾点を中心に、大きな爆発が起こった。

ガルドは咄嗟の回避運動によって直撃こそ免れたものの、その折り紙付きの威力によって機体の半分が中破及び大破してしまった。最早、立っているのもやっとという状態にまで陥っている。

「ふぅ～、流石はなのはちゃんの十八番やね、凄い威力や。」

『はやてちゃん、大丈夫です？』

「あはは……慣れとらんからやろな、体中がギシギシするわ……」

はやてはスターライトブレイカーの威力に改めて感心するが、大出力に加え慣れない魔法を使った所為で、体力と魔力を大分消費してしまったらしい。

「おのれ……！　この私が、ここまで……！」

ガルドは仮面の下で悔しげな表情を浮かべ、何としてもはやて達を倒そうとジェノトルーパーを動かそうとする。

『ガルド、ご苦労だった。……後は俺がやる。』

「!?　殿下、しかし…！」

突如として、ジェノトルーパーのモニターにヴォルフが映し出され、ガルドに後退を命令する。だが、ガルドはまだやれると言って納得しない。

『いいから退け。…今ここで、お前を失う訳にはいかん。』

「…！　……了解しました。」

通信が途切れると、ガルドは脱出装置を作動させてジェノトルーパーから脱出、ビークルに乗って基地へと後退していった。

「野郎ッ！　逃がすかよ！」

「待ちぃや、ヴィータ！　追わんでええ。」

ヴィータが後退するガルドを追撃しようとするが、はやてによって止められた。

「で、でもよぉ、アイツをとっ捕まえて吐かせれば…」

「いや、主はやての言う通りにしろ。……何か出てくるぞ。」

シグナムの視線の先には、基地の格納庫ハッチのやや上に位置する扉があった。その扉が開き、中から白銀の装甲を身に纏ったティ

ラノサウルス型ゾイド、バーサークフューラーが姿を現したのだった。

第六十二話　仲間の力（後書き）

……戦闘描写がもう一つ上達しない……

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第六十三話　青い悪魔（前書き）

もう9月だというのに暑い……
エアコンを断続的に稼働させているので、家の電気代が割高に……

第六十三話　青い悪魔

「もうすぐ作戦区域だ。行って来い、坊主！」
「ハッチを開く。……行け、ランスター二士。」
「はい！　ライトニング０３、エリオ・モンディアル！」
「了解！　スターズ０４、ティアナ・ランスター！」
「「行きます！」」

二機のプテラスの腹部コンテナの底が開き、シーガルウイングを背負ったエリオとティアナが吐き出され、小型スラスターを噴かせて鉄竜騎兵団（アイゼン・ドラグーン）の基地に向かって飛んでいく。
コンテナが空になったプテラスは、機体を翻してネオタートルシップへと帰還する。

「アタシが援護するから、エリオは先行して！」
「はい！　ストラーダ！」
『Ｆｏｒｍ　ｔｗｉｅ！』

エリオはストラーダをフォルムツヴァイに変形させ、ブースターで更に加速する。

「エリオ、ボク達も助太刀するよ！」
「ありがとうございます、マミさん！」

マミのストームソーダーがエリオに対して併走し、その後方から小隊規模の数のレイノスが付いて来ている。
その一団に、レドラーやグレイヴクアマの中隊が接近する。

「やぁぁぁぁぁあッ！」

エリオは垂直に上昇してシーガルウイングのスラスターを停止させると、そこからストラーダのブースターを噴かせて急落下し、レドラーの背に突き立てた。

「な、何ッ！？」

レドラーのパイロットは驚き、深手を負ったレドラーは煙を上げながら落ちていった。

レドラーに限らず、飛行型のゾイドは最高速度がマッハを超える。最高速度を出していないとは言え、高速で飛行する機体の背中に着地して攻撃するのは至難の技である。

それを考えれば、エリオの攻撃方法に驚くのも無理は無いだろう。

「ふぅ……。ストラーダのお陰で上手くいったよ。」

エリオは墜ちていくレドラーから飛び立ち、タイミングを合わせてくれたストラーダに感謝する。

「いっけぇぇぇえ！！」

マミのストームソーダーはティアナやレイノスからの援護射撃を受け、ブレードを展開して突撃し、レドラーやグレイヴクアマを次から次へと両断していく。

「クロスファイアー……シュート！」

ティアナの放った魔力弾が回避しようとするレドラーを追尾し、その翼に命中していく。

「よし！　この調子で…きゃあっ！？」

レドラーを撃墜したティアナだったが、それで油断したのか地上からの砲撃を受けかけてしまった。

「くっ……この反応、荷電粒子砲！？」

ティアナが避けたのは、ディロフォースが放った小口径の荷電粒子砲。小さくとも、その火力と破壊力は折り紙付きである。

「ティアナ、大丈夫！？」
「はい、なんとか…」

マミがティアナの身を案じて声を掛ける。

「小型とはいえ、荷電粒子砲持ちが多い……。早めに対処しないと…」

ティアナが地上を見ると、スバルとギンガがウイングロードを延ばしてすぐ下まで来ようとしていた。

「ティアナ！　サティ大尉が援護に来てくれるみたいだから、地上の方をお願い！」
「分かりました！　ありがとうございます！」

ティアナはスラスターの出力を減らし、地上に降りる。

「こちらスターズ０４！　スバル、ギンガさん、援護します！」
「りょーかい！　おりゃぁぁぁぁあ！！」

ティアナの援護射撃を受け、スバルとギンガはディロフォースの群れに向かって突き進む。
オレンジ色の誘導式魔力弾が先行し、ディロフォースの足を止める。

「たぁぁぁぁあっ！！」

スバルの振動拳がディロフォースの頭部を捉え、一撃のもとに粉砕する。

「やあッッ！」

ギンガは拳を突き出して魔力弾、リボルバーシュートを放つ。
だが、ディロフォースの襟巻が開いて小型のＥシールドが展開され、魔力弾が弾かれてしまった。

「シールド！？　あんな小型ゾイドにも搭載されてるの！？」

小型化されたにも関わらず、高い防御力を持つＥシールドにギンガは驚く。

「それなら、これでッ！」

スバルはウイングロードから跳躍し、両手で魔力を練り上げ、前方に魔力スフィアを生成する。

「一撃必倒！　ディバィィイン…バスタァァァア！」

スバルの拳が魔力スフィアに叩き込まれ、それがトリガーとなって水色の砲撃がディロフォース目掛け、ゼロ距離で放たれる。

その一撃はディロフォースのEシールドを紙切れの如く突き破り、光の中に飲み込んで破壊した。

「やった！　ディバインバスター以上の魔法ならいける！」

スバルは攻撃が通った事に喜び、再びディバインバスターの準備をする。

すると、何機かのディロフォースがシールドを解除し、上顎を開いて小型荷電粒子砲を放とうとする。

「あ、ヤバ……」

スバルはディバインバスターの準備をしていた為、急な姿勢制御が出来なかった。

「IS発動、レイストーム。」

スバルが身の危険を感じた時、空から光の雨が降り注いでディロフォースの頭部を破壊していった。

「え!?　これって……」

「ランブルデトネイター！」

更にスバルの背後から大量のナイフが飛来し、ディロフォースの脚に命中して爆発を起こし、転倒させていく。

「チンク、オットー！　助かったよ。」

「何、気にするな。姉が危機に瀕しているのを、見過ごす訳にはいかんよ。」

スバルがチンクとオットーに礼を言い、チンクは当然の事だと返す。

「姉様方、お話もよろしいですが、先ずはあの襟巻付きを駆逐するべきかと。」

ディードがツインブレイズを構えてディロフォースの群れに突撃する。

「あ、ゴメン、ディード。…それじゃ行くよ、みんな！」

スバルを先頭に、ディードに続いて突進する。

「……ん？」

後方支援の為に突撃しなかったオットーが、自身のレーダーに新たな敵影を感知した。

「ディード、姉様方、基地より敵の増援が出ます。…！　これは……！？」

「レイ・グレック、ライガーゼロ！　行くぜ！」

ネオタートルシップの格納庫から、レイのライガーゼロが勢いよく飛び出して戦闘エリア内に進入する。
この険しい山岳地帯ではホバーカーゴが素早く動けないため、今回はネオタートルシップからの出撃となった。

『グレック機、戦闘エリア内に進入。キッド機、発進どうぞ。』
「了解！　ウィナー・キッド、ライガーゼロ！　ＧＯ！」

続いてキッドのゼロも出撃し、レイに付いて行く。

『各機へ通達。敵基地より増援が出撃した。十分に警戒せよ！』

ハーマンがケーニッヒウルフに乗って出撃し、共和国軍全機に連絡を送る。

「アーサー・ボーグマン、ブレードライガー！　出るぞ！」

更にボーグマン大佐のブレードライガーが出撃し、ブースターを噴かせて加速、レイとウィナーに並走する。

「ッ！　あの機体は…！」
「レイ、どうした！？」

レイはゼロの足を止める。そして基地から出て来た増援部隊の中でも一際目立ち、なおかつ忘れられない機体を見つけた。そう、ヴォルフ・プロイツェンが愛機、バーサークフューラーである。

「…何故、こんな所に居る？　諸君にはヴァルハラに向かってもらう予定なのだが？」

ヴォルフは全回線に通信を流して言う。

「貴様が、ヴォルフ・プロイツェンか！？」

「そうだ。俺が鉄竜騎兵団（アイゼン・ドラグーン）の指揮官、ヴォルフ・プロイツェンだ。

……そこのライガーゼロ、パイロットはレイ・グレックだな？」

「てめぇ、やっぱりヴォルフ・プロイツェンか！」

ヴォルフは大佐の問いに答え、レイの乗るゼロを見やる。レイも同様に、ヴォルフの乗るバーサークフューラーを睨みつける。

「答えろ！　てめぇらは一体何者で、何が目的なんだ！？　何故、お前らの味方である筈の帝国軍を攻撃する！？」

レイは強めの口調でヴォルフに訊く。

「…我らにとって、ガイロスは味方ではない。」

「何だと…？」

「我ら鉄竜騎兵団、ガイロスの為に死せず。ただ、ゼネバスの為に死すのみだ。」

「なっ……ゼネバスだと！？」

レイや大佐、その他のベテラン兵士達はその発言に驚いた。ゼネバスと言えば、旧大戦の際にガイロス帝国と入れ替わりに滅んだ国家、ゼネバス帝国の事だろう。そこの残党や国民達は戦後、そのほとんどをガイロス帝国が受け入れていた。

「レイ・グレック……貴様だけは、この手で葬り去ってくれる！！」

今まで冷静に淡々と話していたヴォルフだったが、突然、怒りと

憎しみの籠った口調でレイに宣戦布告の言葉を言った。
それと同時に、バーサークフューラーの脚部スラスターを噴かせ、レイのゼロへと猛進し始めた。

「来るぞ！」

大佐を先頭に、その右側にレイが、左側にウィナーが移動して身構える。

「アーバイン、援護は任せたぞ！」
「了解！　さぁて、撃ちまくるぞヴァイス！」
「了解ッス！」

ネオタートルシップからゴジュラス・ジ・オーガとヴァイスの乗るガンスナイパーが飛び降り、それに続いてネオタートルシップの甲板から、他のガンスナイパーが援護射撃を開始する。

「邪魔を…するなッッ！！」

ヴォルフはゴジュラスキャノンとマシンガンの弾幕を掻い潜り、なおも突進する。そして、スラスターを噴かせると、大佐のブレードライガーの頭を踏み台にして飛び越して行った。

「何だと！？」
「大佐を踏み台に！？」

どこのジェットストリームだと突っ込みたくなるが、ともかくヴォルフは集中してレイを倒すため、後方支援に当たっているアーバイン達にひとまずは標的を切り替えたようだ。
バックパックに装備されているバスタークローの根元から、ビー

ムライフルを連射する。

「うわぁぁぁぁぁあっ！」

甲板上のガンスナイパーに次々に命中し、戦闘不能に追い込んでいく。加えて二発ほど、ネオタートルシップの駆動炉付近に命中し、艦が大きく揺れた。

「くうッ！　か、艦出力低下！　本艦はこれより、戦闘区域を離脱します！」

ネオタートルシップは艦を回頭させると、煙を上げながら後退していく。

ヴォルフは畳み掛けるように、アーバインのジ・オーガに向かって突進する。

「野郎ッ！」

バーサークフューラーはバスタークローをあたかもドリルの様に回転させ、アームを操ってジ・オーガを串刺しにしようと切っ先を突き出す。

「ちぃッ！！」

アーバインはそれに対抗するため、アンカーを地面に打ち付けると、強靭な腕と大きな爪を以って、なんと高速回転するバスタークローを横から掴んでしまった。

もう片方のバスタークローも回転させようとするが、やはり同じように掴まれてジ・オーガの体までは届かない。

「ほう、力比べか。面白いッ！！」

ヴォルフは操縦桿を握る手に力を込めて押し込み、バスタークローのアームの出力を引き上げる。

「ぐ…ぐおおおッ！？」

オーガノイドシステムを搭載し、今まで単純な力では他の追随を許さなかったジ・オーガが、完全野生体ベースのバーサークフューラーに押され始めている。その現実に、ハーマンや大佐、パイロットのアーバインですらも驚いていた。

「どうだ、我がバーサークフューラーの力は！」

「クッ、流石は鉄竜騎兵団のボスってところか…！」

「待ってろアーバイン！　今助ける！」

見かねたレイが転進し、アーバインの救援に向かう。

「自ら喰われに来るか…いいだろう！」

ヴォルフはバーサークフューラーの脚部スラスターを逆噴射させ、押し返そうとするジ・オーガの力を逆に利用して引き倒した。

「くッ！」

転倒した衝撃でアーバインは思わず声を上げる。

そしてヴォルフはレイと向かい合い、レイもゼロの足を止めて向かい合った。

「レイ・グレック、アンナの敵（かたき）……討たせてもらうぞ。」

「生憎だがな、俺にはやらなきゃならねぇ事があんだよ。それを終わらせるまで、死ぬつもりはねぇな！」

この戦争を終結させ、アンナの亡骸を故郷の地に還す。直接言葉には出さないが、少なくともそれが全て終わるまで、死ぬつもりは無いとレイは言い放つ。

「まずはテメェをとっ捕まえて、鉄竜騎兵団の事を洗いざらい吐いてもらう！」

「やれるものなら、やってみろ！」

レイとヴォルフは同時に機体を急加速させ、真っ向からぶつかり合う。

「グレック大尉、今援護を…！」

「止めとけ、ハーマン少佐。アイツらの戦いに、水を差しちゃいけねぇよ。」

ハーマンはケーニッヒウルフで援護をしようとするが、ジ・オーガを起こしたアーバインに止められる。

「…それより、あのバーサークフューラーとやらと一緒に出て来た連中を潰した方が良いと思うぜ？」

アーバインが示した方角には、五十機以上のディマンティスに十数機のジェノザウラーがゾロゾロと現れ、その中には青を基調にしたカラーリングのジェノザウラーの姿があった。

「あの青いジェノザウラー…ジ・オーガの本能がヤバいって言ってやがる……おそらくは……」

「まさか…オーガノイドか！？」
「ああ、可能性はあるな。」
ジ・オーガは青いジェノザウラー、サイコジェノザウラーを見て反応していた。
オーガノイドシステムを搭載しているからこそ、サイコジェノザウラーと融合しているオーガノイドの気配を察知できたのだ。
「だったら、早めに叩くに越した事は無いな。ヴァイス陸曹、援護しろ。」
「了解ッ！」
ハーマンとアーバインが先行し、ヴァイスはガンスナイパーの小型ミサイルをバラ撒いて援護する。
ディマンティスの群れはサイコジェノザウラーへの接近を妨害するため、数を以てハーマンとアーバインの前に立ち塞がる。
「甘いぞッ！」
ハーマンはケーニッヒを走らせながらストライクレーザークローにエネルギーを充填し、攻撃可能なエネルギーが溜まった所で跳躍、そのままクローを振り下ろしながらディマンティスの群れに突撃する。
更に小型ミサイルの雨が降り注ぎ、ディマンティスの群れを攪乱する。
『うわぁぁーッ！？』
『ひ、怯むな！　数で押し切れ！』
サイコジェノザウラーの通信機に、兵士たちの断末魔や悲痛な叫

びが押し寄せてくる。

「へぇ、奴らもやるものだね…。僕たちも、そろそろ動くとしようか…」

サイコジェノザウラーのコックピットに座る青髪の少女、リーゼが言う。

「…行くよ、スペキュラー。」

リーゼが唯一人の相棒の名を呟くと、サイコジェノザウラーの足元に魔法陣が展開し、両脚から白いガスが噴出する。

「ッ、何だ!?」

突如出現して充満する謎のガスに、ウィナーは警戒する。

「落ち着け！　ただの目眩ましだろう、この程度…!?」

ウィナーを落ち着かせようとした大佐だったが、次の瞬間、大佐は我が目を疑った。

「ば…馬鹿な！　いつの間に増援が!?」

現在進行形で戦っていた敵部隊が、一瞬のうちに増えているのだ。それも二機や三機程度ではなく、一個大隊分以上は増えていた。

「な、なんや!?　いつの間にか増えとるやないか！」

同様の現象は、上空に居るはやて達にも起きていた。ガルドを撤

退させた今、空に残っているのはレドラーの群れのみ。それを駆逐するだけの単純な任務に切り替わっていたのだが、その半数以上を撃墜した所で、突如としてジェノトルーパーが十数機程追加されていたのだ。泣きたくもなるというものだ。

「アイツら、いつの間に出て来やがった!?」

「…基地から出撃した様子は無い……ということは、何も無い所から現れたとしか思えんな。」

「おいおい、あっちに召喚士でも居るってのかよ!?」

「それは有り得ん筈だが…だからこそ説明が着かん。」

流石のシグナムも、少々困惑気味だ。惑星Ｚｉの部隊である筈の鉄竜騎兵団に、召喚士が所属している事はまず考えにくかった。

「せやなぁ……それに、魔力反応も感知でけへんかったみたいやし……」

『周囲に、奇妙な魔力反応はありませんでしたよ!』

リィンが周辺の空域を探知したが、これといって魔法が使用された形跡は感じられなかった。

そうしてはやて達が混乱している隙に、レドラーやジェノトルーパーが動き出す。

「主はやて、来ます!」

「迷うとる暇ァ無いっちゅうこっちゃな……。よっしゃあ、やったるわ!」

はやては数百メートル後退してシュベルトクロイツを構え、再びフレースヴェルグの発射シークエンスを開始する。

「飛竜、一閃！　はぁぁぁぁッッ！！」
『Ｓｃｈｗａｌｂｅｆｌｉｅｇｅｎ』
「でりゃぁぁぁぁッッ！！」

シグナムとヴィータは広範囲に攻撃を散らし、はやての準備が完了するまでの時間稼ぎをする。
鉄竜騎兵団の航空戦力は飛竜一閃によって薙ぎ払われていくが、その際にシグナムは違和感を覚える。

（…何だ？　手ごたえが、浅い…？）

シグナムが飛竜一閃で撃破した敵機の中に、はっきりとした手ごたえが感じられないものが幾つかあったのだ。

「シグナム、ボサっとすんな！　また来るぞ！」
「ーーッ！」

考える暇も与えないかの様に、レドラーがバルカンをバラ撒きながら突っ込んでくる。
シグナムはそれをかわし、再びシュランゲフォルムのレヴァンティンを振るう。今度は三機程撃破したが、その内の一機だけ、また手応えが感じられなかった。

「くそっ！　これじゃキリがねぇ！」

シグナムとは離れて戦っているヴィータが吐き捨てる。どうやら、またどこからともなく敵の増援が現れたようだ。

「…これは、もしや……」

手応えの少ない敵、次から次へと湧いてくる敵機。
シグナムは自身の考えを確信へと近付ける為、接近して来るジェノトルーパーにレヴァンティンを振るって縦に斬りつけた。

「はぁぁぁあッッ！」

レヴァンティンの刃はジェノトルーパーを縦一閃に両断し、直後に爆発を起こして墜ちていった。
それと同時に、シグナムの考えが確信へと変わる。

『解ったぞ、ヴィータ！』
『な、何だよ藪から棒に！？』
『…奴らが突如として増えたカラクリが、解ったと言ったのだ。』
『ま、マジかよ！？』

シグナムが突然念話で種が解ったと言い出し、ヴィータは驚いて足を止めた。

『結論から言うと、途中から増えた機体は幻影だ。』
『幻影って、ティアナが使ってる様なやつか？』
『ああ。…誰が使ったかは知らんが、まんまと騙されたようだ。』

シグナムは軽く溜め息を吐く。

『よう、割り込ませてもらうぜ。』

シグナムとヴィータの念話に大佐が割り込む。ここで使っている念話は通常の物とは異なり、自軍の通信機なら内容が聞き取れる物を使っている。

『その幻影についてだが……俺の目の前にいる青いジェノザウラーが妙なガスを噴射した直後、カマキリ共が増えたみたいでな。』
『…原因はそれでしょう。大佐、早急に対処を願えますか？』
『ああ、任せろ！』

そう言って大佐は通信を切る。

「そういう訳だロブ、指示を頼む。」
「了解。各陸戦機へ通達、青いジェノザウラーを集中的に攻撃しろ！　雑魚には構うな！」

ハーマンが指示を出した直後、ウィナーのゼロと大佐のブレードライガーがサイコジェノザウラーに向けて突撃する。
当然の如く、本物と幻影が入り混じったディマンティスの群れが押し寄せてくる。

「テメェら、邪魔だ！」

アーバインがディマンティスの群れにロングレンジバスターキャノンを撃ち込み、幻影ごと粉砕して道を開く。

「おぉぉおッッ！」

大佐のブレードライガーはブレードでサイコジェノザウラーの首を跳ねようとするが、予想していたと言わんばかりに回避する。
すると幻影が姿を消していき、ジェノトルーパーも本体のレドラーへと姿を元に戻した。

「思ったより、早くバレたみたいだね…。まぁ、この程度の子供だましで勝てるとは思ってないけど！」

リーゼはサイコジェノザウラーをホバリングで後退させながら、背中のパルスレーザーライフルを連射する。
大佐とウィナーは機体を蛇行させ、それらを避けながらバルカン砲で追撃する。
追撃を阻むため、リーゼと同時に出て来ていたジェノザウラーが、パルスレーザーライフルで大佐とウィナーを攻撃する。

「ちっ、流石にこの数はキツいか…？」
「ジェノザウラーは俺が食い止めます！　大佐は青い奴を！」
「すまんな。任せたぞ、ウィナー！」

ウィナーはゼロのブースターを噴かせて先行し、ジェノザウラーの注意を引く。

「オラオラァ！　俺はここだぜ？　かかって来いよ！」

尾部のハイデンシティビームガンをバラ撒いて挑発するように立ち回り、四機のジェノザウラーがウィナーのゼロに向けて攻撃を開始した。

「また幻影を出されたらかなわん！　墜ちろッ！」
「単騎で僕に挑むなんて、考えが甘いんだよ！」

ブレードライガーのストライククローがサイコジェノザウラーに向けて連続で振るわれるが、リーゼはそれを最小限の動作でかわし続ける。

「ちぃっ、このッ！」
「そんなヌルい攻撃じゃ、僕は倒せないよ！？」

ブレードライガーが右脚の爪を振り上げた瞬間、サイコジェノザウラーの頭部に取り付けられたビームガンが火を吹き、爪に直撃させる。

「ぐおッ!?　この距離でか!?」

超至近距離でのビームによる射撃は、爆風やその際に発生した衝撃で、攻撃した側もダメージを受ける危険性があるのだ。

だが、リーゼはその程度の巻き添えなど気にせず、大佐のラッシュを止めて距離を取ることを優先した。

「続けて、アンカー発射!」

距離を取ったリーゼはサイコジェノザウラーの腕を飛ばし、大佐のブレードライガーを捕縛する。

「せぇいッ!」

ブレードライガーを捕まえたまま、サイコジェノザウラーは脚部スラスターを噴かせ、ホバリングの状態で回転を始めると、大雪山おろしの如くブレードライガーを振り回して投げ飛ばした。

「ぐぁぁあッ!!」

ブレードライガーは岩肌に叩き付けられ、大佐の居るコックピットに衝撃が伝わった。

「大佐!　…うあッ!?」

ウィナーは大佐が苦戦しているのに気を取られ、反応が送れてレーザーライフルの直撃を受けてしまう。

「くそッ、油断したかッ…！」

右後ろ脚の駆動系をやられたらしく、スピードが低下する。このままでは、ただの標的と化してしまう。

更に畳み掛ける様に、ジェノザウラー四機によるパルスレーザーライフルの大雨が降り注ぐ。

「ぐぁぁぁあーッ！！」

ゼロは満足な回避運動も取れず、殆どの光線がが直撃してその場に倒れ込んだ。

「が…はッ……！」

ウィナーも衝撃を受け、軽い脳震盪状態に陥っていた。

そんな中、一機のジェノザウラーがゼロに歩み寄り、コックピットのある頭部を思い切り踏みつける。

「ぐあッ……！」

頭がクラクラして気絶しそうなウィナーに、追い討ちを掛ける衝撃が伝わる。

更にキラークローで傷だらけの頭部を鷲掴みにすると、機体を捻って投げ飛ばす。

ゼロは横たわり、動く気配は無い。ウィナーの意識はあるものの、操縦桿を握る手はピクリともしていなかった。

（や…ヤベぇ、折れてんのか……？）

ウィナーの右腕に感覚は無く、途中で通常では有り得ない方向に歪んでいた。

そこへトドメを刺すべく、ジェノザウラーの荷電粒子砲が準備を始める。

（……ちッ、終わったな……）

ウィナーが自らの人生が終わるのを確信した時だった。どこからかレーザーが放たれ、ジェノザウラーの頭部に直撃したのだ。

『ぐわっ！？　何だ！？』

ジェノザウラーのパイロットがレーダーを確認する。周囲に共和国軍の増援は居ない。が、帝国軍のシグナルを持つ機体が、新たに九機程映っていた。

『…我々は帝国軍第一特殊工作師団、サンダーボルト中隊である。…私は同隊所属の、アイン・ツェルカンプゥ少佐だ。…貴君らの戦闘行為について、帝国はそれを承認及び認知していない。…貴君らの所属部隊を述べよ。』

ウィナーの危機を救ったのは、アイン・ツェルカンプゥ少佐と名乗る人物が乗るライトニングサイクスだった。その左右にはライトニングサイクスが四機ずつ、翼を広げた様な形状で配置されている。

『……』

鉄竜騎兵団の機体は、ツェルカンプゥの呼び掛けに誰一人として

応答しようとしない。

「だんまりを決め込むか…」

「こちらは共和国軍、ロブ・ハーマン少佐だ。」

次の策を考えるツェルカンプゥに、ハーマンが通信の回線を開いて呼び掛ける。

「奴らは鉄竜騎兵団だ。我々は先程この秘密基地を発見し、交戦している。」

「何、鉄竜騎兵団だと!?　…ちょうど我々が探していた相手だ。」

「ツェルカンプゥ少佐らも、鉄竜騎兵団を?」

「ああ。奴らは帝国軍の機体を使用しながら、帝国軍の部隊を攻撃していた。我々はその正体を探るべく行動しているのだ。」

「そうか…ッ!?」

ハーマンとツェルカンプゥが話していると、ジェノザウラーがハーマンのケーニッヒを狙ってパルスレーザーライフルを撃ってきた。

「のんびり話す暇は無いな……ツェルカンプゥ少佐、我々は貴官らに共同戦線を提案したいのだが…」

「馬鹿な、我々は敵国同士だ。そんな事が許されるとでも?」

ハーマンの提案に対し、ツェルカンプゥは至極当然な回答を返す。

「…だが、我々も鉄竜騎兵団と共和国軍の両方と同時に戦いを挑む程、馬鹿ではない。…後ろから撃たない事だけは約束しよう。」

「…そうか。分かった、それで…」

「ただし、貴官らが我々に対して牙を剥いた場合は、それなりの対処をさせてもらうし、鉄竜騎兵団の指揮官は捕らえたら、我々に引

き渡すようにしてほしい。」
「ああ、約束する。」

両者の交渉は成立し、この場限りの共同戦線が組まれた。ハーマンはその事を共和国軍全員に告げた。
そしてすぐに、横たわるゼロに乗るウィナーの元へと駆け寄って通信を試みる。

「キッド少尉、無事か？」
「……ええ、なんとか……」
「そうか、無事でなによりだ。…ストラトス０３、キッド少尉を連れて退いてくれ！」
『…ストラトス０３、了解！』

ストラトス０３、ボーリックがウィナーの元へと降下し、強靭な脚でゼロを掴むと、ネオタートルシップの待つ後方へ飛んでいった。

「こちらサンダーボルト０１。サンダーボルト０２から０７は雑魚の駆逐を、０８及び０９は私と共に鉄竜騎兵団の指揮官を探し出し、拘束せよ。くれぐれも、共和国軍の機体には手を出すな。」
『了解！』

ツェルカンプゥのライトニングサイクスが走り出し、残りの機体もそれに続いて走り出した。

第六十三話　青い悪魔（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第六十四話　血まみれの死竜（前書き）

なんだか間が開いてしまいましたが、ようやく投稿できました。いつも遅くてすいません…

第六十四話　血まみれの死竜

「「うぉぉぉおおッッ！！」」

レイとヴォルフの雄叫びが戦場にこだまする。

白銀の装甲を纏うライガーゼロとバーサークフューラーは、ニクシー基地で着かなかった決着を着けるべく、真っ向からぶつかり合う。

「答えろヴォルフ！　ゼネバスの為にって、どういう事だ！？」

「……俺の名を、軽々しく口にするな！　俺の名を呼んで良いのは…父上にズィグナー、それにアンナだけだ！」

「ッ！」

バスタークローでの攻撃が激しくなり、レイは防御を強いられる。

「俺は貴様を倒し、アンナの無念を晴らすッ！」

「さっきからアンナアンナって、そんなに死なせたくなかったんなら、何であんな特攻紛いな作戦に参加させた！　テメェもプロイツェンの息子なら、アンナ・ターレスだけでも外させる事も出来たんじゃねぇのかよ！！」

バスタークローの突きをゼロの頬に掠らせながらも、ストライクレーザークローを振るって反撃に打って出る。

鋭い爪の一撃はバーサークフューラーの肩をえぐり、装甲を砕いた。

「…何も知らん癖に、勝手な事をほざくなッ！！」

ヴォルフは機体を素早く旋回させ、太い尾でゼロを吹き飛ばす。
プロイツェンは自らの野望の為なら、たとえ息子の許嫁だろうと切り捨てる。そんな冷酷なプロイツェンにヴォルフが一生懸命に懇願したとしても、その願いを聞き入れてくれる事は万に一つも有り得なかった。

「…貴様らの為に、これ以上の時間は割けん。ここで貴様を殺し、共和国軍諸君にはヴァルハラへ向かって貰う！」

バーサークフューラーの踵のアンカーが地面に打ち立てられ、左右のバスタークローが展開し、頭と尾を一直線に伸ばして口を開き、荷電粒子砲の発射体勢を取る。バスタークローに装備されたレーザーライフルと、口腔内の砲口にエネルギーが収束され、レイのゼロに向けられる。

「ちッ！　やらせるかよッ！」

レイはゼロをバーサークフューラーに向けて走らせる。回避行動に移るよりも、荷電粒子砲発射の隙を突いて攻撃する事を選んだのだ。

「荷電粒子砲、最大出力……飲み込まれろ！」

ヴォルフが荷電粒子砲の発射トリガーを引き、口腔内の荷電粒子砲と左右のバスタークローから、なのはのスターライトブレイカーに匹敵する火力の砲撃が放たれる。

「跳べ！　ゼロォォォォォ！」
『ガォォォォォォン！！』

ゼロのイオンブースターを一気に最大まで噴かせ、勢いよく大地を踏みきって高々と跳躍し、荷電粒子砲の真上を飛ぶ。

「ストライクゥ…レーザークロォォォ！！」

「やらせんッ！」

ヴォルフが操縦桿を操作し、バーサークフューラーの首とバスタークロー―を上に揚げ始め、頭上のゼロの背後から、発射中の荷電粒子砲を迫らせる。その衝撃で、アンカーを打ち立てた足元が少しずつ陥没していく。

「間に合ェェェェエ！」

ゼロのイオンブースターを更に噴かせ、迫り来る荷電粒子砲を振り切ろうとする。

バーサークフューラーは首だけでなく上体ごと上に向け始め、姿勢がより垂直に近づいていく。それにより、首の向きが真上に近づく毎に、圧し掛かる荷電粒子砲の力で足元が更に深く陥没していく。

「くそッ！　このままじゃ…！」

バーサークフューラーの体をストライクレーザークローが捉える前に、荷電粒子砲によってウェルダンにされてしまう。既に尾の先端のビームガンが捕まり、蒸発してしまっていた。

そして、荷電粒子砲がゼロの後ろ脚を焼き払おうと迫った時。

――ズギュゥゥゥン！

「ぐあッ！？」

パルスレーザーライフルが陥没するバーサークフューラーの足元

に直撃し、そのままバランスを崩して横転した。同時に荷電粒子砲の照射も中止される。

「!?　誰だ!?」

「…帝国軍、アイン・ツェルカンプゥ少佐だ。」

レイを助けたのは、ライトニングサイクスに乗るツェルカンプゥだった。

レイはゼロを無事に着地させ、ライトニングサイクスの方を向く。

「おいアンタ、助けてくれたのは礼を言うけどな、一対一(サシ)の勝負を邪魔するってのはどうかと思うぜ?」

「フン、私は別に貴官を助けるために攻撃した訳ではない。貴官の一騎打ちの相手、バーサークフューラーのパイロットを拘束するためだ。」

「…ああ、そうかい。」

レイはツェルカンプゥを睨みつけた後、起き上がろうとしているバーサークフューラーを見やる。

決着を完全に着けるには至らず、白黒はハッキリさせておきたかったが、戦争の最中にそんな事に拘ってはいられないと自制する。

「なぁアンタ、ヴォルフを連れてくんならさっさとした方が良いと思うぜ?」

「言われなくとも……!?　ヴォルフだと!?　まさか、ヴォルフ・プロイツェン大佐の事か!?」

「ああ。鉄竜騎兵団(アイゼン・ドラグーン)の指揮官は、ギュンター・プロイツェンの息子、ヴォルフ・プロイツェンだ。」

「なんと……」

ガイロス帝国の摂政の息子が、鉄竜騎兵団の指揮官であることを知ったツェルカンプゥは、驚きを隠せない様子だった。

「……何だ、知らなかったのか？　バーサークフューラーが居る時点で判ってたと思ったけどな。」

「バーサークフューラーは、公には何者かに奪取されたとされていたのだ。…ガイロス帝国の摂政、ギュンター・プロイツェン閣下の口からな。」

「…なるほどな。たった一機の新型を、プロイツェンは極秘裏に鉄竜騎兵団に回してたって訳か…」

二人の会話が一段落着くと同時に、大地を揺らしてバーサークフューラーが立ち上がった。

「ぐッ……！　レイ・グレック、まだ決着は着いていないぞ！」

「ヴォルフ・プロイツェン！　お前に俺を殺す理由があっても、俺にはお前を殺す理由が無い！　大人しく投降して、親父の企みを洗いざらい吐くんだ！」

「笑止ッ！　俺も貴様も軍人である以上、殺しあうことにそれ以上の理由など存在しない！　俺の方が貴様を殺す理由が、一つばかり多いだけだ！」

レイはヴォルフの説得を試みるが、全く聞く耳を持たない。

「もはや問答無用か。退いていろ、レイ・グレック。プロイツェン大佐は私が……」

ツェルカンプゥがバーサークフューラーに止めを刺そうとした時だった。ゼロとライトニングサイクスのレーダーに、突如として高エネルギー反応が現れたのだ。

「!?　何だこりゃあ!?」
「このエネルギー量…尋常ではないぞ!」

レイとツェルカンプゥだけでなく、周辺で戦っている共和国軍と機動六課メンバーも、その膨大なエネルギーに驚く。

「大佐!　こいつは…!」
「ああ。各機、警戒を怠るな!　何か出て来るぞ!」

大佐の警告の直後、鉄竜騎兵団秘密基地の大型のハッチが開き、一体のゾイドがせり上がって来た。

「な……!　あれってまさか…!」
「おいおい、笑えねぇ冗談だな!」
「こんな物まで配備してやがったのか!?」

レイも、大佐も、アーバインも、その巨大なゾイドに驚きを隠せない。

直立二足歩行の恐竜型ゾイド。その体躯は血液の如き深紅に染まり、太く力強さの溢れる四肢を持ち、口腔内には荷電粒子砲が装備されている。その存在は、他の何者をも威圧して圧倒し、恐怖心すらも植え付ける程だった。

「デス……ザウラー……!」

ハーマンがその悪魔の兵器の名を呟いた。

「ブラッディーデスザウラーだと！？　誰が乗っている！？」

デスザウラーの登場に驚いていたのは、共和国や六課だけではなかった。ヴォルフもまた、出撃を指示した覚えの無い機体の登場に、驚いていたのだ。

「ヴォルフ様！　私です！」

「ズィグナー！？　何をしている！　俺は出撃命令を出していないぞ！」

バーサークフューラーの画面に、ヴォルフの片腕であるズィグナーの姿が映し出される。ブラッディーデスザウラーのコックピットに乗っているのは、どうやらズィグナーの様だ。

「私の独断で出撃しました。ヴォルフ様、どうかここは撤退を！」

「何を莫迦な！　俺はまだ十分に戦える！」

「いいえ、戦況は我らの不利です！　私が殿（しんがり）を務めます故、早急にドラグーンネストへ！」

「くどいぞズィグナー！　俺はまだ戦えるし、レイ・グレックとの決着も……！」

「くどいのはどちらです！　もしもここでヴォルフ様が倒れられる事があれば、我らの悲願は叶いませぬ！」

「……ッ！」

ズィグナーの鬼気迫る説得に、しかめっ面になるヴォルフ。
レイとの決着も大事だが、それ以上に自分達の目指すものを優先せざるを得なかった。

「……分かった、ここは退こう。全機へ通達、速やかに第四格納庫へと後退、ドラグーンネストへの艦載作業に移れ！」

撤退命令を受けた鉄竜騎兵団は、戦闘を切り上げてすぐさま後退を始める。

「ヴォルフ様、ありがとうございます！」
「礼を言うのはこっちだ、ズィグナー。…お前が進言してくれなければ、俺は冷静さを欠いたままだっただろう。…殿は任せたが、死ぬなよ！」
「ハッ！」

ヴォルフはズィグナーに感謝し、バーサークフューラーのスラスターを全開にして後退する。

「待て、ヴォルフ！」
「逃がすか！」

レイとツェルカンプゥが逃げ出すヴォルフを追おうとするが、ブラッディーデスザウラーの放ったビームガンに阻まれる。

「レイ・グレック！　ここは退かせてもらうが、次はこうはいかんぞ！」
「くそッ！　待ちやがれ！」

ヴォルフはそのまま基地の中へと消えていった。

「ちぇっ、撤退か。キミもツイてるね。」

リーゼが目の前の中破したボーグマン大佐のブレードライガーを見て言う。

「ちっ、俺が後れを取るとは…！　流石はオーガノイドか…！」

「行くよ、スペキュラー。」

リーゼはサイコジェノザウラーを転進させ、霧を発生させると、ヴォルフと同じく基地の中へ消えていく。

「この霧…、また幻影か！？」

「いえ、幻影が現れた様子はありません。ただの目眩ましです。」

リィンが報告する。空中のレドラー達も次々に後退していき、残ったのは通常のジェノザウラーが十機と、ズィグナーの乗るブラッディーデスザウラーだけになった。

「アレがデスザウラーかぁ……なんやおっかない機体やなぁ…」

「データや画像は事前に見ていましたが、やはり実際に見るのとは違いますね。」

「何だァ？　ビビってんのかよシグナム？」

「莫迦を言うな。私はヴォルケンリッターの将……主はやての為ならば、恐れるものは無い！」

「ヘッ、上等！」

シグナムはレヴァンティンを構え直し、ヴィータもグラーフアイゼンを担いで臨戦態勢を取る。

「シグナム！」
「テスタロッサ。」

フェイトがはやて達と合流し、その周囲に、マミのストームソーダーやサティ大尉のサラマンダー等が集まる。

「私、フォワード陣の救援に行った方が良いかな？」
「…いや、向こうは向こうでどうにかするだろう。それが出来る様に、今まで訓練してきたはずだが？」

フォワード陣の心配をするフェイトだが、シグナムがフォワード陣を見やりながら必要無いと言い切った。

「……うん、そうだね。いつまでも、手を掛けてちゃダメだよね。」

フェイトも納得したらしい。

「テ、ティアナさん！　あんなのに勝てるんですか！？」

エリオはブラッディーデスザウラーの威圧感に圧され、少しだけ弱腰になっていた。

「さあね。私にも分からないわ。もしかしたら、私たちはここで死ぬかもね。」

ティアナのクロスミラージュを握る手が、若干震えだしている。
ティアナも恐怖を感じているのだ。

「…でもね、大事なのは勝てるかどうかじゃない。大事なのは、勝ちに行く事よ。アンタも騎士なら、気合入れて立ち向かいなさい！」

「…！　はい！」

ティアナの言葉で、エリオの闘志に火が点いたらしい。ストラーダを握る手に力が籠り、恐れの目から覚悟の目へと目つきが変わった。

「さあ、死ぬ気で行くわよ！　だけど、絶対に死んだりしない事！　いいわね！？」

「「はい！」」

「うん！」

「ええ！」

エリオはキャロと一緒にフリードリヒに跨り、空へ飛翔する。ティアナは背中の折りたたんでいたシーガルウイングを展開し、ブースターを噴かせて飛翔、スバルとギンガはウイングロードをブラッディーデスザウラーの周囲に展開し、一気に駆け上がる。

「させんッ！」

『ガォォォォオン！！』

ブラッディーデスザウラーの叫びが辺りに響き渡る。音源の近くにいたエリオとキャロは思わず耳を塞いだ。

「うぅッ……凄い叫び声だ…！」

「ほ、骨の髄まで響いてくる…！」

数秒間の咆哮を続けると、スバルとギンガが走っていたウイングロードがフッと消えていった。

「うわわッ！？」

「きゃあッ！」

スバルとギンガは一瞬驚くが、なんとか着地に成功する。

「これは……まさか、ＡＭＦ！？」

ブラッディーデスザウラーの叫び声は、機体に搭載されたＡＭＦの起動スイッチだったようだ。

空中に居るはやて達にもその効果は及び、飛行不能に陥る前に地面に降下する。

「くっ…！　随分と広範囲やな…。リィン、範囲はなんぼや！？」

『えっと……半径二キロのドーム状に展開されてるです！』

「さよか…。ほなら、私らは役に立てへんな…」

はやてはがっくりと肩を落とす。

なのはやフェイト、はやての砲撃はフィールド内に入った瞬間に打ち消され、二キロの距離では流石のシグナムやヴィータ達、古代ベルカの騎士でも力は振るえない。

こうなると、機動六課の主戦力の殆どが、ブラッディーデスザウラーに対して有効な戦力にはなり得ない。

「はやて、何だそのＡＴＭってのは？」

「ＡＭＦです。アンチ・マギリンク・フィールド。その範囲内では魔力結合が消され…」

「小難しい説明はいい、三十字以内で簡潔に！」

「…要するに、その範囲内では魔導士はただの置物って事です！」

句読点等込みで二十八字。

「把握した。そういう事なら、六課組は下がってくれ。後は俺達がカタを着ける。」
「すいません、大佐。…ほな皆、ダッシュで逃げるで！」
撤退命令を素直に承知し、はやてを筆頭に全力疾走で後退する。
「大佐！　私とギン姉はＡＭＦの影響下でも戦えます！　足元からですが、援護の許可を！」
スバルとギンガが残り、ローラーを走らせてブラッディーデスザウラーの周囲を旋回する。
「了解だ！　だが、無茶はするなよ！」
「今の大佐が言っても、説得力無いですよ？」
大佐はスバルとギンガの残留を許可するが、上空を飛行するマミにツッコミを入れられる。中破したブレードライガーでデスザウラークラスに挑もうとしているのだから、言われても仕方がないだろう。
「馬鹿、これ位どうって事ねぇよ。」
「大佐、ここは退いて下さい。もうブレードもシールドも破損してるんですから…」
大佐は大丈夫と言い張るが、大佐から全体の指揮を任せられているハーマンに、後退を命じられてしまった。
「おいおいハーマン、お前まで…」
「もう一度言います、退いて下さい大佐。これは指揮官である自分の命令です。」

ハーマンは最後の手段、『命令』を発した。少佐であるハーマンが大佐に命令を出すなど、ハーマンが暗黒大陸上陸部隊の全体の指揮官であるから、出来た事である。

「……」

「大佐！」

大佐はしばらく黙ってから言う。

「…命令じゃ仕方ないな。クレイジー０１、後退する。」

「…ありがとうございます、大佐！」

大佐のブレードライガーは転進し、傷だらけの機体に鞭打って、艦の待つ後方へと走っていった。

「よぅし、全機へ通達！　あの真っ赤なデスザウラーを叩きのめし、ヴォルフ・プロイツェン、もしくはデスザウラーのパイロットをとっ捕まえるぞ！」

『了解！』

「サンダーボルト０１より各機へ。デスザウラーを撃破ののち、ヴォルフ・プロイツェン大佐を拘束する。心して掛かれ。」

『サー、イエッサー！！』

共和国軍はハーマンの、ライトニングサイクスのパイロット達はツェルカンプゥの指示を受け、ブラッディーデスザウラーに相対する。

「何人たりとも、ここはは通さん！　我らがゼネバスの、ヴォルフ様の為にも！」

『ゴガァァァァア！！』

ズィグナーの気合いを代弁するかの如く、ブラッディーデスザウラーは気迫の籠もった叫びを上げた。

「ふ～っ、やっと着いた…」

同じ頃、ウルトラザウルスが停泊するエントランス湾に、バンやなのは達が乗る艦を含む艦隊が到着していた。

「なのはさ～ん♪」

「あ、マリンさん、お久しぶりです。」

到着したなのはの元にマリンが駆け寄って挨拶を交わす。

「長旅お疲れ様です、なのはさん。」

「ありがとう、マリンさん。…それで、大佐達は？」

「はい、ウィグリド湖の要塞で鉄竜騎兵団の動きがあったみたいで、そっちに向かいました。」

私達はお留守番です、と付け加え、やれやれと言いたげなジェスチャーをする。

「鉄竜騎兵団が…？」
「そっか…それなら、早めに合流した方が良いかも…」
なのはが呟く。
「どうします？」
マリンが訊ねる。
「…マリンさん、私達は本隊と合流しようと思うんだ。」
「はいはい、了解♪　なんなら、私が途中まで送っていきますよ♪」
「ええ？　大丈夫だよ～」
「いいのいいの、ここんとこ哨戒任務や甲板の掃除しかやってないから、暇でしょうがないんですよ♪」
なのはがやんわりと断るのもお構い無しに、マリンはハンマーヘッドの置かれている格納庫へ向かう。
「ってな訳で伍長～、中尉にそう言っといてね～♪」
「へーいへい…お気を付けて…」
「にゃはは…」
伍長が呆れた口調で返事をし、なのはも苦笑いする。
「なのはさんすいません、ウチの曹長が……なんせサボりたがりなもんで…」
「ううん、気にしないで。確かに途中まで送ってくれるなら、その方が楽だし…」

伍長はなのはに上司の非礼を詫びるが、なのはは気にしてないと言う。

「あ、そうだ伍長さん。伝言ついでにコレも報告して貰えないかな？」

なのはがそう言うと、なのはの目の前にモニターが現れる。そこには、格納庫に置かれている何かカプセルの様なものが映し出されていた。

「…？　このカプセルは？」

「うん、航海中に釣り上げちゃったんだけど…」

画面上のカプセルは、かつてエレミア砂漠のとある遺跡に安置されていたカプセルに雰囲気や形が酷く似ていたが、昔の事だからかバンもフィーネも、ジークでさえもそれに気が付かなかった。

場所は戻って、鉄竜騎兵団秘密基地。

「ぐっ……ネオタートルシップ、状況を報告せよ！」

『こちらネオタートルシップ、状況を報告します。』

ネオタートルシップに居るバディターが応答する。
バディター曰わく、コマンドウルフ大隊の四割が壊滅、イスルギ少佐及びシャドーフォックス中隊に被害甚大、ゴジュラス・ジ・オーガは駆動系統に異常発生、等々……。
ブラッディーデスザウラー一機とジェノザウラー数機に、共和国軍は大打撃を受けてしまっていたのだ。

「…まずいな、これ以上の損害は避けなければ…！」

ここでダメージを受け過ぎれば、ヴォルフを捕まえるどころか、本命の帝都ヴァルハラ攻略さえも危うくなってしまう。それだけは、どうしても避けねばならなかった。

「…仕方が無いか、バディター！　準備しろ！」
『…えぇ!?　ここでですか!?』
「構わん！　ここでやられては、元も子もないからな！」
『りょ、了解です！』

バディターとの通信が切れる。どうやら、バディターは何かの準備に向かったようだ。

「各機へ通達！　『例の隠し球』を投入する！」
「うぇッ!?」
「い、いいんですか!?」

ハーマンの突然の指示に、レイは思わず奇声を上げ、サヤカは念の為に確認する。

「構わん、と言うかもう指示は出した！　責任は俺が取る！　いいか、出て来るまで粘るんだ！」

「了解！」

ハーマンの通信が終わると、残っている機体はブラッディーデスザウラーとの距離を一定に保ち、消耗した四肢に鞭打たせ、持久戦に持ち込むような陣形を組んだ。

ズィグナーはその動きを見て、持久戦に持ち込むつもりだという事を感じ取った。

「…何を企んでいるかは判らんが、粘られる前に一掃すれば良いだけの事だ！」

時間を稼ぐ暇さえ与えまいと、ズィグナーはブラッディーデスザウラーの背部の荷電粒子吸入ファンを回転させ、空気中の荷電粒子を収集する。

『デスザウラー級内部に、高エネルギー反応！』

「荷電粒子砲が来るぞ！　正面に立たず、散開してやり過ごせ！」

デスザウラーの正面に居る機体が急加速し、荷電粒子砲の射線上から退避しようとする。

「…滅せよ！」

ブラッディーデスザウラーの口腔から、なのはのスターライトブレイカーをも上回る程の極太の砲撃が放たれ、大地を焼き払いながら一直線に延びていく。

更に砲撃が引き起こした衝撃波によって、付近に居た比較的軽量なコマンドウルフ数機が、巻き込まれて吹き飛ばされる。

「きゃあっ！」

「うわぁっ！？」

スバルやギンガも衝撃波に煽られて飛ばされるが、危なげなく着地に成功して再びブラッディーデスザウラーへ接近する。

「行くよ、スバル！」
「うん、ギン姉！」

ギンガの合図でスバルと共に大地を蹴って跳躍し、分厚い装甲に守られた健脚に振動を加えた拳を叩き付ける。

『グァァァァア！！』

二撃の拳が命中し、ブラッディーデスザウラーが呼号する。それが痛みによる物か、自分より遥かに小さな存在に傷を付けられた怒りによる物なのかは判らないが。

「ぬぅッ！　あれがドクター・スカリエッティの言っていたタイプゼロか！」

僅かながらも、ズィグナーの座るコックピットに振動が伝わる。攻撃を受けた脚を持ち上げ、スバルとギンガを踏み潰さんと垂直に落とす。

スバルとギンガはそれぞれのキャリバーを走らせ、ヘッドスライディングしてすんでの所で回避に成功する。

「危なかっ…」
「スバル！」

回避に成功してホッとするスバルに、続いて先程踏み潰されそう

になった脚を軸足にしての痛烈な尻尾攻撃が襲い掛かる。

「え…ぎゃあっ！」

「ぐっ…！」

スバルとギンガに尾が直撃して吹き飛ばされるも、なんとかガードが成功したため致命傷には至らなかった。

その直後、今度はブラッディーデスザウラーのボディに、ジ・オーガの砲撃が命中する。

「ヘッ！　いつまでも調子こいてんじゃねーよ！」

「各機、体勢を立て直し、デスザウラー級を攻撃せよ！」

転倒していたコマンドウルフ達も立ち直り、ブラッディーデスザウラーへ一斉射撃を仕掛ける。

が、コマンドウルフの射撃では火力が足りないのか、ブラッディーデスザウラーの装甲は容易には砕けず、ハーマンのケーニッヒウルフが一時的に搭載しているコマンドウルフＡＣ用のロングレンジキャノンでも決定打にはなりえなかった。

「くっ……やはりスナイパーライフルでなければダメなのか…！」

ハーマンはケーニッヒウルフの背にあるのが、ケーニッヒ専用のデュアルスナイパーライフルでない事を残念がる。

ケーニッヒウルフには元々、専用のスナイパーライフルや八連装ミサイルポッドが用意されていたが、暗黒大陸への進軍が予定より早まったため、ケーニッヒウルフの実戦投入にそれらの兵器の開発が間に合わなかったのだ。

「サンダーボルト０１より各機へ。先程タイプゼロが攻撃した側の脚を集中攻撃せよ。装甲が脆くなっている筈だ。」

ツェルカンプゥはスバルとギンガが傷を付けたブラッディーデスザウラーの脚を集中的に攻撃し、足元を崩す作戦に出る。

「させん！」

ズィグナーが手元のスイッチを入れると、ブラッディーデスザウラーのボディを覆うようにEシールドが展開される。ライトニングサイクスが放ったパルスレーザーライフルはシールドに阻まれ、ブラッディーデスザウラーには届かなかった。

「くッ、シールドまで搭載されているのか…」

ゴジュラス以上の巨体から繰り出される一撃に最強クラスの荷電粒子砲、加えて高出力のEシールド。まさにデスザウラーの名を冠するに相応しい力を持っていた。

「伍長！　まだなのか！？」

『もう少しです！　二分…いえ、一分だけあれば！』

「了解した！　各機、後一分だけ持ちこたえてくれ！」

切り札の登場まで後一分と聞き、兵士達により一層の気合いが入った。

コマンドウルフやスバルとギンガは機動力を生かして囮となり、レイはショックカノンで牽制する。

「こちらサンダーボルト０３。少佐、共和国軍には何やら切り札があるようですが……」

「…気にするな。この状況を打開してくれるなら好都合だ。それに、後ろから撃たんと約束したのでな。」

そう言うとツェルカンプゥは飛んで来たレーザーを回避し、シールドに覆われていないブラッディーデスザウラーの背後へ回り込む。

「荷電粒子吸入ファンさえ潰せばッ！」

デスザウラータイプに共通する弱点の一つとして、背部の荷電粒子吸入ファンが挙げられる。

これを破壊されると荷電粒子砲が使用不能になると同時に、冷却機能も低下するため、機体の全体的な出力低下にも繋がるのだ。

だが、敵もその弱点を放置するほど馬鹿ではない。ツェルカンプゥがブラッディーデスザウラーの背後に回った瞬間、護衛のジェノザウラーがライトニングサイクスを迎え撃つ。

「邪魔だ！」

ライトニングサイクスのストライクレーザークローでジェノザウラーを攻撃する。が、ジェノザウラーはそれを回避しようとせず、真っ正面から直撃を受けた。

「何！？」

これにはツェルカンプゥも驚いた。ジェノザウラーのゾイドコア付近をストライクレーザークローが抉り、その痛みでジェノザウラーが悲鳴を上げている。

「我等がゼネバスの為に！　ウォォォオッ！！」

ジェノザウラーのパイロットが叫ぶと、次の瞬間、ジェノザウラーのゾイドコアが暴走を起こし、ライトニングサイクスを巻き込ん

で爆発を起こした。

「ッ！　ぐぁぁぁぁあッ！！」

吹き飛ばされたライトニングサイクスのストライクレーザークローは、爆発に最も近かった為に足ごと砕け散り、機体全体にダメージを負った。

「隊長！」

「私の事は良い、奴の背後を狙っていけ！」

ツェルカンプゥのライトニングサイクスは右足首を失いながらもなんとか立ち上がり、うろたえる部下に活を入れる。

（よもや自爆するとは……。奴等には、それ程までの覚悟があるというのか……）

自らを犠牲にしてでも、ブラッディーデスザウラーを墜とさせまいというパイロット達の気迫に、ツェルカンプゥは戦慄さえ覚えていた。

部下のライトニングサイクスがブラッディーデスザウラーの背後を取ろうとするが、加重力テイルやミサイルによる攻撃を受けて返り討ちに遭っていく。

「陸が駄目なら、空から！」

ジェノザウラーの攻撃を避ける為、マミのストームソーダーやサティ大尉のサラマンダーが空から吸入ファンを攻撃しようと試みるが、吸入ファンの付近に取り付けられた対空レーザー砲がミサイルや爆撃を迎撃され、攻撃が吸入ファンまで届かない。

「ひゃあッ！？」

逆にストームソーダーの主翼に被弾し、マミは機体のバランスを取りながら急旋回して後退する。

「こ、こちらソニック０２！　主翼が損傷、戦闘続行不可能と判断して後退します！」

「了解だ！　よく時間を稼いでくれた！」

「え！？」

「準備が出来たとよ！　来るぜ！」

後退していくマミと入れ替わりに、ネオタートルシップが戦場に姿を現した。

「こちらロウエン。ガンブラスター全システム、オールグリーン。ハッチを開けてください！」

『了解、メインハッチ、オープン。』

ネオタートルシップの正面ハッチが開き、背部に大量の砲門を携えたアンキロサウルス型ゾイド、ガンブラスターが三機、その姿を現した。

第六十四話　血まみれの死竜（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第六十五話　Ｔａｋｅ　ａ　ｓｈｏｔ（前書き）

自分が贔屓にしてる球団が優勝しました。

が。

何故か素直に喜べない自分……

第六十五話　Ｔａｋｅ　ａ　ｓｈｏｔ

「デスザウラー級、荷電粒子砲を発射しました！」
「損害は軽微！　ですが、コンバットシステムフリーズを起こした機体が多数！」

戦闘区域から少し離れた位置に待機するネオタートルシップ。戦闘の状況が矢継ぎ早に伝えられていく。
そんな中、格納庫ではティアナ達が戦闘の様子をモニターでチェックしていた。

「あのデスザウラーって言う機体……かなり手ごわいですね……」

エリオがモニターを見ながら呟いた。

（くそっ……ハーマン少佐達のピンチを、こうして見ている事しか出来ないなんて……！）

ティアナは悔しかった。ブラッディーデスザウラーが極めて強力なＡＭＦを展開している所為で、スバルとギンガ以外の六課メンバーは手も足も出ない。それを悔しがるのは何もティアナだけではなかったが、負けず嫌いのティアナのそれは人一倍大きかった。

『こちらグランセニック。ガンスナイパー、着艦します。』

ネオタートルシップ側面のハッチが開き、ヴァイスの乗るガンスナイパーが飛び乗った。

「ヴァイスさん、どうかしたんですか？」

「いや、ハーマン少佐がな、俺の腕じゃデスザウラーに挑むのは無理だって言うんで戻らされちまったよ。」

ヴァイスはコックピットから垂れるワイヤーにぶら下がり、ゆっくりと降りながら言う。

「ああ、妥当な判断だな。たったひと月ふた月練習したぐらいじゃ、デスザウラーに向かってくなんざ死にに行くようなモンだ。」

ボーグマン大佐が両手にドリンクを持って、ヴァイスに歩み寄りながら言う。

「大佐！　そんな言い方…！」

まるでヴァイスを役立たずと言っている様な物だ、とティアナが抗議する。

「良いんだよ、ティアナ。大佐の言う通り、俺じゃあのバケモンには敵わなねーさ。」

ヴァイスは声を荒らげるティアナを諫め、大佐が軽く放り投げたドリンクをキャッチして中身を飲み始める。

「お前も黙って見てるのは嫌だろうけどよ、ここは耐えてくれや。お前はそれをなのはさんから、しっかり教わったはずだぜ？」

「……」

ティアナはかつて、自分の仕事よりも多くをこなそうとし、結果、教官であるなのはの怒りを買ってしまった事があった。それがティアナや部隊のメンバーの命が危険に晒される可能性があったからだ。

そうして、ティアナは自分が上手く動けない場面や戦えない場面では、仲間を頼る事を学んだのだった。

「そう、ですね。大佐、すいませんでした。」
「いや、俺も口が悪かったさ。」

ティアナは大佐に頭を下げ、大佐もきつく言い過ぎたと反省する。

「大佐ァ！　そこ退いて下さい！」
「うおっ！？」

バディターの声が響き、大佐は慌ててその場から飛び退いた。
大佐がつい先程まで立っていた場所を含め、ガンブラスターが三機並べられる。

「コイツは…ガンブラスター！？　使うのかバディター！？」
「ええ！　あのデスザウラータイプを倒すには、これが効率的かつ最適なんです！」

キャノピーが開いたコックピットから、バディターが顔を出す。

「それに、もし失敗してもハーマン少佐が責任を取ってくれるそうですよ！」
「何！？　そうか、それなら構わんな！　お前ら、整備を手伝ってくれ！」

バディターがハーマンが責任を取ると言った瞬間、大佐がフォワード陣に指示を出してきた。

「ちょ、良いんですか！？」

「アイツが責任取るって言うんだ、出さなけりゃ損だろう？」
「うっわ……ダメだこの人、早く何とかしないと……」
ティアナは嬉々として整備士に指示を出す大佐を見て、溜め息を吐いた。
勿論、大佐は冗談混じりだったし、ティアナも大佐が本気でそんな事を言ったなど思っていないが。

そして現在、三機のガンブラスターがブラッディーデスザウラーの前に姿を現し、ネオタートルシップからドスンという音を立てて大地に降り立った。

「あの機体は…ガンブラスター！？　あれも復活が進められていたのか！」

ツェルカンプゥが驚きの声を上げる。
帝国がデスザウラーの復活を進めている以上、共和国もそれに唯一正面から対抗できる、マッドサンダーの復活を行う事は予想できた。
だが、個体数が極限まで減少していたと聞かされていたガンブラスターの復活は、ツェルカンプゥにとって全くの予想外だったのだ。

「そんな移動砲台で、ブラッディーデスザウラーを止めるつもりか

！」

ズィグナーはたった三機の増援など恐れるに値しないと判断し、頭部のレーザーガンを連射してガンブラスターを攻撃する。

「超電磁シールド、展開！」

ガンブラスターの側面から飛び出す２４本の角型のシールドジェネレーターが輝き出し、強力なシールドが展開される。それにより、ブラッディーデスザウラーの攻撃はガンブラスターに届く事無く消滅した。

「くっ、シールドか！」

「シールドは良好…。では、お次はハイパーローリングキャノンです！」

バディターはスイッチを操作し、ハイパーローリングキャノンの発射シークェンスを開始する。

ガンブラスターの背部に搭載されたハイパーローリングキャノン。それはパルスガンや連装加速ビーム砲、電磁砲にレールキャノンに加速衝撃砲等で構成されており、合計で２０門もの砲門を有している。

「ハイパーローリングキャノン……発射！」

ハイパーローリングキャノンの各砲身が回転を始め、全ての砲門が砲撃を開始する。

が、今まで同様にブラッディーデスザウラーの正面を覆うシールドに阻まれ、本体に攻撃が届かない。

「よし、今です！」

バディターはブラッディーデスザウラーのシールドに砲撃を照射しながら、手元のダイヤルを回す。すると、ビームの色が僅かながら変化する。

そして、強固なシールドをなんと破る事無くすり抜け、ブラッディーデスザウラーの機体に砲撃が直撃した。

「ぐぁぁぁあッ！　ば、バカなッ！？」

「シールドを……通り抜けた！？」

その光景に、ズィグナーもレイ達共和国側も驚いていた。

このシールドすり抜けこそが、ガンブラスターの真骨頂である。

ガンブラスターはハイパーローリングキャノンが放つビームの周波数を砲撃の最中だろうと変更でき、それによってシールドを破らずに突破する事が出来るのだ。

『シールドジェネレーター破損。シールド、使用不能』

「くっ、シールドが……！」

ズィグナーの座るコックピット内に機械音声が流れ、モニターに機体の破損状況が表示される。ハイパーローリングキャノンのダメージで、喉の辺りに装備していたEシールド発生装置が破損したらしく、ブラッディーデスザウラーを守っていたシールドがゆっくりと消滅していった。

「シールドが消えたぞ！　各機、一斉放火！」

コマンドウルフやガンスナイパー達が攻撃を再開し、足元を中心に狙っていく。

「はぁぁぁぁぁあッ！」
「オラオラオラァ！」

その隙に、イスルギ少佐のブレードライガーとレイのライガーゼロがブラッディーデスザウラーに向けて突撃し、ブレードとストライクレーザークローで胴体を斬りつける。

『グァァァアッ！』

ブラッディーデスザウラーはその威力に装甲を引き裂かれ、痛みのあまり慟哭を上げる。

「おのれ、共和国め…！」
『損傷拡大、ＡＭＦ、使用不能。』

今の攻撃て受けたダメージの影響で、ＡＭＦの発生装置が破壊されたらしく、その効果を失った。

「スバル！　ＡＭＦが消えたわ！」
「オッケー、ギン姉！」

スバルはウイングロードを展開し、ハイパーローリングキャノンの直撃を受けたブラッディーデスザウラーの胸部付近へと疾走する。

「マッハキャリバー、ギア・エクセリオン！」

両脚のマッハキャリバーの踵付近に、魔力で出来た水色の翼が左右二枚ずつ現れ、ギア・エクセリオンへとモードを移行する。

「一撃、必倒！　ディバィィイン……バスタァァァア！！」

そして水色の魔力スフィアを形成し、右手のリボルバーナックルで思い切り殴りつけ、必殺の一撃をブラッディーデスザウラーのボディに見舞った。

その一撃は頑強な装甲と衝突して互いに押し合っている。

「グゥウッ…！　こ、ここで倒れる訳には……」

ズィグナーは襲い来る衝撃に耐えて操縦桿を操作し、ブラッディーデスザウラーの右腕を動かす。

「いかんのだァァァア！」

そしてズィグナーの気迫の籠もった叫び声と共に、巨大な腕をスバルに向けて振り下ろした。

デスザウラータイプの腕はただのマニュピレーターでなく、小型ゾイドなら片手で握り潰せ、並みの装甲なら爪で紙の様に切り裂ける程の力を有している。いくら戦闘機人で身体が強化されているスバルと言えども、防御も出来ずにその一撃をまともに受けてはひとたまりも無いだろう。

「スバル！」

ギンガが急いでウイングロードを駆けるが、スバルを助けるには距離も時間も足りなかった。

ダメだ、間に合わないとギンガが判断した時だった。

「ディバィィイン……バスタァァァア！！」

桜色の砲撃が飛来し、ブラッディーデスザウラーの右腕に直撃したのだ。

『ギャァァァア！』

「ぐぉぉおッ！？」

ブラッディーデスザウラーの右腕は砕け、その衝撃と痛みでブラッディーデスザウラーが再び慟哭する。

「この魔力光……もしかして！？」

「こちらスターズ０１、これより援護します！」

スバルが砲撃の発射源を見ると、そこには白いバリアジャケットを身に纏い、栗色の髪の毛を左右で縛っている女性、なのはの姿があった。

「な、なのはさん！？」

「うん、遅れてゴメンね、スバル。」

スバルは突然のなのはの乱入に驚いていた。

「なのは一尉、随分と予定より早いな？」

「ええ、この近くまでマリン曹長に送って貰ったんです。早く救援に向かいたかったものですから…」

「ほう……我々の戦力なら、間違い無く助けが要る…と？」

イスルギ少佐が割り込み、なのはの台詞に対して揚げ足を取るような事を言う。

「い、いえ、そんなつもりじゃ……」

「フッ、冗談だ。」

イスルギ少佐が冗談を言うと冗談に聞こえない、とその場に居る大半の兵士は思った。

「まぁとにかく、散々手を焼かせてくれたあのデスザウラー級も後一息だ。早くシステムフリーズさせてパイロットを……」

ハーマンが言い終わる前に、ネオタートルシップから通信が入る。

『こちらに高速で接近する機影を確認！　数は2です！』

「何!?」

ブラッディーデスザウラーの後方から、ヴォルフのバーサークフューラーともう一機、両腕全体に大小のブレードが大量に装備されたアイアンコングが戦闘区域に進入してきた。

「ヴォルフ様!?　撤退なさった筈では!?」

「…それもやむなしと思ったが、やはりお前を、ズィグナーを置いて撤退など俺には出来ないッ！」

「ヴォルフ様……！」

バーサークフューラーがブラッディーデスザウラーの前に出て、改型のアイアンコングがブラッディーデスザウラーのコックピットの回収作業を始める。

「逃がす訳にはいかん！　各機、攻撃再開！」

再び攻撃を開始し、コックピットを回収させまいと改型のアイアンコングを狙い撃つが、バーサークフューラーが展開したEシール

ドに阻まれる。

「ガンブラスター隊！　ハイパーローリングキャノンだ！」

「了解！」

ハイパーローリングキャノンの砲身が回転を始め、発射準備を進めていく。

「その砲撃は撃たせん！」

ヴォルフはバーサークフューラーのシールドを閉じ、瞬時に収束荷電粒子砲の発射体勢を取る。

「荷電粒子砲が来るぞ！　各機、散開！」

バーサークフューラーの口腔から荷電粒子砲が放たれ、ガンブラスターの居る崖に向けて一直線に延びていった。

「うわぁぁあっ！」

ハイパーローリングキャノンの発射体勢を取っていた為、元々機動力に乏しいガンブラスターは避けきれず、右のガンブラスターが直撃を受けて撃破されてしまった。

『ガンブラスター、二号機が沈黙！』

「くそッ！　ガンブラスター隊、状況を報告せよ！」

「こちら一号機、損傷は軽微！　ですが、コンバットシステムがフリーズしています！」

「三号機、以下同文であります！」

直撃を受けた二号機以外は大したダメージは無いらしく、バディターも無事の様子だった。

「ハーマン少佐、バーサークフューラーが後退します！」

「逃がすな、撃ち落とせ！」

コマンドウルフやシャドーフォックスが後退するバーサークフューラーに対して対空放火を行うが、それも空しく戦域からの離脱を許してしまった。

『敵機、戦域から離脱しました。』

「くっ、逃がしたか……」

「おまけにガンブラスターが一機お釈迦……。そういや、ハーマン少佐が責任取るっつってましたよね？」

「うっ……」

レイの言葉にハーマンは言葉を詰まらせる。

「はてさて、どう相成りますやら…」

「……はぁ。それはともかく、あの基地に何かしらの情報やデータが残ってるかもしれん。何名か調査に向かわせてくれ。」

『了解。』

ハーマンの指示で、なのはとヴィータ、チンクとエリオ、それと共和国の兵士数十名が向かうことに決まった。

「ただいま戻りましたー。」

数時間後、調査に向かっていたなのは達がネオタートルシップに帰還した。

「おう、ご苦労さん。で、どうだった？」

「ダメでした。あの基地に記録されていた物は全て消されてました。」

大佐からの問いに対して、なのはは小さく首を振って答える。

「そうか…。何か少しでも残っていればと思ったんだが……」

そう言うと大佐は席を立つ。

「ところで、ハーマン少佐は？」

「ああ、暗黒大陸上陸や鉄竜騎兵団の戦闘データが認められて、大したお咎めは無しだとさ。上からはこってり絞られたらしいがな。」

大佐がそう言うと、なのはは安心した表情を見せた。

切り札の一つを失ったにもかかわらず処分無しとは、随分と寛大な上層部である。その理由は先の通り、戦果を上げただけではなかったのだが、それはまた別の機会に語る事にする。

「さて、何も得られんと判ったんなら、さっさとこの場を立ち去るとしようか。」

そう言うと大佐は艦橋（ブリッジ）に連絡し、艦のチェック後にウィグリド湖要塞まで引き揚げる旨を通達した。

「さて、俺達もブリッジまで行くとするか。」

大佐はなのはを伴って部屋を出ると、ブリッジに向けて歩き出した。

「それでハーマン少佐、これからどう動くんです？」

レイは両手を後頭部で組み、足をぶらつかせてハーマンに訊く。

「そうだな……。当初の予定通りだと、帝都ヴァルハラへ進軍する積もりだったんだが、今回の戦いで鉄竜騎兵団の背後に着いている人物が見えてきた。」

「……帝国摂政、ギュンター・プロイツェンですか。」

「ああ。プロイツェンが絡んでいるとなると、下手にヴァルハラに進軍するのは危険だ。何かしらの罠を張っている可能性がある。」

鉄竜騎兵団は共和国軍をなんとしてでも帝都ヴァルハラに進軍させたいらしい。するとハーマンの言う通り、道中ないしヴァルハラ

自体に罠を仕掛けている可能性も否定できないのだ。

「なるほどな。だとすると、このまま下手に戦争を続けるのも拙いかも知れんな。」

「？　どういう事です？」

なのはが訊ねる。

「プロイツェンがかなりの野心家で、まだ幼い皇帝ルドルフに代わって政治を行っているのは知ってるな？」

「ええ。」

「そのプロイツェンが元からあるＰＫ師団（プロイツェン・ナイツ）以外に、恐らくは極秘に鉄竜騎兵団を率い、見境無しに攻撃しているという事は……」

「まさか、共和国と帝国の両方を倒して、世界征服しようとしているだなんて……言いませんよね？」

なのはは荒唐無稽だと思いながらも訊く。

「いやいや、あのプロイツェンの事だ。冗談じゃなく充分にあり得る話だぞ？」

「ええ！？」

が、ハーマンからはその荒唐無稽な話を半ば肯定するような返答が返ってきたので、なのはは驚いた。今時世界征服など、夢物語もいい所である、と思っていたからだ。尤も、ミッドチルダにも似たような事をしようとした変態科学者がいたのだが。

「まぁ世界征服が無いにしても、両国を巻き込んで何か企ててるのは確かだろう。そこで、だ。俺は帝国に対して和平交渉を持ち掛ける事を提案する。」

「な、なんですって!?」

ハーマンの言葉に、ブリッジ内が衝撃に包まれた。

「勿論、プロイツェンに直接和平を持ち掛けた所で、黙殺されるのは目に見えています。ですが、軍内部でも高い地位に居り、この戦争を客観的に見ることのできる人物に接触できれば……」

「そんな人が帝国に居るんですか?」

フェイトが訊ねる。

「……そうか、アイツがいたな。フェイト、お前も一度戦場で戦った事があるヤツだ。」

「……?」

フェイトはすぐにはピンと来ないらしく、首を傾げる。

「ところで、ウィナーの怪我は?」

「右腕が折れたようだが、大した怪我じゃないそうだ。バンと合流出来れば、ジークの力とムンベイの技術でどうにかなるだろう。」

「ムンベイの……例の『お灸』とか言う奴ですか……」

「ああ。俺も何回かやったが、あれはかなり効くぞ。……その代わりに熱さが尋常ではないが……」

ハーマンは痛みと引き換えに襲い来る、お灸の強烈な熱さを思い出して言う。

「ともかく、私が彼に連絡してみます。」

「場所は判るのか?」

「ええ。帰り際にライトニングサイクスの通信を傍受出来たので、

突き止められました。」

ハーマンはブリッジのコンソールを叩き、帝国のとある基地にプテラス・ジェミニィを通じて回線を繋ぐ。

「……そうだ、はやてちゃん。」

「ん？　なのはちゃん、どないしてん？」

「実はね、この間管理局の会議があったんだけど……私達、ミッドチルダに戻らなくちゃならないかも知れないの。」

「どういう事や？」

親友の突然の言葉に、はやては首を傾げる。

「いくらスカリエッティを逮捕する為とは言え、管理外世界の戦争に長く介入するのは良くないって……。ミゼット提督やクロノ君達も、上層部を説得しようと頑張ってくれてるんだけど……」

「さよか……。確かに、管理外世界は基本的には最低限の接触しか許されてへんからなぁ……」

脱獄犯が管理外世界の国家に匿われている場合は、今回の様に共和国と協力するといった特例もあるが、魔法の無い世界の一国家に管理局が長い期間で介入することは、世界に要らぬ混乱を招く可能性がある為に好ましくない。

この為、はやては可及的速やかに、スカリエッティとそれに組する残りのナンバーズを逮捕しなければならなくなってしまったのだった。

「シュバルツ中佐、通信が入っておりますが…」
「繋いでくれ。」

シュバルツが許可すると、指令室のモニターにノイズ混じりだがハーマンの顔が映し出された。

「な…！　ハーマン少佐か!?」
『…こちらは共和国軍、ロブ・ハーマン少佐であります。そちらの司令官である、カール・Ｌ・シュバルツ中佐殿との会談を要請したく、この通信を送らせていただいた所存であります。』
「中佐、どう致しましょう?」
「ふむ……」

シュバルツとハーマンは面識があり、この戦争が始まる以前、両国を戦争に誘導しようとした蛮賊を捕らえる任務を極秘に行った時、共和国軍の司令官がハーマン、帝国軍がシュバルツだった。
その際に、互いの性格や考えを把握していたのだ。

「ハーマン少佐、会談の内容をお教え頂きたいのですが?」
『…共和国と帝国、両国の和平交渉及び、鉄竜騎兵団についてであります。』

シュバルツは会談の概要を聞くと、少し考える。

「……承知しました、ハーマン少佐。他の将校等に情報が漏れるの

を防ぐため、此方から参ります。」
『そうして頂けると助かります。では三日後に、場所はトリム高地でよろしいでしょうか？』

トリム高地。ウィグリド湖の西に位置し、かつてはディオハルコン等の鉱物資源が大量に眠っていた土地である。
今ではその資源も枯渇し、機能しているのは基地のみとなっており、一週間程前にウィグリド湖の要塞と同様に、鉄竜騎兵団によって陥落していた。

「構いません。」
『ありがとうございます。では、これで失礼致します。』

ハーマンは軽く頭を下げ、通信が途切れた。

「中佐、よろしいのですか？　背後からお命を狙われるかもしれませんよ？」

オペレーターが訊ねる。

「いや、ハーマン少佐の正義感溢れる性格からして、騙し討ちなど有り得ない。本気で和平交渉をしようと言うのだろう。」

そう言うとシュバルツは振り返って部屋を出ようとする。

「それと、今の通信に関して箝口令を敷く。記録も消去しておいてくれ。」
「ハッ！」

オペレーターが敬礼したのを確認すると、シュバルツは部屋を出

た。

暫くして、プロイツェンの執務室。

『……報告は以上であります。』

「そうか、ご苦労だった。」

通信が切れ、プロイツェンは軽く口元を歪める。

「シュバルツ中佐、莫迦な男だ……。私が貴君の身辺に、工作員を送り込まないとでも？」

くっくっく、とプロイツェンは不気味な笑みを浮かべて言う。

先程のハーマンとシュバルツの通信は、箝口令が敷かれた筈のオペレーターによって、プロイツェンにリークされてしまっていた。

オペレーターは、プロイツェンの配下の人物だったのだ。

プロイツェンは電話のキーを押し、どこかに連絡を入れる。

「私だ。ヨハン・H（ホルスト）・シュタウフィン軍曹を呼んでくれ給え。」

それだけ告げると受話器の向こうは了解したらしく、受話器を元の位置に戻す。

「フフフ……もう少し、もう少しで我が悲願は達成されると思うと……」

執務室にプロイツェンの不気味な笑い声が静かに響き渡った。

第六十五話　Ｔａｋｅ　ａ　ｓｈｏｔ（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第六十六話　召雷の黒獅子（前書き）

やっと話が進んできました。
本当はもっと早いペースで投稿したいのですが……携帯メインと文才の乏しさのせいで、なかなか上手く行きません。
ああ、早く読者の方々から案を頂いたゾイドを登場させなければ……

第六十六話　召雷の黒獅子

すっかり日も落ち、二つの月が煌めく時間帯に、プロイツェンの執務室の扉を叩く音が部屋に響いた。

「失礼します。ヨハン・H・シュタウフィン軍曹であります。」

扉を開き、ヨハンが部屋に入って敬礼する。

「シュタウフィン軍曹、よく来てくれた。さあ、もっと近くへ来たまえ。」

プロイツェンが手招きすると、ヨハンは執務室の真ん中よりやや後ろに位置する、プロイツェンの座る机まで歩み寄る。

「閣下、どういったご用件でしょうか？」

「うむ、早速だが転属命令だ。ヨハン・H・シュタウフィン軍曹、貴官を本日より、鉄竜騎兵団内の幻影部隊へ転属とする。」

「鉄竜騎兵団…？　それは、帝国軍の機体を有しながら、同胞である我々に牙を剥く謎の部隊の事では？」

「フフフ……。あれは、謎の部隊などではないさ。プロイツェン閣下が所有なさる、れっきとした帝国軍の部隊だよ。」

「な……なんですって！？」

プロイツェンの言葉に疑問を持ったヨハンだが、同席しているスカリエッティに真実を告げられ、疑問は驚きへと変わった。

「軍曹……君は実力があるにも関わらず、今や旧型と化したヘルキャット程度しか軍から与えられていない……。君がゼネバス系の人

間であるというだけでだ。その程度の理由で、上層部から過小評価されているのは納得いかないだろう？」

「い、いえ……。自分の実力が、その程度という事かと…。」

「謙遜する事は無い。君には確かな実力がある。だからこそ、君を鉄竜騎兵団へと招こうと思ったのだよ。」

そう言うとプロイツェンは席を立ち、ヨハンとスカリエッティを着いて来させ、とある格納庫へ向かう。

「こ…これは！？」

ヨハンは驚いていた。プロイツェンに公式には存在しない格納庫に連れて来られ、そこに置かれていた機体を目の当たりにしたからだ。

「ライガーゼロイクス……先日、共和国軍に試作機が奪取されたおかげで開発が滞っていたが、遂に量産型の生産に成功したのだよ。」

プロイツェンは淡々と語る。

ライガーゼロは共和国軍に、バーサークフューラーは別の何者かに奪取された事で開発が凍結されていたと公式には発表されていたのだ。

ところが、この格納庫にはライガーゼロどころかバーサークフューラーの量産型に加え、鉄竜騎兵団の主力である小型ゾイドまで置かれていたのだ。

「シュタウフィン軍曹……この機体を君に託したい。そして、君の力を私に貸してほしい。ゼネバスの民が虐げられる事無く、平和に暮らせる世界を作るために……」

「閣下……」

ヨハンの心は、プロイツェンの巧みな言葉によってほとんどが掌握されていた。

「……了解しました。この命、閣下のために捧げましょう！」

「……ありがとう、軍曹。」

ヨハンはプロイツェンに絶対の忠誠を誓い、敬礼するのだった。

ハーマン達の部隊は会談場所のトリム高地まで後退し、本隊との合流を果たしていた。今は、本隊が運んできた補給物資の受け渡し作業が行われている。

「ようやく来たか……。これで、ケーニッヒも最高のパフォーマン

スを見せる事が出来る。」

ハーマンは愛機のケーニッヒウルフの背中に、追加武装のデュアルスナイパーライフルが、前脚にミサイルポッドが取り付けられるのを眺め、嬉しそうに言った。

「へぇ、折り畳み式のスナイパーライフルですか。」

声がした方をハーマンが振り向くと、ヴァイスが歩いて来ていた。

「興味があるのか？」

「そりゃあ狙撃手としては当然ッスよ。」

ヴァイスは折り畳まれたデュアルスナイパーライフルを眺めながら言う。

『……Ｍａｓｔｅｒ，Ｉ ｄｏｎ' ｔ ｆｏｒｇｉｖｅ ｔｈｅ ｆｌｉｒｔａｔｉｏｎ（マスター、浮気は許しませんよ）』

「わーってるって、俺の相棒はお前以外にゃあ居ねぇよ。」

自分以外のスナイパーライフルに興味を示され、ストームレイダーがヴァイスに釘を刺すような発言をし、それをヴァイスが宥める。

「ところで少佐、あのデカめのライガーゼロは？」

ヴァイスが指差した方にはシーザーが置かれ、輸送中に着いた潮風による汚れや錆を取り除く作業が行われていた。

「ああ、例のシーザーだ。バンの専用機として運用される事になったよ。」

「へぇ、なんか雰囲気がジークに似てるとこもあるッスね。」
「ジークとの合体を前提に、設計と調整がされてるからな。」

白銀の装甲はもとより、よりシャープなったフォルムにレーザーブレードと一体になっている一対の翼。そして顔には、ジークと合体した際にキャノピーに現れる模様があしらわれている。

「しかも共和国の切り札っつーマッドサンダーまで来てる……。例え帝国の全軍とガチでぶつかっても、引けは取らねぇって感じですかね？」
「予定数が無事にロールアウトすればな。……尤も、そんな事態になる前に戦争が終わるのがベストなんだが。」
「分かってますよ。そのための極秘会談ですからね。」

いざという時の為にマッドサンダーを本国から輸送されたが、この会談が切欠（きっかけ）となって共和国と帝国の間に和平が成立すれば戦場に投入する必要は無くなるのだ。折角配備したのに使わないのは少しもったいないかもしれないが、戦争が泥沼化して取り返しが着かない事態になるよりはマシである。

「……ん、そろそろ昼飯の時間だ。ヴァイス、食いに行くか？」
「そっスね。行きますか。」

ハーマンとヴァイスはケーニッヒウルフに背を向けると、格納庫を出て食堂へと歩いていった。

シュバルツが司令官を務める帝国軍基地。表にはシュバルツ仕様の黒いセイバータイガーとレブラプター、それにブラックライモスが置かれていた。

「……では少佐、留守は任せる。」
「ハッ、お気を付けて。」

シュバルツは基地の指揮権をツェルカンプゥに任せ、キルシェと弟のトーマを伴ってトリム高地へ出発した。
シュバルツは今回の外出を本国からの呼び出しという建て前を用意し、最も信頼の出来るキルシェとトーマのみを連れて行く事にしたのだ。
尤も、基地に残したツェルカンプゥ少佐は信頼出来ると判断し、本当の事を告げてあるのだが。

「……兄さ……中佐、本当に、我々だけでよろしいのですか？」
「……あまり大人数で動いては、極秘の意味が無いからな。少人数ならばプロイツェンにも感づかれまい。」

トーマがシュバルツに訊ねるが、うっかり『兄さん』と呼ぼうとしてしまい慌てて言い直す。

「それに、今は正式な任務ではないのだから、楽な呼び方でも構わんぞ、トーマ？」
「あ、いや……」
「それとも、私の事が嫌いになってしまったのか？　お兄ちゃんは

悲しいぞ？」
「い、いやいやいや！　私は今でも……って、何を言うんですか兄さん！？」
「くっ……ふふふ……」
シュバルツとトーマの漫才…もとい、会話を通信機越しに聴いていたキルシェが吹き出す。
「……あ、いえ、あまりに仲がよろしいのでつい……」
「いいさ、私とトーマが仲の良いのは事実だしな。」
「や、止めて下さいよ兄さん……人前で……」
「……では、この話はこれで終わりにしよう。弟が恥ずかしさのあまりに死んでしまいかねん。」
恥ずかしがるトーマを気遣い、シュバルツはこの話題を打ち切ることにした。
「しかし共和国か……久しぶりに、バン少年と話ができるかもしれんな。」
「……」
ようやく恥ずかしさの収まったトーマはシュバルツの発言を聞いて、あまり良いとは言えない気分になっていた。
シュバルツが時折口にするバンという名の少年、いや、あれから数年が経っている為、既に青年と言える年齢になっていることだろう。
それは一体どのような人物なのか、何故数年が経過しても兄の記憶に残り続けるのか。トーマはそれが知りたくて仕方がなかった。
（バン・フライハイト……。一体、どの様な人物なのだ……？）

トーマは自分が憧れる兄の印象に残る人物を想像する。若くして高いカリスマ性を持っているのか、戦術の組み立て方が天才的なのか、はたまた、呆れる程の直情的な人物なのか。

いずれにせよ、トーマもバンには一度会ってみたいと思っていた。

「中佐、よろしいでしょうか。」

「どうした、大尉？」

「ツェルカンプゥ少佐の報告によれば、鉄竜騎兵団の指揮官はヴォルフ・プロイツェン大佐……加えて、ゼネバスの為に戦うとも発言したとの事ですが……」

「そうらしいな。恐らく、プロイツェンが子息のプロイツェン大佐を使ってゼネバス系の兵士を扇動し、何かを企てようとしているのだろうが……なんとも言えんな。まだはっきりしない事が多すぎる。」

シュバルツはツェルカンプゥ少佐の報告を聞いた後、自室で考えていた。何故、この大きな戦争の最中に、プロイツェンは戦局を混乱させるような動きをさせるのか。

ゼネバス系の兵士がガイロス系の兵士に比べ、不遇な扱いを受けているのは事実だ。それを利用してゼネバス系兵士達を餌で釣り、士気を上げるのはともかく、何故、敵も味方も構わずに攻撃を加えるのか。

（まさか……いや、このタイミングでは考えづらいな。）

シュバルツの脳裏に、ある言葉がよぎった。が、それを戦時中に行うのはあまりにも無謀すぎる。狡猾な性格のプロイツェンが行う事はまず無いだろうと判断し、心の内にしまう事にした。

「……中佐？」
「……いや、すまない。少し考え事をしていた。」
キルシェに声を掛けられ、考察を中断する。
「まもなく、トリム高地に差し掛かります。」
「そうか。大尉、トーマ、コンバットシステムを停止せよ。」
それぞれの機体のコンバットシステムを停止させ、念のため、戦闘の意思が無い事をアピールする。
高地への入口には、タクマのシールドライガーとサヤカのシャドーフォックスが出迎えの為に待機している。
「初めまして、私は帝国軍のカール・Ｌ・シュバルツ中佐だ。」
「同じく、キルシェ・ハルトリーゲル大尉です。」
「同じく、トーマ・Ｒ・シュバルツ中尉であります。」
「ご苦労様です。自分は共和国軍情報部所属、サヤカ・クーイン少尉であります。これより先のご案内をさせていただきます。」
「同じく情報部、タクマ・Ｉ・サンダース軍曹であります！」
互いに自己紹介を済ませると、サヤカとタクマの先導で基地への道を歩き出す。
「…時にサンダース軍曹、お聞きしたい事があるのですが……」
「…？　はい、何でしょうか？」
トーマは機体を歩かせながら、タクマに声を掛ける。
「バン・フライハイトという人物はご存じないか？」
「フライハイト中尉ですか？　ええ、存じております。」

「……一体、どの様な人物なのですか？」
「どの様な……ですか。」
トーマの問いに対し、タクマはううん、と唸って考え、自分なりの答えを出す。
「……一言で言うならば、『人を惹き付ける存在』ですかね？」
「人を……惹き付ける？」
「ええ。フライハイト中尉は優しくて、それでいて度胸があって……とても頼りになる方だと思っております。」
「なるほど……」
タクマの言葉を聞いて、トーマの中にバン・フライハイトという人間のイメージ図が浮かんできた。
鍛え抜かれた肉体、眼はキリッと鋭く、時には直情的でありながら、またある時には静かに優しさを見せる。多数に無勢でも臆する事なく敢然と立ち向かい、決して諦めない。そんな逞しい男を思い浮かべていた。
まぁ現実は微妙に、というか、かなり異なるのだが。
「まぁ……それでも俺にとっては、イスルギ少佐の方が素晴らしい方だと……」
「？　何か？」
「い、いえ！　何でも……！」
小声とはいえ、ついタクマ自身が憧れる師匠の名を口にし、それが僅かながら通信機に入ってしまった。タクマは慌ててそれを訂正する。
（あらら……タクマったら本当に少佐一筋なんだから……）

サヤカもタクマのイスルギ少佐に対する崇拝っぷりに、呆れながらも羨ましいと思うのだった。

トーマとタクマのやり取りから三十分程で、シュバルツ達はトリム高地の基地へと到着した。

「こちらクーイン少尉、シュバルツ中佐をお連れしました。」
『おう、こちらボーグマン、了解だ。機体を格納庫へ案内して差し上げろ。』
「了解しました。」

サヤカはシュバルツ達の機体を比較的空いている格納庫へ先導し、タクマはお役御免となったので、自分のシールドライガーを格納庫へと向かわせる。
格納庫にセイバータイガーにレブラプター、ブラックライモスが置かれると、キャノピーを開き、それぞれのコックピットの中から出て、昇降用のワイヤーを掴んでゆっくりと降りる。
（……私が思っていたよりも戦力はあるらしい……）
「ご苦労様でした。どうぞこちらへ、ハーマン少佐がお待ちです。」

サヤカの案内で、シュバルツ達は会議室へと歩みを進める。

途中で兵士達とすれ違うと、全員が敬礼して挨拶をしていた。

（一兵卒もよく訓練されている……）

シュバルツが基地の様子を見て脳内で感想を述べていると、いつの間にか会議室の前に到着していた。

「失礼します。カール・Ｌ・シュバルツ中佐、キルシェ・ハルトリーゲル大尉、トーマ・Ｒ・シュバルツ中尉をお連れしました。」

サヤカが扉をノックして用件を述べ、扉を開けてシュバルツ達を中へ通す。

会議室にはハーマンの他に、レイとバン、ボーグマン大佐となのは、フェイトとはやてが席に着いていた。

「お久しぶりです、ハーマン少佐。」

シュバルツはハーマンに敬礼し、ハーマンも席を立って敬礼を返す。

「お久しぶりです、シュバルツ中佐。しかし、僅か二機の護衛で敵の懐に乗り込んで来られるとは……豪胆振りは流石ですな。」

「…事が事だけに、我が軍に不用意な噂が流れるのを恐れただけです。…臆病者ですよ、私は。」

シュバルツは少し俯き、帽子を脱いでハーマンと共に向かい合わせに着席する。

「……大佐、すみませんが、護衛を一名だけ残して席を外して頂けませんか？」

「分かった。ほら、行くぞお前ら。」
「トーマ、お前も頼む。」
「ハッ。」

ハーマンとレイ、シュバルツとキルシェ以外は大佐に連れられ、会議室の外に出て行った。

「だが、我々の呼び掛けにこうも早く反応して下さるのは……貴方にも心当たりがおありなのでしょう？」
「ええ……。鉄竜騎兵団、我等帝国軍と同じガイロスの紋章を着けながら、同胞に牙を剥く謎の部隊がいるとの報告は受けています。そして、それを裏で操っているのは……」

ハーマンとシュバルツが話し合っている時、会議室の近くの廊下でバン達が屯（たむろ）していた。一応、人払いも兼ねているので仕事の一つではあるが、正直暇である。
そんな中、トーマの目線はある人物に集中していた。

（この方が、バン・フライハイト中尉か……？）

トーマはおそらくバンであろう人物に挨拶をするべく歩み寄る。
「失礼ですが、バン・フライハイト中尉でありますか？」

「ん？」
「自分は、トーマ・R・シュバルツ中尉であります。兄から貴方の話を聴き、一度お会いしたいと思っておりました。」
トーマが声を掛け、敬礼して用件を述べる。
が、ここでトーマは重大な勘違いを犯してしまっていた。トーマが話し掛けた相手はバンではなく、ボーグマン大佐だったのだ。自分で思い浮かべていた人物像に当てはめた結果、大佐をバンと勘違いしてしまったのだ。
「あ、いや、俺はバンじゃ……」
「自分もゾイド乗りとして、軍人として、貴方の経験や武勇伝を聴いて参考にしたいのです。」
大佐は人違いである事を言おうとしたが、興奮気味のトーマの耳には入らずにかき消されてしまう。
「あ、あのさぁ……」
「私は、私の兄の様に強くなりたいのです！」
トーマはすぐ隣で、本物のバンに声を掛けられている事にも気付かない。
「おい、聞けって！」
「ッ！？」
バンが耳元で声を張り上げると、ようやくトーマに気付いてもらえた。
「……なんだ貴様は。私は今、フライハイト中尉と話をしているの

だ。話の腰を折らないでもらいたい。」
「俺が、そのフライハイト中尉だよ！」
「……何だと？」

トーマは一瞬、この自分と同い年くらいの人物は何を戯けた事をほざいているのかと思った。

「ハッ、何を馬鹿な。貴様の様な田舎者が、兄に認められる訳がなかろう。」
「いや、そいつがバンだ。」
「……な、何ですって？」
「いや、だからそいつがバン・フライハイト中尉だよ。俺はアーサー・ボーグマン。階級も大佐だよ。」

大佐にも勘違いを指摘され、トーマはひどく驚いた表情を見せた。まさか、こんな知性も無いような田舎者が、兄が気に掛けている人物だとは夢にも思わなかったのだ。

「……認めん……」
「は？」
「認めん！　私は貴様が兄が一目置いている男だなど、断じて認めんぞ！」
「な、なんなんだァァア！？」

トーマの一方的な言い分に、バンは訳も分からず混乱するばかりであった。

「よう、お疲れさん。交代の時間だぜ。」
「あ、アーバインさん。もうそんな時間ですか。」

基地の外では、周辺の警戒に当たっていたエリオがジ・オーガに乗ったアーバインと交代する。

「どうだ、何か変わった事は無いか？」
「ええ、今のところは。」

エリオは空を見上げる。雲一つ無く、故郷のミッドチルダに似た二つの月が煌めき、微かに涼風が吹いて静寂が保たれている。

「そういえば、ここの月も二つなんですね。」
「ああ。ミッドにも二つ月があんのか？」
「はい、なのはさんの故郷は一つでしたが。」
「そうか。地球……だったか？　惑星Ｚｉに流れ着いた地球人の住んでいた地球とは、また違う次元にあって別の星だって聞いたが。」

アーバインはなのはが地球出身だと聞いたが、どうやら惑星Ｚｉに流れて来た地球人の星とは違い、別の次元に存在する同名の星である事が判明していた。
管理局は今のところ、なのはの産まれた方の地球しか認識できていないが。

「何だ、ミッドチルダが恋しくなっちまったのか？」

「……そんな事、無いですよ。ただ、この星の月も綺麗だって、思ったんです。」

エリオは月から視線を外し、アーバインの方を向く。

「……一体、いつまでこの戦争は続くんでしょうね。」

「さぁな。まぁ、この会談が順調に進めば、少しでも早く戦争は終結に向かうかもな。」

「……そうですね……ッ!?」

アーバインと会話をしていたエリオの眼が見開いたかと思うと、素早く周囲をを確認する。

「お、おい、どうした!?」

「……アーバインさん、どうやら順調に進みそうに無いみたいです。」

エリオはストラーダを構え直し、呼吸を整えて意識を集中させる。

「……敵か?」

「おそらく。僅かですが、ゾイドの足音が聴こえました。ステルスを使用しているようです。」

「マジかよ……俺には何にも聴こえなかったぞ?」

「耳には自信があるんですよ。」

「ほう……」

アーバインはエリオの並外れた聴力に感心する。

アーバインも、ジ・オーガのレーダーと義眼に搭載された暗視スコープを使って索敵を試みるが、機影を感知する事が出来ない。

「こっちのレーダーじゃ確認できねぇ。確かに聞こえたんだな？」
「はい。僕の騎士の誇りに賭けてもいいです。」
エリオはキリッとした表情で、堂々と言い放つ。
「へッ、そこまで言うなら信じるよ、チビ騎士様！」
そう言うとアーバインは操縦桿を操り、ジ・オーガのロングレンジバスターキヤノンの砲口を真正面からやや下の角度に向ける。
『……ファントム０１より各機へ。我々の存在に気付かれた。直ちに散開せよ！』
「かくれんぼしてねぇで、出て来やがれ！」
ジ・オーガのロングレンジバスターキャノンが轟音を上げて放たれ、数十メートル前の地面に着弾して爆発する。
「エリオ！　何者かがすぐ近くまで来てたんなら、今の一発で左右に散った筈だ！」
「はい！　ストラーダ、フォルムツヴァイ！」
エリオが指示すると、ストラーダは空薬莢を一つ排出し、推進用のブースターを石突部分にも出現させる。
そして全てのブースターを使用して、ジ・オーガが砲撃した空間の左側に向かって突撃した。
（さっきより足音が強く、大きくなってきてる…！）
それは速度が上がり、エリオと隠れている機体との相対距離が縮まっていることを示していた。

「そこだァァアッ！」

ストラーダのブースター出力を更に引き上げ、ある一点を狙って突進した。

すると、何も無い筈の空間にストラーダの穂先が突き刺さり、刺さった場所から火花が散り始めた。

「よし！　いいぞエリオ！　そのまま逃がすんじゃねぇぞ！」

「はい！」

エリオは更に深く突き刺そうとブースターを噴かせる。

だが、エリオが突き刺した機体は足を止め、機体の周囲に電流が走り出してその形状がぼんやりとだが姿を見せる。

「高圧電流…！？　ストラーダ、逆噴射……！」

慌ててストラーダを引き抜こうとするが、時既に遅し。エリオに高圧電流が襲い掛かった。

「ッ！　うわぁぁぁぁぁあッ！！」

「エリオ！！」

エリオは一気に感電し、体の所々がビクビクと痙攣する。

「今、援護を……ぐあっ！？」

エリオを助ける為に援護射撃をしようとするアーバインだが、見えない期待に左右から体当たりを受け、そちらを相手にせざるを得なくなった。

「ぐっ…！　こちらアーバイン！　通信室、応答せよ！　……クソが、繋がりゃしねぇ！」

アーバインはトリム高地基地に援軍要請をしようとしたが、周囲を強力な電磁波が覆っているらしく連絡が出来ない。

そうしている間にも、エリオの体には電流が流れ続けていく。

（く……うう……こんな、所で……フェイ……ト……さん……）

そして、ついに突き刺さったままのストラーダを手離し、地面に音を立てて落下してしまうのだった。

第六十六話　召雷の黒獅子（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第六十七話　騎士の意地（前書き）

上山版ゾイドの単行本、遂に揃いました。改めて最終五巻を読んでみたら……うわぁ、無理やりＥＮＤ感が否めない……伏線かなり残ってたのに、何故打ち切ったし小学館……

第六十七話　騎士の意地

ハーマンとシュバルツが会談を行っている会議室に、警報が鳴り響く。

「何だ！？」

ハーマンが立ち上がると、通信室から回線が繋がり、オペレーターが映し出される。

「ハーマン少佐！」

「バディター、何が起きた！？」

「詳細は不明です。しかし、先程キャバリエーレ中尉のジ・オーガの物と思われる砲撃音を聞いたとの報告がいくつかあり、何者かと交戦している可能性があります。」

「不明？　レーダーに反応は！？」

「ありません。更に、キャバリエーレ中尉との連絡が取れません。何らかのジャミングが行われているようです。」

「なんという事だ……！」

ハーマンは握り締めた拳を机に叩きつけて悔しがる。

一方で、シュバルツはバディターの報告を聞き、腕を組んで考えていた。

（……このタイミングで、トリム高地への奇襲攻撃……。こんな基地を叩いた所で、共和国の進撃を止める事はできない。）

もし帝国が共和国の帝都ヴァルハラへの進軍を阻みたいなら、こんな後方の基地ではなく、もっと前線の基地を叩くのが望ましい。

ヴァルハラと逆方向に位置する基地を叩いた所で共和国本隊を足止めは出来ないし、本隊に挟み撃ちを仕掛けるにしても位置が悪く、逆に本隊とエントランス湾のウルトラザウルス等の部隊に挟まれてしまいかねない。そもそも、共和国本隊に挟み撃ちを仕掛けたければ山岳や森林地帯に奇襲部隊を配置し、頃合いを見計らって仕掛ければいいので、わざわざ基地を陥落させる必要性が全く無い。

（つまり、利点が何一つ無い。だが今、このタイミングで仕掛ける事によって生まれる利点は……）

現在行われている会談を妨害できるだけでなく、その中心人物であるハーマンとシュバルツを亡きものに出来る。それが、この瞬間に発生する、唯一のメリットだ。

（これによって得をするのは……）

シュバルツの脳裏に唯一人だけ、ハッキリと浮かび上がった。

（ギュンター・プロイツェンか……。だが、どこから漏れた？　この会談は私と大尉、それにトーマしか知らな……）

そう考えてから、シュバルツはハッとした。

ハーマンから接触があった際に同席していたオペレーター。彼がプロイツェンに情報をリークした可能性が浮かんだ。

（だが、私は箝口令を……いや、彼がプロイツェンの手の者だとしたら……！）

シュバルツの箝口令など無視し、主君であるプロイツェンに情報を流すだろう。

迂闊だった。考えてみれば、シュバルツが皇帝派であり、皇帝ルドルフに絶対の忠誠を誓っているのは、プロイツェンもよく知っている。将来、自分に敵対するであろうシュバルツの身辺に、密かに密偵を配置しておかない訳が無かった。

「バディター。総員、第一種戦闘配置だ。俺も出る。」
「了解しました。」

通信が切れ、ハーマンは考え込むシュバルツを見やる。

「シュバルツ中佐。申し訳ありませんが、私も出ます。中佐は避難を……」
「いえ、私も力をお貸しします。」
「しかし、シュバルツ中佐は我々にとって来賓でありますから……」
「……おそらく、襲撃してきたのはプロイツェンの手の者です。」
「な、何と!?」

ハーマンは極秘である筈の会談が、よりにもよってプロイツェンに漏れていた事に驚く。

「情報が漏れたのは、私にも責任があります。せめてもの償いをさせて頂きたいのです。」
「……分かりました。しかし、ご無理はなさらぬよう……」

シュバルツの気迫に押され、ハーマンはシュバルツの出撃を了解すると、共に部屋を出る。

「ハーマン少佐、何が起きたんです!?」

突然の警報に驚いていたレイが訊ねる。

「プロイツェンが、会談を妨害しに来たようだ。」
「な……！　情報が漏れたんですか！？」
「……すまない。」

レイはハッとして、謝罪の言葉を言うシュバルツを見る。

「あ、いや、シュバルツ中佐の所為だって言いたい訳では……」
「とにかく、第一種戦闘配置だ。全員持ち場に着け！」
「了解！」

そう言うと、その場の全員が自身の愛機が置かれている格納庫に向かって走り出した。

（エリオ……お願い、無事でいて……！）

フェイトは警戒任務から戻らないエリオが心配になり、一刻も早く向かわねばという気持ちになっていた。

レイがホバーカーゴに置かれているライガーゼロのコックピットに搭乗すると、ムンベイが映し出されているモニターが現れる。

『レイ、輸送してきたゼロ用のユニット、使ってみない？』
「ああ。シュナイダーを頼む！」
『はーい、毎度あり！　シュナイダー一丁！』

ムンベイがコンピューターに素早く注文を打ち込むと、左右の内壁が開き、中からアームが伸びてゼロアーマーを取り外し、中の空間に格納する。

「ライガーゼロ、インストレーションシステムコール、シュナイダー！」

レイが音声でコンピューターに指示を出すと内壁がスライドを始め、シュナイダーユニットが格納されている場所で止まった。壁が開いてシュナイダーユニットが姿を現し、アームでゼロの素体に取り付けていく。

コックピットの内側では座席の左右に追加ユニットが現れ、シュナイダーのスペックに合わせて姿を変えていく。

『システム、オールグリーン。ライガーゼロシュナイダー、C.A.Sコンプリート！』

換装作業が終了すると、ホバーカーゴ上部のカタパルトまでリフトに載せられて移動する。カタパルトに到着すると、ガイドレールが伸びてその間にライガーゼロシュナイダーが移動する。

『進路クリア！　行けるよ、レイ！』
「了解！　レイ・グレック、ライガーゼロシュナイダー！　行くぜ！」

シュナイダーがカタパルトから勢い良く飛び出し、舗装された基

地の敷地にドスンと重い音を上げて着地する。
その他の、バンのシーザーやイスルギ少佐のブレードライガーといった機体や、なのはやフェイトといった魔導士も、格納庫からゾロゾロと姿を現していく。

「各機、アーバインとエリオの居る地点まで移動。状況を確認して……」

ハーマンが指示を出し終える直前、ケーニッヒウルフの足元で爆発が起こった。

「何ッ!?　どこからだ!?」

突然の攻撃にハーマンは驚き、ケーニッヒを半歩下げる。

「狙撃か!?」
「違うわ。ほんの少しだけど、ゾイドの気配を感じる。」

バンの後ろの座席に座るフィーネが言う。

「フィーネが言うんなら本当だろう。総員散開し、警戒を怠るな!」

ハーマンは古代ゾイド人であるフィーネの感性を信じ、ステルス機への対応へと切り替える。
そして、姿を隠している機体は音を立てずにレイ達に襲い掛かっていった。

「クソッたれ！　こう姿が見えねぇんじゃ、戦いようがねぇ！」

アーバインは姿を見せず、一方的に攻撃を仕掛けて来る襲撃者の機体に悪態を付く。

ジ・オーガの機体は襲撃者の度重なる攻撃によってボロボロになり、オーガノイドシステムとジ・オーガ自身の気合いによって、辛うじて立っている状態だった。

エリオが電撃に倒れてからそれなりに時間は過ぎており、おそらくこの場に残っているのは二、三機のみ。他は既に基地内に侵入を許してしまっているだろう。手負いのジ・オーガを片付けるだけなら、この数でも何ら問題は無かった。

「ぐあっ！！」

更に爪による一撃を受け、ジ・オーガが片膝を着いた。

（ちっ……今まで散々死にかけてきたが、今度こそ本当にダメかもな……）

アーバインもジ・オーガも、既に満身創痍であり、この瞬間にアーバインは死を覚悟する。

（すまねぇなレベッカ、バカな兄貴でよ……）

故郷に置いてきた妹のレベッカが脳裏に浮かび上がる。続いてム

ンベイ、ハーマン、ボーグマン大佐と、走馬灯の様に駆け巡っていく。

（……ん？　今度はバンか……）

アーバインの脳裏に、バンの姿が浮かんだ時だった。

「……バン！？」

閉じかけていた眼が一瞬にして見開かれ、操縦桿を握る両手に力が込められる。

「……やっぱダメだ、俺はまだ死ねねぇ……」

「次でトドメだ！　死ねェ！」

「……俺が死んだら、あの脳筋（バン）バカを止められる奴が居なくなっちまうだろうがァァァア！！」

ステルス機がジ・オーガにトドメを刺すべく突進する。だが、アーバインの渾身の叫びによってジ・オーガの闘志が復活、着いていた膝を持ち上げて両脚でしっかりと大地を踏みしめる。

そして、突進するステルス機が、ジ・オーガの体に鋭い爪を突き立てた。

『グギャァァアッ！！』

ジ・オーガが激痛による慟哭を上げるが、それは同時に勝利を確信する雄叫びでもあった。

「……捕ったァ！」

「な、何ィ！？」

ジ・オーガは腹に爪が突き刺さったまま、ゼロ距離まで接近してきたステルス機を両腕のハイパーキラークローで捕まえた。

「密着していれば、ステルスなんざ意味はねぇんだよ！！」

ジ・オーガの鋭牙がステルス機の首を捉え、強力な顎の力で噛み潰す。

『グァァァア！！』

今度はステルス機が慟哭を上げ、恐怖と痛みのあまりコンバットシステムがフリーズする。

その瞬間にステルスが解除され、隠されていた機体が姿を現す。

「な……！　コイツは！？」

アーバインはステルス機の機体を目の当たりにし、驚いた。ステルス機の状態は、黒と紫の装甲で固められたライガーゼロだったのだ。

「プロイツェンの野郎、量産化に成功しやがったのか！」

アーバインは驚きながらも、更にジ・オーガの牙を食い込ませて首の回路を分断すると、腹に刺さった前脚を引き抜いて放り投げた。

「ファントム０４！　おのれ、鬼神めェ！」

残りの一機がステルスを使用したまま、ジ・オーガに肉迫する。

だが、パイロットが怒りのあまりにライガーゼロの足音を消す事

を忘れた為、巻き上がる砂埃や音でステルスの効果が低下していた。

「そんなに騒いだら、隠れてる意味がねぇだろうがよ！」

アーバインは操縦桿を操って回避運動を取ろうとする。だが、ジ・オーガはアーバインが思った通りの動きが出来ず、直撃は免れたものの体勢を崩して転倒してしまう。

「ぐあっ！？　……クソッ、やっぱさっきの一撃が効いてんのか……！」

イクスを返り討ちにする為に捨て身の戦法を取ったアーバインだったが、そのツケがすぐに回ってきてしまった。

「……今の勢いからして、残りは一機だけみてぇだな。……つっても、今の俺とジ・オーガじゃそれも厳しいか……？」

まさに、一難去ってまた一難。このままでは、もう一体のライガーゼロイクスに倒されてしまいかねない。

ライガーゼロイクスが居るらしい場所に、電流が走り出す。

「やべぇな、このままじゃエリオみてぇに黒コゲか……」

電流は雷の様に肥大化していき、それはジ・オーガの心臓（ゾイドコア）を狙っていた。

「これで、仕留めるッ！」

「させるかァァアッ！！」

ライガーゼロイクスが電撃を放とうとした時、叫び声と共に、イ

クスの機体にストラーダの切っ先が突き立てられた。

『ッ！！　グォォォオッ！！』

「なっ！？　ドラムコンデンサーが！」

ストラーダが突き刺さった場所。それは、イクスの機体や電磁兵器にエネルギーを回す為のコンデンサーだった。

ドラムコンデンサーを失ったイクスは、全体の出力や機動性が著しく低下する。

「な……！　エリオ！？」

「すみませんアーバインさん、足を引っ張ってしまって……」

「いや……それより、大丈夫なのかよ？　高圧電流をまともに浴びてたじゃねぇか。」

目を覚ましたエリオに救われたアーバインだが、全身に電撃を浴びたエリオの身を案じる。

「僕は電気系の魔力変換資質を持ってますから、電撃にはいくらか強いんですよ。……それでも、ノーダメージっていう訳じゃないですが。」

電撃のショックがまだ体に残っているらしく、エリオの表情はあまり良いとは言えなかった。

「そうか。なんにせよ、無事で良かったぜ。お前を死なせたらフェイトに殺されちまわァ。」

アーバインは軽口を叩きながらもエリオの身を案じ、イクスから離れるように指示をする。

「さて、テメェから話を聞かせてもらうとするか。」

アーバインはイクスに歩み寄って頭を鷲掴みにすると、コックピットを守るキャノピーを引き剥がそうとする。

「……貴様に話す事など、何も無い！」

「ケッ、強情だな……ん？」

「我ら、鉄竜騎兵団（アイゼンドラグーン）！　プロイツェン閣下の、ゼネバスの為に！」

イクスのパイロットが高らかに叫ぶと、イクスの機体に高エネルギー反応が現れる。

「チッ、クソッたれ！」

次の瞬間、イクスの機体が大爆発を起こし、粉々に砕け散ってしまった。

「うぉぉおっ！？」

「うわぁぁあっ！」

ジ・オーガはアーバインのとっさの判断で爆発には巻き込まれなかったが、ダメージが蓄積されていた所為で踏ん張りが効かず、爆風に煽られて転倒してしまった。

「クッ……エリオ、大丈夫か？」

「は、はい。なんとか……」

「まさか、自爆するとはな……」

ライガーゼロイクスの機密漏洩を防ぐためだろうが、何の躊躇い

も無く自爆するとはアーバインも思っていなかった。

「……エリオ、ヤツらの気配は？」

エリオは耳に意識を集中させ、辺りの様子を伺う。

「……ありません。今のが、最後の一機だったみたいですね。」

「そうか。……ハーマン少佐達が心配だ、基地に戻って……」

アーバインが傷だらけのジ・オーガを起こして基地の敷地内に転進させようとした時、エリオがうつ伏せに力無く倒れた。

「お、おい！　エリオ！？」

「はは……すいません、体中が痺れちゃって……」

エリオが立ち上がった時、電撃のダメージは大丈夫だと言っていたが、後になって症状が出て来てしまったらしい。

「ったく、無茶しやがって……」

アーバインはジ・オーガのコックピットから昇降用のロープを下ろし、地面に降りるとエリオを抱えて再びコックピットに戻る。

「あーあー、こちらアーバイン。本部、応答願います。」

イクスを倒した事によって、周囲に散らされていた電磁波が減少し、通信が繋がり易くなっていた。

『大佐！　通信が途絶えていたキャバリエーレ中尉より連絡が！』
「そうか！　前線の部隊に回してくれ！」

トリム高地基地の通信室から、大佐の指示で全機に回線が回される。

「アーバイン！　エリオは、エリオは無事！？」
『ぬわッ！？　いきなり怒鳴るなよフェイト！　……多少感電やらしてるが、死んじゃいねぇよ。』
「そ、そう……ごめんなさい、アーバイン。」

フェイトはエリオの無事が知りたいが故とはいえ、やや興奮した事を反省する。

「こちらボーグマン！　そちらの状況はどうか！？」
『大佐か。取り敢えずこっちのステルス機は片付いたが、エリオがモロに電撃を浴びちまった。それにジ・オーガもボロボロだ。』
「そうか。こっちも、そのステルス機とは交戦中だが……こいつらは何者なんだ？　シュバルツ中佐が言うには、プロイツェンの手下らしいが……はあッ！」

姿を隠したイクスが、電流を纏ったブレードで大佐のブレードライガーに斬り掛かるが、それをレーザーブレードで冷静に斬り払う。

『そのゾイドの正体は、ステルスタイプのライガーゼロだ。』
「何!?　ライガーゼロだと!?」
「マジかよ、アーバイン!?」

レイが通信に割り込み、アーバインに問い質す。

「ああ。どうやらプロイツェンの野郎、ゼロの量産化に成功していたらしいな。」
「キャバリエーレ中尉。すまないが、割り込ませて貰う。」

シュバルツは一言だけ断りを入れ、通信に割り込んだ。

「ステルスタイプのライガーゼロなら、ヴァルハラで聞いた事がある。」
「本当ですか、中佐!?」

ハーマンが言う。

「ええ。確か、ゼロアーマーと並行して造られていたユニットで、イクスユニットと呼称されていました。」
「ライガーゼロイクスか……厄介な相手だな。」

大佐は軽く舌打ちする。
ライガータイプの攻撃に獰猛さ、シャドーフォックスやヘルキャットの光学迷彩の両方を併せ持つ、ある意味ではジェノブレイカーよりも大層厄介な機体である。
一応、ケーニッヒウルフには暗視スコープ等を搭載したヘッドギアが装備されているが、イクスに接近され過ぎている為、使う事が出来ない。
数では共和国が勝っているものの、闇に隠れた獅子を前に戦況は

不利であった。

「アクセルシューター！」
「プラズマランサー、ファイア！」

なのはとフェイトが周囲に射撃魔法を展開するが、闇雲に放った魔力弾ではイクスを捉える事が出来ない。

「くっ……やっぱり光学迷彩を解かないと当たらないか……！」

フェイトは魔力弾が全て外れた事を確認すると、少し後退して戦法を変える事にした。

「こちら、ライトニング０１。広域魔法を使用します、どなたか発動までの援護を！」
「こちらシュバルツ、了解した。私が援護に回ろう。」

フェイトの前にシュバルツのセイバータイガーが、援護の為に躍り出る。

「こちらスターズ０１、私もスターライトブレイカーを使用します。援護をお願いします！」
「よっしゃ、俺に任せろ！」

なのはの前に、バンのシーザーが陣取った。

『ファントム０１より各機へ。魔導士が何か仕掛けてくるようだ、優先で撃破せよ。』
『ハッ！』

数機のイクスが姿を隠しながら、背部のエレクトロンドライバーに電力を充填し、なのはとフェイトを狙って放つ。

「来た！　シーザー、シールドだ！」

シーザーは前進するとなのはとフェイトを超高出力のシールドで覆い、エレクトロンドライバーの電撃を打ち消した。

「そこかッ！」

すかさずシュバルツが電撃の発射元を特定し、そこにビームガトリングを撃ち込む。エレクトロンドライバーの使用直後で隙の出来ていたイクスに全弾命中し、イクスはその場に倒れ込んで姿を現した。

上空にはどす黒い雷雲が立ち込め、サンダーフォールの準備完了を知らせる。

「ライトニング０１、発射準備完了！　一時後退して下さい！」
「同じくスターズ０１、準備完了しました！」
「了解だ！　全機、バンとシュバルツ中佐の付近まで後退！」

バンとシュバルツの周囲に総員が下がり、範囲攻撃には十分なスペースを作る。バンはなのはの前から飛び退き、スターライトブレイカーの射線を確保する。

「サンダー……フォール！」
「全力全開！　スターライトォォオ……ブレイカァァァア！！」

巨大な雷雲からいくつもの雷が落ちてイクスの群れを真上から襲い、これまた巨大な桜色の砲撃が一直線に伸び、イクスの機体を真

横から貫いていった。
その攻撃を受けてコンバットシステムがフリーズした物や、機体が大破した物が次々と姿を現していった。

「やったか!?」
「いいえ、まだ気配が残ってる!」

フィーネはまだ、隠れている機体が居ると言う。
その直後だった。サンダーフォールの発動が終了し、ケーニッヒウルフを前進させたハーマンに、イクスのスタンブレードが襲い掛かった。

「ぐぁぁぁあッ!」
「ハーマン少佐!」

ケーニッヒウルフのコックピットにも一瞬だが電撃が届き、ハーマンが慟哭を上げる。

「何処だ!?　何処から来る……うわぁぁあッ!」

タクマは周囲を警戒し過ぎ、背後から迫ってきたイクスに気付かずに電撃を浴びてしまい、コンバットシステムがフリーズしてしまう。

「軍曹!　きゃあっ!」

サヤカのシャドーフォックスやその他のシャドーフォックス、コマンドウルフ達も次々とイクスのストライクレーザークローやスタンブレードに倒れていく。

「拙いな……」

大佐が呟く。どこから来るか分からない強烈な攻撃に、共和国軍の兵士達は恐怖し、士気が著しく低下していた。ペースは完全に鉄竜騎兵団の物だった。

「クソッ、どうすりゃいいんだよ！？」

バンはどうすればイクスを撃退出来るのか判らず、焦り出していた。

「バン、私がイクスの気配を探ってみる。」

「フィーネ、出来るのか！？」

「上手く出来るか分からないけど……このままやられるよりはマシでしょ？。」

「……確かにそうだな。頼むぜ、フィーネ！」

古代ゾイド人であるフィーネなら、ゾイドの気配を探る事が出来るかもしれない。そう思ったバンはフィーネの提案を聞き入れ、フィーネは全神経を集中させる。

シーザーも足を止めてシールドを展開、フィーネの気が散らないように防御の体勢を取る。

「バン、どうした！？」

突然足を止めたバンに、何かあったのかと大佐が通信を繋ぐ。

「大丈夫です、ちょっとした実験をしようと思ったんですよ！」

「実験だと？」

大佐は首を傾げるが、集中していたフィーネの口が動いた。

「……見えた！　バン、そこよ！」

「分かったぜ、フィーネ！」

バンはシールドを解除し、フィーネの示した場所に向けて脱兎の如くシーザーを走らせ、ウイング兼用のレーザーブレードを展開して『何も見えない空間』を斬りつけた。だが、バンはブレードに確かな手応えを感じ、そのまま一気に切り抜ける。

『な、何だとォォオ！？』

バンが切り抜けた空間に、機体を真っ二つにスライスされたイクスが現れ、パイロットの叫びと共に爆散した。

「な……ピンポイントでぶった斬りやがった！？」

「まぐれ……じゃないよな！？」

「凄いよ、バン君！」

レイ達は口々に驚きの声を上げる。

「こちらバン。大佐、フィーネが示した場所を順次送ります。そこを攻撃して下さい！」

「……成る程、フィーネのおかげか、分かった。本部！」

『了解。シーザーより送信されるデータを中継し、各機へ送信します。』

トリム基地の管制塔と、共和国側の全機体の回線がリンクする。

これでフィーネが予測したイクスの居る場所のデータを、全機体が知る事が出来るようになった。

フィーネは再び集中力を高め、イクスの気配を探る。
フィーネが場所を知らせるまで、他の機体は防御や回避に徹している。

「……見えた！」

その瞬間、フィーネが感じ取ったイクスの機影が全機体に送信される。

「来たぞ！」
「私が行きます。はぁぁぁあッ！」

一番近い場所に居たイスルギ少佐が走り出し、刀型のレーザーブレードで隠れていたイクスを斬り裂いた。

「一機撃破。……なるほど、これは大したものだ。」

イスルギ少佐はフィーネの割り出した予測に感心する。多少の誤差も時間経過による変化の許容範囲内だし、レーダーが役に立たないこの状況ではかなりの正確さを誇っていた。

「よし来た！　どりゃぁぁあ！」

ヴィータのグラーフアイゼンにもデータが届き、イクス目掛けて強烈な一撃をお見舞いする。

「紫電、一閃！」

シグナムのレヴァンティンもデータを取得、紫電一閃でイクスを両断する。

「ディバィィイン……バスタァァア！」
「クロスファイァァア……シュート！」

スバルとティアナもコンビネーションによってイクスを撃破し、戦況は共和国有利に傾き始めていた。

『シュタウフィン隊長、我々が押されています！』
『くっ……奴らめ、レーダーも視認も出来ない状態でどうやって……！？』

姿を隠している自分達が、次々に各個撃破されていく事に、この奇襲作戦を指揮するヨハンは動揺していた。

（……だが待て、奴らは一度に纏めて倒すのではなく、一定の間隔を置いてから攻撃に移っている……。という事は！）

だが、ヨハンは共和国側が一機ずつしかイクスを捕捉出来ていない事、それには多少の時間を要する事を見抜いた。

『各員へ。我々が全滅する前に、最重要目標であるシュバルツ中佐を亡きものにするぞ！』

ヨハンは他の戦力に構わず、一気にシュバルツの首を奪う方針に切り替え、残りの全機をシュバルツに全速力で向かわせる。

「……！　シュバルツ中佐、気を付けて！　イクスがそっちに向かってる！」
「何！？」

フィーネはいち早く、イクスが土石流の勢いでシュバルツのセイバータイガーに迫っている事を察知した。

「くそッ！　俺達を無視して、直接首を狙いに来たか！」

「各機、シュバルツ中佐の守りを固めろ！」

レイ達はシュバルツの周囲に集中して弾幕を張るが、闇雲に乱射したところで命中するのはほんの僅かなのは分かっていた。足を止められたのは数機のみで、他はレイ達を飛び越してシュバルツに襲いかかって行った。

「くっ、止めきれん！　ぐわあッ！」

シュバルツ自身もガトリングを乱射して接近を阻もうとするが、その努力も空しくストライクレーザークロー、ショックカノン、スタンブレードの猛攻を受けてしまった。

「ッ！　中佐！」

「兄さん！」

キルシェとトーマがシュバルツの周囲を攻撃し、イクスをシュバルツのセイバータイガーから引き剥がす。

「ご無事ですか、中佐！」

「ぐっ……ああ。私は大丈夫だが、セイバータイガーが損傷を受け過ぎたらしい……」

背中のガトリングは拉(ひしゃ)げ、牙は折れ、四肢は傷だらけで、シュバルツの言う通り、損傷を受け過ぎて立ち上がるのがやっとという状態だった。

だが、それはセイバータイガーだけの話ではない。シュバルツ自身もイクスの猛攻で、負傷してしまっていたのだ。
ヨハンのイクスはキルシェの攻撃の回避に成功し、一度距離を取る。

『……出来れば頭部を潰したいところだったが、あれでも負傷させるには十分だろう。後は……』

ヨハンのイクスは、ステルスシステムに回すエネルギーが減ってきていた。万一、ステルスが使用不可になれば数の暴力が襲って来ることは目に見えている。

『ハーマンのウルフタイプにも損傷は与えた……。とすれば、この辺りが潮時か？　部隊を引き上げさせて……！？』

ヨハンが部隊員達に、撤退を指示しようとした時だった。

『……！　あれは、マッドサンダーか！？』

基地の格納庫に、組み立て作業中のマッドサンダーがある事に気付いたのだ。
もし、反荷電シールドを持つマッドサンダーが前線に出て来れば、荷電粒子砲を持つジェノザウラーは勿論、バーサークフューラーやデスザウラーでさえも敗北する危険性があった。

『アレを潰せれば、我々の勝利は揺るぎない物となり、プロイツェン閣下だけでなくガイロスの連中にも私の力を認めさせる事が出来る！』

そう考えたヨハンは、イクスをマッドサンダーのある格納庫へと

走らせた。

「……甘いぞ、イクスとやら！」

ヨハンは目の前の巨大な獲物に夢中になり、イクスの足音を減らすのを忘れてしまい、格納庫内に侵入しようとしているのをハーマンに悟られた。

「その狭い通路では、姿を隠したとしても回避する事は出来まい！」

そう、マッドサンダーがある格納庫はそこに至るまでの通路がイクス二機分の横幅しか無く、回避する為のスペースなど無いに等しかったのだ。

ケーニッヒウルフの頭部にヘッドギアが装着され、高性能スコープによってイクスの姿を鮮明に捉えた。

『拙い、隊長をやらせるな！』

ヨハンを助けるため、部下のイクス全機がケーニッヒの撃破に向かう。

「隙ありッ！」

「はぁぁあッ！」

だが、イスルギ少佐のブレードライガーとシグナムのレヴァンティンが、その内の何機かを斬り裂いた。

「ハーマン少佐を、墜とす訳にはいかんのでな！」

『クソッ、怯むな！　かかれェ！』

他のイクスのパイロット達は、ヨハンを撃たせまいと必死でハーマンに襲いかかろうとするが、焦りが表面に出過ぎていたために隠密行動が疎かになってしまっていた。

「貰った！　ファイ・ブレード・ストォォオム！」

ライガーゼロシュナイダーの頭部に取り付けられた五本のブレードの切っ先を前に向け、Ｅシールドとイオンブースターを全開でイクスに突撃させ、機体を貫いた。

場所を特定し易くなったイクスは、本来の隠密行動が満足に出来なくなり、次々と撃破されていく。

『エレクトロンドライバー、マッドサンダーを破壊し……』

「ロックオン完了！　撃ち貫け、ケーニッヒウルフ！」

ケーニッヒウルフのスコープがイクスの姿を完全に捉え、足を止めたイクスがエレクトロンドライバーを放つ前に、ケーニッヒのデュアルスナイパーライフルの弾丸が、イクスの機体をドラムコンデンサーごと貫いた。

『なっ……ぐぁぁあッ！？』

「まだだ、もう二発！」

デュアルスナイパーライフルの左右の銃口から、再度弾丸が放たれる。弾丸はイクスの体にめり込み、ゾイドコアと頭部コックピットを貫いて突き抜けた。

「が……あッ……」

ヨハンの小さな断末魔と共に、イクスは動きを止め、やや大きめ

の爆発を起こして倒れ込んだ。

「てやぁぁぁあッ！」

そして、バルディッシュの内側に湾曲した魔力刃が隠れているイクスの首筋を捉え、斬り裂いて撃破する。

「フィーネ、残りは！？」

フェイトがフィーネに訊ねる。

「……もう気配は無いわ。今のが最後だったみたい。」「そう。それにしても……」

フェイトは周囲を見渡す。襲撃してきたイクスはなんとか全て撃破できたが、それ以上に共和国側とシュバルツにも多大な被害が出てしまった。

「中佐！　シュバルツ中佐！」

キルシェがレブラプターのコックピットから飛び降り、シュバルツのセイバータイガーのコックピットまで駆け寄ると、外側にあるキャノピーの開閉スイッチを操作してコックピットを開く。

「ああ……！　中佐、しっかりして下さい！」

キルシェはシートベルトを外し、負傷したシュバルツを座席から抱き起こす。

額からは血が流れ、肋骨も何本か折れておりそれなりに重傷だった。

「心配するな大尉。そんなに騒ぎ立てる程の怪我では……ぐッ！」

それでも、シュバルツはキルシェを心配させまいと強がるが、痛みに耐えかねて小さく苦痛の声を上げた。

「ご無理をなさらないで下さい兄さん！　ハーマン少佐、早く救護班を！」

「ああ。救護班、大至急来てくれ！」

基地の建物からビークルが飛び出し、倒れ込んだセイバータイガーのコックピットから、シュバルツをビークルの荷台に載せて建物に戻る。

「さて、後はアーバインを……」

「その必要はねぇぜ。」

ハーマンはアーバインとエリオ、それにジ・オーガを回収しに行こうとしたが、その前に傷だらけのジ・オーガがゆっくりと基地内に歩いて来た。

「アーバイン、エリオ！」

フェイトは持ち前の速さで、ジ・オーガのコックピットまで飛んでいく。

「ほら、落っことすなよ。」

アーバインはフェイトに、体をだらんとさせたエリオを渡す。

「ああ……！　エリオ、大丈夫!?」
「フェイ……トさん？　…すいません、ドジ…踏んじゃいました……」
「良かった……エリオ……！」

フェイトはエリオが無事である事を確認すると、嬉し涙を流しながら、ボロボロのエリオの体を思い切り抱き締める。

「おいおい、安心したのはいいけどよ、早く医務室に行ってやれや。」
「あ、ゴ、ゴメンねエリオ！」

アーバインが呆れ口調でフェイトに医務室に向かうように促すと、フェイトは大急ぎで医務室に向かって飛んでいった。

「バディター、ムンベイ、通路内と敷地内のイクスを回収して解析に回してくれ。」
「了解しました。ムンベイさん、グスタフをお願いします。」
「合点！」

ムンベイのグスタフとスピノサパーが現れ、イクスの残骸をグスタフのトレーラーに載せて運んでいった。

「……皆、ご苦労だった。順次格納庫に機体を収容し、休んでほしい。」

ハーマンがそう言うと、各機体は順番にそれぞれの格納庫へと入っていった。

第六十七話　騎士の意地（後書き）

機体紹介
帝国軍、ライガーゼロイクス

帝国が開発を進めていたゼロだったが、共和国に奪取された所為で開発が遅れ、本来この形態がメインになるはずが結果的に最後のＣＡＳとなった。
機体後部のドラムコンデンサーで電力を生み出し、エレクトロンドライバーやスタンブレードといった電磁兵器や機体制御に利用する。
そのため、これを破壊されると機体性能が著しく低下する。
電撃作戦や奇襲攻撃が得意な帝国軍らしく、極めて強力なステルス性能を誇っている。

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第六十八話　戦いの傷跡（前書き）

アーバイン
「俺、ゾイド辞めてＡＫＢ入るわ。……え、ダメ？」

第六十八話　戦いの傷跡

「プロイツェン閣下、幻影部隊のシュタウフィン軍曹からの定時連絡が途絶えました。おそらく、戦死したものと思われます。」
「そうか……そうも簡単に死ぬ者を選んだ覚えは無いが……まぁよい。」

ウーノから作戦失敗の連絡を背を向けながら聞いたプロイツェンだが、特別残念な様子は無い。

「私も、そう何もかもが上手くいくと思うほど楽観主義者ではないさ。今はただ、両軍の戦力を極力削り、拮抗させておけばいい。」
「そうですか。それともう一つ……」

ウーノは一度言葉を切り、報告を続ける。

「地下工場で生産を進めていたデスザウラー、予定数の二十機全てがロールアウトしました。」
「そうか。では、それら全てを帝国首都防衛部隊に回せ。」
「……全て、でよろしいのですか？」

ウーノは意外そうな言葉を漏らす。帝国軍最強の機体であるデスザウラーを、ＰＫ師団（プロイツェンナイツ）でも鉄竜騎兵団（アイゼンドラグーン）でもなく、帝国の正規軍に全て回すと言うのだから。

「私のデスザウラーだけ残しておけばよい。ただちに手配せよ。」
「……了解しました。」
「……後は、これでも追いつかない分の辻褄を合わせるだけだ。フフフ……」

（……辻褄…ね。）

ウーノはプロイツェンの部屋を出ると、すぐに工場にプロイツェンの指示を伝えるのだった。

「……それで、怪我人の容態は？」

「サンダース軍曹とクーイン少尉は軽傷、モンディアル二士とキャバリエーレ中尉は命に別状はありませんが要休養。……それと、シュバルツ中佐は未だに意識不明の重体で、予断を許さぬ状況です。」

「そうか……。」

ハーマンは医務室の白いベッドに横になり、衛生兵から怪我人の状況について報告を受けていた。

「……このまま終わらせてはならんのだ。この星の命運は、彼が握っていると言っても過言ではないのだ！」

「分かっています。我々も、最善を尽くします。」

衛生兵はそう告げると、シュバルツの治療の為にその場を立ち去った。

「くそッ！！　鉄竜騎兵団、プロイツェンめ！　そうしてまで、こ

の星を戦乱に陥れたいと言うのか！？」

ハーマンは拳をベッドに叩き付け、怒りを露わにするのだった。

数時間後、共和国軍はトリム高地を離れ、ホバーカーゴやネオ・タートルシップ等でもう少し後方の基地まで移動をしていた。

「で、ハーマンやシュバルツ中佐達の具合はどうなってる？」

「シュバルツ中佐の治療は終わり、なんとか峠を越えたそうです。ハーマン少佐は軽傷ですが、キャバリエーレ中尉やモンディアル二士と同じく、数日は戦闘に参加できる状態ではないそうです。」

ボーグマン大佐の質問に、バディターが答える。

「まったく無茶するッスね。それで大佐、これからどうするんです？」

ウィナーが今後の展開を訊ねる。

「全軍の帝都進撃は決定している。ハーマンからは、補給後にその

まま進撃を継続せよ、と事前連絡を受けてるよ。」
「とはいえ、私らの部隊には鉄竜騎兵団対策に待機命令が出とる。……今はハーマン少佐が復活するんを待つばかりやね。」

大佐の説明に続いて、はやてが付け足して答える。

「チッ、じっと我慢か。その間に、本隊がボコされなけりゃいいけどな。」
「縁起でもねぇ事、言うんじゃねぇよ！」

レイが面白くなさそうに言い、その発言にヴィータが文句を言う。
その直後、警報が鳴り響くと同時にオペレーターから連絡が入った。

『セスリムニル市に進行した部隊より入電！　帝国軍の防衛部隊と交戦した模様です！』
「ほら見やがれ、テメーが下らねぇ事言うからだ！」
「ふざけんな、俺の所為じゃねぇだろ！」

レイとヴィータが直前の発言を巡って口論を始める。口論と言っても、子供の口喧嘩の様な内容だが。

『なお、敵部隊はデスザウラー級を動員している模様。緊急の応援要請が出ています！』
「何！？」

鉄竜騎兵団の基地で戦ったデスザウラーが、防衛部隊に編入される程に復活を果たしていた事が報告された。

「大佐、どうします？」

「いくら待機命令が出てると言ったって、私には苦戦してる友軍を、仲間を見捨てるなんて出来ません！」

バンやなのはが大佐に訴える。

デスザウラー級が前線に出ているとなれば、激戦は必至だろう。故に、負傷者や戦死者もこれまでの比ではなくなる可能性が極めて高くなる。

「別に見捨てんでもいいさ。どうせ待ってたって、ジリ貧になるだけだしな。」

「……それじゃあ！」

「ああ！　全艦、進路変更！　我々はこれより、セスリムニル市街へ援護に向かう！　整備班は配置に着き、補給と修理を急げ！」

「了解！」

大佐は援護に向かう事に決め、艦の進路を変更すると、最大戦速でセスリムニル市に向けて走り出した。

医務室のベッドで眠るエリオの隣に、フェイトとシグナムとキャロが椅子に座って様子を見ている。

（エリオ……）

（大丈夫かな、エリオ君……）

フェイトとキャロは心配そうにエリオの顔を覗き込む。

「……しかし、あの電撃を受けたにもかかわらず息があるとは……大したものだな。」

「……」

シグナムが冷静に淡々と言うが、フェイトは何も言わずに俯いている。

「そう心配するのは分かるが、エリオは今まで多くの危機を乗り切って生き残ってきた……そうだろう？」

「……それは……そうだけど……」

「しっかりしろ。エリオの保護者であるお前が、エリオを信じなくてどうする。」

今度は強めの口調でシグナムが言う。

「大丈夫だ、エリオは死なねぇよ。」

フェイトの背後から声がし、振り向くと足や腹に包帯を巻いて松葉杖を持ったアーバインが立っていた。

「コイツは電撃食らった後でも気合いで起き上がって、敵に槍を突き立てるような根性のある奴だ。だから、また気合いと根性で起き上がる筈だ。そう思って信じてやれよ。」

「アーバイン……」

そう言った後、アーバインは小さく笑みを浮かべる。

「ま、エリオと一緒にいて怪我させちまった俺が言うのもなんだがな。聞き流しちまっても構わねぇさ。」

アーバインは手を肩まで挙げてひらひらとさせながら、医務室を後にした。

「……うん、そうだよね。エリオは……」

自分が操る電気にやられてしまうような、軟弱な騎士ではない。親バカかと思われてしまうかもしれないが、保護者だから、親代わりだからこそ、そう思って信じるべきなんだと結論づける。

「……シグナム。」
「何だ？」
「練習の相手、お願いできますか？」

フェイトは先程とは違う、何かを悟ったような目でシグナムに言う。

「わ、私もお願いします、シグナム副隊長！」

キャロも椅子から立ち上がってシグナムに願い出る。

「……フッ、分かった。ビシビシ稽古をつけてやろう。」

フェイトとキャロの気合いの入った表情を見て、シグナムも意識を本気モードに切り替えた。

「え、いや、この後救援に出なきゃいけないからお手柔らかに……」

「何を言う。そんな事では、エリオが目覚めた時に笑われてしまうぞ？」
「そ、そんなぁ……」
そんなやりとりを交え、シグナムはフェイトとキャロと共にトレーニングルームに向かって歩いていった。

ホバーカーゴの格納庫内で、レイのライガーゼロが整備を受けている。
「レイ大尉、ちょっといいかしら？」
「ん？」
整備されるゼロを眺めていたレイが、メリッサに声をかけられる。
「どした、メリッサ？」
「次の戦闘、パンツァーで出撃るのよね？」
「ああ。市街戦になるだろうからな。」
市街戦では野戦とは異なり、道幅によって行動範囲が制限されやすく、大型陸戦ゾイドが機動力を求めるのは難しい。すると高機動タイプのイェーガーは論外、シュナイダーも一応シールドはあるが、

罠や伏兵に気を遣う市街戦で無闇に突撃するのは有効とは言えない。よって、グレネードランチャーや重装甲を持つ砲戦型のパンツァーが最も適していると、レイは判断したのだ。

「…実はね、パンツァーの奥義であるバーニングビッグバン……使わないでほしいのよ。」

「？　どういう事だ？」

「バーニングビッグバンは、全身のありとあらゆるミサイルを一斉に発射する攻撃……それは知ってるわよね？」

「ああ、機体の取説は読んだからな。」

「そう。……それで、バーニングビッグバン使用の際には、ゼロの機体に膨大な熱量が発生するの。その熱量は尋常じゃない数値にまで達し、最悪、機体が爆発するかパイロットが熱さに耐えきれずに死亡……なんて事もあり得るわ。」

メリッサは冷静に真剣な口調で、レイにパンツァーの危険性を告げた。

「……マジかよ。何でパンツァーには、そんなヤバい欠陥があるんだ!?」

「時間が無かったんだから、仕方がないでしょう！　ケーニッヒウルフやマッドサンダーだって、もっと細かい調整やデータ収集が必要だったのに、ニクス大陸進軍が早まった所為で完璧とは言えない出来なってるのよ！　シュナイダーとイェーガーだけでも万全にしたんだから、有り難く思って欲しいわね！」

レイの文句に対して、メリッサは一転して自分の中の何かが途切れたかの様に、自分の言い分を畳みかけるように言い放った。

レイがたじろいで、ふとメリッサの顔を見ると、両目の下にうっすらと隈が出来ているのに気付いた。メリッサもあまり口には出さ

ないが、技術者達も軍人の半ば無茶な命令に従って、かなりの苦労をしているのだろう。

「あ……すまねぇ、メリッサ達の苦労も分からずにナマ言っちまって……」

「……いいえ、私も言い過ぎたわ。……ごめんなさい。」

互いに頭を冷やし、陳謝する。

「…ともかく、バーニングビッグバンは使わなけりゃいいんだな？」

「ええ、お願いね。……ま、建物だらけの戦場でミサイルなんて使わないでしょうけど。」

建物が多い場所でミサイルをバラ撒いても、建物などの障害物に邪魔されて目標に届かない為、意味がない。なので言わなくても良かったのではないかというと、そうでもない。戦場にはあのデスザウラーが居るらしい為、最後の手段として使ってしまう恐れがあった。もしバーニングビッグバンを使用して爆発事故を起こしてしまえば、味方にも被害が及び進軍が更に遅延してしまうだろう。それだけは、なんとしても避けなければならない。

「ああ、レイさん。ここに居たンスか。」

カツカツと足音を立てながら、ウィナーがレイの所まで走ってくる。

「ん、何か用か？」

「いや、俺って砲撃苦手なんスよ。それで、レイさんにキャノンの扱い方を教えて貰おうと思って。」

「ああ、良いぜ。んじゃ、お前のゼロのコックピットで練習用プロ

グラムを起動して……」

レイはウィナーに砲撃を教えるため、ウィナーのゼロの所へ歩いていった。

ホバーカーゴ艦内のトレーニングルームでは、なのはやフェイト、シグナムやヴィータにスバルといった、機動六課メンバーが戦闘に備えて軽めのトレーニングをしていた。

「はぁぁぁあッ！」
「てやぁぁぁあッ！」

……もとい、フェイトとシグナムに限っては、戦闘前だと言うのに結界を張って半ば全力でスパーリングを行っていた。確かにシグナムはビシビシ稽古をつけてやる、と言ったが、フェイトは次の戦闘の事を考えてそれ程乗り気ではなかった。なのに、今では互いに楽しんで戦ってしまっていた。

「ったく、あの二人は、とことんバトルマニアだな。」

隣のトレーニングマシンルームで、ヴィータがシグナムとフェイトのスパーリングをモニターで見て言う。

「二人共、その辺にしておけ。次は市街戦だから、お前さん達魔導士に存分に働いて貰いたいんだがな。」
「あ……すいません！」
見かねた大佐が、スピーカーでフェイトとシグナムに告げる。
市街戦では歩兵の戦略上の重要性が普段よりも増し、建物の内部からの奇襲攻撃は非常に有効である。特になのは達、魔導士は歩兵サイズでありながら、戦闘ゾイドに匹敵するかそれ以上の攻撃力を持つため、重要性は非常に高いのだ。
フェイトとシグナムは大佐の言葉を素直に聞き入れ、スパーリングを中断した。
「それだけ動けば、ウォーミングアップには十分だろう。実戦でもそれくらいの動きを頼むぞ？」
「「はい！」」
激しいスパーリングによってフェイトとシグナムの筋肉は十分に温まり、ちょうどいい位の汗をかいていた。
「ったくよぉ、ちょっと前のチビ達みてぇな叱られ方じゃねぇか。」
「あはは……面目ないです……」
「……いかんな、軽いスパーリングのつもりだったのだが、どうも熱くなり過ぎてしまう……」
トレーニングマシンの部屋に入ると、すぐにヴィータに先程の行動を諫められ、フェイトとシグナムは熱くなり過ぎたと反省する。
「それだけ、気合いが、入ってるって、事じゃ、ないんですか？」

タクマがヒュン、ヒュン、と木刀を振るいながらフェイトとシグナムの擁護をする。文章に句読点が多いのは、素振りの際の息継ぎが頻繁に行われるからである。

「いやいや、気合いがあるからって、体力全部を使い切っちまっちゃあ意味がねぇのよ。」

エアロバイクを漕ぎながら、タクマの意見にサティ大尉が反論する。

「そう思わねぇか、嬢ちゃん達？」

サティ大尉はスバルとティアナに話題を振る。

「え……あぁ～っと……」

サティ大尉からの突然のフリに、ティアナとスバルは言葉を濁らせる。

「？　どうした？」

「あんまり言わんでやって下さいよ、大尉。スバルとティアナはつい半年ぐらい前、オーバーワークのし過ぎでなのはさんに大目玉食らっちまったンスから。」

オーバーヘッドプレスで筋トレをしていたヴァイスが、二人に助け舟を出した。

「おおそうか、そりゃすまんかったな。」

「ちょ、ヴァイス陸曹！　余計な事言わないで下さい！」

ティアナは自分の過去を蒸し返され、ヴァイスに文句を言う。

「なんだよ、フォローしてやったんじゃねぇか。」

「…あんまりフォローになってる気がしませんよ。私達だって反省してるんですから…」

ティアナは溜め息を吐く。

「分かった分かった、もう言わねぇよ。」

ヴァイスはティアナが本格的に落ち込む前に、ティアナ弄りを止める。

「よし。ティアナ、気分直しに射撃場でも行かねぇか？」

ティアナの機嫌を直そうとしたヴァイスの提案に、ティアナはピクッと反応する。

「…いいですけど、どうせなら勝負しませんか？」「勝負？」

「ええ。で、負けた方が勝った方の願いを何でも一つだけ叶える。どうします？」

なる程、と呟き、ティアナの提案を受けるかどうか、ヴァイスは少しだけ考える。

「…よし。その勝負、乗ったぜ！」

そしてティアナの提案を受ける事を決めて承諾し、二人で射撃場へと歩いていった。

「面白そう！　ティアナ～、私も行く！」
「俺も行ってみっか。タクマ、お前はどうするよ？」
「いえ、もうすぐイスルギ少佐がいらっしゃるので…自分はご遠慮させていただきます。」
「そうかい。そんじゃ、行ってくらぁ。」

結局、スバルとサティ大尉が二人の勝負を見に行く事にした。
その数十秒後、扉を開けてイスルギ少佐となのはがトレーニングルームに姿を現す。

「タクマ。つい先程、ランスターとグランセニックに嬉々としてついて行く、ナカジマとサティを見かけたのだが……」
「ああ……えっと……」

どうやら、射撃場に向かう途中で、イスルギ少佐に見つかってしまったらしい。
この状況で賭け紛いの勝負など、厳しい性格のイスルギ少佐に知れたらただでは済まないだろう。賭け事にうるさいシグナムは、珍しく黙認しているようだが。

「……模擬戦。そう、一種の模擬戦をするそうですよ？」
「……そうか、模擬戦か。ならいいのだが……」

タクマは上手く取り繕い、イスルギ少佐を納得させる事に成功した。

「…もしもこの非常時に、賭けをするなどの浮ついた気持ちでいる者が居るのなら、私が斬って捨てている所だ。」

イスルギ少佐は腰に提げたリーオ製の愛刀に手を掛け、鍔を親指

で押し上げて『チンッ』という音を立てた。
その仕草に、その場に居たシグナムを除くほぼ全員が戦慄した。

（おっかねぇ……）
（浮ついてる訳じゃないだろうけど…二人共、斬られなくて良かった……）

タクマがとっさにフォローしていなければ、ヴァイスとティアナはたとえ斬られなくても、かなり痛い目に遭っていただろうと思い、タクマは安堵の表情を浮かべた。

「…？　どうしたタクマ。稽古を始めるぞ？」
「あ、はい！　よろしくお願いします！」

イスルギ少佐に促されてタクマは木刀を握り直し、同じく木刀を構えたイスルギ少佐と向かい合う。

「それじゃ、キャロは私と射撃魔法を練習しよっか。」
「はい！」

なのははキャロとフリードを連れ、先程までフェイトとシグナムが模擬戦をしていた訓練スペースに入っていった。

射撃練習場は、異様なまでの熱気に包まれていた。と言うのも、ティアナとヴァイスの射撃対決が熾烈を極め、周囲で練習していた兵士達の注目を集めると同時に熱中させていたからだ。

人の形をした的が出現してはほぼ中心を撃ち抜かれ、両者共に得点（スコア）は７５対７５という、かなりの接戦であった。

「的は後三つか……」

サティ大尉が、ボソッと呟く。

出現する的は全部で８０枚。ティアナとヴァイスは持てる技術を振り絞り、ほぼ全ての的を撃ち抜いていた。

「「……」」

ティアナとヴァイスは沈黙して集中力を上げ、観衆も固唾を飲んで見守る。

―ガシャッ！

敵を模した的が出現。ただし、同時に正面に民間人を模した『要救助者』の的が、二枚並んで現れる。

だが、ティアナとヴァイスは動じる事無く二枚の要救助者の的の隙間を狙い撃ち、敵の的を撃ち抜いた。オオーッ、と観衆が声を上げる。

残りは二枚。

数秒後、先程と同じ組み合わせで的が出現するが、今度は要救助者ごと左右に動き回っている。タイミングを見計らわなければ要救助者に命中してしまうため、より高い集中力が求められる。

ティアナとヴァイスは心の中でリズムを刻み、タイミングを計る。

そして、二人が同時に発砲すると、二枚の的の隙間を縫って見事に敵の的に命中させた。
これには観衆の兵士達も驚きの声を上げる。
「次で最後か……」「どっちが勝つんだ？」「賭けねぇか？」「いや、賭けたらイスルギ少佐やシグナム二尉に三枚おろしにされそうな気が……」「…ああ、そうだな……」
兵士達がざわつき始める。賭けの案もあったようだが、身の安全を考慮して却下されたようだ。
それを尻目に、ティアナとヴァイスは的の出現を今か今かと待っている。
そして、最後の的が姿を現そうとした、その時だった。
『総員に通達。本艦はまもなく、戦闘区域へ進入する。総員、第一種戦闘配置。』
艦全体にアナウンスが流れ、観衆の兵士達が口々に落胆と不平の言葉を口にする。が、そこは流石にプロの軍人。それぞれが文句を言いながらも、全員が持ち場に向かって走っていった。
「……肝心な所で、水を差されちゃいましたね。」
「そうだな。しゃあねぇ、俺達も行こうや。」
ティアナとヴァイスは決着が着かなかった事を残念がり、スバルやサティ大尉と共に走り出した。
「…ところでティアナ。」
走りながらヴァイスがティアナに話し掛ける。

「何ですか陸曹？」
「いや、もしもお前が俺に勝ってたら、何を命令するつもりだったんだ？」
ヴァイスの問いに、ティアナは少し黙った後、口を開いた。
「……秘密です。」
「んだよ、教えたって良いじゃねぇか。」
「いいえ、言いたくありません。」
ヴァイスが不平を言うが、ティアナは耳も貸さなかった。

セスリムニル市街から南に５０キロ離れた荒野では、帝国首都守備隊の大部隊がこれ以上は市街地に進ませまいと、防衛線を展開していた。
『シコースキー隊、全滅しました！』
『ラフィーバー隊及びフランコ隊、壊滅寸前です！』
帝都守備隊の必死の守りに、共和国軍本隊は苦戦を強いられていた。

「くっ…！　ハーマン達は、まだ到着せんのか！？」

本隊指揮官のハンコック大佐は劣勢の報告を聞きながら、ハーマン達、先行上陸部隊の合流を待ち続けていた。

『大佐、新たに戦闘区域へ進入する機影を確認！　これは……ハーマン少佐の隊です！』

「来たか！」

頼れる援軍の到着に喜び、ハンコック大佐は椅子から勢い良く立ち上がった。

「こちらハンコック。遅いぞ、ハーマン！　待ちくたびれてヘロヘロだ！」

『ああ、悪かったなハンコック。それと、俺はハーマンじゃなくてボーグマンだぜ？』

『何、ボーグマンだと？　随分久し振りじゃねぇか。』

「そうだな、ニューヘリックでの合同演習以来か。」

ボーグマン大佐とハンコック大佐は、かつて士官学校で同期だっ

た。後にボーグマン大佐はロブ基地に、ハンコック大佐はヘリックシティに異動となって以来、顔を合わせていなかったのだった。

『さて、思い出話に花ァ咲かせてる場合じゃねぇな。指揮官のハーマンはどうした？』

「ああ、先日の奇襲攻撃で怪我しちまってな、今は俺が代理よ。」

『そうかい。まぁとにかく、この防衛線を破らねぇと市街地には入れねぇ。助太刀を頼むぜ。』

「ああ、任せろ。各機、出撃しろ！」

大佐が機体ハンガーに通信を送り、ホバーカーゴやネオ・タートルシップのハッチが開き始める。

「ムンベイ、先にイェーガーで出る！」

『はいよ！　換装開始ッ！』

左右から伸びる多数のアームがレイのゼロの装甲を取り外して格納し、格納庫を切り替えてイェーガーユニットを取り付けていく。同時にレイが座る座席がリクライニングし、ゆったりとしたコックピットに変わる。

『システム、オールグリーン。ライガーゼロイェーガー、Ｃ．Ａ．Ｓコンプリート！』

「レイ・グレック。ライガーゼロイェーガー、出撃る！」

カタパルトから勢い良く弾き出され、同時に隣のホバーカーゴから発進したウィナーのゼロイェーガーと併走する。

「スターズ０１、高町なのは。行きます！」

「ライトニング０１、フェイト・Ｔ・ハラオウン。行きます！」

なのはとフェイトも飛び立ち、他の機体達と共に帝都守備隊の敷いた防衛線にて交戦している友軍の元へと向かっていった。

第六十八話　戦いの傷跡（後書き）

取り敢えず、某声優無法地帯の声優ネタを前書きにぶち込んでみました。
ご意見ご感想等、お待ちしております。

第六十九話　帝都守備隊を突破せよ（前書き）

この六十九話を書き始めてから１ヶ月半かかってしまった……冬休みにどんどん投稿して読者数を増やす作戦はまたも失敗です。
何はともあれ、待ってくださっていた方も、そうでもなかったぜという方も、遅れてすいませんでした。

第六十九話　帝都守備隊を突破せよ

ホバーカーゴ内、集中治療室。そのベッドには、トリム高地での戦いで負傷したシュバルツ中佐が横たわっている。

「中佐……」

ベッドと廊下を隔てるガラス窓の向こうで、キルシェがシュバルツを心配そうに見つめる。

「私が……私が力不足な所為で……」

トリム高地での戦いで、自分は護衛として同行していながらその役割を果たせなかったと、キルシェは自責の念に押し潰されかけていた。

「……大尉、この艦はセスリムニルでの戦闘に参加するそうですが……」

トーマはキルシェに告げ、我々はこれからどうするべきかを訊ねる。

「……」

シュバルツ中佐は共和国と帝国の和平を望んでいた。キルシェとて、和平に反対はしておらず、むしろシュバルツ中佐の為、この星の平和の為に奮闘しようと思っている。だが、和平の鍵であるシュバルツが重傷を負い、果たして自分にこの星を平和に導く助けが出来るのか迷っていた為、決断出来ずにいた。

「……中尉。私に、私に出来るのか……？　この戦争を終わらせる事が……」

トーマは驚いた。普段は冷静かつ熱い心を併せもっているキルシェが弱音を、それも部下に対して吐くなど有り得なかった。それ程、シュバルツの負傷がショックだったのだろう。

「しっかりして下さい大尉！　あなたが迷っていては何も変わりません！　戦争も終わりませんし、両国に更なる被害が出るだけです！」

トーマはキルシェを立ち直らせようと必死で説得する。

「それに、我々がここで諦めてしまっては、兄さんが、シュバルツ中佐が目覚めた時にどう顔向けすれば良いのです！？」

「……！！」

「戦火は広がり、更に多くの犠牲が払われ、加えてそれを見た兄さんは落胆するでしょう。それだけは、何としてでも避けなければなりません！　兄さんを悲しませない為に、この星の平和を取り戻す為にも！」

トーマの熱弁が終わり、息継ぎもろくにしなかったトーマの息が若干上がっている。

「……そうだな。中尉、すまなかった。中佐が倒れられた所為かな、私はどうかしていた。」

そう言うと流していた涙を拭い、トーマと向かい合う。先程まで悲しみに暮れていたキルシェの姿は既に無く、普段通りの凛とした

出で立ちのキルシェ・ハルトリーゲルの姿がそこにあった。

「中尉のお陰で、目が覚めたよ。礼を言うぞ。」

キルシェはトーマに感謝の言葉を告げる。

「行こう中尉。中佐が休まれている間、我々が代わりを務めるぞ！」

「ハッ！」

そして、トーマと共に二人の機体がある格納庫に向けて歩いていった。

『レッドホーン隊、砲撃開始！』

帝都守備隊のレッドホーンが一斉に砲撃を始め、弾幕を張ってレイ達の接近を阻もうとする。

「くっ！」

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

なのははプロテクションを展開して弾幕を防ぐ。が、レッドホーンの砲撃は激しく、砲弾のダメージが積み重なってプロテクション

にヒビが入り始める。

『Ａｘｃｅｌ　ｓｈｏｏｔｅｒ』

なのははアクセルシューターを展開すると、耐久度が低下したプロテクションを残し、アクセルシューターに自分を守らせながらその場を離れる。そして、砲撃の隙間を高速で飛び、レッドホーンの背中を狙って速射型の砲撃を放つ。

桜色の短い砲撃は実弾の対空砲を飲み込みながら突き進み、そのままレッドホーンの背中の対空砲に直撃した。

「今だよ、フェイトちゃん！」

「わかった、バルディッシュ！」

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ』

すかさずフェイトが超高速で突撃、なのはが攻撃したレッドホーンの背中に着地する。

そしてカートリッジを二発消費し、他のレッドホーンの群れに向けて左手を翳す。

「トライデント…スマッシャー！」

手のひらの魔法陣から三筋の金色の光が放たれ、周囲のレッドホーンが装備する対空砲を次々と貫いていく。

「今のうちに行くぞ！　各機、突撃！」

レッドホーンが撹乱されて浮き足立った隙を突き、イスルギ少佐を先頭にレイやウィナーのゼロイェーガー等、多数の高速ゾイドが一気に前進する。

周りの帝国兵はフェイトの足元のレッドホーンを援護しようと画策したが、下手に攻撃するとレッドホーンに流れ弾が当たる恐れがあるため実行しづらい。フェイトも、そうなる事を予想して立ち回っていた。

だが、そんなフェイトに向かって低空飛行で接近する、サイカーチスの編隊の姿があった。

『ハラオウン一尉、そちらにサイカーチスが接近しています！　数、２５！』

「ッ！　あの機体は……！」

フェイトは先頭のサイカーチス三機に見覚えがあった。

「アンダー海ではまんまと逃げられたが、今度はそうはいかんぞ！」

それらのサイカーチスは、アンダー海で交戦した三色電光隊（トライブリッツ）のブラオ、ゲルプ、ロートの駆る機体であった。

三色電光隊はサイカーチスの射程内にフェイトを捉えると、すかさず角の先端部のビーム機銃を掃射する。

フェイトはレッドホーンから離れ、高度を上げて飛行する事でそれを回避する。

三色電光隊の隊長、ブラオの射撃の腕前はかなりのもので、レッドホーンには一切の流れ弾も当たる事無く、フェイトが居た空間のみを光弾が通過していった。

「こちらブラオ。『金髪』は我々三色電光隊に任せ、各機は地上の敵機を攻撃せよ！」

三色電光隊はフェイトの追撃に移り、後方１０メートルだけ距離を取ってピッタリと張り付いた。

「逃がさん！」
「ッ！」

フェイトは三色電光隊を振り切ろうとジグザグに飛行するが、元々サイカーチスは小型で軽量な機体故に小回りが効き、更にそのエキスパートである三色電光隊の面々はフェイトの複雑な動きに惑わされる事無く、最短距離を飛行する事で追尾を続けていた。

「くっ…振り切れない……！」

フェイトは焦っていた。どんなに緩急を付けて飛んでも振り切れず、かといって足を止めれば蜂の巣にされる。地上の部隊に頼ろうにも、他のサイカーチスに手こずっている。
フェイトはサイカーチスを自力で振り切るために、何か策を講じなければならなかった。

「フェイト！　今行くよ！」

マミのストームソーダーが、フェイトを助けるために三色電光隊に接近する。

「サイカーチスなんか、ボクが撃ち落とす！」

ストームソーダーのブースターを噴かせ、主翼に取り付けた対空ミサイルを三発、三色電光隊を狙って発射する。

「隊長！」
「分かっている！　追尾を一旦中止、回避運動！」

三色電光隊はチャフを後方に放って三方に散開し、ミサイルはチャフの放つ熱に騙されて突き進み、フェイトの横を通り過ぎていった。

「フェイト、大丈夫？」
「ありがとうマミ、助かった。」

フェイトは三色電光隊の追撃から解放してくれたマミに感謝する。

「ストームソーダーか…。高速飛行ゾイドが相手では分が悪いな…」

ブラオがサイカーチスの姿勢制御をしながら呟く。

「だが、だからといって諦める訳にはいかんのだ！　我らが帝国の、皇帝陛下のお膝元を守り抜く為にもッ！！」

三色電光隊は隊列を横一線に組み直し、再びフェイトとの距離を詰める。

「また来た！　こっちも行くよ、ストームソーダー！」

向かって来る三色電光隊に対し、マミのストームソーダーが主翼のウイングブレードと、頭部のトップソードを展開して迎え撃つ。

「待って、マミ！」
「今だ！」

ブラオが合図を送ると、三機のサイカーチスが機体を裏返しながら僅かに高度を下げ、ブレードを紙一重で回避した。

「うぇえっ！？　避けたァ！？」

この曲芸じみた動きに、マミは驚いて声を上げた。サイカーチスを極めた三色電光隊だからこそ、出来た芸当なのだろう。

勿論、これで終わりではない。マミが驚いている間にゲルプとロートのサイカーチスが急速反転し、ストームソーダーの背後を取る。

「しまっ…」

マミは慌てて回避しようとするが、ストームソーダーは小回りの効き易さはサイカーチスには劣る。方向を予測され、サイカーチスの左右に取り付けられた荷電粒子ビームが放たれ、ストームソーダーの背部ジェットエンジンを貫いた。

「わぁぁあっ！？」

ジェットエンジンが爆発し、マミは誘爆を防ぐためにそれを切り離して破棄する。

「マミ！」

「ごめんフェイト、油断した…！」

マミのストームソーダーは黒煙を上げながら後退する。

「選手交代だ、後は任せとけ！」

「すみませんサティ大尉、お願いします！」

マミと入れ替わりに、サティ大尉のサラマンダーボンヴァーンがレイノス四機を伴い、三色電光隊に向かって飛んでいく。

「サラマンダーにレイノスが四機……まともに戦っては勝ち目は薄いか……ならば！」

ブラオは直接的な戦闘は不利だと判断し、サラマンダー達の迎撃を諦める。

「ゲルプ、ロート！　サラマンダーを無視し、『金髪』を速やかに撃墜、地上の部隊と合流するぞ！」

「「了解！」」

三色電光隊は機首をフェイトに向け、急加速して接近する。

フェイトはマミが稼いだ時間を利用し、周囲に魔力弾を仕込んだ環状魔法陣を大量かつ広範囲に展開していた。

「プラズマランサー…ファイア！」

号令と共に環状魔法陣の中の魔力弾が急加速し、三色電光隊に一斉に襲い掛かる。

「うぉぉおおっ！」

避ける隙間も無い程に降り注ぐプラズマランサーに、三色電光隊はビーム機銃を連射して魔力弾を打ち消し、活路を見出そうとする。

「ぐわっ！」

「ぬおっ！？」

だが、ゲルプとロートは打ち消し損ねた数発の魔力弾を避けきれずに被弾し、機体の出力が低下する。

「申し訳ありません隊長、離脱します！」
「ゲルプ、ロート！　おのれ『金髪』…！？」

ブラオが後退していく部下を見送り、フェイトが居るであろう方向を見ると、そこには既にフェイトの姿は無かった。

「くそッ、何処だ！　何処に消えた！？」

ブラオが周囲を見渡してフェイトの姿を探す。

「ハーケェン……」
「ッ！　しまった、上かッ！？」

フェイトがサイカーチスの真上に居る事にブラオが気付いた時には、既にフェイトはスタートを切っていた。

「スラァァアッシュ！」

フェイトとサイカーチスが交差した瞬間、バルディッシュの鎌状の刃がサイカーチスの片方の翅（はね）を刈り取った。

「ぬわぁぁあッ！　おのれ『金髪』、一度ならず二度までも！」

ブラオのサイカーチスは戦闘の継続が不可能となり、ゲルプやロートと共に撤退した。

「三色電光隊がやられた！」
「何だと！？　サイカーチスのエキスパートだぞ！？」

三色電光隊の撤退は、他のサイカーチスのパイロットにも衝撃を与え、混乱を招いた。

「紫電…一閃ッ！」

浮き足立ったサイカーチスをシグナムの紫電一閃が斬り裂き、撃墜する。

「ぶっ潰せ、アイゼン！」

一方、ヴィータはグラーフアイゼンのラケーテンハンマーで、サイカーチスの装甲を軽々と砕いていく。

「い、いかん！　体勢を…！」

あるサイカーチスのパイロットがそう言った直後、そのサイカーチスは橙色の光によって翅を撃ち抜かれた。

「ぐわあっ！？」

「よし、当たった！」

「やるじゃねぇかティアナ！」

遠距離からの狙撃でサイカーチスを撃ち抜いたティアナを、その隣でガンスナイパーに乗ったヴァイスが称賛する。

それに続いて、ヴァイスも狙撃モードのガンスナイパーでサイカーチスを撃ち抜いていく。「そう言うヴァイス陸曹も、やるじゃないですか。」

「へっ、本職を嘗めんなよ？　それに、今日の俺は調子が良い。今の俺だったら、阿修羅すら凌駕出来そうだ！」

ティアナもヴァイスの腕前を讃えると、ヴァイスはいつも通りの軽口で返した。

「ティア、援護よろしく！」

「オッケー、スバル！」

スバルはウイングロードを伸ばし、レイやウィナーのイェーガーや、バンのシーザーに大佐やイスルギ少佐のブレードライガー等と共に、突撃を仕掛ける。それに続き、コマンドウルフＡＣやシャドーフォックス、シールドライガー等の混成部隊も進撃する。

「レイ、ウィナー、防衛線を掻き乱せ！」

「「了解ッ！」」

レイとウィナーはイェーガーの背に装備した一対の大型イオンブースターを展開し、急加速する。

「ッ！！」

「うがッ！？」

コックピットのレイとウィナーを急な加速から来る重力加速度が襲い、体中を圧迫して座席に押し付けられるような感覚になる。イェーガーに換装する際、リクライニングした座席が体に掛かると負担を軽減していたが、それでもなかなかの圧迫感が感じられていた。

それでも、レイとウィナーはイェーガーの機動性を生かし、レッドホーンや後から来たアイアンコングやハンマーロックを撹乱していく。

「クロスファイァァァ……シュゥゥウト！」

「撃て撃て撃てェ！」

ヴァイスを含むガンスナイパー隊とティアナが弾幕を張ってサイカーチスを牽制し、レイ達最前線の部隊のアシストをこなす。

「くそッ、速い！　速すぎる！」

「速くてロックオンが間に合わん！」

帝都守備隊は二機のイェーガーを捉えきれず、必死に追うことを考えすぎた所為で隊列が乱れ始める。

「ディバイィィイン……バスタァァァアッ！」

そこに正面に水色の魔力スフィアを形成したスバルが飛び込み、困惑するレッドホーンにディバインバスターを叩き込んだ。水色の光は強固な深紅の装甲を砕き、レッドホーンの機体を貫いて爆発する。

そこから再びウイングロードを伸ばし、その上を疾走する。

「くっ！　各機、足の速い奴を狙っていけ！　当たらなくとも構わん、弾幕を張るんだ！」

隊長の一人が指示し、防衛部隊はなのはやフェイト、スバルにイェーガーを優先的に攻撃し始める。

「ちっ、こっちに攻撃を集中させてきたか。」

レイは集中的に弾幕を張られ、イェーガーの装甲が薄い事も考慮して一度距離を取る。

「くっ、この弾幕じゃ近付けないか……」

フェイトも対ゾイド用の兵器をまともに受ければただでは済まない為、一時的に後退する。

「今だ！　全機、反撃を開始しろ！」

戦列を乱す要素が取り除かれ、帝都守備隊が体勢を立て直しながら反撃を開始する。

『帝国の弾幕、更に激しさを増しています！』

「むぅ……ボーグマン達でも苦戦するとは、奴らも必死という事か……」

ハンコック大佐が後方のネオタートルシップのブリッジで呟いた。帝都ヴァルハラに極めて近い場所に位置するセスリムニル市を、突破される訳にはいかないと、帝都守備隊の必死さが伝わって来るようだった。

「まずいな、このまま押されたらジリ貧だ…」

ハンコック大佐よりも守備隊に近い場所に居るボーグマン大佐も、その必死さは理解できていた。

「バン！　弾幕が激しすぎるわ！」

「くそッ！　こうなったらイチかバチか、シーザーで突撃を……」

バンは状況を打開する為に、弾丸のシャワーの間を掻い潜って突破口を開く、特攻紛いの策を打ち出して実行しようとする。

「ちょい待ち、バン君！」

「！？」

シーザーの通信機に、リィンとユニゾンしたはやてから通信が入る。

「そんな命を粗末にするような真似は、上官として許さへんよ！」

『ここは私達にお任せです！』

「はやて、リィン、どうする気だよ！？」

バンが訊ねる。

「広域砲撃魔法で弾幕を止め、なおかつ突破口をこじ開ける！　これなら、バン君が突撃する必要はあらへんよ！」

「そんな事が出来るのか！？」

バンははやてが、あの帝都守備隊の強固な守りに風穴を空けられる程の威力を持った魔法さえも修得していた事に、驚いた。

「ああ、こっちじゃおおっぴらに使うてへんかったから、知らんでも当然やな。それと、発動まで時間が掛かるさかい、時間稼ぎを頼むわ！」

「ああ、任せとけ！　大佐！」

「了解だ。各機、一時後退！　八神二佐がデカいのブチ込むぞ！」

大佐が指示すると、弾幕に苦戦していた前線の部隊が一斉に後退を始める。

「隊長、共和国が退いていきます！」

「ふっ、我々の意地に屈したようだな。好機だ、追撃開始！」

レッドホーンやアイアンコングの一部が射撃を中断し、後退するレイ達を追撃する。

「悪いけど、あまり動いてもらっても困るんだ！」

前進するレッドホーンやアイアンコングの前に、アルドワーズ中佐のアームドライガー率いる四連キャノンを装備したスピノサパーや、ロングレンジキャノンを装備したゴドスにコマンドウルフ等で構成された砲撃部隊が立ちはだかる。

「うぉおっ！？」

「怯むな、こちらも応戦しろ！」

それに対し守備隊側もアイアンコングの大型ミサイルやビームキャノンで対抗し、スピノサパーやコマンドウルフを撃破していく。

「くっ、流石に帝都守備隊だ、防衛力は半端では無いか……」

アルドワーズ中佐が軽く舌打ちして呟く。その直後、大型ミサイルがアームドライガーの近くに着弾して爆発を起こした。

「ぐわあっ！」

コックピットに爆発の衝撃が伝わり、アルドワーズ中佐は思わず声を上げる。

「アルドワーズ中佐！」

「心配しないでくれ、損傷は軽微だ……！？」

はやてからの通信にアルドワーズ中佐が心配ないと返事をした直

後、アルドワーズ中佐はアームドライガーのレーダーを見た。

「八神二佐！　ミサイルが三発、君を狙っている！」

「！？」

アルドワーズ中佐がはやてに危機を伝え、はやてが上空を見ると、そこにははやてに向けて飛来する大型ミサイルの姿があった。

「八神二佐、早く回避を！」

「あきません！　これの詠唱中は動けへんのです！」

広域魔法の発動準備中、はやてはその場を離れる事ができず、格好の標的になってしまう。だが、これを発動させなければ、前線の部隊と先に市街地に踏み込んだ部隊がジリ貧となるのは、時間の問題である。

故に、はやては詠唱を止めてここを動く訳にはいかないのだ。

「はやて！」

「主はやて！」

ヴィータとシグナムは、主人の危機を救わんとはやてに向けて飛行しようとする。だが、ミサイルの弾速は意外と速く、ヴィータとシグナムの足では間に合いそうにない。

「シグナム、このままじゃはやてが！」

「くッ、間に合えッ！」

シグナムはレヴァンティンを鞘に戻し、飛竜一閃を放とうとする。だが、シグナムの魔法の中でも長射程を誇るこの技を使っても、間に合わない可能性の方が高かった。

「いかん、間に合わん！」

シグナムは確信した。このままでは飛竜一閃の刃が届く前に、ミサイルがはやてに着弾してしまう。シグナムにミサイルを止める事は出来ないのだ。

「くうっ……！　主はやて……申し訳……」

流石のシグナムも諦めかけた、その時だった。

――ドゴォオン！

はやてに向かっていたミサイルが、命中寸前で全て迎撃されたのだ。

「……あれ？　私、助かったん？」

シグナムと同様に、目を瞑って諦めていたはやてが、恐る恐る目を開けながら自身の無事を確認する。

「はやて……助かったのか！？」

「な、何だ！？　いったい誰が……」

驚きを隠せないヴィータとシグナムの元に、通信が送られる。

『なんとか、間に合ったらしいな。』

「その声……まさか！？」

聞き覚えのある声に、シグナムは自分の後方を確認する。シグナ

ムの目線の先には、臨時でロングレンジライフルが取り付けられ、ムンベイが乗ったプテラスにぶら下げられた、キルシェのレブラプターの姿があった。

「助かった、感謝する。」

「なぁに、こっちも助けてもらったし、お互い様だよ。」

キルシェはムンベイに感謝し、ゆっくりと高度を下げてワイヤーを切り離し、地面に着地する。

「ハルトリーゲル大尉!?」

「シグナム二尉か。現時刻より、我々もこの戦闘に参加する。」

「し、しかし、ハルトリーゲル大尉やシュバルツ中佐は、共和国にとって来賓で……」

シグナムは突然の参加表明に困惑する。

シュバルツ中佐やその部下であるキルシェは、共和国にとって戦争を終結させる為の鍵となり、大切な来賓である。そんな重要な人物をもし死なせてしまえば、戦争終結もできなくなってしまいかねないのだ。シグナムは、そんな人物を戦闘に参加させるのはどうかと考えていた。

「……二尉の意見も尤もだ。が、既にハンコック大佐より戦闘の許可を得ている。」

「な……ハンコック大佐!?」

それを聞き、シグナムはすぐにハンコック大佐に通信を送る。

『ハルトリーゲル大尉の熱意に押されてな。……不服か、シグナム二等空尉?』

「お言葉ですが、ハルトリーゲル大尉はシュバルツ中佐と同じく、この戦争を終結させる事が出来る重要な……」
「なら、お前はお前の主人がやられても良かったと？」
「ッ…！」

ハンコック大佐の言う通り、ハルトリーゲル大尉が救援に来なければ、はやてはミサイルの餌食になっていただろう。いくら硬めのバリアジャケットを身に着けているとは言え、三発分の大型ミサイルの直撃を受けては物言わぬ肉塊になってしまっていたかもしれない。それを考えると、シグナムはゾッとした。

「……シグナム二尉。私が貴様等にとって、重要な存在である事は理解しているし、無茶はしないさ。……私とて、まだ死ぬつもりは無いのでな。」
「大尉……」

キルシェの言葉を聞き、シグナムは少し黙った後、口を開く。

「……了解しました。ですが大尉、くれぐれも……」
「ああ。生き残るさ。……シュバルツ中佐の為にもな！」

キルシェのその言葉には、シュバルツ中佐の副官としての想いだけでなく、何か別の想いも込められていたような気がした。

「あのレブラプターは……ハルトリーゲル大尉の！？」
「ええい、諜報部の報告は本当だったのか！」

キルシェのレブラプターが現れた事で、守備隊の兵士が次々に反応する。

「私は帝国軍大尉、キルシェ・ハルトリーゲルだ。帝都守備隊、直ちに戦闘を停止せよ！」

キルシェが回線をオープンに切り替え、守備隊を説得にかかる。

「この戦争は陰謀だ！　共和国と帝国が争う理由など……！」

キルシェの言葉が終わる前に、帝国の兵士から返事が返ってくる。

『黙れ！　裏切り者が何を言うか！』

「なっ……！？」

返事の内容にキルシェは驚く。

『貴様がシュバルツ中佐…いや、准将を！』

「准将……だと！？」

「何だ？　何か雲行きが怪しくないか？」

キルシェだけでなく、ヴィータもこの空気を懸念する。それに准将と言えば、中佐の二つ上の階級だ。

『とぼけるな！　貴様がシュバルツ准将を暗殺した事は、既に判っている！　それにも拘わらず、我々の目の前にノコノコと姿を現し、挙げ句戦いを止めろだと！？　寝言は寝ている時だけにしろ！！』

「あ……」

「暗殺だと！？」

キルシェは帝国兵の言葉に言葉を失い、大佐やレイ達も驚いて声を上げた。

「大尉！」

呆然とするキルシェの元に、トーマがブラックライモスをドスドスと走らせてやって来た。

『その機体…シュバルツ中尉！　貴様、実の兄を手に掛けるとは…それでも帝国軍人か！！』

「！？　大尉、一体何が！？」

「……どうやら、私と中尉はシュバルツ中佐を暗殺した裏切り者という事になっているらしい。」

「何ですって！？」

トーマも驚きを隠せない。

「おそらくはプロイツェンの差し金だろうが……中尉。」

「……ええ。」

だがそれと同時に、二人は怒りすらも覚えていた。

「「……私がこの世で最も敬愛するシュバルツ中佐（兄さん）を、私が手に掛けた事にするなど……許さんぞ、プロイツェン！！」」

シュバルツ中佐を自分たちが殺したという情報を流したプロイツェンに対し、二人はこれまでに無く激高していた。

そんな時でもレッドホーンやアイアンコングが突撃を仕掛け、キルシェやトーマにも迫り来る。と言うか、帝国軍全体に人望があったシュバルツ中佐の敵討ちと言わんばかりに、キルシェとトーマに向かう人数がかなり多かったのだが。

「おっとぉ、そうはイカのキ〇タマってね！」

キルシェのレブラプターを輸送して来たムンベイのプテラスが、ギリギリ積載出来た小型空対地ミサイルやバルカンで、突撃して来る機体の足を止める。

「すまんな、貴様等に恨みは無いが……」

キルシェは仲間を撃つ事に多少躊躇いながらもロングレンジライフルを連射し、レッドホーンやアイアンコングの脚を貫いていく。トーマもそれに続いて脚を狙うが、如何せん数が多く、更に機体の整備が行き届いていない状態での緊急発進（スクランブル）であった為、二人の弾丸はあっという間に尽きてしまった。

「ちぃッ、弾切れかッ！」
「こちらもです、大尉！」

それを好機とばかりに、レッドホーンが自らの名前の由来となった深紅の角を突き立て、突撃を仕掛けてきた。

「裏切り者が、死ねェ！」
「ハルトリーゲル大尉！」

フェイトが救援に向かおうとするが、進路上にバルカンによる弾幕を張られ、阻まれてしまう。

「まずい…このままじゃ！」
「フェイトちゃん、退（ど）いて！」
「！？」

フェイトが振り向くと、はやてと同時に砲撃のチャージを行って

いたなのはが、フェイトの居る方角を向いていた。慌ててフェイトはその場を離れ、なのはの射線を確保する。

「全力、全開！　スターライトォォ……ブレイカァァァア！」

レイジングハートの先端の環状魔法陣に収束させた魔力を解放し、桜色の激流と化した砲撃が一直線に伸びていく。

「何！？　ぐぁぁあっ！」

レッドホーンの機体は砲撃に飲み込まれ、跡形もなく破壊される。それでも、強固な頭部コックピットは爆発で弾け飛び、パイロットは生きているが。それは、なのはがコックピットブロックが無事なように意図的に威力を調整したからだった。

「すまない、高町一尉。」

「いえ、お気になさらないで下さい。」

キルシェはなのはに感謝し、ロングレンジライフルを切り離して身軽になってから後退する。

「はやてちゃん、まだなの！？」

「お待っとさん！　丁度、準備完了したところや！」

なのはの問いに、はやては準備が完了したと答える。

「了解！　大佐！」

「ああ！　撃ち方止め！　全機後退しろ！」

大佐の指示を受け、共和国の戦力が一斉に後退を開始する。

「遠き地にて、闇に沈め……デアボリック、エミッション！」

はやての正面の魔法陣から魔力の球体が放たれ、守備隊の防衛線のド真ん中に移動する。そして、魔力の玉が膨張を始め、みるみるうちに巨大化して周囲の空間を飲み込んでいく。

「う、うわぁぁぁあ！？」

「逃げ切れな……ぎゃぁぁあッ！」

レッドホーンやアイアンコングといった大型ゾイドも容易く飲み込み、直径が数百メートル程になった所で膨張を止めて消滅した。その破壊力により、守備隊が築いた強固な防衛線に巨大な穴が空いた。

「おいおい……はやて隊長、そんな切り札隠し持ってたのかよ？」

デアボリックエミッションの一撃が作り出した光景に、レイは度肝を抜かれていた。

「ホンマは…こっちであんまり使わんよう、考えとったんやけどな……。一回…使ただけでも、結構しんどいんよ……」

肩で息をしながらレイと話すはやて。リィンとユニゾンしているとは言え、放った魔法の威力が威力だけに、行使者に掛かる負担も相当なものだった。

「ともかく、お前のお陰で道が開けた。よくやったぞ、はやて！」

ボーグマン大佐は、全力で突破口を作ったはやてを讃える。

「よぅし！　本艦隊はこれより、敵陣中央を突破する！　機体の損傷が激しい者や、管理局の魔導士は直ちに帰還しろ！」
「了解。スターズ及びライトニング分隊、帰艦します！」

共和国軍はダメージを受け過ぎた機体を各艦に収容し始め、なのは達魔導士もホバーカーゴに着艦を始める。

「ふぅ……。こちらロングアーチ００。六課の全魔導士、帰艦しました。」
「了解だ。全艦に告ぐ、ホバーカーゴは一番から五番まで、シールドを最大出力で展開し艦隊の先頭に並べ！」

ハンコック大佐ははやての報告を聞くと、五隻のホバーカーゴを陣頭に回し、高出力のＥシールドを展開させ、鶴翼の陣を逆にしたような形に並ばせる。

「ホバーカーゴ級、一番から五番まで配置に着きました。」
「よし。先頭のホバーカーゴは八神二佐が開いた道に向けて全速前進！　その他の艦及び機体は、周辺の敵機を牽制せよ！」
「ホバーカーゴ一番、了解！　機関、最大戦速！」

先頭に立ったホバーカーゴ五隻は一気に最高速まで加速し、艦隊を牽引して防衛線の突破を図る。

「隊長！　敵艦隊が突撃して来ます！」
「ええい！　帝都守備隊の誇りに賭けて、何としてでも止めろ！」

守備隊も必死でホバーカーゴに集中砲火を仕掛け、突破を食い止めようとする。が、ホバーカーゴの強固なシールドに阻まれ、衝撃

が伝わるのみで艦そのものにダメージを与えるに至らない。

「ダメです、止まりません！」

「ならば荷電粒子砲だ！　ジェノザウラーは全機、前に出ろ！」

守備隊に配備されている全てのジェノザウラーを、共和国艦隊の正面やその左右に展開し、荷電粒子砲の発射体勢に移る。

「ハンコック大佐！　周囲にジェノザウラー、数４０！　荷電粒子砲の発射体勢を取っています！」

「回避運動を取る暇はねぇ！　周囲のジェノザウラーは積載戦力に露払いさせ、本艦隊はこのまま突っ込むぞ！！」

「りょ、了解！」

周囲で発射準備を進める荷電粒子砲には目もくれず、艦隊の移動速度を落とす事無く猛進させる。

その間に、ホバーカーゴ後方に並ぶネオタートルシップ級のハッチが次々と開いていき、進路を阻むジェノザウラーを掃討ないし退けさせる為、ガンスナイパーやシャドーフォックス等が射撃を開始する。

「休んでる暇なんか無いわね……スバル、チンク、あたし達も行くわよ！」

「うん！」

「了解した。オットー、ウェンディ、ディード、行くぞ！」

「「はい、姉様。」」

「はいッス！」

休息もそこそこに、ティアナやスバル達は射撃を行う機体の援護に向かう。

「あたしとスバルとウェンディは右舷、チンク達は左舷をお願い！」
「「「「了解（ッス）！」」」」

廊下の途中で二手に分かれ、それぞれがティアナに指示された場所に向かって走っていく。
ティアナ達が右舷と左舷それぞれの格納庫に到着すると、既にその付近に積載されていた機体が、陸地のジェノザウラーに向けて一斉掃射を始めていた。
対する帝都守備隊は、大量の対地射撃に曝されるジェノザウラーを守る様にレッドホーンを並べていた。

『ティアナか！　すまねぇが、手を貸してくれ！　いくら弾幕張っても足りねぇんだ！』

ヴァイスがティアナに気付き、支援を要請する。

「勿論そのつもりですよ。スバルは先行してジェノザウラーを撹乱、ウェンディはあたしと一緒にスバルを援護しつつジェノザウラーを攻撃。いいわね！？」
「うん！」
「合点承知ッス！」

ティアナが各々に指示を出し、スバルはウイングロードを延ばして滑走、ウェンディは愛用のボードの先端から光弾を放ち、ティアナと共に弾幕を広げる。

「ティアさん！」

キャロとギンガがティアナの元へ走ってくる。

「遅れてすいません、援護します！」
『Ｂｏｏｓｔ　ｕｐ！』
キャロの両手に填められたケリュケイオンのコア部分が輝き、ティアナとクロスミラージュ、ギンガに強化魔法が掛かる。
「ありがとう、キャロ！」
「行くわよ、ブリッツキャリバー！」
ギンガもスバルと同様にウイングロードを延ばし、ジェノザウラーとレッドホーンの撹乱に向かう。
ティアナは受けたブーストを利用し、早急にクロスミラージュの銃口付近で魔力を練り上げて圧縮する。
『スバル、ギンガさん！　射線開けて！』
年話でスバルとギンガに、ティアナの正面に入らないように警告する。
「クロスファイアシュート、ピンホール・シフトォ！」
『Ｆｉｒｅ』
ブーストによって強化された橙色の細長い光が放たれ、荷電粒子砲をジェノザウラーの頭部ごと貫いた。そして、充填されていた荷電粒子エネルギーは行き場を無くし、爆発を起こした。
しかし、それでもジェノザウラーはまだ数十機以上が健在であり、荷電粒子砲の砲口は艦隊を狙って向けられている。
「くそったれ！　どんだけ撃ちゃあ終わってくれんだよ！？」

撃っても撃ってもキリが無いとヴァイスが悪態をつく。足場が高速で動く艦の甲板である故に、狙いが上手く定まらず、撃った弾の大多数がジェノザウラーに命中しないのだ。

「戦線離脱まで、後十秒！」

「全機に通達、後少しだ！　ありったけの気合いを叩き込め！」

ハンコック大佐が部下に檄を飛ばす。だが、後もう少しという所で、残っているジェノザウラーが最大出力での荷電粒子砲の発射準備を完了した。

「全ジェノザウラーの荷電粒子砲、準備完了です！」

「よォし！　荷電粒子砲、撃てェ！」

守備隊長の号令と同時に、残る二十程の荷電粒子砲が一斉に放たれた。それぞれが一直線に延び、共和国艦隊を構成する一部に直撃し、直撃を受けた艦は爆発を起こしながら墜ちていった。

「共和国艦隊、防衛線突破に成功！　しかし、艦隊後方に詰めていたネオタートルシップ級六隻が轟沈しました！」

「ちっ、マッドサンダーを積んだ艦は！？」

「全艦健在です！」

「そうか、マッドサンダーが無事なだけマシか……」

共和国艦隊が防衛線を突破した事で、ハンコック大佐はまずは一安心といった表情を浮かべる。

「全艦に告ぐ。各部隊の被害状況を報告の後、本艦隊はセスリムニル市街へ突入する！」

帝都守備隊の防衛線を突破した共和国艦隊は、休む間も無くセスリムニル市街で奮闘する部隊の救援に向かうのであった。

第六十九話　帝都守備隊を突破せよ（後書き）

今回は少々長くなりましたが、ご意見ご感想等、お待ちしております。

第七十話　勇者王登場！？（前書き）

…えー、２ヶ月振りに投稿する事ができました。いつも更新が遅くて申し訳ないです…

第七十話　勇者王登場！？

「敵艦隊、防衛線を突破しました！」
「逃がすな！　追え！　セスリムニルの部隊と挟み撃ちにしろ！」
帝都守備隊の敷いた防衛線を突破された帝国軍は、直ちに艦隊を追撃する姿勢を取っていた。

『お待ちください！』
「！？　誰だ！」

司令官の乗るホエールキングのブリッジに何者かの声が響き、続いてレーダーに新たな機影が映った。

「レーダーに反応、数９。友軍、ライトニングサイクスです！」
『こちらは第一特殊工作師団第一高速大隊隊長、アイン・ツェルカンプゥ少佐であります。指揮官殿はどちらに？』
「……帝都守備隊隊長、スティーブン・カスティーヨ中佐だ。ツェルカンプゥ少佐、用件は何だ？」

ツェルカンプゥ少佐の要望に応え、守備隊指揮官のランドルフ中佐が応対する。

『実は、ランドルフ中佐に折り入ってお願いしたい事が……』

「……追って来ないな。」
「ですね。てっきり、追撃部隊が来ると思ったんですが……」
ボーグマン大佐となのはが、ホバーカーゴのブリッジで艦隊後方の映像を見ながら言う。
「ふぅ…。スバル・ナカジマ二士、只今戻りました。」
「同じく、ティアナ・ランスター二士、帰還しました。」
「お疲れ様、スバル、ティアナ。」
顔の汗をタオルで拭いながらブリッジにやって来たスバルとティアナに、なのはが労いの言葉を掛ける。
「二人とも、今のうちに少しでも休んどけよ？　三十分後にはすぐ出撃だからな。」
「「はい！」」
大佐の言葉に、スバルとティアナははっきりと返事をする。
「…ところでなのはさん、何か妙じゃないですか？」
ティアナがなのはに言う。
「うん…。どういう訳か解らないけど、帝国軍が追撃して来ないんだよね。」
「ああ。帝都守備隊ってのは、自分らの国を直接的に護る部隊だ。

その部隊に配属されるって事は、帝国の軍人にとっちゃあ名誉な事だろうよ。」

ボーグマン大佐以外の男性の声が聞こえ、なのは達がブリッジの出入り口を見ると、そこにはレイとウィナー、さらにタクマとバディィターがゾロゾロとやって来ていた。今の発言は、どうやらレイのものらしい。

「その誇り高き任務に就きながら、最初に交戦した部隊だけでなく我々にまで防衛線を突破されてしまった……もう守備隊のプライドはズタボロな筈です。」

「そんな天まで届きそうなくらい高いプライドを、俺らにボロ雑巾同然にされちまった訳で……たとえ地獄の果てだろうと、俺らを追い掛けて来る筈ッスよ。」

バディターに続いて、ウィナーも帝都守備隊の心境を想像して語る。

「だよな。じゃあ何故、俺達を追って来ないんだ?」

バディターとウィナーの意見を踏まえ、大佐がその場に居る全員に訊ねる。

「う〜ん……追う必要が無い、っていうのは?」

スバルが少し唸って考え、自分の意見を発言する。

「ほう、何故だ?」

「え? それは……」

意見を言ったはいいが、具体的な内容までは考えていなかったらしい。大佐に訊ねられてスバルは言葉に詰まった。

「…例えば、セスリムニルへの途中に罠を仕掛けたり、伏兵を忍ばせておく……とかでしょ、スバル。」

「え？　あ、そうそう！」

ティアナの助け舟に、スバルは何とか救われた。

「伏兵……つっても、この辺りはだだっ広い平野だ。ゾイドを隠して奇襲を掛けるには、ちぃと心許ないな。」

辺りに岩等の障害物はあるものの、この艦隊に奇襲を掛ける為の戦力が隠れられるとも思えない。

「でも、この間交戦したライガーゼロイクスなら、隠れられなくもないんじゃ？」

なのはが言う。

「それも無いな。それが出来るなら、今セスリムニル市街に居る部隊が先にやられてる筈だ。わざわざ、俺達の為に取っておくなんて事はしないだろう。」

「…では、罠や伏兵の線はありませんね。」

大佐の意見で、罠が敷かれている可能性は無くなった。

「他に考えられる理由は……」

「……俺達を追えなくなった、っていうのは……無いですかね？」

タクマがやや自信なさげに言う。

「追えなくなった？」

「例えば、追撃部隊を組むための戦力が無くなったとか……」

「いやいや、そりゃ無ェだろ。ジェノザウラーが荷電粒子砲をフルパワーで撃ったっつっても、それでガス欠になる訳じゃねぇし、他にも高速ゾイドを温存してる筈だ。」

タクマの意見を、レイが真っ向から否定する。

「……まあ、このまま考えてもしょうがねぇ。俺達は俺達に出来る事をしようや。各自、自分の持ち場に着いててくれ。」

「…そうですね、了解です。」

このまま考えてても埒が開かないため、じきに始まるセスリムニル市街戦の為にそれぞれ準備に向かう事にした。

「ハルトリーゲル大尉。」

ネオタートルシップの機体ハンガーに居るキルシェに、シグナムがフェイトを伴って声を掛ける。

「シグナム二尉か。さっきは余計な心配をさせてしまって、すまなかったな。」

キルシェはシグナムに向き合い、先程の戦いの際の我が儘を謝罪する。

「そんな、謝らなければならないのは私の方です！　先程は出過ぎた発言をしてしまい……」

「良いんだ、二尉の意見は尤もだったしな。」

シグナムは先程の戦いの中、キルシェが戦列に参加するのを承知する発言をしながら、心の中では納得しきれなかった為、自らの主人の命を救ってくれた事に関しての感謝と、上官に対する無礼な発言をした事の謝罪をしていなかった。その事でキルシェに声を掛けたのだが、シグナムは逆に謝られてしまって困惑した。

「…そう言えばハラオウン一尉。以前、デスティンガーが暴走した際、高町一尉と共にシュバルツ中佐を助けてくれたな。」

キルシェはシグナムの少し後ろに立つフェイトに向き合う。

「トリム高地では言いそびれてしまったが…ありがとう、礼を言わせてもらう。」

「あ…いえ、あの時は私もなのはも無我夢中で…」

「謙遜するな、こういう時は誇っても良いんだ。」

謙遜気味の返答をしたフェイトに、キルシェが表情に笑みを含みながら言う。

「…そうだ、ハラオウン一尉、高町一尉に『先程の戦闘では助かっ

た』と、伝えておいてくれないか？」

キルシェが援護に出た戦闘で、致命的な一撃を受けそうになった際、なのはのディバインバスターに救われた事を感謝している、といった旨をフェイトに伝える。

「分かりました、伝えておきます。」

「よろしく頼む……っと、セスリムニルまであと数分か。」

キルシェが軍服のポケットから懐中時計を取り出し、時間を確認する。

「では二人共、また後でな。」

キルシェは振り返り、機体ハンガーへと歩き出す。

「私達も行くぞ、テスタロッサ。」

「はい、シグナム。」

シグナムとフェイトも踵を返し、ブリッジへと向かっていった。

（なんか……キルシェ大尉って誰かに似てる？）

フェイトはキルシェのキャラが誰かに似ていると思い、ブリッジに走りながらその事を考えていた。が、その時は気付くには至らなかった。

高層ビルが建ち並ぶ、ガイロス帝国屈指の大都市セスリムニル市では、数十機のデスザウラーを中核とした帝都守備隊と、ヴァーヌ平野の防衛線をレイ達よりも先に突破していた共和国本隊の熾烈な戦いが繰り広げられていた。

「でありゃぁぁぁぁあッ！！」

とあるパイロットの雄叫びが市街に響き渡り、巨大なチェーンソーを背負ったゴジュラスが、レッドホーンの強固な装甲を自慢のレーザーチェーンソーで容易く引き裂いた。

「ハーッハッハッハッハ！　流石は天がニクスに遣わした英雄こと俺、チャクト・スペクト様と相棒のゴジュラス・ザ・バズソーだ！　レッドホーンごとき、目じゃねぇぜ！」

ゴジュラス・ザ・バズソーのパイロットである、紅色の髪と額のプロテクターに勇者王ヴォイスが特徴の青年、チャクト・スペクト中尉は高笑いしながら盛大に自画自賛する。

「チャクト、調子に乗り過ぎだ。向こうにはまだ、デスザウラーが居るのだぞ？　こちらのマッドサンダーも限界に近い、軽率な行動は慎め。」

「ヘッ、大丈夫ですよ隊長！　マッドサンダーなんかに頼らなくたって、今の俺に怖いものなんかありませんよ！」

加熱するチャクトを冷却しようと上官が諫めるが、まるで効果が無く、正に焼石に水状態である。

「おっ、敵機捕捉！　チャクト・スペクト、交戦する！」

「あ、こらチャクト！　話はまだ終わっとらんぞ！」

上官からの説教中にも係わらず、前方にキャノリーモルガの姿を数機確認すると、通信を無視して突撃してしまう。

それに対してキャノリーモルガが一斉にグラインドキャノンを放ち、突撃するザ・バズソーを攻撃する。

「効かねぇ、効かねぇぞ！　たかがモルガの攻撃なんかなァ！」

だが、チャクトとザ・バズソーは砲撃の直撃などものともせず、一気にレーザーチェーンソーのリーチまで距離を詰めた。

「てゃぁぁぁぁあ！」

レーザーチェーンソーが振り下ろされ、グラインドキャノンの長い砲身ごとモルガの体を力任せに真っ二つにした。続いて少しだけチェーンソーを持ち上げると、近くのモルガ三機をチェーンソーで横薙ぎに吹き飛ばした。

ザ・バズソーと対峙する残り数機のキャノリーモルガは、次々に後退を始めていく。

「ハッハァ、俺の力に恐れをなして逃げるってんだな？　逃がすかよッ！」

調子に乗ったチャクトは、一直線に後退するキャノリーモルガの一団を追撃する。そう、何の疑いも無く直線的に。

「…今だ！」

チャクトがモルガを追って十字路に進入した、その時だった。左右のビルの陰でステルスを使用して身を隠していた数機のヘルディガンナーが、背に装備したレーザーライフルをザ・バズソーへ向けて一斉掃射した。

「何ッ！？　ぐあッ！」

左右からの奇襲など全く予想していなかったチャクトは面食らい、ザ・バズソーの動きを止めてしまう。そうして発生した隙を、ここぞとばかりにキャノリーモルガやヘルディガンナー、更にモルガの後方に現れたアイアンコングが、ザ・バズソーに一斉砲火を仕掛ける。

「ぐわぁぁぁあっ！」

大量の弾薬を一度に浴び、チャクトは悲鳴を上げ、ザ・バズソーの装甲がボロボロになっていく。

「畜生！　…俺はこんな所で死ぬような、ちっぽけな人間なんかじゃねェんだよ！」

機体を砲弾の雨に晒されながらも、チャクトは自身を奮い立たせる。

「俺は英雄…チャクト・スペクト様だァァァア！！」

力を振り絞り、天にも届くような雄叫びを上げた、その時だった。

「フォトンランサー…ファイア！」

ザ・バズソーの背後から金色の弾丸が降り注ぎ、砲撃を行っていた機体の砲身を破壊した。

「！？　な、何だァ！？」

突然の出来事に驚くチャクトの隣に、金色の弾丸より少し遅れてフェイトが姿を現す。

「あ、アンタは一体…！？」

「…機動六課所属ライトニング分隊長、フェイト・T・ハラオウン執務官といいます。」

「機動六課…じゃあ、アンタが魔導士って奴か？」

「ええ。ここは私が引き受けます、スペクト中尉は後退してください。」

「…いや、そいつァ出来ねェ。」

救援にやって来たフェイトはチャクトに後退を告げるが、当のチャクトはやはり聞き入れようとしない。

「俺は英雄だ。英雄の生き様に、『逃げ』の二文字はねぇのさ！」

「は、はぁ？」

チャクトの突飛な言い分に、流石のフェイトも呆れ返るほかなかった。

「し、しかし機体の状況を見た限りでは…」

フェイトがどうにか説得しようとするが、その間にアイアンコングがザ・バズソーに迫っていた。

「おっと、来やがったな！　行くぜ、バズソー！」

「ああ、ちょっと!?」

大量の砲撃を受けて機体の損傷が拡大したにも関わらず、チャクトは先程の上官の時と同様に、新たに確認した敵影に向かって飛び出してしまう。

「レーザーチェェエンソォォオ…！」

ザ・バズソーがレーザーチェーンソーを振りかぶった瞬間、ガクンという音と同時に機体の体勢が崩れ、膝を突いてしまう。

「なッ…!?　どうしたバズソー！　動け、動くんだ!」

先程の砲撃の影響だろう。駆動系統にまで損傷が広がってしまっていたのだ。勿論その隙を逃す程、敵も甘くはない。ザ・バズソーにアイアンコングのハンマーナックルによる強烈なボディーブローが決まり、その巨体が数メートル後方に吹き飛ばされてしまう。

「がはッ…！」

「中尉！　…バルディッシュ！」

『Ｙｅｓ　ｓｉｒ．　Ｚａｎｂｅｒ　ｆｏｒｍ』

「はぁぁぁあっ！」

バルディッシュの形状が大剣に変わり、その一振りでアイアンコングの右腕を切断する。

「もう一撃ッ！」

更に返す刀で両脚も斬りつけ、アイアンコングはその巨体を支えきれず、ズシンと音を立てて転倒した。

「大丈夫ですか、中尉！」

「いっつつつ……ああ、なんとかな。安心しな、これから挽回するからよ！」

「その損傷度では無茶です！　後退を…」

「まだチェーンソーは動く、やれねぇこたァねェさ！」

「……！」

全身に砲弾の痕、駆動系統の損傷を受けても、チャクトはまだ戦うと言い張っている。その自信がどこから来るのか、フェイトには解らなかったし、この無鉄砲さが、どこか懐かしく思えていた。

（この頑固さ、まるで……）

そんなやり取りをしていると、遅れてヴィータとシグナム、なのはが追い付いてきた。

「テスタロッサ、何をもたついている？」

「あ、シグナム…」

「さっさとコイツを連れて戻るぞ。ボコボコじゃねーか。」

シグナムとヴィータがフェイトに言い、ヴィータがゆっくりと立ち上がろうとするザ・バズソーのコックピットの近くに行く。

「そこのゴジュラスのパイロット、後詰めはアタシらがやる。後退するぞ。」

ヴィータは軽くキャノピーをノックし、チャクトに後退を促す。

「何言ってんだ、俺はまだいけるぜ？」

「はぁ！？　てめぇが何言ってやがる！　てめぇンとこの他の隊員は、とっくに引き上げてんだよ！」

例によってチャクトは要請を聞こうとせず、ヴィータは声を荒らげる。

「俺は勇者だ、女子供より先に逃げる訳にはいかねぇな。」

「勇者ァ！？　何を馬鹿言って…」

「それに、俺にはまだレーザーチェーンソーが…」

ザ・バズソーの必殺武器であるレーザーチェーンソーを指し示した瞬間、シグナムがチェーンソーのアームを叩き斬ってしまった。

「な……！？」

「シ、シグナム！？」

突然の出来事に、シグナム以外の全員が驚いた。ザ・バズソーの使用可能な武装を無くす事で、チャクトを後退させる積もりなのだろうが、なにせシグナムがあまりにも突然に実行するので驚きも大きかった。

「これでもう、戦うことはできまい。さあ、私達と共に後退してもらうぞ。」

「て、てめぇこのアマ！　何てことしやがる！」

チャクトはハッとすると、怒りの矛先をシグナムに向ける。だが、そんなチャクトにシグナムが臆する事もなく、キャノピーにレーザ

ーチェーンソーを使用不能にしたレヴァンティンの切っ先を向ける。

「そうか、チェーンソーだけではまだ足りんか。貴様も斬り落とさんと駄目らしいな。」

シグナムは半ば脅し同然に、鋭い眼光でチャクトを睨み付ける。チャクトも反抗期の子供の様にシグナムを睨み付けるが、気迫という面で圧倒的に負けており、チャクトも動物的本能でそれをなんとなく理解していた。

「クソッ、わーったよ！　後退すりゃいいんだろ！？」

「分かればいい。」

シグナムの気迫に負け、ついにチャクトは後退を了解した。

「にゃはは……シグナムさん…」

「ちょっとやり過ぎじゃねぇか？」

「何を言っている。駄々をこねる子供を窘(たしな)めるには、上下関係をしっかりと教えてやるのが一番だろう。」

「ペットの躾かよ……」

シグナムの分かるような分からないような持論を聞きながら、なのは達は素早く動けなくなったザ・バズソーをバインドで軽く持ち上げ、後方のネオタートルシップまで運んで行くのだった。

「いや、手間を掛けさせてすまなかった。礼を言わせてもらう。」

チャクトとザ・バズソーの回収に成功したなのは達は、チャクトの上官から感謝の言葉を受けていた。

「いえ……でもすいません、シグナムが武装を一部破壊してしまって…」

「構わんさ。寧ろ、それ位やらんとアイツを連れて帰るなんて出来ないだろうしな。」

「はぁ……」

チャクトの上官は、ザ・バズソーの武装を破壊した件は気にしていない様子だ。

「少佐、その……チャクト・スペクトとはどういう人間なのです?」

シグナムはチャクトについて、上官に訊ねた。

「アイツか……アイツには、常日頃から目標にしてるものがあってな。さっきも、しつこく言ってたろ?」

「英雄、ですか?」

「ああ。アイツはガキの頃、かつての共和国軍の英雄、ロイ・ジー・クルーガ中佐の伝記を何度も読んでたらしくてな。自分もそんな存在になりたいんだそうだ。」

「クソッ、クソッ！」

少佐がフェイト達に話している時、チャクトは自室の壁に拳を打ち付け、蹴りを入れ、更には頭をも打ち付けて、怒りと悔しさを壁にぶつけていた。

「英雄ともあろうこの俺が、なんてザマだ！　女子供に助けられた挙げ句、ザ・バズソーのチェーンソーまで壊されてッ！」

特にチャクトは、フェイト達のような女性陣、それもゾイドにすら乗らない一団に危機を救われた事が悔しかったらしい。自身は共和国軍の看板とも言えるゴジュラス、それもカスタムタイプに乗っていたにも関わらず、剣やハンマーを用い、ゾイドの装甲とは比べものにならないほど薄そうな衣服を着て戦う彼女達に負けた。彼女達の力やバリアジャケットの強度を知らないとは言え、その事実がチャクトに重くのし掛かる。

「もっとだ…もっと強くならねぇと…！　本当の英雄にはなれない……！」

今のままでは英雄たりえる力が無いと感じ、力をつけろと自分自身に言い聞かせるのだった。

数時間後。共和国と帝国の両軍は睨み合いの形となり、チャクトを引き上げさせてからは、これといって戦況に大きな変化はなかった。

その間、パイロット達は暫しの休息を取り、それに対し整備班は急ピッチで各機体の整備に当たっている。休息とは言っても、いつ戦いが再開するかは判らない為、艦の機体ハンガーの壁に寄り掛かったり座り込んだりする程度だが。

「…これでよし、と。ランスター二士、チャクト中尉を呼びにひとっ走り行ってきてくれや。」

「あ、はい。それじゃスバル、また後でね。」

「うん、行ってらっしゃーい♪」

ザ・バズソーの修理を終えた整備士が、座り込んでドリンクを飲むスバルの横に立っていたティアナに、チャクトを呼んでくるように頼む。ティアナはすぐにチャクトの部屋へと駆けていった。

「…これで良いんですかい、隊長殿？」

ティアナに声を掛けた整備士が、ザ・バズソーの反対側に向かって問い掛ける。すると、ザ・バズソーの影から、管理局の制服姿のなのはがひょこっと姿を現した。

「な、なのはさん！？　そんな所で何を…！？」
「さっきチャクト中尉の話を聞いてね、中尉と似たような調子だったティアナなら、いい方向に持っていってくれるかと思ったんだ。」
「そうなんですか…でも、それならなのはさんが行くように直接言えばいいのに…」
「ほら、私が言ってティアナが変に勘ぐっても面倒くさいじゃない？」
「ああ、確かに…」

ティアナがかつて無茶をして苦悩した事を、なのはは知っている。なのにわざわざティアナにチャクトを呼ぶように頼んでは、後でまた拗ねかねないとなのはは考え、全く関係の無い妙齢の整備士に呼んでこさせるように仕向けたのだった。

「さぁて、上手くいけばいいけど…」

なのははこの作戦が、次の戦闘が始まるまでに成功する事を願うのだった。

「スペクト中尉、失礼します。」

ティアナは一声掛けてから、チャクトの部屋の扉を開いた。直後、

あるものがティアナの目に飛び込んできた。

「あん？　誰だお前？　お前も機動六課ってやつか？」

「はい。スターズ分隊、ティアナ・ランスター二士です。…それよりも…」

ティアナの目に飛び込んできたのは、上半身裸で筋トレをしているチャクトの姿だった。

「…何をなさっているんです？」

「見て判んねぇか？　筋トレだよ、筋トレ。日々の鍛錬は欠かせねーー」

「そうじゃありません！　戦闘中じゃないとはいえ、作戦中になんで筋トレをしているんです！？」

ティアナは声を荒らげて言う。今は休息を取るよう指示が出ているにも関わらず、自ら疲労を溜めるような行為をする事が、今するべき事とはティアナには思えなかった。

「俺はこの程度じゃバテねぇよ。なんせ、英雄だからな。」

ティアナの指摘にもどこ吹く風、そして二言目には英雄。もはや英雄オタクと言っても問題は無いのかと思えてくる。

ティアナはチャクトのこの態度に、内心ムッときていた。

「…たとえ中尉が英雄だろうと人間なんです。疲れを溜め込んでは、まともに戦闘も出来ないと思うのですが？」

自分が言えた義理ではないかと思いつつも、ティアナは多少悪意を込めた口調で言い放つ。

「疲れて戦えないのは並みの奴の話だ。俺は英雄だから大丈夫なんだよ。」
「また英雄…中尉、あなたはそれ以外の言葉を知らないんですか？」
「…あ゛？」

ティアナの一言に、チャクトはカチンと来たのか筋トレを中断して体を起こし、ティアナに少し近寄って睨み付ける。

「…中尉、何故そんなに英雄に拘るんですか？」

チャクトの鋭い目つきに、ティアナは少しだけたじろぐが、それにも負けずにチャクトが英雄に固執する理由を訊ねる。

「…なに？」
「そんなに英雄英雄と言うのには、何か特別な事情があるんですよね？」

チャクトはティアナの問い掛けに一瞬怪訝な表情を浮かべるも、小さく嘲笑するとその質問に答える。

「何を訊くかと思えば…。そんなの、俺が英雄になるべくして産まれてきた人間だからに決まってんだろ？　俺は英雄になる。そういう運命なんだよ。」
「…嘘ですね。…英雄になるのが当たり前だと思っている人が、こんな時間まで自分の体を苛めるとは考えられません。」
「……」

ティアナの冷静な反論に、チャクトは言葉を詰まらせる。

「…お、お前には関係の無い事だ。つーか、そんな事言うために来た訳じゃないんじゃねぇのか？」
「……そう、でした。ザ・バズソーの補修が終わったので来るようにとの事です。」
「…了解だ、すぐ行く。」

ティアナは本来の用件、と言っても、チャクトとティアナを正面から話をさせるのがなのはにとっての本来の目的なのだが、チャクトに格納庫に来るように告げると、チャクトは上着を着て、ティアナと共に格納庫へ向かって歩きだす。
微妙に気まずい空気を醸しながらも、数分後に二人は格納庫に到着した。

「…スペクト中尉をお連れしました。」
「おう、来た来た。中尉、お待ちしてましたぜ。」
「ああ、サンキューな！」

チャクトは先程の険悪なムードを振り払っていつもの調子で軽快に走り出し、ザ・バズソーのコックピットへ飛び乗った。
ティアナは未だ不機嫌そうな表情を浮かべながらも、スバルの隣に腰を下ろす。

「え～っと…ティ、ティア…？」
「…何よ？」
「…な、何でもないです……」

ティアナの機嫌を直せるか試みるスバルだが、ティアナの不機嫌な目つきに威圧され、すぐに諦めた。
その直後だった。艦全体に、けたたましい程の警報音が鳴り響き出す。

「な、何!?」
『十二時方向より、帝国軍の大隊を確認!　総員、第一種戦闘配置!　繰り返す、総員、第一種戦闘配置!』
「来たわね!　行くわよ、スバル!」
「あ、うん!」

不機嫌だったティアナの表情は、すぐに一戦士の顔へと変わり、スバルは内心ホッとした。

「二人とも、急ぐよ!」
「はい!　…ってなのはさん、こんな所で何をなさってたんです?」
「え!?」

なのはがティアナ達と出撃しようと合流したのはいいが、ティアナの尤もな指摘になのははドキッとする。

「そ、そんな事はいいの!　ほら、急ごう!」
「…?　まぁいいですけど。」

やや腑に落ちないティアナだったが、今は非常時だからと深く考えるのは止める事にするのだった。

「ハンコック大佐、全隊配置に着きました。」

ネオタートルシップのブリッジで、オペレーターの女性士官が艦長のハンコック大佐に報告する。

「敵の動きは？」

「現在、偵察にジェミニィを数機向かわせていますが、隊列を組んだまま動きが無い模様です。」

オペレーターの報告に少し遅れ、偵察のプテラス・ジェミニィからの通信が入ってくる。

『…こちらジェミニィ０１、敵部隊の数は推定百前後。加えて、隊前面にデスザウラーを確認、数五！』

偵察機が伝えたデスザウラーが居るという報告に、ブリッジのオペレーターやパイロット達がどよめきだす。

「デスザウラー…ここで出して来たか。」

『どうする、ハンコック？』

隊の比較的前方に陣取っていたボーグマン大佐が、ハンコック大佐に指示を仰ぐ。

「…マッドサンダーを六機程前に出せ。加えて、マッドサンダー周辺の隊は、それぞれ護衛に当たれ！」

『了解！』

マッドサンダーの正面の機体は通り道を作り、そこをマッドサンダーがズシンズシンと巨体を震わせて前進する。幸い、共和国軍の部隊は狭い道路（と言っても大型ゾイドにして二、三機分の幅があるのだが）に進入していなかった為、隊列の組み直しに苦労はしなかった。

『こちらジェミニィ０１。敵部隊、微速ながら前進を開始しました！』

「マッドサンダーは！？」

「全機、再び配置に着きました！」

「よし！　こちらも征くぞ！」

帝国軍が動き出したのを認知し、それに合わせるように共和国軍も部隊を前進し始めた。

～おまけ～

エリオ「あれ、ここは…？　え、僕に何かやれって？　う～ん……」

（エリオ考え中…）

エリオ「……ＩＳもよろしく！」

キャロ「…エリオ君、どこかのヒーロー戦記じゃないんだから……」

スバル「ガンダム００もよろしく！」

ティアナ「あんたも乗っからない！」

第七十話　勇者王登場！？（後書き）

ご意見ご感想、何でチャクトの機体がライガーじゃないんだという文句等、お待ちしております。

第七十一話　セスリムニル市街戦（前編）（前書き）

三月中になんとか投稿出来ました。
それと先日、ＰＳ３を買いました。自分的に面白そうなゲームがまだ無いので、妹が買ったウイイレしかありません。
何かオススメがあったら、教えていただけると嬉しいです。

第七十一話　セスリムニル市街戦（前編）

住人の居なくなった大都市に、爆発音が、大地を揺らすような足音が、人の断末魔が響き渡る。

セスリムニル市街の戦いは激化し、帝国守備隊は遂に切り札のデスザウラーを投入、一気にケリを着ける作戦に打って出る。

対して共和国軍は、対デスザウラー用ゾイドのマッドサンダーを投入する。

この戦いの結果によって、この戦争の決着が左右されると言っても過言ではない、正に天王山である。

「デスザウラーより高エネルギー反応！」

「荷電粒子砲、来ます！」

デスザウラーの口腔内にある荷電粒子砲にエネルギーが集まり、それを共和国軍が察知する。

「了解！　反荷電粒子シールド、展開！」

荷電粒子砲に対してその真正面に位置するマッドサンダーが、機体の代名詞である反荷電粒子シールドを作動させる。

その直後、三基の荷電粒子砲から、なのはのスターライトブレイカーをも凌駕する太さと破壊力を持った三筋の光が一直線に放たれ、マッドサンダーの額に直撃する。

「敵荷電粒子砲、マッドサンダー一番から三番まで、反荷電粒子シールドに直撃！」

荷電粒子砲が照射されるが、それぞれのマッドサンダー達は自身

の装甲が溶けること無く、微動だにせずにただ耐えていた。
そして数秒間の照射が終了し、シールドを展開していたマッドサンダー達の装甲を見ると、それらは傷一つついておらず堅牢な鎧を維持していた。

「マッドサンダー一番から三番、目立った損傷はありません！」
「流石はマッドサンダー……雷神の二つ名と、反荷電粒子シールドは伊達じゃないって事か…」

トリケラトプス型超弩級ゾイド、マッドサンダー。人呼んで『雷神』。
その機体の最大の特徴は、頭部に装備する反り立つような形状の反荷電粒子シールドにある。
特殊な加工が施された表面と超高出力のＥシールドによって、そこに命中する荷電粒子砲は、たとえデスザウラー級のそれの直撃だろうと無効化される。
その前評判通りの防御性能にボーグマン大佐は、ただただ驚嘆するばかりだった。

「次の発射までには時間が掛かる、今のうちに部隊を前進させ、デスザウラーを叩け！」
「クレイジー０１了解。行くぞ、レイ、ウィナー、バン！」
「「「了解！」」」

ハンコック大佐の指示を受け、ボーグマン大佐の隊がその機動力と攻撃力をもって先行する。

「サンダース軍曹、クーイン少尉、我らも征くぞ、！」
「はい！」
「了解です！」

「中尉、我々はこちらから仕掛けるぞ。ついてこい！」
「はっ！」

続いてイスルギ少佐とタクマとサヤカの隊にキルシェとトーマが加わり、ボーグマン大佐達とは違うルートから打って出る。

「ボーリック、キャリオン、相手はあのデスザウラーだ！　気ィ抜いてると墜とされるぞ！」
「「了解！」」
「マミ、お前もいいか！？」
「はい！　デススティンガーの時みたいなドジは踏みません！」

空対地装備を搭載したストームソーダーに乗るマミは、サティ大尉のサラマンダーボンヴァーンや、ボーリック中尉とキャリオン少尉のサラマンダーに続き、数十機のレイノスや他のストームソーダーと共にセスリムニル市街上空を飛行する。

「各員、援護射撃を開始せよ！」

アームドライガーに乗るアルドワーズ中佐の号令で、ヴァイスやバディターを始めとした後方の支援部隊が援護射撃を開始する。

「バン、上から行け！」
「了解！　飛べ、シーザー！」

ボーグマン大佐のブレードライガーが先行し、その頭上でバンのシーザーが翼を展開して飛び上がる事で、立体的な攻撃を行う。

「俺達もぶちかますぞ、ウィナー！」
「了解ッス！」

その後ろを走っていたレイとウィナーのライガーゼロパンツァーは、鋭い爪を舗装された道路に突き立ててブレーキを掛け、急停止する。

「ターゲット、ロック！」

「ハイブリッドキャノン……ファイア！」

正面のデスザウラーに照準を合わせ、レイとウィナーのライガーゼロパンツァーの主砲、ハイブリッドキャノンを同時に発射する。

ゼロパンツァー二体で合計四基、四門ずつの実弾とビームの砲門から一斉に高威力の砲撃が放たれる。

砲撃はデスザウラーの身体に命中し、爆発を起こす。が、当のデスザウラーに与えたダメージは微々たるものだった。

「ゲッ、なんつー装甲だよ！？」

ハイブリッドキャノンの威力は決して低くはないし、現行の兵器の中では寧ろ高い方だ。にもかかわらず、デスザウラーはその砲撃を受けて耐えてしまったのだ。マッドサンダーと同じく、デスザウラーの名も伊達ではなかった。

「凹むなレイ。最初からこの程度で倒せる相手じゃないのは…」

ボーグマン大佐のブレードライガーが地面を蹴り、跳躍する。

「分かってた筈だぞッ！？」

空中でブースターを最大出力まで稼働させ、その勢いを乗せたレーザーブレードでデスザウラーの肩付近に斬り掛かる。

デスザウラーのいる道路はあまり広くなく、ブレードを避けるためのスペースは無い。

デスザウラーにとって、強力な格闘武装を持つ機体を接近させる事は、今のような状況を作ってしまうために絶対に避けなければならないだろう。少なくとも、ボーグマン大佐はそう踏んでいた。

そして思った。極限まで接近してブレードで叩き斬れば、デスザウラーを倒せると。

（よし、取った！）

が、現実はそう甘くはなかった。デスザウラーはその巨大にもかかわらず、小さくステップしてブレードライガーの真正面に移動、両腕でブレードライガーの頭部を掴んで受け止めてしまった。

「な、何ッ！？」

そしてブレードライガーの頭部を下に押し込み、ライガー自身のブースターの勢いを乗せて道路に叩きつける。

「チッ、シールドッ…ぐあっ！」

道路に激突する寸前、ボーグマン大佐はシールドを展開してコックピットへの衝撃を和らげるが、ブースターの勢いがあったために衝撃を完全に防ぐには至らなかった。

「うぉぉぉおッ！！」

続いてシーザーがデスザウラーに向かって急降下し、右肩を狙ってストライクレーザークローで斬り抜ける。

『グォォォォン！！』

強烈な斬撃にデスザウラーが一瞬だけ怯み、ブレードライガーを押さえつける力が弱まる。

「くっ、そこだ！」

その隙に、大佐はハイデンシティビームキャノンを連射しつつデスザウラーの腕を抜け出し、後方に大きくステップして距離を取る。

「大佐、お怪我は！？」

レイが大佐に訊く。

「なに、大した事はない。すまんなバン、助かった。」

「気にしないでください……うわっ！？」

デスザウラーの注意を逸らしてくれたバンに感謝するバンだが、そのバンはデスザウラーの対空ミサイルの雨に晒されていた。

が、その直後、デスザウラーに隣接するビルのガラスが砕け、中から何かが飛び出してきた。

「ディバィィィイン…バスタァァァア！！」

飛び出してきたのは、ティアナが放った橙色の弾丸が数十発と、自身の正面に水色の魔力スフィアを形成したスバルだった。

魔力弾はデスザウラーの胸部装甲の全く同じ箇所に全弾命中し、そこにスバルがディバインバスターを撃ち込んだ。

一ヶ所に集中して強力な攻撃を撃ち込んだ事により、ハイブリッドキャノンだけでは壊せなかったデスザウラーの装甲に僅かに亀裂

が入った。

「やった！」

「スバル、退がって！　なのはさん！」

「うん！」

スバルはすぐさまウイングロードを展開、蹴り上げてビルに向かって高々と跳躍する。

「全力全開！　スターライトォ…ブレイカァァァア！！」

スバルがその空間から退いた瞬間、後方から桜色の砲撃がデスザウラーのひび割れた装甲目掛けて放たれ、直撃する。

強度が著しく低下した装甲は、ジェノザウラーの荷電粒子砲に匹敵する威力の砲撃に耐えきれずに貫かれ、そのままデスザウラーの強靭な分厚い胸から背中の荷電粒子吸入ファンまで突き抜けて破壊した。

スターライトブレイカーの前に屈したデスザウラーは、貫かれた胸部を中心に爆発を起こし、前のめりに倒れ込む。

デスザウラーのパイロットは、機体が完全に倒れ込む前に座席ごと真上に飛び出して脱出し、座席が変形した小型ビークルで後退していった。

「デスザウラー、一機撃破！」

「……もう、これくらいじゃ驚かねぇや。」

いくら的確なコンビネーションがあったとはいえ、ハイブリッドキャノン等の共和国軍の最新兵器でもビクともしなかったデスザウラーを、なのは達はあっという間に撃破してしまった。

普通なら驚くべき事だが、レイ達はこれまでにも機動六課勢の驚

異的な力に散々驚いてきたので、大した事では無いような気になってしまっていた。

「……慣れってのは、恐ろしいや。」

バンは飛行していたシーザーを地に降ろしつつ、苦笑いしながら呟くのだった。

「はぁぁぁぁあッ！！」
『グァァァアッ！！』

レイ達が戦っていた場所と二つ隣の道路。そこでもまた、激戦が繰り広げられている。

フェイトはデスザウラーの首目掛けてバルディッシュザンバーを振り下ろすが、デスザウラーは右腕を勢い良く振り、巨大な右手、即ちハイパーキラークローで受け止めて弾き返した。

「くっ、ザンバーを弾くなんて…！」

フェイトは軽く舌打ちする。

続けて、デスザウラーは頭部のビームガンをフェイトの周囲に掃射する。

フェイトは持ち前の機動力を活かし、自身が居た空間にビームが到達する前に瞬時に後退する。
デスザウラーはフェイトの軌道を辿るように、更にビームガンを掃射しつつフェイトを追尾する。
フェイトは上下左右と立体的に動き回るが、デスザウラーは更に小型ミサイルを広く展開して自由を奪いに出る。

「ハラオウン執務官、援護します！」

サヤカがシャドーフォックスの徹甲レーザーバルカンでデスザウラーを攻撃し、フェイトから注意を逸らさせようとする。
その目論見通り、デスザウラーはフェイトへの攻撃を緩めてシャドーフォックスを意識しだしたが、すぐにその必要は無くなった。

「クーイン、来るぞ！」
「な…！　屋上から！？」

周囲の高層ビルの屋上から多数のレブラプターが次々と降下し、その内の数体がサヤカのシャドーフォックスにのしかかってきた。

「きゃああっ！」

レブラプターが落下した衝撃で、レーザーバルカンの銃身やシャドーフォックスの機体自体がブレて照準が狂い、道路やビルの壁などに流れ弾が命中した。

「少尉！」

タクマはサヤカの救援に向かおうとするが、他のレブラプター達が大挙してタクマに押し寄せる。

「くそッ、邪魔するなッ！」

タクマは軽く舌打ちし、レブラプターをシールドライガーの腹部のショックカノンで攻撃しつつ突撃を図ろうとする。

が、シールドライガーの正面の機体には命中したが、群れが左右に分かれてタクマにカウンターを仕掛けんと突撃する。

レブラプターに取り付かれて左右を封じられ、タクマのシールドライガーは身動きが取りづらくなってしまった。

「コイツら、離れろッ！」

タクマは機体をユッサユッサと震わせてレブラプターを引き剥がそうとするが、レブラプターは小型機にしては力のあり尚且つ集団戦闘が得意な機体の為、なかなか上手くいかない。

それどころか、レブラプター達は逆にシールドライガーを徒党を組んでちまちまと攻撃し、少しずつダメージを蓄積させていった。

「まずい、このまま攻撃を受け続けたら…！」

塵も積もれば山となる、という諺もあるように、このままダメージが蓄積していけばいずれ戦闘不能になってしまうだろう。

「紫電…一閃！」

そんな焦り始めるタクマを、シグナムがレヴァンティンでレブラプターを叩き斬って援護する。

「すいません、副隊長！」

「気にするな。…しかし、この状況は芳しくないな。」

シグナムの言う通り、あまり広くない道で倒しては現れるレブラプターに邪魔をされ、ライガー等ではなかなかデスザウラーに肉迫できない。

イスルギ少佐でさえ、自身の周囲のレブラプターを処理するのに追われていた。

「…奴にすぐ近付けるのは、私とテスタロッサぐらいか……」

シグナムは辺りを見渡し、状況を確認する。

上空の部隊は未だ制空権を得るには至っておらず、支援は期待できそうにない。

後方からの支援攻撃も無くはないが、レブラプター達が友軍機に密着し過ぎている為、迂闊に撃つことが出来ない状況にある。

ならば、的が小さく小回りが効き、レブラプターを飛び越して動ける自分達魔導士が鍵だ、とシグナムは判断する。

「…テスタロッサ、クーイン少尉は頼んだ。私はデスザウラーをやる。」

「はい。…シグナム、気をつけて。」

「ああ。…行くぞ、レヴァンティン！」

シグナムはレヴァンティンを一旦鞘に収め、居合いの構えのまま一気にデスザウラーとの距離を縮めんと急接近する。　接近を許すまいと、デスザウラーの腹部ハッチを開いて近接戦用ビーム砲を一斉に発射し、弾幕を張る。

シグナムはそれらを足を止める事無くかわしていき、デスザウラーとの距離がほぼゼロの位置まで接近すると、その巨大な機体の足元に移動して着地、それと同時にレヴァンティンからカートリッジ

の薬莢を排出する。

「飛竜…一閃！！」

レヴァンティンを勢い良く鞘から抜くと、その瞬間にレヴァンティンの刀身がシュランゲフォルムの蛇腹剣型へと姿を変え、デスザウラーの機体を右脚から左肩に掛けて逆袈裟に斬り裂いた。

『グァァァア！！』

デスザウラーの硬い装甲に巨大な亀裂が走り、痛みからくる慟哭が辺りに響き渡る。

「あのデスザウラーに一太刀で傷を負わせるとは…。シグナム二尉、なかなかやるではない…かッ！」

イスルギ少佐はシグナムの腕前を賞賛しつつ、ブレードライガーのストライククローでレブラプターを一機ずつ潰していく。

「今です中佐！　デスザウラーに向けて一斉砲撃を！」

「ああ、了解だ。…各員、砲撃始め！」

アルドワーズ中佐の号令で、後方に詰めていた支援部隊がデスザウラーに向けて一斉に砲撃を開始する。

シグナムが負わせた傷に次々とビームや実弾の嵐が襲い掛かり、デスザウラーにかなりのダメージを負わせていく。

「テスタロッサ、待たせたな。これより援護する。」

「無事で何よりです、シグナム。」

砲撃が行われている間に、シグナムはサヤカの救援に当たっているフェイトと合流、周囲のレブラプターの掃討に移る。

「てぁぁぁあッ！」

「ハーケン…セイバーッ！」

フェイトが鎌状の魔力刃を展開したバルディッシュを構え、機動力でレブラプターを撹乱、混乱した隙を突いてシグナムがシュベルトフォルムに戻したレヴァンティンで叩き斬る。更に、チャンスがあればフェイトもハーケンセイバーで首を刈り取る。

六課が誇る近接戦闘のスペシャリスト二名により、レブラプターの群れが瞬く間に減っていった。

「…だいぶ、減ってきたな。」

「ええ。この調子なら…」

突破できる。フェイトがそう感じた、その時だった。

『司令部よりアルドワーズ隊へ！　十二時方向より、敵、大型戦術ミサイル接近！　数、三十！』

ネオ・タートルシップの司令部より入電があり、アイアンコングが放ったと思しき大型戦術ミサイルの接近を告げる。

「くっ、各員砲撃止め！　目標変更、上空、戦術ミサイル！　…撃てェ！」

アルドワーズ中佐はデスザウラーを攻撃していた機体の砲撃を全て中止させ、攻撃目標を戦術ミサイルに変更するように指示を出す。

その直後、損傷が拡大していたデスザウラーのコックピットのキ

ヤノピーが開き、パイロットが座席ごと脱出した。

「…！　シグナム！」

「脱出しただと…？」

いくら損傷が拡大していたとは言え、状態を見る限りでは機体を破棄して撤退するには早い、とシグナムは思った。

だが、その意図はすぐに明らかになった。

『…！　イスルギ隊と交戦中のデスザウラーに、高エネルギー反応を確認！』

「何！？　荷電粒子砲か！？」

ボロボロのデスザウラーの背部、荷電粒子吸入ファンがフル稼働し、口腔内の荷電粒子砲にエネルギーが集中する。

周囲のレブラプター達は、荷電粒子砲に巻き込まれて蒸発させられないように、急いでデスザウラーの背後に避難していく。

「…そうか、デスザウラーのパイロットが脱出したのはこのためか…」

「どういう事です、少佐？」

イスルギ少佐の呟きに、タクマが訊ねる。

「デスザウラーはあの状態でも戦えなくはない…が、荷電粒子砲を撃つには危険な状態だ。撃てたとしても、機体が反動に耐えきれんだろう。」

「だから、パイロットが先に脱出したと？」

フェイトが回線に混ざる。

「そうだ、ハラオウン執務官。操縦を自動操縦（スリーパー）にした後に脱出すれば、機体に掛かる負担を気にする必要は無いからな。」

損傷が甚大なデスザウラーが荷電粒子砲を最大出力で放てば、その際に生じる多大な反動によってシステムフリーズ、もしくは機体が耐えきれずに爆発を起こす可能性がある。

それを覚悟の上で荷電粒子砲を撃つため、先にパイロットが脱出したのだ。

たとえデスザウラー一機を犠牲にしたとしても、共和国の主力を潰せれば問題ないと判断したのだろう。

「後方支援…は期待できんか。かといって、撤退するには時間が足りん…」

イスルギ少佐は、今取るべき最良の策を思案する。

「ならば接近し、発射自体の阻止を…」

デスザウラーに荷電粒子砲を撃たれる前に、機体を撃破する案を考えるが、それは実行出来なくなった。

デスザウラーの周囲のビルの壁を突き破って、ヘルディガンナーが大量に姿を現れる。そして、フェイト達をデスザウラーに近付けさせまいと一斉に攻撃を開始した。

「くっ、このタイミングで伏兵かッ！」

「デスザウラーの前に出ることを恐れない…スリーパーか、厄介な！」

荷電粒子砲に巻き込まれても問題ないように、旧型のヘルディガ

ンナーをスリーパーで送り込んできていたのだった。
パイロットが居ない分、死を恐れない怒涛の一斉射撃に、シグナムとフェイトは防御を優先しながら少しずつ後退、イスルギ少佐とタクマはヘルディガンナーになんとか反撃しようとするが、ビームの嵐の前にどうしても防御を優先せざるを得なかった。
デスザウラーの後方からは更に戦術ミサイルが飛来し、後方の部隊はそちらに釘付けにされてしまっている。
そして極めつけに、デスザウラーが荷電粒子砲の発射準備を完了させようとしていた。

「少佐！　このままではッ…！」

タクマの顔は、焦りと絶望が混ざった何とも言えない表情になり、イスルギ少佐に助けを乞うかのように言葉を放った。

「…かくなる上は、私がッ！」

イスルギ少佐は防御を優先していたブレードライガーを前進させ始め、ブースターを噴かせてブレードを展開し、ビームの嵐の中を駆け出した。

「少佐！　まさか…！？」
「タクマ、すまん！　先に逝かせて貰うぞ！」
「そんな…駄目です、少佐ァ！」

特攻を仕掛けるイスルギ少佐に、タクマが止めるよう懇願するが、イスルギ少佐は止まらない。

「少佐ァァァア！　止めろォォォォオ！！」
「…ああ、タクマの通りですぜ、イスルギ少佐！」

「ッ！？」

我を忘れて叫ぶタクマの声と同時に、冷静な声がイスルギ少佐のコックピットに伝わった。

その直後、後方の部隊が居る方向から数発の弾丸が音速を超えて飛来し、デスザウラーの喉元と口腔内を捉えた。

「な…！？」

狙撃されたデスザウラーは荷電粒子砲の管制システムかエネルギーバイパスが破壊されたらしく、荷電粒子砲の発射を中止し、大小いくつかの爆発を起こして沈黙した。

「狙撃…なのか？」
「一体、だれが！？」

ミサイルの迎撃に追われ、援護など期待できなかった筈の後方の部隊からの狙撃に、帝国軍よりもフェイトやシグナム、イスルギ少佐達の方が驚いていた。

すると、イスルギ少佐のブレードライガーのコックピットに、狙撃した人物から通信が入ってきた。

「ご無事ですか、少佐？」
「貴様は確か…」
「ヴァイス・グランセニック陸曹であります。」

デスザウラーを狙撃したのは、六課が誇る狙撃手兼ヘリパイロットのヴァイスだった。

「ヴァイス、ミサイルはどうなったんだ？　迎撃で手一杯だった筈

じゃなかったのか？」
「ああ、ミサイルなら……」
シグナムがヴァイスに訊ねると、別の誰かが回線に割り込んできた。
『俺がヴァイスと代わってやったんだよ。』
「な、お前…キャバリエーレ！？」
通信に割り込んできたのは、負傷していた筈のアーバインだった。
アーバインはジ・オーガではなく、山岳地帯戦用に茶色く塗装された、予備のガンスナイパーに乗っていた。
「アーバインさん、怪我はもういいんですか！？」
『まぁな。大体、元々が大した怪我じゃなかったんだよ。なのにムンベイの奴、大事を取っとけとか言いやがって…』
フェイトが心配そうに訊ねると、アーバインは普段通りの軽口を叩く。しかし、その声に余裕は無さそうな感じが聞いて取れた。
ムンベイは普段、多少の怪我程度なら、『これ位の傷で、何弱気になってんの。男でしょ！』ぐらいの事はよく言っている。が、そのムンベイが休めと言ったのだ。やはり、怪我はあまり軽くはなかったのだろう。
「まぁ何はともあれ…ヴァイス、よくやった、感謝する。」
「陸曹、最高です！」「おうよ、もっと言ってくれ！　グランセニック最高ォ！　そら、Ｒｅｐｅａｔ　ａｆｔｅｒ　ｍｅ！」
「グランセニック、最高ォォォォオッ！！」
調子に乗ってタクマに更に誉めちぎらせるヴァイス。

「…ヴァイス、まだ敵は残っている。そろそろ切らせてもらうぞ。」
「タクマ、お前もだ。」
「あ…すいません、つい……」

シグナム達はヴァイスからの通信を切り、デスザウラーの残骸を乗り越えてくるレブラプターやヘルディガンナーと再度向かい合い、戦闘を再開するのだった。

～おまけ～

アーバイン
「……」

ティアナ
「…？　アーバインさん、どうかしたんですか？　山岳地帯仕様の茶色いガンスナイパーなんか眺めて？」

アーバイン
「…いや、何故か懐かしい気がしてな…」

ティアナ

「はあ……？」

第七十一話　セスリムニル市街戦（前編）（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第七十二話　セスリムニル市街戦（中編）

なのはやフェイト達がデスザウラーと戦闘を繰り広げているのと同じ頃、キルシェにトーマ、ヴィータにチャクト達の部隊も同様にデスザウラーと戦っていた。

「行くぜ、バズソー！！」

ゴジュラス・ザ・バズソーがチャクトの気合いのこもった雄叫びと共に、ドスドスと大地を揺らしながら突撃する。

デスザウラーは頭部のビームガンを掃射するが、チャクトはそれを雨粒程にも気にすること無く突撃を続けた。

「そんなんで俺が止まるかよ！　オラァァァアッ！！」

デスザウラーの胸部にバズソーのレーザーチェーンソーを突き立て、火花とけたたましい音を上げて少しずつだが装甲を削っていく。

しかし、デスザウラーがただ黙ってくれている筈もなく、ゴジュラス目掛けて剛腕を思い切り振り下ろして殴り飛ばした。

「くぁぁぁぁあッ！」

攻撃に集中していたチャクトはガードを仕損じて直撃を受け、吹き飛ばされて仰向けに転倒した。

「スペクト中尉！」

「馬鹿野郎、ノーガードで策も無しに突っ込む奴があるか！　それでも尉官かよ！」

トーマはチャクトの身を案ずるが、ヴィータは階級に見合った戦い方じゃないと逆に罵倒する。

「ハルトリーゲル大尉、次はアタシらだ！」
「了解した。トーマ、援護を頼むぞ！」
「はっ！」
「私も参ります。ウェンディ！」
「了解ッス、アタシも撃ちまくるッスよ！」

続いてヴィータとキルシェ、それにチンクが突撃し、それに続いてトーマとウェンディを中心に援護射撃が行われる。

『Ｓｃｈｗａｌｂｅｆｌｉｅｇｅｎ』

ヴィータの手に数個の小さな鉄球が現れ、それらに魔力を纏わせて一斉にデスザウラーに向けて放つ。それを動き回っては幾度も繰り返し、デスザウラーを牽制すると同時に意識をヴィータに向かせる。

「ＩＳ発動、ランブルデトネイター！」

その隙を突いてチンクがデスザウラーの腹部にナイフを投げ、ランブルデトネイターで爆発を起こして腹部装甲の強度を下げる。

「今です、大尉！」
「了解だ！　てぁぁぁぁあッ！」

更にキルシェのレブラプターがデスザウラーに密着し、レブラプターの機体を超える長さを持つパイルバンカーを、装甲が薄くなった腹部に数発撃ち込んだ。

『グォァァアッ！！』
「よし！」

一連の連携で有効なダメージを与えられたらしく、デスザウラーは慟哭する。

「見てたかチャクト！　攻撃ってのはこうやるんだよ！」

ヴィータは今の連携が攻撃の手本だと、チャクトにビシッと指を差して言い放つ。

「ケッ、てめぇみたいなガキが教導の真似事かよ？」
「んだとォ！？」

ヴィータは聞く耳を持たないチャクトに対し、怒りを露わにする。

「…俺はてめぇの部下じゃ無いし、指図される筋合いもねェよ。」
「てめぇ…人がせっかく！」
「うるせぇな！　あんな奴、俺一人で片付けてやるよ！」

怒るヴィータにそう言い放つと、バズソーを起こして再びデスザウラーに向けて突撃する。

「…俺は英雄になる男だ、デスザウラーごときに負けてたまるかよ！」

チャクトは先程あっさりと返り討ちにあった事とヴィータの戦術から学習したのか、左腕の２０ｍｍビームガンと腹部の左右両側のマシンガンを掃射しつつデスザウラーに肉迫する。

ヴィータの助言を煩いと一蹴していた割に地味に実践している辺り、先程の反抗的な態度はただの強がりだったのだろう。
デスザウラーもそれに対抗すべく前進し、バズソーが突き出した両手と掴み合いになり、双方の力が拮抗して動きが止まる。

「くっ…おおおッ！」

だが、単純な力のぶつかり合いでは太い腕を持つデスザウラーに分があり、徐々にバズソーが押され始める。

「舐めんじゃ…ねぇぞォォォォオ！」

チャクトは負けじと雄叫びを上げ、レーザーチェーンソーのマニュピレーターを操作し、デスザウラーの首筋にぶつけて作動させて装甲を引き裂いた。

『グァァアッ！？』
「もう…一丁！」

チャクトは一度レーザーチェーンソーを離し、引き裂いて出来た傷に更に噛み付き、ゴジュラスタイプの持つ鋭く強力な牙がデスザウラーの太い首にバキバキと音を立てながら、深々と食い込んでいった。

『――――――

「このまま…首ちょんぱにしてやろォかァァア！」

チャクトはバズソーの牙を更に深く突き刺し、デスザウラーの両腕の力が弱まった隙に、バズソーの両腕で体を掴んで首を引き千切りに掛かる。

『ピピピピ…』

「ッ！？　いかん、退がれスペクト中尉！」

「なッ！？」

キルシェのレブラプターのセンサーが高エネルギー反応を感知し、それを知らされたチャクトも迫り来る光を目視で確認、すぐにデスザウラーへの攻撃を中止して速やかに後退する。

その直後、ボロボロのデスザウラーの腹部を貫いて一筋の光、集束荷電粒子砲が飛び出してきた。

「ぐわあっ！」

「中尉！」

バズソーの脇腹付近を集束荷電粒子砲が通り過ぎ、思わず声を上げたチャクトにキルシェが声を掛ける。

「ちっ…大丈夫ですよ、かすっただけです。」

バズソーの脇腹は、荷電粒子砲がかすった所為で焼けて溶けかけていた。

このダメージによって機体の運用に生じる問題は大して無いが、チャクトが普段するような無理な突撃は推奨出来ない。とはいえ、元々がとても誉められた動きでは無かったのだが。

そして、先程まで相対していたデスザウラーが前のめりに倒れ込

み、その後ろから一個中隊規模、推定三十機程度のジェノザウラーが姿を現した。

「おいおい…敵さん、雁首揃えてお出ましだぜ？」

「デスザウラーの次はジェノザウラーの一個中隊…流石は帝国最後の防衛線、なかなか豪華な布陣だ…」

「お二人共、感心してる場合ですか！？」

ヴィータとキルシェがそれぞれの感想を述べ、それにトーマが突っ込む。

その直後、他の場所で大きめの爆発音が聞こえてきた。

「なのは達か。あっちのデスは片付いたらしいですよ、大尉？」

「そうか。ならば、我々が負ける訳にはいかなくなったな。」

ヴィータが簡単に報告し、それを聞いたキルシェは自らに気合いを入れ直した。

他の者も、それに呼応して気合いを込め始める。

「スペクト中尉、前衛は我々に任せろ。貴様は後方からの援護に回れ。」

「へッ、冗談！　ジェノザウラーが何だ、俺が突撃を――」

「黙れ！」

「ッ！？」

指示を無視して突撃しようとするチャクトを、キルシェが一喝する。

「貴様一人来た所で、足手まといにしかならん！　黙って後方支援に徹していれば良いのだ！」

「何だと!?　俺は英雄になる男だ、これ位の損傷で…」
「貴様ごときの兵士が、英雄という言葉を軽々しく口にするな!」

キルシェの指示に納得がいかずに異議を申し立てるチャクトだが、英雄という言葉を口にした事で再度一喝されてしまう。

「…もう一度言う、退がって後方支援に徹していろ。これは命令だ。」

今一度チャクトに指示を出し、最後に命令だと付け加える。チャクトの指揮権は事前にキルシェに移っていた為、命令は有効である。

「……チッ、了解了解!　チャクト・スペクト中尉、後方支援に回ります!」

チャクトは命令に不快感を露わにして棘のある、むしろ棘しかないような口調で命令を復唱し、後方支援に移る。

「ち、中尉さん…?」
「…んだよ?!」
「ヒィ!?　な、何でもないッス、ごめんなさいッス!」

ウェンディはチャクトをフォローしようと声を掛けるが、不機嫌全開なチャクトのヤンキー口調の迫力に恐れをなして平謝りする。

（…畜生、こんなバカっぽい奴まで俺を馬鹿にしやがって…!）

チャクトはウェンディが自分をからかおうとしたと勝手に思い込み、更に不機嫌になる。

「…やってやる、やってやるさ。支援だろうが何だろうが、完璧にこなしてあの帝国女を見返してやらぁ！」

あまりに腹が立って脳に血が上ったチャクトは思考が一周し、ふてくされるどころか逆にやる気が沸いてきていた。

（こ…この人、おっかないッス～！）

それを横で見ていたウェンディは、チャクトの怒りの籠もった気迫にすっかり怯えていたのだった。

激戦が繰り広げられているセスリムニル市街の上空では、両軍の航空戦力によるハイスピード感溢れるドッグファイトが行われていた。

共和国側のはマミのものを含んだストームソーダーが七機、レイノスとプテラスボマーが二十機ずつ。対する帝国は、ドッグファイト仕様に空対空ミサイルポッドと機銃を搭載し、元々装備していたブレードを廃したレドラーが四十機であった。

「そこぉッ！」

マミのストームソーダーから空対空ミサイルが二発放たれ、ロッ

クオンしたレドラーを追尾する。
しばらく追いかけっこが続き、結局レドラーはミサイルに追い付かれて被弾、推進機能を破損したらしく黒煙を上げて墜落した。

「よし！」

マミはコックピット内で、左手だけで軽くガッツポーズをする。
だが喜びもつかの間、ストームソーダーの後方にレドラーが数機張り付いていた。

「嘘ッ！？　…ああもう、ちょっとぐらいは喜びを噛みしめさせてよね！」

愚痴を言いながらも、マミはジェットエンジンの出力を上昇させて加速、レドラーを振り切ろうと動き回る。
だがレドラーは高い機動力を誇るストームソーダーに食らいつき、遂に編隊の先頭の機体がミサイルを数発放って攻撃を仕掛けた。

『ビーッ、ビーッ！』
「くぅっ！」

ミサイルが迫っている事を知らせる警告音がコックピット内に鳴り響き、マミは俄かに焦りを覚える。
マミはストームソーダーの機体後部からチャフをバラまき、ミサイルを攪乱しようとしつつ軌道を大きく変えて逃げ切りを図る。
その結果、何発かは回避する事に成功したが、一発だけがなおも追尾を続けている。

「しつこいなぁ、もう！」

食らいつくミサイルに苛立ちながら更にチャフを散布するが、その努力も空しく右翼への被弾を許してしまった。

「きゃあっ！」

機体に爆発の衝撃が走り、マミは思わず声を上げた。
着弾した右翼の一部から黒煙が上がり、機動力が低下する。
更に追い討ちを掛けるべくレドラーがストームソーダーの追撃を続行し、照準を合わせてミサイルの発射体勢を整える。

「調子に乗るなよ！」

だが、サティ大尉のサラマンダーボンヴァーンがすぐさま援護に入り、二門のバスターキャノンを連射してレドラーを一度に撃墜した。

「助かりました、大尉！」
「いいってことよ！　若ェ奴らを助けるのは、オッサンの務めだからな！」

サティ大尉はマミを助けた事を大したことはないと笑顔で返す。
なのはやバンのような若者の笑顔とは違い、サティ大尉のそれは妙齢の歴戦の戦士にしか出来ない、まるで父親のような頼れるものだった。

「それに見てみろ。制空権はどうやら、共和国（ウチ）が取れそうだぜ？」

サティ大尉が親指で周囲を指し示す。
見ると、レイノスの大部隊がレドラーを次々と撃墜していっていた。

元々レドラーは、高い機動力に両翼と尾のブレードを武器に、ヒットエンドアウェイ戦法を重点に置いた機体である。それをドッグファイト仕様に改修したとは言え、機体の軽量化を進めて最初からドッグファイト中心の戦術で構想、開発されたレイノスが相手では分が悪かった。

とは言え、レイノスが完全に勝っていた訳ではなく、帝都守備隊の気迫や技術の前に全体の四割程が撃墜されてしまっていたが。

「下の方も、どうやら押してるようだし…これなら俺達の援護は要らんか――」

そうサティ大尉が呟いた直後だった。突然、帝都寄りの位置に建つそれぞれが間隔の開いた高層ビル五棟の壁を破って、地上や上空に極太の光が一斉に飛び出してきた。

「な、何ッ!?」
「うぉおッ!?」
「きゃあッ!」

五本の光は共和国の陸、空戦力を焼き払い、破壊していく。

「か…荷電粒子砲!?　それにあの威力…まさか!」
「ええ…それにこの感じ…間違い無い。」

シーザーの出力全開のシールドで荷電粒子砲を分隊ごと回避出来たバンとフィーネが呟く。

「くっ…!　各隊、状況知らせ!」

司令部のハンコック大佐は、今の奇襲で受けた被害の報告を各隊

に求める。

「こちらボーグマン隊、全員無事だ。」

「イスルギ隊、シャドーフォックス八機、コマンドウルフ十五機が蒸発しました。」

「アルドワーズ隊、マッドサンダーのシールドで相当数が回避しましたが…」

「サティ隊、残存航空戦力の半分が消滅…！」

次々と各部隊からの被害状況が報告されていき、今の奇襲だけで残存戦力の二割が撃破された事が判明した。マッドサンダーが居なければ、もっと悲惨な事になっていただろう。

「…そうだ！　ハルトリーゲル大尉、チャクト・スペクト中尉は！？」

チャクトの上官――パウエル少佐はチャクトの身を案じ、指揮権を渡したキルシェに回線を繋いだ。

「こちらハルトリーゲル大尉。我々は全員無事です。スペクト中尉は後方支援に当たらせていましたので…」

「そ、そうか…良かった…」

チャクトが生きている事を知ると、少佐は胸を撫で下ろして安心した。

「こちらロングアーチ００。スターズ並びにライトニング、みんな無事か！？」

はやても同様に、六課メンバーの安否を確認する為に回線を繋ぐ。

「こちらスターズ０１、０３、０４並びにライトニング０４。バリアジャケットがちょっと破れた位で、全員無事です！」
「スターズ０２とナンバーズ、全員無事だぜ。」
「ライトニング０１、０２、共に無事です。」
「御安心を、主はやて。」
「こちらヴァイス。雷神様（マッドサンダー）のお陰で、なんとか生きてますぜ！」

はやての元に六課メンバーの元気な声が、次々と送られてくる。

「みんな無事みたいやな…よかったわぁ。」

それを聞いたはやては少し安心して胸を撫で下ろす。
だがそれも束の間、荷電粒子砲が飛び出した五棟のビルが音と砂煙を上げてを崩れ、中から今度は別のデスザウラーが一機ずつ、合計五機が姿を現した。

『デスザウラーの出現を確認！　数、五！』

通信士の報告が全員に渡り、その内容に戦慄する。

「な…！　デスザウラーの増援だと！？」

アーバインをはじめ、主力のほぼ全員が驚きの表情を露わにする。
ここが両軍にとっての正念場とは言え、まさかデスザウラーが増援として出て来るなど、誰も考えもしていなかった。

「一機だけでも厳しいってのに、それが目の前に七機…壮観だな、逆に笑えてくる。」
「大佐、そんなのん気な！」

デスザウラーの軍団という壮観な光景を前に、ボーグマン大佐が率直な感想を呟き、その発言にティアナが突っ込みを入れる。

「さて…どうする、ハンコック大佐殿？」

そんなティアナを尻目に、ボーグマン大佐はハンコック大佐に指示を仰ぐ。

「…総員に告ぐ。マッドサンダーを一番から十二番までデスザウラーに接近させ、一機につきガンブラスターを両弦に一機ずつ、合計二機帯同させて左右を守らせろ。」

「ハンコック大佐、それはもしや…！？」

指示の内容に反応したアルドワーズ中佐が訊ねる。

ハンコック大佐はそれに対しニィッと笑みを浮かべると、指示の続きを言い放つ。

「…マッドサンダーでデスザウラーに突撃を仕掛け、マグネーザーをもって各個撃破せよ！　諸君等の健闘を祈る！」

マグネーザー。それは反荷電粒子シールドに並んで、マッドサンダーの象徴ともいえる武装。反荷電粒子シールドから突き出る、巨大な二本の角。

それらは男のロマンであるドリルの如く高速回転し、デスザウラーの超重装甲すらも貫いてしまう必殺武器である。

ハンコック大佐の指示通りに、マッドサンダーの左右両弦に後方支援部隊から回されたガンブラスターが配置され、それぞれ足並みを揃えて前進する。

先程の荷電粒子砲によって大通りのビル数棟が破壊されたお陰で、

巨体を誇るマッドサンダーの左右にガンブラスターを配置するスペースが出来ていたのは、痛手を負ったとは言え不幸中の幸いだった。

『敵マッドサンダー級、前進を始めました！』

『マグネーザーを使う気か…！　各員に告ぐ、マッドサンダーを近付けさせるな！　正面の防御は硬い、左右から攻撃せよ！』

対する帝都守備隊はマッドサンダーが正面からの攻撃に強い事を考慮し、部隊を分隊ごとに分け、市街の左右から共和国軍を挟み込むように展開する。

『帝都守備隊、戦力を広範囲に分散させ、左右から接近して来ます！』

「マッドサンダーはそのまま全速前進。各部隊は後退し、接近する敵機の迎撃を急げ！」

「ロングアーチ００から六課メンバー全員へ。スターズ０１及びライトニング０４はマッドサンダーの一番、スターズ０２及びライトニング０２は五番、ライトニング０１は六番、スターズ０３及び０４は八番、チンクとウェンディは三番、オットーとディードは四番へ後退して、全体の前進を支援してや！　呼ばれんかった人は、現状維持！　ほな、頼むで！」

『了解（ッス）！』

共和国軍のマッドサンダーの陣形は、先頭にマッドサンダーの一番艦が配置され、その後ろに二番艦を配置。そこから二番以降の番号を持つ艦をＹ字に延びて展開されており、二番艦の後方から右サイドが奇数の番号の艦、左サイドが偶数の番号の艦…といった並びになっている。後方支援の部隊は、両サイドの間の空間に配置されている。

共和国軍の各部隊はマッドサンダーへの攻撃を防ぐため後退し、

マッドサンダーを轟沈しようとする敵部隊の迎撃に向かう。
はやてもそれを支援させる為、六課メンバーを指定した番号の艦になるべく戦力が均等になるように配置させた。

『十二時の方向より、戦術ミサイル接近！』
『対空ミサイル二番から四番、撃てェ！』

左右より仕掛けてくる帝都守備隊に加え、前方からはアイアンコングの大型戦術ミサイルが多数飛来する。
それを先頭付近のマッドサンダーが対空ミサイルやＣＩＷＳ等を用いて弾幕を張り、迎撃していく。

「キャロ、ブーストお願い！」
「はい！」

キャロの両手に填められたケリュケイオンのコアが輝き、なのはの魔力を底上げする。

「レイジングハート！」
『Ａｘｃｅｌ　ｓｈｏｔｅｒ』

ケリュケイオンでブーストした魔力を用い、普段のアクセルシューターよりも大量の魔力弾を周囲に形成する。今はミサイルの迎撃に使う為、威力よりも手数と射程距離を重視して術式を構築してある。

「アクセルシューター、シュート！」

マッドサンダー級一番艦の甲板から、多数の桜色の魔力弾が空へ向かって放たれる。

それらは上空を高速で通過しようとするミサイルに命中していき、撃ち漏らしはあったものの、なかなかの数を迎撃した。

『Ｃｏｎｆｉｒｍｅｄ　ｔｏ　ｈｉｔ．　Ｉｔｓ　１７（命中を確認。数、十七。）』

「続けていくよ、キャロ、レイジングハート！」

「はい！」

『Ａｌｌ　ｌｉｇｈｔ』

なのはは更に追加で魔力弾を形成し、先に撃ったものに続けて発射する。

その一連の作業を幾度も繰り返して可能な限りミサイルを迎撃、マッドサンダーに掛かる負担を削っていった。

「…仄白き雪の王、銀の翼以て、眼下の大地を白銀に染めよ…」

マッドサンダー級六番艦の甲板上で、夜天の魔導書を開いて呪文の詠唱を行うはやて。その周囲に、半透明の立方体が四つ程出現する。

「…来よ、氷結の息吹…アーテム・デス・アイセス！」

右手に持ったシュベルトクロイツを高々と翳し、高らかに叫ぶ。

周囲の立方体から白い魔力の塊が飛び出し、共和国軍の左右から迫り来る帝都守備隊の数十メートル手前の地面に着弾する。

すると、着弾地点を中心に巨大な氷の壁が形成されて縦に延びていき、さらに帝都守備隊の来た道を塞ぐように外側にカーブし、進攻を阻む即席の巨大なバリケードとなった。

突如として現れた氷の壁に、猛スピードで前進していた各分隊は足を止めざるを得ず、急ブレーキを掛けて停止する。

『た、隊長！　氷の壁がいきなり！』
『狼狽えるな！　おそらく、管理局とやらの魔導士の仕業だ。こんなものはパイルバンカーで破壊――』

帝都守備隊の分隊長が指示を出そうとした、その時だ。背後から高速で移動する何かが、足を止めていた分隊に激突した。

『な、何事だ!?　奇襲攻撃か!?』
『い、いえ、ジェノザウラーが一機だけ、止まりきれなかったようです！』

レブラプターの分隊に続いて前進していたジェノザウラーが、前衛の分隊が急に足を止めたためにブレーキが間に合わず、勢い余って衝突してしまったのだ。
ジェノザウラーのパイロットがアーテム・デス・アイセスによって現れた氷の壁に驚き、目を奪われて一瞬だけ脇見運転になっていた事も、事故の原因の一つにもなった。

『ええい、馬鹿者が！　速やかに被害状況報告、隊列を組み直せ！』

今の事故によって生じた損傷を確認して体勢を立て直そうとするが、この隙を共和国軍が逃す筈もなかった。

「そうら、いただきッ！」

サティ大尉がサラマンダーボンヴァーンで、高高度から降下しつつ爆撃を絡めながら、バスターキャノンを数回発射する。
小型機故に装甲があまり厚くないレブラプターは軽く吹き飛ばされ、帝都守備隊の各分隊の混乱は更に深まる一方である。

『マートン分隊、ムーア分隊、トレーシー分隊が全滅！』
『おのれ共和国め…！　前衛の部隊を一度下げさせろ！　あんな氷程度、デスザウラーで蒸発させてくれる！』

帝都守備隊の司令官は息巻いた口調で、デスザウラーのパイロットに荷電粒子砲の発射体勢に入るように指示を出す。

『敵デスザウラー級二機、エネルギー反応増大！　荷電粒子砲と思われます！』
「マッドサンダー及びガンブラスターは全機停止、反荷電粒子シールド展開！」
「了解！　シールド展開！　総員、衝撃に備えよ！」

デスザウラーの長距離砲撃を察知した共和国軍司令部は、すぐさまマッドサンダーのブリッジに報告し、各艦の艦長はシールド展開の指示を出す。

『荷電粒子エネルギー、充填率７０％！』
『氷を吹き飛ばすには十分だ、撃て！』
『了解。荷電粒子砲、発射！』

守備隊の司令官は氷の壁を排除するには十分だ、と７０％の出力で発射を強行させる。
二機のデスザウラーの口腔より、比較的低威力の荷電粒子砲が同時に放たれた。

「うおおっ！」
「きゃあっ！？」

荷電粒子砲ははやてが作った氷の壁に直撃し、その高熱で個体の氷から気体の水蒸気へと一瞬にして昇華させる。
加えて、荷電粒子砲が通過した際の衝撃でマッドサンダーやガンブラスターの機体もやや揺れた。

『荷電粒子砲、八神二佐が形成した氷の壁に直撃！　それにより、壁が消滅しました！　…しかし、マッドサンダー並びにガンブラスターに損傷はありません。』
「ま、そう易々と有利な状況を続けさせてはくれんか…」

ハンコック大佐の表情に、さほど驚いた様子は無い。予想の範疇だったといった感じだ。　壁が吹き飛んだ事で前衛の守備隊の混乱が収まり始め、再びマッドサンダー艦隊に攻撃を仕掛ける。

「レイ、ウィナー、奴らをマッドサンダーに近付けさせるな！」
「了解！　ハイブリッドキャノン、ファイア！」
「撃て撃て撃てェ！」

迫り来るレブラプターの群れに、実弾のハイブリッドキャノンを撃ち込んで迎撃する。
だが、帝都ヴァルハラを守ろうと帝都守備隊は必死で食い下がり、運良く直撃を免れたレブラプターやジェノザウラー達がマッドサンダー艦隊との距離を縮める。
加えてジェノザウラーがレブラプターの更なる接近を支援する為、パルスレーザーライフルをマッドサンダー四番と六番に連射する。

「左舷より攻撃！？　させるかァッ！」

そのレーザーに狙われたマッドサンダーの左舷を守るガンブラスターが素早く反応し、機体の左右十二本ずつ、合計二十四本装備さ

れた超電磁シールドホーンから高出力のシールドを展開する。
シールドによってレーザーの殆どを防いだが、二、三発程、マッドサンダーの機体に命中を許してしまった。

「うわっ！」

攻撃を受けた衝撃がブリッジに伝わり、乗組員が思わず声をだす。

「て、敵レーザーライフル、三発命中！　損傷は軽微、航行に支障はありません！」

攻撃を受けたものの、艦後部のローリングチャージャー付近に直撃しなかった為、深刻なダメージにはならなかった。

「…だが、連中を近付けないに越したことはないな。ビームキャノン砲、一番二番、撃てェ！」
「援護します！　食らぇぇえ！」

マッドサンダーは艦後部の二門のビームキャノンで、ガンブラスターはハイパーローリングキャノンを構成する一部である、ビームキャノンとプラズマキャノンで反撃し、レブラプターやジェノザウラーを思い通りに近付けさせないよう砲撃を続ける。
だが、やはりビームキャノンの隙間をすり抜けて、腕の立つパイロットが乗ったジェノザウラーがマッドサンダーに接近してくる。

『ジェノザウラーが接近中！　数、二！』
「この速度では、本艦で対応出来んな…ハラオウン執務官！」
「はい！」

マッドサンダー六番艦の甲板に立つフェイトの右手には、金色の

魔法陣とそこに集束する球状の高密度な魔力があった。

「トライデント…スマッシャー！」

フェイトが集束されている魔力を携えた右手を押し出すと、三本に枝分かれした金色の砲撃が横並びに放たれた。

『何ッ！？　…ぐあッ！』

その逃げ道を塞ぐかのように襲い来る三筋の光を前に、ジェノザウラーのパイロットはとっさに避ける事が出来ずに直撃を受け、その衝撃で転倒した。

「ぐッ、バーンサイド！　…ッ！？」

もう一機のパイロットはギリギリで防御に成功し、痛手を負った同胞に声を掛けるが、その時に余所見をしてしまった事で急速接近するフェイトに気付くのが一瞬遅れる。

「はぁぁぁあッ！」

フェイトは声を上げ、ザンバーに変形したバルディッシュでジェノザウラーの首をすれ違いざまに斬り落とした。

『くッ、システムフリーズだと！？　…ええい、後退する！』

吹き飛んだ首の根元から、バチバチと火花を散らしながらジェノザウラーは転身して後退していく。

他の機体も、マッドサンダーやガンブラスターを始め、支援部隊の砲火を受けて損傷が酷いらしく後退していっていた。

『マッドサンダー０６よりライトニング０２へ。こちらはもう大丈夫だ。…しかし、四番艦に敵機が接近しているらしい。次はそちらの援護を頼む。』
「了解。…ライトニング０２よりロングアーチ００へ。これより、四番艦の援護に向かいます。」
『ロングアーチ００、了解や。無茶はせんようにな、フェイトちゃん。』
「分かった、はやて。」

四番艦にレブラプターやセイバータイガー等の混成部隊が接近しているらしく、フェイトはその旨をはやてに伝え、四番艦の援護に向かうのだった。

第七十二話　セスリムニル市街戦（中編）（後書き）

ご意見ご感想、文脈のおかしい所やルビのご指摘等、お待ちしております。

第七十三話　セスリムニル市街戦（後編）（前書き）

けっこう最新型のパソコン買いました。動画制作してニコ動投稿を計画中。

第七十三話　セスリムニル市街戦（後編）

無人の管理世界にあるとある遺跡。ここは以前、三匹の虎について記された石版やゾイドコアが発掘された遺跡とは、また別のものである。

「サビンガ、本当にここでいいのかい？」
「はい。僕の記憶が正しければ…」

ユーノはサビンガがと共に、遺跡の発掘作業を行っていた。サビンガのナビゲートを受けつつ、迷路のように入り組んだ通路を慎重に進んでいく。

「…ユーノさん、ストップです。」
「？　サビンガ、どうかした？」
「…そこに転がってる石を、あそこに投げてみてください。」

サビンガに指示されるがまま、ユーノは足元にあった拳ぐらいの大きさの石を拾い上げ、正面に放り投げる。
すると床や左右の壁、更には天井の四方向からレーザーが飛び出し、ユーノが投げ入れた石を一瞬で灰にしてしまった。

「……」
「…このルートはダメですね。別のルートを探しましょう。」

サビンガは今の光景にもいたって冷静だが、ユーノはここまで本気の罠は見たことが無い、と引きつった表情でただ唖然としていた。

（そんなにしてまで近付けたくないなんて…この遺跡はいったい…

？）

ユーノはサビンガと共に来た道を引き返しながら、この遺跡について考える。ここにユーノを連れてきたのがサビンガである以上、三匹の虎か聖王に絡んでいると見て間違いはないだろう。そして、先程のような本気の防衛システム。余程知られたくはないが、壊すには惜しい代物が隠されているのだろうか。

（分からない…サビンガは僕に何を教えようとしているんだ…？）

サビンガの意図が分からず、困惑するユーノであった。

舞台は戻って、惑星Ｚｉのセスリムニル市街。帝都ヴァルハラ寄りの場所に、帝都守備隊が拠点とする基地があった。

「…ミューラー、ちょっといいか？」

「はっ。何でしょう、ラルフ隊長？」

後頭部で纏めた長い髪を右肩から垂らし、顎や口周りに無精髭を生やしている男性、帝都守備隊所属の航空部隊『アイゼンベック隊』隊長であるラルフ少佐が、部下のミューラー少尉に声を掛ける。

「…ハルトリーゲル大尉が裏切ってシュバルツを暗殺したという話…お前はどう思う？」
「どう…と申されましても、それが情報部の発表なのですから…その通りなのでは？」
「…そう思うか。…俺はあの大尉が裏切るとは、到底思えんのだがな。」

ラルフはシュバルツとは士官学校以来の旧友で、シュバルツの部下であるキルシェの性格は勿論、シュバルツへの忠誠心は海よりも深い事も知っていた。だからこそ、情報部の発表がどうしても信じられなかったのだ。

「…まあいい。無駄話に付き合わせて悪かった、忘れてくれ。」

ラルフはそう言うと、格納庫に置かれている自身の愛機、ブラッククレドラーの元へと歩き出す。

「お前も今のうちに、機体の最終チェックをしておけ。じきに出撃命令が出るだろうしな。」
「ハッ！」

ミューラーはラルフに敬礼し、ラルフの後に続いて格納庫に向かうのだった。

「流石、帝国最後の防衛線…いくら墜としてもキリがないね。」

マッドサンダー一番艦の甲板上で、なのはは次々と休みなく飛来する戦術ミサイルの迎撃を一時間近くも続けていた。

いくらキャロの支援を受けていると言えども、小休止すること無く撃ち続ければ流石に息も上がってくるし、支援に徹するキャロの魔力も、いよいよもって限界が近くなっていた。

（キャロもバテてきてる…ここで増援なんか来られちゃうと、かなりマズい状況に――）

『Ｍａｓｔｅｒ！　Ｃｏｍｉｎｇ　ｔｏ　ｒｅｉｎｆｏｒｃｅ　ｏｆ　ｅｎｅｍｙ！（敵の増援が来ます！）』

「ふぇ！？　もしかして私、フラグ立てちゃった！？」

『Ｉｔ　ｗａｓ　ｃａｒｅｌｅｓｓ（迂闊でしたね）』

なのはがより面倒な状況にならないかと懸念した直後、それに呼応するかのように帝国の増援が現れ、なのはは自分が余計な事を考えた所為かと戸惑う。

ただの人間に興味が無い某団長ではあるまいし、まさかなのはの考えた事で世の中が動く訳がないが、レイジングハートも冗談混じりにコメントした。

『十二時の方向より、レドラータイプの航空機接近！　数、１１！』

「ミサイルが墜とされっから直接来たか！　ストラトス０１、迎え撃つぞ！」

新たに現れた１１機のレドラータイプの航空機に対し、レイノスを十機と、ボーリックとキャリオンのサラマンダーを引き連れたサ

ティ大尉が接近していく。

「挨拶代わりだ、バスターキャノンを食らいなッ！」

サラマンダーボンヴァーンのバスターキャノンの射程圏内にレドラータイプが入った瞬間、サティ大尉はバスターキャノンを発射する。

だが、レドラータイプの編隊は襲い来るバスターキャノンの光を前に動じる素振りを全く見せず、落ち着いて散開して回避していった。

「何ッ、避けただと!?　…やるじゃねぇか！」

レドラータイプの機動性とそれを駆るパイロットの実力に、サティ大尉は感心する。

「あの機体、爆撃機（サラマンダー）の癖にゴジュラス用のキャノンを搭載しているのか…ならば小回りは利くまい。」

レドラータイプの編隊――アイゼンベック隊の隊長、ラルフはサラマンダーボンヴァーンの特性を見抜き、部下たちに通信を繋ぐ。

「アイゼンベック０１より各機へ。俺とアイゼンベック０２は『大砲付きサラマンダー』を攻撃する。残りはその他の機体を撃破しろ。」

『了解。』

部下に指示を出すと、ラルフはミューラーと共にサラマンダーボンヴァーンに接近し、その他のレドラータイプも散開していった。

「…さぁて、貴様らに見せてやろう。我等アイゼンベック隊と、このブラックレドラーｍｋ－２の力をなァ！」

従来のレドラーを凌ぐ機動力とドッグファイトに対応可能な射撃系武装、更にレドラーの真骨頂であるブレードによる近接戦闘能力を併せ持つ、帝国における現時点での最高の航空型ゾイド。それが、ラルフ少佐率いるアイゼンベック隊に先行配備された先行量産型ブラックレドラーｍｋ－２である。

ラルフとミューラーは、サラマンダーボンヴァーンの軌道と平行に左右から接近する。

「２対１か…面白ェ、墜ちな！」

サティ大尉は接近するブラックレドラーｍｋ－２に対し、対空ミサイルを一発ずつ放つ。

「甘い！」

ラルフとミューラーはブラックレドラーｍｋ－２の機体を少し傾け、主翼のブースターと一体になっている小口径ガトリングガンの銃口をミサイルの軌道上に合わせ、ガトリングガンを掃射してミサイルを撃墜した。

そして、サラマンダーボンヴァーンの左右をすれ違うように通過していく。

「なっ…！　あの相対速度の中で、的確に対応したってのか！？」

サティ大尉はラルフとミューラーの反応速度の速さに、驚くと同時に感服した。

戦闘機は基本的に、マッハに近いスピードで飛行している。レイ

ノスやレドラーといった高機動がウリの機体同士が正面から勝負する場合、相手の姿が目視でハッキリと確認できる距離でミサイルを撃っても、あっという間にすれ違ってミサイルの誘導性が無くなってしまうのだ。ロックオンした相手が目の前に居ないのだから、当然である。

サティ大尉がミサイルを放った距離は、誘導が切れないギリギリの距離。長年航空機ゾイドに乗っていたサティ大尉だからこそ、カンと技術で出来た技だ。そのキャリアに裏打ちされたテクニックを華麗に回避した、アイゼンベック隊の実力は推して知るべしである。

サラマンダーボンヴァーンの背後で、ラルフとミューラーは互いに交差するように旋回し、サティ大尉を追う形を取る。

「小回りの良さも、今までのレドラー以上か…。」

素早く旋回して攻撃の体勢を取った、ブラックレドラーｍｋ－２の機体スペックにサティ大尉はまたも感心する。

「だが、気体性能で負けてるからって、ベテランとして腕で負ける訳にゃいかんな！」

眼前の敵機が強敵だと確信した瞬間、サティ大尉の眼に気合いの炎が灯った。

「墜ちろ、旧式！」

ラルフとミューラーはブラックレドラーｍｋ－２の両翼の付け根に装備された対空ミサイルを同時に二発ずつ、合計四発をサラマンダーボンヴァーンの翼周辺を狙って発射した。

「来たか！」

ミサイルが迫る事を知らせる警報が、サラマンダーボンヴァーンのコックピット内に鳴り響く。
サティ大尉は操縦桿と足元のペダルを操作し、その巨体を９０。右に傾けて外側に旋回して回避行動を取る。

「ブラックレドラーｍｋ－２の機動性から、逃げ切れると思うなッ！」

大きく旋回するサラマンダーボンヴァーンにブラックレドラーｍｋ－２の機首を向け、ガトリングガンを掃射しながら、先に放ったミサイルと共に追撃を続行する。

「こなくそッ！」

サティ大尉は機体をガトリングガンの射線上から外そうとするが、ラルフはサラマンダーボンヴァーンの動きを的確に予測し、ガトリングガンの射線をサラマンダーボンヴァーンに合わせ、命中させる。

「チッ、食らったか。だが、俺のサラマンダーの装甲ならッ！」

サラマンダーボンヴァーンの持つ航空機ゾイドらしからぬ重装甲のおかげで、ガトリングガンによって受けたダメージは微々たるものだった。
サティ大尉は更に機体に外側に大幅に旋回させ、ミサイルの誘導を切る。
そして、目標を見失って燃料が切れるまで直進しかしなくなったミサイル群を後目に、サティ大尉はラルフやミューラーと再び向かい合う。

「いくら俺とサラマンダーが打たれ強いっつってもな、そうそう好きにはやらせてやれんぞ！」

そう言い放つとサティ大尉は機体をロールさせながら、出力を絞って連射モードに切り替えたバスターキャノンを回転しながら連射する。

「ぬうっ！　なんて出鱈目な！」

「どうだ！　名付けて、バスターキャノン乱れ撃ちよォ！」

あまりにも安直なネーミングだが、連射を重視したとはいえそこはバスターキャノン。ラルフはその弾幕をすり抜けるのは困難と判断し、散開して回避する。

急いで回避行動に移った為にラルフのブラックレドラーｍｋ－２の体勢が崩れ、サティ大尉はそれを逃すまいと、サラマンダーボンヴァーンをラルフの後方に位置取らせた。

「くっ、後ろを取られた！？　ミューラー！」

「ハッ、援護します！」

「さぁて、反撃開始と洒落込もうか！」

サティ大尉はサラマンダーボンヴァーンを加速させるが、その後方からラルフの救援に向かってくるミューラーなど目も暮れず、嬉々としてラルフを追撃しに掛かるのだった。

共和国軍の移動司令部としての役目を担うネオ・タートルシップ。その船体にダメージを受ける訳にはいかない為、現在はセスリムニル市街の南方１０キロ地点に停泊している。
そのネオ・タートルシップ内の医務室のベッドに、一人の軍人の男性が眠っていた。

「う…ぐッ…」

眠っていた。眠っているのではなく、眠っていたのだ。軍人の男性、もといシュバルツ中佐はトリム高地基地でのライガーゼロ・イクスとの戦闘において負傷、今の今まで眠っていたのだが、傷が良くなったのか現在は意識が戻っている。

「私は……そうだ、ライガーゼロ・イクスに……くそっ！」

だんだんと意識を失う前の記憶が蘇り、自分が不覚を取ったのを思い出して自己嫌悪する。

「あ、中佐。起きたんですか？」

医務室にタオルを持ってきたムンベイが、シュバルツの目が覚めたのに気付いて声を掛ける。

「君は…ジャバル曹長だったか…」
「あら、アタシの事覚えててくれた？」
「一時的とはいえ、同じ艦に乗る人物の事を覚えるのは礼儀だと思っているのでね。」

ムンベイはシュバルツが自分の事を記憶に留めていた事を、嬉しく思う。

「個性的だし、そして何より、君はバン・フライハイト中尉と親交が深い。」

「ああ、なるほど。」

自分を覚えていた最大の理由がバンだと聞いたムンベイは、やや残念がると同時に納得した。

「とはいえ、君自身もとても魅力的だと思うがね。」

「あはは、おだてても何も出ないよ、中佐さん。」

シュバルツのフォローを笑顔で軽くあしらう。

「そんなつもりは無かったのだが…ところで、今の状況は？」

ムンベイとのしばらくの雑談の後にシュバルツの眼の色が変わり、軍人としての仕事をする表情になる。ムンベイも、それを汲み取って理解した。

「…アタシ達の隊は、平野の帝都守備隊の防衛線を突破し、共和国軍本隊と合流。今は、セスリムニル市街でドンパチやってますよ。」

「戦況は？」

「アタシは直接見てないんでなんとも…でも、デスザウラーがゾロゾロ出て来たってのは聞いてますね。」

「…！　デスザウラーだと!?　量産化にまで漕ぎ着けていたのか!?」

ムンベイの報告を聞き、シュバルツは既にデスザウラーが前線に投入されていた事に驚愕する。

「こっちの本隊にもマッドサンダーが一応は居ますけど、もしかしたら泥沼になるかも――」

ムンベイの台詞が終わるのを待たず、シュバルツは傷だらけの体を起こしてベッドから立ち上がった。

「ちょ、何してんの!?」

シュバルツの突然の行動に驚くムンベイ。

「行かなくては…行って、この愚かな戦いを止めねばならないッ!」

「無茶だよ中佐さん! まだ怪我だって治ってないんだから!」

「しかし、私が行って帝国軍に停戦を呼び掛けねば余計な犠牲者が出る! それこそプロイツェンの思う壺だ! これ以上、我々が戦う事に意味など…うぐッ…!」

ムンベイがシュバルツを引き止めようとするが、シュバルツはそれを拒否する。更に大きな声を出した所為か、傷が痛み出して包帯が巻かれた患部を手で押さえつける。

「ほら、いわんこっちゃない! 今は休んだ方が…」

「…セスリムニル市街には、この戦争の真の意味を知らず…ただガイロス帝国の為、ルドルフ皇帝陛下の為に戦っていると信じて疑わない兵士達が居る…。その兵達の覚悟や決意を考えれば、私一人が休んでなどいられんのだ…!」

「……!」

「だから頼む、ジャバル曹長ッ…!」

痛みに耐えて脂汗が溢れ出ながらも、シュバルツはムンベイに、自分をセスリムニル市街に向かわせてくれるよう頼み込む。
そうこうしていると医務室の扉が開き、シュバルツよりははるかに軽傷だが、負傷により休養していたハーマンが姿を現した。

「…話は聞かせてもらいました。…ムンベイ、シュバルツ中佐を行かせてくれないか？」
「少佐まで何を…」
「俺はこの通り軽傷だ。お前たちの指揮官だから一応休養していただけで、戦場に出るには何の問題もない。ましてや、中佐一人をエスコートするくらい何てことないさ。」

ハーマンは自らの胸部に巻かれた包帯を取り去り、傷が完治しているのをムンベイにアピールした上で交渉する。

「でも…」
「…シュバルツ中佐の言う通り、下手に戦いが長引けば無用な犠牲者が出る。大丈夫だ、俺に任せておけ。」
ハーマンはムンベイの目を見つめ、自分の胸を叩いてビシッと言い放った。

「…まったく。メリッサじゃないですけど、どうして戦闘ゾイド乗りってのはこう、無茶ばっかりしたがるんだか…」

ムンベイはやれやれといった表情で、メリッサが言いそうな事を呟く。

「…無茶ばかりなのは、お二人だけじゃないですよ。」

ムンベイが呟いた直後、イクスの電撃を浴びてダウンしていたエリオが、ハーマンの後ろからひょこっと姿を現した。

「あらら…エリオ、あんたもかい？」
「すみません、ムンベイさん。でも僕は…」
「はいはい、皆まで言いなさんな。…どうせ少佐や中佐と同じで、止めても聞かないんだろ？」

エリオも行かせてほしいと頼もうとするが、ムンベイは止めても無駄だろうと半ば呆れて諦めたような表情で了解した。

「ムンベイさん、ありがとうございます！」
「そんなの良いから、さっさと行ってきな！　間に合わなくても知らないよ！」
「はい！　…では行きましょう、ハーマン少佐、シュバルツ中佐！」
「おう！」
「ああ！」

最初に走り出したエリオを先頭に、ハーマンとシュバルツも続いて走っていくのだった。

「うわぁあッ！」

「敵ミサイル、ハ、ハイパーローリングチャージャーに直撃！」
「機体出力、３０％まで低下！　反荷電粒子シールド、使用不能です！」

マッドサンダー四番艦のハイパーローリングチャージャーにミサイルが直撃し、機体の出力が急激に低下する。
ハイパーローリングチャージャーはマッドサンダーのエネルギーを永続的に生み出す、言わば原子力空母の原子炉のような役割を果たしている。それが破壊されてしまうと、自分でエネルギーを作れなくなる為、ただでさえ重く燃費の良くないマッドサンダーは戦闘が続行出来なくなってしまうのだ。

『四番艦、ローリングチャージャーが破損！　出力が急激に低下しています！』
「ついに一隻やられたか…。四番艦は後退、艦隊は前進を続けろ！」
「四番艦の抜けた穴はどうします！？」
「艦隊を止めて入れ替えている余裕は無い！　艦隊の速度はそのままに、十三番艦と十四番艦を全速力で向かわせろ！」
「りょ、了解！　全艦は前進を続行、十三番と十四番は最大船速にて艦隊に合流せよ！」

司令部からの通達を受けてマッドサンダー艦隊は前進する速度を緩めず、損傷した四番艦が後退を始め、後方からマッドサンダー十三番と十四番が艦隊に向けて歩みを進めだす。

「どれくらいで合流出来る！？」
「全速力でも、４０分後です！」
「長いな…。十三番と十四番の合流は期待できんかもしれん、各員は防御の手を緩めるな！」
「了解！　…クレイジー０１より各機へ。レイとウィナーは一番艦

の左右に移動。バンは空中に、俺は後方に回ってなのはの援護だ！」
「「「了解！」」」

マッドサンダー一番艦の前でハイブリッドキャノンを連射していたレイとウィナーのライガーゼロが艦の左右に着くように後退し、バンはシーザーの翼を広げて一番艦の上空を飛行し、息の上がってきているなのはの援護に回った。

「ここは俺が引き受ける！　なのはは退がって休んでくれ！」
「うん、ありがとうバン君！」

なのははヘトヘトのキャロを連れて、一旦マッドサンダーの艦内へ入る。

「さあ、ここからは俺とシーザーが相手だ！」

バンの気合に呼応して、シーザーも雄叫びを上げる。

「一時の方向、数は八！　来るわ、バン！」
「分かった！　行くぞ、シーザー！」

シーザーを飛来するミサイルの方向に向け、腹部のショックカノンと翼の付け根のビームガンを連射して迎撃する。

「どんなもんだ！」
「バン、更に来るわ！　十時方向、数、九！」

自身の戦果を喜ぶ間も無く、バンは新たに出現したミサイルに向けて射撃、迎撃する。

「また来るわ！　今度は三方向！」
「いいっ！？　…くそっ、負けるかあっ！」

多方向から来るミサイルの嵐にもバンは臆せず、一番早く艦隊に到達すると予想されるミサイル群をフィーネが予測、シーザーをその進路上に移動させる。

「いっけぇぇぇぇぇぇ！」

バンの雄叫びと共にシーザーはミサイル群に突撃、光り輝くブレードの翼でミサイル群を一気に両断して破壊した。

「よし！　次だ、シーザー！」

そのままの勢いで急旋回し、すぐ近くのミサイル群にショックカノンやビームガンを接近しながら連射して迎撃、撃ち漏らしたものを更に接近してブレードで両断する。

「さあ最後だ！」
「バン、まずいわ！　残りのミサイル群、一番艦に着弾まで後五秒！」
「な、何だって！？」

フィーネの警告を聞いたバンが見ると、三つ目のミサイル群が対空砲火を潜り抜け、マッドサンダーの一番艦に迫っていた。

「くそっ、急げシーザー！」

シーザーのブースターを全開で噴かせ、急加速してミサイル群に接近する。

「駄目、間に合わない！」
「まだだ！　墜ちろぉぉお！」

バンは諦めず、シーザーの射撃武装を射程圏外にも関わらず全て展開し、なんとかミサイル群を墜とそうと画策する。
だが、バンが照準も一切合わない一斉射撃を行おうとした時、地上からのビームキャノンによる砲撃によって、ミサイル群は全て撃ち墜とされた。

「ったく、あんま無茶しようとすんじゃねェよ。」

その砲撃は、ボーグマン大佐の駆るブレードライガーのハイデンシティビームキャノンによるものだった。

「いくらお前がなのはの代わりをやるったって、俺も居るんだ。一人で全部片付けようとすんなよ。」
「すいません、助かりました大佐。」

バンはつい目の前のミサイル群に気を取られ、うっかり大佐の存在を忘れてしまっていたのだった。だが、それを言うと更に怒られそうなので心に留めておく事にした。

「あら、大佐は人のこと言えないんじゃないんですか？　クレイジー・アーサーさん。」
「お、おいフィーネ！？」
「ハッハッハ！　違ェねェ、フィーネの言う通りだ。」

フィーネの発言にバンは怒られると焦るが、当の言われた大佐は怒るどころか納得して笑い飛ばしてしまった。流石に大佐のような

ベテランともなると、余裕が出来てくるらしい。

「んじゃ、俺もフィーネの言う通り無茶はせず、防御に徹するとするか！」

ボーグマン大佐はハイデンシティビームキャノンを連射し、更に現れたミサイルを撃ち落としていく。

「…それにしても、こうミサイルがジャンジャン来るんじゃ本当にキリが無ェな。いい加減、こっちもジリ貧になりかねな…」

ミサイルを撃ち落としながらボーグマン大佐が呟いた、その時だった。

『司令部より各機へ！　前方のデスザウラーも前進を始めました！』

「リクエストにお応えして、ってか？　…ちっ、めったな事は言うもんじゃねェな！」

司令部からの通信を受け、フラグを立てて回収してしまったかと冗談混じりに悔やむボーグマン大佐。

「レイさん！」

「ああ。荷電粒子砲が無くったって、デスザウラーの格闘能力は並以上だ。油断してッと殴り飛ばされるぞ！」

「了解ッス！　オラオラァ！」

マッドサンダー一番艦の左右を守っていたレイとウィナーは、それぞれのライガーゼロパンツァーを一番艦の正面に出し、迫り来るデスザウラーの集団を近付けまいとハイブリッドキャノンを乱射し

始める。
だが、接近するデスザウラーの装甲は硬く、更に左右を守るサイカーチスやジェノザウラーによる反撃を受け、自身も防御に回らざるを得ない。

「ぐっ！　…くそっ、邪魔すんな！」
「…！　デスザウラー来るぞ、ウィナー！　一旦下がれ！」

レイとウィナーは護衛のサイカーチスやジェノザウラーにも砲撃を行い、次々と撃破していくが、そちらに手間取っている間にデスザウラーがマッドサンダー一番艦に接近する。

「デスザウラー、来ます！」
「マグネーザー1番、2番、始動せよ！　ドデカいのを食らわせてやれ！」

一番艦の艦長はマグネーザーの使用許可を出し、反荷電粒子シールドから突き出した二本のマグネーザーを起動させ、回転を始める。

『ギャオオオオオン！』

威圧感のある咆哮を上げながら、巨大な腕でマッドサンダーの反荷電粒子シールドを鷲掴みにして破壊する。

「反荷電粒子シールド破損！　使用不能です！」
「構うな、マグネーザーを叩き込め！」

『グオオオオオン！』

デスザウラーは更にブリッジをも叩き潰そうと腕を振り上げるが、

それを振り下ろす前にマッドサンダーが咆哮と同時に踏み込んで、高速で回転するマグネーザーをデスザウラーの機体に突き刺した。

『グギャアアアアアア！』

その強大な一撃にデスザウラーは辺り一面に響き渡る慟哭を上げ、爆発を起こして機能を停止した。

「よっしゃぁ！」

「イエス！」

マッドサンダーの勇姿に、レイとウィナーは思わず感嘆の声を上げる。

「デスザウラー、沈黙！」

「よぉし！　刺さっている鉄屑を引き剥がせ、本艦は前進を――」

一番艦の艦長が言い終わる前に、デスザウラーの後方に居たジェノザウラーが収束荷電粒子砲をフルパワーで発射し、反荷電粒子シールドを破損したマッドサンダーの艦体を破壊されたデスザウラーごと貫いた。

「な…！　この野郎！」

マッドサンダー一番艦は爆発を次々と起こし、ハイパーローリングチャージャー付近で大きな爆発を起こすと、そのまま機能を停止した。

『マッドサンダー一番、轟沈！』

『続いて、三番と四番が交戦します！』

マッドサンダーの一番艦とデスザウラーが相打ちに倒れ、その他の場所でもマッドサンダーとデスザウラーが激突を始めていた。

「レイ先輩！　なのはさんが！」

「分かってる！　おい、なのは！　応答しろ、なのは！」

レイは一番艦の内部で休息を取っていたなのはに連絡を送るが、荷電粒子砲による若干の電波障害が起きて連絡が取りにくくなっていた。その状況が、レイとウィナーの脳裏に最悪の状況を浮かべて焦りを生んでいた。

「…こ…ら…ターズ……」

「！　なのはか！？」

だんだんと通信が繋がり始めて声が聞こえてくると、轟沈したマッドサンダー一番艦の艦尾付近から、怪我も無く飛行するなのはと、フリードリヒに乗るキャロが飛び出してきた。

「なのは！　無事だったか！」

「けっこう危なかったですけど、なんとか無事です。ご心配をおかけしました。」

なのはは心配をかけたと、レイに陳謝する。

「しかし、あの状況でいったいどうしたら無事で済むんだ？」

大佐が尤もな疑問を投げかけ、なのはがそれに答える。

「それが…私とキャロが休んでた部屋が艦尾にあったのと、荷電粒

子砲が通った場所から一番遠い部屋だったみたいなんです。だから、けっこうギリギリでしたけど脱出できました。」
「ツイてたってレベルじゃねぇな…どこの異能生存体だよ？」
「にゃはは…」

説明を聞いたレイが、あまりにも尤もな突っ込みを入れる。

「さてお前ら、これで終わりって訳じゃないぞ？　まだ敵はいるんだし、戦闘も続いてるからな！」
「わかってますって。無駄話はここまでッスよね！」
「なのは、魔力は！？」
「まだいけます！」

大佐の言葉で、レイたちは再び眼前の敵と向き合うのだった。

「デスザウラーとマッドサンダーが激突したか…。なら、これ以上お前らの相手をしてる時間は無い！　さっさと墜ちるこった！」
「それはこちらも同じ事！　貴様のような旧式（ロートル）など、すぐに鉄屑に

してくれる！」

セスリムニル市街上空。早急に決着を着けるべきだと判断したサティ大尉とラルフ少佐は、互いに持てる力の全てを振り絞って操縦桿を握り締める。

『ぐわあっ！』

「どうした、ボーリック！？」

『装甲をやられました！　ストラトス０２、後退します！』

他のブラックレドラーｍｋ－２に部下のボーリックが深手を負わされたらしく、ボーリックのサラマンダーは後退していく。

友軍機のレイノスも、ブラックレドラーｍｋ－２を何機か撃墜もしくは後退させていたが、レイノス自体もそれと同等か僅かに上回る数が撃墜されていた。

「いい加減、墜ちろ！」

ミューラーは早くデスザウラー隊の援護に向かわなくては、と逸る気持ちを抑えきれず、サティ大尉の背後を取ろうとサラマンダーボンヴァーンの斜め後ろ上空から接近する。

「待て、ミューラー！」

「うぉぉぉぉお！」

接近しようとするミューラーに対し、サティ大尉はサラマンダーボンヴァーンの機首を一気に引き上げ、空気抵抗を機体の腹部で受けて急減速する。

「何ッ！？」

ミューラーは急接近するために速度を上げていた為、勢い余ってサラマンダーボンヴァーンを追い抜いてしまう。
サティ大尉は更にその姿勢のまま宙返りに移行して速度を取戻し、先程までとは逆にミューラーの背後を取ることに成功した。

「もらったァ！」

サティ大尉はすぐさまバスターキャノンを放ち、ミューラーのブラックレドラーｍｋ－２に見事命中させる。

「ぐわぁあッ！？」
「ミューラー！」
「くそッ！　…申し訳ありません隊長、後退します！」

ミューラーのブラックレドラーｍｋ－２は機体が中破して戦闘不能に陥り、黒煙を上げながら後退していく。

「ヘッ、古参（オッサン）を舐めんなよ？」
「おのれェ…！　覚悟しろ、サラマンダーのパイロット！」
「…ゴゴ・サティだ。」
「…何？」

ラルフはサティ大尉の言葉を聞き返す。

「俺の名前だよ。ヘリック共和国首都防衛第三航空隊隊長、ゴゴ・サティ大尉ってんだ。」
「…そうか、ならば私も名乗ろう。…帝都守備隊所属航空隊『アイゼンベック隊』隊長、ラルフ・ドライバウム少佐だ。」

サティ大尉が自身の姓名を名乗ったのを聞き、ラルフも礼儀を重んじて名乗りを返す。

（言葉による戦術かと思ったが…どうやら、本当に名乗っただけらしいな…）

ラルフはサティ大尉がこのタイミングで名乗りを上げたのを、どうでもいいような会話で隙を作る戦術かと思って警戒したが、取り越し苦労だとわかると改めて意識を真剣勝負に戻す。

「さあて、行くぜラルフ！」
「臨むところだッ！」

サラマンダーボンヴァーンとブラックレドラーｍｋ－２は互いに弧を描いて距離を保ちながら飛行する。
そこからほぼ同時のタイミングで互いに急旋回し、向かい合って直進する。

「「うぉぉぉおッ！」」

気合の込められた雄叫びと共に、ラルフは機体をロールさせながら両翼の小口径ガトリングガンを、サティ大尉は腹部のバルカンファランクスやレーザー機銃を掃射しながら距離を縮めていき、数秒後にすれ違って再び距離が広がる。

「ちっ、損傷が酷くなってきやがった！」
「ぬうっ…ガトリングをやられたかッ…！」

その巨体ゆえにサラマンダーボンヴァーンはガトリングガンの弾を浴び、主翼にも多少のダメージを受けたが、まだ戦闘不能には陥

らない。
　ブラックレドラーｍｋ－２もレーザー機銃によってガトリングガンを破壊され、攻撃の手段を数パターン失った。
　お互いに受けたダメージによって、機体速度は低下していた。つまり、次の一撃を避け切れる可能性が低くなるため、それが決着を付ける事になる。

（次の一撃が…）
（決め手になるッ！）

　サティ大尉とラルフはそれを理解しており、最後の一撃を当てるために意識を集中させる。
　互いに機体を反転させて再び向かい合い、相手を確実に仕留められる距離に到達するまで神経を研ぎ澄ます。

『ＳＨＯＯＴ』
「今だ、食らえ！」

　サラマンダーボンヴァーンを射程圏内に捉え、ロックオンが完了した事を伝える表示が画面に表れた瞬間、ラルフは搭載しているミサイルの殆どを一斉に発射した。
　ミサイル群はサラマンダーボンヴァーンに向けて広範囲に展開されるが、サティ大尉は対抗しての攻撃はおろか、迎撃しようとすらしていない。ただ、迫り来るミサイル群に向かって飛行を続けていた。

「馬鹿な、死ぬ気か！？」

　正面からミサイル群に向かっている以上、一番近いコックピットに真っ先に被弾、直撃を受けるだろう。そうなれば、パイロットで

あるサティ大尉の人生は間違い無く終わる。

（まだだ、もっと引き付けて…）

展開されているミサイル群が、サラマンダーボンヴァーンの巨体を打ち砕かんと一斉に集束した、その時だった。

「…今だ！　バスターキャノン、最大出力！　ファイアアアア！」

沈黙を決め込んでいたサティ大尉は、サラマンダーボンヴァーンのバスターキャノンをフルパワーで発射、通常よりも更に極太の光によって目の前のミサイル群を一瞬にして破壊した。

「何だと！？　くそっ！」

極太の砲撃はミサイル群を撃墜しただけに留まらず、そのままラルフ目掛けて一直線に襲い掛かる。

ラルフは驚きながらも緊急回避を試み、なんとか回避に成功した。だが、無理矢理な回避行動を取った為に機体の姿勢が崩れ、明確な隙をさらけ出してしまう。

「いかん、制御が！」

「隙ありィ！」

サティ大尉がブラックレドラーｍｋ－２を撃墜すべく空対空ミサイルを発射しようとした、その時だった。

『戦闘区域内の全軍に告ぐ！　直ちに戦闘行動を中止せよ！』

「！？　な、何だァ！？」

オープン回線で、突如としてコックピット内に響き渡った声にサティ大尉は戸惑い、ミサイルを発射し損ねてブラックレドラーｍｋ－２の横を通り過ぎてしまった。
ラルフも、何者かによる突然の停戦勧告に驚きを隠せなかったが、更にもう一つ、その声に聞き覚えがあったのだ。

「この声……まさか！？」
『私はガイロス帝国軍中佐、カール・Ｌ・シュバルツである！』

時間を少し戻そう。停戦を呼び掛ける通信の数分前、フェイトは持ち前の機動力を活かしてマッドサンダー四番艦と六番艦を同時に援護しており、それが数時間は続いていたのだった。

『ライトニング０１、連続戦闘時間が長くなっています！　大丈夫ですか！？』
「こちら…ライトニング０１。…大丈夫、まだ、行けます！」

六番艦からフェイトの体力を気遣う通信が送られてきたが、フェイトは大丈夫だと返答する。
だが、フェイトの額には大量の汗が滲み出、肩で息をし始めていた。どう甘く見積もっても、疲れが出ていないとは言い難い。

（…残りの戦力的に、艦隊全体に部隊を敷けない以上、小回りの利く私が頑張らなくちゃ…！）

帝都守備隊とデスザウラーの決死の猛攻により、艦隊を守る分の戦力もかなりの数が消耗しており、その状況がフェイトの頑張り屋な性格に拍車を掛けていた。

『…！　あれは管理局の！　後顧の憂いは絶たせてもらうぞ！』

マッドサンダー四番艦と格闘戦に持ち込んでいたデスザウラーのパイロットがフェイトの存在に気付き、マッドサンダーを振り払ってフェイトに照準を合わせ直す。

『…！　デスザウラー、本艦へのロックオンを解除しました！』
「何！？」

四番艦の艦長以下クルーは、デスザウラーが攻撃を中止した事に驚き、疑問符を浮かべる。だが、その疑問もすぐに取り払われた。

『Ｗａｒｎｉｎｇ！』
「！？　デスザウラーがこっちを狙って…！？」

バルディッシュは主であるフェイトが狙われている事に気付き、すぐに警告する。だが、体力と集中力を消耗しているフェイトは反応が遅れてしまう。

「ライトニング０１、デスザウラーにロックオンされているようです！」
「帝国にとって脅威となる、ハラオウン執務官を潰しに掛かったか…！　主砲及び副砲、一斉射撃！　ライトニング０１を援護せよ！」

四番艦と六番艦は急いで主砲と副砲をデスザウラーに向けて砲撃ようとするが、デスザウラーの豪腕がフェイトに襲い掛かる方が早かった。

「駄目です、間に合いません！」

「くそおッ！」

援護が間に合わず艦長も諦めかけた、その時だった

『Ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ』

デスザウラーの腕が振り下ろされ、パイロットはフェイトを叩き潰したと確信する。しかし、それは間違いだった。レーダーにフェイトの反応はまだ残っており、それどころか反応が一つ増えていた。

「大丈夫ですか、フェイトさん？」

避けきれない、と思っていたフェイトは、自分が無事だという事と体が誰かに抱きかかえられているのに気付き、顔を上げて声の主を確かめる。

「エ…エリオ！？」

「はい。…良かった、大丈夫みたいですね。」

フェイトは自分を助けて抱きかかえているのがエリオだと判ると、驚きを露わにした。そんなフェイトに対し、エリオはフェイトが無事で良かったと安堵の表情を浮かべる。

「何で…エリオが私を抱きかかえて、ここに居るの！？」

「先程目が覚めまして…すいません、ご心配をおかけしたみたいで…」

エリオは申し訳なさそうな表情で、フェイトに謝る。

「…ううん、良いんだよ。無事ならそれで…！」

申し訳なさそうなエリオの表情を見て、フェイトの緊張の糸が切れたのか、涙を浮かべながらエリオの背中に手を回して抱き返した。

「ちょ、フェイトさん！？」

「ゴメン、エリオ、エリオが無事なのが嬉しくて…」

フェイトはエリオを誰よりも心配し、出来る事ならエリオに付きっきりで看病をしていたい、という気持ちを抑えて戦っていた。その苦しさは、相当なものだっただろう。だが、エリオが無事に意識を取り戻したと知ったフェイトはその苦しみから解放され、感情がどっと溢れてきたのだろう。

エリオはなんとなくだが、その気持ちを汲み取って察していた。

「…お疲れ様です、フェイトさん。」

エリオはフェイトに労いの言葉を掛け、そっと頭を撫でた。

「…こちらライトニング０３、ライトニング０１が戦闘不能状態に陥ったため、共に後退します。」

『了解。』

エリオは司令部に後退の旨を伝えると、ソニックムーブを使用しようとする。

『戦闘区域内の全軍に告ぐ！　直ちに戦闘行動を中止せよ！』
（シュバルツ中佐、間に合ったみたいですね。）
辺りに響き渡るシュバルツ中佐の勧告を聞きながら、エリオはフェイトと共にソニックムーブで瞬時に後退、その場を離れたのだった。

『シ、シュバルツ中佐だって！？』
『馬鹿な！　中佐は憎きハルトリーゲル大尉に暗殺された筈だ！』
『共和国が我らを混乱させるために用意した、偽物ではないのか！？』
『だが、この声は間違いなくシュバルツ中佐のものだ！』

シュバルツはキルシェの裏切りによって死亡したという発表を受けていた帝国軍は、シュバルツの突然の停戦勧告を聞くと大混乱に陥った。

『お、おい、帝国が混乱してるぞ！』

『ああ、今のうちに俺たちも戦果を――』

ハンコック大佐の部隊に所属する事情を良く知らない共和国兵が、今がチャンスだと考えて攻撃を仕掛けようとする。

『聞け！　俺は共和国軍先行隊司令官、ロブ・ハーマンだ！　共和国軍も直ちに攻撃を中止せよ！』

『は、ハーマン少佐！？』

だが、攻撃を行う前にシュバルツ同様オープン回線でのハーマンの通信が入り、騙し討ちにならずに済んだ。

ハーマンの通信の直後、セスリムニル市街にハーマンのケーニッヒウルフとシュバルツのセイバータイガーが全速力で並走して現れ、両軍のちょうど間で停止する。

そして、両機のコックピットハッチが開き、ハーマンとシュバルツが姿を現した。

『シ、シュバルツ中佐！』

『ご無事でしたか！』

「ああ、心配を掛けて済まなかった。」

「ロブ、もう怪我はいいのか？」

「ええ、シュバルツ中佐に比べたら大したことはありません。」

現れたシュバルツを本物だと認識した帝国軍は、まるで戦争に勝ったような喜びようを見せた。

共和国側も、二人が無事に復帰して安堵する。

「中佐！」
「兄さん！」
「大尉、トーマ、心配を掛けたな。」
「いいえ、中佐がご無事ならば！」

キルシェとトーマも、シュバルツの復帰に喜びを顕わにした。

『それより中佐、戦闘を中止しろとはどういうことですか！？』

帝都守備隊の分隊長の一人が、シュバルツに訊ねる。

「ああそうだ、全員聞いてくれ。…この戦争で我々が真に倒す相手はヘリック共和国ではない！」
『なんですって！？』
「おい、どういう事だボーグマン！？」

事態がいま一つ飲み込めないハンコック大佐が、ボーグマン大佐に訊ねる。

「後で説明する！　今は二人の話を聞いてくれ！」
「ちっ、分かった。ゆっくり聞かせてもらうからな！」

ハンコック大佐は戸惑いながらも、シュバルツとハーマンの言葉に耳を傾ける。
シュバルツは通信機を通し、この場の全ての帝国軍にこの戦争の意味を語り始める。

「聞け、両軍の兵士たちよ！　今までの我々の戦争は、全て無意味

なものだったのだ！」
『無意味…ですって！？』

ハーマンも同様に、両軍の全ての兵士に向けて演説を始める。

「この戦争は、ある人物によって仕組まれたものだった！」
『ある…人物！？』
「その人物こそ、ガイロス帝国軍摂政、ギュンター・プロイツェンだ！　奴はこの戦争を起こし、自らの野望を達成せんと企んでいたのだ！」
『な、なんだってーーーーー！？』

シュバルツとハーマンの言葉を聞いた全員が驚愕する。

「そのために奴は共和国軍と帝国軍を激突させ、双方の戦力と国力を疲弊させようと画策した！　…我々が戦いを挑むのは共和国軍ではない！　倒すべきはプロイツェンの方だ！」
「共和国軍の兵士諸君、聞いたな！　我々が銃を向ける相手はガイロス帝国の兵士ではない！　戦いを止め、帝国と同盟を組み、プロイツェンの野望を阻止するんだ！」

シュバルツとハーマンの魂の籠った演説は両軍の全兵士の耳に届き、戦闘の巨大な爪痕が残ったセスリムニル市街に響き渡った。

「…司令部より全機へ。戦闘は終了、被害状況の報告と部隊の再編成を急げ。」
「司令！？」
「シュバルツ中佐が嘘を吐いているとは思えん。…我らは帝都守備隊、帝都に住む人々と皇帝陛下を守るのが我らの務めだ！　ならば、こんな所でグズグズしている暇など無いわ！」

「は、はっ！　全隊、報告と補給を急げ！」

帝都守備隊は、速やかに兵を引き揚げさせていく。

「こちらも兵を引き揚げさせろ。全機の搭載が終了次第、帝国軍と合流する。」

『了解！』

ハンコック大佐も、帝都守備隊と同様に兵を引き揚げさせ、ここにセスリムニル市街戦及びヘリック共和国とガイロス帝国による戦争が終結したのだった。

～おまけ～

ラルフ
「サティ大尉。貴官の隊のコールサイン、ストラトスと言ったか。」

サティ大尉
「ん？　ああ、それがどうかしたか？」

ラルフ
「…いや、いい名前だと思ったのでな。」

サティ大尉
「そ、そうか…」

第七十三話　セスリムニル市街戦（後編）（後書き）

ラルフの苗字は設定されていませんでしたが、苗字が無いと何かと不便なので、ラルフの中の人の苗字をドイツ語に変換して設定しました。

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第七十四話　ゼネバスの系譜（前書き）

大学で学んだ事とかを活かして、某２５２５な動画サイトに動画を上げる計画を練っております。

第七十四話　ゼネバスの系譜

セスリムニル市の南部の平野に位置する、帝都守備隊基地。そこは物々しい雰囲気に包まれ、空気が張り詰めていた。

（くっ…まだですか中佐！）

（もう保ちませんよ、シュバルツ中佐！）

この基地の指令室で、ツェルカンプゥ少佐とその部下数名が額に汗を浮かべながら呟く。

『ツェルカンプゥ少佐！　無駄な抵抗を止め、直ちに投降せよ！』

指令室の外からは、拡声器を使った帝国兵の説得が聞こえる。

今の状況を簡単に解説すると、ツェルカンプゥ少佐がこの基地の司令官であるカスティーヨ中佐を縛り上げ、側頭部に拳銃を突きつけて部下数名と共に指令室に立て籠もり、セスリムニル市街へ向かった共和国軍への追撃中止を要求しているのだ。

最初は普通に事情を説明して説得しようとしたのだが、カスティーヨ中佐がなかなかの石頭でまるで聞く耳を持たないので、このような強行策を取らざるを得なかったのだ。

「…少佐！　どうやら、強行突入に出るようです！」

「くっ…！　間に合わなかったか！」

部下の一人が、自身のライトニングサイクスのメインカメラから送られて来る外の様子を確認し、突入部隊による強行突入に打って出ようとしている事を報告する。

それを聞いたツェルカンプゥ少佐は、これ以上の時間稼ぎが不可

能と判断し、落胆の表情を浮かべる。
だが、ここへ来て事態が動いた。
「…？　突入、して来ませんね？」

しばらくしても突入して来ないのを不審に思い、外の映像を確認する。すると、どうやら別の何かが起きたらしく慌ただしい雰囲気になっていた。

セスリムニル市街北部。そこには共和国軍と帝国軍の艦が並んで停泊しており、今までではあまり想像も出来なかったような光景が広がっていた。

『…ツェルカンプゥ少佐、カスティーヨ指令、報告します！　たった今、セスリムニル市街にてシュバルツ中佐の生存が確認され、戦闘が中止されました！』
「な、何だと！？　どういう事だ！」
『詳しい事はこちらで説明します！　ツェルカンプゥ少佐、カスティーヨ指令を連れておいで下さい！　貴方の証言を信用すると同時に、この行為はおそらくは罪に問われないでしょう！』

この基地の副指令が、ツェルカンプゥ少佐の言葉を信じ、立て籠もりも軍法会議には掛けないと宣言した。

「よ、良かったですね少佐…」
「ああ…まったく、寿命が縮んだぞ。」

時間を稼ぐ事に成功し、シュバルツも目覚めた上に自分達の命も保証され、ツェルカンプゥ少佐達はホッと一息つくのだった。

「くそッ！　俺達はプロイツェンの手の上で、まんまと踊らされていたのか！」
「この戦争で散っていった同胞達の命が皇帝陛下の為ではなく、プロイツェンの為に捧げられていたとはッ…！」
あちらこちらで、帝国兵達の悲痛と怒りの声が上がっている。自分達が信じるもの、皇帝ルドルフの為に戦っていた筈が、実は全てプロイツェンの手助けになっていたのだ。誇り高き帝国軍人なら、怒りがこみ上げていてもおかしくはない。
「シュバルツ中佐、報告します。ツェルカンプゥ少佐がご到着なさいました。」
「そうか、すぐに行く。」
そんな中、キルシェがシュバルツの下にツェルカンプゥ少佐が合流したと知らせ、シュバルツは直ちにキルシェとトーマと共に、ツェルカンプゥのいるテントへ向かう。
数分歩くと、ツェルカンプゥのいるテントに到着した。
「ツェルカンプゥ少佐、ご苦労だった。」
「中佐、ご無事でなによりです。お怪我の方は、もうよろしいので？」
「…私は、プロイツェンが何かを企んでいる事に気付きながらそれ

を黙認し、事態をここまで悪化させてしまった…。そう思うと、歯痒さで痛みなど忘れてしまうよ。」

「中佐……」

シュバルツとツェルカンプゥは互いに敬礼すると同時に、シュバルツはツェルカンプゥを労い、ツェルカンプゥはシュバルツが健在で安心した。

だが、その後のシュバルツが発した言葉からは、悔しさと苛立ちが感じ取れた。

「…それはそうと、ハルトリーゲル大尉、現在の状況は?」

ツェルカンプゥはシュバルツの悔しさを察し、

「…セスリムニル市街戦によって、共和国と帝国の双方が戦力の大部分を失ってしまいました。先程、共和国と帝国の両軍の間に、仮にですが停戦条約を締結して同盟を結びました。…現在は急ピッチで修理と補給をおこなっており、それらが終わり次第帝都ヴァルハラに向かう予定であります。」

キルシェは現在までの出来事と、これからの予定を説明する。

「皇帝陛下は、同盟の事をご存知なのか?」

「いえ、まだ報告はしておりません。…と言うより、ヴァルハラ城との通信が繋がらないのです。」

「何故だ?」

「何らかの電波障害だと思われますが…恐らくはプロイツェンが手を回したのでしょう。」

「なるほど…プロイツェンめ、どこまでも抜け目の無い…」

ツェルカンプゥはプロイツェンの優秀な頭脳に改めて感服する。尤も、それ位の頭脳が無ければ、一国の摂政など務まらないだろう。

「…我々が帝都に向かおうとしているのは、奴も感付いているだろう。閣下の御身も心配だ、早急に準備を整えねば――」

「シュバルツ中佐！」

シュバルツが台詞を言い終わる前に、慌てた様子でフェイトが駆け寄って来る。

「ハラオウン執務官、どうされました？」

「ハァ、ハァ…すぐにブリーフィングルームに集合してください！プロイツェンが！」

「何ッ！？」

プロイツェンの名が出た瞬間、シュバルツの表情が険しいものとなり、急いでブリーフィングルームに駆けて行った。

「中佐、こちらです！」

ブリーフィングルームに到着すると、ハーマン少佐が入り口でシュバルツを待っていた。

「何事です！？」

「プロイツェンが、これから全世界に向けて声明を発表するらしいのです！」

「なんですって！？」

ブリーフィングルームの大型モニターの前には既に数百人規模で人だかりができており、前列の方に佐官クラスや隊長クラスの人物が並んでいる。

「おっ、シュバルツ中佐が来たぞ。皆、道を開けてくれ。」

最前列のボーグマン大佐がシュバルツに気付き、声を掛けて周りの兵士達に道を開けさせて最前列に招き入れる。

「ありがとう、ボーグマン大佐。」

「なあに、気にするな。…そら、いよいよ始まるらしいぞ。」

モニターにプロイツェンの姿が映し出され、モニターの前の全員が注目する。

『…この中継をご覧の諸君、我が名はムーロア。…ギュンター・プロイツェン・ムーロアである。』

「な…！」

「ムーロア…だと…！？」

プロイツェンが口にしたムーロアという名前に、共和国兵と帝国兵の両方がざわめきだす。

『…旧ゼネバスの民の血を引く者たちよ、諸君らはゼネバスの民の血を引いているというだけで、言われもない迫害を受けてきた。土地はガイロス帝国に、ヘリック共和国に奪われ、更には財産や権利さえも奪われた。……だが諸君、もうこれ以上屈辱を味わい、辛酸を舐めさせられる事は無くなるのだ。』

「何…！？」

プロイツェンの表情がより一層引き締まり、それをモニター越しに見るシュバルツ達も固唾を飲んで見つめる。

『…ゼネバスの血を引く諸君、時は来た。今こそゼネバスの旗の下に戦う時だ。…私は今ここにネオゼネバス帝国を建国し、その初代皇帝になる事を宣言する！　諸君、今こそ武器を取り、私と共にヘリックとガイロスを打倒し、長きに渡る屈辱の歴史に終止符を打つのだ！　そして、我らが祖国、中央大陸へと帰ろうではないか！』

プロイツェンの演説は終了したが、ブリーフィングルーム内のざ

わめきは収まる気配がない。

「プロイツェンが、ムーロアの一族の生き残りだと!?」「馬鹿な！　ムーロアの一族は断絶したのではなかったのか!?」「…そうとも言い切れねぇぜ。もしかしたら、ムーロアの一族に仕えてたメイドか皇族の妾が――」

プロイツェンの演説を聞いた両軍の兵士達は、まだ半信半疑といった様子だった。

「ムーロア、か…。まさか、プロイツェンにそんな秘密があったとはな…」

「…お恥ずかしい限りですが、私も初耳でした。」

ボーグマン大佐や、帝国軍では高い位置にいるシュバルツでさえも、その衝撃すぎる事実に驚きを隠せない。

「…大佐、ムーロアっていうのは?」

共和国軍と帝国軍が騒然とする中、はやてが惑星Ｚ･ｉの多くを知らない六課を代表して訊ねる。

「そうか、はやて達は知らなかったな。…ムーロアってのは、かつて存在していた国家、ゼネバス帝国の皇族が名乗ってた苗字だ。」

「じゃあ、プロイツェンがムーロアを名乗ってネオゼネバス帝国なんて宣言したのは…」

「…奴が実はゼネバス皇帝の血を引いていて、奴の野望ってのがコレなんだろうよ。」

「今は亡きゼネバス帝国の復活は間違いない…。更にそれを足がかりとして、中央大陸をはじめとする惑星Ｚ･ｉ全土の掌握も十分考え

られます。」

ボーグマン大佐の返答に、シュバルツがその後に起こり得る出来事も付け足す。

「チッ…敵も味方も長いこと欺いて、ご大層な野望をこの時まで温め続けたってのか。…鉄の意志ってのはこの事だな。」

頭を掻きながら一本取られたと言いたげな様子で、ハンコック大佐が歩いてくる。

「こいつぁ尚更、急がなきゃアならんな。お前ら、さっさと補給を済ませてプロイツェンに殴り込みを仕掛けるぞ！」

「全員聞け！　我等誇り高き帝都守備隊をコケにしたプロイツェンを、絶対に許す訳にはいかん！　必ずや、奴の首を取るのだ！」

『『サー、イエッサー！！』』

共和国進攻隊司令官のハンコック大佐と、帝都守備隊司令官のカスティーヨ中佐が兵を鼓舞し、共和国と帝国の両軍に気合いが入った。

「ほな、私らの任務は帝国に居ると思しきスカリエッティ一味の逮捕や！　皆、気張っていくでぇ！」

『はい！』「え…？　あ、はい！」

はやても六課メンバーを鼓舞するが、一人だけ返事が微妙におかしいのに気付く。

「…なんやスバル。一瞬、返事が詰まらんかったか？」

「え！？　い、いえ、そんな事は…」

「…アンタ、まさかスカリエッティ一味の事忘れてたんじゃないでしょうね？」
「ま、まさか！　部隊長が言うまでうっかり忘れてたなんて、そんな事ないよ！？　…あ。」
スバルははやてとティアナの追及に慌て、つい口を滑らせる。
「はぁ…スバル、アンタって娘は…」
ティアナは訓練校からの付き合いとは言え、スバルの性格に改めて呆れ果てる。
「す、すみません部隊長…」
「ははは…。ま、しゃあないやろ。ここんとこ、スカリエッティの描写なんてさっぱりやったからなぁ、この二次クロス小説。」
「メメタァ…。」
なのははその一連のやり取りを見て、小さく呟くのだった。

共和国と帝国が団結し、機動六課が決意を新たにしている中、噂のスカリエッティ一味は、どこかに停泊しているドラグーンネストのブリッジに居た。

「ブエックション！」

「あらドクター、風邪ですか？」

「…いや、誰かが私の事を噂しているのだろう。有名人はつらいよウーノ。」

「…そうですか。」

大きなくしゃみをするスカリエッティをウーノは風邪を引いたかと心配するが、当のスカリエッティはいつも通り余裕綽々だった。

「それはさておき…私をこの艦の艦長に任命して頂いたヴォルフ殿下に、感謝しないとね。」

スカリエッティは艦長席の後ろに立つヴォルフに、視線を遣りながら言う。

「お前には主に開発面で世話になったからな…これ位は当然だ。」

ヴォルフはこの程度で恩返しにはならないと、やや謙遜した言い方をする。

「それに、お前にはこれからも世話になるつもりだ。…自動操縦（スリーパー）のＡＩを発展させ、二種類以上のゾイドを合成させて全く新しい個体を生み出す…何といったか？」

「キメラの事かい？　まだ生産には至らないが、完成すれば我が軍

に起きるであろう人員不足は、一発で解消されるだろうね。」

スカリエッティは、自らが主導で開発を進めている計画を自慢気に語る。

「…頼りにしてるぞ、スカリエッティ。」

やる気を出し始めているスカリエッティにそう一言告げると、ヴォルフはブリッジを後にした。

（…いよいよだ。もうすぐ、我等ゼネバスの時代が再びやって来る…！）

赤いランプが点灯する廊下を歩きながら、ヴォルフは自らを叱咤激励するのであった。

舞台は戻って、セスリムニル市街北部の共和国と帝国の合同キャンプ。

「カスティーヨ司令、帝国軍全機、補給完了致しました！」
「ハンコック大佐！　共和国軍全機、補給完了です！」

両軍共に機体の整備、補給が終了し、互いの司令官に報告された。

「…では、カスティーヨ中佐。」
「ええ。…これより、我々共和国・帝国連合軍は全戦力を以て、帝国ヴァルハラに向かう！」
「目標はネオゼネバス帝国皇帝、ギュンター・プロイツェン・ムーロアの逮捕及び、ガイロス帝国皇帝、ルドルフ陛下の救出だ！　各員の奮起に期待する！」
『オォーッ！！』

共和国軍指揮官を務めるハンコック大佐と、帝国軍指揮官を務めるカスティーヨ中佐が全兵に帝都進軍の号令を掛け、兵士達は気合を込め直して発奮する。
そしてすぐに、パイロット達は自身の愛機の元へと駆け出していった。
それぞれが艦やグスタフのトレーラーに積まれた機体に乗り込みながら、パイロットたちがリラックスする意味も込めて雑談を始める。

「これが最後だ。気合入れてくぞ、フィーネ、ジーク、シーザー！」
「うん！」
『キュイ！』

バンやフィーネ、それにジークが、これがおそらく最後の戦いになるだろう、と気合を込める。

「チッ、何がネオゼネバス初代皇帝だ！　反乱軍の大将ごときが、

大層な肩書き名乗りやがって！」

プロイツェンのやり方に、ウィナーは怒りを顕わにする。

「そう言うなウィナー。…ゼネバスの皇族の血を引く者として、失われた祖国を再興する…。それが、ヤツの抗えない宿命なんだろう。」

「…その宿命ってのをを達成するためには、関係ない人たちが戦争で死んでいってもしょうがないっていうんスか！？」

プロイツェンという人間の気持ちを汲み取り、レイはウィナーを諫めるが、ウィナーはプロイツェンのやり方は間違っていると反論する。

「ヤツのやり方を肯定する気はねぇよ。…けどよ、ヤツがヤツの宿命をもって戦いを起こすなら、俺たちは俺たちの正義をもって、ネオゼネバスと戦おうじゃねぇか。」

「俺たちの、正義を…」

ウィナーはレイの言葉に、顕わにしていた怒りをやや抑え、落ち着きを取り戻す。

「…どうも、簡単に答えなんか出なさそうね。」

レイとウィナーの会話を聞いていたムンベイが、ポツリと呟く。

「…互いに譲れないモンがあって、正義があるんだ。戦争に正しい答えなんか、ハナッからありゃしねぇよ。」

ムンベイの呟きに、アーバインがそう返す。

「アーバイン、そう言うアンタはどうなのさ？」
「そうだな…。今まで俺が戦ってきたのは金のためだったが……プロイツェンの野郎を野放しにしておけば、戦闘行為が行われるエリアは拡大する。そうなれば、ポルトの町にも戦火が広がりかねねぇ。…俺は俺が生き残るためにも、俺の故郷をぶっ壊させねぇためにも、ヤツを叩き潰す。…それが一応、俺の正義だ。」

アーバインは自分が生まれ育った町を、自分の命を守るために戦う、と決意を新たにする。

「格好つけちゃって、ホントはレベッカのためでしょ？　お金のためだって、レベッカのいる孤児院にほとんど送ってるくせに。」
「な…！　なんでそれを…（ゲフンゲフン）う、うるせぇ！」

ムンベイの指摘にアーバインは顔を赤くし、大きな声を上げて誤魔化そうとするが、ムンベイはクスクスと笑みを零す。さすがはムンベイ、アーバインとは長い付き合いなだけはある。

「…ま、アンタの後ろを守るぐらいはしてあげるわよ。」
「…ヘッ、間違えて俺に当てるんじゃねぇぞ？」

アーバインとムンベイは互いに笑顔を浮かべた。

「…向こうはああ言ってるが、タクマ、クーイン、お前たちはどうだ？」

アーバイン達の会話を聞いていたイスルギ少佐達も、タクマやサヤカに話題を振り、雑談を始める。

「勿論、イスルギ少佐の後ろは俺が守ります！」
「なーに言ってんの。アンタは後ろを守られる側でしょうが。」
「クーイン少尉、せっかく気合入れてるんですから、水を差さないで下さいよ！」
「そう怒るなタクマ、お前の気持ちだけで十分だ。お前の背中は私が守ってやる。」
「そんなぁ、イスルギ少佐までー！」

同年代と年上の女性に弄られて軽く凹むタクマ。一見したら爆発しろと言われそうな状況だが、タクマにしてみたらまったく嬉しくない状況だった。

「……」
「…？　シュバルツ中佐、どうかなさいましたか？」
「…いや、なんでもない。それより、大尉、トーマ、なんとしてでも陛下をお助けするぞ！」
「…ハッ！」
「了解です！」
（何だ…？　何か、嫌な予感がする…）

シュバルツは何か胸騒ぎを感じていたが、確証も何も無しに余計なことを言って混乱させてはまずいと思い、自分の心の内に留めておくことにした。

「目標、ガイロス帝国首都ヴァルハラ！　全速前進、ヨーソロー！」

共和国・帝国の連合艦隊はヴァルハラに向けて針路を取り、プロイツェンを討つために動き出すのだった。

帝都ヴァルハラの北部に位置するヴァルハラ城。その城門前には、PK（プロイツェンナイツ）師団の有する数百体以上に上るアイアンコングやハンマーロックの大部隊、加えてそれ以上の数のディマンティスの大群が、道路いっぱいに所狭しと配置されていた。

「フフフ…いかがですルドルフ陛下？　あなたの愛したガイロス帝国が、ゼネバスの生き残りたちで埋め尽くされているご感想は？」

プロイツェンがヴァルハラ城の四階にあるバルコニーに立っている。そこからネオゼネバスの大軍勢を見下ろしながら、部屋の中で装飾が施された中々に豪華な椅子に座るルドルフに問いかけた。

「…そう簡単に、あなたの反乱は成功しません。私には、まだガイロス帝国の勇敢な兵たちが残っています。…あなたの思い通り、事は運びません。」

ルドルフは笑みを浮かべながら話すプロイツェンに対し、毅然とした表情で言い放った。

ヴァルハラのガイロス帝国正規軍は、このタイミングでのプロイツェンの反乱に完全に意表を突かれ、あっと言う間に制圧されて武装解除してしまっていたのだ。

だが、それでもルドルフは諦めていない。自分には、まだ帝都守備隊が、シュバルツ中佐達がいる。彼らは必ずここに戻ってくると、

そう信じているのだ。

「諦めが悪いですな、ルドルフ陛下。今の貴方に何が出来ると言うのです？　私や宰相のホマレフ閣下、そしてガイロスの兵にも頼る事の出来ない、今の貴方に？」

プロイツェンは嘲笑しながら、ルドルフに言い放つ。

ルドルフは幼くして皇帝に即位したため、政治は摂政のプロイツェンと宰相のホマレフの力を借りざるを得ず、ゾイドによる戦闘の経験もまだまだ浅い。

対するプロイツェンはゾイド乗りとしても一流であり、ルドルフにゾイドの扱い方を教えたのもプロイツェンであった。

ルドルフ一人で、いや、たとえシュバルツだとしても、たった一人で今の状況を打開するのはまず不可能だろう。

「…確かに、私一人では政治も戦も満足には出来ないでしょう。…ですが、ただ一つ、ガイロスの誇りを守るために戦う事は出来ます！」

そう言ってルドルフは椅子から立ち上がり、左手の手袋を外すと、それをプロイツェンに向かって投げつけた。

「ギュンター・プロイツェン・ムーロア！　ガイロス帝国皇帝として、貴方に決闘を申込みます！」

「ほぅ…囚われの身であるあなたが、私に戦いを挑みなさるか。それで、私に何のメリットがあると？」

「…損得の問題ではありません。ガイロス皇帝として、ネオゼネバス皇帝に戦いを挑むのです。互いの皇帝としての誇りを賭けた戦いを…！」

ルドルフは毅然とした表情でプロイツェンに向けて堂々と言い放ち、本気で戦うと宣言した。

ガイロス帝国を裏切ったプロイツェンに制裁を加えるためでもなく、自らが逃げずに戦う事でガイロスの誇りを失わないための戦い。それが、ルドルフが考えた末に行き着いた、皇帝としての役目であった。

プロイツェンは、ルドルフの言葉を聞いて考える。皇帝としての誇り。なるほど、理由としては申し分ない。それに、シュバルツ達が集まるのにも、まだ時間が掛かる。ただ待っているのもつまらないだろう、とプロイツェンは考えた。

「…よろしい、謹んでお受けしましょう。…私の部下に、機体を整備させましょうか？」

「いえ、整備は常に出来ていますし、最終調整も自分で出来ます。…以前、整備班の方に教わりましたので。」

やはりプロイツェンの事が信じられないらしく、そう言って誘いを断ると、ルドルフは皇帝専用の機体が置かれている専用の格納庫へと歩いていった。

「皇帝陛下、よろしいのですか？」

扉の前で見張っていた側近が、ルドルフを自由にさせていいのか訊ねる。

「ああまで言ったのだ、まさか逃げる事はないだろう。他の兵達にも、余計な事はするなと伝えておけ。」

「ハッ！」

側近達はすぐに兵士全員に連絡し、ルドルフとその機体には一切

の手出しを禁ずると通達する。

「さて…私も準備を始めるとしようか…」

プロイツェンも部屋を出て、ブラッディデスザウラーがある専用格納庫へと歩き出すのだった。

帝都ヴァルハラから南南西に１５０キロの平野を、共和国・帝国の連合艦隊が進んでいる。

「司令部よりジェミニィへ。ヴァルハラの状況を報告されたし。繰り返す、ヴァルハラの状況を報告されたし。」

ヴァルハラへ先行して強行偵察に出ているプテラス・ジェミニィ隊に、ネオ・タートルシップ内の司令部から状況の報告を求める。

『こちらジェミニィ０１。ヴァルハラ城を中心に、ネオゼネバスのものと思わしき機体が展開されています。ＰＫ師団仕様のアイアンコングが約１２０、ハンマーロックが約１５０。それと、小型の昆虫型が約５００。新型かと思われます。』

（小型の…）

（昆虫型…？）

機体ハンガーで司令部の会話を聞いているヴィータとシグナムを始め、なのはやフェイトを除く機動六課のメンバーはジェミニィ隊の報告した昆虫型ゾイドに心当たりがあるらしく、一瞬眉をひそめる。

『ジェミニィ０２より司令部へ。ヴァルハラ上空からの映像を転送します。』

「了解。映像、モニターに出します。」

オペレーターがコンソールを操作し、ジェミニィ隊から送られてきた映像を大型モニターに映し出す。

画面には、ジェミニィ隊が報告したようにＰＫ師団の戦力によって埋め尽くされている、ガイロス帝国首都ヴァルハラの様子が映し出されている。

「…！　シグナム、あの虫野郎！」

「…ああ。間違い無いようだな。」

ヴィータ達は画面に映し出される昆虫型の機体に驚き、司令部に通信を繋ぐ。

『…こちらライトニング分隊副隊長、シグナム。共和国司令部、応答されたし。』

「どうした、シグナム副隊長？」

突然シグナムから通信が送られ、ハーマンが訊ねる。

『あの小型ゾイドについてですが…』

「知っているのか？」

『はい。ガイロス帝国の二度目の侵攻の際、数十機程が確認されました。』
「そうか、その時の戦闘データはあるか？」
『私のレヴァンティンや、ヴィータのグラーフアイゼンに保存してあります。すぐにそちらに転送します。…レヴァンティン。』
『Ｊａｗｏｉｌ（承知。）』

レヴァンティンとグラーフアイゼンから昆虫型ゾイド一一ディマンティスの戦闘データが司令部に送られる。

「なるほど、高速戦闘に特化した機体か…」
「前足の鎌は要注意ですね。…ですが、あのサイズの高機動型である事とコックピット周りの構造から考えると、耐久性は極めて低いようです。」

メリッサがディマンティスの戦闘データと、ロードレース用のバイクの座席のような前傾姿勢のコックピットやその周囲の構造から、耐久性を捨てて機動力で勝負する『当たらなければどうという事はない』を地で行くような機体であると判断する。
と、司令部でディマンティスを分析していると、シグナムに続いてチンクからも司令部に通信を送られて来た。

『ハーマン少佐、チンクです。…折り入って、お願いしたい事があります。』
「今度はチンクか、何だ？」
『…オットーは以前、あの機体によって深手を負い、ディードも心に傷を負わされました。…私は姉として、妹たちを傷つけたあの昆虫型を、一機でも多く撃破したいのです。どうか、私を奴らの掃討に回して頂けないでしょうか？』

チンクはディマンティスの掃討に、自分を参加させて欲しいと懇願する。
妹たちの仇討ちとは言わないが、それでも妹たちを傷つけた存在を許せない。チンクの妹思いな性格が、前面に押し出ていた。

「…分かった。お前には昆虫型を撃破し、主力部隊がヴァルハラ城へ向かう手助けをしてもらう。…よろしいですね、ハンコック大佐？」
「お前が指揮する部隊の事だ、俺に聞く必要はないだろう。」
「…だそうだ。だが、気負いすぎて無茶はするなよ？」
『了解。…ありがとうございます。』

チンクはハーマンに感謝の意を込めて頭を下げると、通信を終了する。
そしてチンクと入れ替わりに、今度はシュバルツが通信を送ってきた。

『ハーマン少佐、シュバルツ中佐です。…プロイツェンの戦力があれだけとは思えません。恐らく、レドラー等の航空戦力も１００機程はあるでしょう。』
「なるほど、確かに…。シュバルツ中佐、航空戦力の発進地点はどこに？」
『…ヴァルハラ城地下格納庫のハッチなら、城の東と西に――』

シュバルツがモニター越しに地下の格納庫ハッチの場所を教えようとしたその時、ヴァルハラ城の裏手の門が開きだした。

「む、あれですか？」
『…いえ、あれは確か演習場の……ッ！？』

シュバルツは突然開いた門から現れた二機のゾイドに、驚きを隠せなかった。
一機は歴代の皇帝に代々受け継がれてきた、金色に輝くゴールドセイバータイガー。そしてもう一機は、機体色を毒々しい血の色に染めた、ブラッディデスザウラーだった。

『あのセイバータイガーはルドルフ陛下の…！』
「何ですって！？」
「すると、あのデスザウラーはプロイツェンか！」

シュバルツの言葉からデスザウラーのパイロットがプロイツェンであると推測され、司令部内に緊張が走る。

「あとどれ位でヴァルハラに着く！？」
「約２０分後です！」
「そうか。シュバルツ中佐、我々も全速力でヴァルハラに向かっています。今しばらくの辛抱を！」
『…了解。失礼します。』

ハーマンにあまり焦らぬよう諭され、シュバルツは通信を切断した。

「…ハーマン少佐、お前も出撃準備をしておいてくれ。シュバルツ中佐が暴走しそうになったとき、ストッパーを頼む。」
「ハッ！」

ブリッジで前線メンバーの指揮に専念しようと考えていたハーマンだったが、シュバルツが先走った時の抑止力として出撃するため、ケーニッヒウルフの元へと向かうのだった。

～おまけ～

サヤカ
「あたしって、ホントバカ…」

タクマ
「ど、どうしたんですか少尉!?」

サヤカ
「…う～ん、ムニャムニャ…」

タクマ
「……寝言？」

第七十四話　ゼネバスの系譜（後書き）

ご意見ご感想、最後のおまけの是非等、お待ちしております。

第七十五話　誇りと約束（前書き）

気付いたら、長ったらしくなってしまいました。

第七十五話　誇りと約束

ヴァルハラ城の裏手にある、訓練用のバトルフィールドに、二体のゾイドの姿があった。片方は金色に輝く体躯を持つセイバータイガー、そしてもう片方は血で塗られたような真っ赤な巨体のデスザウラー。

互いに向かい合い、鋭い眼光でこれから闘う相手を睨み付けていた。

「久しゅうございますな、ルドルフ陛下と剣を交えるのは…」

「ええ…数年前、貴方が私にゾイドの稽古をつけていただいた時以来でしたか…」

かつて、ルドルフの父――先代皇帝が存命だった頃、今よりも幼かったルドルフに帝王学やゾイドの操縦を教えたのは、プロイツェンその人であった。

ルドルフはプロイツェンの昔話に少し懐かしさを感じるが、胸に秘めた闘志と引き締まった表情は全く揺らがない。

プロイツェンも、この程度の会話で心を掻き乱せるとは思っておらず、幼くも威厳の籠もった声を聞いて何故だか安心した様子だった。

「…ですが、いつまでも昔を懐かしんでいるだけでは駄目なのです。私はガイロス帝国の、その民達の未来を、平和で幸せなものにしたいのです！　…過去にばかり囚われている貴方に、負ける訳にはいきません！」

「フフフ…ご立派になられましたな、ルドルフ陛下。…しかし、いかに覚悟があろうとも…」

ブラッディデスザウラーの背に追加された、ＰＫ師団のアイアンコングが装備しているものを更に強化したバーニアに火が入る。
その直後、ブラッディデスザウラーの巨体が動き、急加速して一気にルドルフのゴールドセイバータイガーに肉薄する。

「なッ…！？」
「…実力の差は、如何ともし難いものッ！」

バーニアの急加速による勢いが乗ったまま、右脚で踏み込むと同時に右腕でストレートを叩き込んだ。

「うわぁぁぁあっ！？」

強靭な腕による鉄拳をまともに受けたゴールドセイバータイガーは宙に浮きあがり、十数メートル後方の地面に叩き付けられた。

「う…ぐッ…！」

ルドルフは横たわるゴールドセイバータイガーをゆっくりと起こし、ダメージのチェックを行うが、意外にも、ダメージは少なくて済んでいるようだった。

「威勢はよかったのですが…やはり私と貴方では、実力に差がありすぎるようですな。」
「くっ…！　まだ、負けた訳ではありません！」
「そうそう…冥土の土産という訳ではありませんが……一つ良い事を教えて差し上げましょう。このブラッディデスザウラーから延びるパイプ、いったい何だと思われますかな？」

プロイツェンは余裕綽々とばかりに、デスザウラーの加重力テイ

ルの付け根から延びている数十本のパイプを示す。

「このパイプは、ヴァルハラ城の地下にある、大量の機獣化されていないデスザウラーのゾイドコアに繋がっている…。それらを一斉に暴走、爆発させれば、どうなるかお分かりですかな？」

「まさか…！　貴方はオリンポス山を死の山と為した惨劇を、ここ（ヴァルハラ）で再現するつもりですか！？」

それはなのは達がこの惑星Ｚｉに迷い込む以前の事。エウロペ大陸の東部に位置するオリンポス山で、かつてデスザウラーの復活実験が行われた。だが、共和国との大規模な戦闘によってデスザウラーの復活は失敗、暴走したデスザウラーのゾイドコアが大爆発を起こし、オリンポス山は頂上付近を中心に焦土と化してしまったのだった。

「それは我が復讐の第一幕…憎きヘリック共和国とガイロス帝国の軍をこのヴァルハラと３０００万の市民ごと灰塵と為し、そして私とＰＫ師団の忠実なる兵達は、ネオゼネバスの未来のために礎となるのですよ。」

「礎ですって！？　…ネオゼネバス初代皇帝の貴方自身が！？」

プロイツェンの恐るべき計画に、ルドルフは驚きを隠せない。

初代皇帝を名乗ったばかりの男が、自らを囮として共和国軍と帝国軍を誘い出すなど、普通では考えられなかった。

「…では、貴方のご子息、ヴォルフ・プロイツェン大佐やドクター・スカリエッティはどこに！？」

「今頃は鉄竜騎兵団（アイゼン・ドラグーン）が旗艦、ドラグーンネストを中心とした艦隊が中央大陸に向かい始める頃でしょう。そして、共和国の首都であるヘリックシティを陥落させ、ゼネバスの民は中央大陸へと帰るので

す。」

「そのために…そのために貴方やＰＫ師団は自ら囮となったと！？」

「何をそう、意外そうに驚くことがありましょう。我が身一つから四十余年、この程度の覚悟無くして、遂げられる望みなどとは思ってはおりませんよ。」

この程度は当たり前だ、とプロイツェンは驕(おご)る事無く言い放つ。

「……正直、私はあなたの事が好きではありませんでした。私が今より幼い頃から後ろ盾として私の一番近くに居ながら、私に一度も心を見せてはくれなかったあなたを…」

ルドルフはプロイツェンに自らの思いを語り始める。

「…ですが、同時に尊敬もしていました。私に人を導く者としての在り方を示してくれたのは、あなただけでしたから…」

「……」

プロイツェンはルドルフの言葉を、黙って聞く。

「でも、あなたがゼネバスの民と兵のために示された生き様のように、私はガイロスの民と兵を守ってみせます！」

『ガオオオオオオン！』

そう言うと、ルドルフの瞳に炎が灯ったかのように輝き、ゴールドセイバータイガーの瞳も輝きを放ちだし、高らかに雄叫びを上げるのだった。

帝都ヴァルハラ南部、関所。城壁に囲まれたこの町と外とを繋ぐ、唯一の門である。

「砲撃部隊、撃てェ！」

共和国と帝国の両軍による一斉砲撃で、関所の門は蜂の巣となり、破壊される。

そこから両軍の主力部隊が、なだれ込む様に帝都に突入していく。

「クレイジー01より各機へ。俺たちはシュヴァリエ隊やケーニッヒ隊、それとライトニング分隊と共にメインストリートを一直線に進み、ヴァルハラ城までの最短距離を突撃する！　お前ら、ぬかるなよ！」

「「「了解！」」」

ボーグマン大佐やレイ、ウィナーにバンの所属するクレイジー隊、シュバルツやキルシェの居るシュヴァリエ隊、ハーマンが隊長を務めるケーニッヒ隊、それにデスザウラーのみで編成されたデスザウラー隊やライトニング分隊は、ヴァルハラ城までの最短ルートを選択する。

スターズ分隊やロングアーチ、ツェルカンプゥ少佐のサンダーボルト隊、アーバインやバディター達の居る後方支援部隊は、それをアシストすると同時に主力部隊に追随して前進していく作戦を選択した。

「それにしても、まさかこんな事になるなんてな…」

レイは呟く。この大陸に来る前は、戦争中とは言え、自分が殺してしまったヴォルフの恋人であるアンナの亡骸をヴォルフの元に返し、この暗黒大陸の大地に手厚く葬らせようと思っていた。

だが、プロイツェンによるネオゼネバス帝国の建国宣言と共に、ヴォルフもまた、プロイツェンと同じく捕らえる対象となってしまった。

「…俺は一体、どうすりゃいいんだ？　アンナさんよぉ……」

ホバーカーゴに収められている、防腐加工が施されて今でも原型を留めているアンナに、答えが返って来ないのが分かっているが問い掛ける。

「レイ！　何を呆けてる、正面から来るぞ！」

「ッ！」

この先一体どうすればいいのか、レイは迷うが、今は戦闘中。ＰＫ師団のアイアンコングやハンマーロックが突撃し、迷い、考えるレイの思考を妨害する。

「…仕方ねぇ、今は皇帝を救出するのが先だ！」

レイは自分が今成すべき事を見つめ直し、無理やりにでも気持ちを切り替え、接近してくるＰＫ師団に向けてハイブリッドキャノンを連射する。

レイのライガーゼロパンツァーの砲撃はアイアンコングに直撃していくものの、ＰＫ師団は怯む事無く突撃を続ける。

「ライガーゼロ、下がっていろ！　反乱軍など、デスザウラーで叩き潰してやる！」

威勢の良いデスザウラーのパイロットが、レイのライガーゼロパンツァーを押し退けて前に出ていく。

「お、おい！」

「心配するなライガー乗り。デスザウラーの力ならば、アイアンコングが何体居ようと関係ない！」

レイは単独で前に出るデスザウラーのパイロットを心配するが、機体の性能を信じきっているらしく息巻いている。

それにつられたのか、他のデスザウラーも何機かが前に出て行く。

だが、デスザウラーが前に出た途端、ＰＫ師団の機体の動きが変わった。今まで道路全体に広がって突撃を仕掛けていたが、全体的にデスザウラーに集中したかのような突撃を仕掛けてきたのだ。

「はぁぁぁあッ！」

デスザウラーのパイロットはそれを知ってか知らずか、とにかく一番前のアイアンコングを、アイアンコングにも劣らぬその豪腕でコックピット付近を殴りつけた。

デスザウラーの拳を受けたアイアンコングは、頭部コックピットを破損して倒れ込むが、怯まず更に突撃を仕掛けてくるアイアンコングやハンマーロックの大部隊が、なおもデスザウラー達に襲い掛かる。

「ぐわぁぁあッ！？」

デスザウラーの巨体にアイアンコングが体当たりし、更に続けてアイアンコングがデスザウラー一機につき二、三機が体当たりを仕掛けてきた。
更にデスザウラーに激突した状態から、その強靭な両腕から来る腕力を活かし、数体掛かりでデスザウラーに抱き付くかのようにして拘束する。

「こ…こいつらッ！？」
「クソッ、離れろ！」

デスザウラーのパイロット達は振り払おうとするが、アイアンコング達も離すまいと必死でしがみつく。

「チッ、威勢の良かった割にはこれか…各機、デスザウラーを援護しろ！」
「駄目です、この位置ではデスザウラーに当たります！」

ボーグマン大佐が、デスザウラーにしがみつくアイアンコングを引き剥がすべく援護の指示を出すが、当のデスザウラーが邪魔でアイアンコングが狙いにくく、迂闊に攻撃が出来ない。
そうこうしている内に、アイアンコングの腕がデスザウラーの首に届いた。

「…ネオゼネバス帝国に、栄光あれぇぇぇぇえ！」

アイアンコングのパイロットがそう叫んだ瞬間、デスザウラーにしがみついていたアイアンコング達が一斉に自爆し、自らを犠牲にデスザウラーを爆発に巻き込んで破壊したのだ。

「な…！」

「自爆しただと！？」

これにはバンやレイも驚いた。いくらネオゼネバス帝国初代皇帝のプロイツェンを守る為だとはいえ、特攻紛いの戦術を執って来るとは思いもしていなかった。

この行為によって、レイ達の前に出ていたデスザウラーは全機が破壊された。アイアンコングが自爆した際の破壊力からして、どうやら最初から自爆する為の爆弾を積んでいたらしい。

そして連合軍が困惑する中、他のＰＫ師団のアイアンコング達が肩のビームキャノンで攻撃を開始する。

「っと！」

ボーグマン大佐とバンは素早く先頭に陣取り、ブレードライガーとシーザーのシールドを同時に展開して後方の部隊を守る。

「どうやら、自爆するのはデスザウラーが相手の時だけらしいな。」
「そのようですね。カスティーヨ中佐！」
「了解した！　デスザウラーは前に出るなよ、ＰＫ師団と心中したくないならな！」

デスザウラーを後方支援に回し、アイアンコングが特攻してくるのを回避する策を打つ。

帝都は守らねばならないし、なにより射線上にヴァルハラ城があるために荷電粒子砲は撃てないが、それでも装備された銃火器類の武装でＰＫ師団を牽制する。

「ハンコック大佐、ヴァルハラ城格納庫ハッチ、開きます！」

ヴァルハラ城の格納庫ハッチが開いていき、中から大量のレドラ

ーＢＣが飛び立っていく。

「多いな…航空戦力は、速やかに迎撃に当たれ！」

「了解。ストーム０１より各機へ、レドラーを迎撃せよ！」

「ボーリック、キャリオン、しくじるなよ！」

「アイゼンベック０１より各機へ。目標を狙い撃つぞ！」

マミの所属するストーム隊、サティ大尉のストラトス隊、ラルフのアイゼンベック隊が、レイノスやプテラスの混成大隊の前に陣取り、出現したレドラーＢＣの迎撃の先陣を切る。

「ハーマン少佐、上は俺らに任せてください…よッ！」

サティ大尉は地上のハーマンに向けて言いながら、正面のレドラーＢＣにバスターキャノンを放ち、撃破する。

「了解した！　各機、上空は気にするな！　正面をこじ開けろ！」

上空の敵機はサティ大尉やラルフ達に任せ、ボーグマン大佐にレイやバン達は正面の一点突破を目指し、それぞれ攻撃を続ける。

「くそっ、キリがない！　こうなったら、アイツらの上を飛び越えて…」

「駄目よバン！　シーザーだけじゃ、アイアンコングの的になるだけよ！」

痺れを切らし始めたバンが、シーザーの翼を使ってＰＫ師団の頭上を飛び越えようとするが、航空支援を受け難い今の状況での飛行は危険すぎる、とフィーネが反対する。

「じゃあ、どうするって言うんだ！」
「バン、落ち着いて。今は少しずつでも、この大群を倒してボーグマン大佐達と行った方がいいわ。」
「くっ…！　急がなきゃならないのにッ！」
バンは納得できないと思いつつも、フィーネの言葉を聞き入れて自らを諫めた。
「トライデント、スマッシャー！！」
「駆けろ、隼！　シュツルム・ファルケン！」
フェイトは右の掌からトライデントスマッシャーを放ち、シグナムはレヴァンティンを弓形のボーゲンフォルムに変形させ、フェイトとほぼ同時にシュツルムファルケンを放つ。　それらの砲撃はＰＫ師団の群れに着弾し、アイアンコングを撃破していく。
だが、それでもなおＰＫ師団の勢いは止まる気配を見せない。
「まったく…奴らの戦力と気力は底無しか？　私だけでも、この戦いで２３機程は倒したのだが…」
「…私達が戦っていた二ヶ月位の間に、かなりの数がＰＫ師団に配備されていたみたいです。」
フェイトやシグナムもバンと同じく、いくら倒してもキリがないと愚痴をこぼす。
「…！　危ない、シグナム！」
「…ネオゼネバス帝国の未来のために、貴様らも礎となれェ！」
「ッ！？」
フェイトは撃破されたアイアンコングのコックピットから、対戦

車用のロケットランチャーを担いだ老兵が現れたのに気付き、シグナムに警告する。
老兵はシグナムが振り向くより僅かに先に、ロケットランチャーをフェイトとシグナムに向けて発射した。

「シグナム！」
「…離れていろ、テスタロッサ。」

僅かに蛇行しながら迫るロケット弾に対し、シグナムはシュヴェルトフォルムに戻ったレヴァンティンを鞘に納め、居合いの構えを取る。

「……」

ゆらゆらと揺れながら飛ぶロケット弾を見つめ、シグナムは精神を集中する。

「はあッ！！」

そして互いの距離が1メートルも無くなった時、シグナムが気合いと共に鞘からレヴァンティンを抜き、ひと振りでロケット弾を真っ二つに両断した。
分かれた弾頭はシグナムの体の左右を掠め、シグナムの背後で盛大に爆発した。

「す…凄い！」
「…この星に来てから、対質量兵器用の訓練はそれまで以上に重ねた。その結果を出したまでだ。…とは言え、乱戦でこの構えは身をさらけ過ぎだな。」

普段はあまり多くを語らないシグナムだが、この時ばかりは成果が出て内心嬉しいのか、いつもよりやや饒舌になっている。

『…ライトニング０１、０２、こちらアーバインだ。』

「アーバインさん？」

『今からそっちにデカいのを撃つ。…白い悪魔の餌食になりたくなけりゃ、今すぐ下がるこった！』

「白い悪魔……って、もしかして！？」

フェイトは振り返って空を見る。するとそこには、レイジングハートを真横に構え、先端に桜色の魔力を集束させている、フェイトの１０年来の親友の姿があった。

「ディバィィイン……」

「テスタロッサ、退くぞ！」

「ッ！　はい！」

シグナムとフェイトは急いでその場から離れ、他の機体と共になのはの射線を開ける。

「バスタァァァア！」

レイジングハートの先端の魔力が解き放たれ、極太の砲撃となって一直線に延びていく。

その一撃は帝都のメインストリートを埋め尽くすＰＫ師団を薙ぎ払い、かつて海を割ったというモーゼの如く、道を切り開いた。

「シュバルツ中佐、今だ！　行け！」

「後ろは我々に任せ、中佐は皇帝陛下を！」

「ボーグマン大佐、ハーマン少佐、感謝します！　…行くぞ、少佐、

大尉、トーマ！」
「「了解！」」」

ディバインバスターによって開かれた道を、シュバルツを筆頭にキルシェとトーマ、更にツェルカンプゥ少佐の部隊が素早く駆け抜ける。

「うぉぉぉおおッ！」
『くっ！　全機、何としてでもシュバルツ中佐達を止めろ！』

ＰＫ師団はヴァルハラ城を目指すシュバルツ達に対し、まるでラグビーのディフェンスの如く陣型を組んで壁を作る。

「邪魔だぁぁあ！」

シュバルツは走る速度を落とさずビームガトリングを放ち、アイアンコングの壁を攻撃する。

『ええい、何をしている！　こちらも撃ち返せ！』
「させるかぁ！　ストライクレーザークロォオ！」

ＰＫ師団はシュバルツに向けて一斉に砲撃を仕掛けようとしたが、頭上から舞い降りたシーザーのストライクレーザークローによる、奇襲を受けた。

『な、何ィ！？』
「どうだフィーネ、これなら大丈夫だろ？」
「うん、流石ねバン！」

攻撃を受けたアイアンコングのパイロットは面食らい、バンは得

意気になってフィーネはバンの判断を賞賛する。
　単騎でアイアンコングの頭上を飛び越えようとすれば、後方の機体からの対空砲火を受けてしまうが、今の様にシュバルツに意識が向いていた時は、その危険性がかなり減少する。バンはそれに気が付き、ストライクレーザークローの様な格闘武器でシュバルツを援護したのだった。

「俺が上空から援護します、シュバルツ中佐はヴァルハラ城に！」
「済まない、フライハイト中尉！」

　シュバルツは空中からのバンの援護も受け、進路を阻むアイアンコングをビームガトリングで撃破しながら、ツェルカンプゥ少佐達やキルシェ、トーマと共に突撃する。

『ちっ、あの空飛ぶライガーを撃ち落とせ！』

　シュバルツとは離れた位置にいるアイアンコングが、シーザーを撃ち落とそうと砲撃を始める。

「うわわっ！？」

　バンは砲撃を集中させられ、シュバルツの援護を中断して回避に専念する。

『くそっ、しぶとい！　さっさと墜ち－－』
「…はぁぁあっ！」
『ッ！？』

　シーザーを攻撃していた一体のアイアンコングが、突如として腹から真っ二つになった。

『何ッ！？　どこから――』

仲間が真っ二つになったのを見た、他のアイアンコングのパイロットは敵機を探すが、直後に自分の機体も同じ末路を辿る事になった。

そうして、次々とアイアンコングが両断されていった。

『全員落ち着け、ただのステルス機だ！　俺が指定した場所に集中砲火しろ！』

分隊長と思わしき兵士が混乱する兵士達を纏め、攻撃地点を指定する。

『撃てェェエッ！』

「…ッ！」

アイアンコング達が一斉に砲撃すると、攻撃を加えた場所にシールドが展開された。

そして、ステルスを使用していた機体――イスルギ少佐のブレードライガーKSが、ステルスに回すエネルギーの余裕が無くなった事でゆっくりと姿を現した。

「ステルスが切れたか……クーイン少尉、タクマ！」

「はい！」

「了解！」

イスルギ少佐はブレードライガーを後退させ、同じくステルスを展開していたシャドーフォックスの部隊と場所を入れ替わる。

「電磁ネット射出、スモーク全開！」

シャドーフォックス達は素早く反転し、尻尾の電磁ネットを一斉に発射。アイアンコング達の動きを止め、すぐにスモークディスチャージャーを噴かせて煙幕を焚き、全速力で後退していった。

「ついでに、これも貰っていけッ！」

煙幕に向けて、タクマのシールドライガーが小型ミサイルを発射する。が、通常のミサイルでは爆風で煙幕を吹き飛ばしてしまうので、爆発せずに装甲を貫く、撤甲弾頭のミサイルを発射した。

ミサイルが煙幕を突き抜け、ＰＫ師団に着弾したのを確認すると、タクマも同様に後退していった。それとほぼ同時刻、少し離れた場所でも奇襲攻撃が行われていた。

『しまった、建物の中からッ！？』

「「うぉぉおおッ！」」

バンを撃ち落とそうと攻撃を行っていた部隊に、スバルにティアナ、エリオにキャロやチンク達が建物から飛び出して奇襲を仕掛けた。

「ディバイィイン、バスタァァア！」

「クロスファイァァア…シュゥゥウト！」

「てやぁぁぁぁあッ！」

「ＩＳ発動、ランブルデトネイター！」

スバルのディバインバスターやティアナのクロスファイアシュート、エリオの斬撃にチンクのランブルデトネイターでＰＫ師団の側面から攻撃。

「食らいなさい、振動破砕！」
「そぉれ、カットバックドロップターンッス！」
「ウェンディ姉様、お戯れが過ぎます…はぁっ！」

混乱した所を、キャロの支援を受けたティアナが、上空からＰＫ師団を攻撃するギンガにウェンディ、ディードの幻影を作って更に撹乱。

「ＩＳ発動…レイストーム。」

締めにオットーが集束させたレイストームを各所に叩き込むという、生身の人間が大型ゾイドと戦うために構築した、徹底した連携攻撃を展開する。
イスルギ少佐の部隊と六課フォワードの二手の奇襲により、バンに降りかかる対空砲火は殆どがなくなり、シュバルツがヴァルハラ城に向かう手助けをし易くなった。

「中佐、ヴァルハラ城までの距離、３０００です！」
「了解だ。フライハイト中尉、後は我々で事足りる、君は艦隊を――」

キルシェがヴァルハラ城までの距離を報告し、シュバルツがバンを艦隊まで後退させようとした、その時だった。

「ッ！？　足元がッ！？　中佐！」
「これは…落とし穴かッ！」

シュバルツ中佐達の足元が突如として崩れ落ちて巨大な落とし穴が現れ、各機は穴の底に落ちていった。

「くっ、大尉、少佐、トーマ、無事か！？」
「はい、機体の損傷も軽微です。」

落下時の衝撃で、機体に多少のダメージを受けたものの、重大な損傷は無かった。
だが、シュバルツ達を安心させない事態は続く。落とし穴の側面に穴が開いていき、機首にドリルを持った小型のゾイドが次々と現れる。

「中佐、こいつらは一体！？」
「分からん…が、あの昆虫型同様、ＰＫ師団の新型であり、この穴を掘ったのも奴らなのだろう。」
「なら、奴らを撃破し、この穴から脱出するしかありませんな。」
「ドリル対決か…面白いッ！」

四方八方から現れてシュバルツ達を包囲するモグラ型ゾイド、グランチャーに対し、それぞれが背中合わせになるように陣型を組む。

「各機、攻撃開始！」
「「「了解！」」」

シュバルツ中佐の合図によって、それぞれが一斉に正面のグランチャーに向けて飛びかかり、攻撃を開始した。

『ボーグマン！　シュバルツ中佐達だが、敵の仕掛けた罠にはまったらしい！』
「何！？　何をやってんだ、まったく！」

シュバルツに続こうと、ＰＫ師団の守りを少しずつ崩しながら前進するボーグマン大佐に、司令部のハンコック大佐から、シュバルツが罠に掛けられて危機に晒されていると連絡が入った。
報告を聞いたボーグマン大佐は、やや呆れてレイ達に通信を回す。

「クレイジー０１より各機へ。シュバルツ中佐が罠に引っ掛かってヤバいらしい。」
「なぁっ！？」
「よって、俺達はとっととコイツらを蹴散らして、シュバルツの救援に向かうぞ！」
「りょ、了解！」

シュバルツの救援に向かうため、道を阻むＰＫ師団に対する攻撃を更に激しくする。

「…とは言っても、コレを突破してシュバルツ中佐の救援に向かうのは、厳しすぎねぇか！？」

レイがハイブリッドキャノンを発射しながら呟く。
先にシュバルツが突破に成功したためか、ＰＫ師団の守備により一層気合いが入り、これ以上はヴァルハラ城に近付けまいと突撃し

て肉弾戦を仕掛ける者も増えていた。
シュバルツがやられる前に救援に向かえるのか、レイは首を傾げる。

「マズいッスよレイさん、これじゃ間に合わないッス！」

レイと同じく、ライガーゼロパンツァーに乗ってハイブリッドキャノンを連射するウィナーも、同意見らしい。

「バン、俺らはすぐに向かえない！　お前だけで何とかなるか！？」
「了解、やってみます！」

バンはレイ達が救援に間に合うように時間稼ぎをするため、シーザーを穴の中に飛び込ませる。

「ぬぅうっ！」

危険を省みず突撃してきたアイアンコングの拳が、ボーグマン大佐のブレードライガーに命中し、機体が後退りすると同時にコックピットにも衝撃が伝わった。

「大佐ッ！」
「心配するな！　それより、攻撃の手を緩めるんじゃないぞ！」

ボーグマン大佐はコックピット内で頭をぶつけた為、額を軽く切って流血しているものの、他に目立った怪我は無い様子だった。
だが、そうこうしている内に事態は少しずつ悪化していく。シュバルツへの救援が遅くなれば、先行したバンも含めて助からない可能性が高くなるし、イスルギ少佐やスバル達もスタミナ切れになればやられてしまう。速やかにシュバルツの救援に向かい、ルドルフ

を救助するためにヴァルハラ城に到達しなければならない。

「このペースじゃ、間に合う気がしません！　こうなったら、俺がバーニングビッグバンで！」

「止めろウィナー！　それを使ったら、冷却が間に合わずに爆発するかもしれないんだぞ！」

「じゃあ他にどうしろってんスか！？　ここで皇帝とシュバルツ中佐を助けられないくらいなら、クソ熱いのなんか我慢してやるッスよ！」

「そんなもん俺だってわからねぇよ！　今は頭を冷やして砲撃を――」

半ば自暴自棄になりかけるウィナーを諫めようとするレイだが、その会話の中でハッとした。

「…もしかして、いけるか！？」

「レ、レイ先輩？」

レイは自身の考えを確かめるために、後方で状況を見ながら六課メンバーを纏めているはやてに、通信を送る。

「こちらクレイジー０２！　ロングアーチ００、応答願います！」

「ロングアーチ００や、どないしたん？」

「部隊長さんの力を借りたい、至急こちらに来てくれ！」「な、なんやよう分からんけど、了解や！」

はやてはレイの要請に応え、急いでレイのライガーゼロパンツァーの居る位置まで前進する。

「おまっとさん。で、私をこんな弾丸飛び交う前線に呼んで、何を

させたいんや？」

はやては流れ弾に当たらないように、パンツァーの右後脚に身を隠しながら通信を続ける。

「部隊長、セスリムニルで使った氷の魔法…すぐ出来るか？」

「エターナルコフィンかいな？　…まぁ、発動まで時間が掛かる言うても、範囲にもよる訳なんやけど…それがどないしたん？」

「…俺が合図したら、そいつで俺のゼロをしばらく凍らせてほしい。」

「な！？　どういうつもりや！？」

レイからの意外すぎる要望に、はやては驚く。

「…この状況を打破するために、バーニングビッグバンを使いたい。だが…」

「…！　成る程なぁ……レイさんもなかなか、頭が回りよんなぁ。」

はやてはレイがやろうとしている事を察し、レイの機転の利きやすさに感心する。

「よっしゃ、任しとき！　リィン！」

『はいです！』

はやては少し後退し、建物の影に隠れると魔法陣を展開、呪文の詠唱を始める。

「レイさん、はやてと何の話だったんですか？」

「何、ちょっとした実験というか、博打というか…な。」

「……？」

近くにいたフェイトがはやてとの会話の内容を訊ねるが、レイの返答を聞いても、何の事だか分からないといった表情を浮かべた。

「レイ先輩！　早く攻撃に戻ってくださいよ！」

そうこうしていると、ウィナーからレイも砲撃しなければ火力が足りないと、悲痛な叫びが送られてきた。

「悪い、すぐ戻る！　フェイト、お前も頼むぜ！」

「あ…はい！」

レイはすぐにハイブリッドキャノンによる支援攻撃に戻り、フェイトも自身の周囲に魔力弾を次々と形成し、切れ目無く発射していく。

「はやて、まだか…ぐあっ！？」

レイのゼロパンツァーのハイブリッドキャノンに、アイアンコングが放ったビームキャノンが命中して砲身が大破、コックピットにも衝撃が伝わってレイの体を揺すった。

「ちっ、ハイブリッドキャノンがやられたかッ…！」

大破し、もはや鉄屑でしかないハイブリッドキャノンを分離し、ドスンと音を立てて道路に落ちた。

「レイ先輩！」

「大丈夫ッスか！？」

「心配すんな、マミ、ウィナー！　ハイブリッドキャノンがダメで

も、まだグレネードランチャーがある！」

レイはゼロパンツァーの腹部に装備されたグレネードランチャーを連射、アイアンコングの足元を狙う。

『ＥＭＰＴＹ（弾切れ）』

「クソッ、こっちも弾切れかよ！？」

『ピーッ』という電子音と共に、画面上にグレネードランチャーの弾切れを示す文字が表示される。

「部隊長、まだか！？」

「あと３０秒！　それまで踏ん張ってや！」

「オイオイ、簡単に言ってくれるな、部隊長さんよ！」

バーニングビッグバンを使用する事を考えると、威力の低下を抑えるためにミサイルは一発たりとも使えない。その為、レイに残された武装は頬のバルカン砲以外には無い。

レイは３０秒を何としても乗り切る為、残されたバルカンをバラ撒いてＰＫ師団への牽制を試みる。

が、硬い胸部装甲を持つアイアンコングには殆ど効かず、逆に手札が切れたと判断されたのか、数体のアイアンコングがレイのゼロ目掛けて突撃を仕掛けてきた。

『共和国軍め、死ねェ！』

アイアンコングは重い拳で、レイのゼロの左の頬を殴りつけた。

「ぐあぁッ！」

コックピットに衝撃が直に伝わり、ゼロ自身も一瞬だけ体を浮かせるが、自重が幸いしてか上手く踏ん張り、体勢を崩すまでには至らなかった。

「レイ、大丈夫か！？」
「ええ、なんとか！」

ボーグマン大佐は自分の正面の機体を捌くのに精一杯で、レイの援護に回れないため、声をかけるに止まった。

「後、１０秒！」

はやてからエターナルコフィン準備完了までの、残り時間が報告される。
だがそれでも、レイに対する攻撃は続く。先程ゼロを殴りつけたアイアンコングが、今度は両手でレイのゼロを押さえつけに掛かる。

「なっ！　この野郎、また自爆する気か！？」

アイアンコングがデスザウラーに密着し、自爆したのをレイは思い出す。デスザウラーにはアイアンコング数体分が必要だったが、いくらゼロパンツァーの装甲が厚い方だとは言え、強化を施されて復活を遂げたデスザウラーには負ける。

「くそっ、離せ！」

レイは必死で振り払おうと機体をじたばたさせるが、特攻を覚悟し、死をも恐れないアイアンコングの腕力は強く、ビクともしない。

「まずい、このままだと…！」

『ネオゼネバス帝国、バンザァァア――』
「ブチ抜け！　アイゼェェェエン！」

アイアンコングのパイロットが自爆しようとした時、アイアンコングの頭部が突然現れた巨大なドリルによって、叩き潰された。

「ッ！？　いや、今だ！」

頭部を叩き潰された所為で、アイアンコングの両腕の力が弱まり、その隙に腕を振り払って後退する。
コックピットを潰されてシステムフリーズしたアイアンコングは、前のめりに倒れ込む。だが自爆プログラムは解除されていなかったらしく、倒れ込んですぐに爆発した。

「ハァ、ハァ…危なかったぜ…」

かなり焦っていたらしく、レイの額からは脂汗が滴っていた。

「済まねぇな、ヴィータ。」
「…ここでテメェに死なれちゃ、はやてがせっかく準備してた魔法が無駄になんだろ。」

レイはヴィータに感謝する。が、ヴィータは気恥ずかしいのか、顔を背けながら悪態を吐いた。

「ようやったで、ヴィータ！　…さて、レイさん！　ご注文の品、準備完了したよ！」
「了解！　全ミサイルポッド、ハッチオープン！」

はやての準備が完了し、レイは待ってましたとばかりに嬉々とし

てコンソールを操作、ゼロパンツァーの全身のミサイルポッドを開く。

「アンカーセット、ターゲットマルチロック、安全装置――」

『ちょっとレイ大尉!?　何をしているんですか!　バーニングビッグバンは、爆発の危険性があるから使わないようにと言った筈ですよ!?』

メリッサはレイがバーニングビッグバンを使用しようとしているのに気付き、司令部からゼロパンツァーのコックピットに通信を叩きつけてきた。

「心配すんな、俺に良い考えがある!　これなら爆発はしない……筈だ!」

『ちょ、最後の溜めは何ですか!　それに『良い考え』は大抵、失敗フラ――』

メリッサが言い終わる前にレイは通信を遮断し、プツンという音と共にメリッサの顔が画面上から消えた。

「悪いなメリッサ、もう時間が無ぇんだ。…安全装置、解除!」

そう呟くと、レイはゼロパンツァーに搭載されている、全てのミサイルの安全装置を解除する。

「クレイジー02より各機へ、直ちに本機の上空より離脱せよ!」

「何!?」

「どういう事だ、グレック大尉!」

上空のサティ大尉やラルフは、どういう意味だとレイに説明を要

求する。

「説明してる時間はありません、早く退避してください！」
「…ラルフ少佐、ここはアイツの言う通りにしてみようや。」
「ちっ…後で説明してもらうからな、グレック大尉！」

レイの意図が分からないまま、サティ大尉とラルフは部隊を退避させる。

「上空の安全確認。部隊長、俺が合図したらすぐに撃ってくれ！」
「了解！　さぁレイさん、ドカンと一発、やってやりぃや！」
「おうよ！　いっけぇぇえ！　バァアニング、ビッグバン！」

ゼロパンツァーの頬から尾の先まで全身に搭載された、小型かつ高威力のミサイルが一斉に空に放たれた。
同時に、レイのコックピットに、ゼロパンツァーの全身に高熱が襲い来る。

「ぐわぁぁぁぁあっ！」
「レイ！　お前、バーニングビッグバンをッ！」
「レイさん！」
「だ、大丈夫なのかよ！？」

レイが許可無く使用したバーニングビッグバンにボーグマン大佐は驚き、はやてやヴィータは発生した高熱に声を上げるレイを心配する。
それもその筈、ゼロパンツァーのコックピット内の温度は１００℃を超え、機体の冷却システムも焼け石に水だった。

「い、今だ部隊長！　やってくれ！」

「りょ、了解や！　エターナル・コフィン！」
空をミサイルが埋め尽くし、そこから放物線を描いてＰＫ師団に降り注ごうとしていた頃、はやてはレイのゼロパンツァーの機体外周を凍結させていき、氷山を形成して機体を包み込んだ。

「機体を…氷づけにしただと！？」
「す…すげぇ…！」
「まさか、八神二佐の広域氷結魔法を、冷却システムの代わりに使うなんて…」

ラルフやウィナーはその異様な光景に驚き、メリッサは驚きながらも冷静に分析した。
ところで、肝心のミサイルはと言うと、全てＰＫ師団の大部隊に着弾、大爆発を起こして進路を切り開く事に成功していた。

「て、敵部隊の被害は甚大！　前線部隊、ヴァルハラ城までの進路を確保しました！」
「な、なんて奴だ、レイ・グレック大尉…！」
「あの野郎、たった一人で道を作りやがったか…！」
「こ、こんなのってアリなの！？」
『Ｈｕｍ…Ｉｔ'ｓ　ｓｏ　ｃｒａｚｙ. Ｂｕｔ，ｖｅｒｙ　ｆａｎｔａｓｔｉｃ（あー…、イカレてます。ですが、とても素晴らしいです）』
「レ、レイジングハート…」

レイが進路を確保したとの報告を受け、あまりの破壊力と決断力に、ハンコック大佐やアーバイン、なのはも驚きを隠せなかった。
レイジングハートは、冷静に賞賛している。同じ広域攻撃を得意とするマスター（なのは）を持つデバイスとして、ライガーゼロパンツァーに親近感を覚えたのだろう。

周りが驚いていると、レイのゼロパンツァーを覆っていた氷山がひび割れ出し、一気に砕け散ってゼロパンツァーが姿を現した。

「ッ！　レイさん、生きとるか！？」
「おいレイ！　応答しろ！」

はやてとボーグマン大佐が、急いでレイに通信を送る。

『…Ｈｅ　ｗａｓ　ｖｅｒｙ　ｎｉｃｅｇｕｙ. Ｒｅｓｔ　ｉｎ　ｐｅａｃｅ.』
「なのは、そいつを黙らせろ！」

その時レイジングハートが縁起でも無い事を言い出し、ヴィータが怒ったのを知る者は、意外と少なかった。

「…あんまり大きな声出さないで下さいよ、なんとか生きてますから。」
「レイ！」
「レイさん！」

はやてとボーグマン大佐はレイの無事を確認すると、安堵の表情を浮かべる。

「ったく…バーニングビッグバンは使うなって、メリッサが言ってただろうが！　これは立派な命令違反だぞ！？」
「…大佐、せっかく俺が道を作ったんですから、パパッと突破してシュバルツ中佐の救援を…」

ボーグマン大佐は命令違反を起こしたレイを叱ろうとするが、レイが決死の覚悟で拓いた道を無駄にする訳にはいかない。

「…ッ！　…後で説教だ、覚えとけよ！」

そう言うとボーグマン大佐はなのはやフェイト、ウィナー達を引き連れてシュバルツの救援の為、レイが作った道を駆けていった。

『ＣＡＵＴＩＯＮ！　ＣＡＵＴＩＯＮ！』

「…パンツァーユニット、損傷率８０％か…。爆発しなかっただけでも、御の字だな。」

ゼロパンツァーの装甲は、もはやその役割を果たせない程に傷ついていた。

合金とは言え、超高熱の金属を、エターナルコフィンで急激にかつ無理矢理冷やしたのだ。装甲板が変型したり、亀裂が入っていたりしても不思議ではあるまい。

これではただの重荷だと判断し、レイはパンツァーユニットを全て切り離し、ゼロの素体である漆黒のボディを露わにする。

ゼロはまるで、水浴びを終えて体中の水気を払う動物のように体をブルブルと震わせる。高熱から解放されて、スッキリしたと言いたげな動きである。

「素体のダメージは…意外に少ないな。」

『大尉、直ちにＣＡＳの換装の準備をします。至急ホバーカーゴへ――』

「いや、流石にお色直ししてる暇はねぇ。このまま行かせてもらうぜ！」

『な！？　大尉！？』

レイは素体のダメージが少なく、ホバーカーゴに帰艦して換装する時間が無いと判断、この丸裸のままシュバルツの救援に向かうと

言い出した。
　素体のままでも戦えない事は無いが、装甲が余りにも脆弱すぎる。ゼロの解析及びＣＡＳの開発に携わったメリッサも、レイの判断に驚くしかなかった。

「俺とゼロなら大丈夫だ！　行くぞ、ゼロ！」
『ガォォォオン！』
『ちょ、大尉ィィィイ！？』

　メリッサの叫びも空しく、レイとゼロは気合い十分といった様子で走り出した。

「…ああもう、どこから来るのよあの自信は！？」

　通信が途切れ、メリッサは訳が分からないといった様子で、偶々持っていたボールペンを足元の床に叩きつけて怒るのだった。

　シュバルツ達が落ちた落とし穴。そこにバンが支援に駆けつけ、グランチャーを次々と撃破していくシュバルツ達とバンだが、グランチャー自体も次々と出て来るので倒せども倒せども、一向に数が減っていなかった。

「くっ…！　奴らは一体、何機いるというんだ！？」

シュバルツはセイバータイガーのビームガトリングを、グランチャーに向けて掃射しながら呟く。

その直後、グランチャーの背部が開いて鋸状の赤いブレードが飛び出し、耳鳴りのように聞こえる音が響きだした。

「む？　何だこの音は……ッ！？」

謎の音が響きだした直後、キルシェの様子がおかしい事にシュバルツが気づく。

「どうした、大尉！？」

「中佐！　き、機体のコントロールが効きません！」

「何だと……ッ！？　くそっ、こちらもかッ！」

突然、自身の機体が言う事を聞かなくなり、シュバルツ達は困惑する。

「バン、シュバルツ中佐達の様子が変よ。」

「ああ…中佐、どうかしたんですか！？」

フィーネがシュバルツやキルシェの機体の様子がおかしい事に気付き、バンはすぐにシュバルツに通信を送る。

「フライハイト中尉か、機体のコントロールが出来んのだ！」

「何だって！？」

「…中尉のシーザーは大丈夫なのか？」

「え、ええ、どこにも異常は…」

シーザーとグランチャー以外の機体は、全てコントロール不能に陥っていた。

「バン！　あの機体のブレードから、ジャミングのような電波が流れてるわ！」

「原因はアイツか！」

後部座席のフィーネが、グランチャーの背部のブレードからジャミングのような電波が流れている事をバンに知らせ、バンはシュバルツ達の機体を狂わせているのが、それによるものだと確信する。

「シーザーには、ジャミングは効いてないみたい…」

「何故か分からないけど、俺達しかアイツらに対抗出来ないって事か！　シーザー！」

『グォォオン！』

自分達がやらなければ、シュバルツ達は動けないままやられるだけだ。バンはジャミングを発しているグランチャーを駆逐するため、地面を蹴った。

グランチャーはジャミングを行っている機体を守るため、パルスレーザーガンをシーザーに向けて一斉に放つ。

「シーザー、シールドだ！」

シーザーの機体前面にEシールドが展開され、向かってきたレーザーを容易く弾いていく。

「うぉぉぉぉおッ！」

シーザーはシールドを展開したままグランチャーの群れに突進し、

正面に居た機体をシールドの反発力でまとめて弾き飛ばした。

「よし！　このまま一気に――」

「…！　バン、足元！」

「なッ！？」

シーザーがシールドを解除して一旦足を止めた瞬間、足元からグランチャーの小型マグネーザーが次々と突き出てきた。

バンが気付いた時には一瞬だけ遅く、小型マグネーザーによって前脚のストライクレーザークローが破壊され、更にグランチャーの掘った穴に足を取られてしまった。

そこに足元から這い出てきたグランチャーが、小型マグネーザーでシーザーの白銀の装甲を穿っていった。

「うわぁあっ！？」

小型とは言え、マッドサンダーにも搭載されているマグネーザーによって、脚部や脇腹の装甲が砕かれる。

「バン、一度空に逃げよう！」

「ああ、シーザー、飛べるか？」

『グォォオン！』

問題無いと返事をし、シーザーは翼を展開してフワリと浮き上がる。

空中に浮き上がった事でマグネーザーの脅威からは脱したが、シュバルツ達は何の脅威からも脱してはおらず、シーザーもあまり長く逃げてはいられない。

シーザーに攻撃が届き難くなったグランチャーは、当然の如く攻撃対象をシュバルツ達に切り替え、攻撃を開始する。

「させるかッ！」

バンはシーザーの頭部のレーザーガンを空中から掃射するが、的が小さい上にバンは無誘導の射撃武器が苦手な為、それなりに装甲の厚いグランチャーを手際良くは撃破出来ない。

「ぐわあっ！」
「ぐうっ！」

バンが手間取っている間にグランチャーはシュバルツ達に攻撃を続け、ダメージを蓄積させていく。

「中佐！」
「バン、もっとよく狙って！」
「んなこと言ったって、俺は射撃が苦手なんだ！」

シュバルツが攻撃されている事に焦り、バンの射撃の命中率は更に低下し、もはやバン一人ではどうしようも無くなっていた。

「くそっ！　どうすりゃいいんだよ！？」
「バン、落ち着いて！」

バンはもう駄目なのかと思い始める。が、その時、ようやく連合軍の援軍が現れた。

「ストレイトバスター！」

その声が響いた直後、桜色の光が次々と地に降り注ぎ、グランチャーの装甲を貫いて撃破していった。

「この砲撃…なのはか！」
「ごめんバン君、遅れちゃった！」
「いや、助かったよ。一時はどうなる事かと…」
バーニングビッグバンによって拓かれた道を突破し、なのはが一番に援軍に駆けつけていた。
「なのは、シュバルツ中佐達は！？」
「フェイトちゃん。大丈夫、みんな無事だよ。」
なのはに続いて、フェイトも穴に飛び込んできた。
「…！　そうだ、なのは達が来たって事は…ボーグマン大佐！」
なのはとフェイトがここに来たと言う事は、ボーグマン大佐達も続いてやって来るだろう。穴の直径は数十メートルあるとは言え、ゾイドが数体入るとなればそう広くはないし、シュバルツ達の救援を行うなら、中に突入して格闘戦でグランチャーを駆逐する策を取ると予想される。
未だジャミングが発生している狭い空間に、ボーグマン大佐達が侵入しては面倒になる。バンは急いでボーグマン大佐に通信を送った。
「こちらクレイジー０３！　クレイジー０１、応答を－－」
「イィィヤッホォォオゥ！」
ボーグマン大佐に呼び掛けようとした時、ライガータイプの機体が一体、穴の中に飛び込んできた。

「こちらクレイジー０４！　シュバルツ中佐、救援に参りました！」

ドスンと着地して現れたのは、ウィナーの乗ったライガーゼロパンツァーだった。

「なんだ、大佐じゃなくてウィナーか。」

「あ、なんスかバン中尉！　そんな期待外れだったみたいな反応は！」

「いや、期待外れっていうか、なんていうか…」

ウィナーは、せっかくカッコ良く登場したのにバンの反応が不服だ、と申し立てる。

「なぁに、ネオゼネバスの機体なんか俺が…って、何だこの耳鳴りみたいな……穴ン中だから気圧が違うのか――」

なんて言いながら、ウィナーは徐(おもむろ)に操縦桿を動かしてみる。

「…あれ？　動けない。」

「だぁぁあ！　何してんだウィナー！」

バンはウィナーの迂闊さに頭を抱える。とは言え、バンも人の事は言えない程、迂闊な時があるが。

「…やっぱり細工がしてあったか。」

「ええ、キッド少尉を先に行かせて正解でした。」

穴の縁から、ボーグマン大佐のブレードライガーとハーマンのケーニッヒウルフが、ひょこっと顔を覗かせる。

「酷いッスよ大佐！　俺を生贄にするなんて！」
「お前のパンツァーの装甲なら、そう死にはせん。お前が一番生存率が高いと思ったから、この役目を押し付け…いや、任せたんだろうが。」
「あれ！？　今一瞬、何か聞こえたような！？」
危うくボーグマン大佐が本音を漏らしそうになったが、何とか誤魔化せたようだ。

「ボーグマン大佐！　あの機体が、他の機体のコントロールを封じる電波を発生させています！」
「了解だ。…しかし、お前は動けるみたいだが？」
「ええ、どういう訳だか分からないですけど…」
「そうか…まぁいい、やるぞハーマン！」
「ハッ！」

バンから知らされた目標を狙い、ボーグマン大佐はライガーのハイデンシティビームキャノンで、ハーマンはケーニッヒのデュアルスナイパーライフルでグランチャーを狙撃、撃破する。

「シュバルツ中佐、機体のコントロールは！？」
「…ああ、どうやら戻ったようだ。…感謝するよ、フライハイト中尉。」

シュバルツ達は機体が動かせるようになったのを確認し、バン達に感謝する。

「…さて、我々は速やかにここを脱し、陛下の救出に向かうぞ！」
「「「了解！」」」

シュバルツ達は穴の壁をよじ登り、再びヴァルハラ城へ向けて走り出す。

皇帝ルドルフは最早、目と鼻の先に居るのだった。

第七十五話　誇りと約束（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第七十六話　帝都、燃ゆ（前書き）

暑い…暑くて死にそうです

第七十六話　帝都、燃ゆ

ルドルフとプロイツェンが戦っている丁度足元に位置する地下牢には、プロイツェンの反乱によって拘束された帝国議会の議員やヴァルハラ城の使用人、城を守っていた軍将校等が多数投獄されている。

プロイツェンと共に、ガイロス帝国の政（まつりごと）を執り行う宰相のホマレフも、その中の一人であった。

「ぬぅ……私が陛下に付いていながら、何という事だ…！」

宰相という事だからか、他の人々の牢屋と別の牢に一人だけ入れられたホマレフは、己の無力さを悔いる。

そんな中、真上で行われているルドルフとプロイツェンの決闘による衝撃が、地下牢にも僅かに伝わって揺れを起こし、天井からパラパラと塵が舞い落ちてくる。

「この揺れ方は…模擬戦場で戦闘が行われているのか！？」

ホマレフは揺れ方から、訓練用のスタジアムで戦闘が行われている事に気付く。

「…だが、あの模擬戦場はヴァルハラ城の裏手にある…守備隊がそちら側から仕掛けるなど……まさか！？」

ホマレフは模擬戦場で戦っているのが、ルドルフとプロイツェンではないかと考える。

「こうしてはおれん、すぐに陛下をお助けせねば…」

ホマレフは鉄格子まで壁沿いに静かに移動し、衛兵の様子をうかがう。衛兵は椅子に凭(もた)れて船を漕いでおり、牢屋の鍵も手を伸ばせば取れそうな距離にあった。

（よぉし…気付くなよ…？）

衛兵の目が覚めない事を祈りながら、ホマレフはうつ伏せになって鍵に手を伸ばす。

「おい、お前！」

（ッ！　いかん、見つかったか！？）

別の兵士の声に驚き、ホマレフは体をビクッと震わせる。

「何を呆けている、我々も前線に参加するぞ！」

「…！　ハ、ハッ！　申し訳ございません！」

どうやら声の主は衛兵の上官であったらしく、声の対象もホマレフではなく、うとうとしていた衛兵だったようだ。

微睡(まどろ)んでいた衛兵は上官の声に驚き、座っていた椅子からガタッと音を立てて立ち上がると、慌てて上官の後を追って走って行った。

「…ふう、驚かせおって……」

ホマレフは額の脂汗を拭(ぬぐ)い、衛兵の座っていた椅子を見る。するとそこには、慌てていたために気付かなかったのか、衛兵が牢屋の鍵を落として行っていた。しかも、ちょうどホマレフの手の届く距離だった。

「しめた、これで陛下をお助けに行けるぞ！」

ホマレフは落ち着いて牢屋の鍵を掴み、起き上がって鉄格子に掛けられた頑丈な錠前を開く。

音が響かないようにゆっくりと扉を開き、辺りを見渡す。どうやら誰も居ないらしい。

「陛下、この不肖ホマレフ、すぐにお助けに参りますぞ！」

そう呟くと、ホマレフは格納庫に向けて駆けていった。

「くっ…！　まだ…行けますか、ゴールドタイガー…？」

ルドルフとプロイツェンの決闘は、プロイツェンが圧倒的な力量を見せつけながらも、決して諦めないルドルフは未だ力尽きることなく立ち上がっていた。

（ほう…まだ立ち上がるか…）

ルドルフの予想以上のガッツを見たプロイツェンが呟く。

「フフ…フハハハハ……」

「…何が、おかしいのです？」

突然笑い出したプロイツェンに、ルドルフが訊ねる。

「…いえ、正直、私は軽い感動を覚えているのです。初めは操縦さえままならなかった少年が、こうも見事にゾイドを操り、皇帝として私に戦いを挑むのですから…」

「『ゾイドは技術でなく、強い思いで操る。その思いに応えてくれるのがゾイドなのだ』…。あなたは以前、私にそう教えてくれました。その言葉は、今でもハッキリと覚えています。」

「…素晴らしい！　…策略とゼネバスの復活だけに生きたわが人生の最後に、あなたのような真のゾイド乗りと戦える事、幸せに思います。」

プロイツェンはルドルフに感謝の言葉を述べる。

ヴァルハラ城の向こう側から聞こえてくる爆発音が近づき、それがシュバルツ達がこの場所に近づきつつある事を示していた。

「…頃合いだ。共に逝こう、ルドルフ陛下。」

プロイツェンはコンソールを素早く叩き、帝都ヴァルハラの地下にあるデスザウラーのゾイドコアに、機体背部の荷電粒子吸入ファンから取り入れたエネルギーを一気に送り始める。

「させません！」

ルドルフは傷だらけの自分とゴールドセイバータイガーの体に鞭打ち、ゾイドコアにエネルギーを送るパイプに向けて疾走する。

『ビーッ、ビーッ！』

「熱源接近!?　…しまった、足元からッ!?」

ゴールドセイバータイガーの足元の地面からグランチャーの群れが穴を掘って出現、ルドルフに奇襲を仕掛けて足を止める。

「ぐあっ…!」

「往生際が悪いですな、ルドルフ陛下。…さあ、私と共に、ネオゼネバスの礎と一一」

「そうはさせんぞ、プロイツェン!」

「ッ!?」

聞き覚えのある声にプロイツェンが反応し、声のした方向を見ると、そこにはＰＫ師団の予備のアイアンコングの姿があった。

「その声…貴様、ホマレフか!」

「ルドルフ陛下、助太刀致します!」

ホマレフはビームキャノンを放ち、ゴールドセイバータイガーの足元に纏わりつくグランチャー達を狙撃、全て撃破する。

「陛下、遅れて申し訳ありません!　して、お体は!?」

「大丈夫です。感謝します、ホマレフ殿。」

ホマレフはルドルフが無事な事を確認すると、安心した様子だった。

「おのれホマレフ……まだ私の邪魔をするか!」

「ギュンター・プロイツェン!　その命、貰い受ける!」

ホマレフは機体のバーニアを噴かせ、ブラッディーデスザウラー

に向けて突撃する。

「ホマレフ殿、あのパイプを優先で破壊してください！　地下のデスザウラーのコアに過剰なエネルギーを送り、暴走させるつもりです！」

「なんと！？　…プロイツェン、貴様ァ！」

ルドルフの指示を受け、ホマレフはプロイツェンをこの手で葬るという気持ちを抑え、パイプの破壊を優先させる。

「我等がヴァルハラを、焦土としてなるものかッ！」

ビームキャノンを連射し、エネルギーを供給する大量のパイプの内、二本を撃ち抜いて破壊した。

「ホマレフ！　調子に乗るなァァア！」

ブラッディーデスザウラーは地面を蹴ってホマレフの乗るアイアンコングに急速接近、両手でアイアンコングを捕縛して機体を地面に押し倒す。

「くぅっ！」

「ホマレフ、無駄な事を……貴様も私と同じく、ネオゼネバスの礎となる運命なのだよ！」

ブラッディーデスザウラーの拳が、アイアンコングの機体に次々と叩き付けられ、胸部装甲に亀裂が生じる。

「ぐはぁッ…！　…ぬ、ぬかしおる！　貴様の思い通りに事は運ばん！」

ホマレフは叩き付けられる拳の衝撃を一身に受け、喀血しながらも毅然とした態度で言い放った。

「…遺言はそれで構わんな？」

プロイツェンは殴りつけるのを止め、右手でコックピットのある頭部を掴む。

「さらばだ、ホマレフ宰相閣下。」

プロイツェンがそう呟いた直後、ブラッディーデスザウラーの右手に爆発的に力が込められ、アイアンコングの頭を林檎の如く握り潰した。

「ホマレフ殿！」

頭部を潰されたアイアンコングは、ブラッディーデスザウラーが手を離すと力無くその場に倒れ込んだ。

ルドルフは自分が皇帝に即位してから、度々助けてくれたホマレフが散って行くのを目の当たりにし、声を上げた。

「…とんだ邪魔が入りましたな。ではルドルフ陛下、我々もホマレフ殿に続くと――」

プロイツェンが言い終わる前に、ビームの弾丸がブラッディーデスザウラー目掛けて大量に降り注ぎ、血のように紅く分厚い装甲に傷を付けた。

「…ふむ、ようやく本命のご登場らしい。」

「え…？」

プロイツェンの言葉を聞き、ルドルフが弾の飛んできた方向を見る。

「ルドルフ陛下、遅れて申し訳ありません！　カール・Ｌ・シュバルツ中佐、ただいま参りました！」

「シュバルツ中佐！」

ルドルフの視線の先には、ビームガトリングでブラッディーデスザウラーを攻撃した、シュバルツとその愛機であるセイバータイガーの姿があった。

「うぉぉぉおおッ！」

更にシュバルツの背後からバンのシーザーとレイのライガーゼロが現れ、シーザーがブラッディーデスザウラー目掛けて飛びかかり、ストライクレーザークローで右腕の肘から下を擦れ違いざまに切り裂いて破壊する。

「やはり貴様も来たか、小僧！」

「プロイツェン、お前の思うようにさせてたまるかよ！」

バンが来るのは予想がついていたとでも言いたげな、余裕のある口調でプロイツェンは言う。

「ついでに、テメェが匿ってるっていうスカリエッティを引き渡してもらうぜ！　そいつが捕まんねェと、管理局の皆さんが困るんでな！」

続いて、レイが半ば喧嘩腰な口調でプロイツェンにスカリエッティの引き渡しを要求する。

「威勢が良いな。…が、装甲板やロクな武装も無しにどうやって私を倒すというのだね？」

「舐めんなよ？　…俺とゼロには、爪と牙さえありゃあ問題ねぇ！」

『グォォォオン！』

その通りだと言わんばかりに、ゼロは雄叫びを上げた。

その間にシュバルツは機体をルドルフの所まで走らせ、ゴールドセイバータイガーの前に陣取る。

「陛下、現在の状況は！？」

「…プロイツェンはあの紅いデスザウラーから、地下の大量のデスザウラーのコアにエネルギーを送り、暴走させる事で私達ごとヴァルハラを消滅させようとしています！」

「なんですって！？」

「それを阻止しようとしたホマレフ殿は…」

ルドルフはプロイツェンがやろうとしている事を説明し、ホマレフが乗っていたアイアンコングを示す。

「くっ……プロイツェン、貴様という奴は！」

「フハハ…！　もう遅い、貴様らがヴァルハラから脱出する時間は既に無いのだよ！」

激昂するシュバルツに対し、プロイツェンは高笑いを上げながら、地下のゾイドコアにエネルギーを送り続ける。

「…フライハイト中尉、グレック大尉、頼みがある。…私が時間を

稼いでいる内に、皇帝陛下と共に逃げてくれ。」
「な…中佐!?」
「…それはつまり、中佐が犠牲になるって事ッスか?」
シュバルツの言葉にバンは声を上げ、レイは冷静を装いながらシュバルツに訊ねる。
「そうだ。どれほど時間を稼げるかは分からんが、君達の足なら或いは…」
「そんな! 私にあなたを見捨てろと言うのですか!? それに、まだ城の中には皆が!」
シュバルツがレイの問い掛けを肯定すると、すかさずルドルフが異議を申し立てる。
「私の部下達が脱出を手伝っていますし、この二人も居ます。お急ぎください、陛下!」
ルドルフはシュバルツと捕らわれている国民を見捨てられないと首を横に振るが、シュバルツはキルシェ達が既に脱出の手助けをしていると説明し、ルドルフを説得する。
「だとしても、自ら命を投げ捨てるなど、私が絶対に許しません!」
シュバルツが言い終わる前に、ルドルフはそんな事は許さないと釘を刺す。
「しかし、他に陛下の御身をお守り方法が――」
と、シュバルツが言い終わる前に、今度は通信が送られてきた。

『オットーより全機へ。ヴァルハラ城の地下より、高エネルギー反応を確認！　かなりの熱量です！』

通信の送り主はオットーだった。

「…妙だな。」

シュバルツを救出し、周囲の敵機の掃討に当たっているハーマンが呟く。

「何がです？」

同じく掃討に当たっているなのはが、ハーマンの呟きについて訊ねた。

「ネオゼネバスの動きだ。…爆弾を機体に積んで特攻したり、シュバルツ中佐が落とし穴とジャミングで動きを封じられた時だって、あのまま一気に叩き潰せた筈だ。なのに、それをしなかった…。まるで、連中が足止めに徹しているとしか思えんのだ。」

ハーマンは自分の率直な考えをなのはに語る。

「うーん…言われてみれば…」

なのはもプロイツェンが何を狙っているのか考えを働かせる。

すると、オットーから通信が送られてきた。

『オットーより全機へ。ヴァルハラ城の地下より、高エネルギー反応！　かなりの熱量です！』

「ヴァルハラ城地下…？」

この状況を一発で逆転出来るプロイツェンの切り札が起動したのか、ハーマンは一瞬だけそう考えるが、そんな超兵器があるのなら最初から使っていた筈だと即座に否定する。

頭の切れるプロイツェンが、超兵器とはいえそれだけの為に時間稼ぎをするなど考えられないし、そもそもプロイツェンは全ての準備が整ったからこそ、ネオゼネバス帝国の建国を宣言したのではないか。

にも関わらず、ネオゼネバス軍は連合軍になかなかのダメージを与えているものの、どちらかと言えば苦戦しており、足止め程度しか出来ていないのか現状である。

「…いや、『足止めしか出来ていない』のではなく、『最初から足止めをするつもり』だったなら……」

相手は共和国と帝国の戦争という状況を作り上げたプロイツェンだ。もしかしたらこれも計画の内で、自分達はまたしても嵌められたのではないか。

厭な予感がハーマンの脳裏をよぎり、急いでシュバルツに通信を送ろうとする。

だが、送ろうとした瞬間、シュバルツの方から連合軍全機に通信が送られて来た。

『シュバリエ０１より連合軍全機へ！　皇帝陛下のご無事を確認した！』
『ワァァァアッ！』

シュバルツの報せに、ガイロス帝国側の兵士を中心に大歓声が上がる。

『しかし、続いて残念な報告がある。…先程感知された熱源、あれはデスザウラーのゾイドコアである！』

シュバルツの次の報告に、喜びの声を上げていた兵士達が一瞬で静まり返る。

『プロイツェンはゾイドコアに荷電粒子エネルギーを過剰供給し、暴走させてヴァルハラを我々ごと葬り去る計画を画策している模様！　…私、シュバルツ中佐は、連合軍全機のヴァルハラ撤退を司令部に提案する！』

シュバルツの言葉を聞いた兵士達は再び声を上げる。先程とは違い、慌てふためく者、冷静に指示を出そうと声を出す者等、少なくとも歓声は無くなっていた。

「ハルトリーゲル大尉、そちらの状況はどうか！？」

ヴァルハラ城内に進入し、囚われている者達を救出に向かっているキルシェにシュバルツは通信を送る。

『こちらハルトリーゲル大尉。帝都守備隊員、使用人、要人、全員救出完了しました。直ちにヴァルハラ城を脱出します。』

「急いでくれ。私だけでは、いつまで時間を稼げるか判らん…ッ！」

『中佐、ご無理はなさらぬよう…！』

シュバルツはキルシェに状況を確認すると通信を切り、エネルギーを地下のゾイドコアに送り続けているブラッディーデスザウラーに向け、ビームガトリングを連射する。

プロイツェンはブラッディーデスザウラーの頭部のビームガンを連射して反撃するが、シュバルツは機体を素早く移動させてそれを回避する。

「今よ、バン！」

「てやぁぁぁあッ！」

バンはプロイツェンの隙を突き、シーザーのウイング兼用ブレードでブラッディーデスザウラーを両断しようとする。

「甘い！」

だが、プロイツェンには読まれていたらしくバックステップで回避され、シーザーはその横腹に、ブラッディーデスザウラーの腹部から放たれるミサイルを浴びせられる。

「くうッ！」
「きゃあっ！？」

ミサイルの爆発の衝撃がコックピットに伝わり、バンとフィーネは思わず声を上げ、シーザーを一旦着地させて距離を取る。

「まだだ！　パイプをぶった切りゃあ…！」

レイはシュバルツとバンがプロイツェンと戦っている間に、エネルギーを供給するパイプをストライクレーザークローで切断しようと、ブラッディーデスザウラーの右後方から突撃する。

「ストライクゥ…レェエザァァア…！」

だが、ブラッディーデスザウラーは自慢の太い尻尾を振るい、背後から接近するレイのゼロに叩き付け、跳ね飛ばした。

「ぐわッ！」

ゼロは機体を二度三度地面に叩き付けられ、数十メートル転がって停止する。

「くっ…ダメージチェック……」

レイはゼロを起こしながら、機体のダメージを確認する。

「駆動系損傷、機動力の３０％低下、レーザーファングと左前足のストライクレーザークローの使用不能…か。やっぱ装甲無しじゃダメージがでかいな……ま、アレでバラバラにならなかっただけでもありがたいか…」

ゴジュラスですらひとたまりもないと言われる、デスザウラー級の尻尾による打擲。それを素体の状態で受けたにも関わらず、機体が大破しなかったのは、ゼロが野生の本能で危険を察知し、自らの意思で衝撃の瞬間に後方へステップしていた事が大きかった。

レイは一旦ゼロを後退させ、ブラッディーデスザウラーとの距離を取る。

「フハハ…判断を誤ったな、シュバルツ中佐。自分だけでも逃げていれば、命は助かっただろうに…」

「黙れ！　私は陛下の御身を死んでも守ると、心に誓ったのだ！　そしてそれは、名門シュバルツ家の嫡男たる私の務めでもある！」

シュバルツは自分の主君であるルドルフを置物呼ばわりされ、怒りを露わにしてビームガトリングをより一層激しく連射する。

「ですから陛下、お逃げください！　我が帝国の精鋭達も、陛下をお迎えに上がっております！」

「…しかし、私にはあなたを置いて逃げる事など…！」

「そうだ！　俺たちも、中佐を見殺しにするなんてできません！」

シュバルツの度重なる説得にも、ルドルフは忠臣を置いて逃げる事に躊躇っていた。加えてバンも、シュバルツの提案を受け入れない考えを示す。

「陛下、あなたはガイロス帝国皇帝なのです！　その皇帝が助からなければ、ガイロス帝国は終わるのです！　私一人の為に、他の民全てを犠牲になさるおつもりですか！？」

「……ッ！」

「ご決断なされよ、陛下！　生き延びてガイロス帝国の未来を導く

か、私と共に逝ってガイロス帝国の全てを見捨てるか！　…皇帝たるあなたは、どちらを選ぶのです！？」

そのシュバルツの言葉を聞いた瞬間、ルドルフは下唇を噛み締めながら決断した。それは、ガイロス帝国皇帝としての責務を果たす決断である。

「…分かりました……シュバルツ中佐、私は生き残ー！」

『『おっと！　待ちな、お二人さん！』』

ルドルフが涙を堪えながら言おうとしたその時、シュバルツとルドルフの通信に何者かが割り込んできた。

「！？　だ、誰です！？」

「この声…まさか！？」

「おいおい、もしかして…」

ルドルフは何者かの登場に困惑するが、レイとバン、それにシュバルツはその通信の声に聞き覚えがあった。

「お前さんみたいな若造が捨て駒になるなんざ、この俺、クレイジー・アーサーと！」

「ゴゴ・サティが断じて許さん！」

「ボ…ボーグマン大佐！？」

「サティ大尉まで！？」

シュバルツとルドルフの前に派手に登場したボーグマン大佐に、二人は驚きを隠せない。

「た、大佐に大尉！？」

「え、ボーグマン大佐!?　…いつの間に!?」
「あ、あれ!?　そこでレドラーを迎撃してたんじゃ!?」
「ボーグマン大佐、姿が急に見えなくなったと思えば何を……」

いつの間にか模擬戦場へ行っていたボーグマン大佐とサティ大尉に、アーバインやなのは、近くでレドラーを掃討していたと思っていたマミは驚いていたが、イスルギ少佐はその状況を冷静に見つめていた。

「…まさか、大佐、大尉!　あなた達は…!」
「ああ。お前さんが思ってる通りだろうよ、ケイ。」

ボーグマン大佐はイスルギ少佐の問い掛けにそう言うと、シュバルツとルドルフの機体の近くまで走り、再びシュバルツに通信を送る。

「シュバルツ中佐、ここは俺が引き受ける。お前さんは、バンやレイと共に皇帝陛下を連れて逃げるんだ!」
「な、何ですって!?」

シュバルツ達はボーグマン大佐の言葉に、自らの耳を疑わざるを得なかった。

「俺達が時間を稼ぐって言ったんだ、さっさと逃げろ!」
「しかしボーグマン大佐、貴方のような優秀な指揮官を犠牲にするわけには……!」
「優秀な指揮官だぁ?　…ハッハッハ!　俺から見りゃ、お前さんも十分優秀な指揮官だぜ?　しかも、俺とは違ってまだまだ若い、将来有望な指揮官殿だ!」

ボーグマン大佐はシュバルツの言葉を笑い飛ばし、シュバルツに賛辞しながらも若干自虐的に言う。

「…こういう役目を負うのは、俺と大佐殿みたいな老兵の専売特許だ。お前みたいな若いのに、横取りさせるかっての。」

「そんな…しかし、御二方！」

「…選びな。」

「…！？」

「…この瞬間だけ皇帝陛下を守って逝くか、この瞬間を生き延び、これからも皇帝陛下を守り続けるか……シュバルツ家の嫡男として、お前さんはどっちを選びたいんだ？」

「あ……」

先程ルドルフに言った言葉とほぼ同義の問い掛けをされ、シュバルツは言葉に詰まる。

「ちょっとボーグマン大佐！　直属の部下の俺たちを置いてけぼりにして、話を進めないでくださいよ！」

シュバルツと勝手に話を進めるボーグマン大佐に、レイが異議を申し立てる。

「なんだレイ、お前は俺とサティ大尉がみんなを救ったヒーローになるのに反対だってのか？」

「何がヒーローですか！　いくらクレイジー・アーサーだからって、最初から自分の命を捨てる気で戦うなんて…どうかしてますよ！」

「俺も反対です！　俺たち全員で頑張れば、プロイツェンだって…！」

レイとバンは、口を揃えてボーグマン大佐とサティ大尉を見捨て

るつもりはないと言い放つ。

「…そんな事を言って、もし勝てなかったらどうするんだ？」

「え…？」

サティ大尉の言葉に、レイは思わず聞き返した。

「状況を考えろ。プロイツェン自体が捨て駒なら、ネオゼネバスの本隊は今頃中央大陸に向かって移動しているだろう。そんな一刻を争う時に、目の前の大ボスを倒すために時間を掛けてる場合か？それ以前に、倒せなければお前らは爆発に巻き込まれて全員共倒れだし、お前たちが抜ければ、これから先の戦いでネオゼネバスを倒せなくなりかねん。…だったら、戦力の低下は最小限の方がいいだろう？」

「……」

サティ大尉に続いたボーグマン大佐の言葉に、レイたちには返す言葉もなかった。

「…お前達はまだ若い。これからも戦って、なおかつ長生きしてもらわなきゃならん。その点、俺はもう十分戦ったし、十分生きた。」

「俺もボーリックやキャリオン達、若い衆に教える事はもう無いしな。」

ボーグマン大佐はそう言いながら機体をブラッディーデスザウラーに向け、ブースターをゆっくりと起動して温める。

「俺達みたいな年寄りの時代はもう終わりだ。これからは来るのは、お前達みたいな若者の時代だ。…だからよ、この年寄りにその橋渡しぐらいはさせてくれや。」

「大尉…大佐ァ…！」
「…早く行け！　行って、新しい時代を築いて来い！」

サティ大尉の言葉に顔を涙で濡らすレイやバンに、ボーグマン大佐が言い放ち、同時にブースターを全開に噴かせてサティ大尉と共にブラッディーデスザウラーに突撃した。

「…行こう、バン、シュバルツ中佐、皇帝陛下。」
「お、おい、レイ！」
「もたもたすんな！　大佐達の気持ちを無駄にしない為にも、ここは行くしかねぇんだ！」

未だ迷うバンを一喝し、レイはゼロを転進させて走り出す。

「…中尉、今は耐えるんだ…！」
「…くそッ、畜生ォォォォオ！」

バンはシュバルツに諭され、悔し涙を流しながら声を上げると、レイと同様にシーザーを転進させ、シュバルツやルドルフと共に撤退する。

（ネオゼネバス…この屈辱、忘れんぞ！）

シュバルツは最後の戦いに臨む歴戦の英雄たちを背後に走りながら、心の中で呟いた。

「バン！　レイさん！」

なのはが撤退してくるレイ達に気付き、声をかける。

「…レイ、ボーグマン大佐とサティ大尉はどうした？」
「……」
ハーマンがボーグマン大佐とサティ大尉が居ない理由を、レイに訊ねる。が、レイは黙ったまま答えない。
「…ハーマン少佐、時間がありません。すぐに撤退しましょう。」
シュバルツはレイが答えるのを待たずに、ハーマンに撤退するよう提案する。
「……そうですな。…こちらケーニッヒ０１。グスタフ部隊を指定の地点に回してくれ。…なのは、フォワード陣に撤退の指示は出してるな？」
「ハーマン少佐…まさか、大佐は…」
「言うな！　…高町一尉、撤退だ……！」
なのはの台詞を遮るように声を上げた後、ハーマンは撤退の命令を告げる。その顔には、苦しみと悲しみを押し殺し切れないような表情を浮かべていた。
「……了解…高町一尉、撤退します…！」
なのはは目頭に涙を浮かべながら、ハーマンの命令を復唱するのだった。

「「うおおおおおおお！」」
「はあああああああ！」

プロイツェンとボーグマン大佐、サティ大尉の戦いは熾烈を極めた。

サラマンダーボンヴァーンのバスターキャノンはブラッディーデスザウラーの右腕を肘から上まで完全に奪った後にミサイルに破壊され、ブレードライガーＡＢのブレードはブラッディーデスザウラーの脇腹に巨大な斬撃痕を作るが、左手に残ったハイパーキラークローによってＡＢユニットごと両方とも破壊された。

「ちっ！　大佐、こっちの弾が尽きやしたぜ！」
「ほう、奇遇だな。…俺もだよ。」

プロイツェンと戦う前にも多くの戦闘を行っていた為、二人の機体がついにスタミナ切れを起こしてしまった。
それに対し、プロイツェンのブラッディーデスザウラーは荷電粒子吸入ファンによって吸い込んだ粒子をエネルギーに変換して自給し、弾薬はともかくまだ余裕は残っていた。

「そろそろ諦めて、逃げたらどうだ？　今ならまだ、爆発から逃げられるかもしれんぞ？」

プロイツェンが二人に向けて言う。

「ケッ、こちとらもう覚悟を決めてるんでな。もう少し、時間を稼

がせてもらうぜ！」

そう言うとサティ大尉は、サラマンダーボンヴァーンの機首を思い切り上げ、機体を急上昇させる。

そして高度１２０００メートル程まで上昇すると宙返りし、ブラッディーデスザウラー目掛けて一気に急降下を始めた。

「奴め、特攻する気か！　撃ち落としてくれる！」

サティ大尉は攻撃手段をほぼ失ったサラマンダーボンヴァーンを高高度から急降下させ、口腔内に装備した火炎放射器の燃料をゾイドコア付近に集中させて自らを爆弾とする事で、爆撃機としての最後の役目を終えようとしていた。

そうはさせまいと、プロイツェンは機体の対空砲をフル稼働させて迎撃を試みる。

高速で落下して来るとはいえ、直線的な軌道のサラマンダーボンヴァーンに攻撃するのは容易であった。対空砲火は次々とサラマンダーボンヴァーンに命中し、分厚く硬い装甲を破壊していく。

そしてついに、対空砲火は火炎放射器の燃料に命中、引火を始めた。

「サティ！」

「へへ…すんません大佐、先に逝かせてもらいやす…！」

ボーグマン大佐の元に届けられた通信を最後に、サティ大尉を乗せたサラマンダーボンヴァーンは、プロイツェンに届くことなくその数百メートル上空で大爆発を起こし、散っていった。

「くぅっ…！」

だが、その爆風や衝撃がブラッディーデスザウラーとプロイツェンに届き、動きが一瞬止まる。

「今だ！　行くぞ、ブレードライガー！」

『グゥ…グオオオオオオオオン！』

ボーグマン大佐とブレードライガーは持てる全ての力を振り絞り、ブラッディー―デスザウラーに突撃、真紅の装甲に爪と牙を突き立てた。

「うおらァァァア！！」

突き立てた牙と爪は、ブラッディーデスザウラーの深紅の装甲をその巨体ごと貫き、背部の荷電粒子吸入ファンを破壊しながら貫通した。

「おおおおッ！」

「とったぞ、プロイツェン！」

「フ…フハハハハ！　…一足遅かったようだな、大佐。既に必要なエネルギーは送られた！　このヴァルハラは、後一分も掛からずに消滅する！　貴様も我々と同じく、このままネオゼネバスの礎となるのだ！」

ブラッディーデスザウラーを破壊されたプロイツェンだが、地下のゾイドコアには、既に暴走に必要なエネルギーが送られてしまっていた。

その事実を、プロイツェンは高笑いしながらボーグマン大佐に言う。

「構わねぇさ。…もう暴走を止めるのが無理だって事ぐらい、最初（ハナ）

っから分かってたからな。だからこそ、俺はアイツらを逃がしたんだ。」

ボーグマン大佐は、間に合わなかった事を悔やむ素振りは一切無く、寧ろこうなる事を初めから分かっていたと開き直る。

「ほう、自ら地獄への道を選んだか…それは何故(なにゆえ)だ？」

「テメェと同じさ。未来に、若い連中に道を作ってやりたい…それ以上の理由なんて、要らねぇだろ？」

プロイツェンの問いに、ボーグマン大佐はニッと笑みを浮かべて言う。

「フハハハハハハ…！　私の真似事か？　残念だったな。貴様がここで命を落とし、貴様の同胞が生き残ろうとも、最後に勝利するのは我々ネオゼネバスとなるのだよ！」

「さて、それはどうかな？　…ま、俺達はあの世で見守ろうじゃねぇか。この惑星(ほし)の行く末をよ。」

そう言うと、ボーグマン大佐の言葉が終わるのを見計らったかのように、地下のデスザウラーが爆発を起こし始めた。

「行け！　新たな時代を創る若者達よ！」

「…これからはお前らの時代だ！　勝って未来を切り開け！」

そう言った直後、帝都ヴァルハラはヴァルハラ城を中心に大規模な爆発に包まれ、二人のその言葉はそのまま遺言となるのだった。

「ああ…！　ヴァルハラが…！」
「ヴァルハラが…俺達の街が…！」

ヴァルハラの脱出に成功し、生き残ったガイロス帝国の兵士達は、自分達の街が芥塵と化していくのをその眼に焼き付けていた。
涙を流す者、悔しさのあまり壁を殴りつける者、絶望し言葉も出ない者等、ガイロス帝国軍は悲しみに打ち拉がれていた。
だが、悲しみを感じているのはガイロス帝国兵だけではない。

「大佐…！」
「ボーグマン大佐、サティ大尉…私達のために…！」
「…許さねぇ、許さねぇぞ、ネオゼネバス！」

ボーグマン大佐直属の部下であったレイやバンは勿論、ボーグマン大佐に世話になったアルドワーズ中佐にイスルギ少佐が、サティ大尉には直属の部下のボーリックとキャリオン、更に元々は部外者であったなのは達機動六課メンバーも、ボーグマン大佐とサティ大尉の死を悲しんでいた。

「ハーマン少佐…私に力が無かった所為で、大佐と大尉は…」

シュバルツは帽子を脱ぎ、ハーマンに頭を下げて謝罪する。

「…中佐の所為ではありません。…どうか、頭を上げてください。」

ハーマンは頭を垂れるシュバルツにそう言って、頭を上げさせる。

「大佐達は我々のために、活路を見出してくださった…その思いを無駄にしない為にも、今は悔やむ時ではありません。…我々の手で、ネオゼネバスを倒しましょう。」

「…ありがとうございます、ハーマン少佐…！　…我々ガイロス帝国も、力を貸しましょう。」

シュバルツは顔を上げ、ハーマンと共に手を取って打倒ネオゼネバスを誓いあった。

『総員に通達。生き残った者は順次被害状況を報告、隊形を組み直し、補給作業に移れ！　終了次第、ネオゼネバスを追うぞ！』

久しぶりの再会だったとは言え、長い付き合いの戦友を失ったハンコック大佐。ボーグマン大佐無き今、共和国軍の指揮を執るため、誰よりも悲しみを堪えていたのを知る者は、意外と少なかった。

その後報告が終了し、共和国・帝国連合軍の被害は、ＰＫ師団の死をも恐れぬ猛攻により、全体の戦力の半数強が失われ、マッドサンダーは八機、デスザウラーに至っては三機しか残らなかった。

そして直ちに機体の補給作業が開始され、ネオゼネバスを倒すために中央大陸へ戻る準備を始めるのだった。

第七十六話　帝都、燃ゆ（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第七十七話　それぞれの帰還（前書き）

今年の夏休みこそは、どんどん投稿して読者さんの数を増やしていきたいと思います。出来ればいいけど。

第七十七話　それぞれの帰還

広大な大地を持つ中央大陸の中心に位置する、共和国首都ヘリックシティ。その首都を守る、共和国軍首都防衛隊の司令部はプロイツェンのネオゼネバス帝国建国の演説を受け、首都防衛のための緊急体制を取るように全部隊に通達、ヘリックシティは厳戒態勢の真っただ中にあった。

「各方面の部隊を暗黒大陸から西方大陸方面の海岸警備隊に回せ！　ゼネバスの亡霊共を一歩たりともヘリックシティに、中央大陸に乗り込ませるな！」

「移動に時間が掛かる！？　分かっている、そんな事を言う暇があるなら、一分一秒でも早く部隊を出発させろ！」

「航空部隊を先に出せ！　そうだ、足の速い機体からだ！」

司令部では焦りとパニックから来る怒号が飛び交い、少々浮足立っている様子だった。

ヘリックシティの巨大な門が開き、機体を限界まで詰め込んだネオタートルシップやグスタフが全速力で発進、ネオゼネバス帝国を迎え撃つため、部隊の集結ポイントである湾岸警備隊の基地に向かっていった。

ヘリック共和国北西海岸警備隊基地。この基地は元々、中央大陸と暗黒大陸との間にあるトライアングルダラスを観察、研究する事がメインの基地であり、警備隊基地と謳っているものの、他の基地に比べて大した戦力は配置されていない。そのため、急いで戦力をかき集めて守りを固めようとしているのだ。

「レサール中佐、偵察部隊より入電！　…ネオゼネバスの物と思われる艦隊を確認、約３６時間後にこの基地に到達する模様です！」

「そうか……」

蒼い短髪にがっちりとした体格と筋肉を持つ男性。彼がこの基地の司令官、レサール中佐である。

レサール中佐は部下からネオゼネバスの動きを聞き、静かに呟く。

「…私のゴジュラスｍｋ－２を準備しておいてくれ。」

「ハッ！」

レサールは部下に、自分の機体がいつでも出撃可能にするよう言い、部下を下がらせる。

（遂にこの時が来たか…）

レサールはそう、心の中で呟くのだった。

「中央大陸は目と鼻の先か……帝国に技術を提供するだけと思っていたが、ここまで付き合わされるとは思ってもみなかったよ。」

中央大陸に向けて進路を取るネオゼネバス帝国旗艦、ドラグーンネスト内のロビーで、スカリエッティが言う。

「…僕達に協力するのが嫌なのかい、ドクター？」

スカリエッティの近くに座っているリーゼが、その言葉を聞いてムッとした表情で返す。

「いやいや、ここに来てからの展開に驚いているだけさ。寧ろ、今の暮らしは充実しているくらいだ。」

「ふぅん…それならいいんだけど。」

心なしか輝いているようなスカリエッティを見ると、リーゼは納得したのか食ってかかるのを止める。

「…まあ、欲を言うなら、早く中央大陸に上陸して、今やっているキメラの開発や、ゾイドの研究を更に進めたいと思っているがね。」

「…無限の欲望（アンリミテッド・デザイア）、だっけ？　その研究バカっ振りには脱帽させられるね。」

「フフフ…褒め言葉として受け取っておくよ。」

リーゼは皮肉のつもりで言ったのだが、スカリエッティはまるで気にしていない様子だ。

「…で、ドクターんとこの女共…アイツらも機体に乗るの？」

リーゼはスカリエッティに嫌みの一つも言おうかと思っていたが、無理そうだと判断して話を変える。

「ああ。…と言っても、後方支援が中心で前線には出ないがね。」

「…そう、安心したよ。アイツらに前線（まえ）をウロチョロされたら、僕の好きなように戦えないからね。」

リーゼがスカリエッティの返答に対してそう言い放つと、やや強めで早足の足音が近付いてきた。

「あ～ら、今の台詞…聞き捨てならないわねぇ…。私達ナンバーズが、あなたの足手まといになるとでもぉ？」

足音の主はクアットロだった。どうやら、リーゼの一言に対して物申しに来たらしい。

「本当の事だろう？　ロクにゾイドに乗ったことも無い癖に、僕と対等に振る舞えると思ったら大間違いだよ。君らは精々、僕の引き立て役ぐらいにしかならないさ。」

「あらまぁ…随分と生意気でムカつく小娘ねぇ…。あなたこそ、口先だけだという事を証明しないよう、精々頑張りなさぁい。」

リーゼの挑発に対し、狡猾な筈のクアットロだが、そのまま真っ向から挑発で返した。

リーゼとクアットロの間で火花が散り、険悪なムードが辺りに漂い始める。

「こらこら、二人共…」

「うるせぇぞ。一体何を騒いでやがる、リーゼ。」

見かねたスカリエッティが二人を諫めようとするが、ロビーにやって来た黄緑色の短髪の青年の声がそれに割り込んで、スカリエッティの声を掻き消した。

「デルダロス大佐。…このクソメガネがムカつくんだ。」
「ムカつくのはあなたも同じじゃない、このナイチチボクっ娘。」
「何だよ！」
「何よ！」

黄緑色の短髪の青年、ジーニアス・デルダロス大佐は事情を聞こうとするが、その過程でクアットロとリーゼが再び睨み合いを始める。

「やかましい！　テメェら、いい加減にしやがれ！」

ジーニアスは喧嘩を止めない二人に対してイラつき、怒号を上げる。

怒号はロビー中に響き渡り、クアットロとリーゼは思わず肩を竦める。

「そんなに喧嘩がしてぇんなら、喧嘩の相手を共和国軍相手にしろ！」
「…はいはい、了解。じゃあね、ウザメガネ。」

リーゼは右手をひらひらさせながらそう言うと、ロビーを後にした。

「まったく、何なのよぉあの小娘は！」

「そう言うな。この所、ずっとこの艦の中だから気が立ってんだろうよ。」

リーゼの態度に怒りを露わにするクアットロを、ジーニアスが宥める。

「ま、もうすぐ中央大陸に着く。そうしたら、お前達には存分に暴れてもらうからな。期待してるぜ。」

そう言ってジーニアスはクアットロに激励の言葉を贈ると、クアットロの肩をポンと叩いてその横を通り過ぎる。

「…デルダロス大佐。」

「あ？」

「…私、ドクター以外の殿方に触られるのは、好きじゃないんですけど。」

「…へッ、そうかい。そりゃ悪かったな。」

ジーニアスはクアットロに悪態を吐かれると、そのままロビーを後にした。

（ジーニアス・デルダロス大佐か…フフフ、面白い男だ…）

そんな中、ジーニアスに仲裁役を奪われたスカリエッティは、ジーニアスの人柄と手腕に興味を抱いていた。

ネオゼネバス内でも1、2を争う屈指の実力を持つゾイド乗りであり、荒々しくも頼れる天性の兄貴肌をも持ち合わせる。そのため軍内部での評価は極めて高く、彼を慕う兵士も多いという。

「…それでクアットロ、私に何か用があったんじゃないかい？」

スカリエッティはクアットロに訊ねる。

「そうそう、ドクター、食後のデザートがまだでしょう？　何をお持ちしましょうか～？」

「そうだね…オレンジを貰おうか。私はオレンジが大好物だからね。」

ガイロス帝国帝都ヴァルハラ。その北部に位置していたヴァルハラ城はプロイツェンを始めとするゼネバスの魂と共に、その周囲数十キロを巻き込んで数時間前に消滅、巨大なクレーターとなってしまっていた。

その帝都ヴァルハラの門の前で、中央大陸に向かったネオゼネバス帝国軍を討つため、ヘリック共和国とガイロス帝国の連合軍が急ピッチで補給を進めている。

「えーっと、ここがこうで…」

「これがああなって…」

「それをどうしてこーなって…」

そんな中、機動六課のフォワード陣は一か所に集まってブツブツと呟きながら、マニュアルを見ながら各々のデバイスのメンテナン

ス作業をしていた。

「うーん…ティア～、これ以上は私達じゃ無理だよ…」

「今更だけど、ホントにシャーリーさんって凄いわよね…アタシ達のデバイス、全部面倒見てくれてるんだから…」

「そうですね、シャーリーさんには感謝しないと…」

デバイスマイスターでメンテナンス担当のシャーリーが現地に居ないため、六課メンバーは相棒のコンディションを万全にする事もままならずにいた。

なのはやフェイト、ヴォルケンリッター等の隊長陣は多少の事は自力で出来るものの、やはりシャーリーがメンテナンスした物には及ばない。

「僕達がこんな状態で、ネオゼネバスと戦えるんでしょうか…？」

「さぁね。…けど、スカリエッティを逮捕しなきゃならない以上、戦うしかないわよ。」

やや弱気になるエリオに、ティアナは少しキツめの言葉を浴びせる。

ネオゼネバスと戦い、匿われているスカリエッティを逮捕、再び拘置所に連れ戻す事が六課の任務である以上、仕方がないのだが。

「みんな、お取り込み中に悪いんだけど…」

フォワード陣全員は声に反応して一斉に振り向くと、歩いてくるなのはの姿があった。

「なのはさん、どうかしたんですか？」

「うん…それがね…」

「僕が説明しよう。」
ティアナがなのはに訊ねようとすると、なのはの背後からクロノが姿を現した。
「ク、クロノ提督!?　なぜこんな所に!?」
「君達に伝えなければならない事があってね。」
ティアナ達はクロノの突然の訪問に驚き、慌てて背筋を伸ばして敬礼する。
クロノは一呼吸置いて、用件を伝え始める。
「時空管理局本局より通達。古代遺失物管理部…機動六課は直ちに惑星Ｚｉより撤退し、ミッドチルダに帰還するよう命ずる。」
「なっ…!?」
突然の帰還命令に、ティアナ達フォワード陣は驚きを隠せない。
「管理局法には、次元航行等の魔法技術を持たない世界…いわゆる、管理外世界は不可侵とする…とあるのは知っているな?」
「…はい。」
ティアナが代表して答える。
「大罪人であるスカリエッティの逮捕という大義名分があるとは言え、この世界の軍隊と協力関係にあるというのは本来なら許されない、特例中の特例だ。…しかし、流石に上層部もこれ以上特例を続ける訳にはいかないと判断し、君達を呼び戻す方針で固まったんだ。」
クロノが一通り話し終え、ティアナ達フォワード陣の顔を見ると、

ガッカリしたような表情になっていた。
自分達の隊長達を保護してくれた等、今まで世話になった共和国が大変な事になろうとしているのに、自分達だけ返らなければならない。その悔しさが、表情から簡単に見て取れた。
それを見たクロノは、なのはに念話を送る。

（…なのは、任務途中でも帰還する可能性があるって伝えてなかったのか？）
（うん…変に気負わせちゃってもまずいかなって…）
（そうか…）

伝えなければならないとは言え、自分の言葉でティアナ達を落ち込ませてしまった。クロノは軽く咳払いをする。

「…ま、まあ、そう落ち込む事はないさ。君達のような前例が出来た以上、スカリエッティを逮捕するため、再びこちらに来る事は出来るだろう。なに、少しの間戻るだけだ。」

クロノは何とかフォローしようと舌を回らせる。

「…クロノ提督。」
「ん？」

ティアナが顔を上げ、クロノの目を見て話す。

「本当に、また惑星Ｚｉに来られるんですよね？」
「…ああ、保障する。たとえダメだと言われても、なんとかしてみせるさ。」
「…ありがとうございます。」

ティアナの質問にクロノは自信を持って答え、それを聞いたティアナ達の表情に笑顔が戻る。

「はい、それじゃあみんな、ミッドに帰る準備しよっか。」

「「「「はい！」」」」

なのはは手を軽く叩いて帰り支度をするように指示を出し、それに対してフォワード陣はいつも通り、元気よく返事を返すのだった。

「聞いたぜティアナ、帰るんだって？」

「アーバインさん…」

ティアナが帰り支度をあらかた済ませて廊下を歩いていると、アーバインが声を掛けてきた。

「ええ、管理局（こっち）の上層部がそういう判断を下したらしくて。」

「にしても急だな。」

「前からそういう話はあったらしいんですけど、なのはさんが私達に言ってなかったんです。…すみません、大変な時なのに抜けることになって…」

「気にすんなよ。寧ろ俺たちの問題に、お前らまで無理矢理付き合わせる理由も無いしな。」

力になれないことを謝罪するティアナを、アーバインは気にするなと返す。

「俺たちは俺たちの力でネオゼネバスをブッ飛ばす。ついでに、そのスカリエッティとやらもとっ捕まえて、管理局に献上してやる。安心して待ってろよ。」

「…はい！　アーバインさん、今までありがとうございました！」

「こっちこそ、世話になったな。…お別れパーティーぐらい開いてやりたいが…こんな状況じゃそれもできねぇか。悪いな。」

「いえ、そのお気持ちだけで十分です。」

アーバインは世話になった機動六課のお別れパーティーを開きたいと思ったが、一刻も早くネオゼネバス軍を追わなければならない状況で、そんな悠長な事も出来ないと残念がるのだった。

なのはやフェイト達隊長陣はレイやバン、ハーマンにシュバルツ等、こちらの世界で世話になった人々に声を掛けて回っていた。

「そっか…寂しくなるな。」

バンはなのはから帰るという事を聞いて、友人との別れを残念が

る。

「皆ごめんなさい、これからも協力したかったんだけど…」
「いいっていいって。なのは達にも都合があるんだ、俺たちがどうこう言えないよ。」
「だが、ボーグマン大佐をはじめとした主力が多く戦死してしまった上、六課まで抜けるのは痛いな…」

ハーマンはバンとは違い、戦力の大幅な低下を懸念する。
別になのは達との別れを残念がっている訳ではないが、指揮官としては当然と言えば当然の思考である。

「ちょっとハーマン少佐。なのは達が帰ったって、共和国にはまだバンもレイ大尉もいるでしょうに。六課に頼りっきりってのもどうかと思うけど?」
「それはそうだが……」
「にゃはは…あれ、そういえばレイさんは?」

なのははムンベイの言葉でレイを思い出し、辺りを見回すが、レイがいる気配はない。

「ああ、レイの奴なら――」

レイは暗闇の中にいた。辺り一面暗闇に覆われているが、自分の姿だけははっきりと見えている。

そんな暗闇の中を、レイは歩いていた。何か目印に向かっていたり、何かを考えて歩いている訳でもなく、ただ無意識に、感じるままに、ただひたすらに歩いていた。

「レイ・グレック…」

どこからともなく少女の声が聞こえた。レイは辺りを見渡すが、周りには暗闇しかない。

「レイ・グレック…」

再び声が聞こえた。もう一度見渡すと、何もない暗闇の中に小さな光を見つけた。

光は徐々に膨張していき、最終的にはレイの身長より少し小さいくらいの直径になった辺りで止まった。

そして光の中から、何か人影のようなものが姿を現した。

「アンナ・ターレスか…」

光の中から現れたのは、かつてニクシー基地にて交戦し、レイが自身の手で引導を渡したアンナ・ターレスだった。

「レイ・グレック…。私をこのニクス大陸に連れて返してくれる約束を守ってくれて、ありがとう。」

アンナは交わした約束を守ったレイに、感謝の言葉を述べる。

「…止してくれ。今の俺には、アンタに礼を言われる資格は無い…」
「どうして？」
「だってそうだろ？　戦争を早く終わらせて、アンタをヴォルフの元に返す…その筈だった。だが現実はどうだ？　帝都ヴァルハラは大爆発でご覧の有り様だし、ヴォルフは中央大陸に向けて軍を進めてる…。約束なんて、殆ど守れちゃいないのさ。」

レイは自分の不甲斐無さを次々と出し、アンナに語る。

「そう……なら、キミにもう少しだけお願いしようか？」
「こんな俺に出来るものならな…」
「それじゃあまず――――」

「…ん、夢か……」

レイは仮眠室のベッドで目覚め、体を起こしてベッドから降りる。

「時間は…まだ余裕はあるな。」

手元の時計で時間を確認し、時間にいくらかの余裕がある事を確認すると、レイは上着を羽織って足早に仮眠室を後にする。

「…ああ、メリッサか？　頼みたい事があるんだけど…」

通信機でメリッサに連絡を取り、ある事をメリッサに頼んで通信を切った。

しばらく歩き、レイは自身のライガーゼロが置かれている格納庫に到着すると、ゼロの足元には既になのは達六課メンバーが揃っていた。

「ん、六課メンバーが全員お揃いだな。どうかしたのか？」

「…それがな、本局からの命令で、私らすぐに帰らなあかんねん。」

「へぇ、そりゃまた突然だな。」

レイははやてからの知らせに、少し驚いたような表情を見せる。

「そうなる可能性があるっちゅうんは、前から分かっとったんやけどね。」

「そうか…。皆が帰ると、寂しくなるな。」

「レイさん、バン君と同じ事言うとるね。」

「マジか？　…っていっても、他に気の利いた事言えねぇしなぁ…」

レイはバンとセリフが被った事を、半ば悔しく言った。

「あはは…寂しいって思うんやったら、それでええと思うんやけど。」

「そういえばレイさん、どこか行かれるんですか？」

レイがただ整備に来たように見えない格好をしていた為、気になったエリオは訊ねる。

「ああ、私用だけどな。」

「グレック大尉。ご注文の品、準備できましたよー、っと。」

メリッサがレイの元に、先程レイが注文したある物が到着した。

「済まねぇな、メリッサ。」

「全く…この大事な時にあたしをこき使った上、こんな物の持って出かけるなんて…いい度胸してますね。」

「許可はちゃんと取ってるし、時間は掛けずにすぐ帰ってくるよ。」

ブツブツと母親の様に文句を言うメリッサに、レイはその息子の様に弁解をする。

「これは…棺桶？」

「レイさん、一体何を…？」

運び出された物――亡骸を納める棺桶を見て、なのはやエリオは頭上に疑問符を浮かべるのだった。

雪の積もる山道。その道を、レイのライガーゼロが力強く疾走していた。

ゼロの口にはアンナの遺体が納められた棺が咥えられており、噛み砕かないように力加減に注意している。

「…着いた、ここか。」

ゼロが山道を抜けると、その先には大きな湖が広がっていた。水面はそれなりに厚い氷に覆われ、日の光を反射して鏡の如く美しく輝いていた。

「この辺がいいな…」

レイはゼロを景色のいいと思われる場所まで移動させ、足を止める。

レイの夢の中で、アンナが新たに出した要望はこうだ。自分がヴォルフと婚約してから初めてデートに行った湖まで自分の遺体を運び、景色のいい場所に遺体を埋葬してほしい、と。

「頼むぜ、ゼロ。」

レイは操縦桿を操作し、ゼロの前足で軽く穴を掘らせる。そこにアンナの遺体が納められた棺をゆっくりと慎重に置き、同時にレイがスコップを持ってコックピットから飛び降りる。

レイは手に持ったスコップで、棺に土を被せていく。

ゼロの前足で土を被せれば簡単だが、誤って棺や遺体に傷をつけてしまう恐れがあったため、自分の力で作業をすることにした。

棺に土を被せ終わると、レイは再びゼロのコックピットに戻り、花束と軍用レーション、それとトランペットを取り出して降りる。

「悪いな、こんなものしか用意できなかったけど…」

お供え物代わりに花束と軍用レーションを置き、トランペットを口に咥えると、自ら鎮魂歌の演奏を始めた。

（アンナ・ターレス…安らかに眠ってくれよ……）

レイは鎮魂歌を空へ響かせるように演奏しながら、アンナの冥福を祈るのだった。

「今までお世話になりまして、ありがとうございました。」

「此方こそ、機動六課の諸君には助けてもらった。改めて礼を言おう。」

機動六課を代表して部隊長のはやてが、連合軍を代表してハーマンが互いに感謝の言葉を述べた。

その後、クロノが艦長を務めるＸＶ級次元航行艦クラウディアに、六課メンバー全員が乗り込んだのを確認すると、出入口のハッチを閉めて浮上を始める。

「一同、気を付け！　今日まで我々に力を貸してくれた機動六課に…敬礼！」

機動六課を乗せてミッドチルダに帰還するクラウディアに向け、ヘリック・ガイロス連合軍の歴戦の勇士たちは敬礼を贈る。

「ほな、お世話になった惑星Ｚｉの皆さんに…敬礼！」

クラウディアに乗る機動六課も、地上の連合軍に向けて敬礼を返した。

クラウディアは更に上昇していき、数十秒後には次元の壁を越え、惑星Ｚｉより姿を消した。

「一同、休め！　…我々はこれより、ネオゼネバス軍を討つために中央大陸へ向かう！　各員は持ち場に着け！」

『ハッ！』

整列していた連合軍の兵士たちはすぐさま散らばり、それぞれの持ち場に向かっていった。

「……」

「ん…？　どうしたんだ、フィーネ？」

兵士たちが急いで持ち場に着き始める中、ボーっとしているフィーネにバンが声を掛ける。

「…何だか、大きな力が働こうとしているような気がして……」

「大きな力…？　もしかして、ゾイドイヴか？」

「分からない…でも、何だか胸騒ぎがするの…」

フィーネはどこか不安げな表情を見せる。

「そうか…よし、今は考えていてもしょうがない、俺たちは俺たちの出来る事をしよう。」
「うん…」
バンとフィーネは一抹の不安を残しながら、ジークと共にシーザーの元へと向かうのだった。

惑星Ｚｉのどこかにある、鬱葱（うっそう）とした巨大な森。その最深部に、『それ』は存在していた。
「…タイタン様、かの者たちがこの惑星より去っていきました…」
少女がそれに報告する。
『――――――――』
「分かりました…やろう、カノン。」
「うん、リーシェ。」
カノンと呼ばれた少女と、リーシェと呼ばれた少女。二人はそれぞれ両手を合わせて呪文を唱えだすと、周囲の景色の色合いが少し

だけ変わり、その空間が世界と隔絶される。そして、『それ』が自らの巨体を少しだけ起こした。

『…ギャオオオオオオオオオオン…！』

咆哮の後に『それ』の体中から光が放たれ、ほんの一瞬だけ空を駆け廻り、覆っていった。

中央大陸北西部、共和国軍海岸警備隊基地。その僅か十数キロ西に、ネオゼネバス軍の艦隊が迫っていた。

基地には中央大陸中の共和国軍基地から掻き集められた戦力が集結しつつあり、先に到着していた部隊はネオゼネバスの迎撃のための配置に着いていた。

「浮上して来るぞ！　全機、撃ち方用意！」

司令官のレサール中佐が指示を出し、海岸線に配備されたゴジュラスｍｋ－２部隊は一斉にバスターキャノンの、コマンドウルフ隊はロングレンジキャノンの発射体制を取る。

レサール中佐も自らがゴジュラスに乗り込み、同様にやや後方で砲撃体制を取っている。

ゴジュラスｍｋ－２部隊は浮上してくるであろうドラグーンネス

トを迎え撃つべく、水面（みなも）をじっと睨んでタイミングを待つ。

（そろそろか…）

そう呟くと、レサール中佐は懐から何かのスイッチらしき物を取り出し、右手に握りしめる。

『敵艦隊、浮上まで後5！』

オペレーターの言葉に、兵士たちの緊張感がさらに増す。

『4…3…2…1――』

「今だ、やれ！」

『ハッ！』

オペレーターがカウントを終えようとした直前、レサール中佐の指示と同時に、一部の兵士たちが右手のスイッチを押した。

すると何という事か、海岸警備隊基地に配備されていた機体が一斉に爆発を起こしたのだ。

「何ッ！？」

共和国軍兵士たちは一瞬、何が起きたのか全く理解できず、迫る敵艦隊に対して大きすぎる隙を晒してしまう。

「しまッ…」

艦隊を狙い打とうとしていた部隊に向け、一斉にビームの嵐が襲い掛かる。加えて、海岸警備隊の機体を爆破した兵の乗る機体からも、容赦の無い一斉射撃が行われた。

『ぐわぁぁぁあっ！？』
『ぎゃあっ！』

完全に隙を突かれたゴジュラスｍｋ－２やコマンドウルフ達は次々と倒され、全戦力を破壊された海岸警備隊は、あっさりとネオゼネバスの中央大陸上陸を許してしまった。

『長きに亘る潜入任務、ご苦労だった。よくやったぞ、レサール中佐。』
「ハッ。ありがとうございます、陛下。」

ドラグーンネストの格納庫にいるヴォルフは、レサールに称賛の言葉を贈る。

「ぐ…レサール中佐、我々を裏切ったのですか…！？」

一人の共和国軍兵士がボロボロのゴジュラスｍｋ－２を起こし、レサールに訊ねる。

「裏切った？　…違うな。私は最初から、ゼネバスの軍人だ。共和国の人間ではない。」
「そ…そんな…」

自分がここに配属された時から、今まで慕っていた司令官がネオゼネバスの協力者だった。その事実に、彼は絶望した。

「…中佐…信じて、いたのに……うわあああああッ！」

ボロボロのゴジュラスｍｋ－２に鞭打ち、最後に一矢報いるため

にバスターキャノンを放とうと、レサールにその砲口を向ける。

「ふん！」

レサールは自身のゴジュラスを走らせて接近すると、右腕のハイパーキラークローでゴジュラスｍｋ－２のボロボロの装甲を貫き、ゾイドコアを握りつぶした。

そうしてレサールはすぐに後退し、直後にゾイドコアを握りつぶされたゴジュラスは、爆散した。

『…殿下、敵勢力の全滅を確認しました。』

「よし、全艦は上陸を開始しろ。これより本艦隊は共和国首都、ヘリックシティへ針路を取り、最大戦速にて進軍する。…各員の奮闘を祈る！」

ヴォルフの指示を受けてネオゼネバス艦隊は、次々に中央大陸に上陸していく。同時にレサールや協力した部下たちは、ヴォルフの乗るドラグーンネスト級一番艦に収容されていく。

「ほう…デルダロス大佐、共和国側に工作員を送り込んでいたのかい？」

「ああ。プロイツェン閣下がこの日の為に備え、数十年前からな。」

「なるほど、流石はギュンター・プロイツェン・ムーロア…抜け目がないね。」

スカリエッティは改めて、プロイツェンのしたたかさと自信に感心する。

絶対にゼネバスが復活できると信じていなければ、数十年も前からこの策を打つことは出来なかっただろう。

「さて…私も機体のチェックに行くとしようか。」
「その様子だと、ドクターに支給させたあの機体…気に入ってもらえたらしいな。」
「ああ。敵機のコンバットシステムに介入する電波を発し、機体を狂わせて這いずり回らせる…素晴らしいコンセプトじゃないか。感謝するよ、デルダロス大佐。」
「そこまで気に入ってくれるとはな……。アンタがかつて、ミッドチルダを揺るがす大事件を起こした理由…何となくだが理解できた気がするぜ。」

先日ロールアウトされた新型電子戦ゾイドを、スカリエッティはかなり気に入っている様子だ。それを見たジーニアスは、スカリエッティの人間性を良くも悪くも再認識させられたのだった。

第七十七話　それぞれの帰還（後書き）

ご意見ご感想等、お待ちしております。

第七十八話　英雄たる存在（前書き）

２ヶ月も掛かった割には、話はあんまり進まないです…

第七十八話　英雄たる存在

ネオゼネバス軍が中央大陸への上陸を果たした頃、ヘリック共和国とガイロス帝国の連合艦隊は、トライアングルダラスの安全区域を突破して中央大陸へと戻るべく、暗黒大陸を南下して海岸線を目指していた。

レイ達先行隊が先に暗黒大陸に向かった際に使用し、エントランス湾に停泊して待機させていたウルトラザウルスには既に連絡が着いており、連絡を受けたウルトラザウルスは直ちに出航して東へ移動、トライアングルダラス付近の海域で連合艦隊と合流する手筈になっている。

「皆、あと二、三時間で、本艦隊は海岸線に到着するそうだ。」

ハーマンがブリッジからロビーに戻り、ロビーにいるレイやバン達に大まかな所要時間を告げる。

「二、三時間か…そこからウルトラザウルスと合流して、トライアングルダラスを抜けて中央大陸に戻るとなると…」

「ウルトラの速度も考えなくちゃならねぇ。…全体が到着するには、早くても三日前後ってところだな。」

「そうか、ウルトラはネオ・タートルシップほど速くないんだよな…」

レイとアーバインは、連合艦隊の中央大陸上陸時間を大まかに試算する。

その気になれば時速数百キロは出せるネオ・タートルシップやホエールキングはともかく、ウルトラザウルスは時速４０ノット弱、キロメートル法に換算して時速約７２キロ程度しか出せない。

かと言って、格納庫に多数の航空ゾイドを格納していてなおかつ、戦力としても十分に計算できるウルトラザウルスを捨て置き、先行するのはあまり得策とは言えないだろう。

「くそっ、俺達は一刻も早く、中央大陸に戻らなきゃならないって言うのに…！」

三日近く掛かると聞いたバンは、それでは遅すぎると嘆く。

現実、三日で共和国首都が陥落してしまう可能性はほぼ無いだろうが、それでも三日は勝敗を左右するには十分な時間と言えるだろう。

「バン、落ち着け。いくら連中が強いと言っても、そう簡単に首都防衛隊は負けたりしねぇよ。」

「ああ。俺たちは防衛隊が踏ん張ってくれるのを信じて、ゆっくりでも確実に、準備を整えて進んでいくんだ。」

焦燥感に駆られるバンに、アーバインとレイは落ち着くように声を掛ける。

「まぁ、気持ちは分からんでもない。プロイツェンに完全にハメられたからとはいえ、結果的にはネオゼネバスが中央大陸に向かう手助けをしちまった…。バカ正直なお前の事だ、その責任でも感じてるんだろ？」

「うっ…」

自分の考えていることをアーバインに見抜かれ、バンは『図星』と書かれた矢印が頭に突き刺さるような感覚を覚える。

「あれはお前だけの責任じゃねぇ、共和国と帝国含め、俺達全員の

責任だ。もっと気楽になれよ。」
「それはそうだけど…」
「…っと、そう言えばあの英雄オタクはどうした？」

アーバインはふと、チャクトの姿が見えない事に気付く。

「そういや見ないな。あいつは口を開けば英雄英雄と五月蝿いから、すぐに分かるんだけど。」
「英雄…か。」

バンはレイとアーバインがチャクトを指す時に使った『英雄』という言葉に対し、何かを考える。

「バン、どうしたの？」
「あ、いやいや、何でもないんだフィーネ。」

フィーネの質問に、バンはたいしたことではないと答え、腰掛けていた長椅子から立ち上がる。

「バン、どこ行くんだ？」
「ちょっとトイレに…」

バンはそう言うと、早足でロビーを出てトイレに歩いていく。

「トイレトイレ…っと、あったあった。」

バンは尿意をもう少しだけ我慢するべく、小刻みに足を動かしながらトイレのドアを開けると、先に用を足している人物を見つけた。

「あれ、シュバルツ中佐？」

「やあ、フライハイト中尉か。」

帝国の輸送艦であるホエールキングにいるはずのシュバルツ中佐が、何故か共和国の輸送艦であるネオ・タートルシップのトイレで用を足していたのだ。

「中佐、なんでここに？」

「先程までハーマン大尉と会議をしていてね、戻る前にお手洗いに寄ったのだよ。」

「ああ、じゃあさっき着艦したサイカーチスは…」

「私がこちらに来るために乗っていた、という訳だ。」

シュバルツはハーマン達、共和国軍と直接会って今後の動きを話し合うため、この艦に来ていたのだった。

バンはシュバルツと話しながら、シュバルツのすぐ隣の便器の前に移動して用を足し始める。

「ふ～…」

バンは用を足す際の解放感のような、形容し易いようなし難いような快感に浸る。

「…シュバルツ中佐。…英雄って、一体何なんですかね？」

「…？　どうした中尉、藪から棒に？」

シュバルツはバンの用を足しながらの突然の問い掛けに、少し面食らったような表情で聞き返す。

「いえね、ウチの軍にチャクト・スペクト中尉っていう、英雄を目指してる奴がいるんですけど…」

「チャクト・スペクト中尉…ああ、ハルトリーゲル大尉から聞いているよ。あまりいい印象は持たれていなかったようだが…」
「でしょうね。」
「それで？　英雄英雄と聞いていたら、自分でも英雄とは何か分からなくなってきた、といったところか？」
「ええ、まぁ…」

そんな話をしている間にシュバルツは用を足し終え、洗面台で手を洗い始める。

「英雄…か。ふむ…」

相談を受けたシュバルツも、実は英雄の定義についてあまり深く考えた事は無かった。
シュバルツは手を洗いながら、英雄の定義、意味について考える。

「なかなか難しい問題だが…そうだな、誰にもできない様な偉業を成し遂げた者、戦争の重要な局面で多大な戦果を挙げた者…人はその者達を讃え、語り継ぐために世間では英雄と呼ぶ…」

そこまで言うと、シュバルツは洗面台の蛇口をひねって水を止め、ハンカチで手を拭きながら続ける。

「…しかし、私は英雄に厳密な定義など無いのではないか、とも思うがね。」
「と言うと？」
「『誰か』が『ある人物』に対し、深い尊敬や憧れを抱けば、その時点で『ある人物』は『誰か』にとっての英雄と言える…違うかな？」
「確かに…村を守って死んだ父さんも、俺にとって…いや、村のみ

んなにとって英雄だった…」

シュバルツの意見に、バンは自分の生まれ育った村を守るために命を落とした父親を思い出し、納得する。

家族だけでなく、村の人々をも命を賭して守り抜いたバンの父親は、今でも村の人々から讃えられており、文句なしに英雄と呼べる人物だろう。

「だが、君のお父上とて英雄になりたいが為に、命を賭けてまでそんな事をしたのではないだろう?」

「ええ。父さんはただ、俺や姉さん、それに村のみんなを守りたかっただけだったんだと思います。」

バンの父親は村の平和を脅かす脅威、主に野良ゾイドや盗賊から村を守るため、損得勘定の一切も無しに戦っていた。バンの熱血漢な性格は、間違い無く父親からの遺伝であったのだろう。

「英雄は、狙ってなれるものではない。何か、命を懸けて守りたいと思うもののために自分の正義や信念を曲げずに戦い続ける。すると気付けば、いつの間にか英雄と呼ばれるようになっていた…英雄になるとは、そういうものではないかな?」

シュバルツとバンが英雄について意見を交わしていたその時、トイレの出入り口の扉の反対側では、チャクトが足を止めて二人の会話を立ち聞きしていた。

「……」

会話を聞いたチャクトは、思うところがあるのか神妙な表情で黙り込み、バンとシュバルツがトイレから出てくる前に静かにその場を立ち去った。

（守りたいと思うものの為に戦う…か……）

チャクトは廊下を歩きながら一人考える。

自分はなんのために戦ってきた？　英雄になる、そのためだけだった。自分には、守りたいと思うものがあるか？　いや、無い。英雄になるという夢を叶えるため、家族や友人の反対を押し切り、家出同然に故郷の村を出て共和国軍に入隊したチャクトにとって、もはや家族と呼べるものはいなかった。

（…俺は、今まで何をやっていたんだ…？　英雄になるって夢を叶えるために、何もかも投げ捨てて軍に入ったってのに…）

チャクトは自室に戻ると、薄暗い部屋の真ん中で明かりも点けず、その場にただ立ち尽くす。

「…守るものも何も無い俺じゃ、一生英雄にはなれねぇってのかよ…！」

歯を食いしばり、目を見開いて涙を流し、チャクトは己の生き方を悔やんだ。

珍しく殊勝な心がけのチャクトだが、自らこうして己を悔やむ理由に、ボーグマン大佐やサティ大尉の戦死が関わっていた。

普段のチャクトなら、『帝国の人間に何が分かる！』とでも言ってシュバルツの言葉を一蹴していただろうが、共和国軍のエース級パイロットが死亡したという出来事に、さすがのチャクトも大きなショックを受けていた。

そのショックが、普段物事を深く考えないチャクトを異常なほどに考えるよう、上手く作用させていたのだ。

「誰か…誰か教えてくれ…！　俺は、一体何のために戦えばいいんだ…！」

チャクトは頭を抱え、一人で一晩中考え込んだ。その結果、脳の普段使わない部分をフル回転させた所為で知恵熱を出してしまうのだった。

中央大陸西部の平原。共和国首都ヘリックシティへと侵攻を続けるネオゼネバス軍を迎え撃つべく、この地に多くの共和国軍の師団や大隊が配置されていた。

だが、戦場となったその平原には、ゴジュラスを始めとした多くの共和国軍の機体が残骸と化し、無残にも転がっている。

「バ…バカな…16機のゴジュラスmk－2が全滅!?　五分もたずにか!?」

戦場の一角で、たった一機でゴジュラスmk－2部隊を殲滅した機体がいた。オーガノイドのシャドーと融合したレイヴンの機体、バーサークフューラー・シャドーエッジである。

その光景を、ネオ・タートルシップのブリッジでモニター越しに見た共和国軍の将軍、インカビリア少将を始めとしたクルー達は戦慄を覚えていた。

「大層な機体に乗っていながら、たった一機相手に傷も付けれずこのザマか…。まったく、これだからゾイドの扱い方も分からないクズは…」

あまりにもあっけなく倒れていったゴジュラスとそのパイロットにレイブンは呆れ果て、転がっていたゴジュラスの頭部を意図的に踏み潰しながら愚痴をこぼす。

「し、少将閣下、いかがいたしましょう!?」
「くっ…やむを得ん、一時撤退だ――」
「おっと、逃がさないよ?」

ネオ・タートルシップはレイヴンから距離を取るために後退しようとするが、艦上空にはいつの間にか、リーゼとスペキュラーの操るサイコジェノザウラーの姿があった。

「艦上空に機影！　ジェノザウラータイプです！」
「何だと!?」

クルーの一人が上空のサイコジェノザウラーの存在を確認し報告

するが、その時ではすでに遅かった。

「行くよ、スペキュラー！」

『キュアア！』

サイコジェノザウラーの右脚にEシールドと魔法を組み合わせた特殊なフィールドを纏わせ、右脚を飛び蹴りの姿勢のように突き出して急加速しながら、ネオ・タートルシップ目掛けて落下していく。

「スーパーイナズマァァァア…キィィィィイック！」

リーゼの渾身の叫びと共に放たれた強烈なキックは、ネオ・タートルシップの頂点から船底までを破壊しながら貫き進んだ。そして船底から突き抜けると、サイコジェノザウラーはドスンと大きく地面を鳴らして着地した。

同時に、艦を一直線に貫かれたネオ・タートルシップは、次々と爆発を起こして轟沈していった。

「僕のスペキュラーと合体したサイコジェノザウラーを、ただのゾイドだと思わないことだね！　…って、もうみんな死んじゃったか。」

つまらないな、と呟き、リーゼはレイヴンの方に機体を向ける。

「ねぇレイヴン、もっと強い奴はいないの？　どいつもこいつも、弱すぎてつまらないよ。」

「さぁ。今のが共和国の精鋭らしいけど…あれが精鋭だって言うのなら、他の連中もたかが知れている。期待しない方がいいだろうね。」

「あっそ。…じゃあさレイヴン、どっちが多く雑魚を潰せるか勝負

しない？　数だけは結構いるみたいだしね。」
「…構わないよ。僕は元々、一機でも多く共和国のゾイドを潰すつもりだからね。」

そう言うとレイヴンは、シャドーエッジのブレードを展開して主翼とし、両脚のスラスターを勢いよく噴かせて飛び立った。

「あ、レイヴン！　…まったく、気が早いんだから…」

リーゼもサイコジェノザウラーのスラスターを噴かせ、あちらこちらに転がる残骸を残してレイブンの後を追っていった。

レイヴンとリーゼのいた場所から、少し離れた位置にある戦場。ここも同様にネオゼネバス軍が優位に立ち、共和国軍は完全に押されていた。

「くそッ！　何がどうなっているんだ!?」
「何故だ、機体が言う事を聞かん!」

共和国軍の混成部隊はネオゼネバス軍を前にしながら、一切の身動きが取れずにいた。
操縦桿を左右に切っても、射撃武器を使用しようとしても、どう

いう訳だか全く反応が無いのだ。これにはベテランの兵士も困惑していた。

そんな中、一機のライガーが動きを見せる。ライガーが急に走りだしたかと思うと、友軍であるはずのコマンドウルフに向けて飛び掛かり、ストライククローでコマンドウルフの機体を引き裂いてしまった。

「なッ！？」

「曹長！　貴様、何をしているかッ！」

「じ、自分ではありません！　機体が勝手に！」

隊長は激昂し、味方を破壊したライガーのパイロットに問い詰めるが、ライガーのパイロットは自分が操縦していないと弁明する。

そうこうしているうちに、動けなかった他の機体も動き出す。だが、それらの機体はネオゼネバスに攻撃せず、それぞれが友軍機に向けて牙を剥き始めた。

「お、おい、何を…うわぁぁぁあっ！？」

「止めろライガー！　それは味方だ、攻撃するな！」

「くそっ、止まれ！　止まれったら！」

突如として同士討ちを始めた機体達によって部隊は完全に秩序を失い、パニックに陥った。

「うふふ…暴走する味方同士による、止める事のできない殺し合い…そして、信頼していた味方に突然攻撃され、混乱や絶望と共に倒れていく共和国軍…実に素晴らしい光景ですこと…」

クアットロは新たに支給された、新型機電子戦ゾイド『ダークスパイナー』のコックピットで、うっとりとした表情でその光景を見

つめていた。

「どうかなクアットロ、ダークスパイナーの調子は？」

「それは勿論、絶好調です。特殊な電磁波で相手の機体のコンバットシステムを狂わせ、操縦不能になった所に偽のデータを植え付けて暴走させる…こ～んな素晴らしい機体を用意していただいて、ドクターとムーロア閣下には感謝しています♪」

クアットロはスカリエッティの質問に、満面の笑みで感謝の気持ちを前面に出して答える。

「それはよかった。トーレにだけ機体を持たせるのは不公平だったからね、君に合う機体があってよかったよ。後はセッテにも合う機体があればいいんだが…」

「二足歩行で、両手を人間並みに扱えるモチーフの機体は少ないですからね～。トーレ姉様はともかく、セッテにアイアンコングでは、あまりにも不釣り合いですもの。もっとスマートなデザインでないと…」

「…おや、どうやら終わったらしいね。」

スカリエッティとクアットロが話している間に、暴走させられていた共和国軍の部隊は壊滅状態に陥っていた。殆どの機体が同士討ちによって大破、中には運よく最後まで破壊されずに生き残った機体もいたが、もう戦う力も残っていない様子だった。

『き、貴様ら…我々の機体に何をした…！？』

残り少ない気力を振り絞り、共和国軍の部隊長がクアットロ機に通信を送る。

「あら、なかなかしぶとい…。この機体から、ちょっとしたバグを送らせていただきました。いかがだったかしら、味方同士で殺しあう気分は？」

『ぐ…この…悪魔めェッ…！』

「悪魔…ふふ、どこかの誰かを思い出させるフレーズねぇ…」

クアットロはその言葉とは裏腹に、やや引きつった様な笑みを浮かべると機体を少し前進させ、両肩付近に装備された１４４ｍｍマシンガンの銃口を部隊長の乗るライガーのコックピットに向ける。

「遺言は済んだでしょう？　なら逝きなさい。」

クアットロがそう言った直後、残骸だらけの戦場にマシンガンによる多数の発砲音が鳴り響いた。

『首都防衛隊第五師団、全滅！』

『第四、第六大隊、連絡が途絶えました！』

『第二大隊、劣勢！　応援を要請しています！』

共和国首都ヘリックシティ、共和国の政の中心、大統領府の大統領政務室に次々と自軍の情報が伝えられてくる。しかし、そのほぼ全てが敗北へと近づいていると言わんばかりの報告だった。

「…大統領閣下。ネオゼネバス軍司令官より書状が届けられております。」

共和国大統領、ルイーズ・テレサ・キャムフォードは、送られてきた書状を秘書のミシェール・スーから受け取り、ペーパーナイフで封筒を開封しその内容を確認する。

「…予想していた通り、降伏勧告の書状ね。」

「…い、いかがいたします？」

「これに答える訳にはいかないわ。黙殺するしかないでしょうね。」

ルイーズは書状を破り捨て、ゴミ箱に放り込んだ。

「…閣下、首都を脱出する準備はできています。ご決断はお早めの方が…」

戦況の悪化を見かねたミシェールは、ルイーズに早期の首都脱出を提案する。

「そう…。でもねミシェール、まだその時ではないわ。」

「しかし、万一脱出に失敗すれば閣下のお命が！」

「まだその時ではない、と言っているでしょう？　…私はもう少しだけ待つわ。彼らは必ずここに戻ってくる…そう信じてね。」

ルイーズは自らの片腕であるミシェールの提案をはねのけ、彼ら、暗黒大陸に進軍していった部隊が、親愛なる息子のハーマンが帰還する事を信じ、大統領の椅子に座って待つ決意を固める。

「それとも、あなたは彼らが、自分の妹が信じられないのかしら？」

ミシェールは暗黒大陸に向かった部隊に出向している妹、メリッサの事を思い浮かべる。メリッサもルイーズと同じか、それに匹敵するくらい負けん気が強く、同時に頑固である。
ミシェールには、メリッサが負けっぱなしで諦めるとは到底思えなかった。

「…わかりました、私も妹を信じましょう。ですが、いざという時は…」
「分かっているわ。その時は、あなたに従いましょう。」

ミシェールは頑固なルイーズを説得するのを諦め、ハーマン達を信じ、ギリギリまで待つことに合意するのだった。

そして、ネオゼネバス軍の中央大陸上陸成功から四日後。

『全砲一斉射撃！　前方の防衛部隊を一掃しろ！』
「アイサー！　そんじゃ、気張っていこうかァ！」

ネオゼネバス軍が上陸し、防衛部隊が配備された海岸線。そこにウルトラザウルスを先頭とした、共和国帝国両軍による連合艦隊が、上陸しようと近付きつつあった。

ムンベイはウルトラザウルスの主砲の砲撃手を任せられ、砲撃の許可が下りると気合いを込めて主砲のトリガーを引いた。

「ケーニッヒ01より全機へ。我々もウルトラザウルスに続き、一斉射撃を開始する！　撃てェ！」

「おっしゃあ！　ジ・オーガ、ぶちかませ！」

「ハイブリッドキャノン、シュートォ！」

「ハイパーローリングキャノン、発射！」

ネオ・タートルシップの甲板から、ハーマンのケーニッヒウルフやアーバインのジ・オーガ、バディターのガンブラスターが、ホバーカーゴの射出カタパルトからウィナーとレイのライガーゼロパンツァーが、極めつけに十隻程のマッドサンダーが砲撃を開始した。

ウルトラザウルスの砲撃とあいまって、海岸線に配備された部隊の機体を次々と撃破していく。

「かあーッ！　やっぱウルトラザウルスの主砲ともなると、感触がダンチだね！」

「はしゃいでんじゃねーぞムンベイ！　しっかり狙ってんだろうな！」

「言われなくてもやってるよ、アーバイン！　そぉら、もういっちょ！」

ムンベイは再び主砲のトリガーを引き、轟音と共に砲弾が放たれる。砲弾は弧を描きながら飛んで行き、岸に着弾すると大きな爆発を起こしてネオゼネバスの機体を焼き払う。

だがネオゼネバス側も、負けじと森の中に配備した部隊が戦術ミサイルを一斉に放ち、ミサイルは先頭のウルトラザウルス目掛けて飛翔する。

『戦術ミサイル接近、数８！』
「対空機銃、一番から八番、撃てェ！」

対空機銃を空に向けて一斉に掃射し、ミサイルを迎撃する。が、飛び交う対空機銃の弾丸をかいくぐり、二発のミサイルがまだ残っていた。

「させるかッ！」

ハーマンがミサイルの撃ち漏らしに気付き、すかさずデュアルスナイパーライフルをテンポよく連射、迎撃する。

「対空機銃、弾幕が薄いぞ！　何をやっている！」

ハーマンは対空機銃の銃座を担当する兵士に、ミサイルを撃ち漏らした事を叱責する。

ハーマンがたまたま撃ち落とせたからよかったが、強力な威力を持つ戦術ミサイルがもしウルトラザウルスに直撃し、大きな損傷を負えば、これからの作戦に支障をきたしかねない。対空砲等の迎撃用の兵装を扱う兵士とは、割と重大な役割を担っているのである。

さて、ヴァルハラでの激戦によって、この戦争に関わる多くの人の意識や心境は、大なり小なり何かしらの変化を見せていた。そして、その変化が戦いに特に影響しない者もいれば、如実に表れている者もいた。

「…ストラトス０１より各機へ、森林地帯の敵機への攻撃を開始する！」
『了解！』

ストラトス０１を新たに名乗る、前ストラトス０２のボーリック

中尉の合図により、中尉やキャリオン少尉のサラマンダーを始め、マミとその部隊のストームソーダーやレイノスが、海岸沿いの森林に向けて次々と空対地ミサイルを放つ。

（大尉…あなたの後は、俺がなんとしても継いで見せます。どうか、あの世で見ていてください！）

ボーリック中尉は自分たちを生き残らせるため、激闘の末に戦場の空に散ったサティ大尉の後を継ぐべく、普段以上に気合を入れてサラマンダーのコックピットに座っていた。

（ボクもついに、レイ先輩みたいに部隊を任されたんだ…しっかりやらないと！）

暗黒大陸での激戦によって多くの兵卒や士官などが戦死し、同時にその激戦の中でのマミの挙げた戦果が評価された事が重なり、マミはこの戦闘が開始する直前に中尉に昇格した。そして、部隊を再編制する際にマミは一航空小隊の隊長に任命されていた。

そうした経緯があったため、マミは親愛なるレイに失望されぬよう、やはり普段以上に意識を研ぎ澄ませてコックピットに座っていたのだった。

森林に配備されているネオゼネバスの機体が、マミのストームソーダーに向けて対空機銃を掃射する。

「このッ！　邪魔するなッ！」

マミはストームソーダーの主翼を畳んで右に回転させ、音速を超えて襲い来る弾丸をかわす。そして素早く主翼を広げると、空対地ミサイルを発射し、攻撃を仕掛けてきた機体に直撃させた。

ミサイルの直撃を受けた機体は炎上し、そのまま沈黙した。

「ソニック０１、森林内の敵機の撃破を確認！　一時後退します！」
「ストラトス０１、了解。こちらも撃破は完了した。一時後退する。」

森林内の敵影が消滅し、マミとボーリック達は部隊を転進させて後退していく。

「ストラトス及びソニック、後退を始めました。」
「よし、作戦を次のフェイズへ移行しろ！」
「了解。ウルトラザウルスよりカーゴ０３、作戦を第二フェイズへ移行する。」
「カーゴ０３了解。フライハイト大尉、発進どうぞ！」

ホバーカーゴ級三番艦の上部ハッチが開き、中からカタパルトとシーザーが姿を現した。

「クレイジー０２、発進します！　行くぞ、シーザー！」
『ガォォォオン！』

シーザーの足元から火花が散り、勢い良くカタパルトから射出され、翼を展開して一気に岸まで滑空する。
ウルトラザウルスやマミ達が陸地の機体を先に叩いていたため、攻撃をほとんど受けず着地に成功した。

「うぉぉぉおッ！」

翼を曲刀型のブレードに戻し、旋回を交えた横の動きで残った数体を掃討していく。

「第二陣、続け！」
「了解。ケイ・イスルギ機、出撃るッ！」
「カール・Ｌ・シュバルツ、出撃する！」

イスルギ少佐はネオ・タートルシップの格納庫からウルトラザウルスの甲板に飛び移って甲板のカタパルトから、シュバルツはそのままホエールキングのカタパルトから、シーザーと同じく岸まで射出される。
イスルギ少佐はブレードライガーのレーザーブレードを駆使し、シュバルツは得意のビームガトリングで、バンのシーザーと共に敵機を掃討していく。

「これで…ラストォ！」

振り下ろされたストライクレーザークローによって最後の一機が破壊され、ウルトラザウルスを始めとした連合艦隊は上陸するためのポイントの確保に成功した。

『敵機の全撃破を確認！』
「よし。全艦、上陸せよ！」

配置されていた敵機が居なくなった事を確認し、ネオ・タートルシップは直接陸に上がり、ウルトラザウルスやクラーケンは接岸して機体のみを上陸させる。

『ウルトラザウルスより司令部、本艦はこれより、キャリア部の分離作業に取り掛かる。所要時間は二時間程度と予想される。』
「ネオ・タートルシップ司令部、了解。第八中隊をウルトラザウルスの守備に配置、残りの全部隊はヘリックシティへと向かう！」
「了解！　全速前進、ヨーソロー！」

ウルトラザウルスやクラーケンに搭載していた機体を、同じく搭載されていたグスタフのキャリアに移し、全部隊がヘリックシティを守るため、侵攻するネオゼネバスを倒すために進み出すのだった。

～おまけ～

スバル
「あれ…？」

ラルフ
「む…？」

シュバルツ
「おや…？」

スバル
「な、何、この空間？」

ヴァイス
「ありゃ、何だか妙な所に来ちまったぞ？」

シュバルツ
「ヴァイス陸曹、君もか。」

ミューラー
「隊長、何なんですかここは！？」

ラルフ
「分からん…が、何か意図があって、我々は集められたのだろう。」

レイヴン
「……」

アーバイン
「レイヴン、お前もか…しっかし、どういう基準なんだ？」

アリサ
「これだけ揃いも揃って、まだ分からないの？」

シュバルツ
「…？　貴女は？」

スバル
「あ、アリサさん！？　何でここに！？」

アリサ
「全く…もう少し話し合いなさいよね？」

ヴァイス
「話し合う…対話…！　そうか、分かった！」

シュバルツ
「陸曹！？」

ヴァイス
「となれば俺は…私は上級大尉、いや、ワンマンアーミーだよ、カタギリ！」

第七十八話　英雄たる存在（後書き）

ご意見、ご感想等、お待ちしております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8862g/

リリカルなのはZOIDSStrikerS

2011年10月12日08時58分発行